

ヲチャラセナイ遺跡

—厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9—

2014.3

厚真町教育委員会

カラー図版1



1. 遺跡遠景 (NE→)



2. H24調査前近景 (SE→)

カラー図版2



1. 8~10号住居跡完掘(W→)



2. 4・12・13号住居跡完掘(NE→)

カラー図版3



1. 4号住居跡完掘(NW→)

カラー図版4



1. 縄文時代前期後半土器群

カラー図版5



1. 縄文時代前期後半(在地系)土器群



2. 縄文時代前期後半(円筒系)土器群

カラー図版6



1. 縄文時代 北海道式石冠

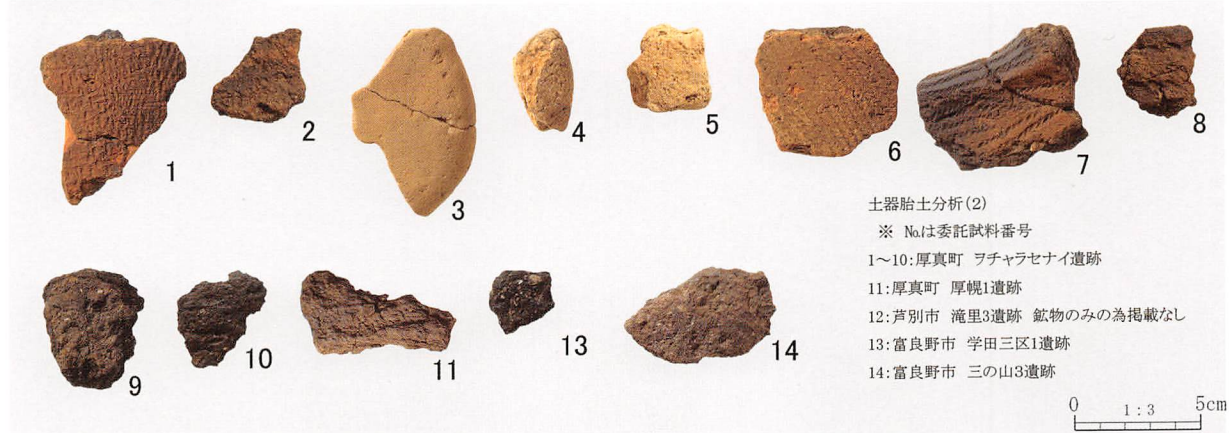


2. 縄文時代 すり石(たたき併用)

カラー図版7



1. 縄文時代土製品

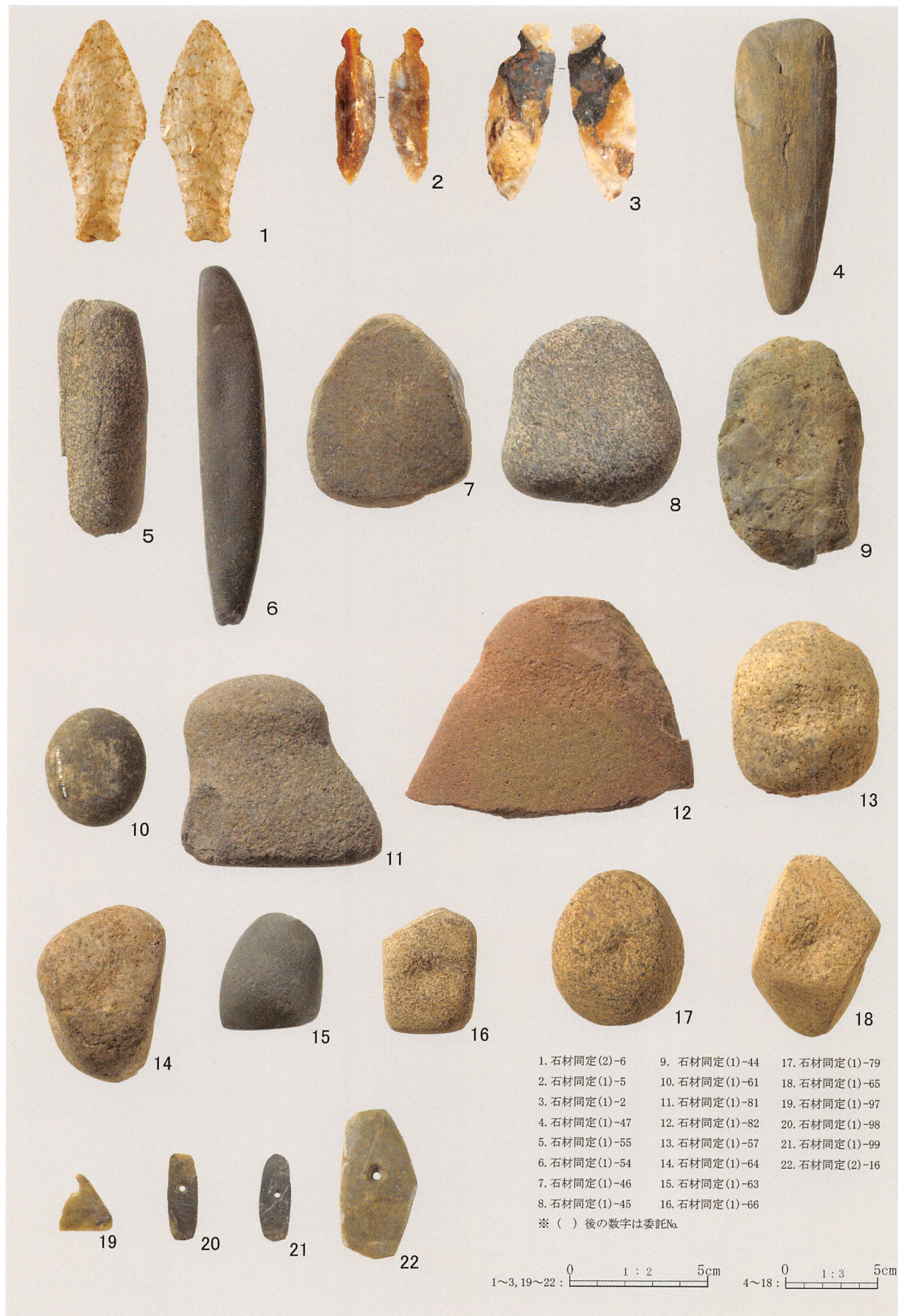


1. 土器胎土分析試料



2. 黒曜石原産地資料

カラー図版8



1. 石材同定委託試料

序 文

厚真町は、胆振・日高地区屈指の豊かな水田地帯を有する農業の町であります。この穀倉地帯を潤す厚真川は夕張山地の南端を源として流れ、農作物へ恩恵を授ける大切な河川でもあります。この豊かな厚真川と豊かな“ふるさと厚真”を更なる発展へと進めるために、農業用水確保と治水対策を主な柱とした多目的ダム「厚幌ダム」が、平成7年度に本格着工されました。

さて、本書はこの厚幌ダム建設に先駆けて、沈み行く地域に残された埋蔵文化財の記録保存を目的として発掘調査されたヲチャラセナイ遺跡の報告書であります。平成20年度より始まった本調査で同24年に調査を終了し、厚真の歴史について新たな知見を得ることができました。

ヲチャラセナイ遺跡では縄文時代前期の大規模な集落跡が見つかり、集落内より多くの土器や石器が見つかり、縄文時代前期の上流域の交易を考える上でも貴重な発見となりました。

厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、今後も数年にわたり継続される予定でございますが、この様な貴重な埋蔵文化財を地域の教育的資源、文化的財産として普及活用を推し進めてまいりたいと思う所存でございます。また、本書が、広く、埋蔵文化財の保護並びに調査・研究の一助となれば幸いに存じます。

最後となりましたが、調査・整理・報告にあたり御指導、御支援を賜りました関係諸氏ならびに関係機関に、誠に厚く、感謝申し上げます次第であります。

厚真町教育委員会
教育長 兵頭 利彦

例 言

1. 本書は、平成 23・24 年度に行った厚幌ダム建設事業に伴い発掘調査されたヲチャラセナイ遺跡（登録番号：J-13-101）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、北海道胆振総合振興局室蘭建設管理部（旧北海道室蘭土木現業所）の委託を厚真町教育委員会が受託した。
3. 調査・整理は以下の体制で行った。

調査担当者：天方博章・乾 哲也（平成 23・24 年度） 奈良智法（平成 24 年度） 荻野幸男（平成 23 年度）
調査員：中沢祐一（平成 23 年度） 宮塚 翔（平成 24 年度）
調査補助員：宮崎美奈子
測量技能作業員・写図工：海津孝之 測量技能作業員：渡辺博道 写図工：畑嶋朝江
整備技能作業員：松本 稔
天方：縄文、続縄文、擦文土器、金属製品実測（平成 23 年度分）、第Ⅱ・Ⅲ章遺構図作成
中沢：剥片石器実測（平成 23 年度分）第Ⅳ章遺構図作成、写真図版作成
宮塚：剥片石器実測（平成 24 年度分）第Ⅳ章遺構図作成
宮崎：礫石器実測、Ⅳ章遺構図作成、写真図版作成編集
奈良：擦文、縄文土器実測（平成 24 年度分）
乾：統括、涉外、第Ⅰ章
4. 本書の編集は乾・奈良・宮塚義人の協力を得て天方・宮塚 翔が行った。下記執筆。

第Ⅰ章：乾 第Ⅱ～Ⅴ章：天方、宮崎、宮塚 翔、中沢、宮塚義人
5. 関連諸科学については、以下の機関および個人に依頼した。

AMS 法 ¹⁴C 年代測定：株式会社 加速器分析研究所、パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
炭化種子同定：プロジェクト シーズ考古植物研究会（札幌国際大学博物館 客員研究員） 椿坂恭代
動物遺存体同定：千歳市埋蔵文化財センター 高橋 理
土器胎土分析：㈱第四紀地質研究所、アースサイエンス株式会社
黒曜石原産地分析：㈱第四紀地質研究所
石器石材同定：アースサイエンス株式会社
金属製品保存処理分析：岩手県立博物館
6. 調査・報告にあたり下記の方々より特段の御指導を賜った。

土器の整理・分類：大沼忠春
7. 遺物及び遺構の一部写真撮影：有限会社 写真事務所クリーク 佐藤雅彦
8. 地形測量の一部、復元土器実測の一部、剥片石器の実測、礫石器実測用写真は株式会社 シン技術コンサル、株式会社 トラスト技研に委託した。
9. 平成 24 年度の遺構・包含層土器原稿、土器観察表作成は有限会社 宮塚文化財研究所に委託した。
9. 本調査によって得られた資料等は、厚真町教育委員会で保管している。
10. 調査・報告にあたって下記の機関および個人より御指導御協力を頂いた、記して感謝申し上げます。

北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課、北海道胆振総合振興局、胆振総合振興局室蘭建設管理部 厚幌ダ

ム建設事務所、財団法人北海道埋蔵文化財センター、社団法人北海道アイヌ協会・胆振地区支部連合会、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構、北海道立アイヌ文化研究センター、北海道開拓記念館、苫小牧駒澤大学国際文化学部、札幌学院大学人文学部、札幌国際大学、東京大学常呂実習施設、旭川市博物館、浦河町立郷土博物館、恵庭市教育委員会、帯広市百年記念館、上ノ国町教育委員会、北広島市教育委員会、清水町教育委員会、新ひだか町教育委員会、伊達市教育委員会、千歳市埋蔵文化財センター、苫小牧市美術博物館、日高町教育委員会、平取町沙流川歴史館、平取町立二風谷アイヌ文化博物館、深川市教育委員会、富良野市教育委員会、余市町教育委員会、羅臼町教育委員会、岩手県立博物館、厚真町幌内自治会、(有)講神組

青野友哉、赤石慎三、東 豊土、天野哲也、阿部明義、石井淳平、出穂雅実、石川恵美、石川 朗、石橋孝夫、伊藤昭和、乾 芳宏、井上美知子、白杵 勲、右代啓視、宇田川洋、上屋真一、岡田路明、長田佳宏、小野寺聡、小野哲也、小野裕子、影浦 覚、葛西智義、加藤 忠、川内谷修、川上 淳、菊池俊彦、北沢 実、木村淳一、工藤研治、久保 泰、熊谷仁志、熊木俊朗、越田賢一郎、斉藤大朋、酒井秀治、佐藤一夫、佐藤 剛、澤田一憲、澤田 健、杉浦重信、鈴木克彦、鈴木琢也、鈴木 信、瀬川拓郎、関根達人、高橋和樹、田口 尚、田才雅彦、田中哲朗、種市幸生、鶴丸俊明、中田裕香、長沼 孝、長町章弘、中村和之、西脇対名夫、長谷山隆博、畑 宏明、島 誠、福井淳一、藤原秀樹、本田優子、前田正憲、松崎水穂、三浦正人、蓑島栄紀、宗像公司、森岡健治、藪中剛司、山原敏朗、吉田正明、涌坂周一

凡 例

1. 本書の遺構・遺物等について下記の略号を用いた。なお、層位がこれらの略号に付加している。

[遺構] 住居跡及び住居様遺構：H 住居内の土坑：HP 住居内の焼土：HF 住居に伴う柱穴：KP
土坑墓：GP 土坑：P 石囲い炉：SF 焼土：F 灰集中：AS Tピット：TP 杭穴：KP
付属土坑：PT 溝跡：MZ 掘り上げ土：MO

[遺物] 土器：P 擦文土器：SP 続縄文土器：ZP 縄文土器：JP 土製品：PP 剥片石器：FT
礫石器：ST 石製品：SP フレイク・チップ：FC 礫：S 鉄製品：IP 銅製品：BP

[遺物等集中] 土器集中：PB フレイク・チップ集中：FCB 礫集中：SB 剥片石器集中：FTB
礫石器集中：STB 獣骨集中：BB 炭化物集中：CB

2. 調査区を含めた周辺の河岸段丘面に以下の記号を用いた。

標高約 56.2-56.8m(氾濫原)：T₀ 標高約 58m：T₁ 標高約 62m：T₂ 標高約 68m：T₃
標高約 72.5-75m：T₄ 標高約 80-100m：T₅

3. 地層等について下記の略号を用いた。

[堆積土] 樽前 a 砂質降下火山灰：Ta-a 駒ヶ岳 C2 砂質降下火山灰：Ko-c2 樽前 b 降下軽石：Ta-b
白頭山苫小牧火山灰：B-Tm 樽前 c 砂質降下軽石：Ta-c 樽前 d1 細礫質降下スコリア：Ta-d1
樽前 d2 中礫質降下軽石：Ta-d2.p 粘土質黄褐色シルト(いわゆるローム)：L 攪乱：KR

[色 調] 小山・竹原編著(1994)『新版 標準土色帳』に従った。

[注 記] 土層注記は下記の略号を用いて、左側より混合比率の順列をつけている。また、混入土については()内に粒径(単位：mm)、状態を記載した。

混入土の比率

A + B：A と B が同量比混じる A-B：A を主体に B が多量に混じる

A = B : A を主体に B が少量 A ≡ B : A を主体に B が微量

φ : 粒径(単位 : mm) ↓ : 以下 (状態) : 斑状に混じる・均一に混じる

[層位] 標準堆積層はローマ数字を用い、遺構覆土や風倒木攪乱などの二次的に堆積したものにはアラビア数字を用いた。また各層の上・中・下位について下記の略号を用いている。

U : 上位 M : 中位 L : 下位

4. 挿図は基本的に次のように縮尺を統一したが、異なるものについては図中スケールに縮尺を明記している。また、図版掲載遺物は基本的に挿図と同縮尺である。

遺構周辺図 : 1/500、1/200、1/150、1/50、1/40 住居跡 : 1/80、1/60、1/40 柱穴 : 1/40、1/20

住居跡に付属する柱穴その他の土坑 : 1/20、1/40 土坑 : 1/40 石囲い炉・焼土 : 1/20

土坑墓 : 1/40、1/10 付属土坑 : 1/10 Tピット : 1/100、1/40

集中遺物出土状態 : 1/10、1/20 土器・礫・フレイクチップ・獣骨集中 : 1/80、1/40、1/20、1/10、1/5

作業場跡 : 1/400、1/60、1/50、1/40

土器実測図 : 1/3 土器拓影図 : 1/3 剥片石器実測図 : 1/2 礫石器実測図 : 1/3、1/4、1/5

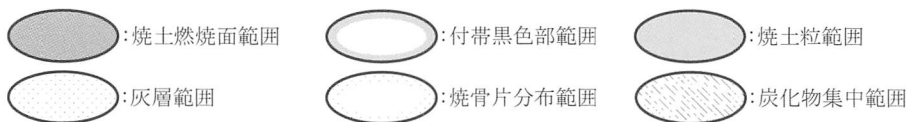
石製品実測図 : 1/2 金属製品実測図 : 1/2

5. 遺構実測図中に以下の線種・トーンを用いている。

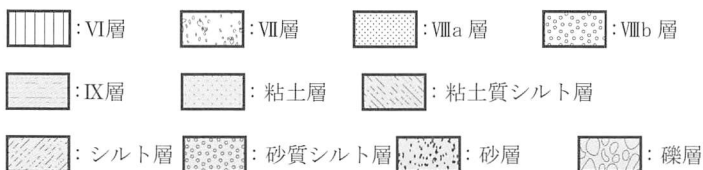
[線種]

----- : オーバーハング - · - · - · - : 推定線

[焼土] 被熱による土壤赤色化の度合いの表現に以下のトーンを用いた。



[Tピット] 第四章第4節ではTピット堆積図に下記トーンを用いている。



6. 遺物実測図中に以下の略号を用いている。

[断面] √————√ : たたき痕 |————| : 剥片石器 微細剥離 / 礫石器 擦り痕・滑沢面

[平面] [light gray box] : 滑沢面範囲 [dark gray box] : 被熱による赤色化/付着物範囲/赤色顔料範囲

7. 一覧表中の材質については、天方が肉眼観察で分類し、下記の略号を用いた。緑泥片岩は緑色泥岩に含めている。

また、頁岩・泥岩の分類については、粒度による基準ではなく、破断面等の肉眼観察によるものである。

Aga. : メノウ Aga-Sh. : メノウ質頁岩 Amp. : 角閃岩 And. : 安山岩 Bl-Sch. : 青色片岩 Bs. : 玄武岩
 Cha. : チャート Con. : 礫岩 Dio. : 閃緑岩 Gab. : 斑れい岩 Gni. : 片麻岩 Gr-Sch. : 緑色片岩
 Gra. : 花崗岩 Gra-Dio. : 花崗閃緑岩 Gr-Mud. : 緑色泥岩 Mud. : 泥岩 Obs. : 黒曜石 Qu. : 石英
 Qua. : 珪岩 Sa. : 砂岩 Sch. : 片岩 Ser. : 蛇紋岩 Sh. : 頁岩 Si. : 珪化岩 Tal. : 滑石 Tu. : 凝灰岩
 Tu-Sa. : 凝灰質砂岩
 Clay. : 粘土 Irn. : 鉄 Cu. : 銅 Sn-Pb. : 錫鉛 B. : 骨

本文目次

カラー図版	3. 礫石器	13
1-1 遺跡遠景	4. 鉄器	14
1-2 H24 調査前近景	5. 土器一覧表について	15
2-1 8～10号住居跡完掘	第5節 遺跡の位置	15
2-2 4・12・13号住居跡完掘	1. 厚真町の概要	15
3-1 4号住居跡完掘	2. 遺跡の位置と周辺の環境	23
4-1 縄文時代前期後半土器群	3. 調査区内の地形と地質	30
5-1 縄文時代前期後半(在地系)土器群		
5-2 縄文時代前期後半(円筒系)土器群	第II章 アイヌ文化期の調査	
6-1 縄文時代北海道式石冠	第1節 土坑墓	39
6-2 縄文時代すり石(たたき併用)	第2節 アイヌ文化期包含層出土遺物	45
7-1 縄文時代土製品		
7-2 土器胎土分析試料	第III章 擦文文化期・	
7-3 黒曜石原産地分析試料	続縄文文化期の調査	
8-1 石材同定委託試料	第1節 住居様遺構	46
	第2節 建物跡	51
序文	第3節 集中遺物	51
例言	第4節 焼土	57
凡例	第5節 続縄文文化期包含層出土遺物	58
第I章 調査の概要	第IV章 縄文時代の調査	
第1節 調査要項と体制	第1節 竪穴住居跡及び住居様遺構	59
1. 調査要項	第2節 土坑墓	112
2. 調査体制	第3節 土坑	124
第2節 調査に至る経緯	第4節 Tピット	128
1. 厚幌ダム建設事業	第5節 石囲い炉	152
2. 発掘調査までの経緯	第6節 焼土	153
第3節 調査の方法	第7節 獣骨集中	153
1. 調査区の設定	第8節 作業場跡	156
2. グリット設定	第9節 集中遺物	167
3. 包含層および遺構調査の方法	第10節 包含層出土遺物	181
4. 整理作業		
第4節 遺物の分類		
1. 土器		
2. 剥片石器		

第V章 自然科学的分析

第1節 ヲチャラセナイ遺跡における
放射性炭素年代 …………… 233

第2節 厚真町ヲチャラセナイ遺跡より
出土した人骨について …………… 238

第3節 北海道勇払郡厚真町
ヲチャラセナイ遺跡の動物 …………… 240

第4節 厚真町ヲチャラセナイ遺跡から
検出された植物種子 …………… 241

第5節 ヲチャラセナイ遺跡
土器胎土分析 …………… 245

第6節 ヲチャラセナイ遺跡出土
黒曜石の原産地分析 …………… 270

第7節 ヲチャラセナイ遺跡石材等同定 … 279

第8節 ヲチャラセナイ遺跡出土コイル状
鉄製品の金属考古学的調査結果 … 287

挿 図 目 次

第I章

図I-1 厚幌ダム建設事業関連埋蔵文化財
包蔵地位置図 …………… 3

図I-2 遺跡周辺の地形図 …………… 6

図I-3 年度別調査範囲及びグリット
網設定図 …………… 10

図I-4 厚真町内遺跡分布図 …………… 19

図I-5 遺跡周辺の地形面区分図 …………… 25

図I-6 厚真川上流域と
鶴川中流域遺跡分布図 …………… 27

図I-7 厚真川上流域と鶴川中流域
の地形図 …………… 31

図I-8 発掘調査区内の地形 …………… 32

図I-9 基本土層柱状図 …………… 33

図I-10 AE東西ライン土層断面図(1) …… 34

図I-11 AE東西ライン土層断面図(2) …… 35

図I-12 28南北ライン土層断面図 …………… 36

図I-13 メインセクション及び
旧石器トレンチ位置図 …………… 37

図I-14 旧石器時代IX層土層断面
及び柱状図 …………… 38

第II章

図II-1 平成23・24年度III層遺構配置図 … 41

図II-2 III GP-02 平面及び断面図 …………… 43

図II-3 III GP-02 及び包含層出土遺物 …… 44

第III章

図III-1 III H-07 平面及び遺物分布図 …… 48

図III-2 III H-07 断面及び遺物微細図 …… 49

図III-3 SB01 出土礫(1) …………… 49

図III-4 SB01 出土礫(2)及び
III PB-10 出土土器 …………… 50

図III-5 建物跡5 関連遺構及び
III PB-12 微細図 …………… 54

図III-6 III PB-11・12、III SB-20 出土遺物 … 55

図III-7 焼土平面及び断面図 …………… 57

図III-8 続縄文文化期包含層出土土器 …… 58

図III-9 III層包含層出土礫石器 …………… 58

第IV章

図IV-1 平成23・24年度縄文時代
遺構配置図 …………… 61

図IV-2 VH-04 周辺地形図 …………… 63

図IV-3 VH-04 平面及び断面図 …………… 65

図IV-4 VH-04 貼床及び
溝状遺構断面図 …………… 67

図IV-5 VH-04 柱穴断面図 …………… 68

図IV-6 VH-04 出土遺物 …………… 69

図IV-7 VH-06 断面及び周辺地形図 …… 73

図IV-8 VH-06 平面及び出土遺物分布図 … 74

図IV-9 VH-06 HP01・02 柱穴平面
及び断面図 …………… 75

図IV-10 VH-06 出土遺物 …………… 76

図IV-11 VH-06 覆土上層捨て場
遺物出土状態 …………… 79

図IV-12 VH-06 上層捨て場出土遺物(1) … 80

図IV-13	VH-06 上層捨て場出土遺物 (2)	81	図IV-47	TP-78・79 平面及び断面図	139
図IV-14	VH-07 平面及び断面図	84	図IV-48	TP-80・82・83 平面及び断面図	140
図IV-15	VH-08～10 周辺地形図	86	図IV-49	TP-84～86 平面及び断面図	141
図IV-16	VH-08 平面及び断面図	87	図IV-50	TP-87～89 平面及び断面図	142
図IV-17	VH-08 柱穴断面図	89	図IV-51	TP-90・91 平面及び断面図	143
図IV-18	VH-08 出土遺物(1)	90	図IV-52	TP-92・93 平面及び断面図	144
図IV-19	VH-08 出土遺物(2)	91	図IV-53	TP-94～96 平面及び断面図	145
図IV-20	VH-09 平面及び断面図	94	図IV-54	TP-97・98 平面及び断面図	146
図IV-21	VH-09 炉跡及び柱穴断面図	95	図IV-55	TP 出土遺物(1)	147
図IV-22	VH-09 出土遺物	96	図IV-56	TP 出土遺物(2)	148
図IV-23	VH-10・11・TP-81 平面 及び断面図・出土遺物	99	図IV-57	TP 出土遺物(3)	149
図IV-24	VH-12 平面及び 断面図・柱穴断面図	102	図IV-58	VSF-01・VF-57～66 平面及び断面図	154
図IV-25	VH-12 遺物分布図	103	図IV-59	VF-67～74・VBB-07 平面及び断面図	155
図IV-26	VH-12 出土遺物(1)	104	図IV-60	作業場跡1 遺物分布図	157
図IV-27	VH-12 出土遺物(2)	105	図IV-61	作業場跡1 出土遺物(1)	158
図IV-28	VH-13 平面及び 断面図・柱穴断面図	108	図IV-62	作業場跡1 出土遺物(2)	159
図IV-29	VH-13 遺物出土状態	109	図IV-63	作業場跡2 遺物分布図及び 出土遺物(1)	160
図IV-30	VH-13 出土遺物	110	図IV-64	作業場跡2 出土遺物(2)	161
図IV-31	VGP-25～27 平面及び断面図	113	図IV-65	作業場跡2 出土遺物(3)	162
図IV-32	VGP-28～30 平面及び断面図	114	図IV-66	作業場跡3 遺物分布図	163
図IV-33	VGP-31～33 平面及び断面図	115	図IV-67	作業場跡3 出土遺物(1)	164
図IV-34	VGP 出土遺物(1)	116	図IV-68	作業場跡3 出土遺物(2)	165
図IV-35	VGP 出土遺物(2)	119	図IV-69	VPB-45～48 平面及び垂直分布図	168
図IV-36	VGP 出土遺物(3)	120	図IV-70	VPB-49～51 平面及び垂直分布図	169
図IV-37	VGP 出土遺物(4)	121	図IV-71	土器集中出土遺物(1)	170
図IV-38	VP-19～25 平面及び断面図	126	図IV-72	土器集中出土遺物(2)	171
図IV-39	VP-26 平面及び断面図・ VP 出土石器	127	図IV-73	VFCB-23～27 平面及び出土遺物	174
図IV-40	TP-63・64 平面及び断面図	132	図IV-74	VSB-06～10 平面及び垂直分布図	175
図IV-41	TP-65・66 平面及び断面図	133	図IV-75	VSB-06～10 出土遺物	176
図IV-42	TP-67・68 平面及び断面図	134	図IV-76	包含層出土土器(1)	182
図IV-43	TP-69・70 平面及び断面図	135	図IV-77	包含層出土土器(2)	183
図IV-44	TP-71～73 平面及び断面図	136	図IV-78	包含層出土土器(3)	184
図IV-45	TP-74・75 平面及び断面図	137	図IV-79	包含層出土土器(4)	185
図IV-46	TP-76・77 平面及び断面図	138	図IV-80	包含層出土土器(5)	186
			図IV-81	包含層出土土器(6)	187

図IV-82 包含層出土土製品	195	図IV-95 包含層出土礫石器(7)	217
図IV-83 包含層出土剥片石器(1)	199	図IV-96 包含層出土礫石器(8)	218
図IV-84 包含層出土剥片石器(2)	200	図IV-97 包含層出土礫石器(9)	219
図IV-85 包含層出土剥片石器(3)	201	図IV-98 包含層出土礫石器(10)	220
図IV-86 包含層出土剥片石器(4)	202	図IV-99 包含層出土礫石器(11)	221
図IV-87 包含層出土剥片石器(5)	203	図IV-100 包含層出土礫石器(12)	222
図IV-88 包含層出土剥片石器(6)	204	図IV-101 包含層出土礫石器(13)	223
図IV-89 包含層出土礫石器(1)	211	図IV-102 包含層出土礫石器(14)	224
図IV-90 包含層出土礫石器(2)	212	図IV-103 包含層出土礫石器(15)	225
図IV-91 包含層出土礫石器(3)	213	図IV-104 包含層出土礫石器(16)	226
図IV-92 包含層出土礫石器(4)	214	図VI-105 包含層出土礫石器(17)	227
図IV-93 包含層出土礫石器(5)	215	図IV-106 土器接合線図(円筒系)	231
図IV-94 包含層出土礫石器(6)	216	図IV-107 土器接合線図(在地系)	232

表 目 次

第 I 章

表 I-1	ヲチャラセナイ遺跡遺構一覧表	7
表 I-2	ヲチャラセナイ遺跡出土遺物一覧表	7
表 I-3	グリット設定関係杭数値	10
表 I-4	厚真町内埋蔵文化財包蔵地 一覧表(1)	20
表 I-5	厚真町内埋蔵文化財包蔵地 一覧表(2)	21
表 I-6	厚真町内埋蔵文化財包蔵地 一覧表(3)	22
表 I-7	厚真川流域の河岸段丘面区分	25

第 II 章

表 II-1	III GP-02 属性表	40
表 II-2	III GP-02 出土遺物属性表	40
表 II-3	アイヌ文化期包含層 出土遺物属性表	45

第 III 章

表 III-1	擦文文化期遺構群一覧表	47
表 III-2	III H-07 属性表	47
表 III-3	III PB-10 出土土器属性表	51
表 III-4	SB01 属性表(1)	52

表 III-5	SB01 属性表(2)	53
表 III-6	建物跡 5 柱穴属性表	53
表 III-7	III PB-11 出土土器属性表	53
表 III-8	III SB-20 属性表	56
表 III-9	III PB-12 出土土器属性表	57
表 III-10	III F-51 属性表	57
表 III-11	統縄文文化期出土土器属性表	58
表 III-12	III 層包含層出土礫石器属性表	58

第 IV 章

表 IV-1	縄文時代遺構群一覧表	60
表 IV-2	VH-04 属性表	67
表 IV-3	VH-04 柱穴属性表	70
表 IV-4	VH-04 出土土器属性表	70
表 IV-5	VH-04 出土石器属性表	71
表 IV-6	VH-06 属性表	76
表 IV-7	VH-06 柱穴属性表	77
表 IV-8	VH-06 覆土上層捨て場跡 出土土器属性表	82
表 IV-9	VH-06 出土石器属性表	82
表 IV-10	VH-07 属性表	84
表 IV-11	VH-08 属性表	91
表 IV-12	VH-08 柱穴属性表	92

表IV-13	VH-08 出土石器属性表	92	表IV-42	VPB-49 出土礫石器属性表	173
表IV-14	VH-09 属性表	95	表IV-43	VFCB-23 出土剥片石器属性表	173
表IV-15	VH-09 柱穴属性表	97	表IV-44	VSb-06~10 出土礫石器属性表	177
表IV-16	VH-09 出土土器属性表	97	表IV-45	VSb-06 属性表	178
表IV-17	VH-09 出土石器属性表	97	表IV-46	VSb-07 属性表	178
表IV-18	VH-10 属性表	100	表IV-47	VSb-08 属性表	179
表IV-19	VH-11 属性表	100	表IV-48	VSb-09 属性表	179
表IV-20	VH-11 出土土器属性表	100	表IV-49	VSb-10 属性表	180
表IV-21	VH-12 属性表	105	表IV-50	縄文時代包含層出土 土器属性表(1)	190
表IV-22	VH-12 柱穴属性表	106	表IV-51	縄文時代包含層出土 土器属性表(2)	191
表IV-23	VH-12 出土土器属性表	106	表IV-52	縄文時代包含層出土 土器属性表(3)	192
表IV-24	VH-12 出土石器属性表	106	表IV-53	縄文時代包含層出土 土器属性表(4)	193
表IV-25	VH-13 属性表	109	表IV-54	縄文時代包含層出土 土器属性表(5)	194
表IV-26	VH-13 柱穴属性表	109	表IV-55	包含層出土土製品属性表	195
表IV-27	VH-13 出土土器属性表	111	表IV-56	縄文時代包含層出土 剥片石器属性表(1)	205
表IV-28	VH-13. PB1 出土土器属性表	112	表IV-57	縄文時代包含層出土 剥片石器属性表(2)	206
表IV-29	VH-13 出土石器属性表	112	表IV-58	縄文時代包含層出土 剥片石器属性表(3)	207
表IV-30	土坑墓属性表	122	表IV-59	縄文時代包含層礫石器属性表(1)	228
表IV-31	土坑墓出土土器属性表	123	表IV-60	縄文時代包含層礫石器属性表(2)	229
表IV-32	土坑墓出土礫石器属性表	123	表IV-61	縄文時代包含層礫石器属性表(3)	230
表IV-33	土坑属性表	125			
表IV-34	土坑出土礫石器属性表	125			
表IV-35	TP 属性表(1)	150			
表IV-36	TP 属性表(2)	151			
表IV-37	TP 出土土器属性表	151			
表IV-38	TP 出土石器属性表	152			
表IV-39	石囲い・炉・焼土・獣骨集中属性表	156			
表IV-40	作業場跡出土礫石器属性表	166			
表IV-41	土器集中出土土器属性表	173			

写真図版目次

図版 1-1	平成 23 年度Ⅲ層調査前近景	299	図版 2-4	ⅢGP-02 刀子、ニンカリ出土状態	300
図版 1-2	平成 24 年度Ⅲ層調査前近景	299	図版 2-5	ⅢGP-02 断面(長軸)	300
図版 2-1	ⅢGP-02 検出	300	図版 2-6	ⅢGP-02 断面(短軸)	300
図版 2-2	人骨副葬品検出	300	図版 3-1	ⅢH-07 完掘	301
図版 2-3	ⅢGP-02 人骨、ニンカリ出土状態	300	図版 3-2	ⅢH-07 東西断面	301

図版 3-3	ⅢH-07 南北断面	301	図版 8-8	VH-07 断面(1)	306
図版 4-1	ⅢH-07. HF01 検出	302	図版 8-9	VH-07 断面(2)	306
図版 4-2	ⅢH-07. HF01 断面	302	図版 9-1	VH-07 完掘	307
図版 4-3	ⅢH-07. PB01 検出	302	図版 9-2	VH-08~10 調査状況	307
図版 4-4	建物跡 5 完掘	302	図版 10-1	VH-08 完掘	308
図版 4-5	KP-218 断面	302	図版 10-2	VH-08(上)・VH-09(下)完掘	308
図版 4-6	KP-219 断面	302	図版 10-3	VH-08 南北軸断面	308
図版 4-7	KP-220 断面	302	図版 11-1	VH-08 東西軸西側断面	309
図版 4-8	KP-221 断面	302	図版 11-2	VH-08 東西軸東側断面	309
図版 5-1	ⅢF-51 検出	303	図版 11-3	VH-08 東西軸西側 掘り上げ土断面	309
図版 5-2	ⅢF-51 断面	303	図版 11-4	VH-08 東西軸東側 掘り上げ土断面	309
図版 5-3	ⅢPB-10 検出	303	図版 11-5	KP-04 断面	309
図版 5-4	ⅢPB-11・ⅢSB-20 検出	303	図版 11-6	KP-06 断面	309
図版 5-5	ⅢPB-11 検出	303	図版 11-7	KP-11 断面	309
図版 5-6	ⅢPB-12 検出	303	図版 11-8	KP-19 断面	309
図版 6-1	VH-04 完掘	304	図版 11-9	KP-21 断面	309
図版 6-2	VH-04 サブトレンチ断面	304	図版 11-10	炭化物出土状態	309
図版 6-3	VH-04 遺物出土状態	304	図版 12-1	VH-09 完掘	310
図版 6-4	VH-04 貼床断面	304	図版 12-2	VH-08・09 間の掘り上げ土断面	310
図版 6-5	VH-04 掘り上げ土下の溝状遺構	304	図版 12-3	VH-09 断面(1)	310
図版 7-1	KP-21 断面	305	図版 12-4	VH-09 断面(2)	310
図版 7-2	KP-24 断面	305	図版 12-5	VH-09 断面(3)	310
図版 7-3	KP-26 断面	305	図版 12-6	VH-09 断面(4)	310
図版 7-4	KP-34 断面	305	図版 12-7	VH-09. HF01 検出	310
図版 7-5	VH-06 床面検出状態	305	図版 12-8	VH-09. HF01 断面	310
図版 7-6	VH-06 完掘	305	図版 12-9	KP-06 断面	310
図版 7-7	VH-06 断面	305	図版 12-10	KP-21 断面	310
図版 7-8	VH-06 東側掘り上げ土断面	305	図版 13-1	VH-09 覆土上層 剥片石器集中	311
図版 7-9	VH-06 覆土上層 灰集中 1~4 検出	305	図版 13-2	VH-10・TP-81 完掘	311
図版 8-1	灰集中 1・2 断面	306	図版 13-3	VH-10 断面	311
図版 8-2	VH-06. PB01 検出	306	図版 13-4	VH-10・TP-81 断面	311
図版 8-3	VH-06. PB02 検出	306	図版 13-5	VH-11 検出	311
図版 8-4	KP-09 断面	306	図版 13-6	VH-11 完掘	311
図版 8-5	KP-25 断面	306	図版 13-7	VH-11 南北軸断面	311
図版 8-6	HP-01 検出	306			
図版 8-7	HP-01 完掘	306			

図版 13-8	VH-11 東西軸断面	311	図版 19-5	VGP-31 断面	317
図版 14-1	VH-12 完掘	312	図版 19-6	VGP-31 遺物出土状態	317
図版 14-2	VH-12 南北軸断面	312	図版 19-7	VGP-32 完掘	317
図版 14-3	VH-12 東西軸断面	312	図版 19-8	VGP-32 断面	317
図版 15-1	VH-12 覆土遺物検出	313	図版 20-1	VGP-32 遺物出土状態	318
図版 15-2	VH-12. HP01(左)・02(右)完掘	313	図版 20-2	VGP-33 完掘	318
図版 15-3	KP-08 断面	313	図版 20-3	VGP-33 南北軸断面	318
図版 15-4	KP-09 断面	313	図版 20-4	VP-19 完掘	318
図版 15-5	KP-13 断面	313	図版 20-5	VP-19 断面	318
図版 15-6	KP-14 断面	313	図版 20-6	VP-20 完掘	318
図版 15-7	VH-13 完掘	313	図版 20-7	VP-20 断面	318
図版 16-1	VH-13 南北軸断面	314	図版 20-8	VP-21 完掘	318
図版 16-2	VH-13 東西軸断面	314	図版 21-1	VP-21 断面	319
図版 16-3	VH-13 覆土遺物出土状態	314	図版 21-2	VP-22 完掘	319
図版 16-4	VH-13・TP-91 掘り上げ土範囲	314	図版 21-3	VP-22 断面	319
図版 16-5	KP-01 断面	314	図版 21-4	VP-23 完掘	319
図版 16-7	KP-04 断面	314	図版 21-5	VP-23 断面	319
図版 17-1	VH-13. KP-08 断面	315	図版 21-6	VP-24 完掘	319
図版 17-2	VH-13. KP-10 断面	315	図版 21-7	VP-24 断面	319
図版 17-3	VGP-25 完掘	315	図版 21-8	VP-25 完掘	319
図版 17-4	VGP-25 断面	315	図版 22-1	VP-25 断面	320
図版 17-5	VGP-26 完掘	315	図版 22-2	TP-63 完掘	320
図版 17-6	VGP-26 遺物出土状態	315	図版 22-3	TP-63 断面	320
図版 17-7	VGP-26 炭化物検出	315	図版 22-4	TP-64 完掘	320
図版 17-8	VGP-26. KP-01 断面	315	図版 22-5	TP-64 断面	320
図版 18-1	VGP-27 完掘	316	図版 22-6	TP-64. KP-06 断面	320
図版 18-2	VGP-27 断面	316	図版 22-7	TP-65 完掘	320
図版 18-3	VGP-28 完掘	316	図版 22-8	TP-65 完掘及び掘り上げ土	320
図版 18-4	VGP-28 断面	316	図版 22-9	TP-65 断面	320
図版 18-5	VGP-28 滑石土器出土状態	316	図版 23-1	TP-65 掘り上げ土断面	321
図版 18-6	VGP-29 完掘	316	図版 23-2	TP-65 掘り上げ土礫出土状態	321
図版 18-7	VGP-29 断面	316	図版 23-3	TP-66 断面	321
図版 18-8	VGP-29 土器出土状態	316	図版 23-4	TP-67 完掘	321
図版 19-1	VGP-30 完掘	317	図版 23-5	TP-68 完掘	321
図版 19-2	VGP-30 断面	317	図版 23-6	TP-67 断面	321
図版 19-3	VGP-30 炭化物検出	317	図版 23-7	TP-68 断面	321
図版 19-4	VGP-31 完掘	317	図版 23-8	TP-69 完掘	321

図版 23-9 TP-69 断面	321	図版 27-1 TP-89 完掘	325
図版 24-1 TP-69. KP-01~03 断面	322	図版 27-2 TP-89 断面	325
図版 24-2 TP-70 完掘	322	図版 27-3 TP-90 完掘	325
図版 24-3 TP-70 断面	322	図版 27-4 TP-90 断面	325
図版 24-4 TP-70. KP-01・02・04 断面	322	図版 27-5 TP-91 完掘	325
図版 24-5 TP-71 完掘	322	図版 27-6 TP-91 断面	325
図版 24-6 TP-71 断面	322	図版 27-7 TP-92 完掘	325
図版 24-7 TP-72 完掘	322	図版 27-8 TP-92 断面	325
図版 24-8 TP-72 断面	322	図版 27-9 TP-93 完掘	325
図版 24-9 TP-73 完掘	322	図版 28-1 TP-93 断面	326
図版 24-10 TP-73 断面	322	図版 28-2 TP-93 底壁工具痕	326
図版 24-11 TP-74 完掘	322	図版 28-3 TP-94 完掘	326
図版 24-12 TP-74 断面	322	図版 28-4 TP-94 断面	326
図版 24-13 TP-75 完掘	322	図版 28-5 TP-95 完掘	326
図版 24-14 TP-75 断面	322	図版 28-6 TP-95 断面	326
図版 25-1 TP-76 完掘	323	図版 28-7 TP-96 完掘	326
図版 25-2 TP-77 完掘	323	図版 28-8 TP-96 断面	326
図版 25-3 TP-76 断面	323	図版 28-9 TP-97 完掘	326
図版 25-4 TP-77 断面	323	図版 28-10 TP-97 断面	326
図版 25-5 TP-78 完掘	323	図版 28-11 TP-98・VP-26 完掘	326
図版 25-6 TP-78 断面	323	図版 28-12 TP-98・VP-26 切合断面	326
図版 25-7 TP-79 断面	323	図版 29-1 VSF-01 検出	327
図版 25-8 TP-80 完掘	323	図版 29-2 VSF-01 断面	327
図版 25-9 TP-80 断面	323	図版 29-3 VF-57 検出	327
図版 25-10 TP-82 断面	323	図版 29-4 VF-57 断面	327
図版 25-11 TP-83 断面	323	図版 29-5 VF-58 検出	327
図版 26-1 TP-82(左)・83(右) 完掘	324	図版 29-6 VF-58 断面	327
図版 26-2 TP-84 完掘	324	図版 29-7 VF-59 検出	327
図版 26-3 TP-84 断面	324	図版 29-8 VF-59 断面	327
図版 26-4 TP-85 完掘	324	図版 30-1 VF-60(左)・VF-61(右) 検出	328
図版 26-5 TP-85 断面	324	図版 30-2 VF-60(左)・VF-61(右) 断面	328
図版 26-6 TP-86 完掘	324	図版 30-3 VF-62 検出	328
図版 26-7 TP-86 断面	324	図版 30-4 VF-62 断面	328
図版 26-8 TP-87 完掘	324	図版 30-5 VF-63 検出	328
図版 26-9 TP-87 断面	324	図版 30-6 VF-63 断面	328
図版 26-10 TP-88 完掘	324	図版 30-7 VF-64 検出	328
図版 26-11 TP-88 断面	324	図版 30-8 VF-64 断面	328

図版 31-1	VF-65 検出	329	図版 37-1	H23 旧石器トレンチ全景	335
図版 31-2	VF-65 断面	329	図版 37-2	H23 TR-01 壁面	335
図版 31-3	VF-66 検出	329	図版 37-3	H23 TR-02 壁面	335
図版 31-4	VF-66 断面	329	図版 37-4	H23 TR-03 壁面	335
図版 31-5	VF-67 検出	329	図版 37-5	H23 TR-05 壁面	335
図版 31-6	VF-67 断面	329	図版 37-6	H23 TR-06 壁面	335
図版 31-7	VF-68 検出	329	図版 37-7	H23 石鏃出土地点拡張調査風景	335
図版 31-8	VF-68 断面	329	図版 37-8	H23 石鏃出土状態	335
図版 32-1	VF-69 検出	330	図版 37-9	H24 旧石器トレンチ調査終了	335
図版 32-2	VF-69 断面	330	図版 37-10	H24 旧石器トレンチ NS4 断面	335
図版 32-3	VF-70 検出	330	図版 38-1	H24 火山灰除去 1	336
図版 32-4	VF-70 断面	330	図版 38-2	H24 火山灰除去 2	336
図版 32-5	VF-71 検出	330	図版 38-3	調査状況 1	336
図版 32-6	VF-71 断面	330	図版 38-4	調査状況 2	336
図版 32-7	VF-72 検出	330	図版 38-5	調査状況 3	336
図版 32-8	VF-72 断面	330	図版 38-6	教員免許状更新講習	336
図版 33-1	VF-73 検出	331	図版 38-7	厚南中学校体験発掘	336
図版 33-2	VF-73 断面	331	図版 38-8	伊達市見学会	336
図版 33-3	VF-74 検出	331	図版 39-1	H24 調査終了状況 1	337
図版 33-4	VF-74 断面	331	図版 39-2	H24 調査終了状況 2	337
図版 33-5	作業場跡 1 遺物出土状態	331	図版 40-1	III GP-02 出土遺物	338
図版 34-1	作業場跡 2 遺物出土状態	332	図版 40-2	アイヌ文化期包含層出土遺物	338
図版 34-2	作業場跡 3 遺物出土状態	332	図版 41-1	III PB 出土土器及び 続縄文化期出土土器	339
図版 34-3	作業場跡 3 すり石出土状態	332	図版 42-1	III H-07. SB01 出土礫	340
図版 35-1	VPB-45 検出	333	図版 42-2	III SB-20 出土礫	340
図版 35-2	VPB-46 検出	333	図版 42-3	III 層包含層出土礫石器	340
図版 35-3	VPB-47 検出	333	図版 43	VH-04 出土遺物	341
図版 35-4	VPB-48 検出	333	図版 44	VH-06 出土遺物(1)	342
図版 35-5	VPB-49 検出	333	図版 45	VH-06 出土遺物(2)	343
図版 35-6	VPB-50 検出	333	図版 46-1	VH-06 出土遺物(3)	344
図版 35-7	VPB-50 炭化物検出	333	図版 46-2	VH-08 出土遺物(1)	344
図版 35-8	VPB-51 検出	333	図版 47	VH-08 出土遺物(2)	345
図版 36-1	VSB-06 検出	334	図版 48	VH-09・11 出土遺物	346
図版 36-2	VSB-07 検出	334	図版 49	VH-12 出土遺物(1)	347
図版 36-3	VSB-08 検出	334	図版 50-1	VH-12 出土遺物(2)	348
図版 36-4	VSB-09 検出	334	図版 50-2	VH-13 出土遺物	348
図版 36-5	VSB-10 検出	334			

図版 51	土坑墓出土遺物(1) …… 349	図版 68	縄文時代包含層出土 剥片石器(3) …… 366
図版 52-1	土坑墓出土遺物(2) …… 350	図版 69	縄文時代包含層出土 剥片石器(4) …… 367
図版 52-2	土坑出土遺物 …… 350	図版 70	縄文時代包含層 出土剥片石器(5) …… 368
図版 53	TP 出土遺物(1) …… 351	図版 71	縄文時代包含層出土 剥片石器(6) …… 369
図版 54-1	TP 出土遺物(2) …… 352	図版 72	縄文時代包含層出土 剥片石器(7) …… 370
図版 54-2	作業場跡出土遺物(1) …… 352	図版 73	縄文時代包含層出土 剥片石器(8) …… 371
図版 55	作業場跡出土遺物(2) …… 353	図版 74	縄文時代包含層出土 剥片石器(9) …… 372
図版 56	作業場跡出土遺物(3) …… 354	図版 75	縄文時代包含層出土 剥片石器(10) …… 373
図版 57	土器集中出土遺物(1) …… 355	図版 76	縄文時代包含層出土 礫石器(1) …… 374
図版 58	土器集中(2)・VFCB 出土遺物 …… 356	図版 77	縄文時代包含層出土 礫石器(2) …… 375
図版 59	礫集中出土遺物 …… 357	図版 78	縄文時代包含層出土 礫石器(3) …… 376
図版 60-1	VSB-06 出土礫 …… 358	図版 79	縄文時代包含層出土 礫石器(4) …… 377
図版 60-2	VSB-07 出土礫 …… 358	図版 80	縄文時代包含層出土 礫石器(5) …… 378
図版 60-3	VSB-08 出土礫 …… 358	図版 81	縄文時代包含層出土 礫石器(6) …… 379
図版 61-1	VSB-09 出土礫 …… 359		
図版 61-2	VSB-10 出土礫 …… 359		
図版 62	縄文時代包含層出土土器(1) …… 360		
図版 63	縄文時代包含層出土土器(2) …… 361		
図版 64	縄文時代包含層出土土器(3) …… 362		
図版 65-1	縄文時代包含層出土土器(4) …… 363		
図版 65-2	縄文時代包含層出土土製品 …… 363		
図版 66	縄文時代包含層出土 剥片石器(1) …… 364		
図版 67	縄文時代包含層出土 剥片石器(2) …… 365		

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査要項と体制

1. 調査要項

事業名：厚幌ダム建設事業 埋蔵文化財発掘調査 その 2

委託者：北海道胆振総合振興局室蘭建設管理部（旧北海道室蘭土木現業所）

受託者：厚真町教育委員会

遺跡名：ヲチャラセナイ遺跡（J-13-101）

所在地：勇払郡厚真町字幌内 112-1・114・124

調査面積：平成 23 年度：4,636 m² 平成 24 年度：2,350 m²

合計：6,986 m²

受託期間：平成 23 年 4 月 6 日～平成 24 年 3 月 31 日・平成 24 年 4 月 13 日～平成 25 年 3 月 26 日

調査期間：（発掘）平成 23 年 5 月 11 日～10 月 31 日 平成 24 年 5 月 9 日～10 月 31 日

（整理）平成 23 年 11 月 1 日～平成 24 年 3 月 16 日

平成 24 年 11 月 1 日～平成 25 年 3 月 15 日

2. 調査体制

厚真町教育委員会 教育長 兵頭利彦

生涯学習課 参事 佐藤照美（平成 23 年度～平成 24 年 9 月 30 日）

生涯学習課 参事 長谷川栄治（平成 24 年 10 月 1 日～平成 25 年度）

主幹 上田敦子

主査 乾 哲也（調査担当者 学芸員：平成 23・24 年度）

学芸員 奈良智法（調査担当者：平成 24 年度）

嘱託職員 天方博章（調査担当者：平成 23 年度～平成 24 年 9 月 30 日）

〃 荻野幸男（調査担当者：平成 23 年度）

〃 中沢祐一（調査員：平成 23 年度）・宮塚 翔（調査員：平成 24 年度）

〃 宮崎美奈子（調査補助員：平成 23・24 年度）

〃 今村陽子（事務員：平成 23・24 年度）

臨時職員

測量技能作業員 海津孝之（平成 23 年度） 渡辺博道（平成 24 年度）

整備技能作業員 松本 稔（平成 23・24 年度）

写 図 工 海津孝之（平成 23 年度） 畑嶋朝江（平成 24 年度）

発掘作業員 平成 23 年度：33 名 平成 24 年度：26 名

整理作業員 平成 23 年度：23 名 平成 24 年度：15 名

第2節 調査に至る経緯

1. 厚幌ダム建設事業(図 I-1)

町内を縦貫する厚真川中下流域には約 3,000ha もの水田地帯が広がっている。このため、春の灌漑用水の確保は勿論のこと、融雪や豪雨による洪水への治水対策が開拓期以来の課題とされていた。

昭和 45 (1970) 年に現河口より 38km 地点に、農業用ダムである「厚真ダム」が完成した。しかし、このダムは洪水調整機能が不十分で、昭和 45 年には洪水と渇水、昭和 48・50・56 年にも洪水が発生し、近年においても、平成 12 年春の融雪期と平成 13 年秋に、家屋や農地に被害をおよぼす洪水、平成 18 年にも厚真川の一部がオーバーフローする事態が発生している。また、昭和 59・60・63 年には深刻な水不足にも見舞われており、平成 19 年は、幼穂形成期の水不足により深水灌漑が行えなかったため低温障害を受け、作況指数が極端に低い年でもあった。特に田植え時期における農業用水の確保は農業者にとっては勿論、厚真町民にとっても関心事であり、厚真町の基幹産業である農業、豊かな穀倉地帯を築くうえで、治水や農業灌漑などを目的とする新たなダム建設が陳情されていた。また、市街地への人口集中の進行による住宅街や苫小牧東港への水道用水の需要が急増し、取水可能量は限界に達していることから、新たな上水道水源確保が急務となっている。

これらの状況の抜本的な治水等の改善策として、昭和 52 年に北海道土木現業所により厚幌ダム建設事業の予備調査が着手されている。その後、昭和 61 年に実施設計である「厚真川総合開発事業計画調査」の着手が決まり、平成 7 (1995) 年に北海道と厚真町との間で「厚真川総合開発事業厚幌ダム建設工事に関する基本協定」が結ばれ、洪水調整、灌漑用水、水道水の確保、流水の正常な機能維持の多目的ダムとして、現厚真ダム下流に「厚幌ダム」の建設着工が決定された。また、同年には地元厚真町内に厚幌ダム建設事務所が開設され、その後、沿岸漁業団体への説明会や環境アセスメントも実施されている。近年ではダム事業に関連して、道道切替工事や町内各地区の農業経営体育成基盤整備事業、農業用水路再編対策事業(厚幌導水路建設)が展開され、営農の効率化が促進されている。厚幌ダムの本格着工として、平成 14 年度からの水没地域内用地買収とともに、一般道道上幌内早来停車場線の切替工事に着手し、北進平取線としてむかわ町穂別まで延長する計画である。厚幌ダム本体(堤体)は、平成 20 年に建設費節減のため最新工法での設計変更がなされ、堤体長 516m、高さ 47.2m、台形 C S G ダムで、フチャラセナイ遺跡より約 450m 下流に堤体を建設する計画である。貯水は常時湛水面標高 85.4m、最深湛水面標高 88.1m であり、総貯水量は 47,400 千 m^3 、現在の厚真ダムのおおよそ 4.7 倍の貯水量となり、多方面にわたって絶大な効果波及が想定され、早期完成が望まれていた。

しかし、北海道内の複数のダム事業との関係からダム堤体着手の予算確保に困難な状況が続き、当初計画の平成 24 年完成から平成 27 年秋に試験湛水、28 年春に供用を開始する計画となり工期が延長された。その後、平成 20 年 11 月に公共事業再評価を受け、多目的ダムの必要において A 評価を受け事業継続となっていた。ところが、平成 20 年 7 月の政権交代によって、全国の公共事業、とりわけダム事業の否定的見直しが進められ、厚幌ダムもその対象となった(苫小牧民報社 2009.10.7)。その後平成 23 年 8 月に国土交通省は事業継続を決定し、平成 24 年度からは完成に向けて、埋蔵文化財発掘調査も予算が配当され、道埋文センターも調査に参入している。なお、厚幌ダムは国費 54%、道費 44.6%等のいわゆる「補助ダム」と称されるダムである。

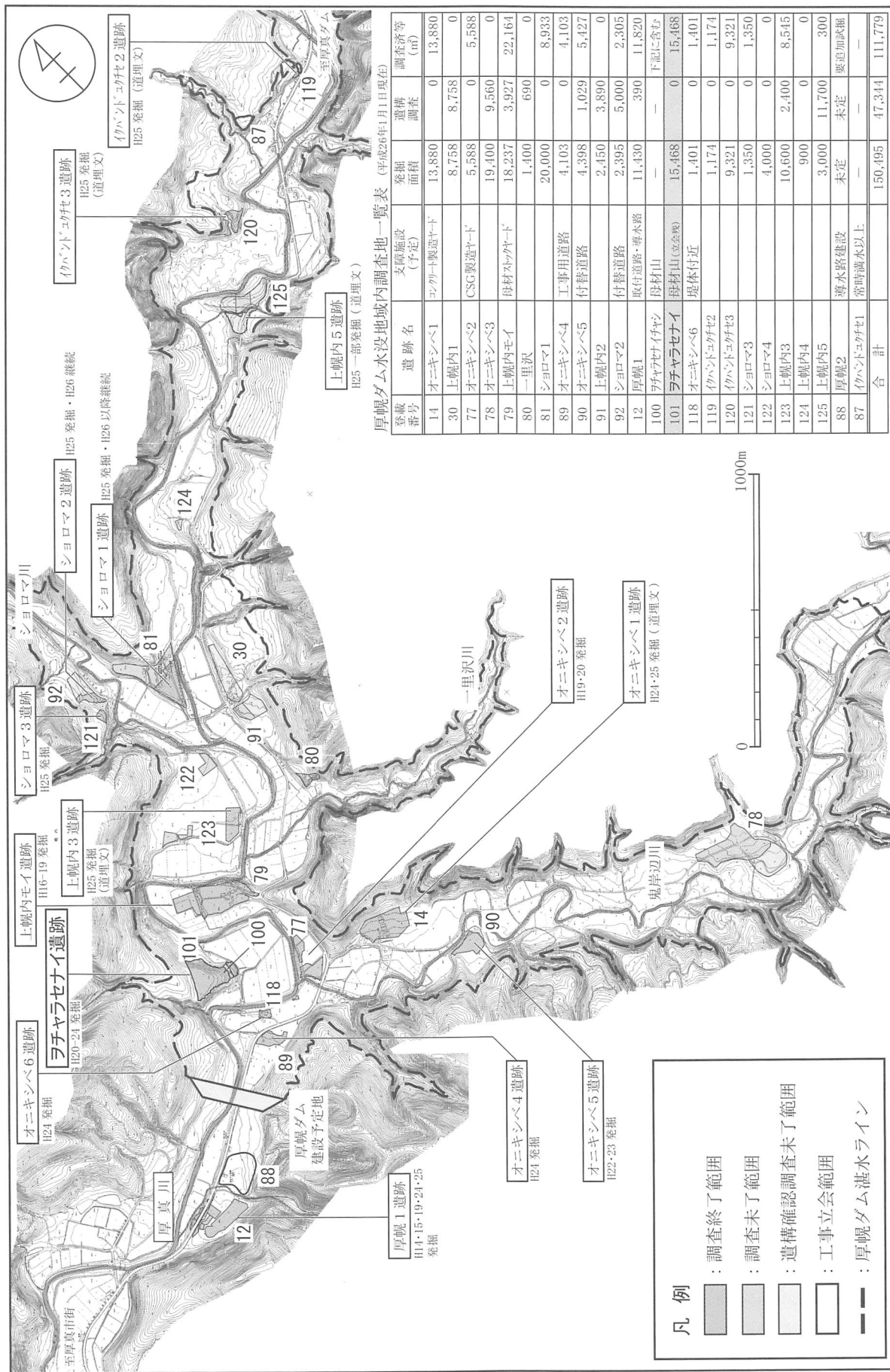


図 I-1 厚幌ダム建設事業関連埋蔵文化財包蔵地位置図

- 凡例
- : 調査終了範囲
 - : 調査未了範囲
 - : 遺構確認調査未了範囲
 - : 工事立会範囲
 - : 厚幌ダム湛水ライン

2. 発掘調査までの経緯

A 厚幌ダム湛水地域内の埋蔵文化財事前調査

厚幌ダム建設事業の本格化を踏まえて、平成12年7月6日に北海道室蘭土木現業所厚幌ダム建設事務所(以下、ダム事務所)よりダム事業全体に係わる埋蔵文化財事前協議書(室土厚幌第158号)が厚真町教育委員会(以下、町教委)を経て北海道教育委員会(以下、道教委)へ提出された。協議区域は最深湛水面標高88.1m以下の区域と道道切替路線幅の合計約235,500㎡に及ぶ。まず、平成13年6月に道教委により試掘調査が行われ、約8,250㎡が「要発掘調査」面積となり、厚幌1遺跡(J-13-25)として新規掲載された(平成13年7月18日付け教文第4265号)。これを受け、厚幌ダム関連の埋蔵文化財発掘調査について道教委と町教委で協議した結果、ダム関連の試掘調査までは道教委が行い、厚幌ダム建設に係わる受益者が厚真町1町であることから、発掘調査は町教委と北海道室蘭土木現業所で委託契約を結び、町教委が行うこととなった。平成14・15年度の2ヵ年で厚幌1遺跡の発掘調査を行った(厚真町教育委員会2004)。

湛水地域内については、平成13年10月に所在確認調査が行われ、周知の遺跡(オニキシベ1遺跡、上幌内1遺跡)を含め16ヵ所、面積235,500㎡の要試掘調査の回答がされた(平成13年11月16日付け教文第4532号)。以後、追加箇所や範囲拡張もあるが平成19年度までに8回、18地点の試掘調査が実施され、14遺跡、約143,000㎡の要発掘・要遺構確認調査地点が確認されていた。

しかし、これまでの発掘調査成果から、河岸段丘の低位面にも埋蔵文化財包蔵地が広がること等、この地区における遺跡の立地パターンが判明してきており、建設中の発見を避けるため新たな視点での再試掘調査の必要性が町教委やダム事務所等から望まれていた。これを受け道教委は平成21年5月に湛水地域内の所在確認踏査を行い、要試掘調査地点10ヵ所を回答した(平成21年6月11日付け教文第928号)。このうち8地点については7、8月に試掘踏査が実施され6ヵ所の包蔵地が発見された(平成21年9月10日付け教文第1940号)。更に平成21年12月にも試掘調査が実施され新たに1ヵ所が追加された(平成22年1月5日付け教文第3145号)。既に発掘調査が終了した面積と遺構確認調査を含め、平成24年12月現在の要発掘調査地点は24ヵ所に及び、要発掘面積150,495㎡、要遺構確認調査47,344㎡で合計197,839㎡となった。平成25年12月現在で発掘調査終了面積が111,779㎡(56.4% 厚幌1遺跡導水路調査含む)となっている(図I-1)。

B ヲチャラセナイ遺跡の発見経緯

ヲチャラセナイ遺跡については、7月に道教委によってチャシ跡の範囲及び構築時期確認の試掘調査が行われた。この結果、標高55m前後の低位段丘面と標高75m前後の高位段丘面に埋蔵文化財包蔵地が確認され、チャシ跡を含む13,300㎡の要発掘調査の回答がなされた(平成20年1月22日付け教文第4112号)。合わせてチャシ跡部分をフレチャシ跡(J-13-100)、周囲の埋蔵文化財包蔵地をヲチャラセナイ遺跡(J-13-101)として町教委によって掲載された(平成17年9月6日付け厚教社号)。その後、道教委よりチャシ跡の名称が不適切との指導を受け現在のヲチャラセナイチャシ跡に名称変更を行っている(平成19年4月20日付け厚教社号)。

C ヲチャラセナイ遺跡の発掘現場準備と土工運営

当初、厚幌ダム堤体工事着工は平成24年度であり、本遺跡の段丘堆積物がダム建設母材として採掘される工事計画が立案された。これに伴う試験採掘を平成22年度に実施する工程が生まれ、

早急に発掘調査を行う必要が生じたため、平成 20 年 7 月 8 日から発掘調査を開始した。13,300 m² を当初計画では平成 20 年度から 22 年度にかけて 3 年の発掘調査を計画した。これに基づき、平成 20 年 5 月中旬からの約 2 ヶ月間、町教委は厚真川左岸のオニキシベ 2 遺跡 A 地区の発掘調査を行い、平成 19 年度から継続調査していた同遺跡の調査を終了させた。この間にダム事務所によって本遺跡の上流側に仮設架橋工事が行われ、上幌内モイ遺跡経由でヲチャラセナイ遺跡へのアクセスルートの確保がなされた。同時に町教委は、伐採及び火山灰除去や進入路整備の土木準備工の他、グリッド設定、伐採木枝葉の産廃処理、仮設トイレの設置、北電柱へのトランス及び分電盤の設置等の調査準備作業を行った。これらの架橋工事や土木準備工等はダム事務所との積極的かつ協力的な協議のもと実施できた。プレハブ用地や高位段丘面へのアクセスルートの確保のため、低位段丘面 1,078 m² の調査から開始した。平成 20 年度は 5 月の発掘調査開始時のオニキシベ 2 遺跡に発掘調査事務所を設置し、ワゴン車による作業員輸送で対応した。現地にはビニールハウスと仮設テントを設置し、作業員の休憩所及び発掘器材、出土物の仮保管場所とした。調査開始後間もなく、段丘崖裾に作業用水及び発掘現場散水用の井戸を掘削し、電気ポンプやエンジンポンプによる汲み上げ利用を行った。また、携帯電話は圏外地域であることから、電話等の連絡は事務所整理作業員からの無線機対応とし、時間と経費の節減に努めた。これらの多くは環境整備技能作業員や各発掘作業員の創意工夫や協力によるものが大きい。

高位段丘面の調査準備として、当地に在住の農家が利用していた登坂路をワゴン車等の車両でも通行可能な程度にまで重機で整備し、作業員搬送や機材運搬路の確保を図った。この登坂路は低位段丘の発掘調査区にもかかっており、地形的に迂回路の確保が困難であったことから一時的に通行不可能な状態となった。この期間は、低位段丘面の調査に作業員の主体を振り向け、通行止めの支障を最低限に留め、全体の作業効率維持を図った。なお、低位段丘面調査中は水田跡地を利用した迂回路で対応し、排水側溝は伐採木の端切れを利用した仮設木橋を敷設した。

低位段丘面の調査は 8 月に終了し、同時に埋め戻し作業を行い高位段丘面へのアクセスの効率化を進めた。また早期の埋め戻し作業により地盤の安定が進み、平成 21 年度の現場事務所設置において敷鋼板は不要であった。高位段丘面の調査終了後は、器材や作業員搬送車両の旋回や駐車スペース確保のため調査区内を整地、填圧をかけ次年度の作業準備を行った。

平成 21 年度は発掘調査を終えた低位段丘面に現場事務所を設置し、新たに電話線の引き込みを行った。この際、電話線敷設工事の厚真川河川横断のため室蘭土木現業所苫小牧出張所に工事届出を工事業者側から提出している。また、発掘現場事務所の設置についても必要との指導を受け、河川敷地占有許可申請書も提出した。この他の作業環境については平成 20 年度に整備しており、新たな準備工は行っていない。なお、21 年度の入札業務において大幅な入札減が生じたため、ダム事務所と協議し、次年度の調査予定地の伐採作業に設計変更をかけた。この作業により、発掘調査の早期着手の他、枝葉の産廃処理において重量軽減等で処理費の節減につながった。この方法は平成 22 年度以降も行っている。

(乾)

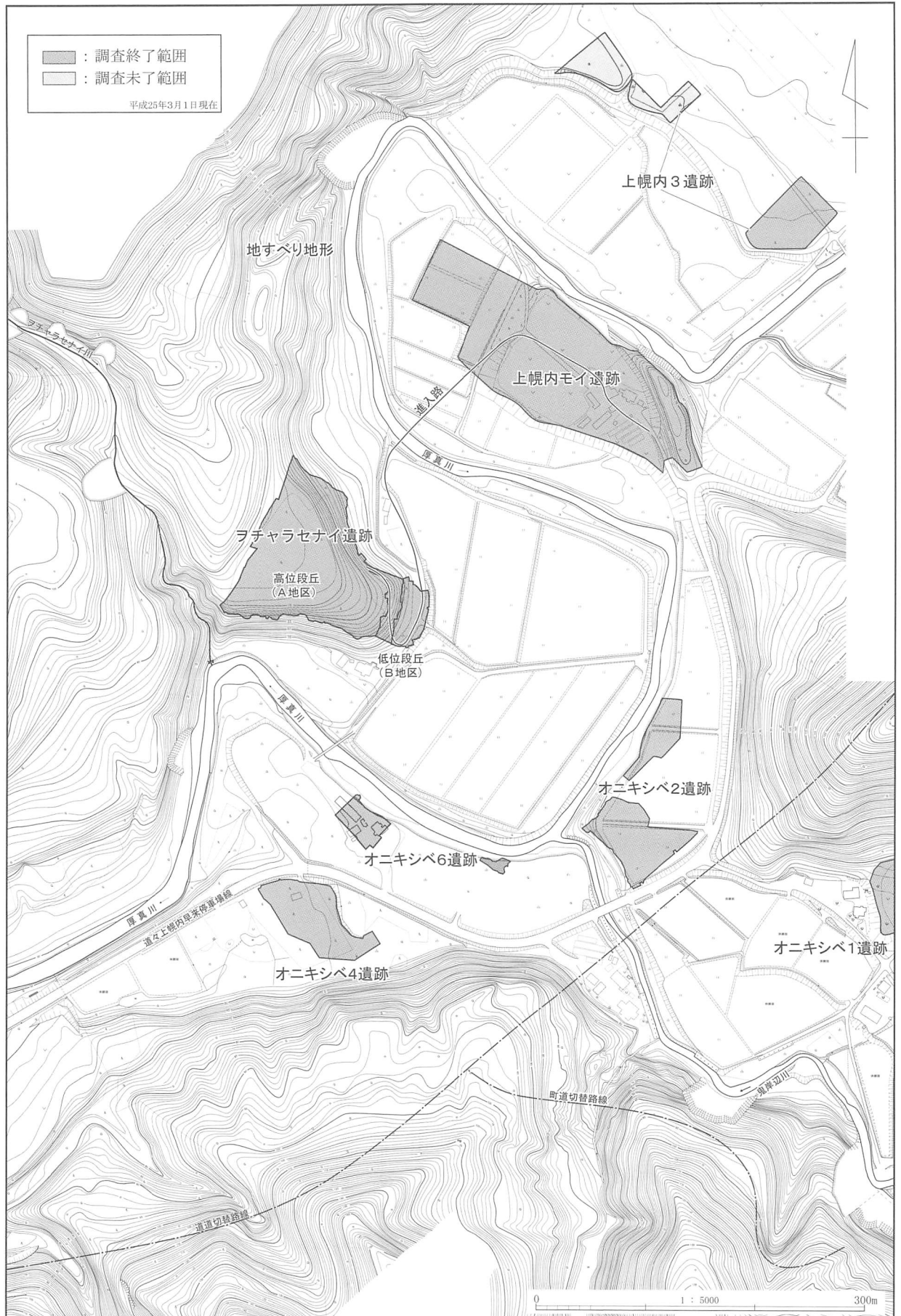


図 I-2 遺跡周辺の地形図

第3節 調査の方法

1. 調査区の設定

ヲチャラセナイ遺跡の発掘調査範囲は、ダム湛水地域内であることから、遺跡の全面が調査対象となっており、道教委の試掘調査によって回答された「要発掘範囲」を基本としている（平成 20 年 1 月 22 日付け 教文ス第 4112 号）。回答書添付の地形図と段丘面縁辺部など現地の地形が異なる場合があり、実際の調査区は回答書と若干異なる。この点は、明瞭な施工範囲等が確定している厚幌導水路の発掘区設定とは異なっている。

また、発掘調査の結果、当初の調査区外へ包蔵地が広がることもあり、道教委、ダム事務所と協議し、必要に応じて調査範囲の拡張を行っている。ヲチャラセナイ遺跡の低位段丘面（B 地区）においても、発掘調査の結果、段丘崖 T3-T1 への遺物の広がりが見込まれたことから工事立会区として拡張している（平成 22 年 1 月 12 日付け教文ス第 3216 号）。

これらの結果、平成 20 年度は、低位段丘面 B 地区全体と高位段丘面 A 地区の先端部で、4,239 m² の調査を行い、平成 21 年度は A 地区チャシ跡の周辺部 1,003 m² の調査を行った。平成 22 年度は高位段丘面北側の 3,470 m² の調査を行った。平成 23 年度は、高位段丘面 4,636 m²、平成 24 年度は同じく高位段丘面 2,350 m²、4 年間の合計 15,698 m² 発掘調査を行った。遺構及び遺物の総数は下記の表に記してある（表 I-1・2）。

表 I-1 ヲチャラセナイ遺跡遺構一覧表(チャシ跡含む)

調査年度	層位	遺構種別															
		チャシ跡	住居跡	建物跡	集中区	土坑墓	土坑	焼土	灰集中	Tピット	土器集中	礫集中	礫石器集中	剥片石器集中	石斧集中	FC集中	獣骨集中
H20 ～22	アイヌ文化期	1	6	4	4	1	-	(24)	1	-	-	(6)	-	-	-	-	3
	擦文文化期	-	-	-	2	-	6	20	-	-	7 (1)	10 (3)	-	-	-	-	-
	続縄文文化期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
	縄文時代	-	5	-	-	24	13	49	-	59	43	5	1	3	1	15	6
H23 ～24	アイヌ文化期	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	擦文文化期	-	1	1	-	-	-	1	-	-	3	2	-	-	-	-	-
	続縄文文化期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	縄文時代	-	8	-	-	9	8	19	-	36	7	-	5	-	-	5	1
合計		1	20	5	6	35	27	89	1	95	61	17	6	3	1	20	10

※()は住居、集中区に含まれる付属遺構数

表 I-2 ヲチャラセナイ遺跡出土遺物一覧表(チャシ跡含む)

調査年度	層位	種別									合計
		土器	土製品	剥片石器	礫石器	石製品	金属製品	礫	剥片類	その他	
H20 ～22	Ⅲ層	1,175	-	40	98	-	77	7,206	1,020	12	9,628
	V層	16,137	215	1,905	1,835	-	-	18,620	38,472	2	77,186
H23・ 24	Ⅲ層	214	-	19	24	-	10	1,389	457	-	2,113
	V層	5,613	2,534	1,510	4,153	6	-	19,617	93,428	-	126,861
合計		23,139	2,749	3,474	6,110	6	87	46,832	133,377	14	215,788

2. グリッド設定 (図 I-3・表 I-3)

発掘調査にあたって、グリッド網は公共座標に従い、遺物包含層が想定される段丘面全てを含む 220m×250m の広域に設定し、5m 四方のメッシュで区分した。グリッド網の起点 (A-1 区: X=-136,550.000 Y=-20,660.000) は北東コーナーとし、南北の X 軸を A・B・C・・・のアルファベット列で、東西の Y 軸ラインを 1・2・3・・・のアラビア数字列とした。各グリッドの呼称も北東コーナーの杭の名称とし、A-1 区、A-2 区・・・とし記した。なお、V 層の調査では 2.5m 四方の中グリッドを設定して 4 分割し、遺物の取上げを行っている。中グリッドの呼称は全てアラビア数字とし、配列は、北東を基点とし東西の Y 軸方向に向け 1、2 とし、南北の X 軸方向へ折り返し、3、4 としている。(表 I-3 右)。

現地での設定方法は、20 年度はグリッド設定基準杭 10 点の設置を(有)幅田測量に委託し、これを基に測量技能作業員が光波式トータルステーションを用いて調査区全面のグリッド杭を設置した。グリッド設定の基準点はいずれも 3 級基準点で、上幌内モイ遺跡高位段丘面の「H8No.3-43」とオニキシベ 4 遺跡近くの 3 級基準点「H8No.3-45」、ヲチャラセナイ沢左岸河口周辺の「H8No.3-49」の 3 点である。調査終了時には、発掘区内に数点の控杭を深く打設し、次年度の基準杭としている。

絶対高は、本遺跡の南西端部、ヲチャラセナイ沢が開析する河岸段丘上に所在する「H8 No.3-49 H=73.515m 厚幌ダム建設事務所」より基準杭打設とあわせて水準測量したものである。

3. 包含層および遺構調査の方法

調査の準備段階として、調査員立会のもとバックホーにより樹根を残しながら表土や盛土と Ta-b 火山灰の除去を行った。Ⅲ層上面でアイヌ文化期の遺構、遺物が検出されることから火山灰は 3cm 前後残り、Ⅲ層上面まではジョレンを用いて人力による清掃作業を行った。

調査方法に関しては、これまでの町内での調査結果からⅢ層は、基本的にⅢa 層からⅢb 層下位にかけては移植ゴテを用いて 1~2cm 程度ずつ掘り下げた。面的な遺物出土状態などから時期を把握し、新しい時期のアイヌ文化期 (Ⅲb 層上位・ⅢbU)、古い時期のアイヌ文化期 (Ⅲb 層中位・ⅢbM)、擦文文化期 (Ⅲb 層下位・ⅢbL) の 3 面を考慮したうえでの調査を開始した。

無遺物層のⅣ層 (Ta-c) はバックホーとジョレンで除去した。Ⅴ層は全面を人力調査掘開し、Ⅵ層は遺物出土頻度を確認し、一部ジョレンを用いての調査とした。

遺構は、住居跡など包含層上面から上位で窪みとして確認できたものは、先行トレンチや土層観察ベルトを設定し、できるだけ遺構構築面の把握や構築面での調査を考慮した。焼土や遺物集中区、炭化物集中区等については、燃焼面や形成面のほぼ全量をフローテーションサンプルとして採取し、処理は作業用水の井戸を掘削し、調査期間中にフローテーション処理を行った。記録図化については光波式トータルステーションを用いて平面形およびエレベーションを記録し、堆積状態については調査担当者が分層と土層注記を行い、測量技能作業員が堆積図作成のための実測を行った。各調査経過は 35mm 一眼レフカメラで撮影しデジタルデータ・モノクロ・リバーサルフィルムに記録を残した。一部は 6×7 中盤カメラでも撮影を行った。

遺物については、Ⅲ層については全点に遺物番号を付した。取り上げについては調査員による層位確認を行い、礫については段丘堆積物中の自然礫との区分をしたうえで、光波式トータルステー

ションによる XYZ 座標を記録し、取り上げた。この時、手簿（日付・グリッド・層位・遺物名等）の記録も行い、データ入力ミスの補完を行っている。V 層では個々の位置記録を行わず、層位を記録しながら 5m グリッドを 4 分割した中グリッド単位で遺物の取上げを行っている。

4. 整理作業

発掘調査が終了した 11 月から翌年 3 月中旬にかけて厚真町中心域の本郷地区に所在する旧かしわ保育園及び軽舞地区の旧軽舞小学校を利用して行った。廃園施設利用については、トイレの改修業務を必要最低限の労務環境整備の一環として事業者との調整のうえ実施した。

一次整理は、一部現場段階から水洗、注記作業を行い、整理業務に入ってから各担当の調査員が調査区遺構名や層位、種別、細分類、分類等の台帳確認作業を行った。また並行して、フローテーション作業と処理後の資料の選別作業も行っている。

二次整理は、各種遺物の接合・復元・実測・拓本等の作業を行い、遺構図等の第二原図の作成やトレース作業・編集については、パソコン(0s: Windows Adobe Illustrator)で行った。なお、金属製品などの脆弱遺物については、パソコン上での写実実測を行っている。写真撮影は 35mm 一眼レフデジタルカメラで行い、パソコン(0s: Windows Adobe Photoshop)でのコントラスト補正等を行い、幾何補正を加えた。平成 22 年度からは出土遺物撮影の一部を有限会社クリークへ委託している。報告書掲載図や写真図版、一覧表の編集・版組みも上記のソフトで行い、本文の Word 文書と合わせて印刷所へデジタル入稿している。

遺物の保管は、報告書掲載のものは図版毎に行い、それ以外のものは、分類および調査区毎にコンテナに収納し町内の廃校舎に収蔵している。

(乾)

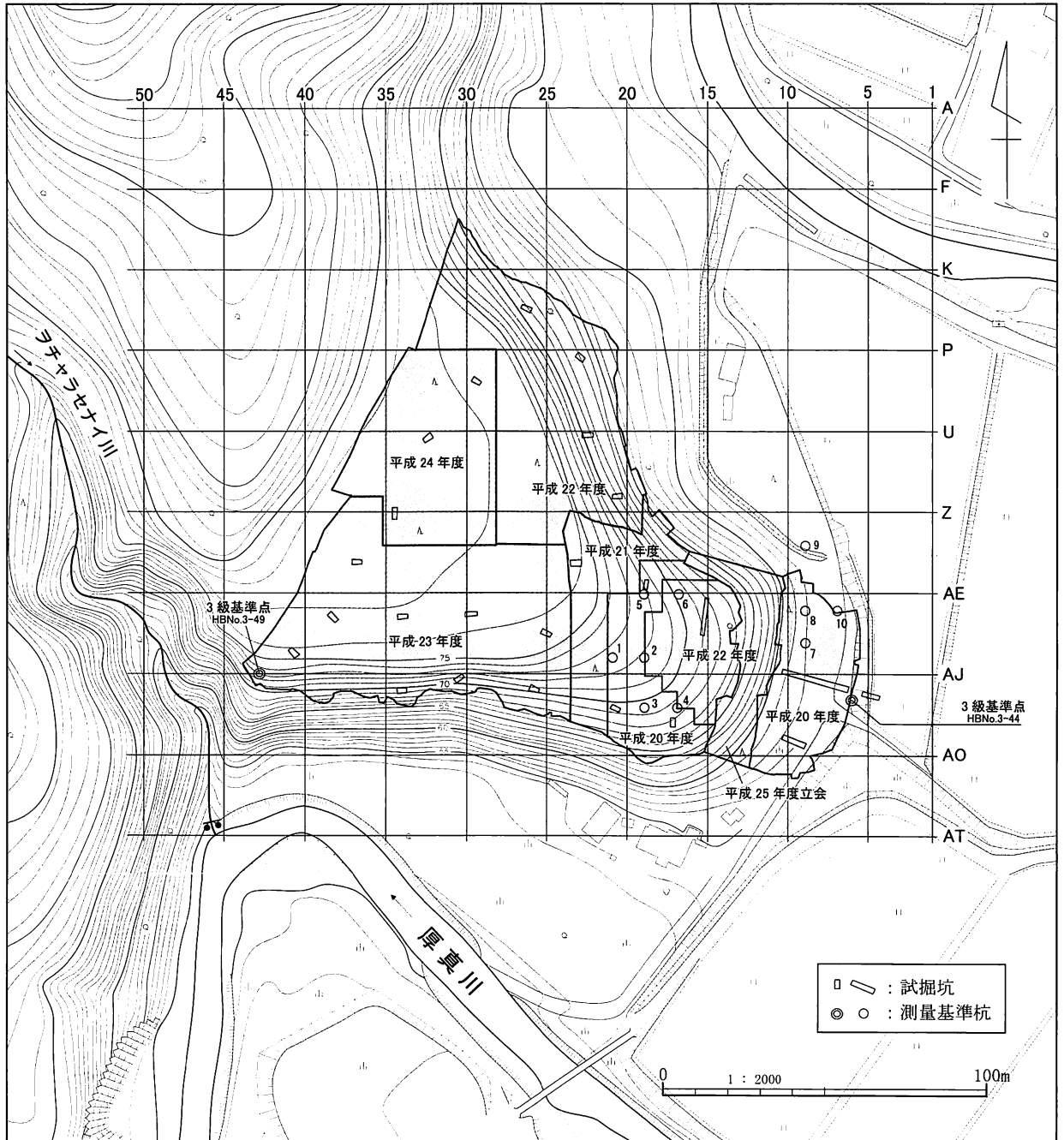
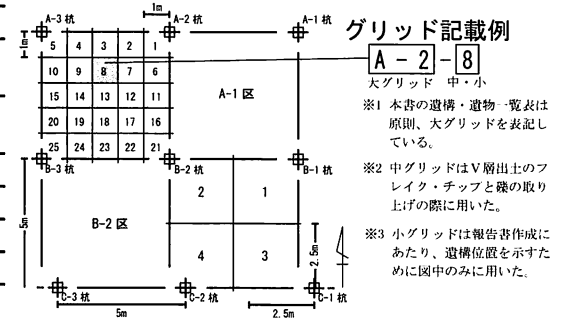


図 I-3 年度別調査範囲及びグリッド網設定図

表 I-3 グリッド設定関係杭数値

杭名	X座標	Y座標	Z座標
3級基準点 H8No.3-44	-136933.196	-20561.721	73.515m
3級基準点 H8No.3-49	-136995.906	-20382.265	57.574m
1(AI-21グリッド)	-136715.000	-20760.000	-
2(AI-19グリッド)	-136715.000	-20750.000	69.861m
9(AB-9グリッド)	-136680.000	-20700.000	-
10(AF-7グリッド)	-136700.000	-20690.000	-

【大・中・小グリッド区分】



第4節 遺物の分類

1. 土器

縄文時代早期から擦文文化期までの土器をローマ数字で群別し、アルファベットとアラビア数字で類別した。

第 I 群土器 縄文時代早期に属する土器。

- A 類 貝殻文・条痕文土器。
- B 類 早期後半の東釧路式土器群。絡条体圧痕文、組紐圧痕文などを施すもの。
- B1 類 東釧路Ⅱ式に相当するもの。
- B2 類 東釧路Ⅲ式、コッタロ式に相当するもの。
- B3 類 中茶路式に相当するもの。
- B4 類 東釧路Ⅳ式に相当するもの。

第 II 群土器 縄文時代前期に属する土器。

- A 類 縄文丸底・尖底土器群。
- A1 類 美沢 3 式、網文式土器に相当するもの。
- A2 類 トビノ式、静内中野式に相当するもの。
- B 類 円筒下層式系土器群。
- B1 類 円筒下層 a 式ないしは b 式に相当するもの。
- B2 類 a 円筒下層 c 式ないしは d 式に相当するもの。所謂フゴッペ貝塚式土器も含める。
- B2 類 b 植苗式ないしは大麻 V 式に相当するもの。便宜的に宮本式の一群である、横走沈線文上に刺突文を施す土器を含める。
- B2 類 c シュブノツナイ式に相当するもの。
- B2 類 d 胎土に蛇紋岩を含む土器。分類基準の詳細については本文中第 IV 章第 10 節で記載する。

第 III 群土器 縄文時代中期に属する土器。

- A 類 中期前半の円筒上層式系土器群。
- A1 類 円筒上層 a 式または b 式に相当するもの。
- A2 類 円筒上層 c 式または d 式、厚真 1 式に相当するもの。

- B 類 中期後半から末葉の土器群。
- B1 類 萩ヶ岡 1・2 式、天神山式に相当するもの。
- B2 類 柏木川式に相当するもの。
- B3 類 a 北筒式に相当するもの。
- B3 類 b 煉瓦台式に相当するもの。

第 IV 群土器 縄文時代後期に属する土器。

- A 類 後期初頭の土器群。
- A1 類 a 古手の余市式土器。円形刺突文の有無に関わらず、貼付帯や地文縄文が多段の羽状構成の土器。
- A1 類 b IV 群 A1 類 a 土器に併存する沈線文系の土器。非在地系。
- A1 類 c 天祐寺式に相当するもの。IV 群 A1 類 a 土器に併存する。非在地系。
- A2 類 新しい段階の余市式。タブコブ式の手。階段状の器表面や斜め下方からの刺突文や縄端圧痕文が施される土器。
- B 類 後期前葉の土器群。
- B1 類 新手のタブコブ式。縦位の棒状貼付帯縄線文または地文縄文のみが施されているもの。
- B2 類 手稲砂山式に相当するもの。
- B3 類 入江式、大津 7 群、白坂 3 式土器。
- C 類 後期中葉の土器群。
- C1 類 ウサクマイ C 式に相当するもの。
- C2 類 手稲式に相当するもの。
- C3 類 鮎澗式に相当するもの。
- D 類 後期後葉の土器群。
- D1 類 堂林式、御殿山式に相当するもの。

第V群 縄文時代晩期に属する土器群。

- A類 晩期前葉の土器群。
A1類 爪形文や刺突文を施すもの。
A2類 大洞B・BC式土器に相当するもの。
B類 晩期中葉の土器群。
B1類 縄線文や円弧文を施すもの。美々3式、マ
マチI・II群に相当するもの。
B2類 大洞C1・C2式土器に相当するもの。
C類 晩期後葉の土器群。
C1類 ママチIII・IV・V群に相当するもの。
C2類 大洞A・A'式土器に相当するもの。

第VI群土器 続縄文文化期に属する土器群。

- A1類 砂沢式・二枚橋式に並存する在地の土器。
a：札幌市H37遺跡 丘珠空港地点相当のもの。
b：いわゆる汐見式相当。縄線文が施され、地

文に帯縄文発達以前の土器。

- A2類 砂沢式・二枚橋式に並存する搬入系土器。
a：砂沢式土器。 b：二枚橋式土器。
B1類 アヨロ2類土器並行の土器。
a：アヨロ2類a相当の土器。
b：アヨロ2類b相当の土器。
B2類 アヨロ3類相当の土器。
C1類 江別太1~3式土器。
C2類 後北B式土器。
C3類 後北C₁式土器。
C4類 後北C₂-D式土器。
D1類 宇津内IIa式土器。
D2類 宇津内IIb式土器。
E1類 北大I式土器。
E2類 北大II式土器。

第VII群土器 擦文文化期に属する土器群。

- A 北大III式相当
B 擦文土器（甕形）
B1：擦文「前期」に相当するもの。
主として胴部上半に横走沈線のみを施す一群。
B1a：軽い段により頸部を形成した無文も
しくは数条の横走沈線を廻らすもの。
B1b：多条の横走沈線を施すものもの。
B2：擦文「中期」に相当するもの。
主として口縁部文様帯が未形成もしくは単
調な刻みのみの一群。
B2a：横走沈線を地文とし、刻文を重ねるもの。
B2b：刻文のみもの。
B2c：無文のもの。
B3：擦文「後期」に相当するもの。
主として口縁部文様帯を形成した一群。
B3a：横走沈線を地文とするもの。
B3b：綾杉文主体のもの。
B3c：斜位、あるいは縦位の沈線で鋸歯状文、「X」
字状文等を施すもの。
B3d：胴部文様帯を3段以上に区画した上でVII B3a
~cの文様要素を施したもの。

- B3e：無文のもの。
B3f：口縁部文様帯に数条の沈線を廻らせたもの。
C 擦文土器（坏形）
C1：台部を有さないもの。
C2：平底の低い台部を有するもの。
C3：平底の高台部を有するもの。
C4：上げ底の高台部を有するもの。
C4a：口縁部に沈線を有するもの。
C4b：体部に刻文を施すもの。
D 擦文土器（鉢形・壺形）
E ロクロ成形土器
E1：甕形
E2：壺形
E3：鉢形
E4：坏形
E4a：軟質で内面黒色処理を施さないもの。
E4b：軟質で内面黒色処理を施すもの。
E4c：硬質で酸化炎焼成のもの。
E4d：硬質で還元炎焼成のもの。

2. 剥片石器

ポイント類

長軸 4 cm を境に石鏃と石槍・石銛とを区分した。

A 「石鏃」

- 1 細身で薄手のもの。
- 2 無茎のもの。
- 3 明瞭な基部をもつもの。
- 4 不明瞭な基部を持つもの。
- 5 片岩製で周縁のみに調整加工を施すもの。
縄文時代に特徴的なもの。

B 「石槍」・「石銛」

- 1 明瞭な基部をもつもの。
 - a 基部端が平ら。 b 基部端が尖る
 - c 基部端部付近につまみのあるもの。
- 2 不明瞭な基部をもつもの。

C 欠損品・未製品

石 錐

- A 剥片の一部に機能部を作出したもの。
- B 柄と機能部の区別が明瞭なもの。
- C 柄と機能部の区別が不明瞭で幅広なもの。
- D 柄と機能部の区別が不明瞭で棒状のもの。
- E 他石器からの転用品と思われるもの。

ナイフ・スクレイパー類

縁部に刃部が作出されたもののうち、素材の 1 辺に対し半分以上の範囲で刃部が形成されているもの。

A 「つまみ付きナイフ」

- 1 素材の周縁にのみ加工を施したもの。

3. 礫石器

石 斧

A 磨製石斧

- B 未製品 1：剥離敲打により完成品に近い大きさまで整形されているもの。
- C 未製品 2：礫皮を残すが、擦り切り・剥離・敲打調整により素材礫形状が不明瞭なもの。
- D 未製品 3：剥離・敲打調整が部分的に施され、

2 素材の片面全体に加工を施したもの。

3 素材の両面全体に加工を施したもの。

B 素材端部に刃部が形成されているもの。

- 1 「ラウンド・スクレイパー」
- 2 「エンド・スクレイパー」

C 素材端部に刃部が形成されていないもの。

- 1 「サイド・スクレイパー」
 - a 原石・転石面無。 b 原石・転石面有。

2 「コンケイブ・スクレイパー」

- a 原石・転石面無。 b 原石・転石面有。

3 「抉入石器」

D 縄文時代に伴う「ナイフ状石器」

E 欠損品

- a 原石・転石面無。 b 原石・転石面有。

両面調整石器

RF・UF

縁部に刃部が作出されたもののうち、素材の 1 辺に対し半分未満の連続的剥離のあるものを RF、使用によるとと思われる微細剥離のあるものを UF として扱っている。

石 核

火打石 メノウ、チャート、石英（水晶）を石材とし縁部等に微細剥離が観察できるもの。

素材礫の形状を大きく残すもの。

たたき石

敲打痕が面状に形成されるもので、素材礫の形状で細分類を行った。

I 平面形が縦長のもの。

A 扁平のもの。

- 1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。
- 2 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕を有

するもの。

3 1・2を並存するもの。

B 棒状または角柱状のもの。

1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。

2 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕を有するもの。

3 1・2が並存するもの。

II 平面形が方形～不整形で幅広のもの。

A 扁平のもの。

1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。

2 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕を有するもの。

3 1・2を並存するもの。

B 棒状または角柱状のもの

1 素材礫の平坦面に敲打痕を有するもの。

2 素材礫の側縁稜あるいは端部に敲打痕を有するもの。

3 1・2が並存するもの。

III 平面形が円～楕円形のもの。

A 扁平のもの。

B 球形または棒状のもの。

IV 破片のため上記に分類不可のもの。

V すり石と複合するもの。

すり石

A 断面三角形の礫の稜に擦り面のあるもの。

B 断面楕円形の礫の側縁に擦り面のあるもの。

C 扁平礫の側縁に擦り面があるもの。

D 北海道式石冠

4. 鉄器

鉄器の内、刀剣類については以下の基準に基づき分類を行った。

刀子 目釘穴のないもの

短刀 刀身長 20cm 未満のもの

刀 刀身長 40cm 以上のもの

小刀 刀身長 20cm 以上 40cm 未満のもの

(天方)

E その他

F たたき併用

砥石

素材礫の形状が変形する研磨面を有するもの。

滑沢面のある礫

素材礫の形状を変えず、平滑な面を有するもの。

の。線条痕はほとんど観察できない。(III層のみ)

線条痕のある礫

肉眼観察において、明瞭な線条痕があるもの。

石皿・台石

便宜的に素材礫の重量が 900 g 以上で、素材礫の平坦面に擦痕・敲打痕があるもの。

滑沢面と敲打痕のある大型礫

I 表裏面にそれぞれが単独で認められるもの。

II 一面に両方の痕跡が認められるもの。

加工痕のある礫

加工目的の剥離があるもので、剥離加圧(打点)部分に潰打面が形成されず、側面観が稜線

自然礫

加工痕や明瞭な使用痕が認められないもの。

I 平面形が縦長のもの。

A : 扁平のもの。

B : 棒状または角柱状のもの。

II 平面形が方形～不整形で幅広のもの。

A : 扁平のもの。

B : 棒状または角柱状のもの。

III 平面形が円～楕円形のもの。

A : 扁平のもの。

B : 球形または棒状のもの。

5. 土器一覧表について

縄文時代土器一覧表

縄文時代の土器一覧表の属性表記載において、下記の認識のもと行っている。〔部位〕・〔器形〕・〔胎土〕については、相対比較によるもので観察者の主観による。

〔個体名称〕同一個体にアラビア数字、破片資料にアルファベットを付番した。

〔器形等・文様〕各部位毎の形態を示した。「口縁」は口縁部器表面、「底部側面」は底部器表面、「変換点」は底側面と底面の間をさす。

〔文様〕以下の認識で記載した。

記号：＋は文様要素の重複、・は文様要素の複合あるいは充填構成。

縄の圧痕文：貼付帯や口唇等の面に対し、直交あるいは斜位に縄を圧痕するもの。

刻み：貼付帯や口唇等の面に対し、直交あるいは斜位に工具で刻みを付けたもの。

縄線文（同一条異原体）：Ⅱ群 B2 類 b で見られるもので、1 条の縄線文中に異なる原体で押捺しているもの。2 段の原体の場合、接する部分では縄の粒がハの字状になる。

押引文：器面に対し施文工具が水平に近い方向から押し付けられ、水平方向に連続して動く。

突引文：器面に対し施文工具が斜め方向から突き刺され、水平方向に連続して動く。

隆帯 1：Ⅱ群 B2 類 a で頸部に横環する隆帯 1 条で口縁部文様帯を区画するもの。

隆帯 2：隆帯 1 のもので、文様帯内にも隆帯が廻るもの。

2 段異原体羽状縄文：撚りの異なる 2 段の原体による羽状縄文。

重複縄文：撚りの異なる原体を新旧重複して施文するもの。 (天方)

第 5 節 遺跡の位置

1. 厚真町の概要

A 地理的環境

厚真町は、石狩低地帯南部の東縁、北海道胆振総合振興局の東部に位置し、夕張山地南部から太平洋に注ぐ二級河川厚真川水系に水田地帯が広がる、人口 4,739 人（平成 26 年 1 月末日現在）を有する農業の町である。町域総面積は 404.56 k m² で、流路 52.3 km の二級河川厚真川流域に広がり南北 32.5 km、東西 17.3 km と細長く、南部は約 6.5 km にわたって太平洋に面し、勇払平野の東端に位置している。北海道の空の玄関口である新千歳空港から車で 35 分、海上物流の拠点である苫小牧港からは 40 分と利便性に恵まれた位置でもある。町域を縦貫する厚真川は源流部から河口までの 1 河川流域で厚真町域のみを流下し、全国において 1 河川流域を有する自治体は数少ない。行政区域の北部は夕張市や由仁町と接し、夕張山地南部の標高 200～600 m の山地が続き、総面積の約 70% を山林が占める。東は夕張山地から続く低い山地を挟んでむかわ町と接し、北西は標高 100 m 前後の山地性丘陵を挟んで安平町、西は厚真町域を含む苫小牧東部工業地帯（以下、苫東地区）内で苫小牧市と接している。厚真の語源は 3 説ほどあるが、最も有力な説として「アットマム」(at-to-mam「向こうの湿地帯」) で、南部に広がる湿地帯に付けられたものが転訛したという(厚真村 1956)。

町内は、大きく 4 つの地区に分かれ、厚真川沿いに下流域の浜厚真・上厚真地区、中流域の厚真市街地周辺、中流から上流域の幌内地区で、むかわ町と接し、入鹿別川流域の鹿沼地区がある。こ

ここでは厚真川流域を中心に概略を述べる。

南部は砂浜が続き、明治期以前より地引網での鰯漁が盛んであったが、現在では、苫小牧沿岸にかけてホッキ貝の全国一の漁場となっている。かつては標高 10m 前後の砂丘列が発達し、背後には勇払原野の湿地帯が広がっていたが、現在は苫東地区の一部で、苫小牧東港や道内最大の火力発電所、石油備蓄タンク群等の工業用地となっている。また国道や高規格道路、鉄道があり、札幌圏から日高方面への主要幹線路ともなっている。地形的には、苫東地区の静川・源武台地と同じ様相を示し、樹枝状に開折された標高 10~20m 前後の支笏火山・樽前山の火山灰で構成される低平な台地と湿地、湖沼群が見られる。特に厚真川左岸から入鹿別川右岸にかけての厚和地区は静川台地と全く同じ地形・地質様相を呈している(仮称厚和台地・鯉沼台地)。中部には厚真町の中心市街があり、鶴川、平取・穂別、早来、浜厚真方面への道道交差部に官公署や住宅地が形成されている。かつては、町内の石油資源や林産資源、農産物の集散地として発展していた。地形的には厚真川本流と比較的大きな支流である知決辺川、ウクル川などの合流点に形成されたの平野部に位置し、夕張山地系と馬追山地南端部の山地性丘陵に挟まれた地域となる。中部以北では、厚真川は頗美宇川との合流点付近において流路方向を変え、左岸には河岸段丘が発達する。北部の幌内地区は、厚真川流域沿いの沖積地の最奥部で、本流とシュルク川、幌内川の 3 河川の合流点でもある。この地区は上流域の山間部より産出される豊富な林産資源の集積地として発展し、昭和 5 年から 24 年まで早来駅とを結ぶガソリン機関車軌道が敷設されていた。これより上流域は、新第三紀の堆積岩を基盤とする山地が続く(松野・石田 1960)。標高 400m 以上の頂部は少ないが、小河川の浸食により比較的急峻な山稜を呈している。厚真川は夕張市、由仁町との 1 市 2 町の境界線付近、標高 500m 付近の夕張山地南域に源流部がある。

B 歴史的環境

(1) 埋蔵文化財包蔵地の概要

厚真町内には平成 24 年 3 月 1 日現在で 136 ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、後期旧石器時代から近世アイヌ文化期にいたるまで間断なく人間が住んでいた(図 I-4、表 I-4~6)。遺跡の分布傾向として、開発行為の多寡に左右されるが、南部の苫東地区や厚真川下流域左岸から入鹿別川流域右岸にかけての仮称厚和台地や仮称鯉沼台地、厚真川中流域の支流河川沿い、北部の高丘地区および幌内地区にやや集中する傾向がある。遺跡の立地は、南部において湿地と隣接する台地縁辺部や湧水地付近、中部では厚真川沿いや小河川との合流点付近の河岸段丘縁辺部に多い。北部の山間部では、頗美宇(はびう)川流域の高丘地区や厚幌ダム水没地域内に多く分布する。これらは安平町安平地区や夕張市滝之上地区、むかわ町穂別・豊田地区に抜ける山越えのルート上の遺跡と考えられる。

時期的には、町内最古の遺跡として上幌内モイ遺跡で札滑型細石刃核を伴う石器集中が 1 ヶ所検出されており、AMS 法炭素年代測定の結果、補正年代 3 点の平均で 14,591.69±60 yrB. P. が得られている(厚真町教育委員会 2006a)。縄文時代の最も古いものでは豊沢 4 遺跡の試掘調査で早期前半の物見台系貝殻文土器片 1 点が出土し、時期が下って浜厚真 3 遺跡で東釧路Ⅱ式土器がややまとまって出土している(北海道埋蔵文化財センター 2003)。遺跡数の増加や規模の拡大は縄文時代早期後葉の中茶路式期と考えられ、前期前葉の静内中野式期には個々の遺跡の内容も充実し、盛土遺構を伴い多量の被熱礫や哺乳網の焼骨片が出土する遺跡が厚真町南部から北部に至るまで多数確認され

ている。これ以降、漸移的に遺跡数が増加し、中期末葉から後期初頭の北筒・余市式期の遺跡数でピークを迎える。縄文時代後期中葉から後葉にかけて遺跡数が激減し、晩期前葉以降、続縄文文化期に再び増加し、擦文文化期前期は遺跡数が再び減少する傾向にある。この様な各時期における遺跡数の偏りは苫小牧市の傾向と概ね一致している。苫小牧市との差異として擦文文化期中期から中世アイヌ文化期にかけてはやや遺跡数が増加する傾向がある。

(2) 町内における埋蔵文化財調査の概要

町内における埋蔵文化財の調査・研究は、大きく 3 期に別けることが可能である。

a. 厚真村郷土史研究会・埋蔵文化財の地域自主的研究（昭和 20 年代後半から 40 年代中頃）

最初の記録として、大正 5 年、現在の朝日遺跡から出土した縄文土器を、教材として学校に保管する許可書が発行されたことである（厚真村郷土研究会 1956）。遺物の多くは縄文晩期初頭の土器片と思われ、数点の土偶片も出土している（厚真村郷土研究会 1956、亀井 1956、古井 1961、北海道大学附属図書館 HP 北方資料データベース）。その後、元厚真村長 亀井喜久太郎氏の熱心な働きかけで昭和 27 年に八幡一郎氏、30 年に大場利夫氏等が来村し、町内の遺跡・遺物を実見している。また、亀井氏は昭和 28 年に厚真村郷土研究会を発足させ、遺物の収集や会報『郷土研究』で遺物の紹介を行い、昭和 31 年には『厚真村古代史』を刊行している（厚真村郷土研究会 1956）。現在、埋蔵文化財保護の基礎資料である埋蔵文化財包蔵地カードの「調査・文献」には「昭和 31 年 7 月 厚真村郷土研究会『厚真村古代史』」や「昭和 47 年 12 月 厚真町郷土史研究会 踏査」の記載で始まるものが 32 遺跡もあり、厚真町の文化財保護・研究に大きな功績を残し、礎となっている。町内で初めての組織的な発掘調査は、昭和 37 年に厚真村郷土研究会によって朝日遺跡と共和遺跡で行われた。調査に関する詳細は不明だが、縄文時代晩期初頭の土器片を中心とした出土遺物がコンテナにして 5 箱分、厚真町教育委員会に保管されている。

b. 苫小牧市埋蔵文化財調査センター・大規模な行政発掘「苫東調査」（昭和 48 年から昭和 54 年）

昭和 48 年から苫小牧市埋蔵文化財調査センターによる苫東地区の試掘・発掘調査が開始され、昭和 59 年までの 12 年間で厚真町域にかかるもので新規登載 14 遺跡、調査着手 11 遺跡があり、縄文時代早期～擦文文化期までの資料が得られている。調査成果として、昭和 51 年調査の厚真 1 遺跡（苫小牧市教育委員会 1986）では、この地域で初めての T ピットが確認され、縄文時代中期中葉の「厚真 1 式土器」（赤石 1999）の標識遺跡でもある。厚真 7 遺跡では縄文時代中期末葉と後期前葉の住居跡 8 軒の検出と、石狩川中流域で数多く出土する「丸のみ形石斧」も出土している（苫小牧市教育委員会 1987）。また、共和遺跡では苫東地区内で唯一の擦文文化期前期の竪穴式住居跡 2 軒が調査されている（苫小牧市教育委員会 1987）。これらの成果は苫小牧市教育委員会により『苫小牧東部工業地帯の遺跡群』として報告書が刊行されている（苫小牧市教育委員会 1986・1987・1990・1992）。整理・報告後の出土遺物等は平成 13 年度に町教委へ返却・保管されている。

なお、厚真町域における町教委による「埋蔵文化財包蔵地資料整備の一般分布調査」は、昭和 54 年 9 月から行われ、52 遺跡の包蔵地カードが作成されている。

c. 開発に伴う調査の増加と厚幌ダム・厚幌導水路事業等の開始（平成 10 年以降）

近年は火山灰採取などの開発に伴う試掘調査や工事立会調査が増加し、町教委による豊川 1 遺跡（厚真町教育委員会 2001a）、鯉沼 2 遺跡（厚真町教育委員会 2001b）、鯉沼 3 遺跡（厚真町教育委員会 2005・2006b・2008）などの調査が行われた。高規格道路日高自動車道の建設に伴う（財）北海道埋蔵文

化財センター（以下「道埋文センター」）による浜厚真3遺跡の調査では、187基のTピットが検出されている（北海道埋蔵文化財センター2003）。これらの調査結果では、縄文時代中期後葉以前にTピットが数多く構築されていることが分かり、周囲には比較的規模の大きい集落跡の存在が想定できる。

平成12年には北海道室蘭土木現業所より厚幌ダム建設事業に係る埋蔵文化財保護の事前協議書が提出され所在踏査や試掘調査が開始された。発掘調査は平成14年から町教委により継続的に行われ、厚幌1遺跡（厚真町教育委員会 2004）、上幌内モイ遺跡（厚真町教育委員会 2006a・2007・2009）、オニキシベ2遺跡（厚真町教育委員会 2011）、ヲチャラセナイチャシ跡・ヲチャラセナイ遺跡（厚真町教育委員会 2013a）、オニキシベ5遺跡（厚真町教育委員会 2013b）、オニキシベ4遺跡（印刷中）、オニキシベ6遺跡（印刷中）、オニキシベ1遺跡（道埋文センター整理中）が調査されている。平成24年度からは道埋文センターが参入し、平成25年度までの12年間の調査面積は約111,779㎡に及んでいる。これらの調査成果は、厚真川上流域において当初の予想を上回る遺構・遺物が確認され、道内に留まらず道外からも注目を浴びている。

平成15年には総延長24.5kmに及ぶ厚幌導水路建設事業の事前協議書が提出され、所在確認踏査や試掘調査が行われている。試掘調査等は未了の箇所があるものの、現在11遺跡での要発掘・工事立会調査地点が確認され、平成19年度には厚真川中流域富里地区のニタップナイ遺跡、20年度は厚幌1遺跡と幌内7遺跡（厚真町教育委員会 2010）、21年度は幌内5遺跡と富里2遺跡の発掘調査を行っている。平成25年度からは道埋文センターによって厚幌1遺跡の調査が行われている。

また、道道上幌内早来停車場改良工事でも平成21・22年度において厚真川中流域の吉野地区ライカルマイ遺跡（2013c）、平成24年度に朝日遺跡（道埋文センター整理中）の発掘調査が実施されている。今後も厚真川河川改修や町水道整備事業などもあり、周知の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、これらの大規模開発に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成29年度まで継続される予定である。

(3) 歴史時代

厚真周辺の記録として、1643（寛永20）年に編纂された北海道最古の文書とされる『新羅之記録』（松前1643）によると、「松前以東は賑川西は與依地迄人間往古する事、右大将頼朝卿進発して奥州の泰衡を追討し御ひし節、糠部津軽より人多く此国に逃げ渡って居住す。」とあり12世紀末葉には東北北部の和人が厚真周辺域まで進出していたことが伺われる。

厚真町とほぼ特定できる最初の記述は、1692（元禄5）年に書かれた『蝦夷記』（野澤1692）にシャクシャインの戦い（1669・寛文9年）に関連して「於多久具印住處阿津摩ニテ討取ル」とある。関連するものとして厚真町中部に位置する桜丘チャシ跡が想定されていたが、平成21年度のトレンチ調査により樽前bテフラより1～2cm程度黒色土を被覆することが判明し、より古い中世アイヌ文化期のチャシ跡であることが判明している。この時期の遺跡は厚真川上中流域の厚幌ダムや厚幌導水路建設関連の発掘調査で多数の遺構・遺物が検出されており、今後も増加するものと思われる。

これ以降の記録として、1700年の『松前家臣支配所持名前帳』には鳥屋支配所として「志古津ノ阿津満」と記され、2カ所の鷹打場が設けられている。シャクシャインの戦いに係わる『津軽一統志』（相坂兵右衛門1731）の調査報告中で、「あつまへつ〜川有、戸田義兵衛 商場」と記されているが、産物や周辺のコタンについての記述は見られない。1739年頃に成立した『蝦夷商賣聞書』には義経伝説を交えた記述の中に「右之山奥ニアツマト申所ニ城跡ト申而松柏之古木沢山ニ繁リテ

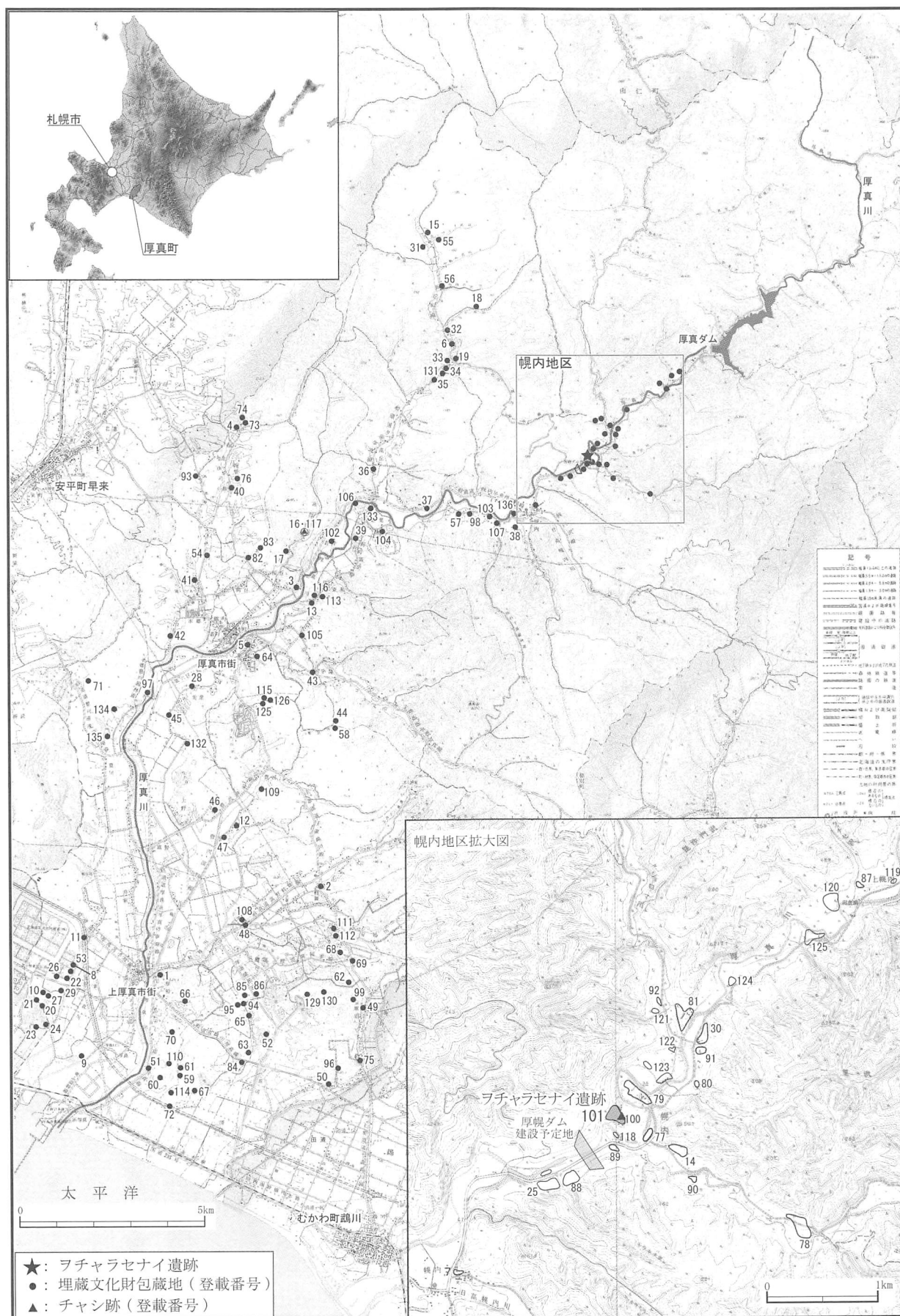


表 I-4 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(1)

登録番号	種別	名称	時代	文献等
1	遺物包含地	上厚真遺跡	縄文中～後期・統縄文・擦文期	1
2	遺物包含地	軽舞遺跡	縄文中期・統縄文期	1
3	遺物包含地	朝日遺跡(文献1:振老)	縄文後～晩期・統縄文・擦文期	1,2,31
4	遺物包含地	幌里1遺跡(文献1:仁達幌)	縄文中・晩期・統縄文期	1
5	遺物包含地	新町遺跡(文献1:上振内)	縄文中期・統縄文・擦文・アイヌ期	1,4,6
6	遺物包含地	高丘1遺跡(文献1:頗美宇)	縄文中期・統縄文期	1
7	遺物包含地	幌内1遺跡	縄文中・統縄文期	1
8	集落跡	共和遺跡(文献1:西周文)	縄文晩期・擦文期	1,8
9	遺物包含地	浜厚真遺跡	縄文?	
10	溝穴遺構	厚真10遺跡	縄文中・晩期	3,8
11	遺物包含地	厚真11遺跡	縄文晩期	
12	遺物包含地	豊沢1遺跡(文献1:当麻内)	統縄文期	1
13	遺物包含地	東和遺跡(文献1:東老軽舞)	縄文・統縄文期	1
14	集落跡	オニキシベ1遺跡(文献1:オニキシベ)	縄文中・後期	1
15	遺物包含地	高丘3遺跡	縄文中期	
16	チャシ跡	桜丘チャシ跡	中世アイヌ期	4,6
17	遺物包含地	桜丘1遺跡	縄文晩期	
18	遺物包含地	高丘2遺跡	縄文?	
19	集落跡	高丘10遺跡	縄文?	
20	集落跡	厚真1遺跡	縄文中期	8,13
21	溝穴遺構	厚真2遺跡	縄文中期?	8
22	溝穴遺構	厚真3遺跡	縄文早・中～晩期・統縄文期	10
23	集落跡	厚真4遺跡	縄文	
24	遺物包含地	厚真5遺跡	縄文前～晩期・統縄文・擦文期	
25	集落跡	厚幌1遺跡	縄文早～晩期・統縄文・擦文・アイヌ期	18,30
26	集落跡	厚真7遺跡	縄文早・中～晩期・統縄文・擦文期	9
27	集落跡	厚真8遺跡	縄文中～晩期	8
28	遺物包含地	美里2遺跡	縄文早・中期	
29	墳墓	厚真12遺跡	縄文中・晩期・擦文	10
30	遺物包含地	上幌内1遺跡(旧幌内3遺跡)	縄文中期	
31	遺物包含地	高丘4遺跡	縄文	
32	遺物包含地	高丘5遺跡	縄文?	
33	遺物包含地	高丘6遺跡	縄文?	
34	遺物包含地	高丘7遺跡	縄文?	
35	遺物包含地	高丘8遺跡	縄文?	
36	遺物包含地	高丘9遺跡	統縄文期	
37	遺物包含地	富里1遺跡(文献1:檜山)	縄文中～晩期	1
38	遺物包含地	幌内4遺跡	縄文中期?	
39	遺物包含地	チコマナイ遺跡	縄文?	
40	遺物包含地	幌里2遺跡	縄文中期	
41	遺物包含地	本郷1遺跡	縄文中・晩期	
42	遺物包含地	本郷2遺跡	縄文後期	
43	遺物包含地	宇隆1遺跡	縄文・中世アイヌ期	16
44	遺物包含地	宇隆2遺跡	統縄文期	
45	遺物包含地	美里1遺跡(文献1:振内)	縄文中期	1
46	遺物包含地	豊沢2遺跡	擦文期	
47	遺物包含地	豊沢3遺跡	統縄文期	
48	遺物包含地	鯉沼1遺跡(文献1:上周文?)	縄文	1
49	遺物包含地	鹿沼2遺跡(文献5:鹿沼B)	縄文中期	5
50	遺物包含地	鹿沼1遺跡(文献5:鹿沼A)	縄文	5
51	遺物包含地	厚和1遺跡(文献5:周文)	縄文中期・アイヌ期	1,4,6
52	遺物包含地	鹿沼3遺跡	縄文中・晩期	
53	溝穴遺構	厚真13遺跡	縄文早～中・晩期・統縄文・擦文期	10
54	遺物包含地	本郷3遺跡	縄文?	
55	遺物包含地	高丘11遺跡	縄文晩期	
56	遺物包含地	高丘12遺跡	縄文	
57	墳墓	幌内5遺跡	縄文前・後期・アイヌ期	32
58	溝穴遺構	豊沢4遺跡	縄文早・中～後期	
59	遺物包含地	厚和2遺跡	縄文中期	
60	遺物包含地	厚和3遺跡	縄文後期	

表I-5 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(2)

登録番号	種別	名称	時代	文献等
61	遺物包含地	厚和4遺跡	縄文中期	
62	遺物包含地	鹿沼4遺跡	縄文	
63	遺物包含地	厚和5遺跡	縄文	
64	遺物包含地	新町2遺跡	縄文中期	
65	遺物包含地	鹿沼5遺跡	縄文後期	
66	遺物包含地	厚和6遺跡	縄文前期	
67	遺物包含地	浜厚真2遺跡	縄文早期	
68	溝穴遺構	鯉沼2遺跡	縄文中期	14
69	遺物包含地	豊丘遺跡	縄文中期	
70	集落跡	厚和7遺跡	縄文後期	
71	集落跡	豊川1遺跡	縄文前・後～晩期	15
72	遺物包含地	浜厚真3遺跡	縄文早・後期	17
73	遺物包含地	ニタツポロ沢遺跡	縄文後・晩期	
74	遺物包含地	幌里神社遺跡	縄文早・後期	
75	溝穴遺構	入鹿別沼遺跡	縄文中期?	
76	溝穴遺構	幌里3遺跡	縄文	
77	遺物包含地	オニキシベ2遺跡	縄文中～後期・続縄文・擦文・中世アイヌ期	
78	遺物包含地	オニキシベ3遺跡	縄文後期	
79	集落跡・墳墓	上幌内モイ遺跡	旧石器・縄文早・中～後期・続縄文・擦文・中近世アイヌ	19,21,22,24,26,27,28
80	遺物包含地	一里沢遺跡	縄文前～中期・アイヌ期	4,5,21
81	集落跡	ショロマ1遺跡	縄文前・後期	
82	遺物包含地	東ニタツポロ1遺跡	縄文中・晩期	
83	遺物包含地	東ニタツポロ2遺跡	縄文中・晩期	
84	遺物包含地	浜厚真4遺跡	縄文中期	
85	溝穴遺構	鯉沼3遺跡	縄文前～後期	20,23,25
86	溝穴遺構	鯉沼4遺跡	縄文後期	
87	遺物包含地	イクバンドユクチセ遺跡	縄文後期	
88	遺物包含地	厚幌2遺跡	縄文前期	
89	遺物包含地	オニキシベ4遺跡	縄文	
90	遺物包含地	オニキシベ5遺跡	縄文中期～後期	
91	溝穴遺構	上幌内2遺跡	縄文・アイヌ期	
92	遺物包含地	ショロマ2遺跡	縄文中期	
93	溝穴遺構	幌里4遺跡	縄文	
94	集落跡	厚和8遺跡	縄文中～後期	
95	遺物包含地	厚和9遺跡	縄文中期	
96	遺物包含地	鹿沼6遺跡	縄文	
97	遺物包含地	豊川2遺跡	続縄文・擦文	
98	遺物包含地	幌内6遺跡	縄文後期	
99	溝穴遺構	鹿沼7遺跡	縄文早～晩期	
100	チャシ跡	フチャラセナイチャシ跡	中世アイヌ期	
101	遺物包含地	フチャラセナイ遺跡	縄文早～後期・続縄文・擦文・中世アイヌ期	
102	遺物包含地	吉野1遺跡	縄文中・晩期	
103	遺物包含地	幌内7遺跡	縄文晩期・擦文	
104	集落跡	ニタツポロナイ遺跡	縄文前～後期・続縄文・擦文・近世アイヌ期	29,32
105	遺物包含地	宇隆3遺跡	縄文中期	
106	遺物包蔵地	富里2遺跡	縄文後・晩期・続縄文・擦文・中近世アイヌ期	32
107	遺物包蔵地	オコッコ1遺跡	縄文前・中・後期・擦文	
108	遺物包含地	軽舞2遺跡	縄文前期・続縄文	
109	遺物包蔵地	豊沢5遺跡	縄文後期	
110	溝穴遺構	厚和10遺跡	縄文早・中・後期	
111	遺物包含地	豊丘2遺跡	縄文早期	
112	遺物包蔵地	豊丘3遺跡	縄文中期	
113	遺物包蔵地	東和2遺跡	縄文晩期	
114	遺物包含地	浜厚真5遺跡	縄文後期	
115	遺物包蔵地	豊沢6遺跡	縄文早・中・後期	
116	遺物包蔵地	東和3遺跡	縄文早期	
117	遺物包含地	桜丘2遺跡	縄文中・後期	
118	遺物包含地	オニキシベ6遺跡	縄文後期	
119	溝穴遺構	イクバンドユクチセ2遺跡	縄文後期	

表 I-6 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(3)

登録番号	種別	名称	時代	文献等
120	遺物包含地	イクバンドユクチセ3遺跡	縄文中・後期・続縄文期	
121	遺物包含地	シヨロマ3遺跡	続縄文期	
122	遺物包含地	シヨロマ4遺跡	縄文	
123	遺物包含地	上幌内3遺跡	縄文中・後期	
124	遺物包含地	上幌内4遺跡	縄文中期	
125	溝穴遺構	上幌内5遺跡	縄文	
126	遺物包含地	豊沢7遺跡	縄文中・後期	
127	遺物包含地	豊沢8遺跡	縄文後期	
128	遺物包含地	ワイカルマイ遺跡	続縄文・擦文・中世アイヌ期・明治期	
129	遺物包含地	長沼1遺跡	縄文早期	
130	溝穴遺構	長沼2遺跡	縄文	
131	遺物包含地	高丘13遺跡	縄文前期・擦文期	
132	遺物包含地	上野1遺跡	縄文中期	
133	遺物包含地	富里3遺跡	縄文中・晩期	
134	遺物包含地	豊川3遺跡	縄文晩期	
135	遺物包含地	三ヶ月沼遺跡	縄文晩期	
136	遺物包含地	幌内8遺跡	縄文前・中期	

関連文献

1: 厚真村郷土研究会 1956『厚真村古代史』 2: 亀井喜久太郎 1957「厚真出土の土偶」『先史時代3』 3: 苫小牧市教育委員会 1974『苫小牧東部工業地帯内埋蔵文化財分布調査報告書』 4: 亀井喜久太郎・池田実 1976『厚真の旧地名を尋ねて』 5: 鶴川町教育委員会 1977『鶴川町遺跡分布報告』 6: 亀井喜久太郎・池田実 1978『続厚真の旧地名を尋ねて』 7: 松浦武四郎(高倉新一郎校訂) 1985『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』 8: 苫小牧市教育委員会 1986『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』 9: 苫小牧市教育委員会 1987『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』 10: 苫小牧市教育委員会 1990『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』 11: 苫小牧市教育委員会 1992『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』 12: 苫小牧市教育委員会 1995『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅴ』 13: 赤石慎三 1999「苫小牧地方の円筒上層式について」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報1』 14: 厚真町教育委員会 2001『鯉沼2遺跡』 15: 厚真町教育委員会 2001『豊川1遺跡』 16: 鈴木信 2001「IV-4 北海道の中世陶磁器」『千歳市ユカンボシC15遺跡(4)』(財)北海道埋蔵文化財センター159 17: (財)北海道埋蔵文化財センター 2003『厚真町浜厚真3遺跡』 18: 厚真町教育委員会 2004『厚幌1遺跡』 19: 厚真町教育委員会 2005『上幌内モイ遺跡発掘調査概要報告書』 20: 厚真町教育委員会 2005『鯉沼3遺跡』 21: 葦島栄紀 2005「松浦武四郎の旅程からみた胆振東部・日高西部の古交通路」『前近代アイヌ民族における交通路の研究(胆振・日高Ⅰ)』 22: 厚真町教育委員会 2006『上幌内モイ遺跡(1)』 23: 厚真町教育委員会 2006『鯉沼3遺跡(2)』 24: 厚真町教育委員会 2007『上幌内モイ遺跡(2)』 25: 厚真町教育委員会 2008『鯉沼3遺跡(3)』 26: 出徳雅実他 2008『論集忍路子Ⅱ』 27: 関根達人 2008「平泉文化と北方交易2-擦文期の銅鏡をめぐって-」『平泉文化研究年報8』 28: 厚真町教育委員会 2009『上幌内モイ遺跡』発掘調査報告書(3) 29: 厚真町教育委員会 2009『ニタツナイ遺跡(1)』 30: 厚真町教育委員会 2010a『厚幌1遺跡(2)・幌内7遺跡(1)』 31: 北海道大学附属図書館HP北方資料データベース 32: 厚真町教育委員会 2010b『幌内5遺跡(1)・富里2遺跡・ニタツナイ遺跡(2)』 33: 厚真町教育委員会2011『オニキシベ2遺跡』 34: 苫小牧民報社 2011.3.3 新聞記事

アリ〜」や1785年の「三国通覧図説蝦夷国全図」に「アヅマ」と記載があり、注記に「鬼ヒン処」と記されている(林子平 1785)。また、寛政から文化年間(18世紀末~19世紀初)の『東蝦夷地道中記』(1791)や『蝦夷記行』(谷元旦 1799)、『拾遺北日本地図全図蝦夷地出産交通略図』などの紀行文や古地図に僅かな記述にすぎず、1800年に八王子千人同心等、数名の和人が浜厚真に移り住むが定住することはない。近世アツマ場所や明治期の産物として干鮭や椎茸、シナ縄、鹿皮が挙げられているが、詳細な記述はなく、以降の紀行文や測量日誌にも交通路であった勇払と鶴川間の厚真川河口周辺の簡単な記述に留まっている。本町の和人定住者としては、明治3(1870)年に新潟県人の青木与八が厚真川河口に渡船場を開業したことが始めとされている(厚真町 1956)。

内陸部までの詳述は、松浦武四郎による『戊午安都麻日誌』(松浦・吉田 1962、松浦・秋葉他 1985)で、1857(安政5)年6月に苫小牧市勇払から厚真川河口を経てトンニカ(現富里)にて2泊している。蝦夷地探検の6回目で、町内には6カ所のコタンが記録されている。この中で比較的規模の大きいコタンでは、粟、稗、隠元、蕪などの畑作が盛んに行われているが、直前に襲った厚真川の洪水によって、畑地のほとんどが流出したことも記され、古くから氾濫の多い河川であった

ことが伺える。宿泊したトンニカコタンのイカシユ（乙名板蔵）の家中について「西同所の土人等とは大に違ひ、凡行器の三十も有、耳盥の七ツ八ツ、筐の式ツ計、蝦夷太刀の二十五六振も懸、また此余短刀の七八本も有るよし語りけるなり。」（松浦・秋葉他 1985）とあり漆器や刀剣類の宝物が多く、その裕福さに驚いている。この他、猟犬としての北海道犬厚真系の活躍についても記述している（松浦・吉田 1962）。上流部に関しては聞き取りによる記述で、3 穴の吊耳鉄鍋の残置伝承があるカニシユウ（現幌内・一里沢遺跡）も記述されている。苫小牧駒澤大学 葦島栄紀氏は、これらの松浦武四郎の記録から古交通路について論じており、トンニカコタンの記述や上流の上幌内モイ遺跡の搬入系遺物の出土量から鶴川水系や夕張水系へのルートが存在についても述べている（葦島 2005）。

これらの記録以前のアイヌ文化期については、厚幌ダム建設に係わる発掘調査で確認された厚幌 1 遺跡（厚真町教育委員会 2004）、上幌内モイ遺跡（厚真町教育委員会 2007a・2009a）、オニキシベ 2 遺跡の他、試掘調査でも上幌内 2 遺跡、一里沢遺跡がある。厚幌導水路建設事業関連の発掘調査で発見されたニタップナイ遺跡（厚真町教育委員会 2009b）や幌内 7 遺跡（厚真町教育委員会 2010a）、富里 2 遺跡（厚真町教育委員会 2010b）がある。その他、試掘調査で層位的確認がされた新町遺跡のほか、厚和 1 遺跡、幌内 5 遺跡では近世アイヌ墓が単独で発見されている。

明治維新後、廃藩置県までは高知藩所管の時代があり、1873(明治 6)年以降に開拓使苫小牧出張所や勇払郡役所の所管となる。現在の厚真町が行政単位として 1897(明治 30)年 4 月 1 日に苫小牧外 6 ヶ村から分離独立し、厚真村戸長役場が現桜丘地区の専厚寺境内に設置されたことによる。

内陸部の和人開拓は明治 20 年代からで、ほぼ同時期に手掘りによる石油掘削も始めら、明治 21 年には開拓使から農事指導員が派遣され西老軽舞（現吉野地区）へ集住させられたアイヌ民族への勸農政策も実施されている。1892(明治 25)年には鉄道室蘭線が開通し、近隣である厚真の内陸部も開拓移住者が増加した。これらは明治 19 年の国有未開地の開放によって北海道開拓の促進を図る「北海道土地払下規則」が制定されたことにもよる。以後、開拓移住者の増加が続き現在の農業の町厚真の礎が確立されていく。（乾）

2. 遺跡の位置と周辺環境

A 地理的環境

ヲチャラセナイ遺跡の周辺地域を遺跡の東に隣接するヲチャラセナイ沢から厚真ダムまでの厚真川本流域とその支流域としたい。この地域は夕張山地南端部に当たり標高約 150~400m の山地に囲まれ、その多くは 200~300m の山頂が続く。山地は樹枝状に浸食が進んだ複雑な山稜を呈している。厚真川及び多数の支流域は浸食開折した谷状の地形を呈し、北東-南西軸の“線状”の地域となっている。遺跡群はこれらの流域に形成された河岸段丘上に立地している。急峻な山稜や河岸段丘の発達は、この地域の基盤層が新第三紀に形成された砂岩泥岩層（松野・石田 1960）の比較的軟弱な岩相であることに起因すると思われる。

本遺跡は厚真川の河口から約 30km の右岸に位置し、上幌内モイ遺跡の河岸段丘と合わせ厚真川が S 字状に大きく蛇行し、流路延長 9km の鬼岸边川との合流点に面している。厚真川沿いには河岸段丘が形成され、北東右岸に上幌内モイ遺跡、南東右岸にオニキシベ 2 遺跡、南右岸にオニキシベ 6 遺跡、オニキシベ 4 遺跡が立地している。この S 字状の特徴的な地形は、この地域における最初の

地形図である明治 29 年製版の「ライカルマイ」(5 万分の 1)にも明瞭に記載されている(図 I-7)。

本遺跡の南東方向を流下する厚真川との約 200m の間は沖積低地となっており、殆どは水田として利用されていたが、平成 15 年以降、厚幌ダム建設に伴う移転補償のため廃耕田となっており、ヤナギやセイタカアワダチソウが密生している。遺跡の背後は、北西に約 1000m の地点に位置する標高約 300m の山頂から続く傾斜地が連続し、ナラ等を主体とする広葉樹林が形成され、一部にはカラマツなどの針葉樹が植林されている。

本遺跡の南西には少量の流水を伴う無名の小沢が開析している。この小沢と厚真川の合流点には比高差約 3m の滝があり、松浦武四郎の「ヲチャラセナイ」に相当するものと思われ(松浦・秋葉 1985、亀井・池田 1978)、本遺跡名はこの無名沢の旧地名から冠したものである。

北側は標高約 200m の小頂部の山体があり、これを厚真川が浸食し急傾斜地が形成されている。一部には砂岩泥岩の基盤層を露出する崖面となっており、周辺の地形図等高線や現地における凹凸地形などから地すべり地形と判断される。地すべり地形の範囲は本来の山体等高線に並行する北西-南東軸に幅約 280m、直行する平面崩落距離が 60~180m、崩壊面頂部から堆積物までの比高差は約 60m の広範囲に及ぶ。発生時期は、厚幌 1 遺跡のマウンド堆積物(田近・大津 2004)や上幌内モイ遺跡低位段丘面における洪水堆積物(厚真町教育委員会 2010)などから、約 4,000 年前に発生したと考えられ、その起因は石狩低地帯東縁活断層によるものと思われる。

本遺跡の北東へ直線距離約 850m の地点には北から流れ込む流路延長 11.2km のショロマ川がある。またその間の厚真川左岸域には流路延長 4km の一里沢があり、比較的大きな支流が厚真川に流入している地域でもある。これらの支流やオニキシベ川との合流点付近は上流域の中でも開析が進み、広い河岸段丘面が形成され、盆地状の地形となり本遺跡における日照条件も良好である。

河岸段丘は現河川面 T0 面から標高 80-100m までの T5 面まで細分(出穂 2006)でき、ヲチャラセナイ遺跡の高位段丘面 A 地区は恵庭 a テフラの堆積状態から T3 面、低位段丘面 B 地区は樽前 c テフラの堆積状態から T1 面に相当する(図 I-5、表 I-7)。

周辺に発達した河岸段丘面の多くには埋蔵文化財包蔵地が立地しており、厚幌ダム建設工事に伴う発掘調査の対象となっている。また、厚真川を挟んで南東には標高 150m の山体が突出し、盆地状の本地区のランドマーク的な存在で昭和 40 年代ころまでは山頂に竜神を祀る神社があった。

比較的大きな支流である鬼岸边川は分水嶺を介して東方の鶴川水系むかわ町豊田地区へ、ショロマ川は北方の石狩川水系夕張川の夕張市滝之上地区へのルートが想定される。この他、本遺跡より約 5km 上流、厚真ダム左岸の支流メルクンナイ沢川も分水嶺を越えて鶴川水系むかわ町穂別地区へのルートとして考えられる。

B 歴史的環境

厚幌地区には、後期旧石器時代から中近世アイヌ文化期までの時期にわたる 24 遺跡が所在する(図 I-4 右下)。最上流のイクバンドユクチセ 2 遺跡(J-13-87)は河口より約 37km の地点にあるが、地域住民の聞き取り調査から現在の厚真ダム堤体付近にも埋蔵文化財包蔵地が所在していたことがわかっている。立地として厚真川本流との比高差が約 5~10m 前後河岸段丘上に集中し、湧水や小河川に伴うものが多い。



図 I-5 遺跡周辺の地形面区分図

表 I-7 厚真川流域の河岸段丘面区分(ヲチャラセナイ遺跡周辺の標高)

段丘面	標高	段丘面	標高
T0面	現河底面	T3面	71~77m
T1面	54m	T4面	—
T2面	58~60m	T5面	85~87m

(1) 旧石器時代

遺跡群の時的側面は、上幌内モイ遺跡において平成 16・17 年度の発掘調査で旧石器時代札滑型細石刃核を伴うブロックが焼土を伴って 1 ヲ所検出され、厚幌地区に留まらず厚真町内において最古の埋蔵文化財包蔵地となっている。小規模なブロックであるものの、細石刃核、細石刃、彫器、削器、錐形石器などの剥片石器群が出土している。放射性炭素年代測定の結果、暦年較正年代で約 14,500 年前の数値が得られている。恵庭 a テフラを基質とする河岸段丘の再堆積物との層序関係においても良好な年代を得ている。

(2) 縄文時代

縄文時代では本遺跡の旧石器包含層確認トレンチ調査の際に、樽前 d テフラ下層のローム質土より無茎石鏃 1 点が出土している(本報告書 図IV-83-1)。本地区における縄文土器の出現は今のところ早期後葉の東釧路Ⅲ式期から散発的に出現し、中茶路式期より増加し縄文時代後期初頭の余市式土器群は各遺跡から出土しており遺跡数が最も多い。縄文後期中葉及び後葉の包蔵地はまとまって出土した例はオニキシベ 6 遺跡のみであり、縄文時代晩期においても上幌内モイ遺跡や本遺跡などで出土しているが、その規模は小規模なものに留まっている。

この時期の特徴として、土器の胎土中に粒径 1.5mm 以上の石英結晶粒を多量に含む「富良野盆地系土器」が出土し、厚真川上流域～鶴川流域～空知川流域への内陸ルートの存在が示唆されている

(厚真町教育委員会 2004)。時期的にも中茶路式期から出現しはじめることから、本地域における土器や黒曜石などの流通において先述の内陸ルートを考慮したうえで、本地域、北海道中央部における社会構造を検討する一助となるものと思われる。なお、「富良野盆地系土器」は続縄文文化期後北 C₁ 式まで確認されている(厚真町教育委員会 2011)。またこの他にも、本遺跡においてアクチノ閃石、蛇紋岩を含む日高系土器や角礫状の凝灰岩を多量に含むフゴッペ貝塚式土器、器形、文様や調整、胎土から倶多楽湖周辺で製作されたと思われる類円筒土器下層 d 式土器も出土している。

(3) 続縄文文化期

続縄文文化期では中期の後北 A~C₁ 式期に限られ、僅かに縄線文系の前半期の土器が出土しており、恵山式は出土していない。上幌内モイ遺跡、オニキシベ 2 遺跡、ショロマ 3 遺跡に留まっている。しかし、上幌内モイ遺跡やオニキシベ 2 遺跡では、この時期の土坑墓副葬品に特徴的な片岩製石鏃の製作地点も確認されている。また、焼骨片を伴う焼土や焼骨片集中も検出しているが、その主体構成はエゾシカと思われる陸棲哺乳である。

(4) 擦文文化期

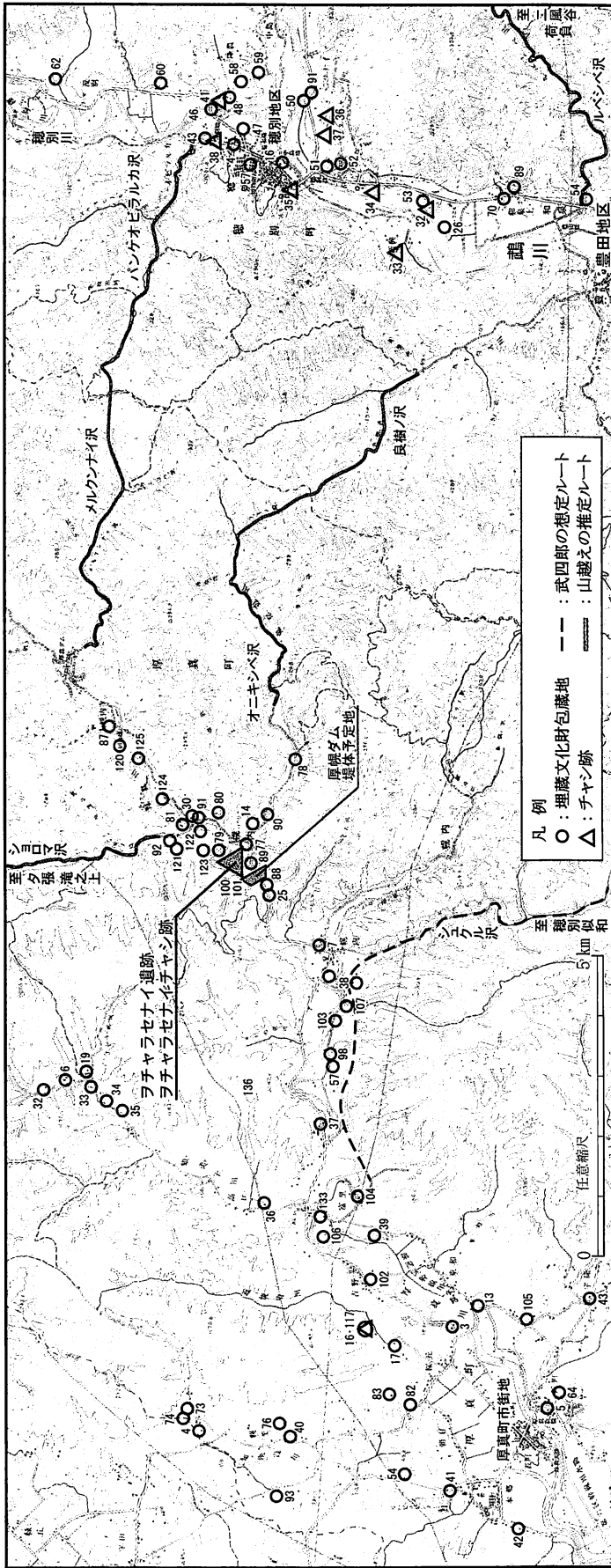
擦文文化期では 8 世紀代の土師器がオニキシベ 2 遺跡、本遺跡から少量出土しているに過ぎないが、白頭山苫小牧火山灰(10 世紀前半降下)より上層の擦文中期から再び埋蔵文化財包蔵地が急増する。上幌内モイ遺跡では 11 世紀代と思われる「円形周溝遺構」や「遺物集中区」などの儀礼場跡や 12 世紀代の人骨を伴う伸展葬の土坑墓なども検出されている。しかし、これまで擦文文化期全般を通して調査された竪穴式住居跡はオニキシベ 2 遺跡での 1 軒に留まっているに過ぎない。本地域では 11 世紀に入ると平地式住居へ移行している可能性があると思われ、平成 24 年度ではオニキシベ 4 遺跡において擦文文化期後期の 12 世紀代と思われる平地式住居跡 2 軒が検出されている。遺物では、佐波理銃 4 個体や羽口や椀形滓などの鍛冶関連遺物セット、土師器・須恵器、報告確認されているものとしては道内最古の火打石などの本州系遺物が出土している。この他、コイル状装飾品といった北方系資料も出土しており、10 世紀後半以降に縄文時代以降続く内陸山間部までのルートが経済的な交易ルートと変化した可能性がある。

(5) アイヌ文化期

後続する中世アイヌ文化期においても埋蔵文化財包蔵地の検出確認例は多く、本遺跡の他、上幌内モイ遺跡でも 13 世紀から 17 世紀前葉にかけての平地式住居跡が 10 軒や土坑墓 3 基、オニキシベ 2 遺跡では住居跡 1 軒と土坑墓 4 基が検出されている。本遺跡のチャシ跡も 1667 年に降下した樽前 b テフラと掘り上げ土上面との黒色土の層厚や年代測定の結果から、13 世紀代のチャシ跡と考えられ、擦文文化期 10 世紀後半から中世アイヌ文化期まで連綿と遺構遺物が出土している。

平地式住居跡は打ち込み杭跡が長方形に配列するもので、いわゆるアイヌ文化の「チセ」の形態と思われる。その長軸は厚真川の流路方向と同じくほぼ北東-南西方向を呈するものが主体で、「神窓」とされる精神文化要素は、住居跡の立地や獣骨集中との位置関係より厚真川の上流方向を意識していると考えられる。また、住居跡内の炉跡の変化も見受けられ、2 ヶ所 1 対の楕円形炉から、1 ヶ所の主要炉への変遷も分かり始めている。

土坑墓では上幌内モイ遺跡で 3 基、オニキシベ 2 遺跡で 4 基、ヲチャラセナイ遺跡で 1 基の土坑墓を検出している。特にオニキシベ 2 遺跡では鎌倉市佐助ヶ谷遺跡鎌倉税務署地点出土と同じ文様のスタンプ文漆器が出土しており、14 世紀前半の土坑墓群であることが判明している。1 号土坑墓



厚真町埋蔵文化財包蔵地

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名				
3	朝日遺跡	33	高丘6遺跡	64	新町2遺跡	89	オニキンベ4遺跡	113	東和2遺跡
4	幌里1遺跡	34	高丘7遺跡	73	ニタツポロ沢遺跡	90	オニキンベ5遺跡	116	東和3遺跡
5	新町遺跡	35	高丘8遺跡	74	幌内神社遺跡	92	シヨロマ2遺跡	117	桜丘2遺跡
6	高丘1遺跡	36	高丘9遺跡	76	幌里3遺跡	93	幌里4遺跡	118	オニキンベ6遺跡
7	幌里1遺跡	37	富里1遺跡	77	オニキンベ2遺跡	98	幌内6遺跡	119	イカバンドコクチセ2遺跡
13	東和遺跡	38	幌内4遺跡	78	オニキンベ3遺跡	100	ラチャラセナイチャン跡	120	イカバンドコクチセ3遺跡
14	オニキンベ1遺跡	39	チコマナイ遺跡	79	上幌内モイ遺跡	101	ラチャラセナイ遺跡	121	シヨロマ3遺跡
16	桜丘チャン跡	40	幌里2遺跡	80	一里次遺跡	102	吉野1遺跡	122	シヨロマ4遺跡
17	桜丘1遺跡	41	本郷1遺跡	81	シヨロマ1遺跡	103	幌内7遺跡	123	上幌内3遺跡
18	高丘2遺跡	42	本郷2遺跡	82	東ニタツポロ1遺跡	104	ニタツポナイ遺跡	124	上幌内4遺跡
19	高丘10遺跡	43	宇隆1遺跡	83	東ニタツポロ2遺跡	105	宇隆3遺跡	125	上幌内5遺跡
25	厚幌1遺跡	44	本郷3遺跡	87	イカバンドコクチセ遺跡	106	富里2遺跡	133	富里3遺跡
32	高丘5遺跡	45	幌内5遺跡	88	厚幌2遺跡	107	オコソク1遺跡	133	幌内8遺跡

むかわ町埋蔵文化財包蔵地

No.	遺跡名	No.	遺跡名
4	穂別D遺跡	50	穂別E遺跡
16	穂別4遺跡	51	穂別G遺跡
26	和泉4遺跡	52	穂別H遺跡
32	トロスチャン跡	53	和泉2遺跡
33	チチャップチャン跡	57	穂別I2遺跡
34	オソウシチャン跡	58	隆農1遺跡
36	東雲チャン跡	59	隆農3遺跡
37	ニサナイチャン跡	60	茂別遺跡
38	ベップチャン跡	62	旧柏古遺跡
41	隆農チャン跡	64	キウマ2遺跡
43	穂別5遺跡	70	和泉3遺跡
46	穂別A遺跡	83	オヒワルカチャン跡
47	穂別B遺跡	89	和泉5遺跡
48	穂別C遺跡	91	穂別I1遺跡

図 I-6 厚真川上流域と鶴川中流域遺跡分布図

からはロシアルダンニコーフ墓群と同形態のメノウ製棗玉と入組文を有するガラス玉、北宋銭主体の古銭、和鏡の鏢形再加工品からなる道内最古の「タマサイ」が出土している。3号墓からは日本刀1振と飾り矢筒の銀象嵌装飾部分（九曜文）や内耳鉄鍋が出土している。これら1号・3号墓は棺板材の出土や堆積状態、遺物の出土状態から木棺を伴う埋葬方法であったことが判明している。

これらの成果は、発掘調査時の樽前bテフラ以下の黒色土内における層位的見解や遺物出土状態、炉跡出土の炭化種子年代測定によって結果が得られている。しかし、17世紀代の遺物である煙管や寛永通寶は1点も出土しておらず、本地区の様相が一変することとなる。

C 松浦武四郎の記録とアイヌ語地名

本町におけるアイヌ語地名を詳述しているものは、江戸時代末期の安政5(1857)年に厚真を訪れた松浦武四郎の『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌・安都摩日誌』（松浦・吉田 1962、松浦・高倉・秋葉 1985）が最も古い記録で、本地区に係る地名としてはヲチャラセナイやカニシユウ（現一里沢遺跡）、ヲニケレベ（現オニキシベ）、シヨウロマ（現シヨロマ）などが記載されている。また、『厚真村史』にも松浦武四郎が記録した地名を元に語源等について詳述しており、アイヌ語地名解は知里真志保氏の監修によるものである（厚真村 1956）。

松浦武四郎の安都摩日誌における本地区には集落（コタン）、集落跡（フシココタン）の記述はなく、鷲鷹類や鹿猟の仮小屋に係る記述に留まる。19世紀には無人地域であり狩猟や夕張川筋や鶴川筋への山越えのルートにあったことが読み取れる。このことは平成14年度より発掘調査を行いアイヌ文化期の遺構遺物が多数出土しているにも関わらず、厚幌1遺跡や上幌内モイ遺跡において樽前bテフラをほぼ直接被覆する大木に伴う送り遺構（厚真町教育委員会 2004・2009）や煙管や寛永通寶などの近世を示す遺物が皆無であることも符合する。

ヲチャラセナイは本遺跡名となった地名で「小川にして高山の間に滝川に成りて落るより号し也。ヲチャラセは滝川に成て有ると云儀のよし也。」と記述されている（松浦・高倉・秋葉 1985）。本遺跡西側に開析する無名沢を指し、水量は少ないが通年の流水を保ち、厚真川との合流点には滝壺がある。水源は標高約300mの山頂付近にあり、周囲の山頂の中でも最も高い頂きとなっている。語源は「ヲ・チャラルセ・ナイ」＝「川口が・細い滝をなしてすべり落ちている・川」とされている（亀井 1978）。しかし、安都摩日誌におけるチャシ跡に係る記述は無く、『東西蝦夷地山川地理取調地図』中に海岸部において「ライチャシノシケ」が示されているに過ぎない。本チャシ跡が17世紀をはるかに遡る時期に構築、遺棄されたとも想定できる。

ヲニケレベは本遺跡対岸の支流鬼岸辺川筋の地名であり、「右の方に同じく小沢也。此川すじ楡皮多く有るよし。よって号とかや。此辺え来りしや兩岸峨々として本川すじは皆赤崩平のみ也。」と記述されている（松浦・高倉・秋葉 1985）。語源としてオニキシベ「入口で・木を・削り・つけている・もの」とあり、「シナの木（オヒョウニレ）より樹皮を剥き採る場所」を意味するという（厚真村 1956）。

カニシユウは、日誌記述の順序等の内容より現在の一里沢となる。鉄鍋の残地伝承と「其処に木幣を立てて祭り有る也。」とイナウを祀っていたことが聞き取りにより記され、3穴の吊耳鉄鍋のスケッチも書き残されている（松浦・高倉・秋葉 1985）。一里沢口の河岸段丘上に立地する一里沢遺跡では平成14年に本事業に係る試掘調査の際に未被熱の獣骨が出土しており、アイヌ文化期の包蔵地であることが既に判明している。苫小牧駒澤大学藁島栄紀教授は一里沢の記録や上幌内モイ遺跡の

円形周溝遺構やフチャラセナイチャシ跡の存在から、この地区がかねてより聖域的な地区であったと推定している（藪島 2005）。

シヨロマ（現シヨロマ川）は一里沢対岸で本遺跡の北東へ直線距離約 850m の地点で、厚真村史では「草ソテツの群生するところ」（厚真村 1956）とある。「西岸川巾五六間、急流峨々たる山の間より落来るとかや。是滝川に成るより号るとかや。」（松浦・高倉・秋葉 1985）と記され、現在の地形等と一致する。このシヨロマ川流域には「マタヤツチセ 是冬分鷲、熊等を取りに來りし時の小屋なりと、ヤツチセは木皮にて作りし名（家）也。」「ベンケヤツチセ 木皮葺の家と云儀のよし也。是も獵師の立置處と云り。是より上高山はなけれども簇々と小山のみつゞき、其うしろはユウハリのソウホコマナイのうしろに当たるとかや。」とあり、シヨロマ沢がワシタカ類、ヒグマの狩猟場であり、夕張川筋への山越えルートであった可能性が高い。また「此川すじ魚類は鱒・鮭・桃花魚・雑喉等なりとかや。」とありマス・アメマス・ウグイなどの棲息魚類についても書き残している。武四郎は下流・中流域の支流小河川等においても棲息魚類の記録を残しているがサケに係る記録が一切ない。現在でも厚真川ではサケの棲息はごく少数に限られており、かつてよりサケの遡上が少ない河川であったことが伺える。このことは、発掘調査でフローテーション法における焼骨片の魚類椎体でもサケと思われる試料は少ないことも一致している。

厚真川流域、特に上流域には支流河川が多数あり、それぞれにアイヌ語地名が付され日誌中に記している。厚真川上流域では擦文・アイヌ文化期の包蔵地も多数あることから、松浦武四郎の日誌を証左することは、考古学的調査成果を補足し、より総合的な、より真実に近い地域史をとらえるうえで重要な資料となっている。

D アイヌ語地名と内陸ルート

安都摩日誌からは、聞き書きや地名そのものより当時の交通ルートを読み取ることもできる。また、そのルートを基盤に明治・大正年間の道路整備計画が成されることも他の地域においても多々ある。大正年間に厚真で初めて作成された全町域の道路計画図である「厚真村村道計画路線図」（図 I-7）には厚真ダム左岸の支流メルクンナイ川よりむかわ町穂別市街の北側へ続く計画路線が記されている。大正 5 年測図の地形図にはこのルートに幅 1m 以下の道も記載されている。厚真側のメルクンナイの語源は「水路をもつ沢」（厚真村 1956）とされ、筆者の踏査でも沢水の流れの中を歩いていくルートであったことから名づけられた地名と思われる。また、分水嶺を越えて鶴川水系穂別地区はパンケオビラルカ沢で、オビラルカは「川尻が・崖・路・の上」で、パンケオビラルカは「川下の・オビラルカ」と解されている（扇谷 2003）。分水嶺は地形図から読み取っても周辺地域で最も低平な鞍部でもあり、厚真川水系、鶴川水系に「ル」（路）の付く地名がセットとなっていることから、古来より利用されている山越えのルートと思われる。現在は室蘭開発建設部苫小牧道路事務所により早来一平取間を結ぶ「道道北進平取線」の敷設工事が進められ、分水嶺には「オビラルカトンネル」（未開通）が建設されている。なお、パンケオビラルカは穂別川のさらに上流に位置するむかわ町穂別稲里地区に所在し、厚真ダムからむかわ町稲里へ抜ける「炭鉱厚真川林道」と「中穂別林道」で結ばれている。

さらに、厚幌地区内のシヨロマ（現シヨロマ川）も厚真村史では「草ソテツの群生するところ」（厚真村 1956）とある。明治 29 年発行の地形図には「シヨルマ」と記載されており、かつては滝瀬の中を道として馬車で木材や木炭を運び出したこと、明治・大正期の夕張山地への熊狩の記録（厚

真村史 1956) から、夕張川水系滝ノ上地区於兎牛(おそうし)へのルートが想定できる。ソ(滝)・ル(路)・マ(泳ぎ渡る)とも読み取れるのではないだろうか。現在は「厚真川林道」で通り抜ける事が可能である。

これらのルートは厚真川本流とオニキシベ川との合流点付近で1本となり、対岸に位置するヲチャラセナイチャシ跡は早来方面と穂別方面、夕張方面への全てのルートが把握できる地点でもある。先述のオニキシベの語源「入口で」とはこれらの山越えのルートを指し、ヒトやモノの流れにおいて厚幌地区が重要な位置にあったことも容易に想定される。(乾)

3. 調査区内の地形と地質

ヲチャラセナイ遺跡は平成20年度から発掘調査を実施しているが、今回は平成23・24年度調査区について記す。遺跡が立地する河岸段丘面は標高57~59mの低位段丘面との標高68.5~76mの高位段丘面との2面に大きく区分される。いずれも、標高約190mの尾根から南東方向へ張り出す山体の先端部にあたる。

低位段丘面は発掘調査においてB地区とし、調査面積は1,078㎡となる。上幌内モイ遺跡の河岸段丘面を標準地とした段丘面区分に従うと火山灰の堆積や標高からT1面に相当し、この段丘面全域を発掘調査の対象とした。Ⅲ層上面の大部分が近現代の削平を受けているものの、地形的には上位段丘面の先端部の前面に隣接している。狭小であることと背後の高位段丘面との段丘崖が35~40°前後の急傾斜地を形成しており、V層黒色土や樽前dテフラの流出土砂によって本段丘面は扇状に緩い傾斜を有している。堆積状況ではB地区には樽前dテフラの堆積が認められず、樽前cテフラの降下層序の堆積が認められる。基盤は灰褐色シルトでこの直上のVI層漸移層より中茶路式土器などが多量に出土しており、樽前dテフラ降下以降の離水直後、厚真川の川辺で当該期の活動があったものと思われる。

高位段丘面のA地区は樽前dテフラのフォールユニットが全面を覆い安定的に堆積している。Ⅲ層上面で標高68.5~76mの範囲で上幌内モイ遺跡におけるT3面の標高と概ね一致する。本段丘面全域を調査対象とし、平成24年度までの調査面積は15,698㎡となっており、本地区においてT3面が最も広い段丘である。段丘面は段丘崖を開析する沢状地形などからの流出層の再堆積によって段丘先端部側へ傾斜を有している。調査区内においても標高68.5~76mの南東方向へ平均で約4°傾斜し、先端部側(AD-17区付近)では傾斜角は約1°とほぼ平坦な地形に対し、段丘面基部(K-29区付近)では約6°の傾斜角である。これは恵庭a軽石を含む水成堆積構造を残す河岸段丘堆積物X層(図I-14)の上層に背後の高位段丘面、段丘崖から供給された斜面堆積物IXb~IXe層が堆積したことによるもので、先端部側TR-05では1.2m、基部側のTR-04では1.5mの層厚となる。斜面堆積物はしまりが弱く、ボール状の恵庭a軽石やシルト岩角礫を含むものの明瞭な層序区分は難しい。なお、上幌内モイ遺跡の旧石器出土地点は本遺跡と同じ堆積物層序が確認でき、上幌内モイ遺跡の旧石器人は厚真川の川辺で焼土を残しているものと思われる。

上記2面の段丘面の地形形成について記したが、厚真川本流に接していないことや本地区においても比較的古い段階に離水形成し、安定した段丘面である。これらは、旧石器遺物包含層の確認トレンチの壁面で確認したが、上幌内モイ遺跡(厚真町教育委員会 2006)における旧石器遺物包含層と同質の粒度が均質で、極めて硬質な黄褐色ローム質土層は確認されていない。

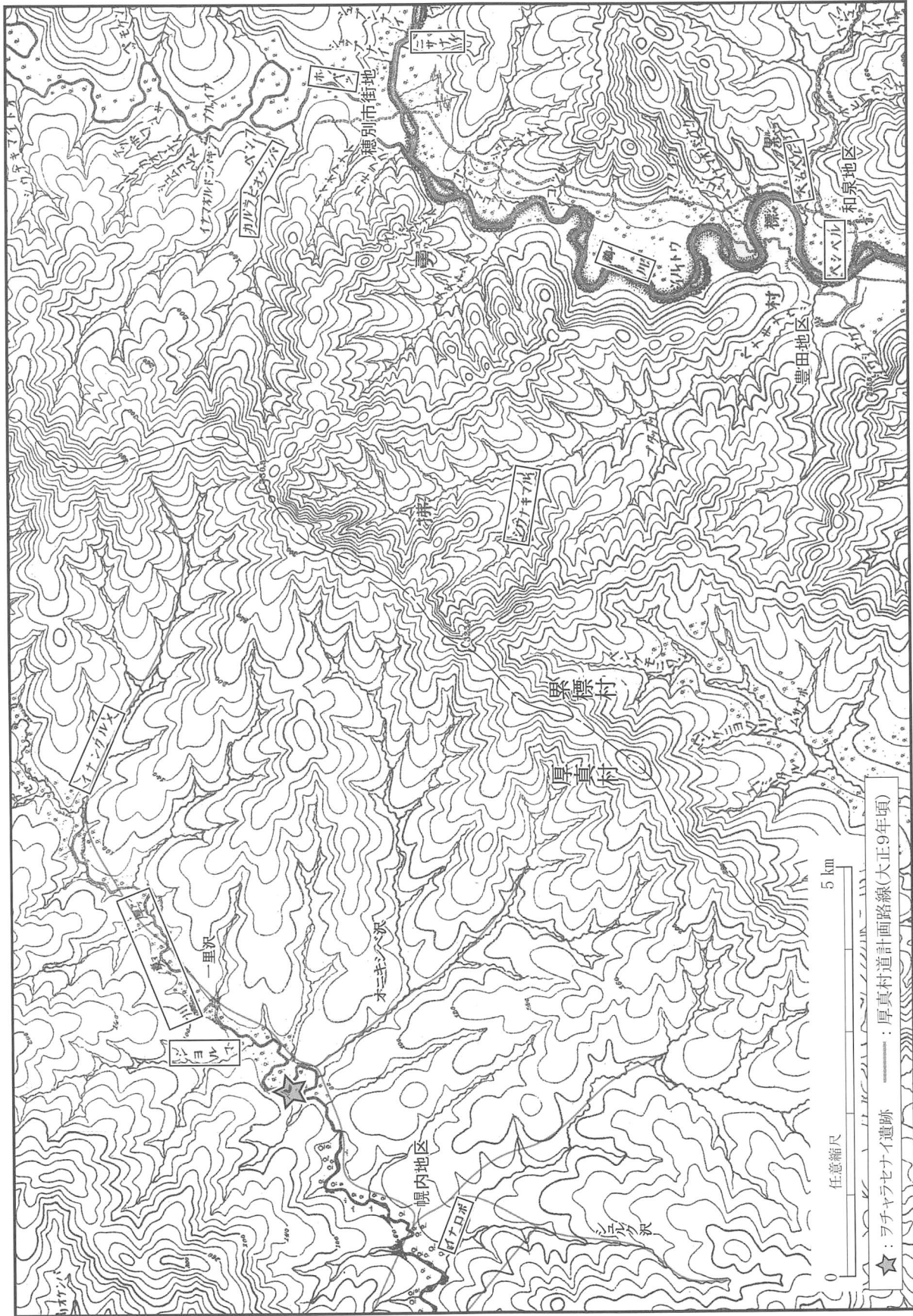


図 I-7 厚真川上流域と鶴川中流域の地形図 (明治29年発行 5万分の1「ライカルマイ」と「ルベシベ」の統合を50%縮小)

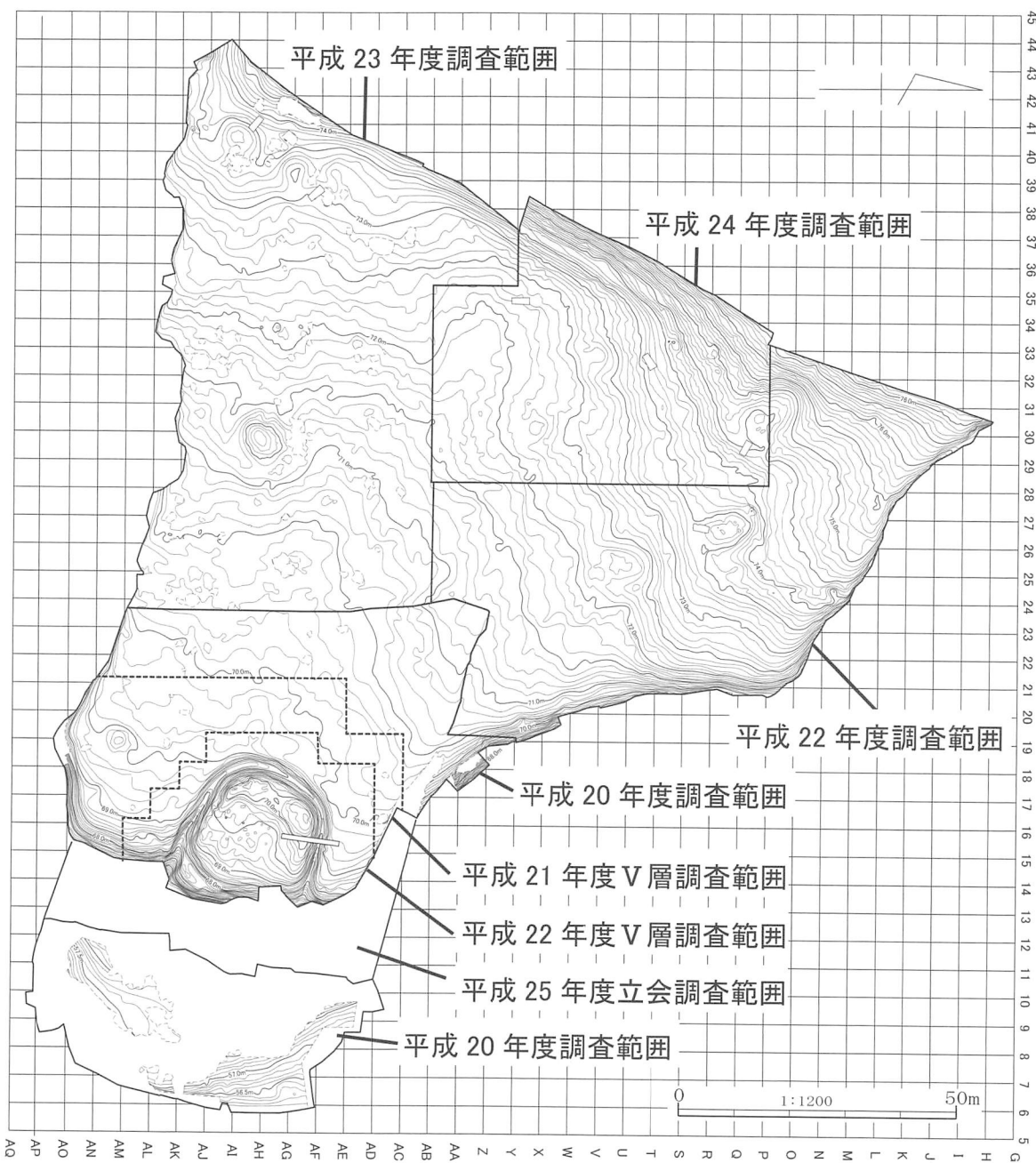


図 I-8 発掘調査区内の地形

なお、本遺跡では平成 23 年度の確認調査で樽前 d テフラより下層のローム質土 IXa 層より、黒曜石製の無茎石鏃 1 が出土している。

樽前 d テフラより上層の黒色土については先端部側で層厚を減じる傾向があるものの、調査区西側の T3 面-T4 面段丘崖裾の基部側では黒色土がやや厚く発達している。先端部側は日照条件が良いものの、北西や南西の風が強く吹き、堆積土が吹き飛ばされたと考えられる。また、調査区の西壁面においては、不連続ではあるものの白頭山苦小牧テフラ（10 世紀前半降下）や駒ヶ岳 C2 テフラ（1694 年）の堆積も確認できる。

（乾）

〔基本土層〕

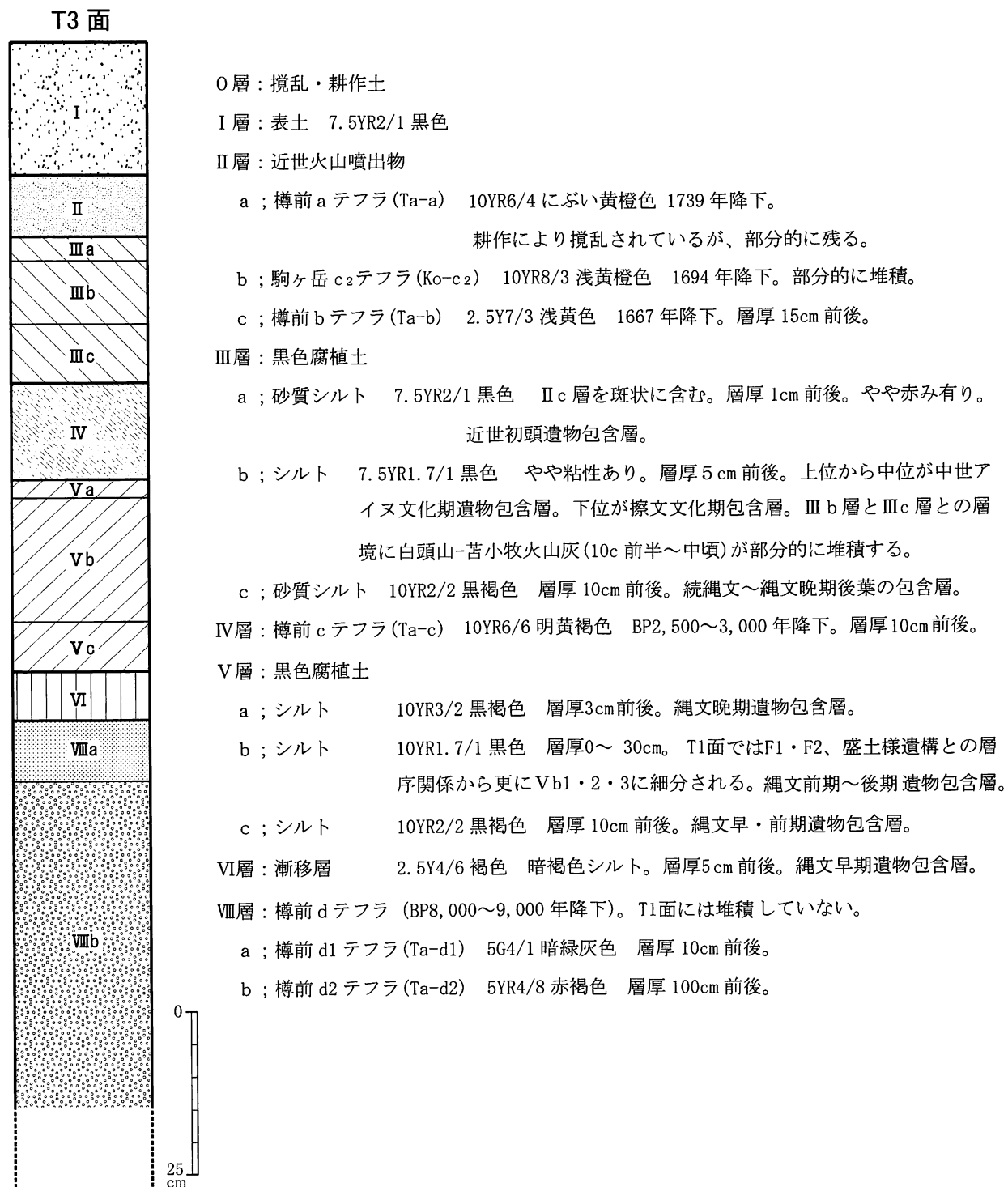


図 I -9 基本土層柱状図

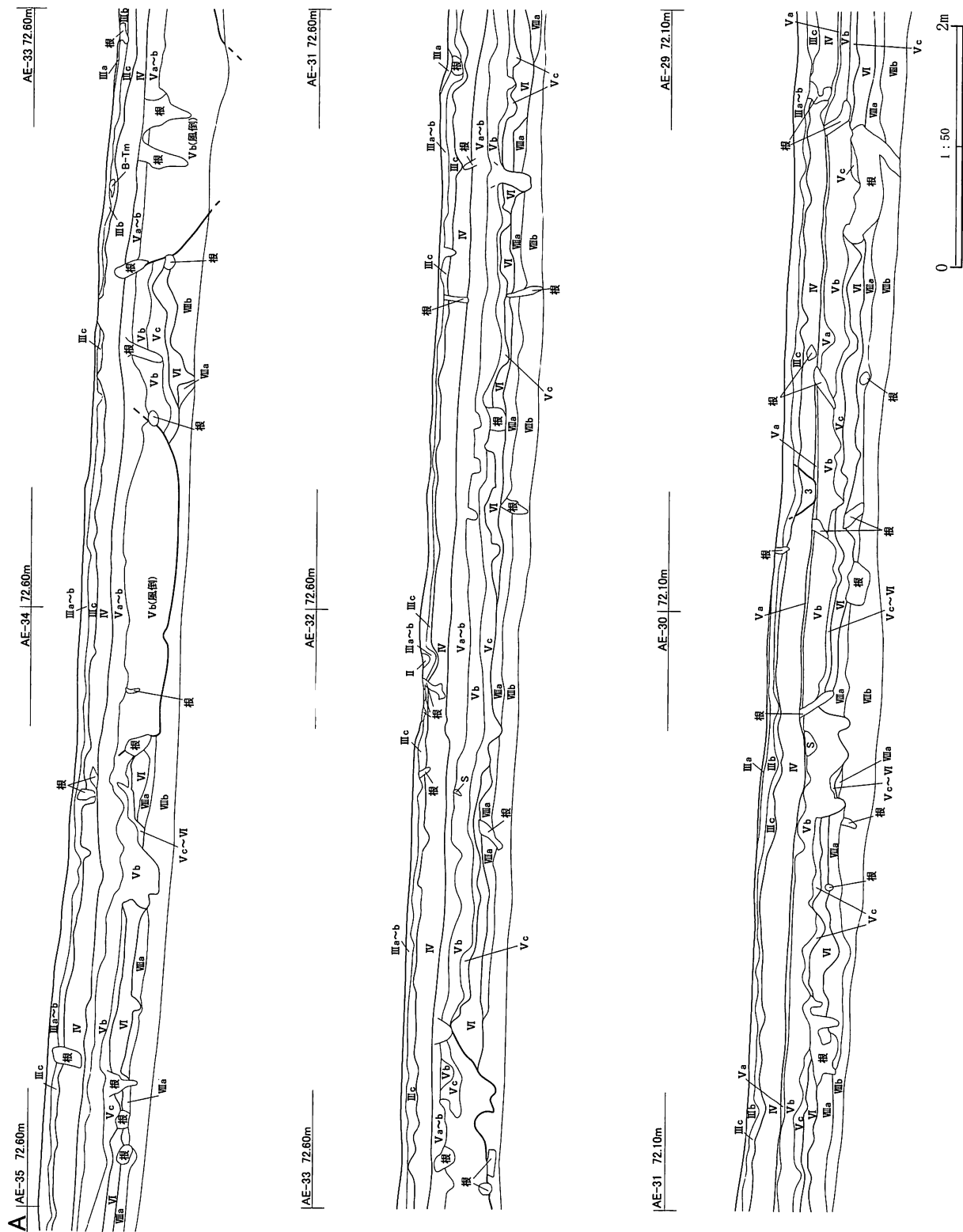


図 I-10 AE東西ライン土層断面図(1)

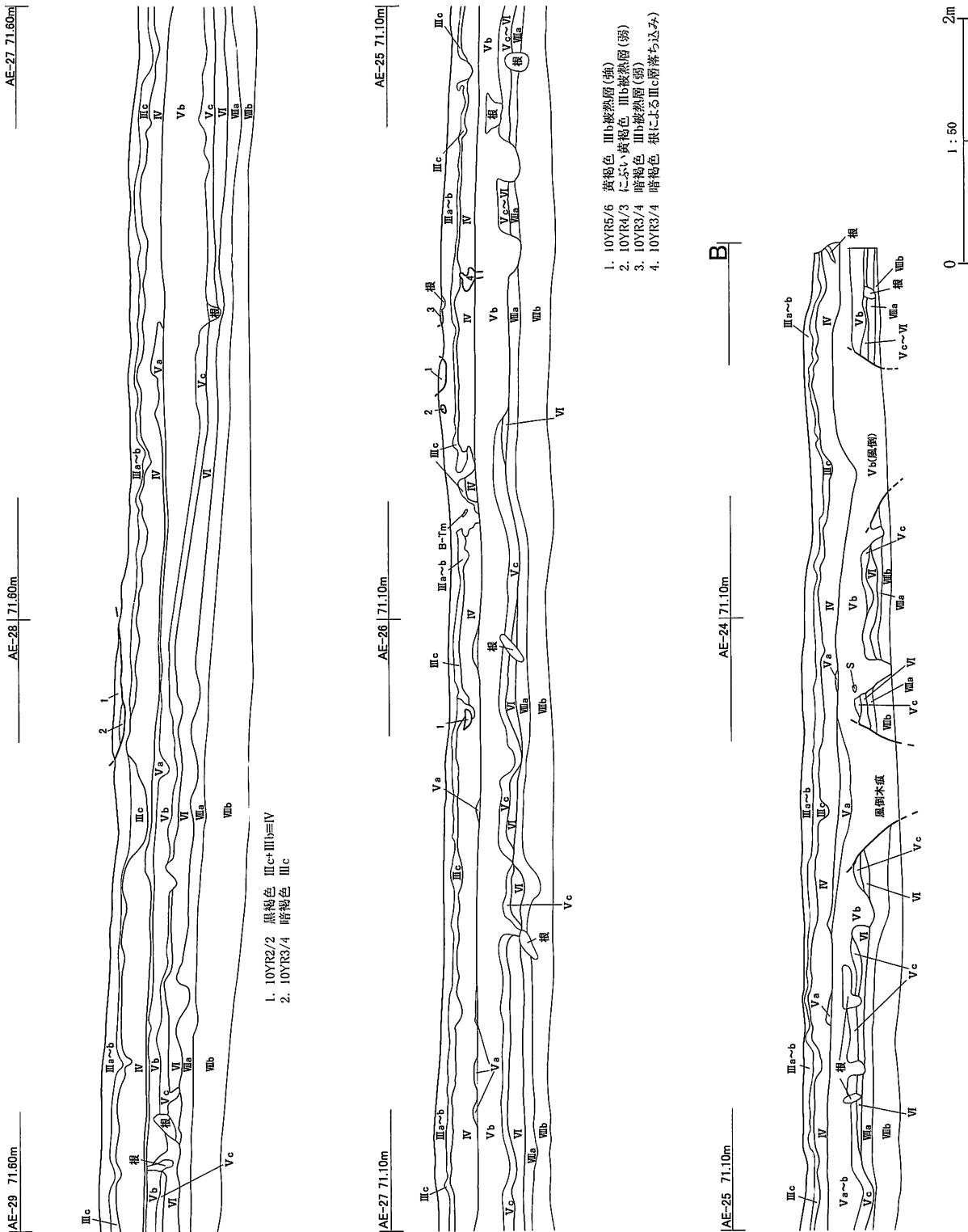
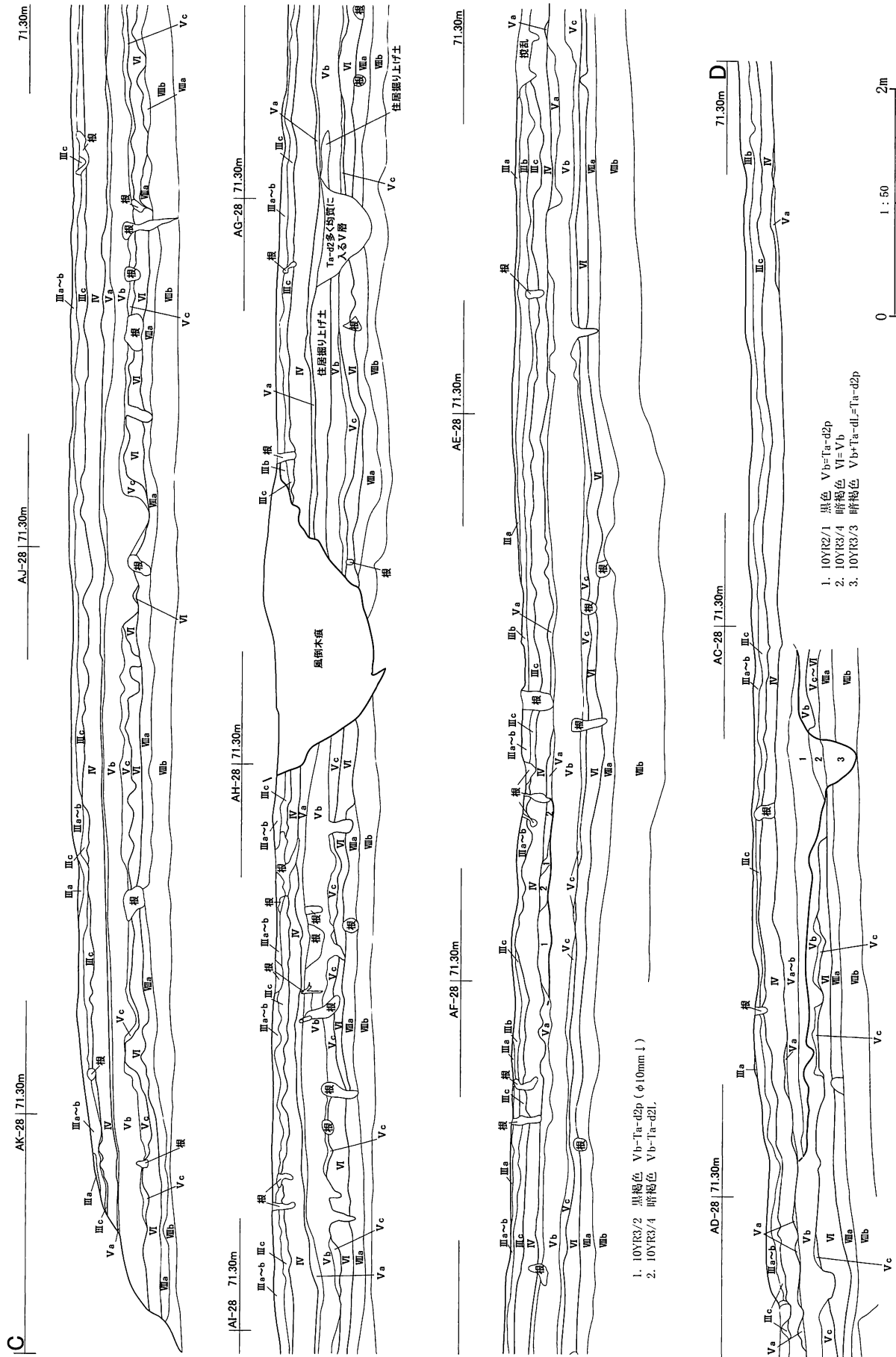


図 I-11 AE東西ライン土層断面図(2)



1. 10YR2/1 黒色 Vb=Ia-d2p
2. 10YR3/4 暗褐色 VI=Vb
3. 10YR3/3 暗褐色 Vb+Ia-dI.=Ia-d2p

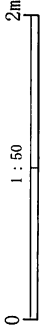


図 I-12 28 南北ライン土層断面図

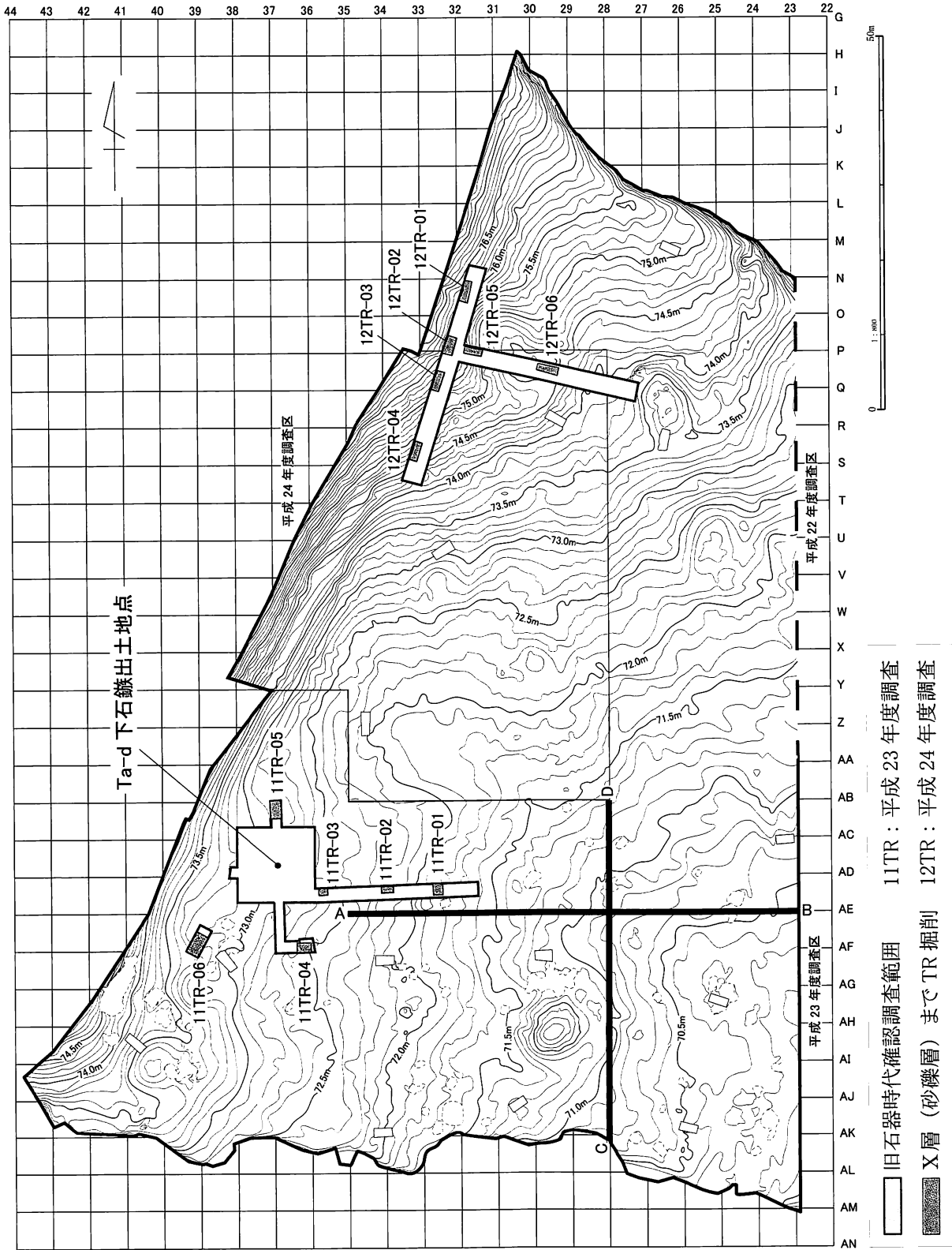
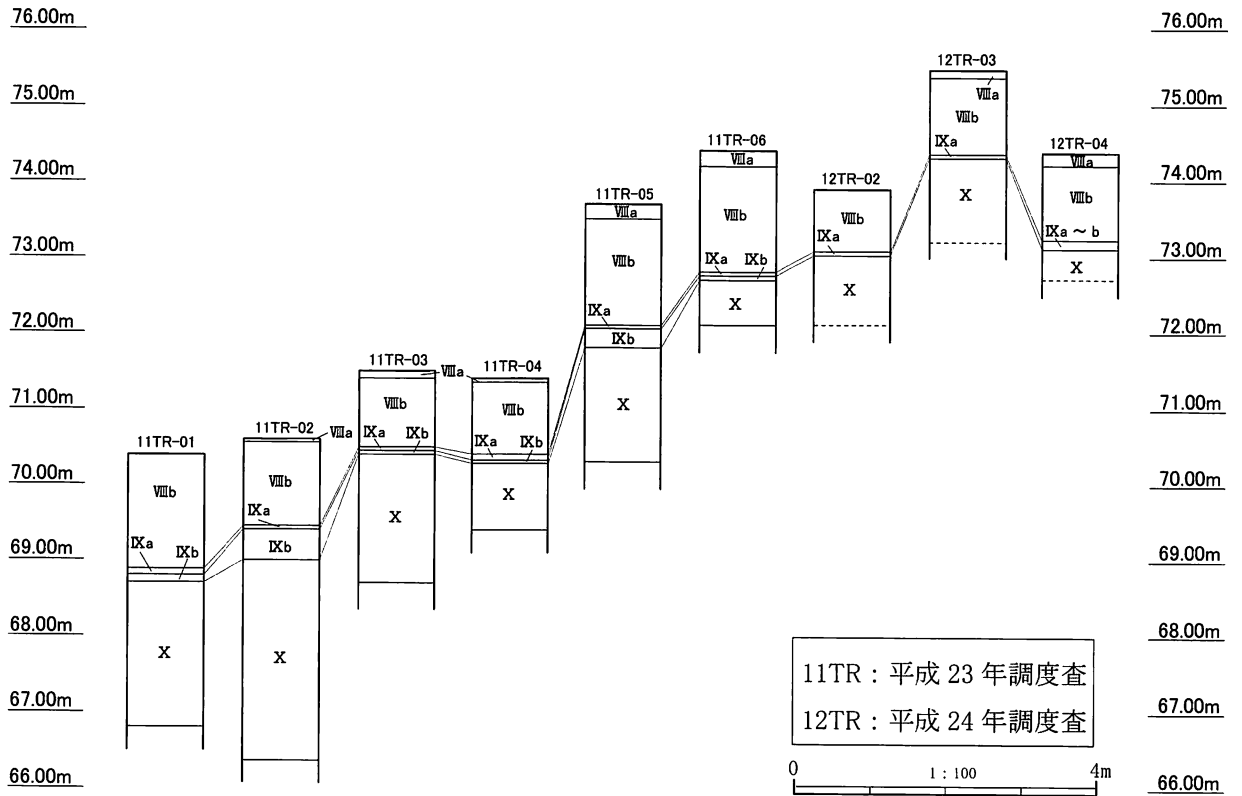
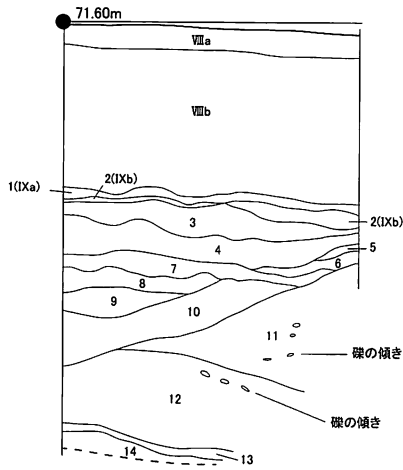


図 I-13 メインセクション及び旧石器トレンチ-拡張区位置図

旧石器時代確認調査土層柱状図



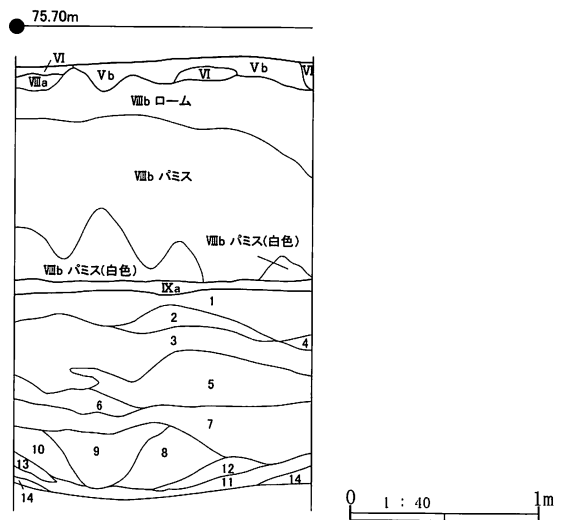
11TR-03 北側壁面実測図



11TR-03

- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1 (IXa) 10YR4/4 褐色 | ローム=炭化物 (φ5↓) |
| 2 (IXb) 10YR4/6 褐色 | ローム=角礫 (φ20↓) |
| 3 (X) 10YR4/4 褐色 | 砂-礫=En-aP (φ100↓) |
| 4 (X) 10YR4/1 にぶい黄褐色 | 砂-礫 (φ10↓)=En-aP |
| 5 (X) 10YR4/1 褐灰色 | 砂-礫 (φ50↓)=En-aP |
| 6 (X) 10YR4/4 褐色 | 砂-礫 (φ10↓)=En-aP |
| 7 (X) 10YR4/1 褐灰色 | 黒色砂 (φ1↓)=礫=En-aP |
| 8 (X) 10YR4/3 にぶい黄褐色 | 砂-礫 (φ100↓)=En-aP |
| 9 (X) 10YR4/4 褐色 | 砂-礫 (φ100↓)=En-aP |
| 10 (X) 10YR4/4 褐色 | 砂-礫 (φ150↓)=En-aP |
| 11 (X) 10YR4/3 にぶい黄褐色 | 砂-礫 (φ150↓)=En-aP |
| 12 (X) 10YR4/3 にぶい黄褐色 | 砂-礫 (φ150↓)=En-aP |
| 13 (X) 10YR5/3 にぶい黄褐色 | シルト=砂 (φ1↓)=En-aP |
| 14 (X) 10YR4/3 にぶい黄褐色 | 砂-礫 (φ100↓)=En-aP |

12TR-03西側壁面実測図



12TR-03

- | | |
|--------------------|----------------------------|
| 1 (X) 10YR4/6 褐色 | X=En-a (φ5↓) |
| 2 (X) 10YR4/6 褐色 | X=En-a (φ5↓) |
| 3 (X) 10YR4/6 褐色 | X-En-a (φ5↓)=En-aL (ブロック状) |
| 4 (X) 10YR4/1 褐灰色 | 砂層 (河川堆積物)=En-a (φ5↓) |
| 5 (X) 10YR4/1 褐灰色 | 砂層=X=En-a (φ5↓) |
| 6 (X) 10YR4/1 褐灰色 | 砂層=En-a (φ5↓) ブロック状 |
| 7 (X) 10YR4/6 褐色 | X=En-a (φ5↓)=砂層 (ブロック状) |
| 8 (X) 10YR4/6 褐色 | X-砂層=En-a (φ5↓) 全体ブロック状 |
| 9 (X) 10YR4/1 褐灰色 | 砂層-X=En-a (φ5↓) 全体ブロック状 |
| 10 (X) 10YR4/6 褐色 | X-En-a (φ5↓)-砂層 全体ブロック状 |
| 11 (X) 10YR4/6 褐色 | X-En-a (φ5↓)=砂層 |
| 12 (X) 10YR4/1 褐灰色 | 砂層=X |
| 13 (X) 10YR4/1 褐灰色 | 砂層 主体 |
| 14 (X) 10YR4/1 褐灰色 | 砂層=X=En-a |

図 I -14 旧石器時代IX層土層断面及び柱状図

第Ⅱ章 アイヌ文化期の調査

平成 23・24 年度のアイヌ文化期の調査では、遺構は土坑墓が 1 基発見されているのみである。副葬品はコイル状鉄製品や北宋銭等の金属製品と礫が僅かに出土している。本年度の調査では、出土遺物は非常に少なく、平成 20 年度の調査区に接し、近接する AB～AE-23・24 区でややまとまって出土しているのみである。

これまでの調査結果から、遺跡内におけるアイヌ文化期の遺構・遺物の分布状態が明らかになってきた。ヲチャラセナイ遺跡の T3 面では先端部にヲチャラセナイチャシがある。チャシより北側の段丘縁辺の平坦面では平地式住居跡や集中区が多数検出され、南側の段丘縁辺に並行する平坦面及び中央部では遺構・遺物の分布は希薄である。このような厚真川上流に面する段丘縁辺の平坦面に遺構・遺物の分布が濃くなる傾向は、隣接する上幌内モイ遺跡と同様の傾向である。 (天方)

第1節 土坑墓

2号土坑墓〔ⅢGP-02〕 (図Ⅱ-2・3 図版2、40-1～6)

位置：AK-34 区 規模：227×74 cm 主体部平面形：隅丸長方形 長軸方向：N-6° W

立地：T3 面段丘南側の縁辺部

確認・調査：Ⅲc 層上面で、隅丸長方形の黒色土の落ち込みを確認した。この落ち込みに対して長軸とその中央で直交する十字のベルトを設定した。落ち込みの形状より土坑墓と想定していたので、トレンチ調査を先行し人骨の遺存状態等の確認を行った。長軸のトレンチ内北側で頭骨の一部と、小刀を検出している。人骨・副葬品の検出層位・レベルが把握できたので、ベルトを残し慎重に調査を進めた。土層断面の記録を行った後にベルト部の調査をして坑底面と副葬品を精査した。人骨は検出した時点で、バインダー溶液で補強を行った。記録を取り、また、錫鉛製と思われるニンカリについては、非常に脆弱であったため、希釈したパラロイド B72 を滴下して補強を行った上で取り上げて調査を終了している。アイヌ文化期の墓の調査では、墓坑外の頭位側に墓標穴が検出する例が多いことから、墓坑周囲の精査を調査段階ごとに繰り返したが杭状の落ち込みは検出できなかった。墓坑の確認面検出がⅢc 層と下位のため、ⅢGP-01 のような削平・マウンド状の造成があったのかは明らかではない。但し、Ⅲ層上面では、墓坑上部付近で墓坑と長軸を同じくする細長い窪みがあったことを記憶しているが、周辺では人為的な造成等による地形の変化は認められなかった。

形態 (図Ⅱ-2)：平面形は開口部・底面ともに隅丸長方形を基調としているが、両短辺とも弧状である。両長辺側の壁面はほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で屈曲して開く形状である。両短辺側の壁面では底面から約 65° の傾斜で直線的に立ち上がる。底面は基本的に平坦であるが、墓坑中央よりやや北側で浅く窪んでいる。

堆積状態 (図Ⅱ-2)：土層断面からは木棺等の痕跡は見られない。1～7 層はレンズ状に落ち込んでいる。遺体の腐食化に伴い埋土が陥没したためと思われる。特に墓坑の北半部では沈み込みが大きく、上半身が位置していたと考えられる。1 層は窪みに自然堆積したⅢb 層の可能性もある。2～7 層は封土であった可能性が考えられるが、上部及び墓坑周囲の堆積状態が不明のため明らかではない。8～15 層は埋土である。15 層で人骨及び副葬品を検出している。また、土壌は粘性が非常に強い。

人骨・副葬品出土状態:人骨は頭蓋骨の一部と右腕肘付近の骨の一部が残存している。共に近くからは錫鉛製とみられるニンカリが副葬されており、同資料の防腐効果によるものと考えられる。このため、ニンカリ周囲の頭骨の遺存状態は特に良好であり、左歯列の上顎・下顎臼歯が咬合した状態で確認された。この下よりニンカリが出土している。小刀は墓坑と長軸方向を同じくし、墓坑底面とほぼ平行に、墓坑中央付近から出土している。この周囲に人骨は出土していないが、検出位置より胸から腰に副葬されていたものと思われる。2点のニンカリは1点が前述のように、頭骨の下より出土しており、耳に付けられていた状態が想定されるが、もう1点は右腰のあたりに位置していたと思われる。オニキシベ2遺跡のアイヌ期の土坑墓(ⅢGP-01)でも同様の出土状態であり、「Ω」状の装飾品はニンカリ(耳飾り)以外の用途も考慮する必要がある。

頭位:頭位は北である。墓坑長軸は僅かであるが西側に傾いている。厚真川上流域でアイヌ文化期の土坑墓は、現在まで8基が調査されており、内訳は上幌内モイ遺跡3基、オニキシベ2遺跡4基、ヲチャラセナイ遺跡1基である。これらの頭位は北北東～南東で、東を基調とする。本遺構の頭位はこれらとは異なるものである。

出土遺物(図Ⅱ-3):1は小刀で、柄及び鞘の一部の木質部が残存している。鞘には樹皮?留めの痕と思われる部分が2カ所確認できる。刀身は平棟平造りと思われる。区や目釘穴の有無についてはX線写真でも看取できない。茎の形状等も不明瞭であるが、先端は尖っている。2・3は刀子で、共に柄の木質がやや残存している。刀身は2が折れ曲がっており、3も曲がっている。意図的に折り曲げられた可能性がある。4は環状の金具で、合わせ目が確認できる。5・6は錫鉛製と思われるニンカリである。形状は共に「Ω」状のものと考えられる。風化により遺存状態は不良で、5は土壌ごと取上げたものを図上で復元している。

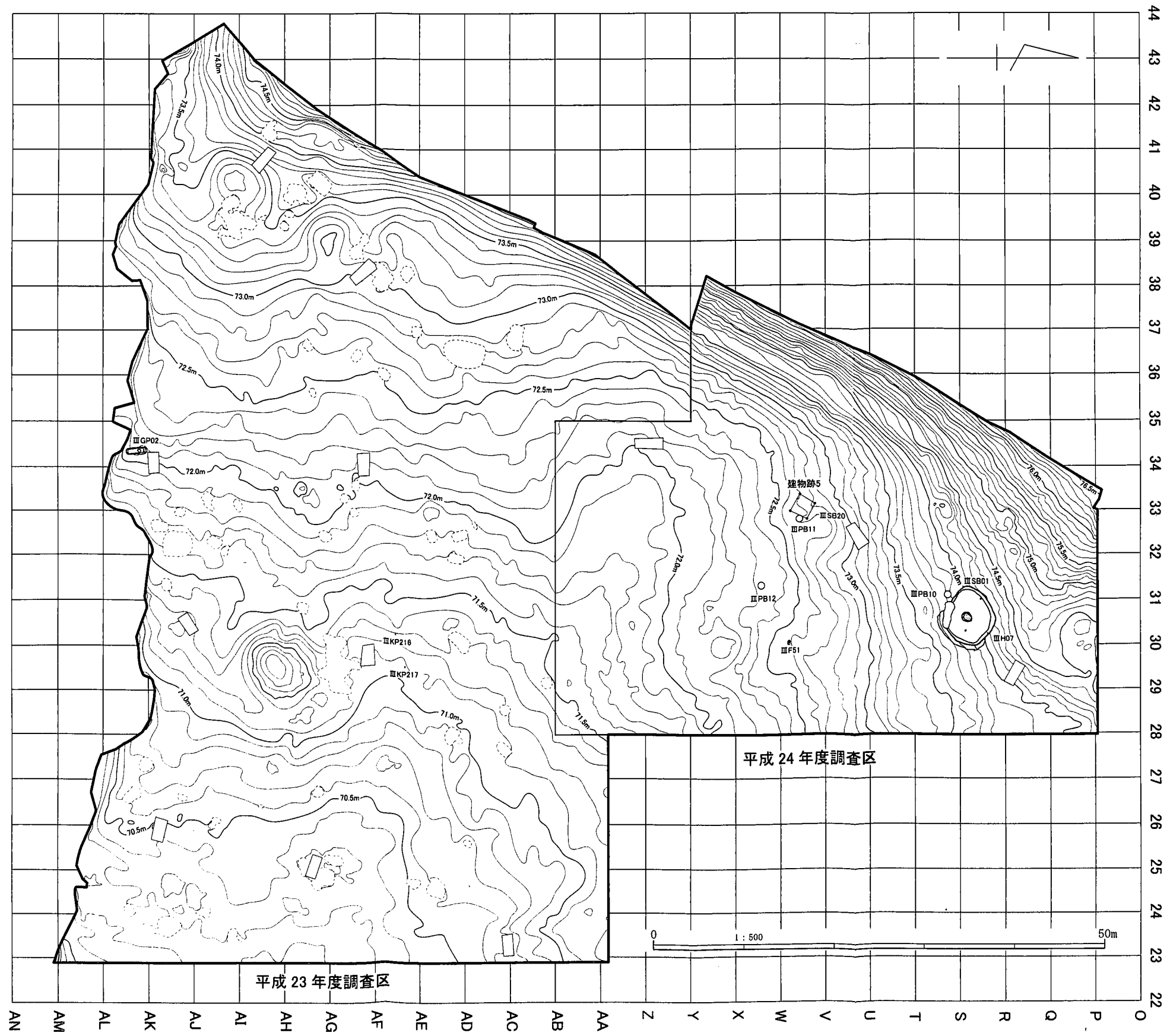
時期:5・6のニンカリは、オニキシベ2遺跡の中世段階のアイヌ文化期の土坑墓であるⅢGP-01・03(厚真町教育委員会 2011)に類例があることから、これと同じく中世段階のアイヌ文化期の土坑墓と推定している。但し、このニンカリの年代幅は現段階ではまだ確定されておらず、また墓標穴がないことや、本墓坑の立地及び頭位が上幌内モイ遺跡の擦文文化期の土坑墓ⅢGP-03(厚真町教育委員会 2009)と類似していることから、擦文文化期まで遡る可能性もある。(天方)

表Ⅱ-1 ⅢGP-02属性表

挿図番号	図版番号	層位	グリッド	計測対象	平面形	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ(cm)	長軸方向	備考
					調査面/ 坑底面	長軸	短軸	長軸	短軸			
Ⅱ-2	2-1	Ⅲc	AK-34	主体部	隅丸長方形/ 隅丸長方形	227	74	177	49	48	N-6°W	

表Ⅱ-2 ⅢGP-02出土遺物属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	遺物名	分類	層位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
									長軸	短軸	厚さ			
Ⅱ-3-1	40-1	-	61217	小刀	-	Ⅲ	ⅢGP-02	AK-34	318.1	29.2	6.8	149.2	Irn.	
Ⅱ-3-2	40-2	-	61216	刀子	-	Ⅲ	ⅢGP-02	AK-34	59.3	12.2	4.2	3.7	Irn.	
Ⅱ-3-3	40-3	-	61214	刀子	-	Ⅲ	ⅢGP-02	AK-34	38.8	15.5	5.1	8.0	Irn.	
Ⅱ-3-4	40-4	-	61215	金具	-	Ⅲ	ⅢGP-02	AK-34	35.0	32.1	8.3	4.9	Irn.	
Ⅱ-3-5	40-5	-	61218	ニンカリ	-	Ⅲ	ⅢGP-02	AK-34	63.3	57.3	-	-	Sn-Pb.	
Ⅱ-3-6	40-6	-	61219	ニンカリ	-	Ⅲ	ⅢGP-02	AK-34	59.8	49.0	-	13.0	Sn-Pb.	



図II-1 平成23・24年度 III層遺構配置図

III GP-02

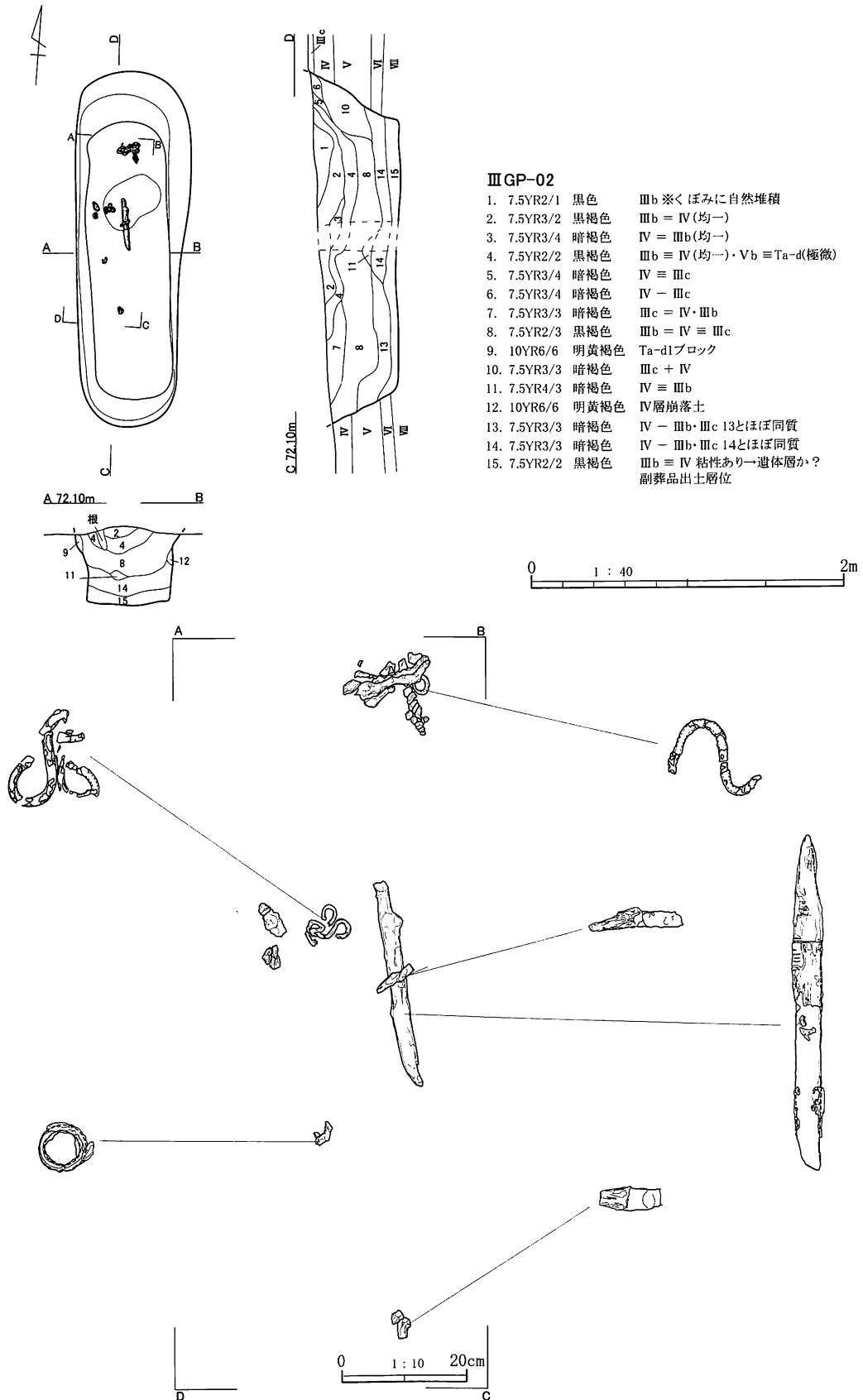
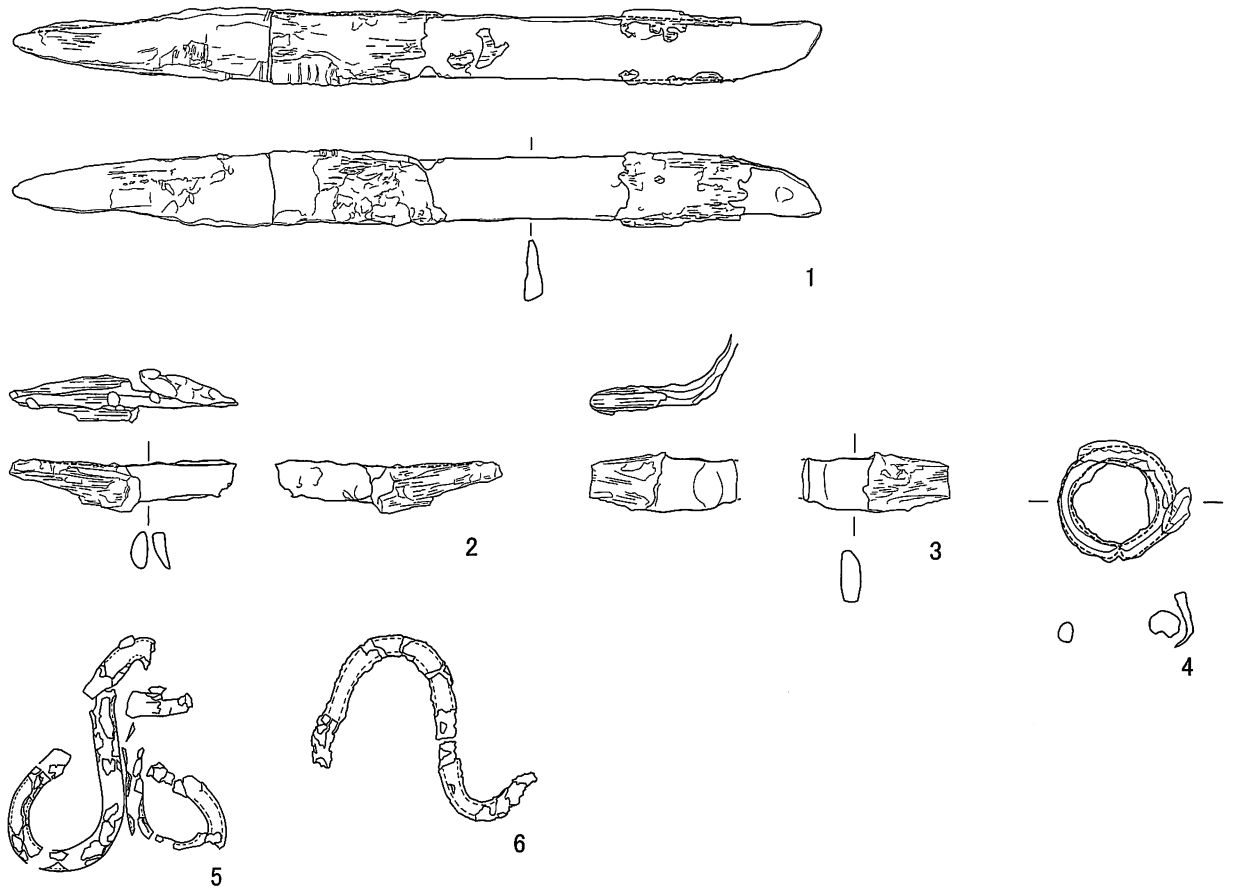
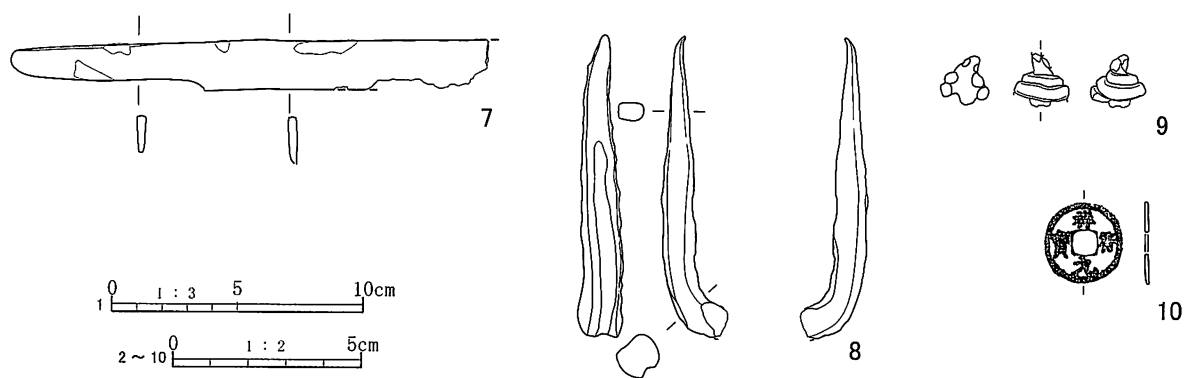


図 II-2 III GP-02 平面及び断面図

Ⅲ GP-02



包含層



図Ⅱ-3 ⅢGP-02 及び包含層出土遺物

第2節 アイヌ文化期包含層出土遺物 (図II-3-7~10 図版40-7~10)

7は刀子である。切先は欠失している。8は先端部が欠失した鉤状鉄製品で2面に溝が確認できる。9はコイル状鉄製品の破片と思われる。3~4mmの鉄線を左方向に巻き上げて作られており、巻き上げ方向が常呂町ライトコロ川口遺跡(東京大学文学部 1980)や、平取町二風谷遺跡(北海道埋蔵文化財センター 1986)とは異なる。コイルの内部にも鉄線が確認できるが、錆等から詳細な状態は看取できない。10は北宋銭で祥符元寶である。表面は摩耗している。(天方)

表II-3 アイヌ文化期包含層出土遺物属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	グリッド	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
II-3-7	40-7	-	60251	刀子	-	IIIbU	AD-24	126.3	13.2	2.3	10.4	Iron.	
II-3-8	40-8	-	66786	鉤状鉄製品	-	IIIbU	Y-35	79.3	17.9	12.0	23.2	Iron.	
II-3-9	40-9	-	60623	コイル状鉄製品	-	IIIbM	AF-25	13.9	14.4	12.3	2.3	Iron.	
II-3-10	40-10	-	60531	祥符元寶	-	IIIbM	AD-23	21.5	20.6	0.8	2.1	Cu.	

第三章 擦文・続縄文文化期の調査

平成 23・24 年度の擦文文化期の調査では、遺構は住居様遺構 1 軒、建物跡 1 軒、焼土 1 ヲ所、土器集中 3 ヲ所、集石 2 ヲ所を検出している。いずれも平成 24 年度の調査区内で出土した。本年度の調査では出土遺物は少なく、復元可能な土器が 4 個体分と棒状礫が出土している。

住居様遺構は所謂竪穴式とは異なる形態を持つもので、層位的な関係と炉跡から検出された炭化物の年代測定から、擦文文化期の後期後半と推定される。擦文文化期からアイヌ文化期にかけての住居形態の変化を示す遺構であろうと考えられる。

続縄文文化期の遺構は検出されておらず、遺物は後北 C2-D 式の注口土器 1 個体の破片と、礫石器 6 点が出土しているのみである。土器は AD-38 区のⅢc 層中位で出土しており、周囲の同一層ではその他の遺物は出土していない。近接する上幌内モイ遺跡 (2009a) やオニキシベ 2 遺跡 (2011) でも同時期の注口・片口土器が単体で出土しており、このような出土状態は本時期の生活及び行動様式の一部を反映するものと考えられる。 (天方・宮塚翔)

第 1 節 住居様遺構

7 号平地式建物跡〔ⅢH-07〕 (図Ⅲ-1~4、図版 3、4-1~3、42-1)

位置：R-29~31・S-30 区 規模：506×504×10 cm 長軸方向：N-43° W

付属遺構：炉跡 HF01 集石 SB01

確認・調査：Ta-b を重機で除去した段階で、R・S-29~31 区の緩斜面中で浅い窪みを確認した。住居跡等の遺構の可能性が考えられたので、窪みの中心を通る位置で十字にベルトを設定した。ベルト部以外のⅢa 層を調査後、斜面の傾斜と並行する南北方向のベルトに沿ってトレンチを設定し、この部分の調査を先行した。窪みの中央付近で焼土を検出し、上面に焼骨片を含むことから炉跡と判断した。土層断面の観察から、炉跡よりも上り斜面側ではⅢc 層が堆積しておらず、Ⅳ層に直接Ⅲb 主体の土層が堆積しており、下り斜面側ではⅢc 層上面にⅣ層が混入した二次堆積土を確認した。このことから上り斜面側を切り土し、その排土を下り斜面側に盛土し、平坦面を作出したと想定した。この時点で窪みを中心に周辺の地形測量を行っている。この後に東西ベルトに沿ってトレンチ調査を行い、床面で集石 (SB01) の一部を検出した。十字のトレンチ調査を終了した時点でも根痕の攪乱等で全体の規模が把握できなかったことや、検出プランが不明瞭であったことから、十字のトレンチ間にサブトレンチを設けて、これらの把握に努めた。これらのトレンチ調査終了後、土層断面の撮影及び実測を行い、床面の検出を行った。住居跡の調査がここまで進んだ段階で、住居の南側 (下り斜面側) で擦文土器の集中 (ⅢPB-10)、礫を中心とする遺物のまとまりを確認したことから、層位及び住居との位置関係より住居と関連するものと捉え合わせて撮影を行っている。住居跡の柱穴は床面を検出した時点、及びⅢc・Ⅳ・Ⅴ層の各上面で周囲の精査に努めたが 2 本の柱穴を確認したのみである。

形態：平面形は一部根の押し込みによる攪乱で不明瞭な部分もあるが、やや不整形で隅丸方形を基調としていると考えられる。上り斜面側は削平した地山面を、下り斜面側は削平した際の排土上面を床面及び壁面としている。床面は平坦で、壁面は低く非常に緩やかに立ち上がる。このような状態からいわゆる竪穴式とは異なるものである。

表Ⅲ-1 擦文文化期遺構群一覧表

遺構名	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
	長軸	短軸				
ⅢH-07	506	504	R・S-29～31	ⅢbL	SB01・HF01	
建物跡5	222	208	V-32・33	Ⅳ		
ⅢF-51	45	28	V-30	ⅢcU		
ⅢPB-10	174	69	S-30・31	ⅢbL	ⅢH-07	
ⅢPB-11	58	52	V-32	ⅢbL	建物跡5	
ⅢPB-12	16	12	W-31	ⅢbL	建物跡5	
ⅢSB-20	236	108	V・W-32・33	ⅢbL	建物跡5	

表Ⅲ-2 ⅢH-07属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	長軸方向	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸		
Ⅲ-1	3-1	ⅢH-07	R・S-29～31	VbL	N-43°W	506	504	-	-	10	

堆積状態：土層 1・2 は覆土である。土層 1 は住居全面を覆うⅢb 層主体のもので、住居廃絶後に堆積した基本層と思われる。土層 2 は上り斜面側の壁面周辺に沿って堆積するもので、壁面の小崩落等による流入土と思われる。土層 3～6 は炉跡である。土層 7・8 は上り斜面側を切り土した際の排土で、床面を構築している。

付属炉（図Ⅲ-1）：本住居跡に付属する炉跡は HF01 の 1 ヶ所である。炉の燃焼面の上にはⅢb 層主体の土層 1 が 4 cm 程覆っている。土層 3 には焼骨片・炭化物が多く含まれており、この層の土壌を回収しフローテーションを行った。その結果、焼骨片の一部からシカと魚骨、炭化物片の一部からクルミとマメ科の種子を確認した。これらの炭化物を AMS 年代測定に委託し、暦年較正年代 (2σ) で 13 世紀、擦文文化期後期～晩期の年代が得られている。調査時の所見では、炉の上面を覆う黒色土の厚さ等から擦文文化期と考えており、AMS 年代測定の結果と合致する。

柱 穴（図Ⅲ-2）：本住居跡からは 4 本の柱穴を検出した。ⅢKP-01・02 はⅢc 層上面、ⅢKP-03・04 は V 層上面である。いずれも打ち込み式である。前述したように精査を繰り返し検出に努めたが、他に確認することはできなかった。 (天方)

ⅢPB-10 (図Ⅲ-2・4-31 図版 5-3、41-1)

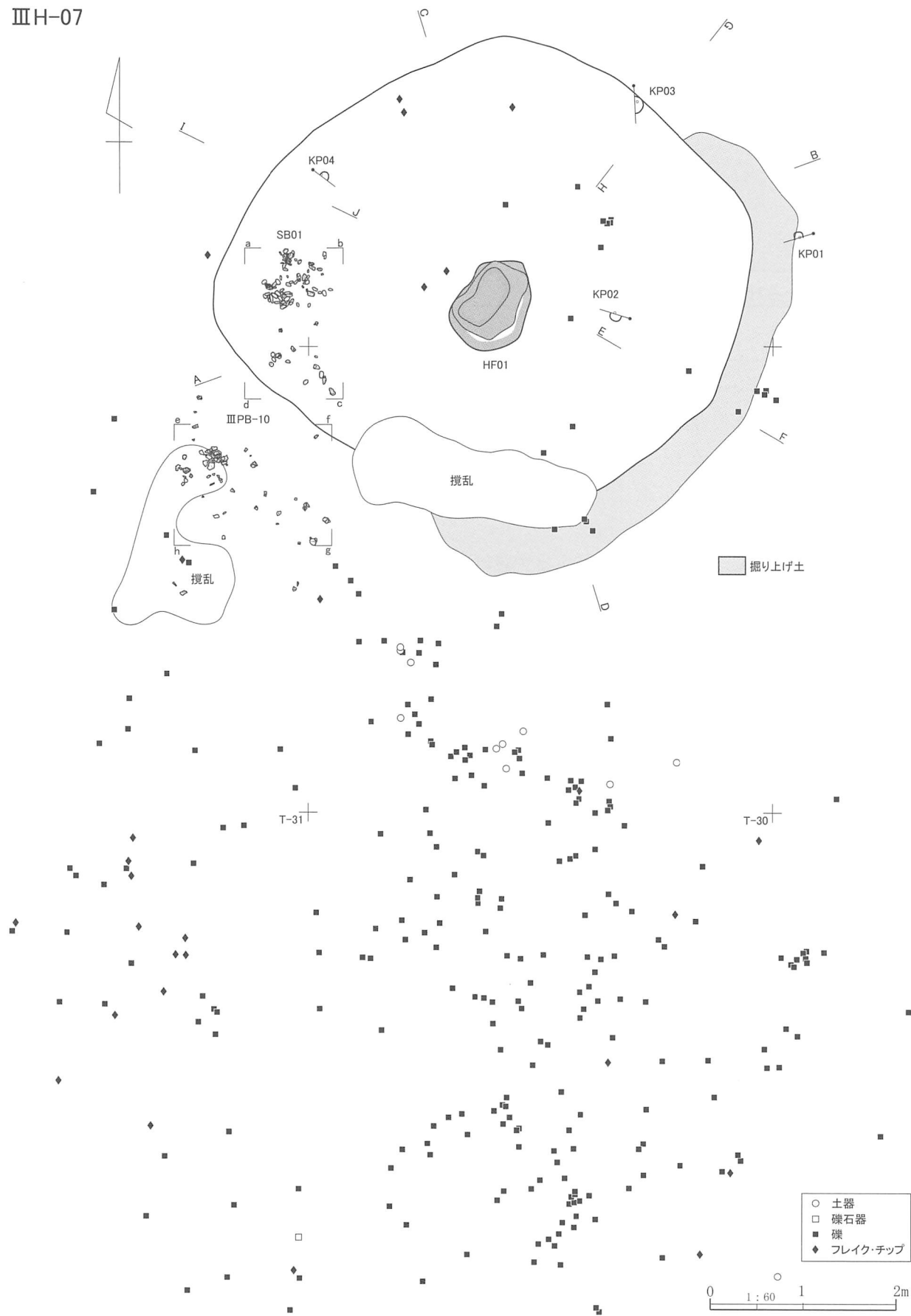
本土器集中はⅢH-07 の南西側 (外側) に位置し、Ⅲb 層で検出した。現場段階の所見でもⅢH-07 と同一レベルから検出されていることから関連遺構として取り扱いここで掲載する。ⅢH-07 との関連を考慮してⅢb 層下位まで慎重に掘り下げ、174×69cm の範囲に土器片を確認した。微細図を作成して取り上げを行った。 (宮塚翔)

図Ⅲ-4-31 はⅦ群 B3c 類に属する甕形土器。口縁部に刻み、胴部文様帯は刻線と刻みが斜位方向の後、4 条の沈線文が施文される。器形や文様から後期後半に比定される。 (宮塚義)

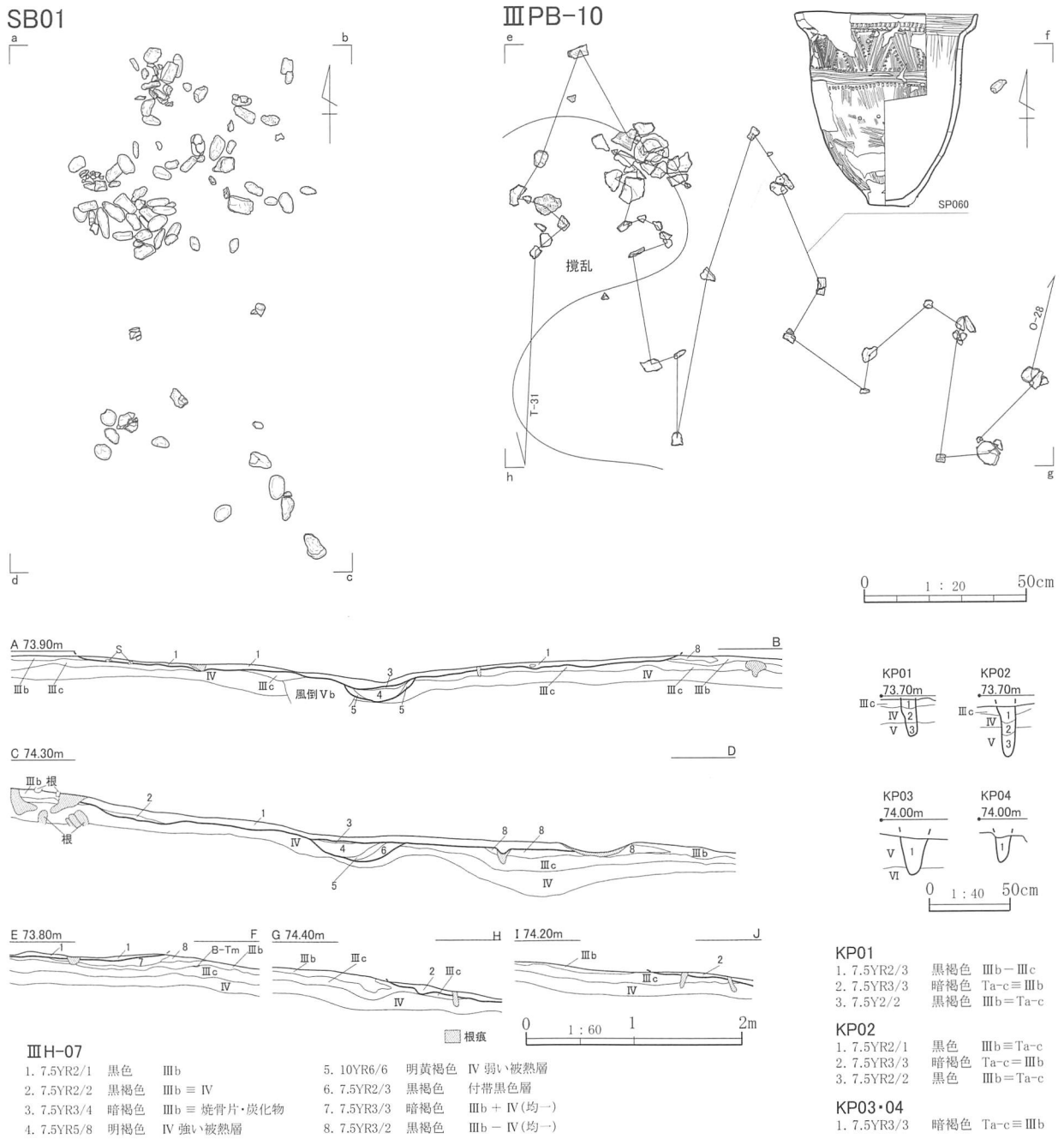
SB01 (図Ⅲ-2～4 図版 42-1)

住居床面から礫 163 点が出土し、そのうち完形礫は 100 点で、被熱礫はわずか 4 点である。礫の大きさは長軸が 36～98mm、短軸が 19～48mm で平面形が小判型のものが多く、意図的に似た形状の礫を集めたものと思われる。紐ずれの痕等は認められない。 (宮崎)

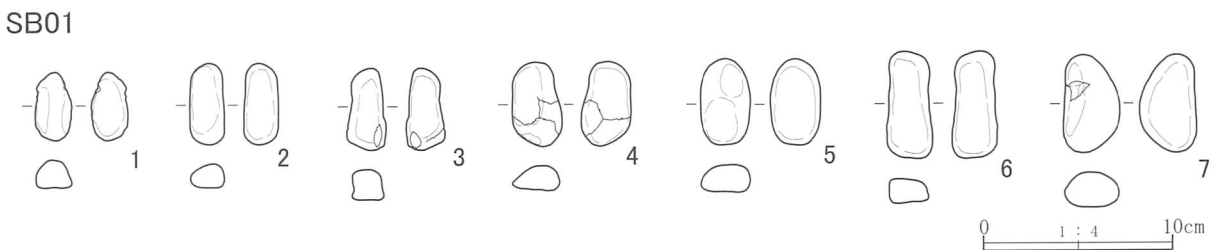
ⅢH-07



図Ⅲ-1 ⅢH-07 平面及び遺物分布図

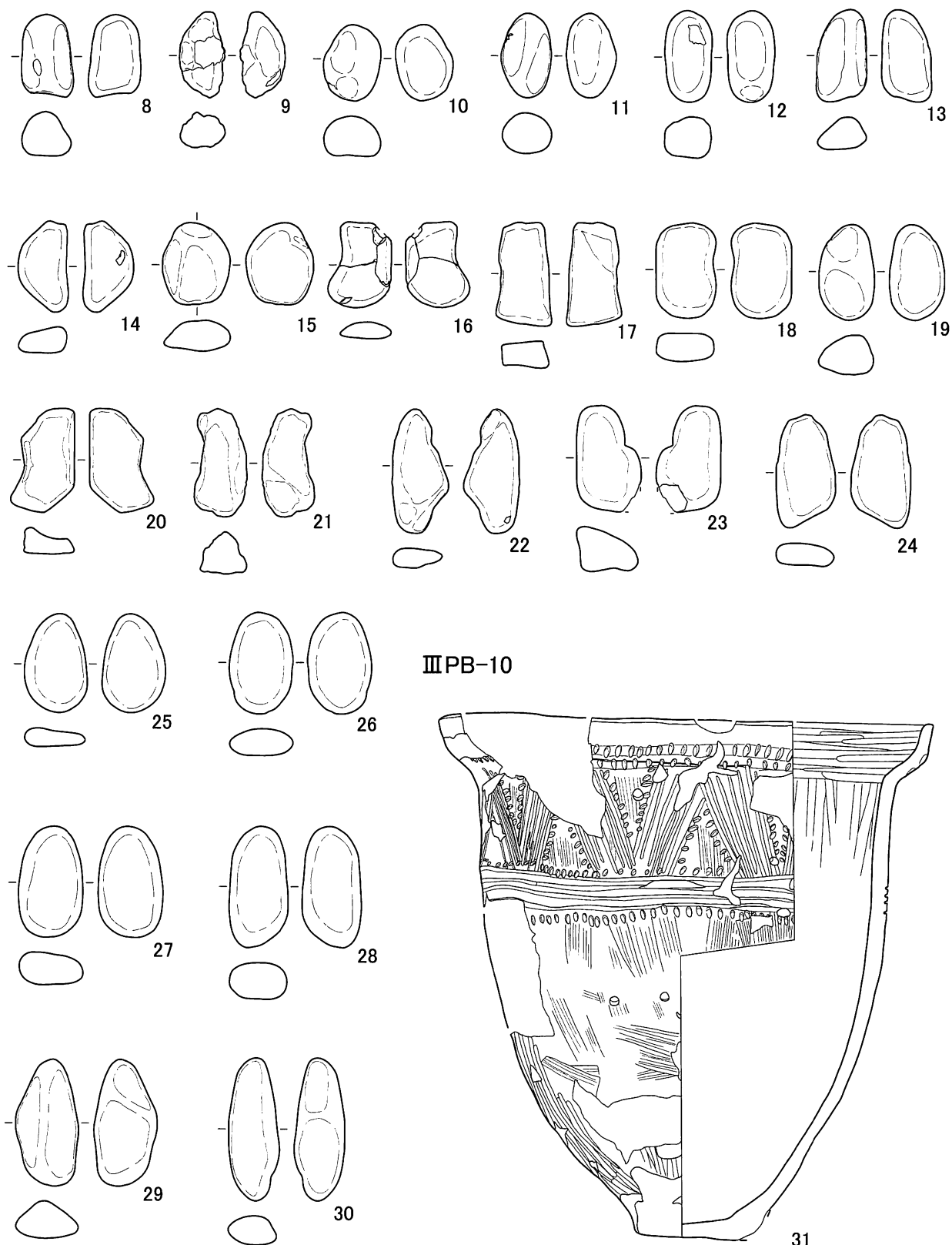


図III-2 III H-07 断面及び遺物微細図



図III-3 SB01 出土礫 (1)

SB01



III PB-10

8 ~ 30 : 0 1 : 4 10cm 31 : 0 1 : 3 5 10cm

図III-4 SB01 出土礫(2) 及びIII PB-10 出土土器

表III-3 IIIPB-10出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	器 種	部位	器面調整		文 様	備 考
									外側	内側		
									口縁/頸部 /胴部/底側面	口縁/頸部 /胴部	口縁部/ 文様帯	
III-4-31	41-1	SP060	VII B3c	S-30	IIIbL	8	甕	口縁部～ 底部	ナデ/ハケメ/ ハケメ/ミガキ	ナデ+ミガキ/ ミガキ/ミガキ	刻み/沈線文 +刻み	補修孔
				S-31	KR	2						
				III PB-10	IIIbL	53						

第2節 建物跡

建物跡5 (図III-5 図版4-4～8)

位置：V-32・33区 規模：222×208cm 構成：4本柱(IIIKP-218～221)

付属遺構：III PB-11・III SB-20

確認・調査：III H-07の南西側平坦面でIII PB-11・III SB-20の遺物取り上げ後、周辺の柱穴等の確認のため、III c～IV層を数回に分けてジョレン精査を繰り返した。IV層で黒色土の円形プランをいくつか検出し、半截して確認した。その結果、1辺が約2mの間隔で4本の柱穴を検出し、建物跡とした。なお、柱穴周囲のIII b層で擦文土器と被熱礫集中を検出しているが、建物跡との関連については不明で、帰属時期については擦文～アイヌ文化期の範疇であると思われる。

柱 穴：確認面での上端の直径が17～20cm、下端が6～10cmで、深さは3本が45cm前後で1本が32cmである。すべて掘り方で先端はV b層に達している。柱痕部分の覆土はしまりの弱いIII b層主体である。(宮崎)

第3節 遺物集中

III PB-11・III SB-20 (図III-5・6-1、2、4～16 図版5-4・5、41-2・3、42-2)

III PB-11とIII SB-20は重複しているので、ここで一括して掲載する。V-32・33・W-32区で検出した。III層上面を精査中、狭い範囲で擦文土器と被熱礫のまとまりを検出した。土器集中の中心付近が樽前bテフラを重機で除去した際に掘削されていたが、遺物の広がりを確認するためIII b層下位まで掘り下げたところ、土器片の集中を中心にして、それを取り囲むように387×306cmの範囲で礫が出土した。それぞれIII PB-11とIII SB-20と付番し、微細図を作成して遺物を取り上げた。周辺に焼土等は検出されなかったが、遺物集中の北側斜面で擦文文化期の住居様遺構が検出されていることから、この地点を捨て場にした可能性も考えられる。III SB-20の出土礫は109点で、そのうち完形礫は41点である。長軸が約58～97mm、長短比の平均が2.0と棒状の礫が大半を占めている。(宮崎)

出土遺物(図III-6-1・2・4～16)：1は鉢型土器。2は甕形土器。1はハケメの上にヨコナデ、ミガキが施される。下半はハケメ後にナデ調整され、底部付近にのみミガキが縦方向に認められる。2は内外面ともミガキ。4～16は棒状の構成礫で完形は41点出土し、うち44%が被熱している。紐痕は認められない。(1・2 宮塚義 4～16 宮崎)

表Ⅲ-4 SB01属性表(1)

挿図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比	長短比標準偏差	重量(g)	被熱	材質	備考
						長軸	標準偏差	短軸	標準偏差	厚さ	標準偏差						
Ⅲ-3-1	42-1	-	140738	ⅢbL	完形	35.9	-26.7	19.5	-14.3	16.4	-3.3	1.8	-0.1	13.0		Sa.	
-	42-1	-	140872	ⅢbL	完形	38.4	-24.2	23.4	-10.4	16.4	-3.3	1.6	-0.3	17.7		Sa.	
-	42-1	-	140845	ⅢbL	完形	40.5	-22.1	21.3	-12.5	10.9	-8.8	1.9	0.0	12.5		Sa.	
-	42-1	-	140725	ⅢbL	完形	40.1	-22.5	21.7	-12.1	13.3	-6.4	1.8	-0.1	13.7		Sa.	
-	42-1	-	140663	ⅢbL	完形	41.7	-20.9	19.2	-14.6	15.1	-4.6	2.2	0.3	12.8		Sa.	
Ⅲ-3-2	42-1	-	140682	ⅢbL	完形	42.8	-19.8	18.6	-15.2	15.4	-4.3	2.3	0.4	13.4		Sa.	
-	42-1	-	140724	ⅢbL	完形	41.9	-20.7	26.2	-7.6	9.2	-10.5	1.6	-0.3	14.4		Sa.	
-	42-1	-	140718	ⅢbL	完形	42.7	-19.9	27.2	-6.6	13.9	-5.8	1.6	-0.3	18.1		Mud.	
Ⅲ-3-3	42-1	-	140693	ⅢbL	完形	43.0	-19.6	20.3	-13.5	16.0	-3.7	2.1	0.2	18.4		Sa.	
-	42-1	-	140678	ⅢbL	完形	44.0	-18.6	27.4	-6.4	17.9	-1.8	1.6	-0.3	25.7		Sa.	
Ⅲ-3-4	42-1	-	140895	ⅢbL	完形	45.0	-17.6	26.0	-7.8	13.7	-6.0	1.7	-0.2	16.7		Sa.	
-	42-1	-	140728	ⅢbL	完形	44.8	-17.8	27.2	-6.6	9.9	-9.8	1.6	-0.3	17.7		Sa.	
-	42-1	-	140848	ⅢbL	完形	46.7	-15.9	26.1	-7.7	12.4	-7.3	1.8	-0.1	18.5		Sa.	
-	42-1	12ⅢS05	140868 140879	ⅢbL	完形	45.5	-17.1	25.2	-8.6	17.3	-2.4	1.8	-0.1	29.7		Sa.	
-	42-1	12ⅢS04	140855 140878	ⅢbL	完形	47.3	-15.3	29.9	-3.9	15.2	-4.5	1.6	-0.3	26.9		Sa.	
Ⅲ-3-5	42-1	-	140729	ⅢbL	完形	46.3	-16.3	27.3	-6.5	16.6	-3.1	1.7	-0.2	25.3		Sa.	
-	42-1	-	140857	ⅢbL	完形	48.2	-14.4	24.4	-9.4	10.6	-9.1	2.0	0.1	14.4		Mud.	
-	42-1	-	140846	ⅢbL	完形	48.6	-14.0	25.6	-8.2	13.0	-6.7	1.9	0.0	17.5		Sa.	
-	42-1	-	140745	ⅢbL	完形	50.5	-12.1	47.2	13.4	13.3	-6.4	1.1	-0.8	50.0		Sa.	
-	42-1	-	140726	ⅢbL	完形	51.3	-11.3	27.6	-6.2	7.3	-12.4	1.9	0.0	13.4		Sa.	
Ⅲ-4-10	42-1	-	140744	ⅢbL	完形	53.1	-9.5	38.9	5.1	27.6	7.9	1.4	-0.5	63.5	○	Sa.	
-	42-1	-	140849	ⅢbL	完形	55.5	-7.1	27.1	-6.7	9.6	-10.1	2.0	0.1	19.1		Sa.	
-	42-1	-	140660	ⅢbL	完形	53.9	-8.7	24.0	-9.8	14.6	-5.1	2.2	0.3	19.9		Sa.	
-	42-1	-	140716	ⅢbL	略完形	49.6	-13.0	39.4	5.6	15.5	-4.2	1.3	-0.6	36.6		Mud.	
-	42-1	-	140685	ⅢbL	完形	53.5	-9.1	20.7	-13.1	14.7	-5.0	2.6	0.7	17.4		Sa.	
Ⅲ-3-7	42-1	-	140733	ⅢbL	完形	52.5	-10.1	29.9	-3.9	19.7	0.0	1.8	-0.1	28.1		Sa.	
-	42-1	-	140859	ⅢbL	完形	53.5	-9.1	21.0	-12.8	18.0	-1.7	2.5	0.6	33.4		Sa.	
-	42-1	-	140735	ⅢbL	完形	51.0	-11.6	42.7	8.9	17.4	-2.3	1.2	-0.7	47.1		Sa.	
-	42-1	-	140880	ⅢbL	完形	55.7	-6.9	29.4	-4.4	9.6	-10.1	1.9	0.0	19.9		Sa.	
-	42-1	-	140985	ⅢbL	完形	55.4	-7.2	38.5	4.7	25.7	6.0	1.4	-0.5	67.8		Sa.	
Ⅲ-4-8	42-1	-	140891	ⅢbL	完形	57.9	-4.7	34.4	0.6	33.1	13.4	1.7	-0.2	84.1		Sa.	
-	42-1	-	140981	ⅢbL	完形	56.5	-6.1	46.8	13.0	15.5	-4.2	1.2	-0.7	53.8		Sa.	
-	42-1	-	140852	ⅢbL	完形	57.4	-5.2	28.0	-5.8	13.7	-6.0	2.1	0.2	28.9		Sa.	
Ⅲ-4-15	42-1	-	140737	ⅢbL	完形	56.0	-6.6	46.7	12.9	22.2	2.5	1.2	-0.7	57.7		Sa.	
-	42-1	-	140833	ⅢbL	完形	56.1	-6.5	20.8	-13.0	15.2	-4.5	2.7	0.8	21.9		Sa.	
-	42-1	-	140736	ⅢbL	完形	58.6	-4.0	34.7	0.9	12.3	-7.4	1.7	-0.2	27.5		Sa.	
-	42-1	-	140863	ⅢbL	完形	62.4	-0.2	38.4	4.6	24.0	4.3	1.6	-0.3	54.4		Sa.	
-	42-1	-	140865	ⅢbL	完形	62.6	0.0	36.6	2.8	24.6	4.9	1.7	-0.2	63.4		Sa.	
-	42-1	-	140844	ⅢbL	完形	61.0	-1.6	24.8	-9.0	18.5	-1.2	2.5	0.6	36.9		Sa.	
-	42-1	-	140743	ⅢbL	完形	61.4	-1.2	40.7	6.9	20.5	0.8	1.5	-0.4	68.6		Sa.	
Ⅲ-4-14	42-1	-	140695	ⅢbL	完形	62.7	0.1	34.5	0.7	19.1	-0.6	1.8	-0.1	45.2		Mud.	
-	42-1	-	140667	ⅢbL	完形	60.7	-1.9	28.3	-5.5	27.7	8.0	2.1	0.2	60.2		Sa.	
-	42-1	-	140860	ⅢbL	完形	59.2	-3.4	31.1	-2.7	22.2	2.5	1.9	0.0	49.7		Sa.	
Ⅲ-4-9	42-1	-	140713	ⅢbL	完形	59.1	-3.5	30.1	-3.7	26.9	7.2	2.0	0.1	51.7		Sa.	
-	42-1	-	140986	ⅢbL	完形	59.3	-3.3	35.6	1.8	22.6	2.9	1.7	-0.2	62.0		Sa.	
-	42-1	-	140710	ⅢbL	完形	60.8	-1.8	33.7	-0.1	14.9	-4.8	1.8	-0.1	38.6		Sa.	
Ⅲ-4-11	42-1	-	140842	ⅢbL	略完形	57.5	-5.1	34.0	0.2	28.5	8.8	1.7	-0.2	60.5		Sa.	
-	42-1	-	140847	ⅢbL	完形	57.7	-4.9	20.4	-13.4	19.3	-0.4	2.8	0.9	19.7		Sa.	
Ⅲ-3-6	42-1	-	140691	ⅢbL	完形	57.3	-5.3	24.6	-9.2	15.1	-4.6	2.3	0.4	26.9		Sa.	
-	42-1	-	140892	ⅢbL	完形	62.7	0.1	39.0	5.2	16.8	-2.9	1.6	-0.3	51.2		Sa.	
Ⅲ-4-12	42-1	-	140843	ⅢbL	完形	63.0	0.4	33.2	-0.6	30.0	10.3	1.9	0.0	77.0		Sa.	
-	42-1	-	140715	ⅢbL	完形	63.4	0.8	37.7	3.9	15.7	-4.0	1.7	-0.2	48.8		Sa.	
-	42-1	-	140659	ⅢbL	完形	63.2	0.6	41.3	7.5	11.7	-8.0	1.5	-0.4	32.1		Sa.	
-	42-1	-	140988	ⅢbL	完形	63.0	0.4	22.4	-11.4	27.1	7.4	2.8	0.9	44.9		Sa.	
-	42-1	12ⅢS06	140696	ⅢbL	完形	60.8	-1.8	34.2	0.4	23.1	3.4	1.8	-0.1	47.5		Sa.	
-	42-1	-	140875	ⅢbL	完形	65.8	3.2	40.0	6.2	16.4	-3.3	1.6	-0.3	52.8		Sa.	
-	42-1	-	140673	ⅢbL	完形	63.6	1.0	26.9	-6.9	21.7	2.0	2.4	0.5	38.1		Sa.	
-	42-1	12ⅢS11	140687	ⅢbL	完形	63.6	1.0	35.0	1.2	21.9	2.2	1.8	-0.1	59.3		Mud.	
-	42-1	-	140732	ⅢbL	完形	63.7	1.1	34.2	0.4	15.7	-4.0	1.9	0.0	39.2		Sa.	
-	42-1	-	140688	ⅢbL	完形	65.3	2.7	27.7	-6.1	23.7	4.0	2.4	0.5	31.7		Ser.	
Ⅲ-4-18	42-1	-	140870	ⅢbL	完形	64.7	2.1	41.5	7.7	20.8	1.1	1.6	-0.3	74.7		Sa.	
-	42-1	-	140723	ⅢbL	完形	63.4	0.8	34.4	0.6	17.6	-2.1	1.8	-0.1	36.1		Sa.	
Ⅲ-4-16	42-1	-	140881	ⅢbL	完形	59.2	-3.4	41.2	7.4	12.3	-7.4	1.4	-0.5	36.1		Mud.	
-	42-1	-	140661	ⅢbL	完形	68.2	5.6	43.2	9.4	20.3	0.6	1.6	-0.3	57.2		Sa.	
Ⅲ-4-19	42-1	-	140984	ⅢbL	完形	64.5	1.9	39.8	6.0	26.4	6.7	1.6	-0.3	73.8	○	Mud.	

表Ⅲ-5 SB01属性表(2)

挿図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比	長短比標準偏差	重量(g)	被熱	材質	備考
						長軸	標準偏差	短軸	標準偏差	厚さ	標準偏差						
-	42-1	-	140982	ⅢbL	完形	68.4	5.8	34.5	0.7	19.2	-0.5	2.0	0.1	41.9		Mud.	
-	42-1	-	140692	ⅢbL	完形	66.5	3.9	38.2	4.4	21.5	1.8	1.7	-0.2	66.7		Sa.	
Ⅲ-4-25	42-1	-	140871	ⅢbL	完形	68.1	5.5	43.3	9.5	12.7	-7.0	1.6	-0.3	47.8		Sa.	
-	42-1	12ⅢS03	140699 140706	ⅢbL	完形	68.9	6.3	28.4	-5.4	27.9	8.2	2.4	0.5	74.9		Sa.	
Ⅲ-4-26	42-1	-	140680	ⅢbL	完形	69.8	7.2	43.4	9.6	18.8	-0.9	1.6	-0.3	74.2		Sa.	
-	42-1	-	140676	ⅢbL	略完形	72.7	10.1	36.4	2.6	21.5	1.8	2.0	0.1	59.3		Sa.	
-	42-1	12ⅢS29	140669	ⅢbL	略完形	78.3	15.7	45.1	11.3	20.0	0.3	1.7	-0.2	77.0		Sa.	
-	42-1	-	140677	ⅢbL	完形	71.6	9.0	25.8	-8.0	41.4	21.7	2.8	0.9	67.4		Mud.	
Ⅲ-4-17	42-1	-	140671	ⅢbL	完形	69.8	7.2	39.3	5.5	21.2	1.5	1.8	-0.1	80.6		Sa.	
-	42-1	-	140683	ⅢbL	完形	72.8	10.2	40.3	6.5	13.4	-6.3	1.8	-0.1	55.7		Sa.	
Ⅲ-4-20	42-1	-	140674	ⅢbL	完形	73.2	10.6	42.3	8.5	18.8	-0.9	1.7	-0.2	51.4		Mud.	
-	42-1	-	140739	ⅢbL	略完形	73.6	11.0	47.4	13.6	21.4	1.7	1.6	-0.3	73.6		Sa.	
-	42-1	-	140662	ⅢbL	完形	76.3	13.7	41.0	7.2	15.1	-4.6	1.9	0.0	59.1		Sa.	
-	42-1	-	140700	ⅢbL	完形	71.5	8.9	37.5	3.7	26.3	6.6	1.9	0.0	90.1		Sa.	
Ⅲ-4-23	42-1	-	140893	ⅢbL	完形	74.6	12.0	48.5	14.7	30.2	10.5	1.5	-0.4	117.7		Sa.	
-	42-1	-	140708	ⅢbL	完形	75.0	12.4	39.1	5.3	22.8	3.1	1.9	0.0	78.8	○	Sa.	
Ⅲ-4-13	42-1	-	140689	ⅢbL	完形	74.1	11.5	34.3	0.5	15.5	-4.2	2.2	0.3	45.9		Sa.	
-	42-1	-	140668	ⅢbL	完形	73.1	10.5	39.0	5.2	24.8	5.1	1.9	0.0	97.8	○	Sa.	
Ⅲ-4-27	42-1	-	140740	ⅢbL	完形	76.8	14.2	44.6	10.8	22.4	2.7	1.7	-0.2	95.3		Sa.	
Ⅲ-4-21	42-1	-	140711	ⅢbL	完形	75.9	13.3	29.3	-4.5	34.2	14.5	2.6	0.7	68.3		Ser.	
Ⅲ-4-24	42-1	-	140717	ⅢbL	完形	77.8	15.2	42.1	8.3	18.8	-0.9	1.8	-0.1	66.3		Sa.	
-	42-1	-	140681	ⅢbL	完形	78.3	15.7	35.7	1.9	27.8	8.1	2.2	0.3	98.5		Sa.	
-	42-1	-	140839	ⅢbL	完形	84.0	21.4	34.7	0.9	25.5	5.8	2.4	0.5	54.7		Mud.	
Ⅲ-4-28	42-1	-	140864	ⅢbL	完形	82.7	20.1	41.2	7.4	26.8	7.1	2.0	0.1	124.6		Sa.	
-	42-1	-	140672	ⅢbL	完形	85.2	22.6	41.7	7.9	29.3	9.6	2.0	0.1	89.4		Mud.	
Ⅲ-4-22	42-1	-	140741	ⅢbL	完形	85.6	23.0	38.8	5.0	23.0	3.3	2.2	0.3	65.6		Mud.	
-	42-1	-	140679	ⅢbL	完形	85.7	23.1	32.4	-1.4	18.4	-1.3	2.6	0.7	65.5		Sa.	
-	42-1	-	140722	ⅢbL	略完形	81.3	18.7	46.6	12.8	26.3	6.6	1.7	-0.2	112.3		Sa.	
-	42-1	-	140742	ⅢbL	略完形	86.4	23.8	54.3	20.5	29.4	9.7	1.6	-0.3	142.9		Sa.	
Ⅲ-4-29	42-1	-	140684	ⅢbL	完形	87.5	24.9	43.2	9.4	26.4	6.7	2.0	0.1	100.4		Sa.	
-	42-1	-	140867	ⅢbL	完形	89.6	27.0	35.2	1.4	18.5	-1.2	2.5	0.6	52.0		Sa.	
-	42-1	-	140983	ⅢbL	完形	92.7	30.1	41.3	7.5	26.0	6.3	2.2	0.3	81.9		Mud.	
Ⅲ-4-30	42-1	-	140670	ⅢbL	完形	98.2	35.6	35.0	1.2	21.1	1.4	2.8	0.9	81.8		Sa.	
-	42-1	-	140861	ⅢbL	完形	58.1	-4.5	30.7	-3.1	18.1	-1.6	1.9	0.0	42.4		Sa.	
-	42-1	-	140876	ⅢbL	略完形	76.3	13.7	34.3	0.5	22.8	3.1	2.2	0.3	66.5	○	Sa.	
完形合計													100				
完形平均値						62.6		33.8		19.7		1.9		51.2			
遺物総重量													5123.1				

表Ⅲ-6 建物跡5柱穴属性表(平面規模:222cm×208cm)

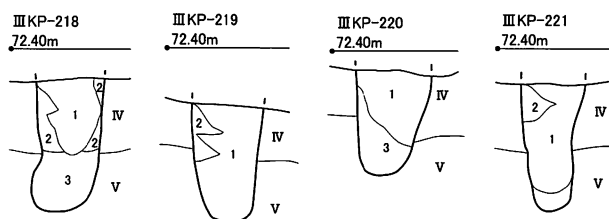
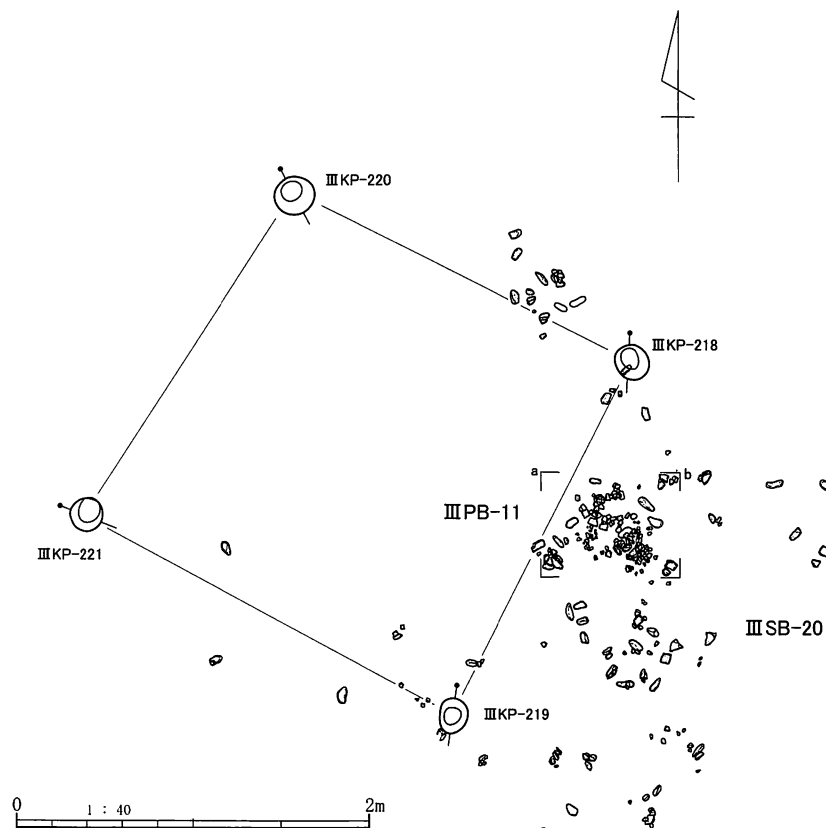
挿図番号	図版番号	遺構名	規模(cm)			傾き(度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
Ⅲ-5	4-5	ⅢKP-218	18	10	43	4°	掘方	
Ⅲ-5	4-6	ⅢKP-219	19	9	46	0°	掘方	
Ⅲ-5	4-7	ⅢKP-220	20	8	32	5°	掘方	
Ⅲ-5	4-8	ⅢKP-221	17	6	47	0°	掘方	

表Ⅲ-7 ⅢPB-11出土土器属性表

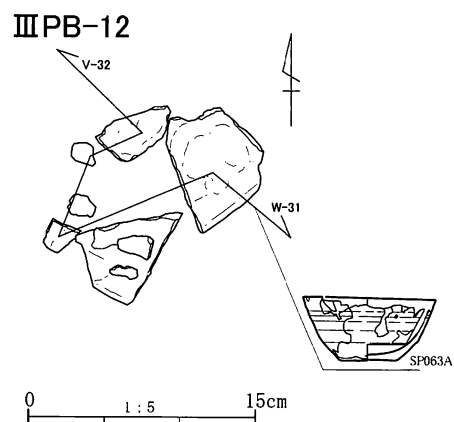
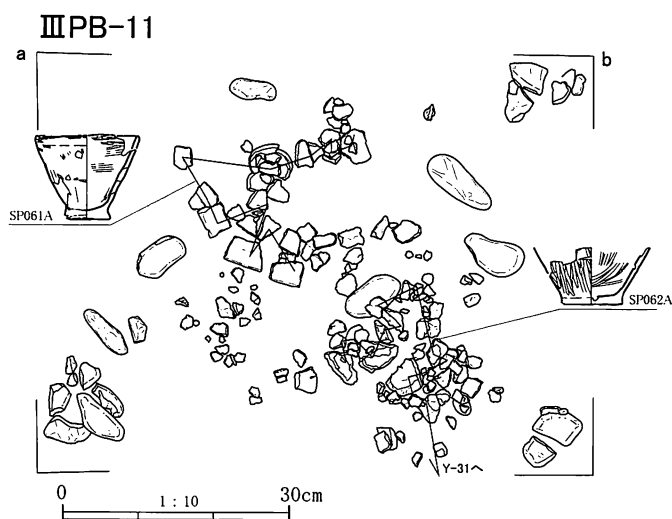
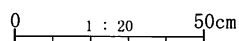
挿図番号	図版番号	個体名称	分類	遺構名/グリッド	層位	点数	器種	部位	器面調整		文様	備考
									外側	内側		
									口縁部/頸部/胴部/底側面	口縁部/頸部/胴部	口縁部/文様帯	
Ⅲ-6-1	41-2	SP061A	VII	ⅢPB-11	ⅢbL	14	鉢	口縁部～底部	ハケメ・ヨコナデ・ハケメ・ミガキ	ハケメ・ナデ/ハケメ・ミガキ/ミガキ	-	
Ⅲ-6-2	41-3	SP062A	VIII	ⅢPB-11 Y-31	ⅢbL KR	16 1	甕	胴部～底部	ミガキ/ミガキ	ミガキ	-	

建物跡5

IV-33

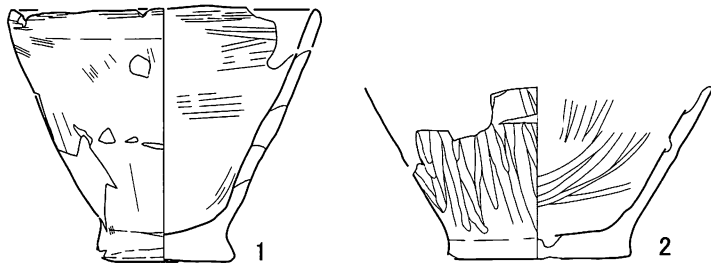


III KP-218~221
 1. 7.5YR2/2 黒褐色 IIIb主体
 2. 7.5YR3/2 黒褐色 IV=IIIb(均一)
 3. 7.5YR2/3 暗褐色 IIIb=IV(均一)

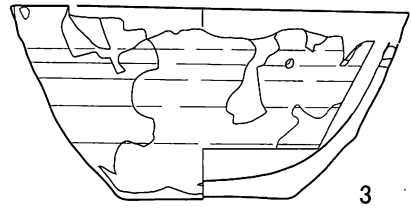


図III-5 建物跡5 関連遺構及びIII PB-12微細図

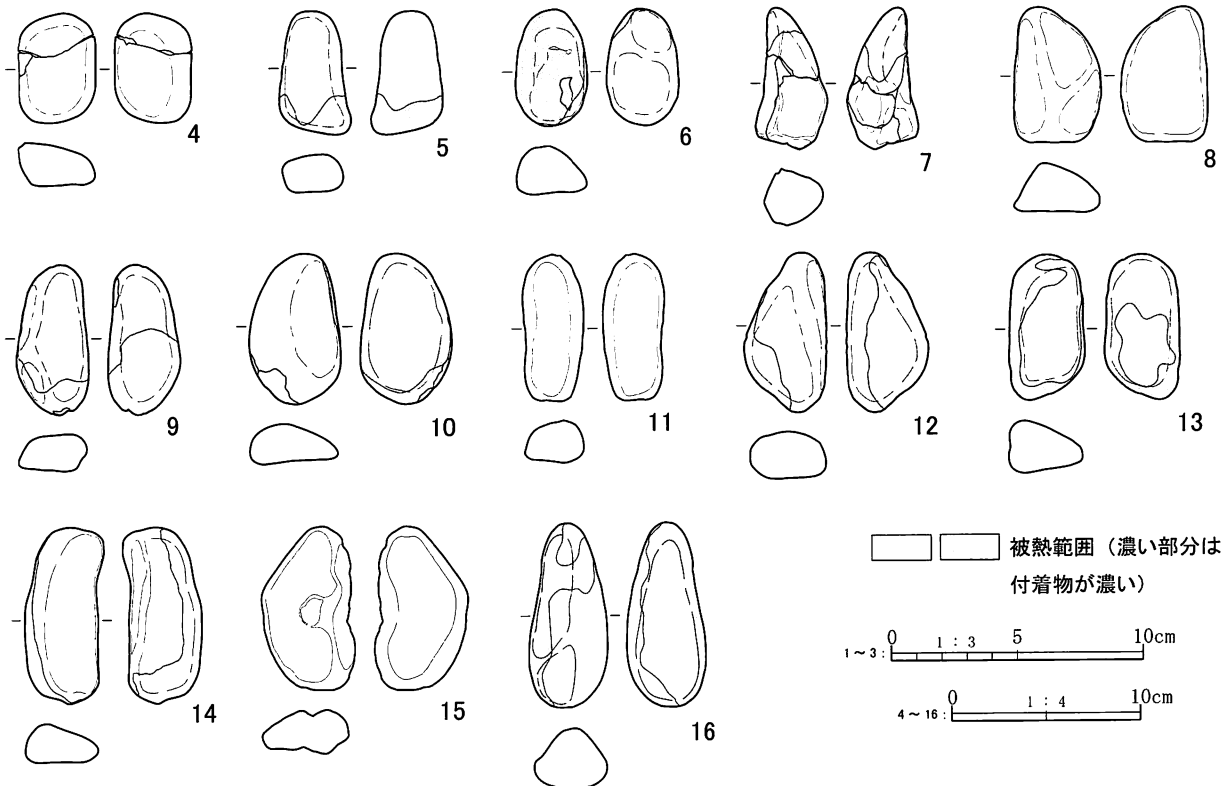
ⅢPB-11



ⅢPB-12



ⅢSB-20



図Ⅲ-6 ⅢPB-11・12 及びⅢSB-20 出土遺物

ⅢPB-12 (図Ⅲ-5・6-3 図版 5-6、41-4ab)

調査区平坦面のW-31区でⅢa層調査中に擦文土器を検出した。Ⅲb層下位まで掘り下げたところ、16×12cmの狭い範囲にまとまって土器片が出土したことからⅢPB-12と付番した。微細図を作成し取り上げを行った。その後、Ⅲc層を調査中に約2.2m離れた地点で同一個体の土器片が8点出土している。(宮崎)

出土遺物 (図Ⅲ-6-3) ロクロ成形痕が残る坏形土器。器内外面とも二次焼成を受け、剥落が顕著。(宮塚義)

表Ⅲ-8 ⅢSB-20属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比 標準 偏差	重量 (g)	被 熱	材質	備 考	
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ	標準 偏差						
Ⅲ-6-4	42-2	12ⅢS22	140196	ⅢbL	完形	57.7	-19.4	43.5	3.8	25.3	0.4	1.3	-0.7	82.8		Sa.	
-	42-2		140197														
-	42-2	-	140152	ⅢbL	完形	75.1	-2.0	38.8	-0.9	26.2	1.3	1.9	-0.1	62.8		Mud.	
-	42-2	-	140139	ⅢbL	完形	60.1	-17.0	31.8	-7.9	27.3	2.4	1.9	-0.1	66.5		Sa.	
Ⅲ-6-6	42-2	-	140225	ⅢbL	完形	61.0	-16.1	38.6	-1.1	28.4	3.5	1.6	-0.4	62.7	○	Sa.	
-	42-2	-	140144	ⅢbL	完形	61.9	-15.2	35.5	-4.2	27.2	2.3	1.7	-0.2	87.6	○	Sa.	
-	42-2	-	140194	ⅢbL	完形	61.4	-15.7	35.1	-4.6	26.5	1.6	1.7	-0.2	82.0	○	Sa.	
-	42-2	-	140177	ⅢbL	完形	64.2	-12.9	45.2	5.5	23.4	-1.5	1.4	-0.6	83.4		Sa.	
Ⅲ-6-5	42-2	-	140145	ⅢbL	完形	65.9	-11.2	38.3	-1.4	20.2	-4.7	1.7	-0.3	57.9	○	Sa.	
-	42-2	-	140203	ⅢbL	完形	72.3	-4.8	30.3	-9.4	15.6	-9.3	2.4	0.4	47.0		Sa.	
Ⅲ-6-8	42-2	-	140156	ⅢbL	完形	72.1	-5.0	45.8	6.1	27.0	2.1	1.6	-0.4	100.3		Sa.	
-	42-2	-	140133	ⅢbL	完形	70.3	-6.8	40.6	0.9	20.5	-4.4	1.7	-0.3	69.1		Sa.	
-	42-2	12ⅢS21	140163	ⅢbL	略完形	67.2	-9.9	41.4	1.7	16.6	-8.3	1.6	-0.4	52.3		Sa.	
-	42-2		140164														
-	42-2		140165														
-	42-2	-	140213	ⅢbL	完形	69.6	-7.5	44.0	4.3	21.7	-3.2	1.6	-0.4	84.1		Sa.	
Ⅲ-6-7	42-2	12ⅢS20	140136	ⅢbL	完形	69.9	-7.2	32.5	-7.2	32.2	7.3	2.2	0.2	89.1		Sa.	
-	42-2		140153														
-	42-2		140155												○		
-	42-2	-	140148	ⅢbL	略完形	74.3	-2.8	32.9	-6.8	19.2	-5.7	2.3	0.3	53.3		Sa.	
-	42-2	12ⅢS19	140141	ⅢbL	略完形	68.1	-9.0	42.5	2.8	22.6	-2.3	1.6	-0.4	94.7		Sa.	
-	42-2		140154														
-	42-2		140167														
-	42-2		140168														
-	42-2		140169														
-	42-2		140170														
-	42-2	140171															
-	42-2		140172														
-	42-2		140184														
-	42-2		140173														
-	42-2	12ⅢS18	140158	ⅢbL	略完形	71.2	-5.9	38.6	-1.1	28.6	3.7	1.8	-0.1	92.1		Sa.	
-	42-2		140159														
-	42-2	-	140226	ⅢbL	略完形	75.3	-1.8	40.0	0.3	19.8	-5.1	1.9	-0.1	82.9	○	Sa.	
-	42-2	-	140132	ⅢbL	略完形	75.5	-1.6	43.8	4.1	24.0	-0.9	1.7	-0.3	90.7		Sa.	
-	42-2	-	140140	ⅢbL	略完形	73.7	-3.4	45.4	5.7	26.1	1.2	1.6	-0.4	107.4	○	Sa.	
-	42-2	-	140214	ⅢbL	完形	77.7	0.6	38.3	-1.4	23.8	-1.1	2.0	0.0	89.8		Sa.	
Ⅲ-6-11	42-2	-	140157	ⅢbL	完形	77.4	0.3	33.1	-6.6	22.0	-2.9	2.3	0.3	75.9		Sa.	
Ⅲ-6-9	42-2	-	140227	ⅢbL	完形	78.6	1.5	38.7	-1.0	19.6	-5.3	2.0	0.0	72.5	○	Sa.	
-	42-2	-	140192	ⅢbL	完形	85.9	8.8	29.5	-10.2	21.1	-3.8	2.9	0.9	55.0		Mud.	
Ⅲ-6-13	42-2	-	140348	ⅢbL	完形	76.7	-0.4	40.0	0.3	27.0	2.1	1.9	-0.1	98.1	○	Sa.	
-	42-2	-	140222	ⅢbL	略完形	76.8	-0.3	45.5	5.8	33.4	8.5	1.7	-0.3	135.8	○	Sa.	
Ⅲ-6-10	42-2	-	140299	ⅢbL	完形	80.1	3.0	48.8	9.1	20.5	-4.4	1.6	-0.3	91.5	○	Sa.	
-	42-2		140204												○		
-	42-2	12ⅢS17	140198	ⅢbL	略完形	79.1	2.0	42.0	2.3	31.5	6.6	1.9	-0.1	94.8		Sa.	
-	42-2		140199														
-	42-2	-	140200	ⅢbL	略完形	91.6	14.5	49.4	9.7	25.9	1.0	1.9	-0.1	125.9	○	Sa.	
-	42-2	-	140166	ⅢbL	略完形	86.5	9.4	40.8	1.1	28.8	3.9	2.1	0.1	93.0	○	Sa.	
Ⅲ-6-12	42-2	-	140190	ⅢbL	完形	84.0	6.9	43.4	3.7	27.0	2.1	1.9	-0.1	99.5	○	Sa.	
-	42-2	-	140149	ⅢbL	完形	84.1	7.0	34.5	-5.2	29.1	4.2	2.4	0.4	93.2		Sa.	
-	42-2	12ⅢS23	140367	Ⅲc	完形	82.1	5.0	37.0	-2.7	19.1	-5.8	2.2	0.2	78.3		Sa.	
-	42-2		140209	ⅢbL													
Ⅲ-6-14	42-2	-	140212	ⅢbL	完形	92.6	15.5	39.1	-0.6	21.6	-3.3	2.4	0.4	96.2	○	Sa.	
-	42-2	-	140180	ⅢbL	略完形	90.7	13.6	48.6	8.9	22.5	-2.4	1.9	-0.1	91.9		Mud.	
-	42-2	-	140202	ⅢbL	完形	91.6	14.5	38.1	-1.6	21.7	-3.2	2.4	0.4	108.6	○	Sa.	
-	42-2	-	140201	ⅢbL	完形	88.9	11.8	32.2	-7.5	26.5	1.6	2.8	0.8	83.4		Mud.	
Ⅲ-6-15	42-2	-	140134	ⅢbL	完形	86.0	8.9	47.9	8.2	27.0	2.1	1.8	-0.2	122.0		Con.	
-	42-2	-	140162	ⅢbL	完形	93.9	16.8	48.4	8.7	24.2	-0.7	1.9	0.0	126.0		Mud.	
Ⅲ-6-16	42-2	-	140223	ⅢbL	完形	97.1	20.0	41.6	1.9	31.1	6.2	2.3	0.3	129.4	○	Sa.	
-	42-2	-	140146	ⅢbL	完形	94.4	17.3	25.6	-14.1	37.4	12.5	3.7	1.7	71.8		Mud.	
完形合計													41				
完形平均値						77.1	39.7	24.9	2.0	87.3							
遺物総重量													3581.3				

第4節 焼土

Ⅲb層下位～Ⅲc層上面において検出したものを本遺跡では擦文文化期の遺構と捉えており、ここに掲載する。23・24年度の2ヵ年で検出した焼土は1ヵ所である。

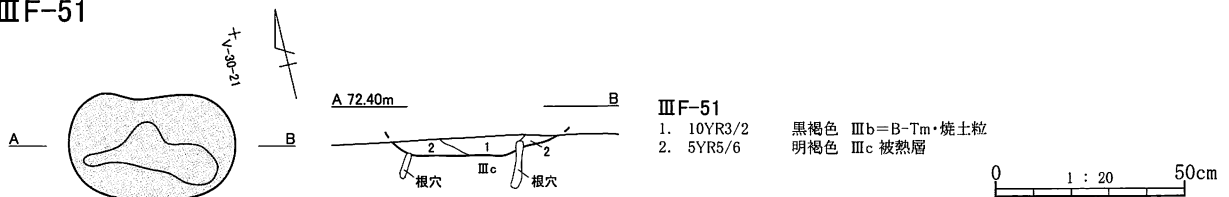
ⅢF-51 (図Ⅲ-7 図版5-1・2)

V-30区のⅢb層下位で検出した。平面形は楕円形である。検出の際、燃焼面にB-Tmが不整形に分布しているのを確認しており、当初は自然焼土と考えていたが、半截したところ断面が皿状で乱れておらず、人為的なものと判断してⅢ層焼土として扱っている。被熱層は約5cmで赤色化が著しい。燃焼面に炭化物や土壌化した灰層が認められなかったため、土壌サンプルの採取は行っていない。
(宮崎)

表Ⅲ-9 ⅢPB-12出土土器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点数	器種	部位	器面調整		文様	備考
									外側	内側		
									口縁/頸部/ 胴部/底側面	口縁/頸部/ 胴部	口縁部/ 文様帯	
Ⅲ-6-3	42-4a 42-4b	SP063A	ⅦC1	ⅢPB-11	ⅢbL	1	坏	口縁部～ 底部	ロクロ/ロクロ /ロクロ	ロクロ/ロクロ /ロクロ	-	剥落、 2次焼成 有り
				ⅢPB-12	ⅢbL	5						
				ⅢPB-12	ⅢbM	1						
				ⅢSB-20	ⅢbL	7						

ⅢF-51



図Ⅲ-7 焼土平面及び断面図

表Ⅲ-10 ⅢF-51属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	確認層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-7	5-1	ⅢF-51	V-30	ⅢcU	不整形	45	28	6	-	

第5節 続縄文文化期包含層出土遺物

包含層からは全体で土器片 7 点と礫石器 6 点が出土している。

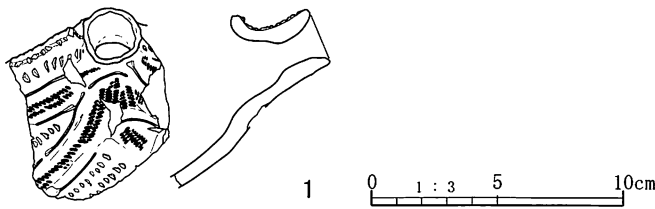
1. 包含層出土土器 (図Ⅲ-8 図版 41-5ab)

1 はVIC4 類で、後北 C₂-D 式の注口土器である。口唇の断面形は尖り状で、刻みが施されており、直下には刻みの施された微隆起線文が 1 条施されている。(天方)

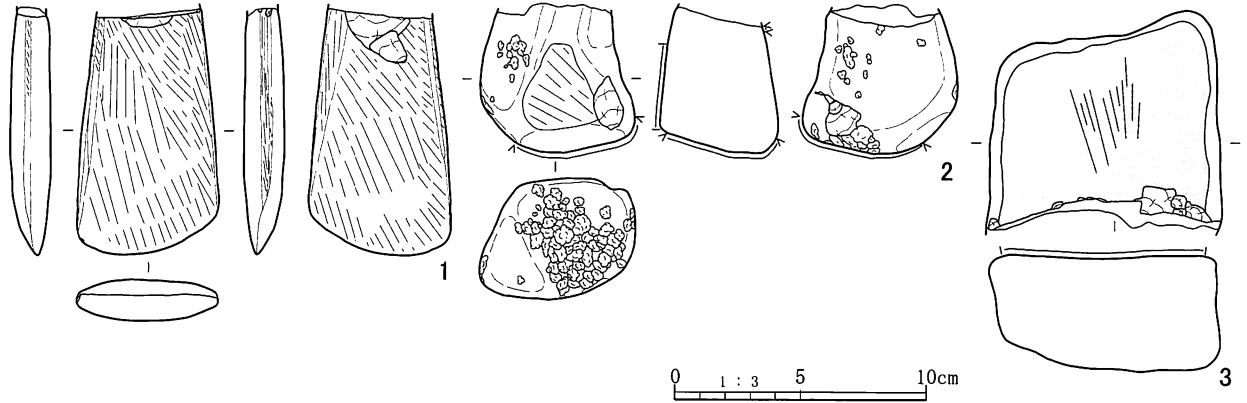
2. 包含層出土礫石器 (図Ⅲ-9 図版 42-3-1~3)

礫石器 6 点のうち、図示したのは 3 点である。1 は基部を欠損した石斧である。片刃で側縁に擦り切り痕がある。2 はたたき石で、端部に敲打痕があるもので、1 面に擦痕があり上端部が欠損している。3 は滑沢面のある礫である。片面の使用で、残存部分の中央に細い線條痕も認められる。これも欠損品である。なお、石斧についてはⅢb 層下位から出土しているため、本節で掲載している。

(宮崎)



図Ⅲ-8 続縄文文化期包含層出土土器



図Ⅲ-9 Ⅲ層包含層出土礫石器

表Ⅲ-11 続縄文文化期包含層出土土器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	分類	遺構名/グリッド	層位	点数	部位	胎土	備考
Ⅲ-8-1	41-5ab	ZP004A	VIc4	AD-38	ⅢcM	5	注口～注口基部	砂粒少量	

表Ⅲ-12 Ⅲ層包含層出土礫石器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	遺物名	分類	層位	グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-9-1	42-3-1	-	140110	石斧	A	ⅢbL	V-31	(94.0)	57.0	16.2	(155.0)	Gr-Mud.	基部欠・片刃
Ⅲ-9-2	42-3-2	-	140357	たたき石	IV	Ⅲc	AA-31	(65.2)	63.1	46.9	(208.0)	Sa.	
Ⅲ-9-3	42-3-3	-	140547	滑沢面のある礫	-	ⅢbL	T-31	(87.4)	85.8	45.6	(560.0)	Sa.	

第IV章 縄文時代の調査

平成 23・24 年度の縄文時代の調査では、遺構は竪穴住居跡が 8 軒と平成 22 年度に約半分を調査した 1 軒のあわせて 9 軒、土坑墓 9 基、土坑 8 基、Tピット 36 基、石囲炉 1 基、焼土 18 ヲ所、獣骨集中 1 ヲ所を検出している。遺物の集中は土器集中 7 ヲ所、剥片集中 5 ヲ所、礫集中 5 ヲ所を検出している。また、石皿とすり石が共伴する等の出土状態を確認した場所を作業場跡と捉え、3 ヲ所設定している。その他に 6 号竪穴住居跡では廃絶後の窪みを捨て場跡として利用しており、ここから灰集中及び土器集中を検出している。時期は竪穴住居跡や土坑墓は明確な共伴土器のないものもあるが、前期後葉のものと思われる。遺物は土器では前期後葉のものが主体を占めており、中期中葉のもの後期前葉のものが僅かに出土している。前期後葉のものは大麻 V 式、円筒土器下層 d 式に相当するものが大半で、出土点数はほぼ同じ割合で出土している。また、これまでの調査と同じく胎土に蛇紋岩を含む土器、シュブノツナイ式土器、フゴッペ貝塚式土器、宮本式土器等、搬入品と考えられる土器が少量出土している。剥片石器及び礫石器も土器と同じく前期後葉のものが大半と思われ、剥片石器は石槍の比率が非常に高くなっているのが特徴である。昨年の調査でこれまでに例のないシカ塚が検出されており、剥片石器の出土状況からも生業の中心はシカの狩猟であったと考えられる。また、特記すべきものに、旧石器の確認トレンチ調査中に Ta-d2 の下より石鏃が 1 点出土している。礫石器は石皿、すり石の出土割合が高くなっている。すり石は北海道式石冠を含め種類にバラエティーが認められ、対象物により使い分けがなされていたと考えられる。(天方)

第1節 竪穴住居跡及び住居様遺構

竪穴住居跡は T3 面で 9 軒検出した。いずれも前期後葉と考えられる。この内 2 軒 (VH-04・06) は長軸が 10m を超える所謂大型住居跡である。また、3 軒 (VH-07・10・11) は長軸が 5m 未満で、柱穴等の付属遺構が確認されていないもので、住居様遺構として捉えた。調査区南西側で VH-08 ～ 10 の 3 軒が並んで検出されている。竪穴周囲の掘り上げ土は重複しているが、土層断面からは新旧の確認は行えなかった。VH-06 は竪穴住居廃絶後の窪みを捨て場として利用している。(天方)

4号竪穴式住居跡[VH-04] (図IV-2～6 図版6・43)

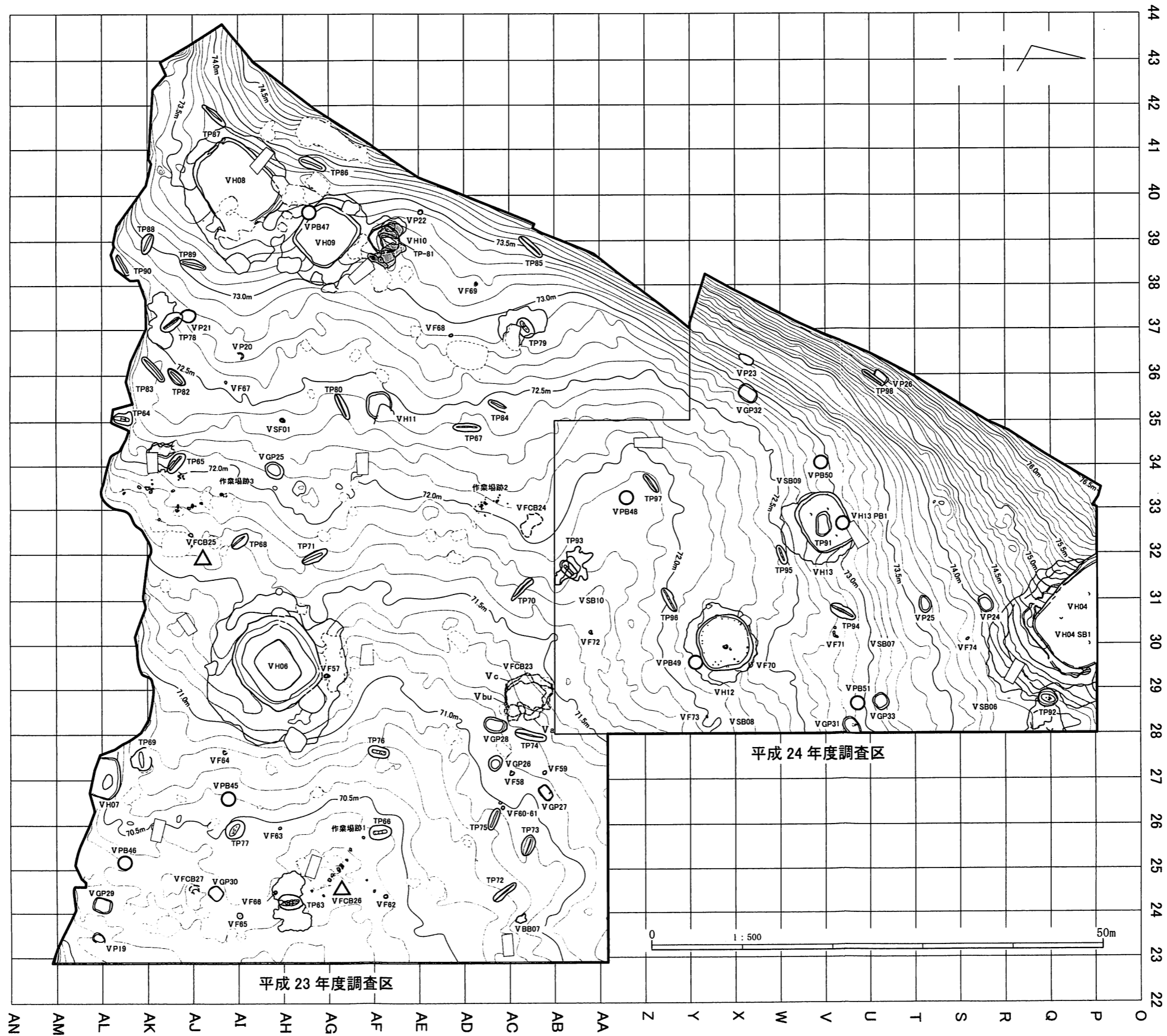
位置：P・Q-29～31 区 平面形：隅丸長方形

規模：竪穴本体 1544cm×1136cm×80cm (最大 140cm) 掘り上げ土 2280cm×1688cm

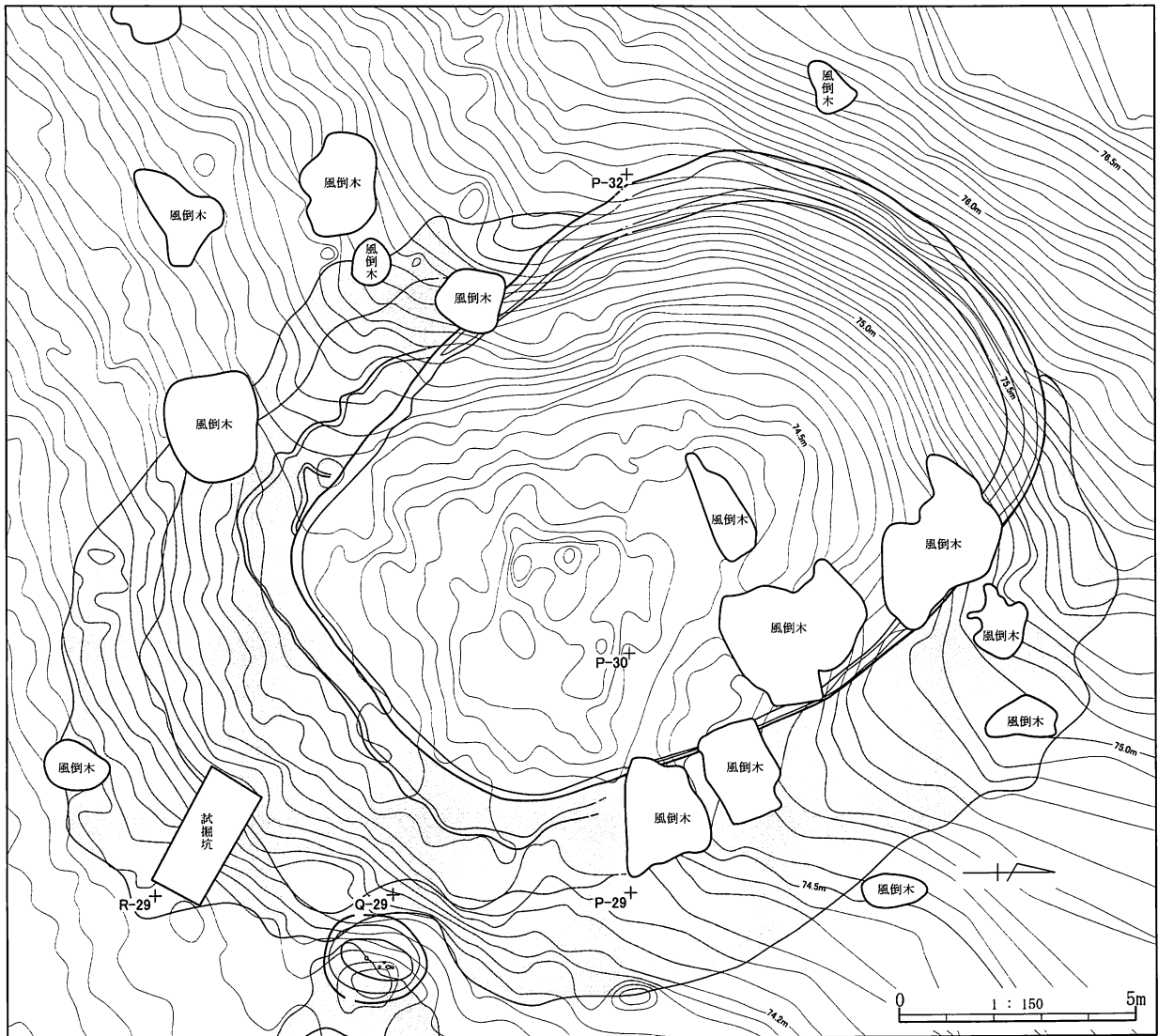
確認・調査：過年度に住居及び掘り上げ土の北側約半分を調査した状態であり、今年度は残りの部分の調査を行った。Ta-c テフラを重機で除去後、ジョレンによる精査で、調査済みの住居に続くと思われる半円形の窪みを明瞭に確認し、V層上面にて地形測量を行った。この窪みに対し過年度に設定したベルトの延長にあたる位置と、これに直交する形で十字ベルトを設定し、トレンチ調査を先行して行った。このトレンチ調査によって住居の床面と壁面を確認し、住居の全体像を把握した。また、西側に過年度調査からの続きでベンチ状の段差を確認している。トレンチ調査終了後、ベルトを残して床面と壁面の検出を行い、並行して住居周辺で掘り上げ土の確認を行った。掘り上げ土は住居の下り斜面側となる北側以外の全てで検出した。床面の精査中、床面と考えていた Ta-d2 パミスの下に硬くしまる薄い黒色土の層と、その下位で Ta-d2 パミスが硬くしまる層を確認した。

表IV-1 縄文時代遺構群一覧表

遺構名	規模(cm)		グリッド	層位	付属・ 関連遺構	備考	遺構名	規模(cm)		グリッド	層位	付属・ 関連遺構	備考
	長軸	短軸						長軸	短軸				
VH-04	1544	1136	P・Q-29~31	VbL	VH04.SB01	継続	TP-88	236	120	AJ・AK-38・39	VIIIa	-	
VH-06	1027	905	AG・AH28~30. AI29・30	Va	覆土上層 捨て場跡		TP-89	292	96	AI・AK-38	VI	-	
VH-07	448	(264)	AK・AL-26・27	VI	-		TP-90	260	(40)	AK-38	VI	-	
VH-08	960	752	AG-39・40. AH・AI-39~41	Vb	-		TP-91	274	166	U・V-32	IV	-	
VH-09	664	600	AF・AG-38・39	Vb	HF01		TP-92	218	(188)	P・Q-28	VbU	-	
VH-10	342	312	AE・AF-38・39	Vb	TP-81		TP-93	234	134	AA-31	VbU	-	
VH-11	304	(184)	AE・AF-35	VI	-		TP-94	310	120	U-30	VbL	-	
VH-12	636	592	W・X-29・30	VbU	-		TP-95	360	88	V・W-31・32	Vc	-	
VH-13	680	520	U・V-31~33	Va	VH-13.PB01 TP-91		TP-96	290	94	Y-30.31	VbL	-	
VGP-25	220	180	AH-33・34	VI	-		TP-97	252	82	Y・Z-33	VbL	-	
VGP-26	168	144	AC-27	VI	-		TP-98	282	58	T-35.U-35・36	VI	-	
VGP-27	180	120	AB-26	VI	-		VSF-01	(46)	(36)	AG・AH-35	Vb	-	
VGP-28	260	168	AC-28	VI	-		VF-57	64	42	AF・AG-29	Vb	-	
VGP-29	206	168	AK・AL-24	VI	-		VF-58	56	42	AB-27	VI	-	
VGP-30	160	140	AI-24	VI	-		VF-59	48	36	AB-27	Vc	-	
VGP-31	(198)	150	U-28	VbL	-		VF-60	(40)	32	AC-26	Vc	-	
VGP-32	222	166	W-35	VI	-		VF-61	38	24	AC-26	Vc	-	
VGP-33	180	150	T-28	VI	-		VF-62	48	42	AE-24	VI	-	
VP-19	144	(100)	AL-23	VI	-		VF-63	32	24	AG・AH-25	Vc	-	
VP-20	80	(44)	AH-36	VI	-		VF-64	48	(26)	AI-27	Vb	-	
VP-21	170	152	AJ-37	VI	-		VF-65	70	60	AH-23	Vb	-	
VP-22	52	50	AD-39	VI	-		VF-66	40	32	AH-24	VI	-	
VP-23	175	90	W-36	VI	-		VF-67	132	22	AI-35	Vb	-	
VP-24	194	153	R-30・31	Vc	-		VF-68	42	28	AD-36	Vb	-	
VP-25	194	136	S-30・31	Vc	-		VF-69	34	30	AC-38	Vc	-	
VP-26	176	(76)	T-35・36	VI	-		VF-70	76	58	W-29	VbL	-	
TP-63	272	176	AG-24	Va	-		VF-71	121	63	U-30	VbL	-	
TP-64	208	116	AK-35	Vb	-		VF-72	45	37	AA-30	VbL	-	
TP-65	268	128	AJ-33・34	VI	掘り上げ土 (E~F)G~H		VF-73	18	18	X-28	Vc	-	
TP-66	252	160	AE-25	Va	-		VF-74	41	21	R-30	VbL	-	
TP-67	304	92	AC-34	VI	-		VBB-07	129	88	AB-23	VbL	-	
TP-68	224	124	AH-32	VI	-		作業場1	1013	502	AF・AG-24・25	VbL	-	
TP-69	240	224	AJ・AK-27	Va	-		作業場2	322	164	AC-32・33	VbL	-	
TP-70	324	80	AB-31	VIIIa	-		作業場3	2200	2000	AG-31・34.AH-31 ~35.AI-31~ 34.AJ-32~34.AK- 33・34	VbL	-	
TP-71	300	104	AG-31	VIIIa	-		VPB-45	132	100	AI-26	VbU	-	
TP-72	308	88	AB・AC-24	VI	-		VPB-46	40	27	AK-25	Vc	-	
TP-73	240	140	AB-25	VIIIa	-		VPB-47	165	151	AG-39	Va	-	
TP-74	348	100	AB-27	VI	-		VPB-48	122	57	Z-33	VbU	-	
TP-75	252	92	AC-25・26	VIIIa	-		VPB-49	102	58	X-29	MO	-	
TP-76	236	132	AE-27	Va	-		VPB-50	172	99	U・V-33・34	VbL	-	
TP-77	236	192	AH・AI-25	VIIIa	-		VPB-51	70	59	U-28	VbL	-	
TP-78	284	160	AJ-37	Va	-		VFCB-23	-	-	AB・AC-28・29	Va~Vc	-	
TP-79	240	160	AB-36・37	Vb	-		VFCB-24	-	-	AB-32	VbU	-	
TP-80	304	84	AF-35	VIIIa	-		VFCB-25	-	-	AI-31・32	Va	-	
TP-81	240	156	AE-38・39	Va	-		VFCB-26	-	-	AF-24	V	-	
TP-82	244	108	AJ-35・36	VIIIa	-		VFCB-27	-	-	AI・AJ-24	VbL	-	
TP-83	320	80	AJ-35・36.AK-36	VIIIa	-		VSB-06	196	67	R-28・29	VbL	-	
TP-84	(212)	80	AC-35	VI	-		VSB-07	161	120	T・U-30	VbL	-	
TP-85	328	88	AB-38	VI	-		VSB-08	248	199	X-28	VbL	-	
TP-86	312	120	AG-40	VIIIa	-		VSB-09	188	121	V・W-33	VbU/VbM	-	
TP-87	340	84	AI-41・42	VIIIa	-		VSB-10	133	102	AA-31	VbL	-	



図IV-1 平成23・24年度 縄文時代遺構配置図



図IV-2 VH-04周辺地形図

新たに床面でベルトを設定し、土層断面から黒色土の範囲を記録した。2枚目の床面及び壁面を検出した時点で土層断面の記録を行い、ベルト部分を除去して完掘した。その後柱穴や付属遺構確認のため黒色土プランを半截し、断面で遺構の判断を行った。これら一連の調査後、掘り上げ土の掘削を行った。住居外側の壁際で掘り上げ土の中の落ち込みを確認したため新たにベルトを設定し、精査した。その結果、住居の南側で「コ」の字状に巡る溝を確認した。VH-04.MZ-01と付番して断面図と平面図を記録した。溝状遺構の完掘を行って調査を終了している。

形態：平面形は隅丸長方形。長軸 15.4m、短軸 11.4m の大型住居で、ヲチャラセナイ遺跡の住居の中で最大である。床面は周辺地山の地形に沿って、北西から南東にかけて僅かに傾斜する。住居の北側およそ半分ほどの壁面にはベンチ状の段差が設けられており、南側には壁面の外側に溝状の遺構を配している。ベンチと溝状遺構により壁の立ち上がりは階段状になっているが、全体としては緩やかに立ち上がる。

掘り上げ土：標高の高い住居の北西側を除いて堆積しており、2280cm×1688cmの範囲に広がっていた。基本的にはVb層にTa-dテフラを多く含む層で、一部TP-92に切られることから新旧を確認できる。住居南側の溝状遺構にはVb層を主体としてTa-d2パミスを多く含む、掘り上げ土と見られる土層が堆積している。

堆積状態：過年度調査の土層は①、今年度調査の土層のうちセクションE-Fは②、G-Hは③と示す。住居はVb層から掘り込まれ、Va層が全面に被覆する。Vb層上位もほとんど全面に堆積しているが、住居南側の掘り上げ土による微高地では堆積が認められなかった。①-1～15・②-1～3・12・③-1～7・9～11・14・15は覆土と考えられる。うち、VH-04の掘り上げ土は①-1～5・8～15・②-1・2・8・12・③-4・6・7・9～11・14・15である。①-5と②-12は同一の土層である。②-5と③-13は硬くしまる黒色土で、その上の②-4・③-12に新しい床を貼っている。住居外の掘り上げ土は①-16ではVc層とVb層の間にあるが、②-4・6～11と③-8・10ではVb層より上に堆積する。住居の北東側ではVI層の上にVb層の被る土層がみられることから、Vb層下位が流出した可能性がある。③の住居壁面がVb層から掘り込まれていることから、住居はVb層がある程度堆積してからの時期に構築されたと考えられる。

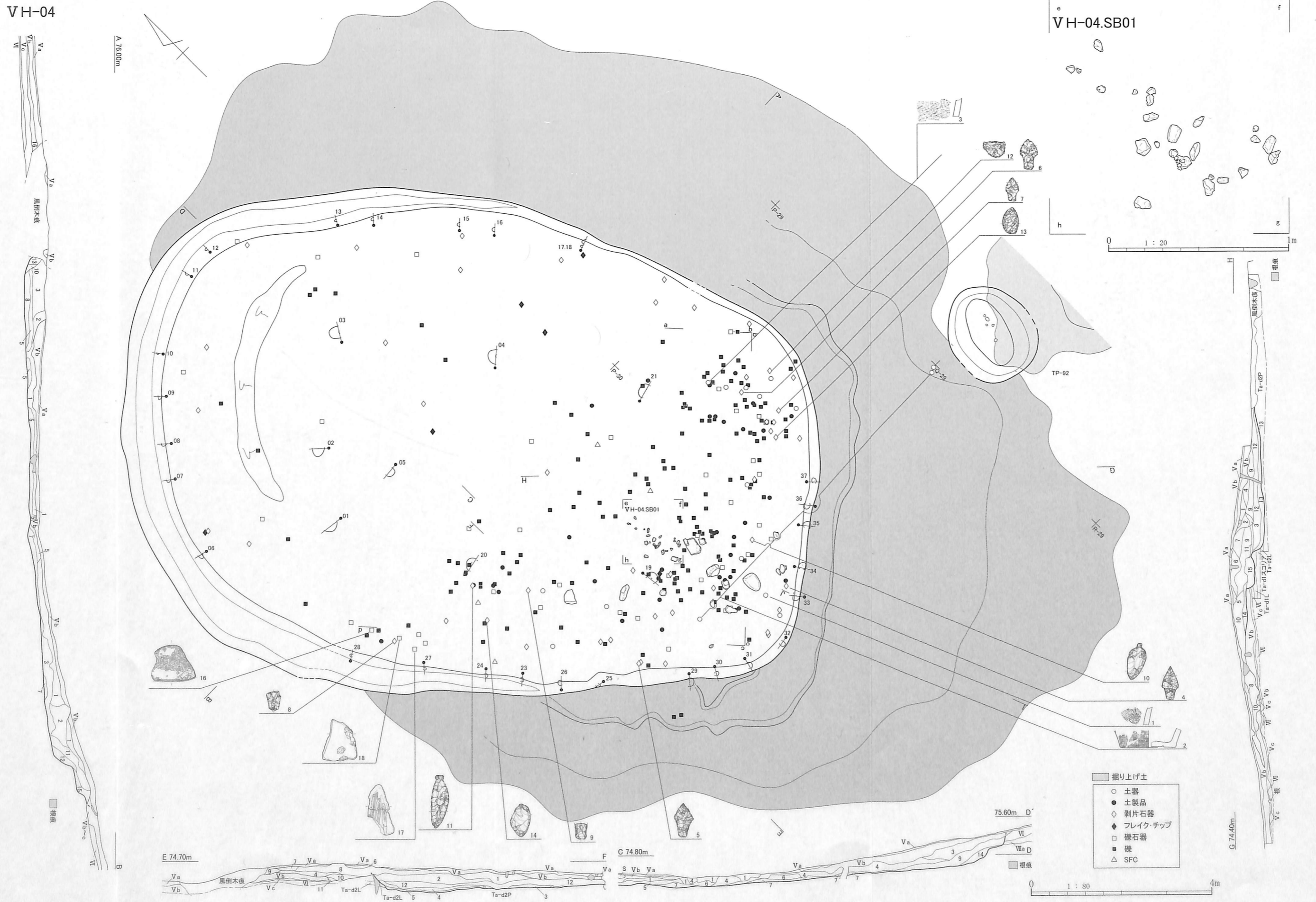
VH-04 貼床：1～2層が新たに貼られた床面とみられるTa-d2パミスの層である。2～6層は貼り床下の黒色土だがしまりはない。7～9層は硬くしまる黒色土の多い層で構築時の床面と見られる。8はC-DとE-Fの5層と同様と思われる。この床面の上にTa-d2パミスを貼り、新しい床面を構築したとみられる。

溝状遺構 (I-J)：1～4層はVH-04の掘り上げ土である。5～9層はVH-04.MZ01の覆土と見られる。10～11層は6～9層と類似しており一連のものとも考えられるが、ややしまりがあって硬く、下のVb層はしまりが少ない。溝状遺構については過年度には確認されておらず、住居に伴うものであるかは性格も含めて不明である。

土坑及び柱穴：過年度とあわせて36本の柱穴を検出した。住居の中心付近では過年度とあわせて合計8本の柱穴を検出した。8本とも他の壁面に近い柱穴と比べて太く、先端の尖る打ち込み杭とみられる。うち、4本は途中まで掘り方を確認した。掘り方の深さは柱穴ごとに異なっており、KP01のみ掘り方と打ち込みが共に20cm前後、KP19は掘り方が60cm程あり、打ち込みは25cmほどである。KP20とKP21はそれぞれ20cmと30cm程掘り方が認められ、その後40cm打ち込む形態となっている。住居の低い面ほど掘り方が深く掘られて、杭が打ち込まれている。床面で確認した柱穴の配列状態から、住居の長軸方向に沿ってほぼ等間隔で長方形に並ぶ、KP01・03・04・19・20・21の6本が支柱穴と考えられる。壁面で検出された28本の杭はいずれも細身で先端の尖る打ち込み杭で、住居を周回するように配置されていることから壁柱穴と思われる。垂直に打ち込まれたものが多く、住居の内側に向って傾くものもみられた。KP11・12・35・36の杭穴は住居の外側に向って傾いている。

遺物出土状態：覆土中からは土器12点と剥片石器38点、礫石器36点、フレイク・チップ3832点が出土した。床面からは剥片石器4点と礫石器4点が出土している。 (宮塚翔)

出土遺物 (図IV-6)：1～3は土器、4～15は剥片石器、16～18は礫石器である。1は異原体羽状縄文を施す胴部破片、II群B2b類に属する。2はII群B2a類に属する底部破片。多軸絡条体回転文の上に丁寧なミガキと内面も横方向にミガキが認められる。3はLR斜行縄文の上にナデ調整が施されている。包含層から出土した同一個体と思われる破片にはOI刺突文が見られるが、接合はしていない。



図IV-3 VH-04 平面及び断面図

VH-04 A-B・C-D①

- | | | | |
|-----------------|--|------------------|----------------------------------|
| 1. 10YR2/1 黒色 | Vb = Ta-d2P (φ3 ↓ 斑状) | 9. 10YR3/2 黒褐色 | VI = Vb・Ta-d2P (φ5 ↓ 斑状) |
| 2. 10YR5/8 黄褐色 | Vb = VI ≡ Ta-d2P (φ10 ↓ 斑状) | 10. 10YR4/2 灰黄褐色 | VI ≡ Ta-d1スコリア(均一) |
| 3. 10YR5/8 黄褐色 | VI ≡ Ta-d2P (φ10 ↓ 斑状) | 11. 7.5YR5/8 明褐色 | Ta-d2P (φ5 ↓) = Ta-d2L ≡ VI (均一) |
| 4. 10YR3/4 暗褐色 | VI - Ta-d2P・Ta-d2L (φ5 ↓ 斑状) ≡ Vb (均一) | 12. 10YR4/2 灰黄褐色 | VI - Ta-d2P ブロック |
| 5. 7.5YR6/8 橙色 | Ta-d2L ≡ Vb (均一) | 13. 10YR2/1 黒色 | Vb ≡ Ta-d2P (φ10 ↓ 均一) |
| 6. 7.5YR5/8 明褐色 | Ta-d2L - Ta-d2P (φ5 ↓ 斑状) = Vb (均一) | 14. 10YR2/2 黒褐色 | Vb - VI = Ta-d2P (φ10 ↓ 斑状) |
| 7. 7.5YR6/8 橙色 | Ta-d2P ≡ Vb (均一) | 15. 10YR2/3 黒褐色 | Vb - VI = Ta-d1スコリア(均一) |
| 8. 10YR3/3 暗褐色 | Vb + VI = Ta-d2P (φ5 ↓ 斑状) | 16. 10YR2/1 黒色 | Vb = Ta-d2P (φ10 ↓ 斑状) 掘り上げ土 |

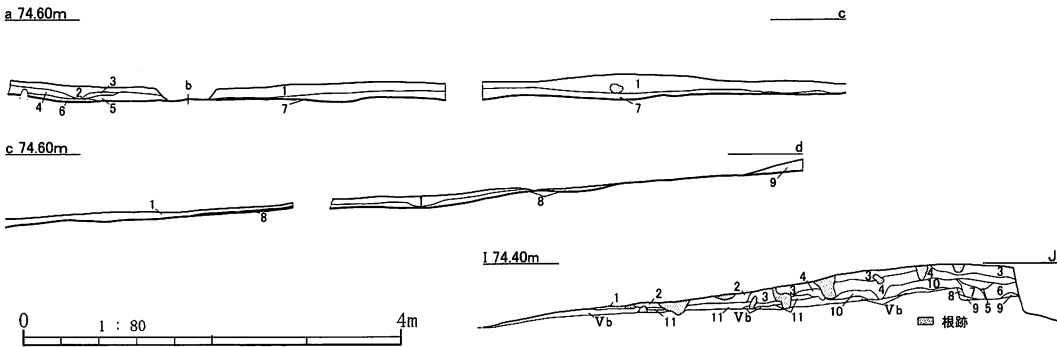
E-F②

- | | |
|-----------------|-----------------------------------|
| 1. 10YR3/4 暗褐色 | Vb + Ta-d2L = Ta-d2P (φ5~30) |
| 2. 10YR4/6 褐色 | Ta-d2L - Vb = Ta-d2P (φ5~30) |
| 3. 5YR3/8 明赤褐色 | Ta-d2P (φ10~30) = Vb ややしまりあり |
| 4. 5YR5/8 明赤褐色 | Ta-d2P (φ10~30) ≡ Vb |
| 5. 10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ10~20) かたくしまる |
| 6. 10YR3/3 暗褐色 | Vb - Ta-d2L ≡ Ta-d2P (φ3~5) |
| 7. 10YR3/3 暗褐色 | Vb - Ta-d2L ≡ Ta-d2P (φ3~5) |
| 8. 10YR5/6 黄褐色 | Ta-d1L = Vb・Ta-d2L・Ta-d2P (φ5~20) |
| 9. 10YR4/4 褐色 | Vb + Ta-d2L = Ta-d2P (φ5~20) |
| 10. 10YR2/3 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ5~10) |
| 11. 10YR5/6 黄褐色 | Ta-d1L = Vb |
| 12. 7.5YR6/8 橙色 | Ta-d2L = V (均一) |

G-H③

- | | |
|------------------|-------------------------------|
| 1. 10YR2/3 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ5~10) |
| 2. 10YR4/4 褐色 | Vb = Ta-d1L・Ta-d2P (φ10~20) |
| 3. 10YR3/3 暗褐色 | Vb ≡ Ta-d2P |
| 4. 10YR4/6 褐色 | Ta-d2L = Vb・Ta-d2P (φ5~10) |
| 5. 10YR2/3 黒褐色 | Vb = Ta-d2L・Ta-d2P |
| 6. 10YR3/4 暗褐色 | Vb + Ta-d1L ≡ Ta-d2P |
| 7. 10YR5/6 黄褐色 | Ta-d1L = Vb・Ta-d2P (φ5~20) |
| 8. 10YR2/3 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ5~20) |
| 9. 10YR4/6 褐色 | Vb - Ta-d2L = Ta-d2P (φ5~20) |
| 10. 7.5YR5/6 明褐色 | Vb - Ta-d2L・Ta-d2P (φ5~30) |
| 11. 10YR2/3 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ5~10) |
| 12. 5YR5/8 明赤褐色 | Ta-d2P (φ10~30) ≡ Vb |
| 13. 10YR2/3 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ10~20) かたくしまる |
| 14. 10YR3/3 暗褐色 | Vb - Ta-d2L ≡ Ta-d2P |
| 15. 10YR2/2 黒褐色 | Vb - Ta-d2P (φ10~30) = Ta-d2L |

VH-04 貼床



VH-04 貼床 a~d

- | | |
|----------------|--------------------------------------|
| 1. 5YR5/8 明赤褐色 | Ta-d2P (φ10~30) ≡ Vb |
| 2. 5YR5/8 明赤褐色 | Ta-d2P (φ10~30) ≡ Vb |
| 3. 10YR2/1 黒色 | Vb ≡ Ta-d2P (φ5~10) |
| 4. 10YR4/4 褐色 | Ta-d2L = Vb・Ta-d2P (φ10~20) |
| 5. 10YR4/6 褐色 | Ta-d2L - Vb・Ta-d2P (φ10~20) |
| 6. 5YR5/8 明赤褐色 | Ta-d2P (φ5~30) ≡ Vb |
| 7. 10YR2/3 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ10~20) かたくしまる |
| 8. 10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ10~20) かたくしまる |
| 9. 10YR3/3 黒褐色 | Vb + Ta-d2L = Ta-d2P (φ10~20) かたくしまる |

I-J

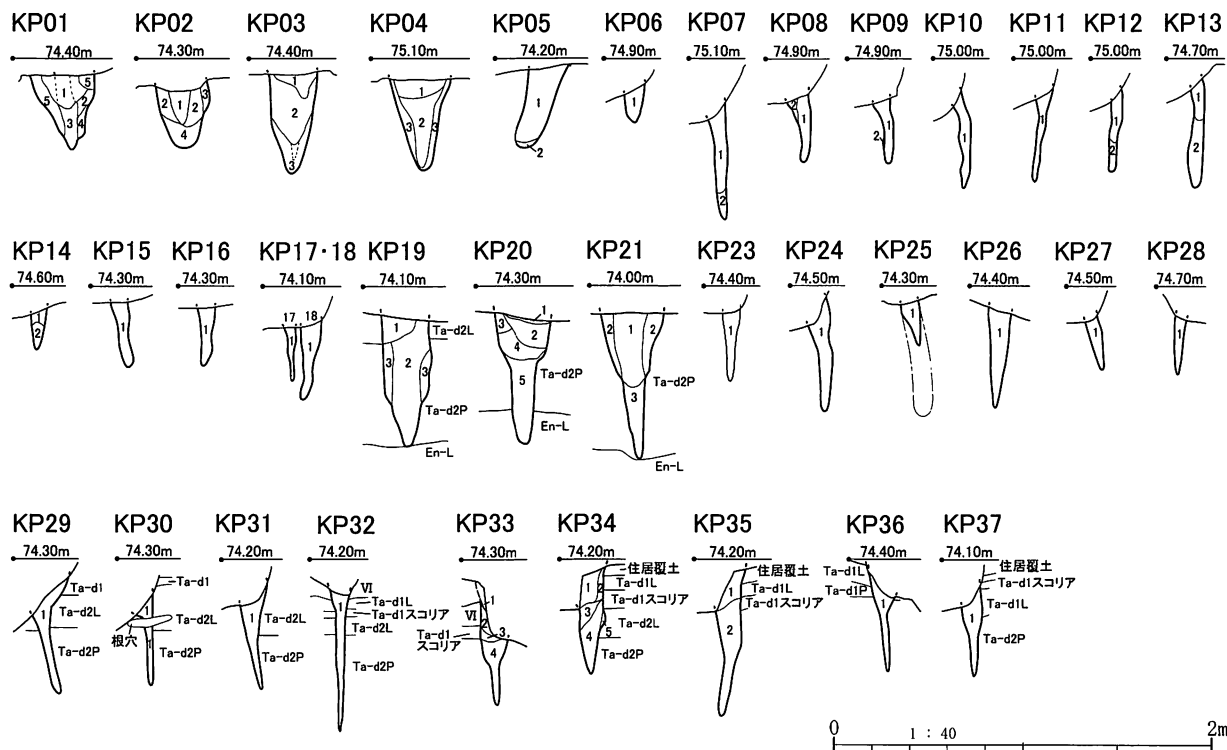
- | | |
|-----------------|---------------------------------------|
| 1. 10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ5~10) |
| 2. 10YR3/4 暗褐色 | Ta-d1L - Vb = Ta-d2P |
| 3. 10YR4/6 褐色 | Ta-d1L - Ta-d2L = Vb ≡ Ta-d2P (φ5~20) |
| 4. 5YR5/8 明赤褐色 | Ta-d2P (φ10~30) - Ta-d2L ≡ Vb |
| 5. 10YR2/1 黒色 | Vb ≡ Ta-d2P (φ5~10) |
| 6. 10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ5~20) |
| 7. 10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ5~20) |
| 8. 10YR2/1 黒色 | Vb ≡ Ta-d2P (φ5~10) |
| 9. 10YR3/3 暗褐色 | VI = Vb |
| 10. 10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ5~20) ややしまりあり |
| 11. 10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ5~20) ややしまりあり |

図IV-4 VH-04 貼床及び溝状遺構断面図

表IV-2 VH-04属性表

挿図番号	図版番号	グリッド	層位	長軸方向	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ(cm)	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸		
IV-3	6-1	P・Q-29~31	VbL	N-31°W	1544	1136	1424	1080	80	

い。IV群 B1 類に属するが、覆土上層 (VbL) から出土しているため、時期的な矛盾はない。4~9 はいずれも黒曜石製の石槍である。4は鍔身部が基部よりも長いもので、全体が薄手のものである。断面は凸レンズ形で、調整の剥離は精緻である。鍔身部から基部方向へ調整がなされていることから、再調整されていない完形品とみられる。5と6は鍔身部が基部よりも短く先端の角度が開いたもので、5は鍔身部に新しい剥離が多いことから再調整されて短くなったものとみられる。断面形はやや不揃いだが凸レンズ形に近い。6は腹面の基部付近が殆ど調整されていない。先端近くでは腹面も剥離調整が進み対称形になる。基部の側縁はゆるいくびれを持つ。7は小型のもので、表面はなだらかな曲面に調整されているのに対し、裏面は稜線が基部で明瞭だが鍔身部で大きく乱れ、



- KP01**
- 10YR3/4 暗褐色 V・VI = Ta-dP (φ5 ↓ 斑状)
 - 10YR2/3 黒褐色 V・VI = Ta-dP (φ5 ↓ 斑状)
 - 7.5YR4/6 褐色 Ta-dP (φ20 ↓ 斑状) = VI (均一)
 - 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dL
 - 7.5YR4/6 褐色 Ta-dL 集積

- KP02**
- 10YR3/4 暗褐色 VI - Ta-dL (均一)
 - 7.5YR4/6 褐色 Ta-dL = VI (均一)
 - 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dL
 - 7.5YR4/6 褐色 Ta-dL - VI (均一) 2層より色調暗い

- KP03**
- 10YR3/4 暗褐色 VI = Ta-dP (φ10 ↓ 斑状) = V (斑状)
 - 10YR2/3 黒褐色 VI - Ta-dP (φ20 ↓ 斑状)
 - 7.5YR4/4 褐色 Ta-dL ≡ VI (均一)

- KP04**
- 10YR2/2 黒褐色 V - VI (均一) ≡ Ta-dL (均一)
 - 10YR2/3 黒褐色 V = VI・Ta-dP (φ5 ↓ 均一)
 - 7.5YR4/6 褐色 Ta-dL

- KP05**
- 10YR1.7/1 黒色 V ≡ Ta-dP (φ5 ↓ 斑状)
 - 10YR4/6 褐色 Ta-dL = V (斑状)

- KP06**
- 10YR2/2 黒褐色 VI - Ta-dP (φ5 ↓ 均一)

- KP07**
- 10YR2/3 黒褐色 VI - Ta-dP (φ5 ↓ 均一)
 - 10YR6/8 明黄褐色 Ta-dP = VI (均一)

- KP08**
- 10YR2/3 黒褐色 VI - Ta-dP (φ5 ↓ 均一)
 - 10YR2/2 黒褐色 VI - Ta-dP (φ5 ↓ 均一)

- KP09**
- 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dP (φ5 ↓) ≡ VI (均一)
 - 10YR2/1 黒色 V ≡ Ta-dP (φ5 ↓ 均一)

- KP10**
- 10YR4/6 褐色 Ta-dP (φ5 ↓) ≡ VI (均一)

- KP11**
- 10YR4/2 灰黄褐色 VI = Ta-dP (φ5 ↓ 均一)

- KP12**
- 10YR3/3 暗褐色 VI = Ta-d1 (均一)
 - 7.5YR5/8 明褐色 Ta-dP (φ5 ↓)

- KP13**
- 10YR4/2 灰黄褐色 VI - Ta-d1 (均一)
 - 10YR3/3 暗褐色 VI = Ta-d1 (均一)

- KP14**
- 10YR3/2 黒褐色 VI = Ta-d (均一)
 - 10YR2/2 黒褐色 VI - VI = Ta-d (均一)

- KP15**
- 10YR3/2 黒褐色 VI = V - Ta-dP (φ5 ↓ 均一)

- KP16**
- 10YR3/2 黒褐色 VI = Ta-d1 (均一)

- KP17・18**
- 10YR1.7/1 黒色 V ≡ Ta-dP (均一)

- KP19**
- 10YR4/6 褐色 Ta-d1スコリア + Vb = Ta-dP (φ10~20)
 - 10YR2/3 黒褐色 Vb-Ta-dP (φ5~20)
 - 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ta-dP (φ5~20)

- KP20**
- 10YR2/3 黒褐色 Vb-Ta-dP+Ta-d1
 - 10YR5/8 黄褐色 Ta-d1L = Vb ≡ Ta-dP (φ5~10)
 - 5YR5/8 明赤褐色 Ta-dP ≡ Vb
 - 10YR2/2 黒褐色 Vb ≡ Ta-dP (φ5~10)
 - 10YR5/8 黄褐色 Ta-d1L + Ta-d1スコリア = Vb

- KP21**
- 10YR2/3 黒褐色 Vb ≡ Ta-dP (φ10~20) ≡ Ta-d1スコリア
 - 10YR2/3 黒褐色 Vb-Ta-dP (φ10~20) = Ta-d1スコリア
 - 10YR2/2 黒褐色 Vb ≡ Ta-dP (φ10~20)

- KP23~29**
- 10YR2/3 黒褐色 Vb-Ta-d1スコリア = Ta-dP (φ5~10)

- KP30・31**
- 10YR2/1 黒色 Vb-Ta-dP (φ5~20)

- KP32**
- 10YR2/1 黒色 Vb-Ta-dP (φ5~20)

- KP33**
- 10YR2/1 黒色 Vb-Ta-dP (φ5~20)
 - 10YR3/3 暗褐色 VI
 - 10YR2/2 黒褐色 Vb+Ta-d1スコリア
 - 10YR2/1 黒色 Vb=Ta-dP (φ5~20)

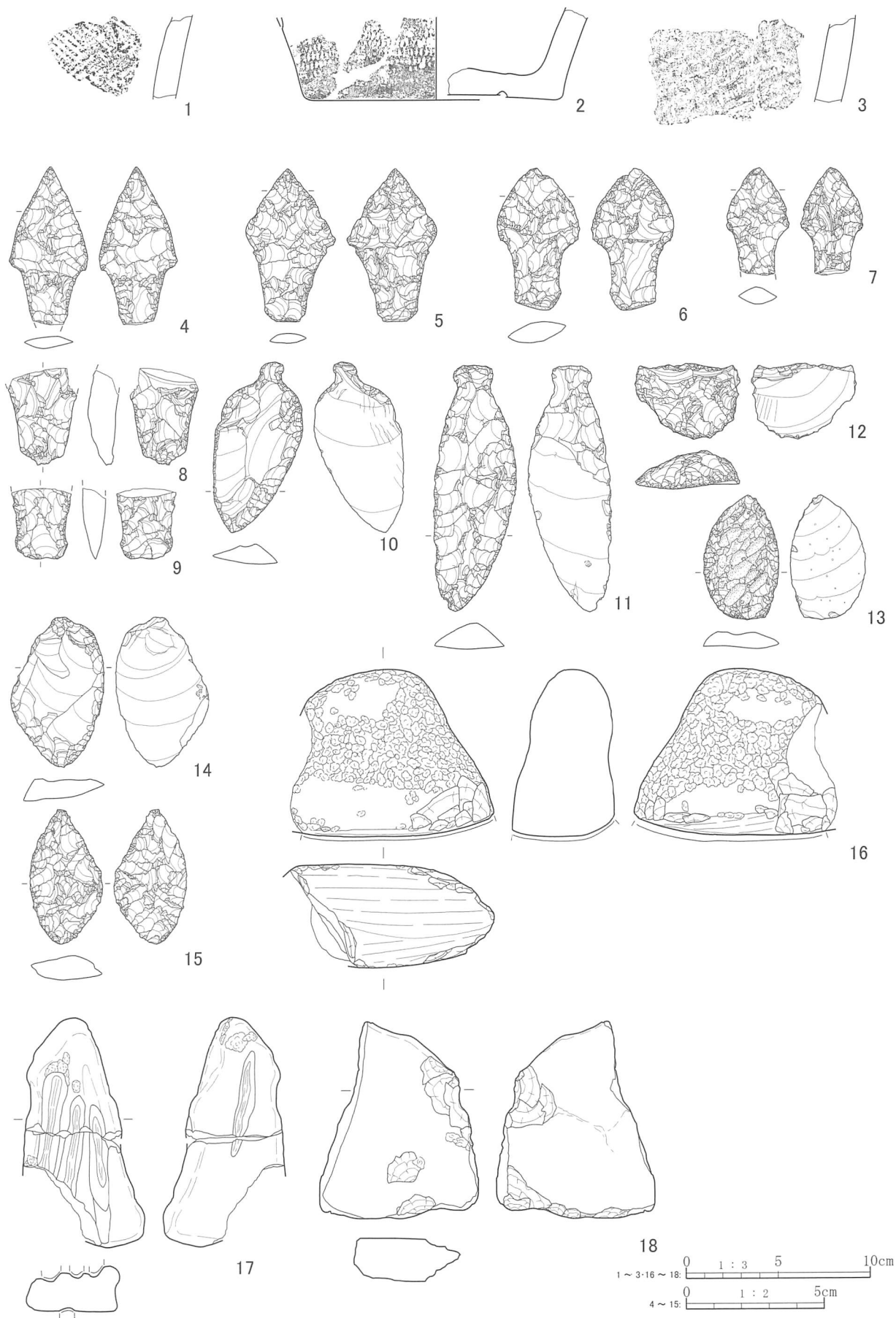
- KP34**
- 10YR4/6 褐色 Ta-dL - Vb・Ta-d1L・Ta-dP (φ5~30) ややしきなし Vb=Ta-dP (φ10~30)
 - 10YR2/1 黒色 Vb-Ta-d1スコリア しまりなし
 - 10YR2/1 黒色 Vb=Ta-dP (φ10~20)
 - 10YR2/2 黒褐色 Vb-Ta-d1スコリア かつくしまる

- KP35**
- 10YR2/1 黒色 Vb=Ta-dP (φ10~30)
 - 10YR2/2 黒褐色 Vb-Ta-d1スコリア

- KP36**
- 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ta-dP (φ5~20)・Ta-d1スコリア

- KP37**
- 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ta-dP (φ5~10)

図IV-5 VH-04 柱穴断面図



図IV-6 VH-04 出土遺物

表IV-3 VH-04柱穴属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)			傾き (度)	備考
			上端	下端	深さ		
IV-5	-	KP01	34	1	39	7°	主柱穴
IV-5	-	KP02	27	5	30	1°	
IV-5	-	KP03	25	1	52	2°	主柱穴
IV-5	-	KP04	32	2	48	2°	主柱穴
IV-5	-	KP05	22	5	41	17°	
IV-5	-	KP06	11	1	18	0°	
IV-5	-	KP07	9	1	61	3°	
IV-5	-	KP08	12	1	35	6°	
IV-5	-	KP09	9	1	34	2°	
IV-5	-	KP10	4	1	51	2°	
IV-5	-	KP11	9	1	42	3°	
IV-5	-	KP12	5	2	37	2°	
IV-5	-	KP13	6	2	53	0°	
IV-5	-	KP14	8	1	19	3°	
IV-5	-	KP15	9	1	34	7°	
IV-5	-	KP16	10	1	30	3°	
IV-5	-	KP17	6	1	28	1°	
IV-5	-	KP18	11	1	38	3°	
IV-5	-	KP19	26	3	69	1°	主柱穴
IV-5	-	KP20	30	2	69	2.5°	主柱穴
IV-5	7-1	KP21	33	1	76	2.8°	主柱穴
IV-5	-	KP23	10	1	36	1°	
IV-5	7-2	KP24	18	1	60	4°	
IV-5	-	KP25	10	1	24	13°	
IV-5	7-3	KP26	13	1	53	2°	
IV-5	-	KP27	7	1	25	13°	
IV-5	-	KP28	60	1	31	3°	
IV-5	-	KP29	28	1	61	11°	
IV-5	-	KP30	19	1	48	4°	
IV-5	-	KP31	18	1	55	4°	
IV-5	-	KP32	10	1	74	1°	
IV-5	-	KP33	25	1	54	1.5°	
IV-5	7-4	KP34	26	1	56	2°	
IV-5	-	KP35	27	1	77	4°	
IV-5	-	KP36	19	1	52	4°	
IV-5	-	KP37	15	1	47	1°	

※KP-22は欠番

表IV-4 VH-04出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部 /底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
IV-6-1	43-1	JP514A	II B2b	VH-04	2	1	胴部	やや外傾?	異原体羽状縄文- ミガキ(ナナメ)	繊維・砂粒 少量混入	
IV-6-2	43-2	JP294B	II B2a	VH-04/ C-26・ MO・Q-	VbU・ bL・2	6	底部	やや外傾-角状- やや上げ底	撚糸文(多軸絡条体 回転文)+ミガキ- ミガキ	石英 少量混入	
IV-6-3	43-3	JP499A	IVB1	VH-04/ P-28	VbU・ bL	2	胴部	やや外傾?	LR斜行縄文・ナデ- ナデ	砂礫・砂粒 少量混入	

側縁の調整も粗雑である。基部端を欠損している。8と9はともに鍔身部を欠損した石槍の基部で、8は基部端に転礫面を残している。9は基部端まで調整が施されており、ゆるい括れを持つ。欠損部分に剥離などが見られない。10と11はともに頁岩製のつまみ付きナイフで、10は素材の側縁のみ細かい調整が施されたものである。11は素材の片面全体に加工が施され、断面が三角形をなす。12は黒曜石製のラウンドスクレイパーでごくわずかに転礫面が残るものの、素材の片面側縁全体を急角度に調整して刃部を作出している。13～15はサイドスクレイパーで、14が頁岩製、他は黒曜石製である。13は岩屑面を大きく残し、背面の側縁に細かい調整を施して刃部を作出している。14は頁岩製で、腹面に大きく湾曲する素材の縁辺を調整して刃部を作出している。15は両面が丁寧に調整されている。表面にいびつな稜線があり、裏面は凸レンズ型に盛り上がった上下非対称な断面形である。右側縁の上半分に新しい調整が多いことから、欠損した木葉型石槍の転用品と考えられる。石質の肉眼観察では、5は透明度が高く球果を含んでおり、基部に岩屑面を残す。6は透明度が低く、基部に岩屑面を残す。7も透明度は6と似ており、表面にごく薄い縞模様を確認できる。12は透明度の高い部分と黒色の強い縞状になる。13の岩屑面は発泡状で、小さな球果を多く含んでいる。15は赤色が混じる黒曜石で、透明度の高い部分と黒色の強い部分がブロック状に分かれて観察できる。それぞれの石質のうち、肉眼観察で特徴的だった5・6・13・15については黒曜石の原産地分析を行い、結果を第V章第6節の黒曜石原産地分析(2)に掲載した。16はすり石D類の北海道式石冠である。敲打調整をほぼ全面に施した頂部の丸いものである。側縁部が欠損している。擦り面は二つの単位に分かれて使用されており、片減りしている。17は平面形が二等辺三角形と思われる有溝砥石で、欠損している。表面に3条、裏面に1条の深い溝が残る。18は加工痕のある礫で、扁平礫の側縁に表裏双方向から剥離調整を行っている。(1～3:宮塚義 4～15:宮塚翔 16～18:宮崎)

表IV-5 VH-04出土石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
IV-6-4	43-4	-	141439	ポイント類	B1	2	(56.3)	28.3	5.9	(7.0)	Obs.	基部欠
IV-6-5	43-5	-	141373	ポイント類	B1	2	54.6	32.6	9.6	11.3	Obs.	
IV-6-6	43-6	-	141267	ポイント類	B1	2	(49.6)	29.3	10.3	(12.5)	Obs.	先端欠 転礫面有
IV-6-7	43-7	-	141270	ポイント類	B1	2	(38.0)	22.6	10.0	(6.5)	Obs.	基部欠
IV-6-8	43-8	-	142739	ポイント類	B1	6	(33.0)	23.0	10.5	(8.0)	Obs.	基部のみ 転礫面有
IV-6-9	43-9	-	141901	ポイント類	B1	2	(24.8)	21.6	8.3	(4.6)	Obs.	基部のみ
IV-6-10	43-10	-	141438	ナイフ・スクレイパー類	A1	2	62.8	28.2	6.9	12.4	Sh.	
IV-6-11	43-11	-	142738	ナイフ・スクレイパー類	A2	6	87.9	28.9	13.3	29.6	Sh.	
IV-6-12	43-12	-	141271	ナイフ・スクレイパー類	B1	2	37.8	26.7	11.4	11.7	Obs.	
IV-6-13	43-13	-	141432	ナイフ・スクレイパー類	C1	2	44.9	27.4	5.6	7.5	Obs.	岩屑面有
IV-6-14	43-14	-	141334	ナイフ・スクレイパー類	C1	2	53.6	32.6	7.9	17.4	Sh.	
IV-6-15	43-15	-	145729	ナイフ・スクレイパー類	C1	4	47.9	26.7	8.5	8.5	Obs.	ポイントから の再加工品
IV-6-16	43-16	-	142733	すり石	D	6	(86.1)	89.7	54.8	(635.0)	Sa.	
IV-6-17	43-17	VST 385	142735	砥石	-	6	(125.4)	53.9	25.3	(190.0)	Sa	有溝砥石
			142736		-	6						
IV-6-18	43-18	-	142734	加工痕のある礫	-	6	108.6	85.3	24.9	260.0	Sa	

6号竪穴式住居跡〔VH-06〕（図IV-7～10 図版7-5～8-7、44、45、46-1）

位置：AG・AH-28～30、AI-29・30区 平面形：隅丸方形

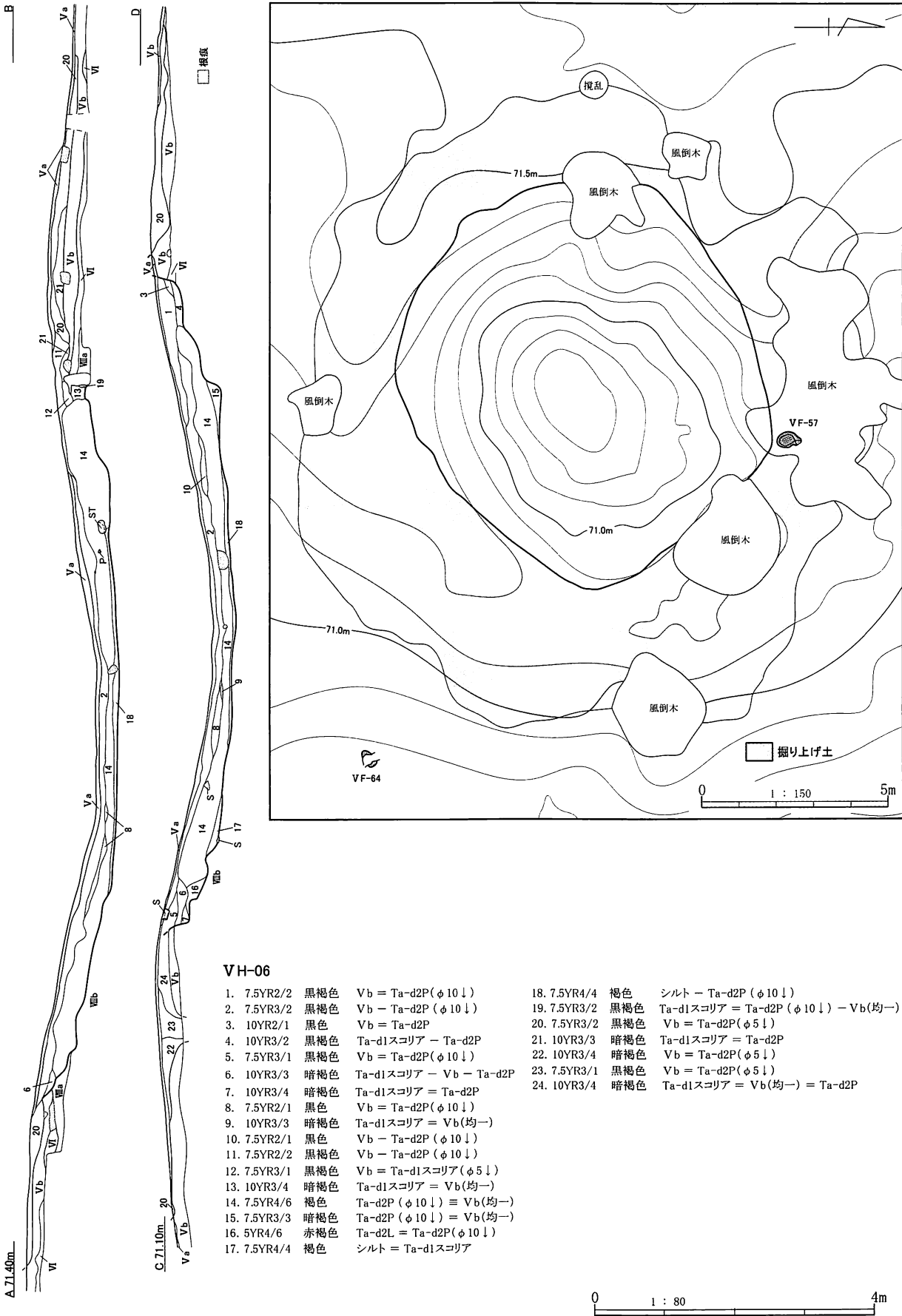
規模：竪穴本体 1027×905×48cm 掘り上げ土 1725×1695×24cm

確認・調査：樽前cテフラを除去したV層上面に、AG・AI-28～30グリッドを中心とした円形の窪みを検出し、地形測量を行った。竪穴住居跡であることを想定し、長軸方向である北東-南西軸（A-Bライン）と、直交する北西-南東軸（C-Dライン）に土層堆積状態確認のためのベルトを設定した。その後Va層の調査を行い、掘り上げ土の範囲検出を行った。住居本体の調査は、堆積状態観察のベルトに並行するトレンチを掘り、土層堆積状態と壁の立ち上がりを確認し、ベルトを残しながら層位毎に調査を進めた。床面精査とともに柱穴の検出を行った。住居中央の床面を覆う18層の上面では、楕円形の褐色プラン（50×30cm）を検出した。内部に炭化物が多く含まれており、HP01として記録した。写真撮影後、長軸方向に半截した。HP01は被熱層と確認できなかったが、底面が浅く皿状となることから、炉跡の可能性が考えられる。採取した炭化物のAMS年代測定を委託した結果、4680±30yrBP年の放射性炭素年代を得ており、縄文時代前期末葉頃に相当する（第V章第1節）。これは住居内覆土の上層より出土している滑石を含む土器の編年的位置とも矛盾しない。

形態：平面形はやや五角形に近い隅丸方形を呈している。壁の立ち上がりは風倒木痕によって失われていた北西側と北東側の壁を除いては明瞭に検出できた。住居北西側の壁の立ち上がりは、住居埋没後の風倒木痕によって大きく失われていたため、北東側と南西側の壁の立ち上がりを検出した後に、壁のラインを想定して行った。住居構築時の地形が南側に緩やかに低く傾斜しており、南側の壁は北側よりも低くなる。また、40～80cmの範囲でテラス状となる平坦な張り出し部と中央部に合わせて2段のベンチ構造を有する。

掘り上げ土：掘り上げ土は竪穴の周囲に1725cm×1695cmの範囲で広がっていた。厚さは東側で約19cm、西側で約18cm、南側で約5cm、北側で約24cmを測る。

堆積状態：図IV-7に堆積状態を図示した。竪穴内の覆土は深い住居中央部で30cm程度であり、最も深くなる住居壁脇では70cmとなる。20～24層はTa-d2パミスを含む掘り上げ土であり、住居の縁辺部に堆積する。掘り上げ土の厚さは住居南側でやや薄くなる。20層の下にVb層が堆積していることから、竪穴住居はVb層がある程度堆積した段階で構築されたと言える。19層はTa-d1スコリアを主体とする層で、東側の壁の崩落土と思われる。竪穴中央部は5.3×4.0mの範囲が窪み、Ta-d2パミスを少量含む粘性の強いシルト質層である18層が堆積している。18層が堆積する範囲は床面を構築した際にTa-d2の上部がやや掘り窪められた部分に相当し、住居埋没過程の初期に18層が堆積したと思われる。同様に16・17層は南側の壁側から掘り上げ土が住居内へと流入したことによって堆積したと思われる。住居中央部から壁付近まで厚く堆積する13～15層は、Ta-d2パミスを主体とする層である。住居の屋根に葺かれていたTa-d2パミス（屋根土）が住居廃絶後の上屋の老朽化に伴って崩落したものと思われる。住居中央部においてもTa-d2パミスを多量に含み、掘り上げ土から住居内へと連続的に堆積する3～12層は、掘り上げ土の住居内への流れ込みと思われる。1・2層は覆土の上部に広く分布するV層を主体とする層であり、3～12層が堆積したことによって住居がある程度埋まった後に堆積したと思われる。

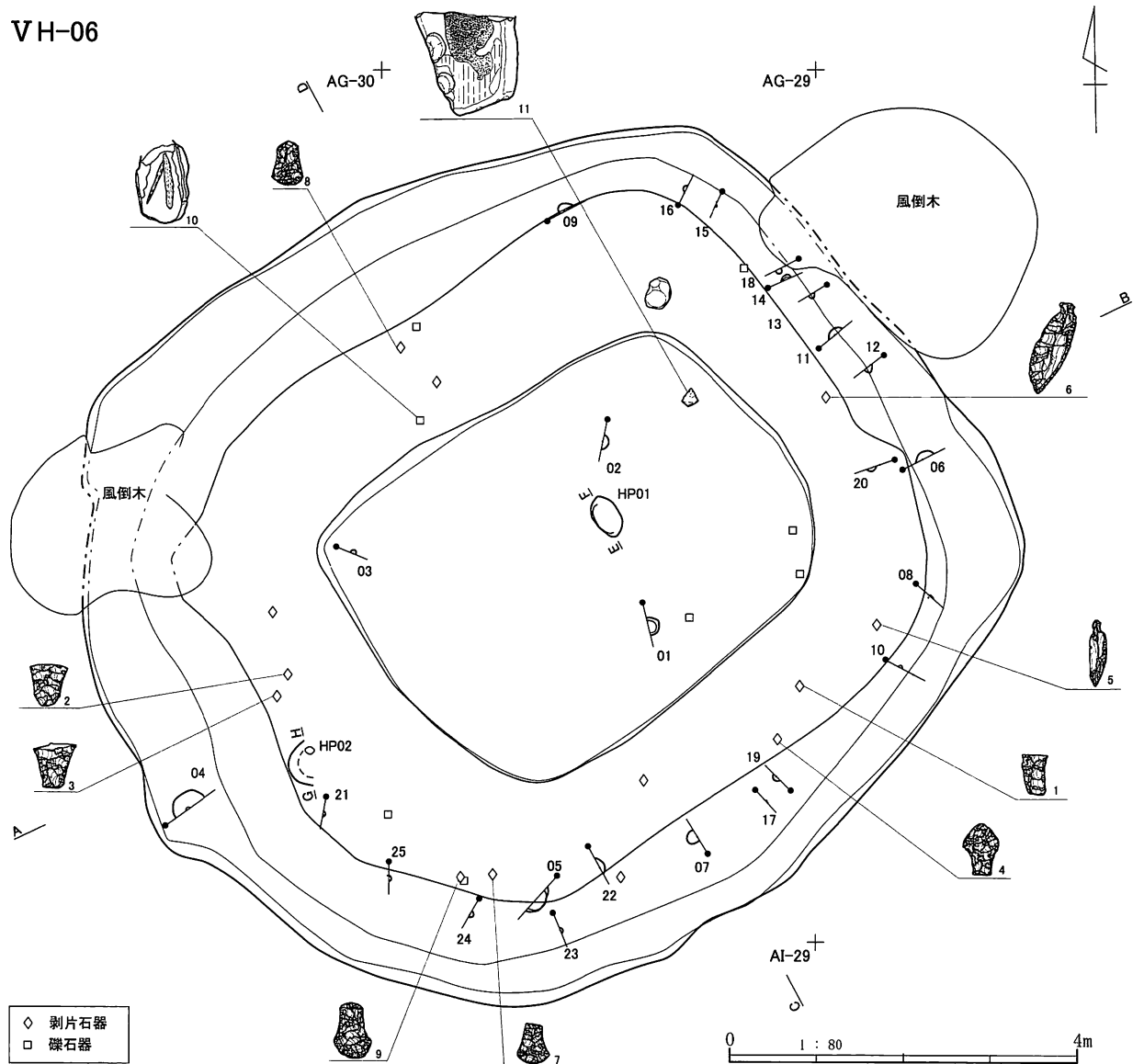


VH-06

- | | | | |
|------------------|--------------------------|------------------|--------------------------------------|
| 1. 7.5YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ 10 ↓) | 18. 7.5YR4/4 褐色 | シルト = Ta-d2P (φ 10 ↓) |
| 2. 7.5YR3/2 黒褐色 | Vb - Ta-d2P (φ 10 ↓) | 19. 7.5YR3/2 黒褐色 | Ta-d1スコリア = Ta-d2P (φ 10 ↓) - Vb(均一) |
| 3. 10YR2/1 黒色 | Vb = Ta-d2P | 20. 7.5YR3/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ 5 ↓) |
| 4. 10YR3/2 黒褐色 | Ta-d1スコリア - Ta-d2P | 21. 10YR3/3 暗褐色 | Ta-d1スコリア = Ta-d2P |
| 5. 7.5YR3/1 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ 10 ↓) | 22. 10YR3/4 暗褐色 | Vb = Ta-d2P (φ 5 ↓) |
| 6. 10YR3/3 暗褐色 | Ta-d1スコリア - Vb - Ta-d2P | 23. 7.5YR3/1 黒褐色 | Vb = Ta-d2P (φ 5 ↓) |
| 7. 10YR3/4 暗褐色 | Ta-d1スコリア = Ta-d2P | 24. 10YR3/4 暗褐色 | Ta-d1スコリア = Vb(均一) = Ta-d2P |
| 8. 7.5YR2/1 黒色 | Vb = Ta-d2P (φ 10 ↓) | | |
| 9. 10YR3/3 暗褐色 | Ta-d1スコリア = Vb(均一) | | |
| 10. 7.5YR2/1 黒色 | Vb - Ta-d2P (φ 10 ↓) | | |
| 11. 7.5YR2/2 黒褐色 | Vb - Ta-d2P (φ 10 ↓) | | |
| 12. 7.5YR3/1 黒褐色 | Vb = Ta-d1スコリア (φ 5 ↓) | | |
| 13. 10YR3/4 暗褐色 | Ta-d1スコリア = Vb(均一) | | |
| 14. 7.5YR4/6 褐色 | Ta-d2P (φ 10 ↓) ≡ Vb(均一) | | |
| 15. 7.5YR3/3 暗褐色 | Ta-d2P (φ 10 ↓) = Vb(均一) | | |
| 16. 5YR4/6 赤褐色 | Ta-d2L = Ta-d2P (φ 10 ↓) | | |
| 17. 7.5YR4/4 褐色 | シルト = Ta-d1スコリア | | |

図IV-7 VH-06 断面及び周辺地形図

VH-06



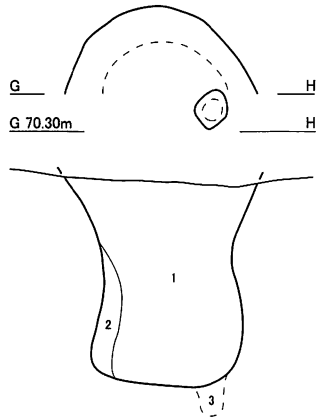
図IV-8 VH-06 平面及び出土遺物分布図

土坑及び柱穴：柱穴以外の土坑は、HP01・02の2基を検出した。HP01は住居中央部にあり、焼土は検出されなかったが、炉跡の可能性はある。HP02は住居の床面西側に位置し、西端壁面の張り出し部へとつながる緩やかな傾斜部のはじまりと接する。柱穴の検出作業は、生活面、構築面の調査後Ⅷ層で確認した。柱穴は全部で25本検出した。比較的太い柱穴はKP01・02・04である。このうち、KP01・02は住居中央部にある部分的な窪みの内側に位置することから、主柱穴と思われる。KP04は住居西側の壁付近で検出された。細い柱穴は壁際より多数検出されており、壁際を周回するように配置されている。断面形からは細長く坑底面が尖るものが顕著に見られた(KP10~16・18・21・23・25)。断面から確認する限り、いずれの柱穴も底部直下に堆積する土と周囲の土の間には、しまり具合に相違が認められなかった。柱穴上端の平面形は楕円形または円形を呈する。柱穴は住居の内側へ傾くもの(KP10・15・18・20)と垂直のもの(KP07・11~13・17・19・21・23・24)とがある。多くの柱穴の覆土にはTa-d2パミスを含む黒色土でしまりのない層が認められた。

VH-06.HP01



VH-06.HP02

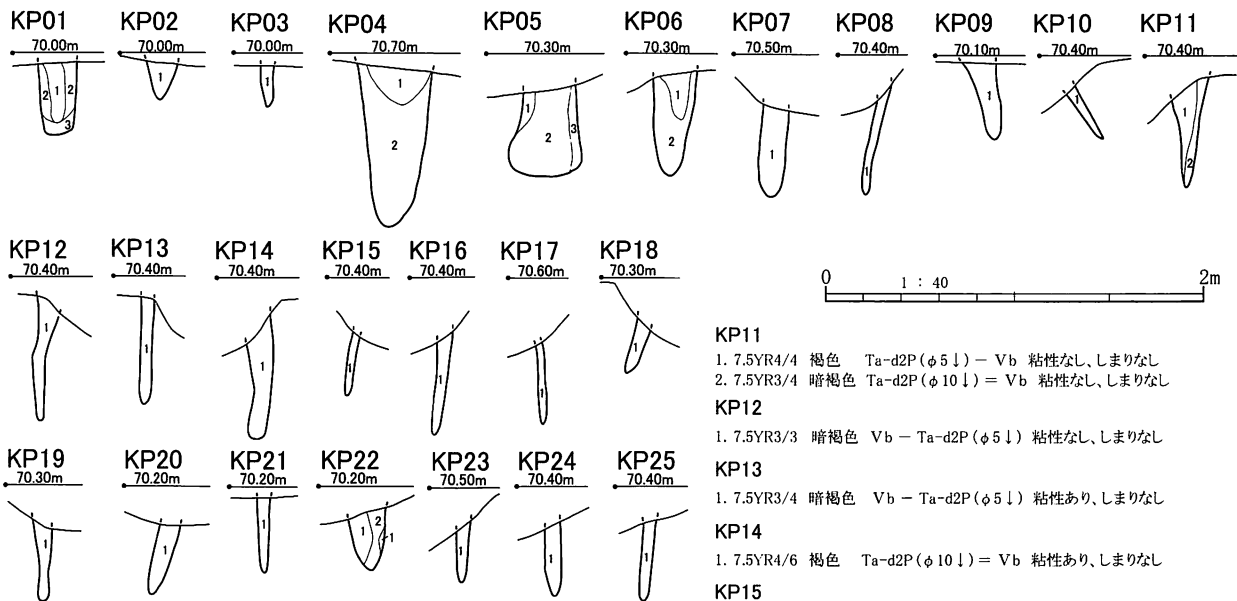
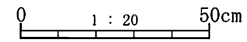


HP01

- 1. 7.5YR4/4 褐色 Vb - Ta-d2P (φ 10 ↓) = 炭化物 (φ 5 ↓) 粘性あり、しまりなし

HP02

- 1. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2L - Ta-d2P (φ 10 ↓) - Ta-d1スコリア (φ 5 ↓) 粘性あり、しまり弱
- 2. 7.5YR3/4 暗褐色 Ta-d2L - Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘性あり、しまりあり
- 3. 10YR4/4 褐色 Ta-d2L = Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘性あり、しまりなし



KP01

- 1. 7.5YR4/4 褐色 Vb = Ta-d2P 粘性あり、しまりなし
- 2. 7.5YR4/6 褐色 Vb - Ta-d2P 粘性ややあり、しまりなし
- 3. 7.5YR4/3 褐色 Vb = Ta-d2P = ローム 粘性あり、しまりなし

KP02

- 1. 7.5YR3/4 暗褐色 Vb = Ta-d2P 粘性なし、しまり弱

KP03

- 1. 7.5YR4/6 褐色 Vb = Ta-d2P 粘性なし

KP04

- 1. 7.5YR4/3 褐色 Vb = Ta-d1スコリア = Ta-d2P 粘性なし、しまりなし
- 2. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2L = Ta-d2P 粘性あり、しまりあり

KP05

- 1. 7.5YR4/6 褐色 Vb = Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘性弱、しまりなし
- 2. 7.5YR4/3 褐色 Vb - Ta-d1スコリア (φ 1 ↓) = Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘性あり、しまり弱
- 3. 7.5YR4/4 褐色 Vb - Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘性弱、しまりなし

KP06

- 1. 7.5YR3/4 暗褐色 Vb - Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘性弱、しまりなし
- 2. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2L - Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘性なし、しまりなし

KP07

- 1. 7.5YR3/4 暗褐色 Vb - Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘性なし、しまりなし

KP08

- 1. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb = Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘性なし、しまりなし

KP09

- 1. 7.5YR4/4 褐色 Vb = Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘性あり、しまりなし

KP10

- 1. 10YR3/1 黒褐色 Vb - Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘性なし、しまりなし

KP11

- 1. 7.5YR4/4 褐色 Ta-d2P (φ 5 ↓) - Vb 粘性なし、しまりなし
- 2. 7.5YR3/4 暗褐色 Ta-d2P (φ 10 ↓) = Vb 粘性なし、しまりなし

KP12

- 1. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb - Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘性なし、しまりなし

KP13

- 1. 7.5YR3/4 暗褐色 Vb - Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘性あり、しまりなし

KP14

- 1. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2P (φ 10 ↓) = Vb 粘性あり、しまりなし

KP15

- 1. 7.5YR4/4 褐色 Vb - Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘性弱、しまりなし

KP16

- 1. 5YR4/4 にぶい赤褐色 Vb - Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘性なし、しまりなし

KP17

- 1. 7.5YR3/4 暗褐色 Vb = Ta-d1スコリア (φ 5 ↓)

KP18

- 1. 7.5YR4/4 褐色 Ta-d2P (φ 5 ↓) - Vb 粘性なし、しまりなし

KP19

- 1. 5YR4/4 にぶい赤褐色 Ta-d2P (φ 10 ↓) - Vb 粘性なし、しまりなし

KP20

- 1. 5YR4/6 赤褐色 Ta-d2L - Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘性あり、しまりなし

KP21

- 1. 5YR4/4 にぶい赤褐色 Ta-d2P (φ 5 ↓) = Vb 粘性なし、しまりなし

KP22

- 1. 5YR4/4 にぶい赤褐色 Ta-d2P (φ 10 ↓) = Vb 粘性あり、しまりなし
- 2. 5YR3/4 暗赤褐色 Vb - Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘性あり、しまりなし

KP23

- 1. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb - Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘性なし、しまりなし

KP24

- 1. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2P (φ 10 ↓) - Vb 粘性なし、しまりなし

KP25

- 1. 5YR4/4 にぶい赤褐色 Ta-d2P (φ 10 ↓) = Vb 粘性なし、しまりなし

図IV-9 VH-06.HP01・02・柱穴平面及び断面図

表IV-6 VH-06属性表

挿図 番号	図版 番号	グリッド	層位	長軸 方向	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸		
IV-8	7-6	AG・AH-28~30 AI-29・30	Va	N-22°W	1027	905	780	664	48	
		AF・AI-28~30 AG・AH-27~31	Va	-	1725	1695	-	-	24	掘り上げ土



図IV-10 VH-06 出土遺物

遺物出土状態：床面からはスクレイパー、石槍、砥石、石皿が出土している。屋根土の上に堆積した覆土の窪みには、礫、礫石器、土器、剥片石器、黒曜石を主とするフレイク・チップが多数出土しており、住居廃絶後に捨て場として利用された可能性が考えられる（図IV-11）。（中沢）

出土遺物（図IV-10）：1～3は石槍で、いずれも欠損している。1の裏面右側縁には階段状の剥離痕がみられる。2の基部は平坦な剥離によって薄く仕上げられている。3の基部両端には弱い抉りがみられる。4は基部が欠損する石槍で、先端が再調整され短くなっている。基部の折れ面から裏面に微細な剥離痕が残されている。5・6はそれぞれメノウ製、珪質頁岩製のつまみ付きナイフである。5は縦長剥片を用い、右側縁に急角度の調整を施している。6は片面全体に調整が施されている。7～9は黒曜石製のスクレイパーであり、石槍の基部を転用している。石槍の欠損した先端側をスクレイパーの刃部として再加工している。7・9は刃部両端の張り出しが顕著である。10は表裏両面と右側縁に溝をもつ砥石である。表面と側縁には太い溝が認められ、裏面の平坦面には線状痕が残される。11は欠損した石皿である。中央の敲打面の後に擦り面が作出されている。全て床面出土遺物である。（1～9：中沢 10・11：宮崎）

表IV-7 VH-06柱穴属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)			傾き (度)	備考
			上端	下端	深さ		
IV-9	8-6	HP01	48	42	10	0°	
IV-9	-	HP02	51	35	53	0°	
IV-9	-	KP01	21	14	37	0°	
IV-9	-	KP02	17	2	19	0°	
IV-9	-	KP03	7	1	21	2°	
IV-9	-	KP04	39	6	83	0°	
IV-9	-	KP05	28	36	45	1°	
IV-9	-	KP06	23	4	53	3°	
IV-9	-	KP07	13	4	46	3°	
IV-9	-	KP08	8	1	53	10°	
IV-9	8-4	KP09	18	2	40	11°	
IV-9	-	KP10	5	0	25	35°	
IV-9	-	KP11	19	1	53	2°	
IV-9	-	KP12	11	2	60	3°	
IV-9	-	KP13	7	2	55	2°	
IV-9	-	KP14	12	8	55	0°	
IV-9	-	KP15	4	2	32	8°	
IV-9	-	KP16	8	2	51	6°	
IV-9	-	KP17	3	1	42	5°	
IV-9	-	KP18	7	2	26	19°	
IV-9	-	KP19	10	4	40	2°	
IV-9	-	KP20	11	2	36	16°	
IV-9	-	KP21	7	2	39	1°	
IV-9	-	KP22	20	3	30	5°	
IV-9	-	KP23	8	1	29	2°	
IV-9	-	KP24	8	2	37	3°	
IV-9	8-5	KP25	7	2	41	4°	

VH-06 覆土上層捨て場跡 (図IV-11~13、図版7-9、8-1)

VH-06の廃絶後の窪みから多量の遺物と灰層と思われる集中を検出したことから、捨て場としての利用が考えられた。捨て場跡から出土した遺物は、3層(屋根土)上面よりも上のVa・Vb層上位・Vb層下位・1層・2層より出土している。なおここで用いる1~3層は、遺物取り上げ時に用いたTa-d2の多寡や色調の違いによって区分した層序のため、1層は1・2層、2層は3~12層、3層は土層断面図の13~15層にほぼ対応する。

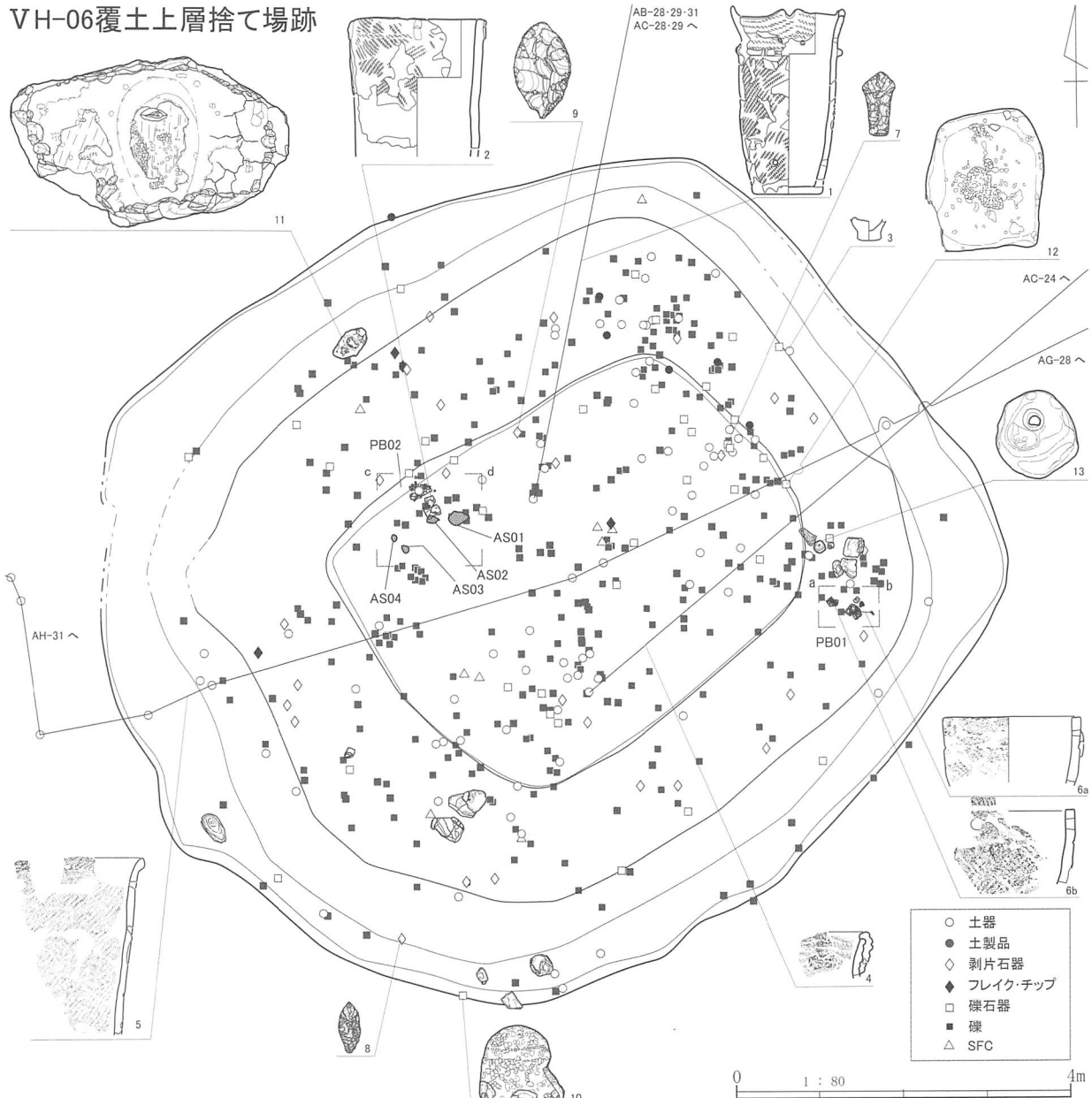
遺物は6924点出土している。層位ごとの内訳はVa層765点、Vb層上位1784点、Vb層下位62点、1層1317点、2層2996点である。大半の遺物が2層から出土しており、土器の59%(52点)、礫石器の57%(25点)が2層より出土している。分類ごとの内訳は、土器87点、土製品6点、剥片石器18点、礫石器44点、石製品1点、フレイク・チップ6421点、礫346点であり、遺物数の90%をフレイク・チップが占めている。フレイク・チップの99%(6384点)は黒曜石である。土器の分類ごとの出土点数は、II群B2a類34点、II群B2b類24点、II群B2d類14点、III群B1類1点、IV群B1類1点、分類不明の細片13点である。土器のほとんどが前期後葉のII群B類で占められる。礫石器はたたき石7点、石皿7点、台石10点、すり石7点、石鋸6点、石斧2点、砥石2点、加工痕のある礫3点である。

遺物等出土状態：住居中央部北西側の3層にはTa-d2パミスが集中している所が確認された。屋根土として葺かれていたTa-d2パミスが、住居廃絶後に上屋から崩落し、堆積したと思われる。また、住居西と東側の2層からは2つの土器集中(VH-06.PB-01・02)を検出した。ともに胎土に滑石を含む脆い土器であることから、希釈したバインダーを塗布した後に取上げた。それぞれ別個体に復元された。土器集中に近接して厚さ1~2cmの灰褐色の堆積物を検出した。灰褐色の粘質土は色調から灰層が変質した可能性が考えられたこと、平面的に4つのブロックに分かれることから、VAS-01~04と付番し、写真撮影後、半截した。灰集中の土壌はフローテーション用のサンプルとして採取した。フローテーションによって炭化植物種子が1点検出されており、同定の結果キハダ属の種子であった(第V章第4節)。

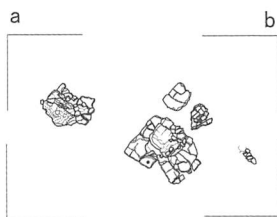
出土遺物(図IV-12・13)：掲載した土器は、いずれも住居跡掘り上げ土(5)・住居跡覆土(2・3・4・6)・住居跡周辺の包含層(1)から出土したものである。1は石英を微量に混入しており、突起は2個1対のものが4ヶ所施される。II群B2a類に属する。2は胎土に蛇紋岩を含み(第V章第5節胎土分析)、4ヶ所の縦の貼付文をもつ。II群B2d類に属する。4は口縁部に貼付文・縄線文・刺突文を施す。II群B2b類に属する。5は後述するように、口唇部の断面が三角形をなす。口唇直下からLR斜行縄文が施されている。II群B2a類に属する。6は胎土に礫・蛇紋岩片を含む土器で風化が著しい。II群B2d類に属する。

特記すべきことは、埋積状況から、5→2・4・6→1他、すなわち、土器の分類から、II群B2a(円筒土器下層d1式相当)→II群B2b(大麻V式相当)→II群B2a(円筒土器下層d2式相当)の変遷が把握できる。II群B2a(円筒土器下層d1式相当)に属する5は口唇部が断面三角形をなす土器で、円筒土器下層d1式に特徴的な口縁部に縄線文を施していない。円筒土器下層式では口唇部断面が三角形をなすものは少なく、この種の土器が当該時期の道央部の特徴になる可能性が高い。1には胴下半部に1ヶ所、6はVH-06.PB01から得られた個体で、口縁部に4ヶ所(2個1対)の焼成前に穿孔された穴の可能性がある。6に施された穴は吊り手を装着する穴のように見えるが、磨れた痕跡は顕

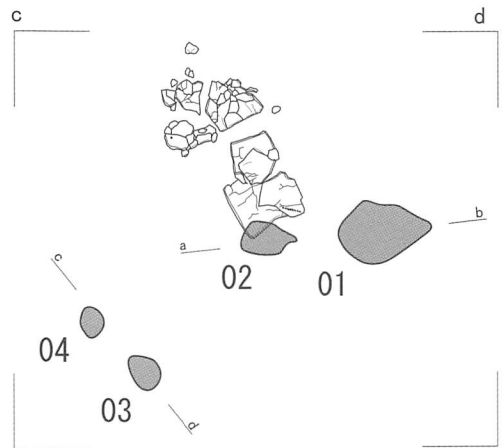
VH-06覆土上層捨て場跡



PB01



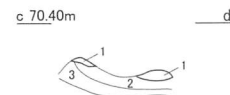
PB02



AS01・02



AS03・04



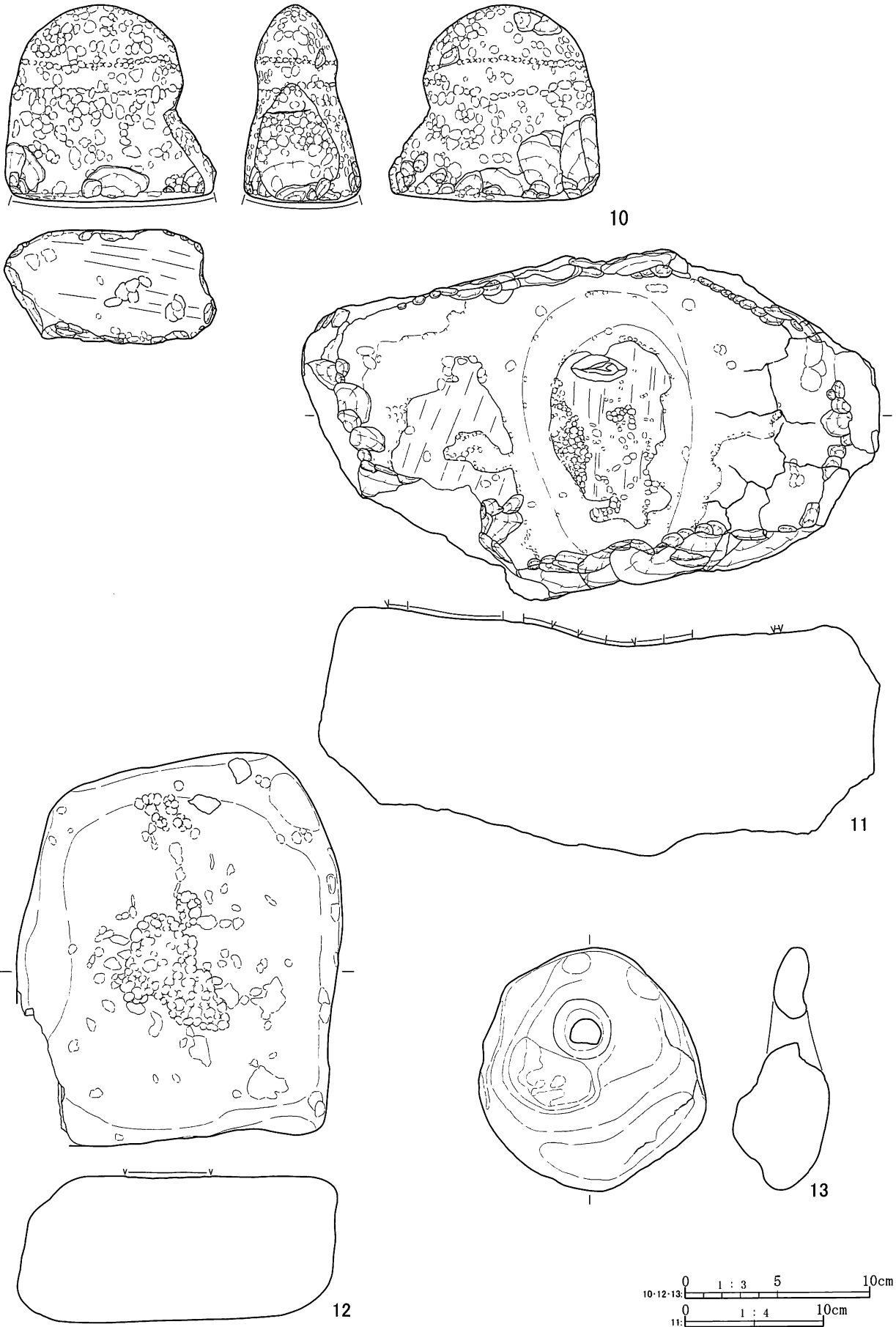
VH-06.AS01~04

- | | | | |
|-------------|--------|----------------------|------------|
| 1. 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | シルト = Ta-d2p (φ 5 ↓) | 粘性弱、しまりあり |
| 2. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | Vb = Ta-d2p (φ 10 ↓) | 粘性あり、しまりなし |
| 3. 7.5YR3/2 | 黒褐色 | Vb = Ta-d2p (φ 10 ↓) | 粘性あり、しまりなし |

図IV-11 VH-06 覆土上層捨て場遺物出土状態



図IV-12 VH-06 上層捨て場出土遺物(1)



図IV-13 VH-06 上層捨て場出土遺物(2)

表IV-8 VH-06覆土上層捨て場跡出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文 様	胎土	備考	
								口縁-口唇/胴部 /底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面			
IV-12-1	44-1	JP449A	II B2a	VH-06/ AB・AC・ AD-28・ AB・AD- 29	VbU・ bL	47	口縁 ～ 底部	突起・やや外傾- 隅丸角状/やや 外傾/やや外傾- 隅丸角状-平底	LR縄文-隆帯1 +刻み・縄線文/ LR斜行縄文-ミガキ	φ1～2mm 石英・砂 粒・繊維微 量混入	補修孔、 下部穿 孔	
IV-12-2	44-2	JP427A	II B2d	VH-06. PB02		2	1	口縁 ～ 胴部	平縁・やや外傾- 隅丸角状 /直立	RL・LR縄文-縦位貼 付文・縄線文・RL斜 行縄文/2段異原体 羽状縄文	φ3～15mm 礫・蛇紋岩 片混入	
IV-12-3	45-14	JP440A	II B2b	VH-06	VbU	1	1	底部	外反-隅丸角状 -平底	無文	繊維少量 混入	
IV-12-4	45-15	JP060+ JP261	II B2b	VH-06/ AC-24・ AH-23	VbU・ bL・2	3	3	口縁 部	突起・外傾- 隅丸角状	LR縄文-貼付文+刺 突文+縄線文	φ1～5mm 石英少量 混入	
IV-12-5	45-16	JP410A	II B2a	VH-06/ AG-28・ AH-30・ 31	Va・ bU・bL・ MO・2	11	11	口縁 ～ 胴部	突起・三角形 -外傾/やや外傾	LR縄文- LR斜行縄文 /LR斜行縄文- ミガキ(ナナメ)	φ1～5mm 石英少量 混入	
IV-12- 6a	45-17	JP426A	II B2d	VH-06. PB01		2	2	口縁 ～ 胴部	平縁・隅丸角状- 直立/やや外傾	RL縄文-無文帯・縦 位貼付文・縄線文・ 刺突文(2個1対)/RL 斜行縄文	φ3～15mm 礫・蛇紋岩 片混入	縦位貼 付文剥 落、風化
IV-12- 6b	45-18	JP426B	II B2d	VH-06		2	1	口縁 ～ 胴部	平縁・隅丸角状- 直立/やや外傾	RL縄文-無文帯・縦 位貼付文・縄線文・ 刺突文(2個2対)/RL 斜行縄文	φ3～16mm 礫・蛇紋岩 片混入	風化

表IV-9 VH-06出土石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
IV-10-1	44-3	-	63901	ポイント類	B1	4	(34.5)	(22.5)	10.4	(6.3)	Obs.	基部片
IV-10-2	44-4	-	63895	ポイント類	B1	4	(36.0)	(32.5)	9.2	(10.3)	Obs.	基部片
IV-10-3	44-5	-	63894	ポイント類	B1	4	(38.5)	(37.0)	10.7	(13.9)	Obs.	基部片
IV-10-4	44-6	-	63900	ポイント類	B1	4	(44.0)	31.2	9.6	(19.3)	Obs.	基部欠損
IV-10-5	44-7	-	63911	ナイフ・スクレイパー類	A1	4	57.5	15.5	9.4	7.2	Aga.	
IV-10-6	44-8	-	63902	ナイフ・スクレイパー類	A2	4	82.0	28.3	10.3	25.8	Sh.	
IV-10-7	44-9	-	63897	ナイフ・スクレイパー類	B2	4	34.5	28.0	9.7	7.8	Obs.	槍の転用
IV-10-8	44-10	-	63904	ナイフ・スクレイパー類	B2	4	38.0	27.5	10.4	10.5	Obs.	槍の転用
IV-10-9	44-11	-	63910	ナイフ・スクレイパー類	B2	4	47.5	32.5	11.5	14.6	Obs.	槍の転用
IV-10-10	45-12	-	63920	砥石	-	4	(101.0)	67.0	41.3	(260.0)	Sa.	
IV-10-11	45-13	-	63922	石皿	-	4	(176.0)	170.0	106.0	(4340.0)	Sa.	
IV-12-7	45-19	-	61574	ポイント類	B1	VbU	57.6	30.0	13.1	17.9	Obs.	
IV-12-8	45-20	-	62188	ポイント類	B2	2	46.0	20.0	9.2	7.7	Obs.	円基
IV-12-9	45-21	-	61576	両面調整石器	-	VbU	80.5	50.2	17.0	55.8	Obs.	
IV-13-10	46-22	-	62620	すり石	D	VbU	(108.3)	(108.2)	61.2	(980.0)	And.	被熱
IV-13-11	46-23	-	62623	石皿	-	2	413.0	253.0	178.0	21040.0	Sa.	
IV-13-12	46-24	-	62691	台石	-	2	174.0	112.0	80.0	4940.0	Sa.	
IV-13-13	46-25	-	62283	自然有孔礫	-	2	131.5	122.5	52.0	760.0	Mud.	

著には認められなかった。また、穿孔部の下に、突起をもつが、現存しているものも先端部が欠失しており、全容は把握できない。口縁部は平縁で口唇の断面は隅丸角状、口縁から胴部にかけて縄文が施されている。2・6a・b はⅡ群 B2d の滑石を含む土器であり、胎土に礫・蛇紋岩を含み、風化が著しい。口縁から胴部にかけて復元できた。2 はVH-06. PB02 から得られた個体で、平縁で口唇の断面は隅丸角状である。口縁から縦方向に貼付文がある。7 は完形の石槍で先端を欠損した後に再加工されている。基部に岩屑面を残す。8 は木葉形の石槍である。明瞭な基部を作出していないが、正面下半部の右側縁には急角度な調整が施されている。9 は木葉形を呈する両面調整石器である。正面右下から施された周縁調整は、器体の中央で階段状剥離となる。剥離面の稜上には弱い磨滅痕跡が認められる。10 は擦り面から側面へと剥離痕をもつ北海道式石冠で、角閃石安山岩を用いている。11 は長軸と直交する方向の顕著な擦痕を中央部にもつ大型の石皿で、楔状の深い亀裂が擦り面中央に残されている。12 は平坦面の中央に敲打痕のある台石、13 は中央に孔のある泥岩の転礫である。加工の痕跡はないが、特異な形状をもつことから掲載した。

(1~6a・b:宮塚義 7~13:中沢)

7号竪穴式住居跡[VH-07] (図IV-14 図版 8-8~9-1)

位置: AK・AL-26・27 区 平面形: 隅丸長方形 規模: 448×(264)cm

確認・調査: AK・AL-26・27 区段丘平坦面の縁辺のVI層上面で黒色土の落ち込みを検出した。十字ベルトを設定し、ベルトを残しながら調査を行ったところ、南側の床面及び壁面は段丘崖浸食により失われていたが、その他の部分は確認できた。その後土層断面の記録を行い、ベルト部の調査をし完掘した。床面及び竪穴外側の周辺を精査し柱穴の確認を行ったが検出できなかった。

形態: 平面形は残存部から隅丸長方形と思われる。床面は周辺の地形と同じく南東側に緩やかに傾斜し、竪穴中央付近で浅く窪んでいる。壁面はやや緩やかに立ち上がる。

堆積状態: 床面は Ta-d2 ロームを僅かに掘削して構築されていることから、掘り上げ土中には Ta-d2 は殆ど含まれていなかったと想定される。本遺構はVI層で落ち込みを検出したため、竪穴外周で掘り上げ土等は確認していない。17・18 層は硬くしまっており、生活上に堆積した層と考えられる。

遺物出土状態: 床面からの出土遺物はなく、覆土中から 125 点の遺物が出土している。内訳は土器 1 点、剥片石器 2 点、礫石器 7 点、フレイク・チップ 100 点、礫 15 点である。土器片は図化していないがⅡ群 B2b 類である。

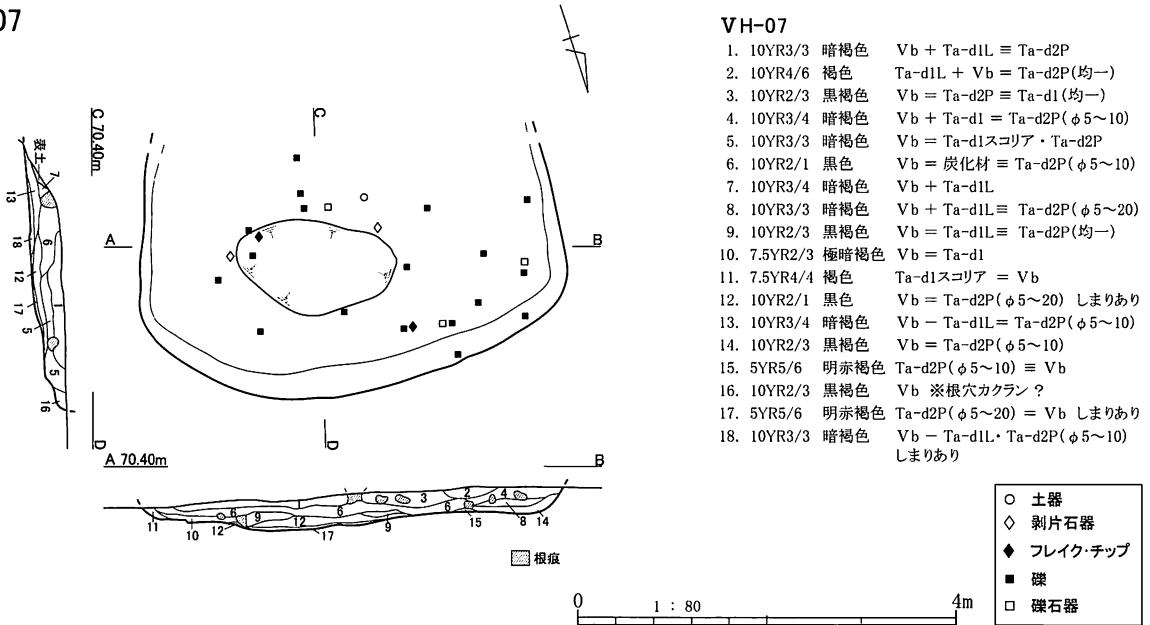
時期: 床面からの出土遺物はないが、覆土と周辺の出土土器より前期後葉と思われる。(天方)

8~10号竪穴式住居跡[VH-08~10] (図IV-15~23 図版 9-2~13-4)

VH-08~10 は調査区南西側で、T4-T5 面段丘崖裾に位置し、段丘崖に並んで検出している。これらの調査は同時に進めたことから、「確認・調査」の項は合わせて記載を行い、その他の項目については個別に記載を行う。

確認・調査: 現地表面及びⅢ層上面で 2 ヲ所 (VH-08・09) を窪みとして確認していた。V層上面では大小合わせて 3 ヲ所の窪みを確認しており、竪穴住居跡の窪みと想定していた。V層上面でこ

VH-07



図IV-14 VH-07 平面及び断面図

表IV-10 VH-07属性表

挿図 番号	図版 番号	グリッド	層位	長軸 方向	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸		
IV-14	9-1	AK・AL- 26・27	VI	N-68° W	448	(264)	168	(100)	32	

れらを含めた周辺の地形測量を行っている。これらの窪みのなるべく中心部を通り、新旧関係を捉えることが出来ると考えられる位置に計6本のベルトを設定した。各ベルトに沿ってトレンチ調査を先行して行っており、それぞれの窪みで床面及び壁面を確認し、規模等を捉えた。この時点で南側よりVH-08~10と付番した。また、VH-10はTピットと重複していることを確認し、TP-81を付番した。掘り上げ土の土層断面からは住居同士の新旧を捉えることはできなかった。

調査はVH-08・09を先行して行った。VH-08はトレンチ調査で覆土下位にTa-dテフラ主体の土層が厚く堆積していることを確認しており、屋根土であると想定された。この上面で一度遺構の検出を行い、石皿を含む大型礫が11点、その他にも礫石器が52点と多く認められたことから、堅穴住居廃絶後に捨て場として利用されたと考えられる。ただし、土器は数点程しか出土していない。その後遺物を取上げ、床面及び壁面の完掘を行った。

VH-09上位ではVa層で堅穴北西角から堅穴外に165×151cmの範囲でIV群B1類の土器片が145点とまとまって出土しており、VPB-47と付番した。また、堅穴内東側壁面中央部付近の覆土上層で16×9cmの範囲で剥片石器及び剥片の集中を検出し、VH-09.FTB01と付番した。堅穴内東側隅付近で炭化物を多く含む黒色土が堆積しており、やや大きめの材は番号を付して採取した。これらの記録・取上げ後床面を精査した。

VH-08・09床面の精査が終了した時点で、周囲の掘り上げ土の検出を行い、並行してVH-10の調査を進めた。VH-10は前述したようにTP-81と重複しており、土層断面からTP-81の方が新しいこ

とを確認していた。両遺構共、出土遺物は殆どなく、VH-10 床面及び TP-81 の底面の検出を行った。その後各遺構の土層断面の記録を取り、ベルト部の調査が終了した段階で、これらの遺構を撮影した。撮影終了後各遺構の柱穴等の付属遺構の調査、記録を行った。最後に掘り上げ土の調査を行った。また、VH-10 では各段階で床面及び周囲の精査を行ったが、柱穴等の付属遺構を検出することはできなかった。(天方)

8号竪穴式住居跡〔VH-08〕 (図IV-15～19、図版9-2、46-2、47)

位置：AG-39・40、AH・AI-39～41区 平面形：隅丸長方形 規模：960×752 cm

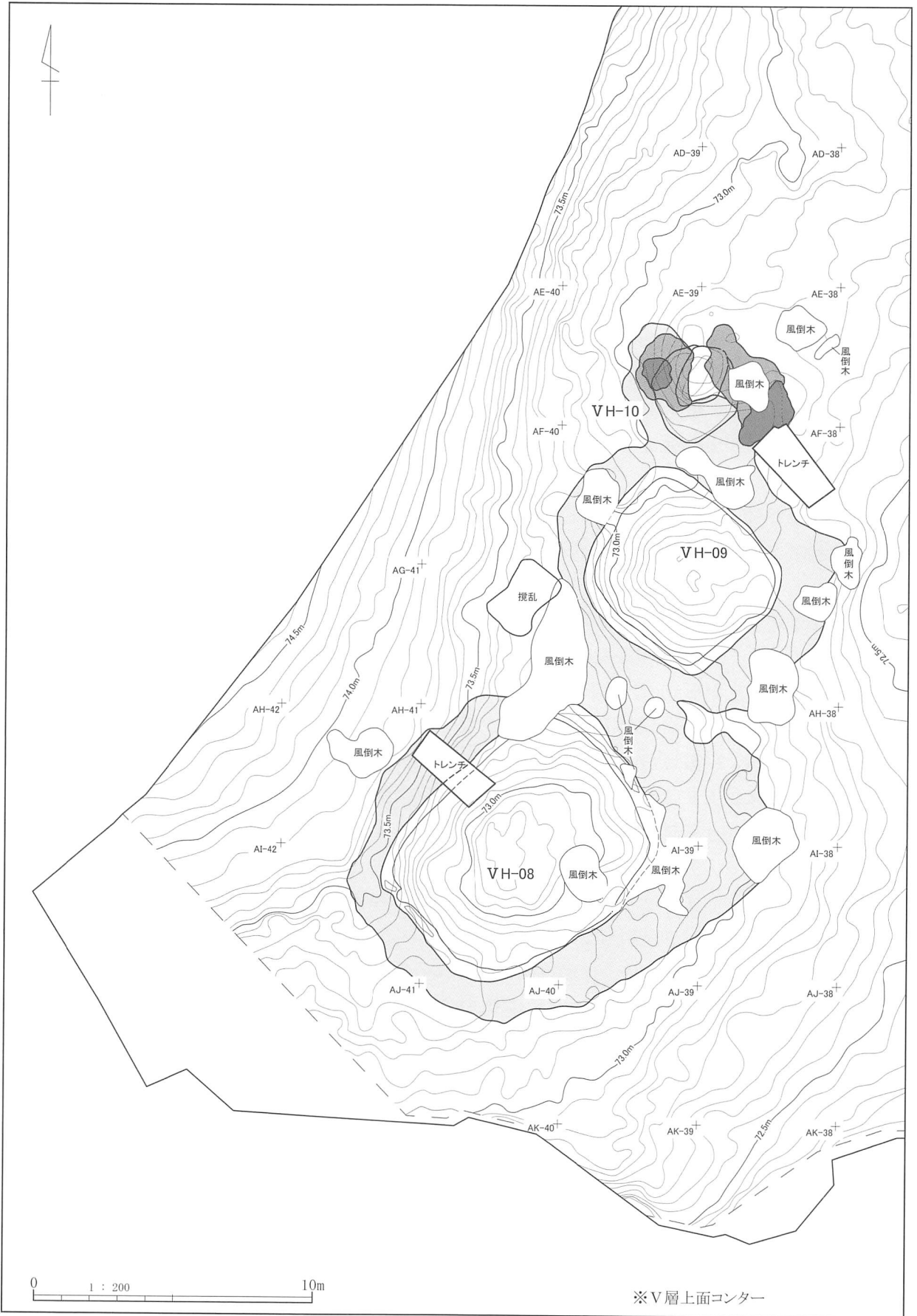
形態：平面形は隅丸長方形で、規模は長軸長 10m に僅かに及ばないが大型の竪穴住居跡である。床面はほぼ平坦で、壁面は一部で急角度に立ち上がる部分が見られるが、殆どは緩やかな傾斜である。また、南北の壁面の一部で段差になっている部分がある。土層断面 (E-F) を設定した場所は、この部分のみ、壁面が確認できなかったため、別の遺構が重複している可能性を考え、ベルトを残し調査を行ったが、土層断面からは別の遺構は確認できなかった。この部分の壁面は半円状に挟れている。

掘り上げ土：VH-09 の掘り上げ土と重複していると考えられるが、新旧関係は判断できなかった。周辺の地形で上り斜面側の西側では掘り上げ土の幅は狭くて薄く、下り斜面側の東側では幅は広くて厚い。

堆積状態：前述したように覆土の下位は Ta-d テフラを主体とする土層が、竪穴中央部付近まで厚く堆積していることから、屋根土の崩落土と、この崩落後に周囲の掘り上げ土等が流入し、二次堆積を繰り返し覆土が形成されたと考えられる。以上のような考えのもと、各土層の性格を以下のように捉えている。1・2層は Vb 層に Ta-d テフラが混入した層で、周囲の掘り上げ土等の流入により二次堆積した層。3層は混入土が殆ど見られないことから自然堆積した Vb 層。4～19 は周囲の掘り上げ土等の流入により二次堆積した層。20～53・55 は屋根土及び、屋根裾を葺いていた土の崩落したもの。54 は屋根土崩落以前の壁面崩落土。56・57 は KP41 の覆土。59・60 は Ta-d2 パミスが潰れて硬くしまっており、生活面と考えられる。58 は Ta-d2 ロームで位置的に同じく生活途上に堆積した層と思われるが、しまりはない。61～64 は竪穴外側に堆積する掘り上げ土。

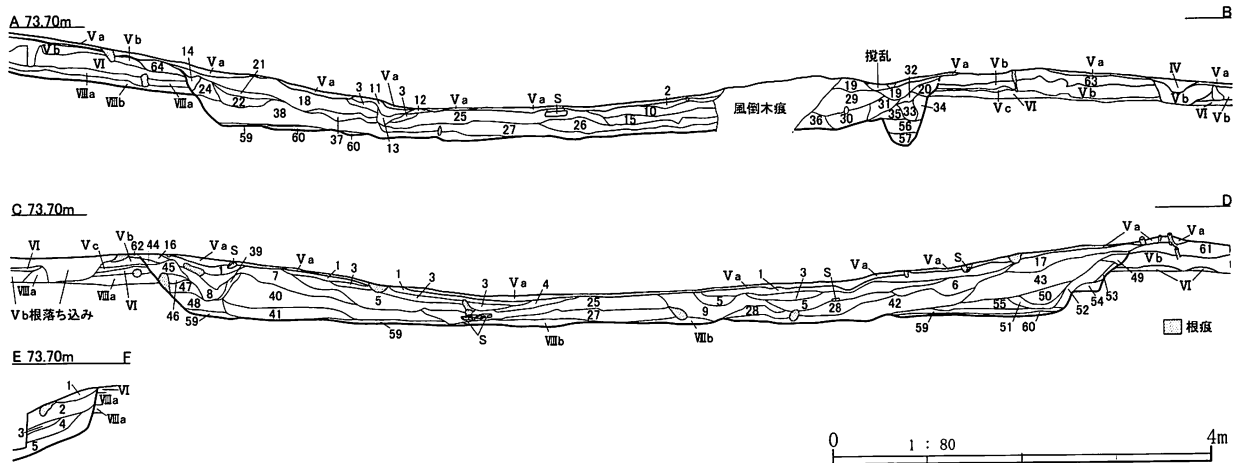
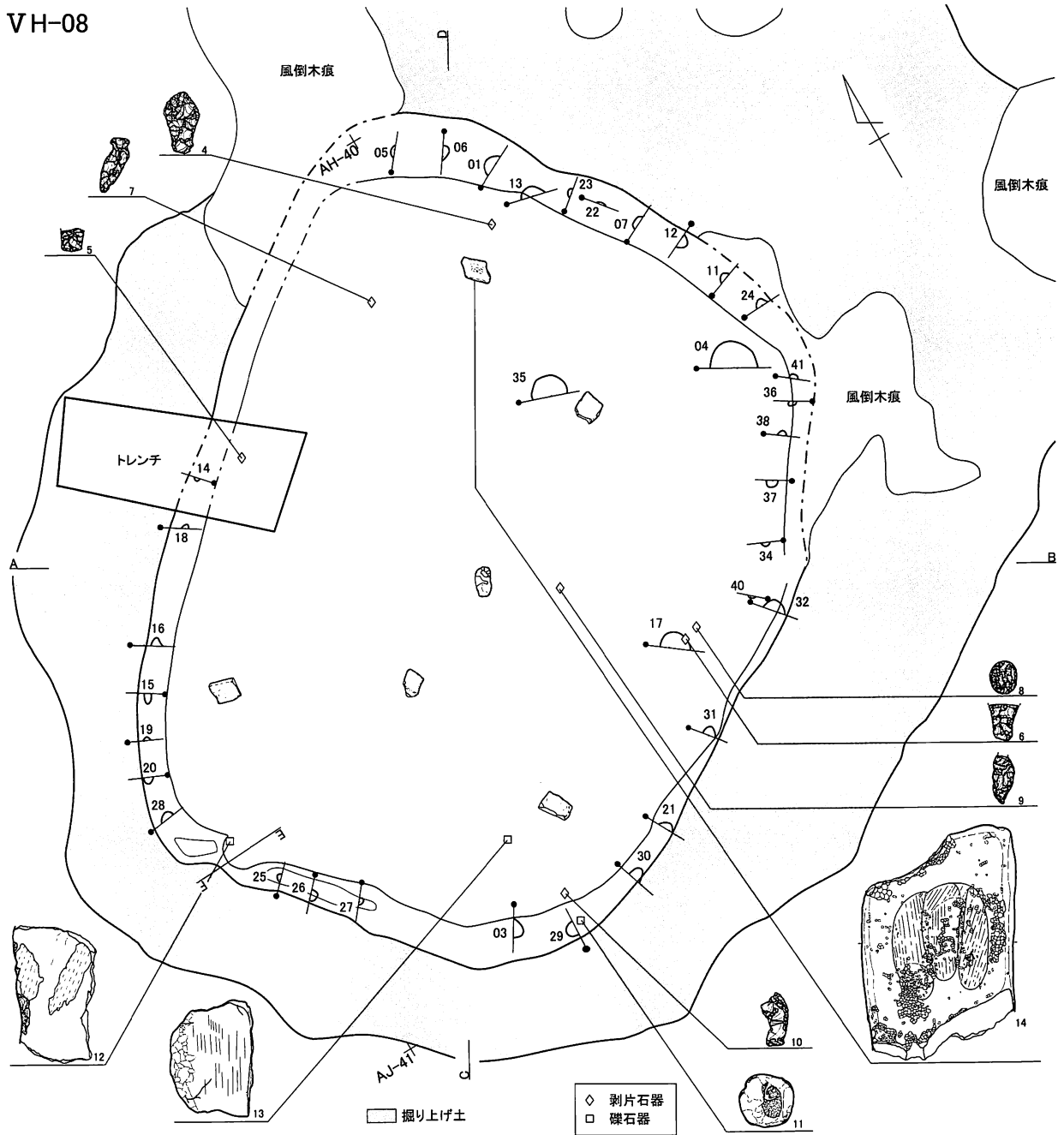
土坑及び柱穴：柱穴は 35 基検出している。KP04・17・35 は規模から主柱穴を構成する可能性があるが、配置等から妥当性がない。床面検出にはこれらの配置も合わせその他の主柱穴の検出に努めたが確認できなかった。床面は Ta-d2 パミスで、柱穴には屋根土の Ta-d2 パミスが流れ込んでおり、落ち込みの確認が困難であった。その他の 32 基の柱穴は壁面中及び壁際で検出している。

遺物出土状態：遺物は 4717 点が出土し、大半はフレイク・チップで 4392 点である。層位に関わらず竪穴中央付近から出土している。これら以外の多くは屋根土上面及び上位から出土している。特に石皿を含む大型の礫は屋根土上面から出土しており、竪穴住居跡廃絶後の窪みを捨て場として利用したと考えられる。床面からは剥片石器 6 点、礫石器 4 点、礫 14 点が出土し、土器は出土しておらず、Va 層で IV 群 B1 類が 6 点、屋根土上面で II 群 B2b が 5 点出土しているのみである。



図IV-15 VH-08 ~ 10 周辺地形図

VH-08



図IV-16 VH-08 平面及び断面図

VH-08

1. 10YR2/2	黒褐色	$Vb = Ta-dL \cdot Ta-d2P(\phi 3\sim 5)$	33. 10YR2/1	黒色	$Vb = Ta-d1L$
2. 7.5YR4/6	褐色	$Vb + Ta-d2L = Ta-d2P$	34. 10YR5/6	黄褐色	$Ta-d1L = Vb$
3. 10YR1.7/1	黒色	Vb	35. 10YR5/6	黄褐色	$Ta-d1L = Vb$
4. 10YR3/4	暗褐色	$Vb - Ta-d1L$	36. 7.5YR4/6	褐色	$Ta-d2L \equiv Ta-d1L$
5. 10YR3/3	暗褐色	$Vb - Ta-d1L \equiv Ta-d2P$	37. 7.5YR4/6	褐色	$Ta-d2L + Ta-d1L = Vb$
6. 10YR3/3	暗褐色	$Vb - Ta-d1L$	38. 5YR4/8	赤褐色	$Ta-d2L + Ta-d1L = Ta-d2スコリア$
7. 10YR2/3	暗褐色	$Vb - Ta-d1L = Ta-d2P(\phi 5\sim 18)$	39. 5YR4/8	赤褐色	$Ta-d2P = Ta-d2L \equiv Vb$ かつくしまる
8. 10YR2/3	黒褐色	$Vb = Ta-d1L \cdot Ta-d2P(\phi 5\sim 10)$	40. 7.5YR4/6	褐色	$Ta-d2L + Ta-d1L \equiv Ta-d1スコリア \cdot Ta-d2P$
9. 10YR2/3	黒褐色	$Vb = Ta-d2P(\phi 5\sim 10) \equiv Ta-d1L$	41. 7.5YR5/8	明褐色	$Ta-d2L + Ta-d1L - Ta-d1スコリア \cdot Ta-d2P$
10. 5YR5/8	明赤褐色	$Ta-d2L = Ta-d2P \equiv Vb$	42. 7.5YR5/8	明褐色	$Ta-d2L - Ta-d2P$
11. 7.5YR4/4	褐色	$Vb - Ta-d1L - Vb \equiv Ta-d2P(5\sim 10)$	43. 7.5YR5/8	明褐色	$Ta-d1L - Ta-d2L = Ta-d2P$
12. 7.5YR4/4	褐色	$Vb - Ta-d1L$	44. 7.5YR4/4	褐色	$Vb - Ta-dL \cdot Ta-d2P(\phi 3\sim 5)$
13. 7.5YR5/8	明褐色	$Ta-d1L - Ta-d2L = Ta-d2P$	45. 5YR5/8	明赤褐色	$Ta-d2L = Ta-d2P$
14. 7.5YR3/4	暗褐色	$Vb + 18$	46. 10YR5/4	にぶい黄褐色	$Ta-d1L = Ta-d1dスコリア$
15. 10YR2/1	黒色	$Vb \equiv Ta-d2P$	47. 5YR5/6	明赤褐色	$Ta-d2L + Vb = Ta-d2P$
16. 10YR2/2	黒褐色	$Vb - Ta-dL \cdot Ta-d2P(\phi 3\sim 5)$	48. 5YR5/8	明赤褐色	$Ta-d2P = Ta-d1スコリア \cdot Ta-d2L$ かつくしまる
17. 10YR3/3	暗褐色	$Vb + Ta-d1L$	49. 10YR2/1	黒色	Vb しまりなし 根穴の可能性あり
18. 7.5YR3/4	暗褐色	$Ta-d1L = Vb \cdot Ta-d1スコリア$	50. 7.5YR5/8	明褐色	$Ta-d1L - Ta-d2L = Ta-d2P$
19. 10YR2/3	黒褐色	$Vb = Ta-d1L$	51. 10YR2/2	黒褐色	$Vb = Ta-d2P$
20. 10YR2/1	黒色	$Vb = Ta-d2P$	52. 7.5YR4/6	褐色	$Ta-d1L - Vb \cdot Ta-d2P$
21. 5YR3/6	暗褐色	$Ta-d2L = Ta-d1L \equiv Ta-d2P$	53. 7.5YR4/6	褐色	$Ta-d1L - Vb \cdot Ta-d2P$
22. 5YR3/4	明赤褐色	$Ta-d2L + Vb \equiv Ta-d2P$	54. 10YR2/1	黒色	Vb しまりなし
24. 7.5YR3/4	暗褐色	$Ta-d1L \equiv Vb$	55. 7.5YR5/8	明褐色	$Ta-d2P \equiv Vb$
25. 7.5YR4/6	褐色	$Vb + Ta-d1L = Ta-d2P$	56. 10YR5/6	黄褐色	$Ta-d1L = Ta-d2P \cdot Vb$
26. 7.5YR4/6	褐色	$Ta-d1L = Ta-d2P \equiv Vb$	57. 7.5YR4/6	褐色	$Ta-d2L = Ta-d1スコリア$
27. 7.5YR5/8	明褐色	$Ta-d2L = Vb \cdot Ta-d2P$	59. 5YR3/6	暗赤褐色	$Ta-d2P \equiv Vb$ つぶれてかつくしまる
28. 7.5YR3/4	暗褐色	$Ta-d1L = Ta-d2P \cdot Vb$	60. 5YR5/8	明赤褐色	$Ta-d2P$ つぶれてかつくしまる
29. 7.5YR4/6	褐色	$Ta-d2L = Ta-d2P \equiv Vb$	61. 7.5YR4/6	褐色	$Ta-d2L + Vb - Ta-d2P$
30. 7.5YR4/4	褐色	$Ta-d2L \equiv Ta-d2P$	62. 5YR3/6	暗褐色	$Ta-d2L = Ta-d1L \equiv Ta-d2P$
31. 10YR2/3	黒褐色	$Vb = Ta-d2L \equiv Ta-d2P$	63. 10YR3/3	暗褐色	$Vb = Ta-d1L$
32. 7.5YR4/4	褐色	$Ta-d2L = Ta-d2P(\phi 10\sim 20)$	64. 10YR3/4	暗褐色	$Ta-d1L = Vb \equiv Ta-d2P$

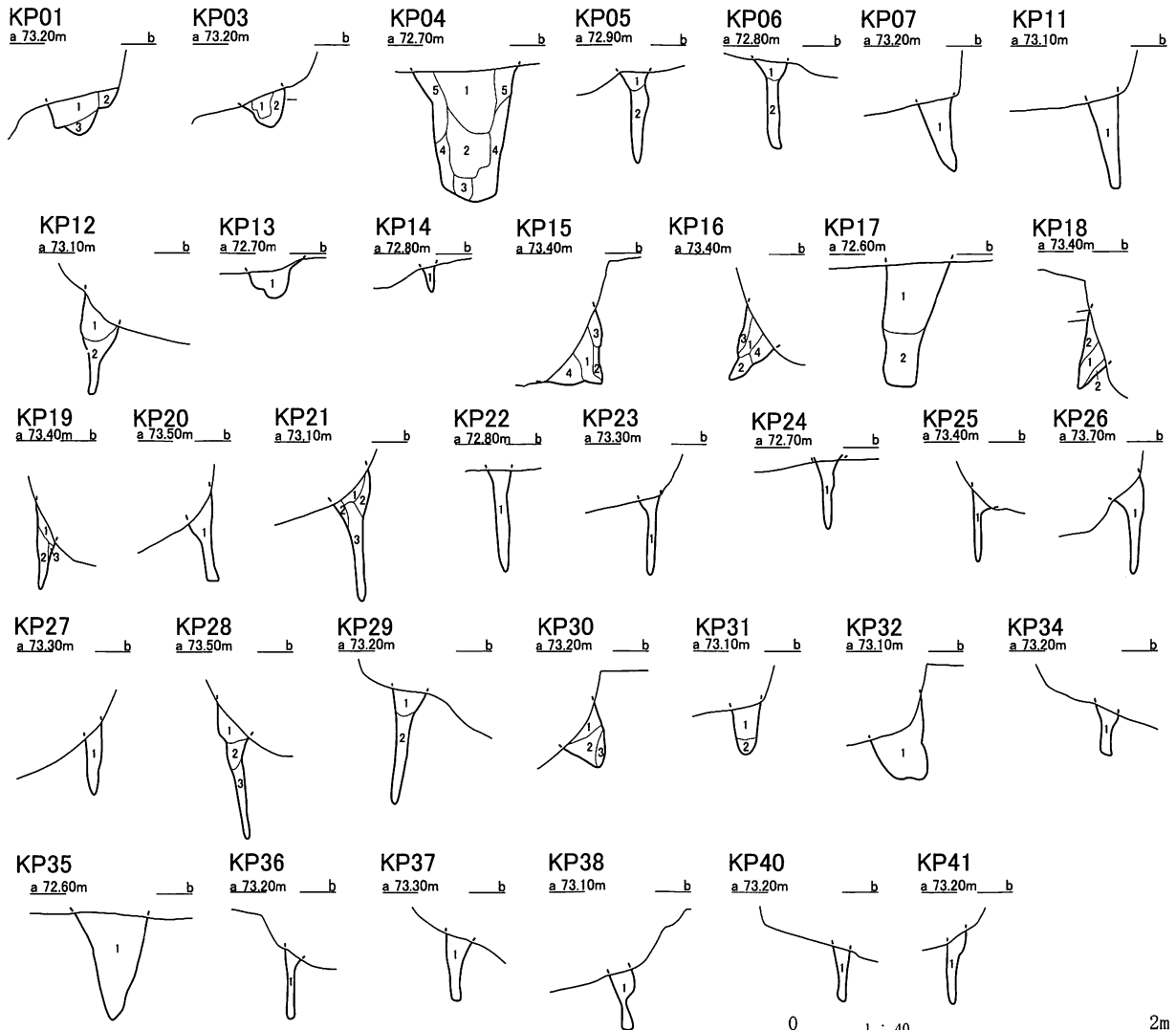
VH-08 E-F

1. 7.5YR3/4	暗褐色	$Vb - Ta-d1L$
2. 10YR5/8	黄褐色	$Ta-d1スコリア \equiv Ta-d1L$
3. 7.5YR2/2	褐色	$Ta-d1スコリア = Ta-d2L - Ta-d1L$
4. 10YR4/4	褐色	$Ta-d1スコリア = Ta-d1L = Ta-d2P$
5. 5YR4/8	赤褐色	$Ta-d2L + Ta-d1L = Ta-d2スコリア$

出土遺物 (図IV-18・19) : 2・3・5・6・8・10・11 は床面から出土した遺物である。1~3 は黒曜石製の石鏃。3 は欠損しており、大きさから石鏃に分類した。左右対称ではなく別器種の可能性もある。4~6 は黒曜石製の石槍で、4 は基部に比べて鏃身部が小さく、剥離の切り合いが新しいことから、先端部が欠損したものを再加工したものと思われる。5・6 は基部の破片で、欠損後に破断面から剥離を加えている。ただし、部分的であり意図的なものかどうか不明である。7 は頁岩製のつまみ付きナイフ。左側縁はエッジが丸くなり、微細な剥離があることから刃潰しが行われていると思われる。8 は黒曜石製のラウンドスクレイパーで周縁に僅かに原石面を残すが、ほぼ全周に急角度の刃部をもつ。9 は黒曜石製のスクレイパーである。10 はRF に分類している。11 は球状の礫を利用したすり石でたたき石と併用しており、敲打後の同一面で擦り面を形成している部分もある。12・13 は砥石。14・15 は石皿。敲打痕も広範囲に残されており、石皿の粗面整形以外に台石としても利用されたと思われる。14 は溝状の使用面が3条並行する台石。中央の溝が最も深く1.5 cmを測る。使用面の形状より、球状礫を素材としたすり石あるいは磨製石斧の研磨に用いられたと思われる。

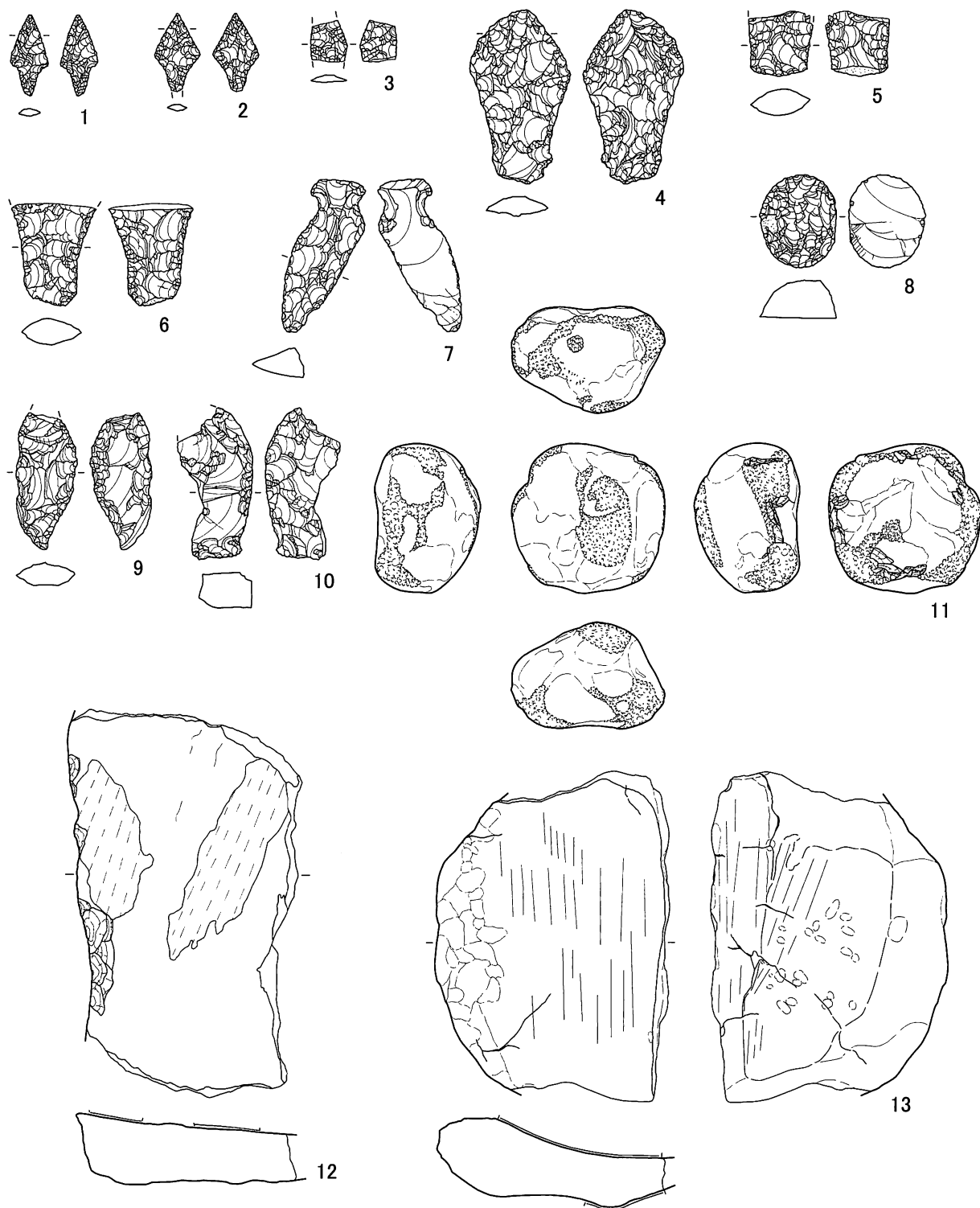
重複遺構 : 本遺構の掘り上げ土とVH-09の掘り上げ土は重複していると思われるが、土層断面からは新旧は判断できなかった。下記の状況からはVH-08の方が古く想定されるが不明瞭である。VH-08は堅穴廃絶後に捨て場として利用されており、VH-09の覆土から出土遺物が非常に少ないこと、立地はVH-08が舌状に張り出した微高地形の中央に位置することから先に構築された可能性が考えられるが、同時期に存在した可能性も拭えない。

時期 : 覆土出土の土器は破片であり、明確な時期決定は困難であるが、合わせて本遺跡は前期後葉が主体であることと、堅穴住居跡の形態、構築面等を考慮すると前期後葉と思われる。(天方)

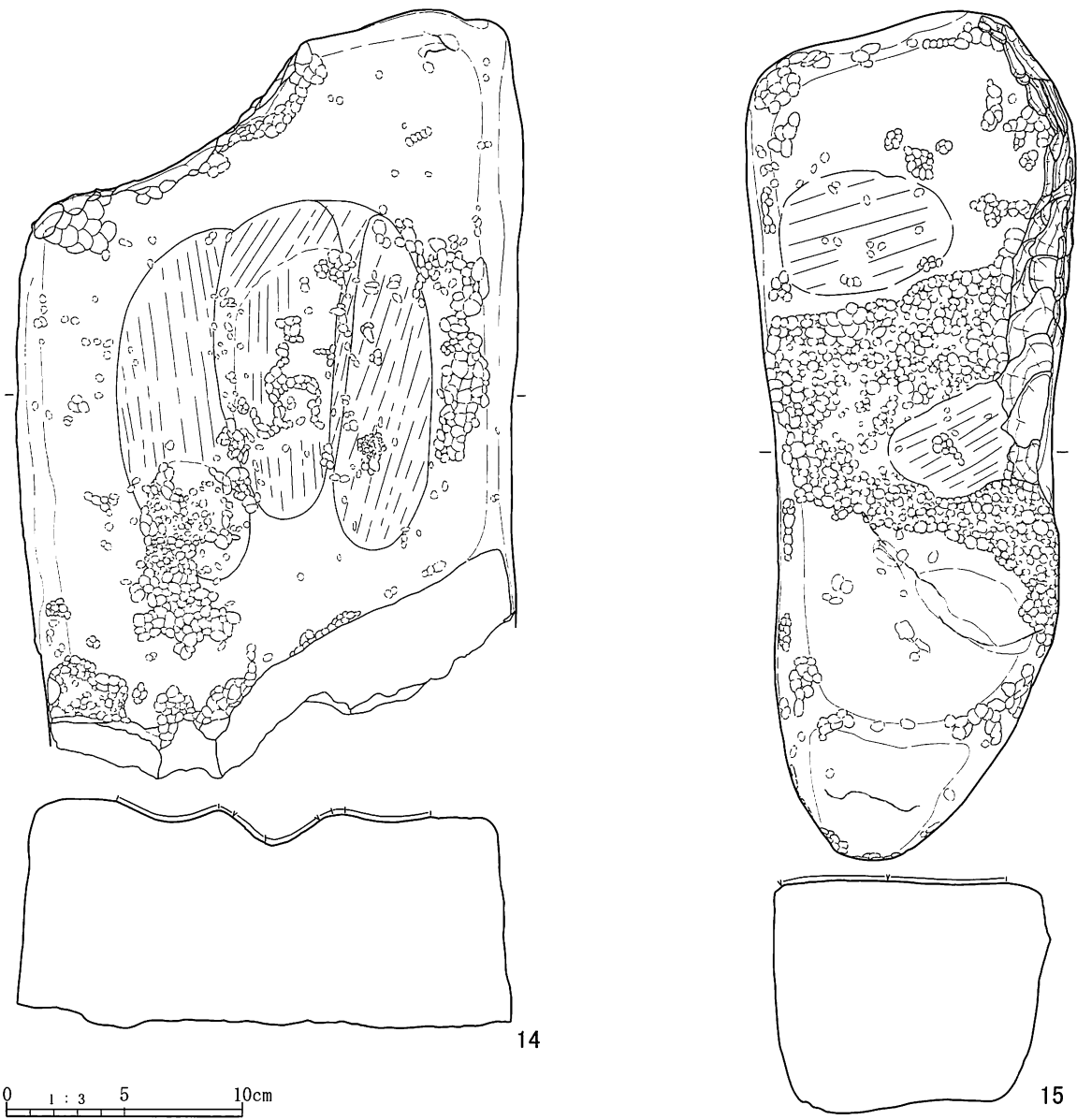


- | |
|---|
| <p>KP01
a 73.20m</p> <p>1. 10YR2/2 黒褐色 Vb + Ta-d1スコリア
≡ Ta-d2P(φ5~10)
2. 10YR3/3 暗褐色 Ta-d1スコリア = Vb
3. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2L</p> <p>KP03
a 73.20m</p> <p>1. 10YR2/3 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア
≡ Ta-d2P(φ5~10)
2. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d1Lかたたくまる</p> <p>KP04
a 72.70m</p> <p>1. 7.5YR5/6 明褐色 Ta-d1L
= Ta-d1スコリア = V1
Ta-d1L + Ta-d2L
2. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d1L = Ta-d1スコリア
3. 7.5YR4/1 褐色 Ta-d2P(φ10~20)
+ Ta-d1L
4. 7.5YR5/6 明褐色 Ta-d2L = Ta-d2P
(φ5~10)</p> <p>KP05
a 72.90m</p> <p>1. 10YR2/2 黒褐色 Vb = Ta-d2P
(φ10~20)
Vb = Ta-d2L</p> <p>KP06
a 72.80m</p> <p>1. 10YR2/2 黒褐色 Vb = Ta-d2P
(φ10~20)
Vb = Ta-d2L</p> <p>KP07
a 73.20m</p> <p>1. 10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP11
a 73.10m</p> <p>1. 10R3/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP12
a 73.10m</p> <p>1. 10YR3/4 暗褐色 Vb + Ta-d1スコリア
2. 10YR2/2 極暗赤褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP13
a 72.70m</p> <p>1. 10YR2/2 極暗赤褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP14
a 72.80m</p> <p>1. 10YR2/3 黒褐色 Vb = Ta-d2L
≡ Ta-d2P(φ3~5)</p> <p>KP15
a 73.40m</p> <p>1. 10YR2/1 黒色 Vb - Ta-d1スコリア
2. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-d2L
3. 5YR4/8 赤褐色 Ta-d2L = Ta-d1スコリア
4. 5YR5/8 明褐色 Ta-d2L</p> <p>KP16
a 73.40m</p> <p>1. 10YR2/3 黒褐色 Vb + Ta-d2L
= Ta-d1スコリア - Ta-d2P
Vb + Ta-d1スコリア
2. 10YR2/1 黒色 Vb + Ta-d1スコリア
3. 5YR4/6 赤褐色 Ta-d2L ≡ Ta-d1スコリア - Vb
4. 5YR5/8 明褐色 Ta-d2L</p> <p>KP17
a 72.60m</p> <p>1. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2L
2. 7.5YR3/4 暗褐色 Ta-d2L + Ta-d2P</p> <p>KP18
a 73.40m</p> <p>1. 10YR2/2 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア
2. 7.5YR3/4 暗褐色 Ta-d2L = Vb-Ta-d1スコリア
- Ta-d2P</p> <p>KP19
a 73.40m</p> <p>1. 10YR2/3 黒褐色 Vb = Ta-d2L = Ta-d1スコリア
- Ta-d2P</p> <p>KP20
a 73.50m</p> <p>1. 10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP21
a 73.10m</p> <p>1. 10YR3/3 暗褐色 Ta-d1スコリア = Vb
Ta-d2L
2. 10YR4/6 褐色 Ta-d1スコリア + Ta-d2L
3. 10YR2/2 黒褐色 Ta-d1スコリア + Ta-d2L</p> <p>KP22
a 72.80m</p> <p>1. 10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP23
a 73.30m</p> <p>1. 10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP24
a 72.70m</p> <p>1. 10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP25
a 73.40m</p> <p>1. 10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP26
a 73.70m</p> <p>1. 10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP27
a 73.30m</p> <p>1. 10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP28
a 73.50m</p> <p>1. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d1スコリア = Ta-d2L
2. 10YR3/4 暗褐色 Vb + Ta-d1スコリア
3. 10YR2/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP29
a 73.20m</p> <p>1. 10YR4/6 褐色 Ta-d1スコリア = Vb-Ta-d2L
2. 7.5YR3/4 暗褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP30
a 73.20m</p> <p>1. 10YR4/4 褐色 Ta-d2L + Ta-d1L ≡ Vb
2. 10YR2/3 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア
3. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2L</p> <p>KP31
a 73.10m</p> <p>1. 10YR2/3 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア
2. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2L</p> <p>KP32
a 73.10m</p> <p>1. 10YR2/3 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア = Ta-d2P</p> <p>KP34
a 73.20m</p> <p>1. 10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP35
a 72.80m</p> <p>1. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d1L = Ta-d2P(φ5~10)</p> <p>KP36
a 73.20m</p> <p>1. 10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP37
a 73.30m</p> <p>1. 10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP38
a 73.10m</p> <p>1. 10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP40
a 73.20m</p> <p>1. 10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> <p>KP41
a 73.20m</p> <p>1. 10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア</p> |
|---|

図IV-17 VH-08 柱穴断面図



図IV-18 VH-08 出土遺物 (1)



図IV-19 VH-08 出土遺物(2)

表IV-11 VH-08属性表

挿図 番号	図版 番号	グリッド	層位	長軸 方向	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸		
IV-16	10-1	AH・AI- 39~41	Vb	N-49° E	960	752	856	712	56	

表IV-12 VH-08 柱穴属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)			傾き (度)	備考
			上端	下端	深さ		
IV-17	-	KP01	40	5	22	3°	
IV-17	-	KP03	23	6	17	18°	
IV-17	11-5	KP04	58	28	71	1°	
IV-17	-	KP05	16	2	50	2°	
IV-17	11-6	KP06	18	5	48	4°	
IV-17	-	KP07	19	2	39	16°	
IV-17	11-7	KP11	16	4	49	9°	
IV-17	-	KP12	18	4	43	6°	
IV-17	-	KP13	29	7	15	2°	
IV-17	-	KP14	7	2	14	8°	
IV-17	-	KP15	28	4	23	25°	
IV-17	-	KP16	15	2	28	31°	
IV-17	-	KP17	35	16	67	8°	
IV-17	-	KP18	9	2	28	19°	
IV-17	11-8	KP19	10	2	36	6°	
IV-17	-	KP20	12	6	37	11°	
IV-17	11-9	KP21	19	2	60	6°	
IV-17	-	KP22	13	2	55	4°	
IV-17	-	KP23	11	2	42	1°	
IV-17	-	KP24	16	2	40	1°	
IV-17	-	KP25	11	2	33	3°	
IV-17	-	KP26	14	2	45	5°	
IV-17	-	KP27	9	2	35	1°	
IV-17	-	KP28	17	2	64	8°	
IV-17	-	KP29	19	2	63	8°	
IV-17	-	KP30	17	3	20	31°	
IV-17	-	KP31	16	4	27	2°	
IV-17	-	KP32	27	3	25	31°	
IV-17	-	KP34	12	5	24	1°	
IV-17	-	KP35	40	4	59	0°	
IV-17	-	KP36	9	3	35	3°	
IV-17	-	KP37	15	5	35	3°	
IV-17	-	KP38	11	6	31	8°	
IV-17	-	KP40	9	2	29	2°	
IV-17	-	KP41	10	2	37	2°	

表IV-13 VH-08 出土石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
IV-18-1	46-1	-	73927	ポイント類	A3	3	26.5	12.0	3.4	0.8	Obs.	
IV-18-2	46-2	-	74422	ポイント類	A3	4	(26.0)	15.0	1.6	(8.5)	Obs.	
IV-18-3	46-3	-	74421	ポイント類	A	4	(14.0)	(12.5)	2.3	(0.5)	Obs.	欠損品
IV-18-4	46-4	-	66885	ポイント類	B1	3	57.0	33.2	10.4	15.8	Obs.	
IV-18-5	46-5	-	68312	ポイント類	B1	4	(21.0)	(21.5)	9.6	(2.1)	Obs.	基部片
IV-18-6	46-6	-	68309	ポイント類	B1	4	(33.5)	(28.0)	9.8	(5.8)	Obs.	基部片
IV-18-7	46-7	-	66980	ナイフ・スクレイパー類	A2	2	54.0	21.5	9.9	9.4	Sh.	
IV-18-8	46-8	-	68308	ナイフ・スクレイパー類	B1	4	30.5	25.5	13.2	10.9	Obs.	
IV-18-9	46-9	-	66473	ナイフ・スクレイパー類	C1	1	(45.0)	20.5	9.4	(7.4)	Obs.	
IV-18-10	46-10	-	68310	RF・UF	-	4	(50.0)	(25.0)	10.8	(13.3)	Obs.	被熱
IV-18-11	47-11	-	68306	すり石	-	4	75.0	74.0	51.1	435.0	Gr-Mud.	
IV-18-12	47-12	-	66851	砥石	-	1	(253.0)	(156.0)	64.6	(2210.0)	Sa.	
IV-18-13	47-13	-	66861	砥石	-	2	(218.0)	(160.0)	87.2	(1900.0)	Sa.	
IV-19-14	47-14	-	66840	石皿	-	2	(430.2)	280.4	128.2	(24300.0)	Sa.	
IV-19-15	47-15	-	67831	石皿	-	2	478.0	186.0	131.0	17700.0	Sa.	

9号竪穴式住居跡〔VH-09〕（図IV-20～22、図版12、13-1、48）

位置：AF・AG-38・39区 平面形：隅丸方形

規模：竪穴本体 664×600×60cm 掘り上げ土 1020×900×37cm

形態：平面形は隅丸方形。住居北西側の壁の立ち上がりは、住居埋没後の風倒木痕によって大きく失われていたため、北東側と南西側の立ち上がりを確認した後に、それらの壁のラインを延長し、壁面とした。壁面は、地形が高くなっていく西側と、南側では比較的高い。南東側の壁面は床面から垂直方向に立ち上がるが、北東側では床から緩やかに壁面へと移行する。

掘り上げ土：竪穴の周囲に1020×900cmの範囲で広がっていた。南西側ではVH-08の掘り上げ土と連続する。厚さは北側で6cm、北西側で11cm、北東側が最も厚く、37cmを測る。

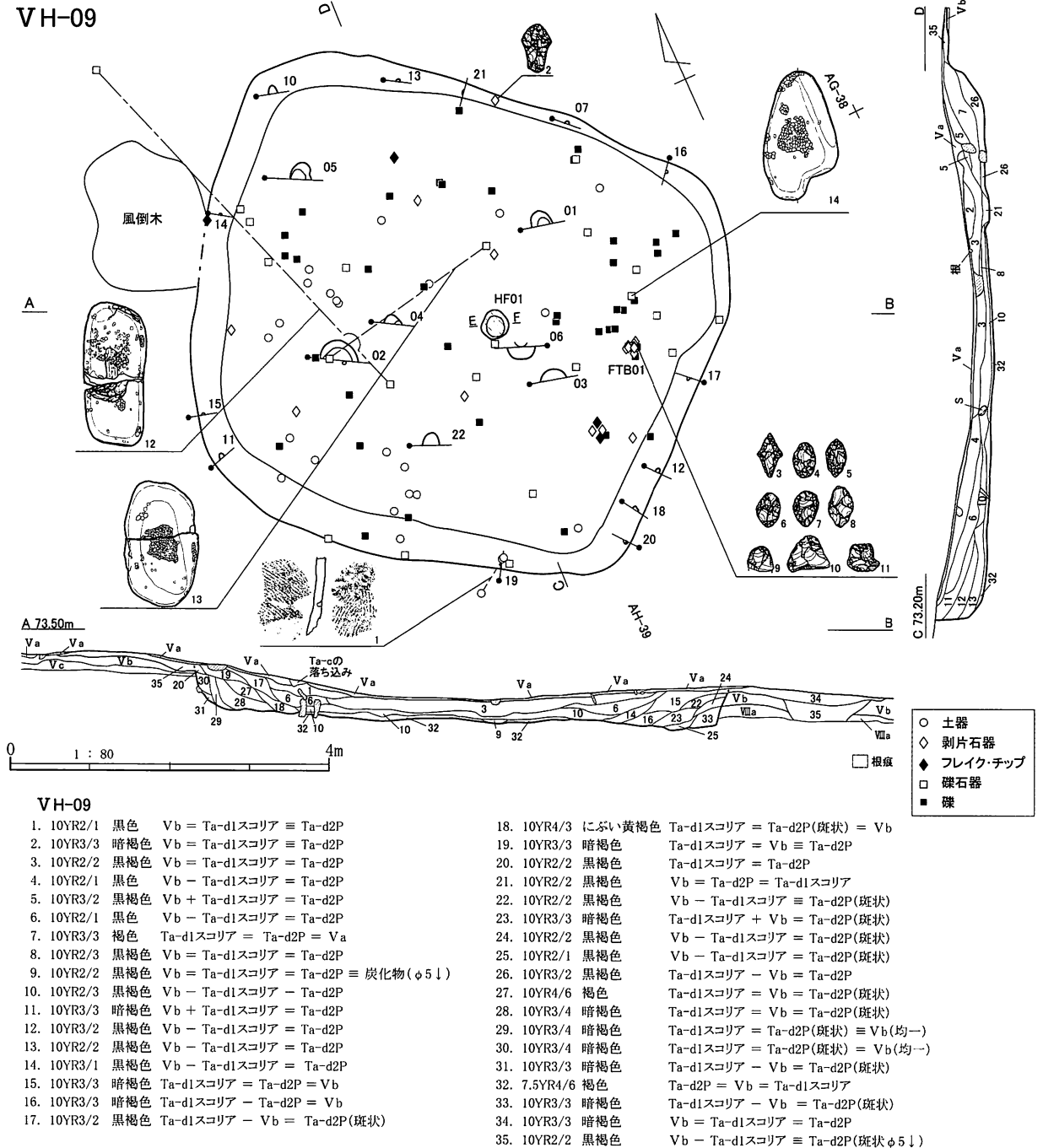
堆積状態：竪穴内の覆土は深いところで50cm、浅いところで35cmあり、Va層が住居の全面を覆う。32・34・35層はVb層を主とするTa-d2パミスを含む掘り上げ土であり、住居の縁辺部に堆積している（図版12-2）。34・35層を挟んで上下にVb層が堆積していることから、Vb層がある程度堆積した段階で竪穴住居が構築されたと言える。Ta-d1スコリアとTa-d2パミスを多く含む5・7・15～20・22～33層は、掘り上げ土の住居内への流れ込みによって堆積したと思われる。25層は東壁付近の床面に堆積していた黒褐色土層であり、炭化物片を含んでいた。床のほぼ全面には32層が薄く堆積し、Ta-d2パミスを主とし、Vb層とTa-d1スコリアを少量含んでいる。

炉跡：住居中央の床面に堆積する10層上面で楕円形の黒褐色のプラン（直径35cm）を検出した。炭化物片が多く含まれていることから、炉跡と判断し、HF01として記録した。床面は東西断面図にみられるように、Ta-d2パミスの上部に構築されており、平坦である。東西ベルト除去および床面清掃後、東西ベルトの方向に沿って炉跡を半截した。被熱層は確認できなかった。炭化物片を含む堆積物層（9層）をフローテーション用土壌サンプルとして採取した。

土坑および柱穴：柱穴の検出作業は、生活面（32層）及び、床面（32層下面）、床面を掘り下げたⅧ層のそれぞれで実施した。また床面を掘り下げる段階で壁側を精査し、柱穴の検出を行った。柱穴は全部で20本検出した。比較的太い柱穴はKP01～06・22の7本である。いずれも住居内の平坦部に位置し、壁際の柱穴よりも太い。断面からは底面が細くすぼまるもの（KP03・05）も認められた。残りの13本は壁際を周回するように配列する細い柱穴である。断面から柱穴が垂直、もしくは住居の内側へやや傾斜していたことが確認できた。

遺物の出土状態：覆土上部の3層より黒曜石の剥片集中を検出した。両面調整石器などの剥片石器が含まれることから、VH-09.FTB01として記録した。本集中は7点の剥片石器、4点のフレイクからなり、剥片石器は小型の両面調整石器が3点、RFが2点、基部がすぼまる菱形の剥片素材の石槍が1点、剥片素材の石核が1点である。

出土遺物（図IV-22）：1は土器片、2～11は剥片石器、12～14は礫石器である。1は表裏に合擦しの縄文が施される。硬く擦られた原体と擦りの緩い原体を用いており、一見擦り戻しのように見える。Ⅱ群B2b類に属する。2～11は黒曜石製、2は先端部が再加工されたと思われる石槍、3は逆刺によって基部が明瞭な石槍、4～8は小型の両面調整石器に分類したが、6、8は腹面の剥離が進んでいない。9・10は縁辺に微細剥離を有する剥片、11は剥片素材の石核である。12は中央に縦長の擦り面をもつ石皿で、中央で大きく欠損し、下半部は欠損面から剥離がなされている。

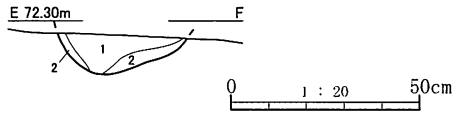


図IV-20 VH-09 平面及び断面図

13・14は中央部に敲打痕が集中する台石で、床面から出土した。3・4・7・8・10・11の石器はVH-09. FTB01より出土している。(1:宮塚義 2~14:中沢)

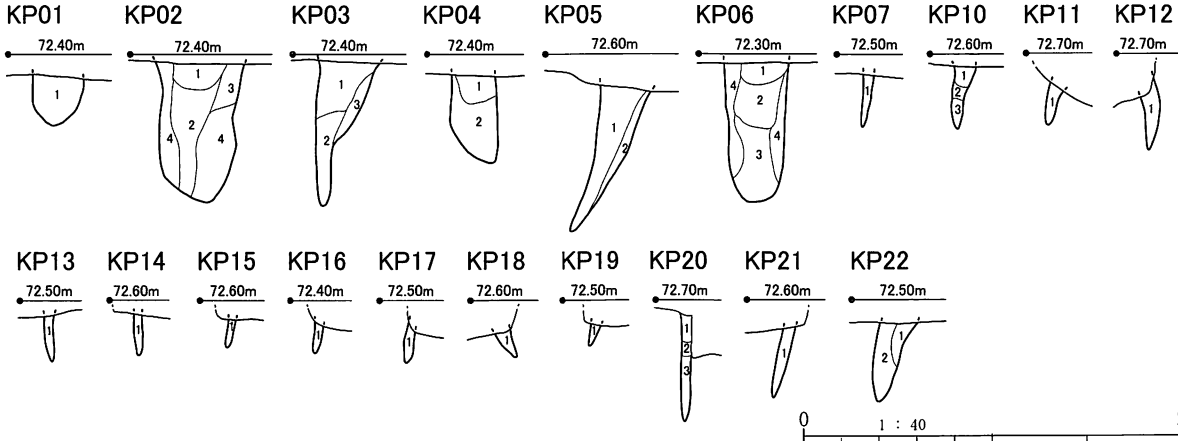
時期：床面からは住居の時期判定材料となる土器は出土していない。覆土よりII群B2b類の土器片が出土しており、住居外の包含層(VbL層)から出土した土器と接合している。住居の時期は縄文前期後葉頃と思われる。(中沢)

HF01



HF01

- 1. 10YR3/2 黒褐色 Vb? - Ta-d2P (φ 10 ↓) = 炭化物 (φ 10 ↓) 粘あり、しまりなし
- 2. 10YR3/3 暗褐色 Ta-d2P (φ 10 ↓) - Vb? 炭化物 (φ 10 ↓) 粘あり、しまりなし



KP01

- 1. 10YR5/8 黄褐色 Ta-d2L = Ta-d1スコリア粘あり、しまりなし

KP02

- 1. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2L - Ta-d1スコリア 粘あり、しまりなし
- 2. 7.5YR4/4 褐色 Ta-d2L = Ta-d1スコリア = Ta-d2P 粘あり、しまりなし
- 3. 7.5YR5/6 明褐色 Ta-d2L = Ta-d1スコリア 粘あり、しまりなし
- 4. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2L - Ta-d2P - Ta-d1スコリア 粘あり、しまりなし

KP03

- 1. 7.5YR5/6 明褐色 Ta-d2L = Ta-d1スコリア = Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘あり、しまりなし
- 2. 7.5YR4/4 褐色 Ta-d2L - Ta-d1スコリア = Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘あり、しまりなし
- 3. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2P (φ 20 ↓) = Ta-d1スコリア 粘あり、しまりなし

KP04

- 1. 7.5YR4/6 褐色 Ta-dL = Ta-d1スコリア ≡ Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘あり、しまりなし
- 2. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2L - Ta-d2P - Ta-d1スコリア 粘あり、しまりなし

KP05

- 1. 7.5YR4/4 褐色 Ta-d2L - Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘あり、しまりなし
- 2. 5YR3/6 暗赤褐色 Ta-d2P (φ 10 ↓) - Ta-d2L 粘あり、しまりなし

KP06

- 1. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2L - Ta-d1スコリア ≡ Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘あり、しまりなし
- 2. 7.5YR4/4 褐色 Ta-d2L - Ta-d1スコリア = Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘あり、しまりなし
- 3. 7.5YR3/4 暗褐色 Ta-d2L + Ta-d1スコリア = Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘あり、しまりなし
- 4. 5YR4/6 赤褐色 Ta-d2L - Ta-d1スコリア - Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘あり、しまりなし

KP07

- 1. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア = Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘なし、しまりなし

KP10

- 1. 10YR3/2 黒褐色 Ta-d1スコリア = Ta-d2P ≡ Vb 粘ややあり、しまりなし
- 2. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2P ≡ Ta-d1スコリア 粘あり、しまりあり
- 3. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア = Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘なし、しまりなし

KP11

- 1. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア = Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘なし、しまりなし

KP12

- 1. 10YR3/2 黒褐色 Vb - Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘なし、しまりなし

KP13

- 1. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア = Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘なし、しまりなし

KP14

- 1. 10YR3/2 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア = Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘なし、しまりなし

KP15

- 1. 10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d2P (φ 10 ↓) = Ta-d1スコリア 粘なし、しまりなし

KP16

- 1. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア = Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘なし、しまりなし

KP17

- 1. 10YR2/1 黒色 Vb - Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘なし、しまりなし

KP18

- 1. 10YR2/3 黒褐色 Ta-d1スコリア = Ta-d2L = Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘なし、しまりなし

KP19

- 1. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア = Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘なし、しまりなし

KP20

- 1. 10YR3/3 暗褐色 Ta-d2L = VbL ≡ Ta-d2P (φ 1 ↓) 粘なし、しまりあり
- 2. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2L = Ta-d1スコリア ≡ Ta-d2P (φ 1 ↓) 粘あり、しまりあり
- 3. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア = Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘なし、しまりなし

KP21

- 1. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア = Ta-d2P (φ 5 ↓) 粘なし、しまりなし

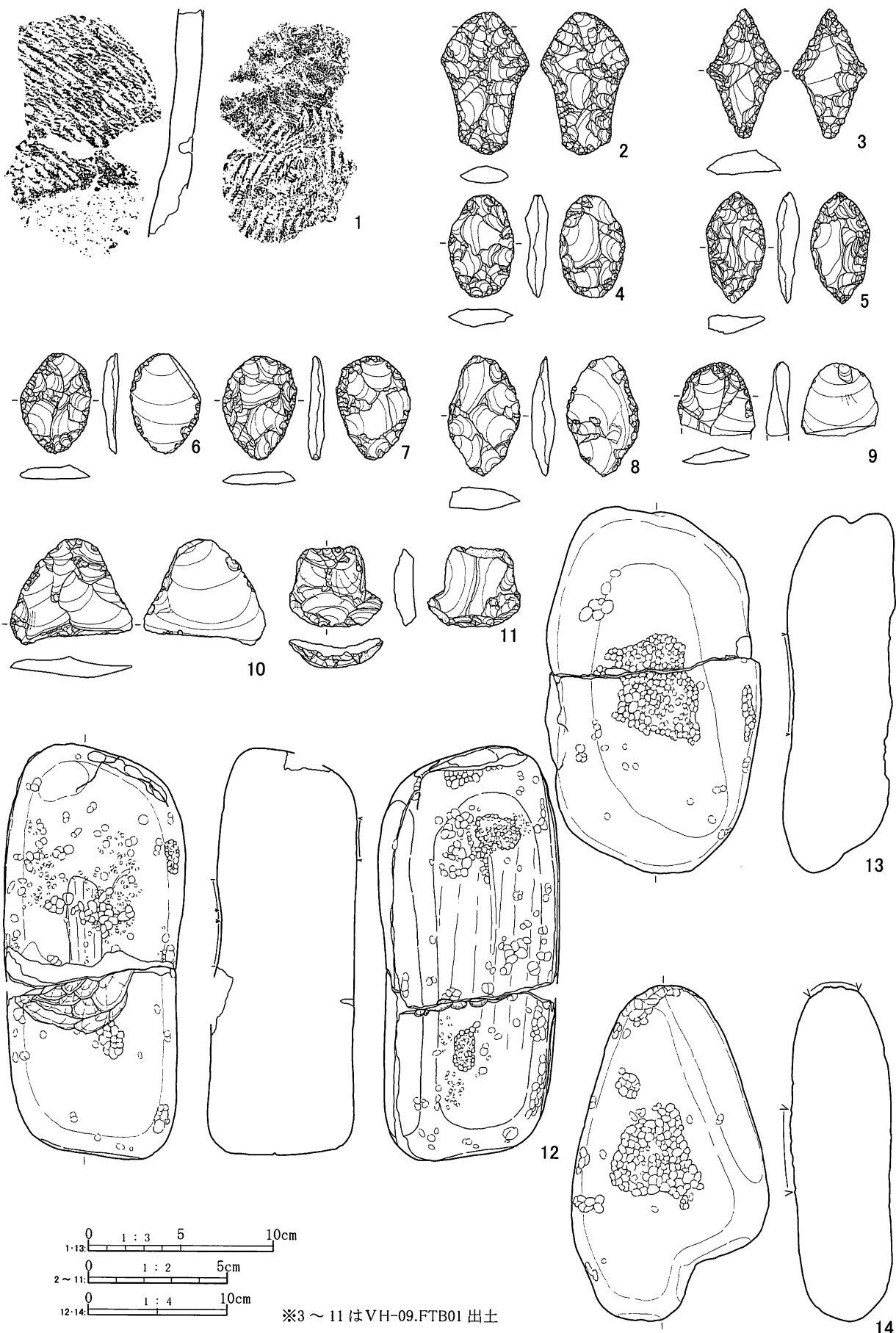
KP22

- 1. 7.5YR3/4 暗褐色 Ta-d2L - Ta-d1スコリア 粘あり、しまりなし
- 2. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2L = Ta-d1スコリア = Vb = Ta-d2P (φ 10 ↓) 粘あり、しまりなし

図IV-21 VH-09 炉跡及び柱穴断面図

表IV-14 VH-09 属性表

挿図 番号	図版 番号	グリッド	層位	長軸 方向	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸		
IV-20	12-1	AF・AG- 38・39	Vb	N-52°W	664	600	612	532	60	
IV-21	12-8	-	-	-	37	34	27	22	14	VH-09 HF01



図IV-22 VH-09 出土遺物

表IV-15 VH-09 柱穴属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)			傾き (度)	備考
			上端	下端	深さ		
IV-21	-	KP01	27	2	25	5°	
IV-21	-	KP02	46	4	72	3°	
IV-21	-	KP03	32	3	75	10°	
IV-21	-	KP04	23	3	45	13°	
IV-21	-	KP05	26	2	75	21°	
IV-21	12-9	KP06	34	12	73	2°	
IV-21	-	KP07	5	1	27	7°	
IV-21	-	KP10	11	2	33	7°	
IV-21	-	KP11	7	2	20	16°	
IV-21	-	KP12	11	1	32	2°	
IV-21	-	KP13	5	2	24	4°	
IV-21	-	KP14	4	2	21	2°	
IV-21	-	KP15	4	1	14	10°	
IV-21	-	KP16	4	2	15	9°	
IV-21	-	KP17	3	2	18	9°	
IV-21	-	KP18	8	1	13	28°	
IV-21	-	KP19	5	1	11	17°	
IV-21	-	KP20	6	1	56	1°	
IV-21	12-10	KP21	6	0	37	13°	
IV-21	-	KP22	20	1	41	16°	

表IV-16 VH-09出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部 /底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/底側面 -底面-内面		
IV-22-1	48-1	JP428B	II B2b	VH-09/ AG-39	VbL・2	2	胴部	外傾	合燃L-合燃L	砂粒少量・ 白色岩片 微量・繊維 微量混入	

表IV-17 VH-09 出土石器属性表

挿図番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
IV-22-2	48-2	-	67527	ポイント類	B1	VbL	50.5	32.6	10.4	13.5	Obs.	
IV-22-3	48-3	-	67506	ポイント類	B1	1	46.0	27.0	7.3	6.5	Obs.	
IV-22-4	48-4	-	66999	両面調整石器	-	1	36.5	23.5	8.0	6.0	Obs.	
IV-22-5	48-5	-	66801	両面調整石器	-	1	40.0	21.0	8.0	5.7	Obs.	
IV-22-6	48-6	-	67525	両面調整石器	-	2	36.0	25.5	5.5	4.6	Obs.	
IV-22-7	48-7	-	67507	両面調整石器	-	1	37.5	27.0	6.0	5.4	Obs.	
IV-22-8	48-8	-	67502	両面調整石器	-	1	43.0	25.5	9.0	8.0	Obs.	
IV-22-9	48-9	-	67524	RF・UF	-	1	(26.0)	27.2	5.0	(4.4)	Obs.	
IV-22-10	48-10	-	66997	RF・UF	-	1	43.0	38.0	5.9	9.9	Obs.	
IV-22-11	48-11	-	67504	石核	-	1	33.0	29.0	8.0	7.7	Obs.	
IV-22-12	48-12	VST 235	67867他	石皿	-	2	290.9	130.0	104.2	(6400.0)	Sa.	
IV-22-13	48-13	VST 237	67864他	台石	-	3	226.0	154.0	80.0	4380.0	Sa.	
IV-22-14	48-14	-	68086	台石	-	3	243.0	148.0	73.0	2700.0	Sa.	

10号竪穴式住居跡・81号Tピット〔VH-10・TP-81〕（図IV-23 図版13-2～4）

位置：AE・AF-38・39区（VH-10） AE・AF-38区（TP-81）

平面形：楕円形（VH-10） 隅丸方形（VH-10）

規模：342×312 cm（VH-10） 240×156 cm（TP-81）

形態：VH-10は一部風倒木痕とTP-81で壊されているが、平面形は隅丸方形と考えられる。床面はTa-d2ローム上面に構築されており、ほぼ平坦である。壁面は床面から緩やかに立ち上がる。TP-81はC1型である。底面はIX層を15 cm程掘り下げている。

堆積状態：VH-10とTP-81が重複しており、土層断面よりTP-81が新しく、VH-10が古いことが判明している。1～33層はTP-81の覆土である。各土層の性格は遺構が重複しており捉えにくい。12層は混ざりの少ないTa-d2パミスが厚く堆積している。これは周囲に掘り上げられていたTP-81の掘り上げ土が壁面の崩落に伴い堆積したと考えられる。これより下は土層の特徴と堆積状態より壁面崩落によるものと思われる。12層より上は周囲の土の流入によるものと考えられる。

34～42層はVH-10の覆土である。基本的にはVbとTa-d1の混土層である。VH-10はTa-d2を殆ど掘らずに作られていることから、壁面の崩落土及びVH-10の掘り上げ土が流入したものと考えると矛盾しない。43～44層は掘り上げ土であるが、近接するVH-09・10の間に位置しており、どちらの掘り上げ土であるか不明である。

掘り上げ土：掘り上げ土A・Bは掘り上げ土中にIX層及び礫片が見られることから、IX層まで掘削しており、TP-81に関わる掘り上げ土と考えられる。掘り上げ土Cは土層の特徴からはTP-81、VH-10、VH-09のどれに起因する掘り上げ土かは不明瞭である。

遺物出土状態：共に出土遺物は少ない。VH-10は覆土中より剥片石器1点、礫石器2点、礫7点が出土している。床面からは出土していない。また、覆土の上のVa層およびその直下では、Ⅲ群B1類の土器片等が出土している。TP-81では覆土上位より礫石器1点と礫5点が出土している。

時期：VH-10は床面からの出土遺物はなく、時期は不明であるが、周辺の出土遺物及び遺跡の主体から前期後葉と思われる。TP-81は切り合いからVH-10より新しい。（天方）

11号竪穴式住居跡〔VH-11〕（図IV-23 図版13-5～8、48-15）

位置：AE・AF-35区 平面形：隅丸方形 規模：304×(184)cm

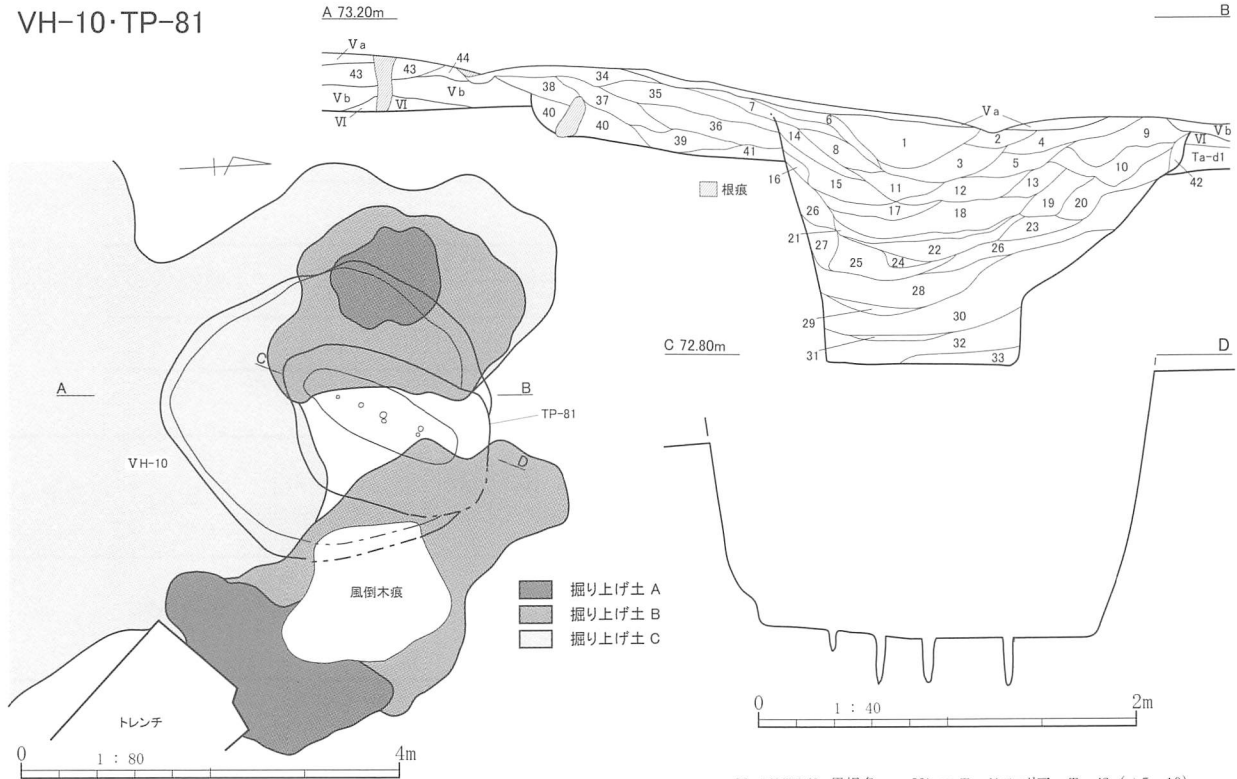
確認・調査：AE・AF-35区のVI層上面で風倒木痕に接する黒色土の落ち込みを確認した。確認面で、風倒木痕によって壊されていることを確認していた。落ち込みの規模は径3m程であり、小型の竪穴住居跡と想定し、十字ベルトを設定した。ベルトに沿ってトレンチ調査を先行し、床面及び、壁面を確認した。ベルトを残し調査を進め、土層堆積断面の記録後にベルト部の調査を行い床面及び壁面の全面を検出した。床面及び、竪穴外の精査を行ったが、柱穴等の付属遺構は検出できなかった。規模等から竪穴住居跡として報告する。

形態：平面形は楕円形に近い隅丸方形である。床面はTa-d2ローム上面構築され平坦である。壁面は緩やかに立ち上がる。

堆積状態：Vb層を主体にTa-d1が混入。壁面崩落土及び周囲からの流入土と考えられる。

遺物出土状態：覆土からは土器が2点、礫石器が1点、礫が1点出土している。床面からは出土していない。土器は共にⅡ群B2b類である。（天方）

VH-10・TP-81



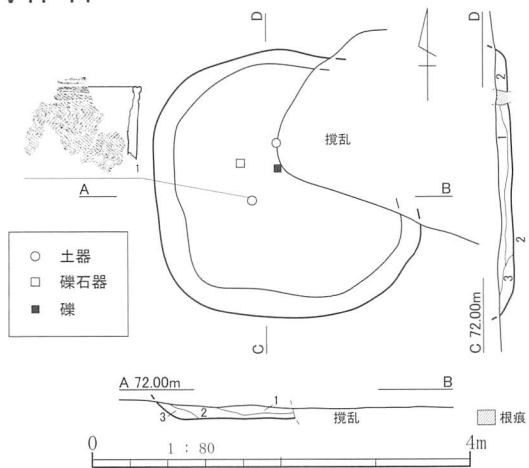
VH-10・TP-81

- | | |
|-----------------|---------------------------------------|
| 1. 10YR2/2 黒褐色 | Vb ≡ Ta-d2p(φ5~20)・Ta-d1スコリア・Ta-d2L |
| 2. 10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2p(φ5~10) ≡ Ta-d1スコリア・Ta-d2L |
| 3. 10YR2/3 黒褐色 | Vb - Ta-d2p(φ5~10) ≡ Ta-d1スコリア・Ta-d2L |
| 4. 10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d1スコリア ≡ Ta-d2p(φ3~5)・Ta-d2L |
| 5. 10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2p(φ5~10) |
| 6. 10YR2/2 黒褐色 | Vb ≡ Ta-d2p(φ3~5)・Ta-d2L・Ta-dスコリア |
| 7. 10YR2/1 黒色 | Vb = Ta-dスコリア・Ta-d2p(φ3~5) |
| 8. 10YR2/1 黒色 | Vb |
| 9. 10YR3/3 暗褐色 | Ta-d1L = Vb |
| 10. 10YR4/4 褐色 | Ta-d1L・Ta-d1スコリア = Vb |
| 11. 10YR2/2 黒褐色 | Vb - Ta-d2p(φ5~20) ≡ Ta-d1スコリア |
| 12. 5YR5/8 明赤褐色 | Ta-d2p(φ5~20) ≡ Vb |
| 13. 10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d1スコリア |
| 14. 10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d1スコリア |
| 15. 10YR2/2 黒褐色 | Vb - Ta-d1スコリア |
| 16. 10YR4/4 褐色 | Ta-d1L + Ta-d2L = Vb・Ta-d1スコリア |
| 17. 10YR2/2 黒褐色 | Vb ≡ Ta-d1スコリア |
| 18. 10YR2/2 黒褐色 | Vb ≡ Ta-d1スコリア |
| 19. 10YR2/3 黒褐色 | Vb - Ta-d1スコリア ≡ Ta-d2p(φ5~10) |
| 20. 10YR3/3 暗褐色 | VI = Ta-d1L ≡ Ta-d1スコリア |
| 21. 10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d1スコリア ≡ Ta-d2p(φ5~10) |

- | | |
|-------------------|-------------------------------------|
| 22. 10YR2/2 黒褐色 | Vb ≡ Ta-d1スコリア・Ta-d2p(φ5~10) |
| 23. 7.5YR2/3 極暗褐色 | Vb - Ta-d2p(φ5~20) = Ta-d1スコリア |
| 24. 5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2L |
| 25. 5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2p(φ10~20) = Vb |
| 26. 5YR5/8 明赤褐色 | Ta-d2L = Vb |
| 27. 5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2p = Ta-d2L |
| 28. 5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2p(φ5~20) ≡ Vb |
| 29. 10YR2/2 黒褐色 | Vb |
| 30. 5YR5/8 明赤褐色 | Ta-d2p |
| 31. 10YR2/2 黒褐色 | Vb ≡ Ta-d2p |
| 32. 10YR2/3 黒褐色 | Vb = Ta-d2p(φ5~10) |
| 33. 5YR6/8 橙色 | Ta-d2p(φ5~20) = IX カたくしまる |
| 34. 10YR4/4 褐色 | Ta-d1L = Vb ≡ Ta-d2p(φ3~5) |
| 35. 10YR2/1 黒色 | Vb = Ta-d1スコリア・Ta-d2p(φ5~10) |
| 36. 10YR3/4 暗褐色 | Vb - Ta-d1スコリア = Ta-d2p(φ5~10) |
| 37. 10YR2/1 黒色 | Vb ≡ Ta-d1スコリア |
| 38. 10YR3/3 暗褐色 | Vb + Ta-d1L = Ta-d1スコリア |
| 39. 10YR2/3 黒褐色 | Vb - Ta-d1L ≡ Ta-d1スコリア |
| 40. 10YR4/4 褐色 | Ta-d1L = Ta-d1スコリア ≡ Vb |
| 41. 10YR4/4 褐色 | Ta-d1L + Ta-d2L = Vb・Ta-d1スコリア |
| 42. 10YR4/4 褐色 | Ta-d1L ≡ Vb ※壁面崩落? |
| 43. 10YR3/3 暗褐色 | Vb = Ta-d1L = Ta-d2p
VH-10の掘り上げ土 |
| 44. 10YR2/1 黒色 | Vb = Ta-d1L ≡ Ta-d1スコリア |

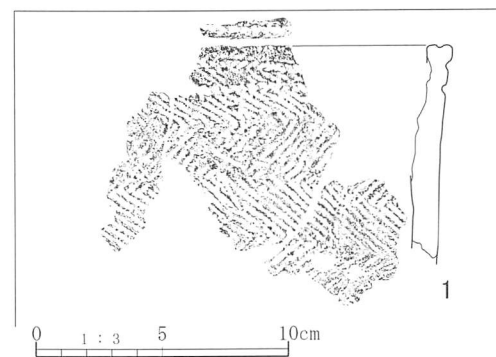
* 1~33; TP-81の注記
34~44; 10号住居の注記

VH-11



VH-11

- | | |
|----------------|-----------------------|
| 1. 10YR2/3 黒褐色 | Vb - Ta-d1スコリア・Ta-d1L |
| 2. 10YR2/1 黒色 | Vb = Ta-d1スコリア |
| 3. 10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d1スコリア・Ta-d2L |



図IV-23 VH-10・11・TP-81 平面及び断面図・出土遺物

表IV-18 VH-10属性表

挿図 番号	図版 番号	グリッド	層位	長軸 方向	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸		
IV-23	13-2	AE・AF-38・39	Vb	N-74°E	342	312	300	276	36	TP-81重複

表IV-19 VH-11属性表

挿図 番号	図版 番号	グリッド	層位	長軸 方向	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸		
IV-23	13-6	AE・AF-35	VI	N-42°W	304	(184)	260	(160)	15	

表IV-20 VH-11出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部 /底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/底側面 -底面-内面		
IV-23-1	48-15	JP429A	II B2b	VH-11・ VMO- 07/AE- 36	VbL・ 1	3	口縁 ～ 胴部	平縁・外傾-やや 隅丸角状/やや 外傾	縄線文(同一条異 原体)-縄線文(同 一条異原体)/1段 異原体羽状縄文	繊維多量 混入	

出土遺物(図IV-23) : 1 は口唇部に同一条異原体の縄線文が施される、縄線文は口縁部にも 2 条施され、以下胴部は 1 段異原体羽状縄文が施される。胎土には繊維を多量に含む。II 群 B2b 類に属する。(宮塚義)

時 期 : 床面からの出土遺物はないが、覆土と周辺の出土土器より前期後葉と思われる。(天方)

12 号竪穴式住居跡[VH-12] (図IV-24～27 図版 14～15-6、49、50-1)

位 置 : W・X-29・30 区 平面形 : 隅丸方形

規 模 : 竪穴本体 636×592×48cm 掘り上げ土 920×816×6cm

確認・調査 : 調査開始以前に表土面で円形の窪みを確認し、その規模から縄文時代の竪穴式住居を想定していた。樽前 c テフラを除去した後、V 層上面で掘り上げ土範囲も想定して、17.5×17.5m の範囲の地形測量を行った。窪みを中心に東西と南北方向に 40cm 幅のベルトを設定し、土層堆積状態と壁面を確認するためベルトに平行するトレンチを掘り、調査を進めた。四方の立ち上がりを確認後、ベルトを残して、中心から外側に向かって層位毎に掘り進めた。2 層を調査中、住居南側の覆土から大型の石皿と土器片のまとまりを検出したため、写真撮影後、微細図を作成した。覆土の遺物を取り上げた後、床面直上まで掘り下げ、壁面の検出を行った。これに並行して掘り上げ土確認の為、住居周辺の Va 層からトレンチ調査を行い、掘り上げ土を含めた断面の記録を行った。ベルトを外して床面を精査した結果、住居中央付近に 2 基の円形の黒色プランを並んで検出した。半截したところ内部に遺物等は含まれていなかったが、坑底面から立ち上がりが認められたため土坑と判断し、HP01・02 と付番した。その後、床面で柱穴の検出に努め、確認後、完掘写真、平面の記録を行い調査を終了した。

形 態 : 平面形は隅丸方形を呈している。東西の壁面の一部が根によって壊されていたが、概ね明瞭に検出された。住居は緩斜面から平坦面に移行する地点に構築され、床面はほぼ水平で壁面は急角度に立ち上がる。

掘り上げ土：住居の周囲でVb層中に920×816cmの範囲でTa-d2パミスを少量含んだ掘り上げ土が確認された。一番厚い住居南側で6cm、薄いところでは1cmほどの厚さである。これは床面までの掘り込みがTa-d2パミスの直上で終わっているため、Ta-d2パミスの混入の度合いが少なく掘り上げ土の判断が難しいためとも考えられる。なお住居南側の掘り上げ土下から縄文前期後葉の土器集中が検出されており、本住居はこの土器の時期より若干後に構築されたものと考えられる。土器集中の詳細は第9節で述べる。

堆積状態：図IV-24に堆積状態を図示した。住居全体をVa層が薄く覆い、その下にVb層が8～16cmの厚さで堆積している。住居内の覆土の厚さは住居北側の深いところで約48cm、浅いところでも約40cmとほぼ水平に堆積している。1・3・5層は住居の周囲に掘り上げられていた土が流れ込んだものと考えられる。Ⅷ層上面付近が床面構築面のためVb層を主体にTa-d1とTa-d2パミスが僅かに混入している。2・4・13層は東西の壁付近で根穴があり攪乱された層、6・7・12層はTa-d2主体の層で掘り上げ土の流れ込みや壁面の崩落土が混じり合ったと思われる。8～11層は床面直上のTa-d主体の層である。

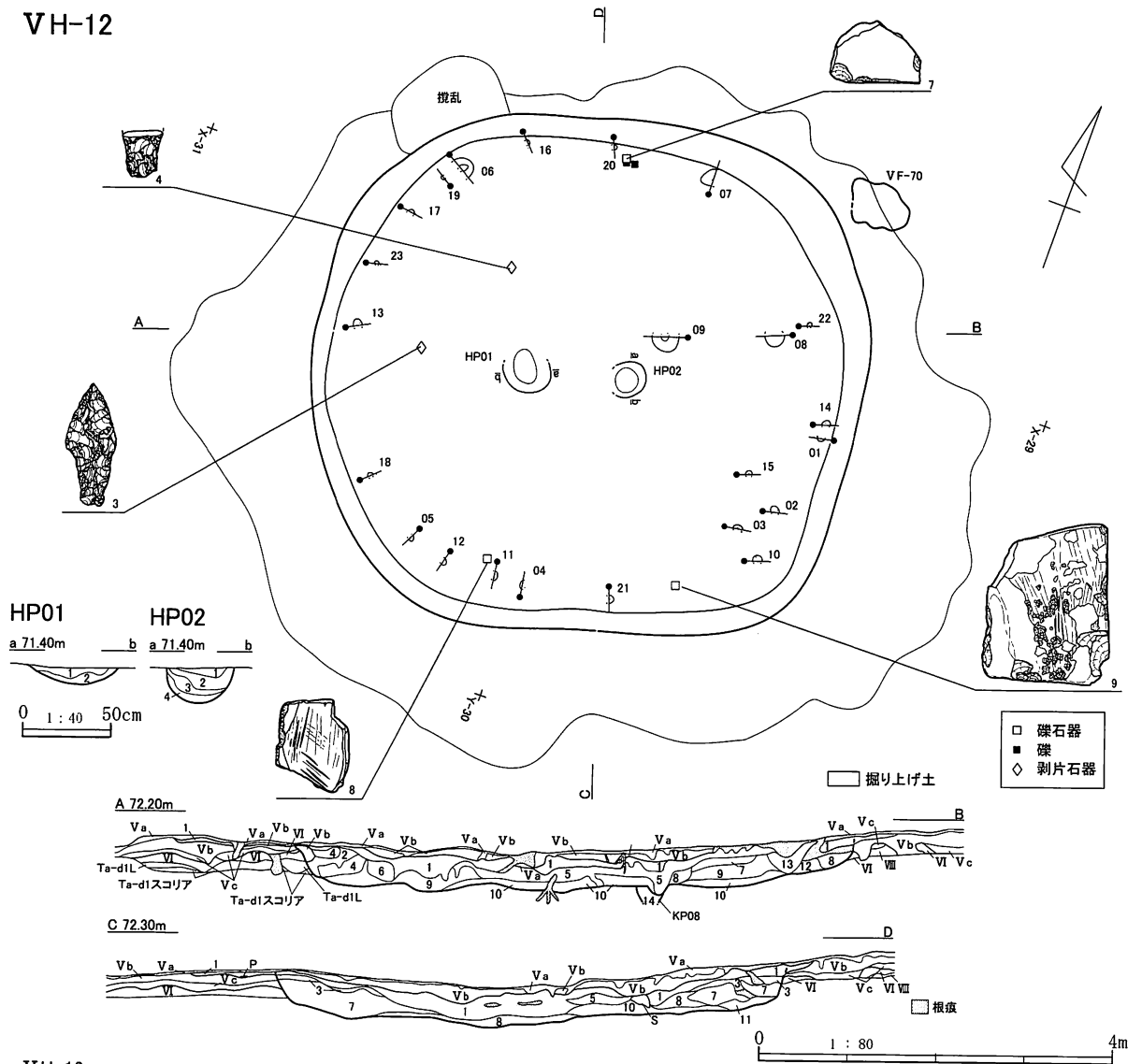
土坑及び柱穴：住居の中央付近の床面で土坑HP01・02の2基を検出した。いずれも50cm以下の小規模なもので遺物や炭化物等も検出されなかったため性格は不明である。柱穴の検出作業は床面構築層からⅧ層まで掘り下げ、その結果、23本の柱穴を検出した。全体的に細い柱穴が多く、比較的太いものはKP06・07・08・09の4本である。KP09は住居中央近くに位置し深く打ち込んでいるため主柱穴と思われるが対となる柱穴が検出されていない。KP06と07はそれぞれ住居の北西側と北側の壁付近で、KP08はKP09と並んだ位置で検出された。細い柱穴はKP03・15を除き、壁際を周回するように配置されている。坑底面はKP06を除いた22本が尖状である。

遺物出土状態：床面からは剥片石器2点、礫石器が3点、礫2点、フレイク・チップ11点が出土した。また、覆土からは土器101点、剥片石器9点、礫石器14点の他、礫67点、フレイク・チップが807点出土しており、住居廃絶後に捨て場として利用された可能性も考えられる。(宮崎)

出土遺物 (図IV-26)：1・2はいずれもⅡ群B2a類に属する。外反する口縁部をもち、縄線文の施されるもの(1)と斜行縄文のみのもの(2)がある。3と4は黒曜石製の石槍で、3は完形品である。全体に薄手で、基部端の一方に抉りが認められ、岩屑面を残す。4は鏃身部を欠損している。8は砥石で板状礫の片面を使用している。3方向に擦痕があり、そのうちの2方向に浅い線条痕がみられるが使用面はそれほど窪んでいない。9は方形の板状礫を利用した砥石である。

覆土中出土遺物 (図IV-26・27)：5と6はつまみ付きナイフ、5は片面全体に調整が施され、断面は三角形。6は頁岩製で素材を剥離した際の末端がそのまま残り、裏面に向かって大きく湾曲する。7は石鋸で板状礫の1側縁を使用している。使用面の断面形はU字形である。10・11・12は大型の石皿。10は長軸で破損しているが、片面だけを使用し、3面に擦痕が残る。11は平面形が三角形の扁平な礫の両面を使用している。両面共に礫の中央が使用によって深く窪んでいる。属性表の12は30kgを超える礫を利用したものであるが、実測が困難だったため写真のみ掲載した。片面の使用で中央から側縁にかけて深く窪んだ擦痕がある。(1・2：宮塚義 3～6：宮塚翔 7～11：宮崎)

VH-12



VH-12

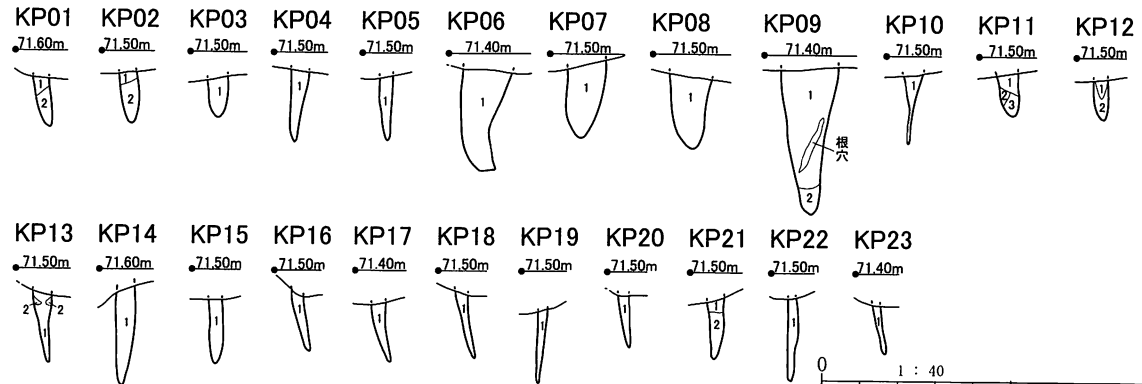
- | | |
|--|--|
| 1. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb=Ta-d1スコリア(均一)=Ta-d2P(φ5~15) | 8. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-d2L+Vb(斑状)-Ta-d2P(φ10~30 斑状) |
| 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Vb+Ta-d1L≡Ta-d2P(φ5↓) | 9. 7.5YR4/4 褐色 Ta-d2L=Vb(斑状)・Ta-d2P(φ5~20 斑状) |
| 3. 7.5YR3/4 暗褐色 Vb-Ta-d1L(均一)=Ta-d2P(φ5~10) | 10. 7.5YR4/4 褐色 Ta-d1L-Ta-d1スコリア(均一)=Ta-d2P(φ30↓ 斑状) |
| 4. 10YR5/6 黄褐色 Ta-d1L-Ta-d1スコリア(均一)・Ta-d2P(φ5~15 斑状) | 11. 7.5YR4/4 褐色 Ta-d2L≡Ta-d2P(φ5↓) |
| 5. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ta-d2P(φ5~10 斑状) | 12. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-d2L |
| 6. 10YR5/4 にぶい黄褐色 Ta-d2L-Ta-d1スコリア=Ta-d2P(φ5~10) | 13. 10YR3/4 暗褐色 Vb+Ta-d1L(斑状)≡Ta-d2P(φ5~10) |
| 7. 7.5YR5/6 明褐色 Ta-d2L-Ta-d1スコリア・Ta-d2P(φ30↓ 斑状) | 14. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-d2L-Vb(均一) |

HP01

- 7.5YR3/2 黒褐色 Ta-d1L=Vb(ブロック状)≡Ta-d2P(φ5~10)
- 7.5YR4/4 褐色 Ta-d2L=Vb(斑状)・Ta-d2P(φ10~15)

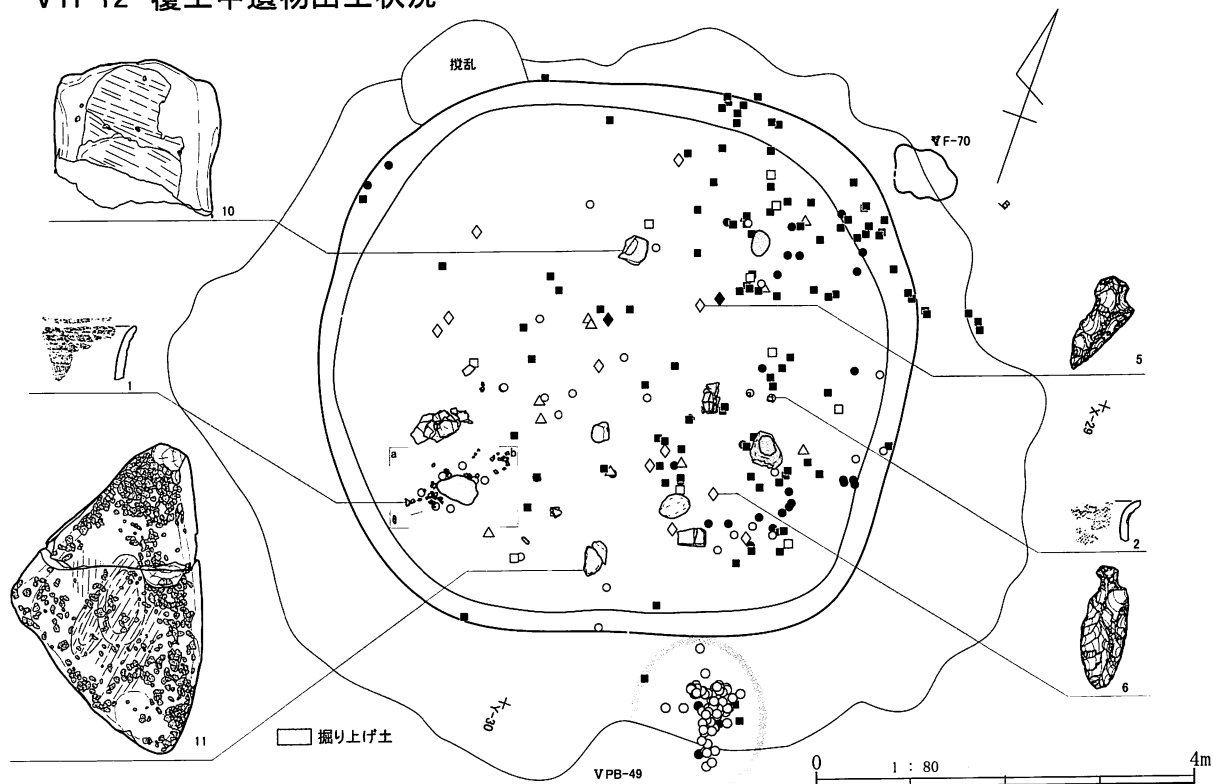
HP02

- 7.5YR3/2 黒褐色 Ta-d1L≡Ta-d2P(φ5↓)
- 7.5YR3/4 暗褐色 Ta-d1L-Ta-d2P(φ5~20 ブロック状)
- 7.5YR3/2 黒褐色 Ta-d1L=Ta-d2P(φ7↓ 均一)
- 7.5YR3/4 暗褐色 Ta-d2P(φ5~30)-Ta-d1L(均一)

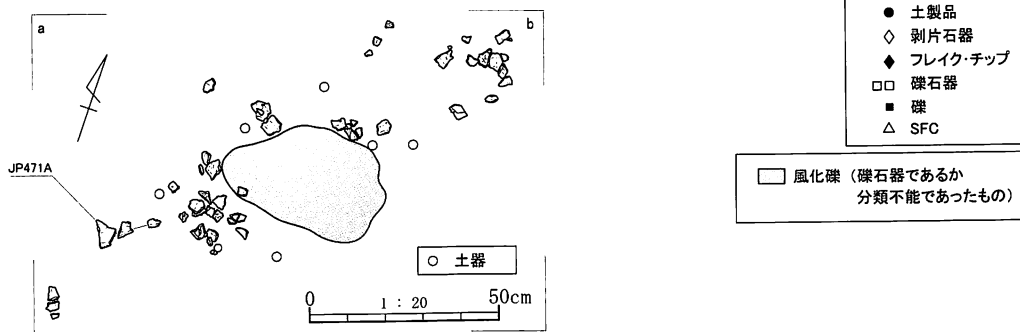


図IV-24 VH-12平面及び断面図・柱穴断面図

VH-12 覆土中遺物出土状況



VH-12 土器集中



- KP01**
 1. 7.5YR3/2 黒褐色 Vb-Ta-d2L(均一)
 2. 10YR2/3 黒褐色 Vb-Ta-d2L(均一)
- KP02**
 1. 10YR2/3 黒褐色 Vb-Ta-d2L=Ta-d2P(φ5~15 斑状)
 2. 10YR2/1 黒色 Vb-Ta-d2P(φ5~10)
- KP03**
 1. 10YR2/1 黒色 Vb-Ta-d2P(φ5~20)
- KP04**
 1. 10YR4/4 褐色 Vb-Ta-d2P(φ5~10)=Ta-d2L(均一)
- KP05・10**
 1. 10YR4/4 褐色 Vb-Ta-d2L
- KP06**
 1. 7.5YR4/4 褐色 Ta-d2L=Ta-d2P(φ10~20 斑状)
- KP07**
 1. 10YR4/4 褐色 Ta-d2L-Vb-Ta-d2P(φ5~20)
- KP08**
 1. 10YR5/6 黄褐色 Ta-d2L
- KP09**
 1. 10YR4/6 褐色 Ta-d2L=Vb(ブロック状)
 2. 10YR4/2 灰黄褐色 Ta-d2L=Vb(均一)=Ta-d2P(φ5~7)
- KP11**
 1. 10YR4/4 褐色 Vb-Ta-d2L=Ta-d2P(φ5~10)
 2. 10YR4/6 褐色 Ta-d2L=Vb-Ta-d2P(φ5~10)
 3. 10YR4/4 褐色 Vb-Ta-d2L(均一)=Ta-d2P(φ5~7)

- KP12**
 1. 10YR4/4 褐色 Vb-Ta-d2L(均一)
 2. 10YR3/4 暗褐色 Vb-Ta-d2P(φ10~20)
- KP13**
 1. 10YR2/1 黒色 Vb-Ta-d2P(φ3~10 斑状)
 2. 10YR4/4 褐色 Ta-d2L-Ta-d2P=Vb(均一)
- KP14**
 1. 10YR2/2 黒褐色 Vb-Ta-d2L(斑状)
- KP15・18**
 1. 10YR2/3 黒褐色 Vb-Ta-d2L(均一)
- KP16**
 1. 10YR4/4 褐色 Vb-Ta-d1スコリア=Ta-d2L
- KP17**
 1. 10YR3/4 暗褐色 Vb-Ta-d2L(均一)=Ta-d2P(φ5~20)
- KP19**
 1. 10YR3/4 暗褐色 Vb-Ta-d2L(均一)
- KP20**
 1. 10YR3/4 暗褐色 Vb-Ta-d2P(φ5~7 均一)
- KP21**
 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Vb-Ta-d2P(φ5~10 均一)
 2. 10YR2/3 黒褐色 Vb-Ta-d1スコリア(均一)
- KP22・23**
 1. 10YR2/3 黒褐色 Vb-Ta-d2P(φ3~20 均一)

図IV-25 VH-12 遺物分布図



図IV-26 VH-12 出土遺物(1)



図IV-27 VH-12 出土遺物(2)

表IV-21 VH-12属性表

挿図 番号	図版 番号	グリッド/遺構名	層位	長軸 方向	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸		
IV-24	14-1	W・X-29・30	VbU	N-35° W	636	592	568	540	48	
IV-24	15-2	HP01	-	-	52	6	-	-	12	
IV-24	15-2	HP02	-	-	38	10	-	-	20	

表IV-22 VH-12 柱穴属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)			傾き (度)	備考
			上端	下端	深さ		
IV-24	-	KP01	8	1	27	8°	
IV-24	-	KP02	10	1	28	9.4°	
IV-24	-	KP03	12	1	22	0°	
IV-24	-	KP04	10	1	39	3°	
IV-24	-	KP05	7	1	35	0°	
IV-24	-	KP06	26	4	54	0°	
IV-24	-	KP07	20	1	42	3.5°	
IV-24	15-3	KP08	22	1	40	2°	
IV-24	15-4	KP09	30	1	79	0°	
IV-24	-	KP10	11	1	35	3°	
IV-24	-	KP11	12	2	23	6°	
IV-24	-	KP12	8	1	30	1°	
IV-24	15-5	KP13	10	1	38	5°	
IV-24	15-6	KP14	10	1	53	2°	
IV-24	-	KP15	8	1	35	0°	
IV-24	-	KP16	7	1	33	8°	
IV-24	-	KP17	7	1	32	9°	
IV-24	-	KP18	6	1	36	7°	
IV-24	-	KP19	5	1	40	2°	
IV-24	-	KP20	6	1	28	4°	
IV-24	-	KP21	9	1	33	1°	
IV-24	-	KP22	5	1	45	1°	
IV-24	-	KP23	5	1	26	6°	

表IV-23 VH-12 出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部 /底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
IV-26-1	49-1	JP471A	Ⅱ B2a	VH-12	2	3	口縁部 ~ 胴部	平縁・外反- 外削/やや外傾	RL縄文・縄の圧痕- 縄線文/撚糸文(タ テ)+縄線文(撚糸) -ミガキ	砂粒 少量 混入	
IV-26-2	49-2	JP500A	Ⅱ B2a	VH-12	2	1	口縁部	平縁・外反	RL斜行縄文- ヨコミガキ	繊維微量・ 砂粒多量 混入	口唇 外端部 欠

表IV-24 VH-12 出土石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
IV-26-3	49-3	-	141762	ポイント類	B1	4	68.4	28.8	7.5	11.80	Obs.	
IV-26-4	49-4	-	142791	ポイント類	B1	4	(26.6)	22.3	7.9	(5.4)	Obs.	基部のみ
IV-26-5	49-5	-	141987	ナイフ・スクレイパー類	A2	2	52.4	19.3	10.7	10.4	Obs.	覆土中
IV-26-6	49-6	-	141761	ナイフ・スクレイパー類	A2	3	63.9	21.60	10.7	17.3	Sh.	覆土中
IV-26-7	49-7	-	142701	石 鋸	-	4	124.53	86.30	17.6	180.0	Sa.	覆土中
IV-26-8	49-8	-	142700	砥 石	-	4	(228.0)	(170.0)	47.2	2120.0	Sa.	
IV-26-9	49-9	-	142699	砥 石	-	4	(143.6)	(103.9)	34.2	566.0	Sa.	
IV-26-10	49-10	-	142000	石 皿	-	3	(217.0)	193.0	143.0	(9900.0)	Sa.	覆土中
IV-27-11	50-11	-	141968	石 皿	-	2	408.0	245.0	109.0	10880.0	Sa.	覆土中
-	50-12	-	141486	石 皿	-	2	406.0	309.0	220.0	36500.0	Sa.	覆土中

13号住居跡〔VH-13〕（図IV-28～30 図版15-7～17-2、50-2-1～10）

位置：U・V-31～33区 平面形：隅丸長方形

規模：竪穴本体 680×520×80cm 掘り上げ土 988×720×28cm

確認・調査：調査に先立ち試掘坑の壁面を精査した時点で、Ⅷ層に住居と思われる立ち上がりを確認した。伐採後の現地表面でもU・V-32～33グリッドを中心とした円形の窪みが認められたため、竪穴住居跡であることを想定し、Ⅴ層上面で地形測量を行い、窪みに十字ベルトを設定した。ベルトに沿ってトレンチ調査を先行したところ、窪みの中心付近でTa-dテフラの混じる土層を検出した。住居の掘り上げ土を想定して更にトレンチ調査を続けたところ、Ta-dテフラの混じる土層は窪みの外側へ続く途中で途切れるものや、黒色土を挟んでいることが判明した。窪みの中央付近から帯状の黒色土を検出し、VH-10の事例などからTピット等の覆土の重複を想定した。調査を進めたところ、重複した遺構（以下TP-91）の掘り上げ土と、住居と壁の立ち上がりをトレンチで確認した。その後、窪みの内側を面的に調査し、住居とTP-91の掘り上げ土の範囲が判明したため、それぞれ平面図に記録した。TP-91の掘り上げ土の中からは土器片が集中して出土し、VH-13.PB01として記録した後取り上げた。

住居の床面まで調査したところ、中央に楕円形の黒色土と、その内側にTa-dパミスのプランを検出した。住居の床面検出と記録保存を優先させるためにTP-91については一度調査を中断し、住居床面を精査して完掘写真を撮影した。その後、住居の柱穴と炉跡の検出を行った。柱穴については黒色土が円形に残るプランを半截し、スタッフ等を用いて間隔や位置を想定しながら検出に努めた。

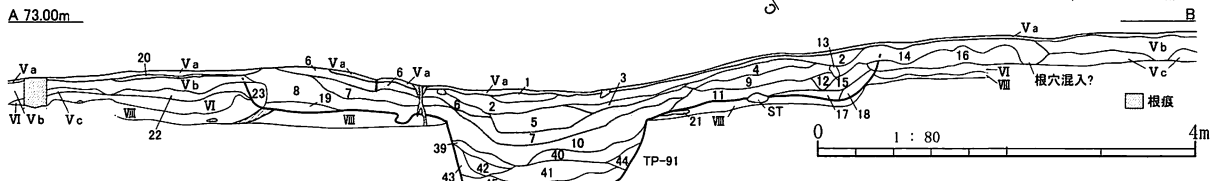
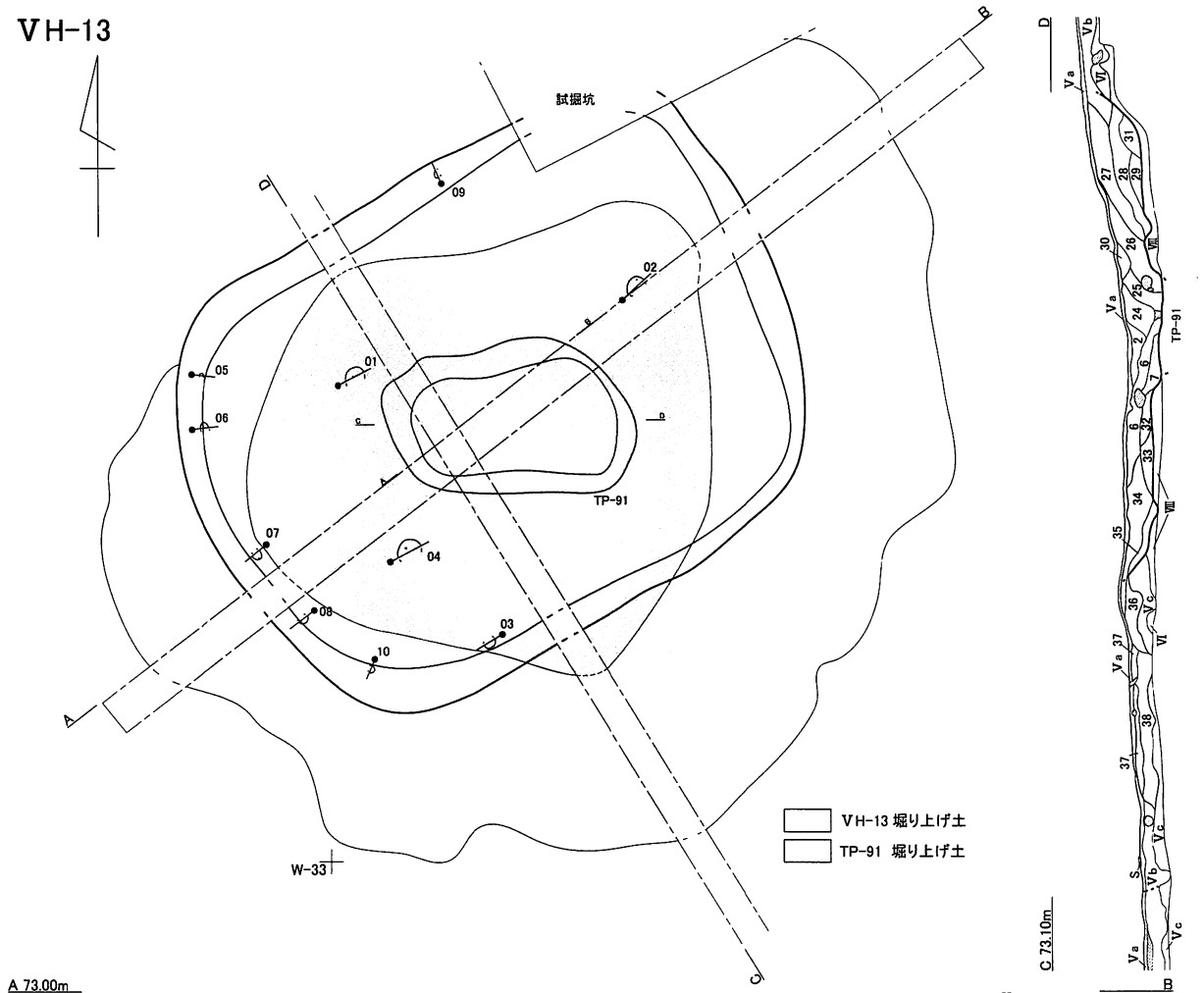
住居床面の調査終了後あらためてTP-91の調査を行った。その結果、Ⅸ層上面まで住居の床面からおよそ80cm掘り込まれ、杭穴を持たないことから、後述するTピットの形態分類におけるC1型と考えられ、TP-91と付番した。

形態：平面形の一部を試掘坑によって欠失しているが、残存部から隅丸長方形と思われる。床面は周辺の地形に沿って、北西から南東にかけて僅かに傾斜している。TP-91と重複しており、断面観察からTP-91が新しいと考えられる。壁の立ち上がりは西側のベルト付近で一部、根による攪乱を受けていたが、全体としては緩やかに立ち上がる。

掘り上げ土：最初にトレンチ調査で見つかったTa-dテフラの混じる土層（3～7・25・27・28・33～35層）は、ほとんどが住居内に堆積しており、下の黒色土（8・9層）と別のTa-dテフラの混じる層（11層）を切るようにTP-91へ流れ込んでいるため、TP-91の掘り上げ土と考えた。範囲は570×512cmであった。住居の掘り上げ土はTP-91の掘り上げ土と一部で重複するものの、黒色土を挟んで下層ないし住居の壁面より外に988×720cmの範囲で分布し、厚さは東側で最大28cm、西側で最大5cm、南側で最大24cmを測る。傾斜面の高い位置にあたる北側には堆積していない。

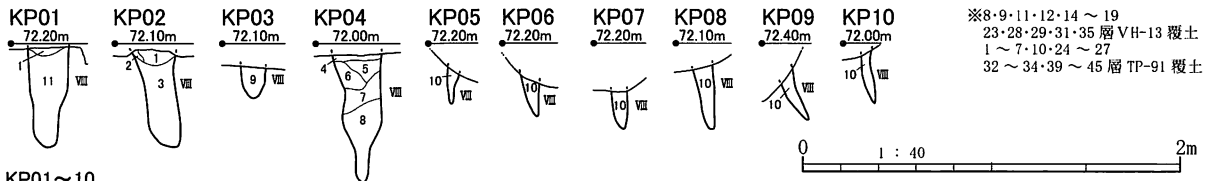
堆積状態：TP-91と重複しており、土層断面よりTP-91が新しくVH-13は古い。TP-91の覆土は1～7・10・24～27・32～34・39～45層である。内、TP-91の掘り上げ土は3～7・10・25～27・32～34層で、1層は混ざりの少ないTa-d2パミスで、2層よりも上位で見つかったことからTP-91や住居の掘り上げ土に由来するものではないと思われるが、住居よりも標高の高い斜面側に、1層の起源と考えられるTa-dパミスを含んだ他の遺構の掘り上げ土や風倒木などは見られなかった。3・4層にはVH-13.PB01の集中土器を含む。5層はTa-d2パミスでTP-91の掘り上げ土が起源と思われる。39は上層からの落ち込みによるもの、40～45は壁面崩落が主体と見られる。8・9・11・12・14～19・23・28

VH-13



VH-13

- | | | |
|--------------------------------------|-----------------------------------|--|
| 1. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~10)≡Vb | 16. 10YR3/2 にぶい黄褐色 Vb=Ta-d1L | 31. 10YR2/3 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) |
| 2. 10YR2/1 黒色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) | 17. 10YR3/3 暗褐色 Vb=Ta-d2P(φ5~10) | 32. 10YR3/3 暗褐色 Vb=Ta-d2P(φ5↓) |
| 3. 10YR3/1 黒褐色 Vb=Ta-d2P(φ5~10) | 18. 10YR2/3 黒褐色 Vb | 33. 10YR4/6 褐色 Vb-Ta-d2P(φ5~10) |
| 4. 10YR4/4 褐色 Vb=Ta-d2P(φ5↓) | 19. 10YR2/3 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) | 34. 7.5YR3/4 暗褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5~10) |
| 5. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ10~20) | 20. 10YR3/4 暗褐色 Vb=Ta-d2P(φ5↓) | 35. 10YR3/3 暗褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) |
| 6. 10YR3/3 暗褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) | 21. 10YR3/3 黒褐色 Vb=Ta-d2P(φ5~10) | 36. 10YR2/3 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) |
| 7. 10YR2/3 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5~10) | 22. 10YR2/3 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) | 37. 10YR2/2 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) |
| 8. 10YR2/3 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) | 23. 10YR2/2 黒褐色 Vb | 38. 10YR2/1 黒色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) |
| 9. 10YR2/3 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) | 24. 10YR2/3 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) | 39. 10YR2/3 黒褐色 Vb-Ta-d2P(φ10~20) |
| 10. 10YR2/3 黒褐色 Vb=Ta-d2P(φ5↓) | 25. 10YR4/4 褐色 Vb-Ta-d2P(φ5~10) | 40. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ10~20)=Vb+Ta-d2L |
| 11. 10YR3/4 暗褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5~10) | 26. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb=Ta-d2P(φ5~10) | 41. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ10~20)=Vb |
| 12. 10YR2/2 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) | 27. 10YR2/3 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) | 42. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ10~20)-Vb+Ta-d2L |
| 13. 10YR2/2 暗褐色 Vb | 28. 10YR2/3 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) | 43. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ10~20)=Vb+Ta-d2L |
| 14. 10YR3/3 暗褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) | 29. 10YR3/3 暗褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) | 44. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~20) |
| 15. 10YR4/4 褐色 Vb≡Ta-d2L≡Ta-d2P(φ5↓) | 30. 10YR2/3 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) | 45. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~10)+Ta-d2L≡Vb |



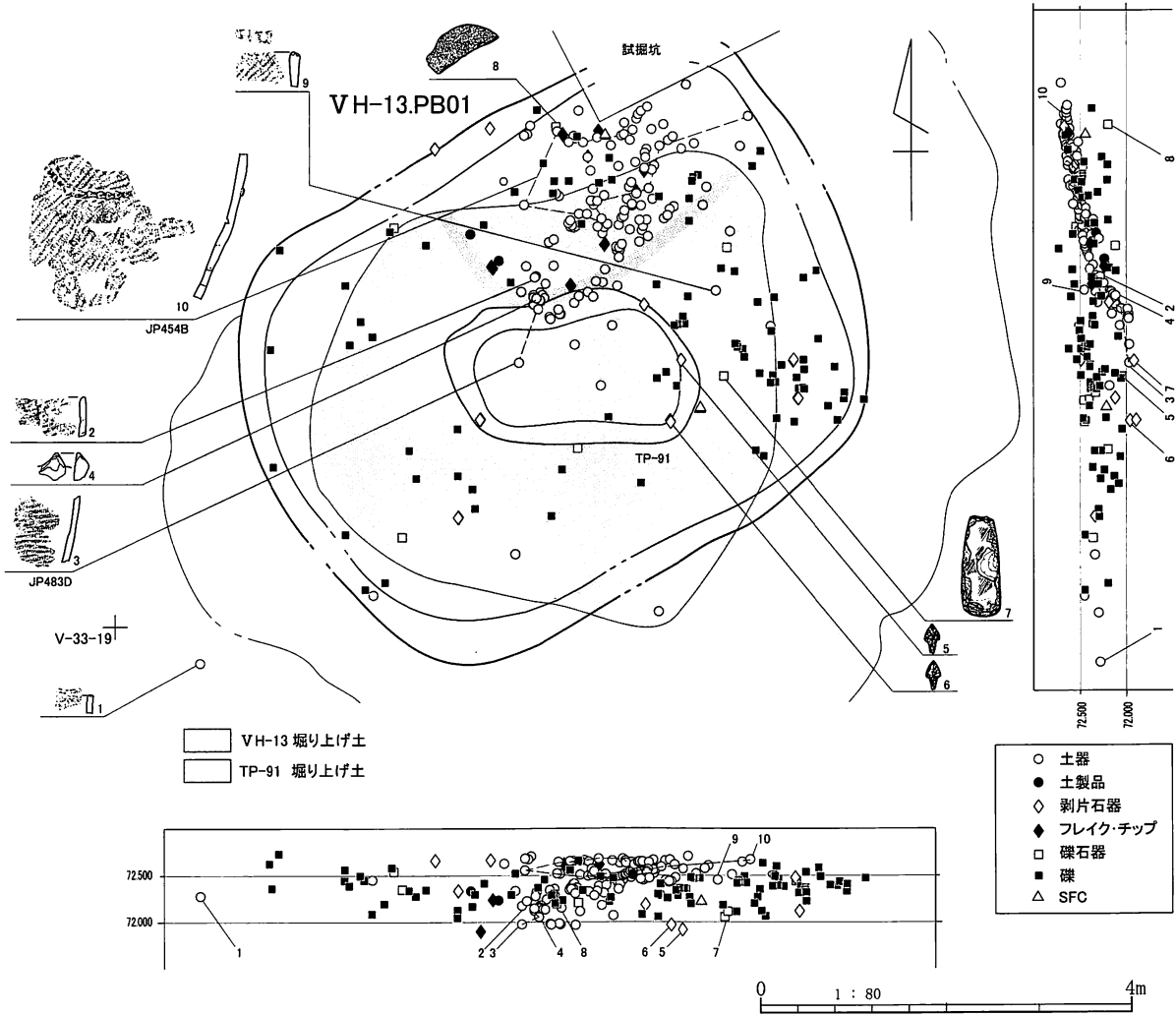
KP01~10

- | | |
|---|---------------------------------------|
| 1. 10YR4/6 褐色 Vb=Ta-d2P(φ5~10 斑状) | 7. 10YR3/3 暗褐色 Vb=Ta-d2P(φ5~10) |
| 2. 10YR2/1 黒色 Vb 根による混入 | 8. 10YR2/3 暗褐色 Vb=Ta-d1L スコアを含む |
| 3. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2L-Ta-d2P(φ5↓) しまりなし | 9. 10YR2/3 黒褐色 Vb=VI |
| 4. 10YR3/4 暗褐色 Vb=Ta-d2P(φ5↓) | 10. 10YR3/4 暗褐色 Vb=Ta-d2L+Ta-d2P(φ5↓) |
| 5. 10YR2/3 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓) | 11. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~10)≡Vb |
| 6. 10YR3/4 暗褐色 Vb=Ta-d2P(φ5↓) | |

※8・9・11・12・14~19
23・28・29・31・35層 VH-13 覆土
1~7・10・24~27
32~34・39~45層 TP-91 覆土

図IV-28 VH-13 平面及び断面図・柱穴断面図

VH-13



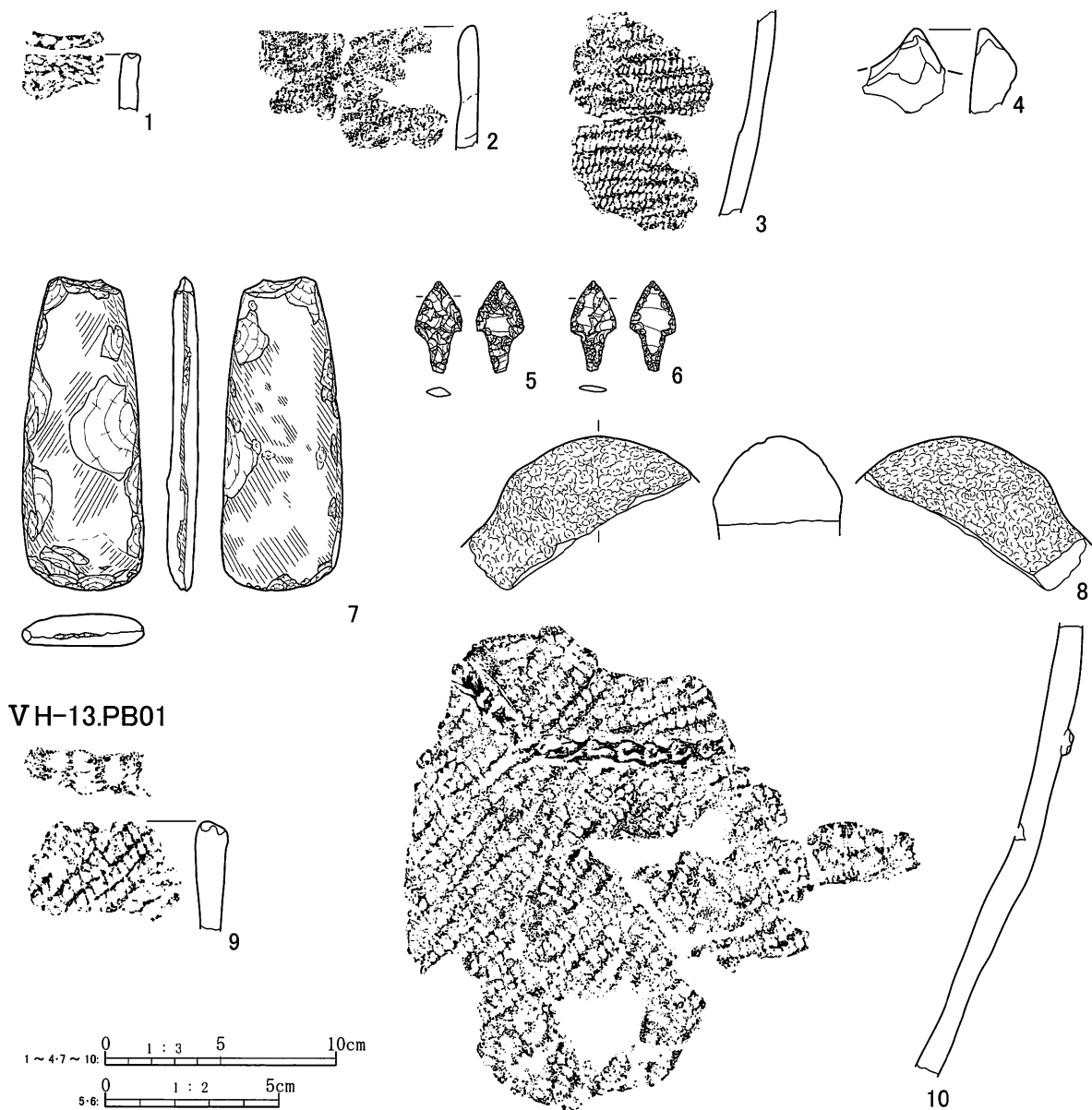
図IV-29 VH-13 遺物出土状態

表IV-25 VH-13属性表

挿図 番号	図版 番号	グリッド	層位	長軸 方向	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	備考
					長軸	短軸	長軸	短軸		
IV-28	15-7	U・V-31~33	Va	N-59° E	680	520	632	472	80	TP-91重複

表IV-26 VH-13柱穴属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	規模(cm)			傾き (度)	備考
			上端	下端	深さ		
IV-28	16-5	KP01	22	5	54	2°	
IV-28	16-6	KP02	24	4	50	11°	
IV-28	-	KP03	14	2	17	0°	
IV-28	16-7	KP04	26	1	67	3°	
IV-28	-	KP05	7	1	20	4°	
IV-28	-	KP06	10	1	22	10°	
IV-28	-	KP07	8	1	20	7°	
IV-28	17-1	KP08	10	2	34	10°	
IV-28	-	KP09	70	1	27	10°	
IV-28	17-2	KP10	5	1	28	10°	



図IV-30 VH-13 出土遺物

29・31・35層はVH-13の覆土である。内、VH-13の掘り上げ土は11・12・15～17にあたる。14はTa-dパミスが混じる層でVb層よりも下位である。11・12・15・16層は住居内に流れ込んでいるが、住居の掘り上げ土を屋根土や壁土として利用していたかは、TP-91との重複により不明である。16・22・36～37層は住居の外側に堆積したVH-13の掘り上げ土である。38層は当初掘り上げ土と考えていたがTa-d2パミスの量が少なく、黒色を呈するため37層からの混入と判断し除外した。37層は36層が流れ出したものとみられる。住居構築時の掘り上げ土と考えられる16・22・37層はVb層下位に堆積していることから、住居の構築時期は縄文時代前期後半と思われる。

土坑及び柱穴：柱穴は住居の床面と、床面を掘り下げたⅧ層でそれぞれ確認した。全部で 10 本の柱穴が確認され、そのうち比較的太い柱穴は KP01・02・04 である。いずれも住居の中心に近い位置で検出している。TP-91 の重複もあり 3 本のみであったが、住居の長軸に沿った長方形配列の支柱穴と考えられる。KP04 は断面が先端付近で細くなるため、打ち込み杭と見られる。残りの 7 本は KP03 を除き、いずれも細く尖る断面形である。KP05～07 はほぼ垂直に打ち込まれ、KP08～10 は住居の内側へ傾斜している。いずれも壁際を周回するように配置されていることから、壁柱穴と考えられる。

遺物出土状態：TP-91 の掘り上げ土と見られる 3・4 層から土器片の集中と剥片石器が出土している。住居廃絶後の窪地に捨てられた遺物が、TP-91 を掘った際に掘り上げ土に混在したものと考えられることから、TP-91 よりも古い時期の土器と思われる。他にも覆土中から土器片 137 点、剥片石器 7 点、礫石器 7 点が出土した。住居の床面からは石鏃 1 点と礫石器 3 点が出土している。

(宮塚翔)

出土遺物 (図IV-30)：1 はⅡ群 B2a 類に属する。胎土に蛇紋岩を少量混入している。口唇に縄文、口縁部に結縛した縄文の端部を回転させている。2～4 はⅢ群 B2 類に属する。文様はいずれも縄文のみである。4 は小突起を有する。砂粒を少量含み、繊維を含まない。9・10 は同一個体と考えられる。9 は口縁部、10 は胴部破片である。9 の口唇部には 2 列の突引文 (内) が施される。同じ工具を使ったと思われる突引文が 10 の貼付帯の上にも付けられている。Ⅲ群 B2 類に属する。5 と 6 は黒曜石製の剥片石器である。どちらも完形の石鏃で、基部が明瞭に作出されている。5 は TP-91 の掘り上げ土中から出土したもので、裏面に主剥離面を残している。鏃身部より基部の稜線が高く、基部の断面は根元で三角形になり、先端へ行くに従って扁平なる。6 は薄手で稜線がなく、裏面は大きく主剥離面を残して縁辺のみが調整されている。湾曲した剥片を利用しており大きな調整が施されていないため、石器全体が反った形状を示す。7 は床面から出土した片刃の石斧である。磨き調整を施し、刃部と側縁付近の剥離が顕著である。刃部の中心は潰れている。8 はすり石 D 類の北海道式石冠の頂部片である。丸い頂部に細かく敲打調整を施している。

(1～4、9・10：宮塚義 5・6：宮塚翔 7・8：宮崎)

表IV-27 VH-13出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部 /底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内 面		
IV-30-1	50-2-1	JP496A	ⅡB2a	VH-13	VbU	1	口縁部	平縁・直立	縄文-結縛部回転 文-ミガキ(ナナメ)	繊維微量・ 蛇紋岩 少量混入	
IV-30-2	50-2-2	JP483A	ⅢB2	VH-13	1	2	口縁部	波状・やや内湾 -丸状	LR斜行縄文-ナデ	砂礫・砂粒 少量混入	
IV-30-3	50-2-3	JP483D	ⅢB2	VH-13・ TP-91	1M	2	胴部	やや外傾	LR斜行縄文	砂礫・砂粒 少量混入	内面 剥落
IV-30-4	50-2-4	JP483I	ⅢB2	VH-13	1M	1	突起	突起・外傾-丸状	縄文?-ナデ	砂礫・砂粒 少量混入	

表IV-28 VH-13.PB01出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部 /底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内 面		
IV-30-9	50-2-9	JP454A	ⅢB2	VH-13. PB01	1	1	口縁部	平縁・やや外傾- 隅丸角状	突引文(内)-LR 斜行縄文-ナデ	繊維・砂粒 少量混入	
IV-30-10	50-2-10	JP454B	ⅢB2	VH-13. PB01	1・1M	15	胴部	(上半)内湾・ (下半)外傾	LR斜行縄文・貼付 帯+突引文(内)- ナデ(ヨコ)	繊維・砂粒 少量混入	

表IV-29 VH-13出土石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
IV-30-5	50-2-5	-	142904	ポイント類	A3	4	25.95	14.05	5.00	1.02	Obs.	
IV-30-6	50-2-6	-	142795	ポイント類	A3	4	25.55	13.07	2.63	0.6	Obs.	
IV-30-7	50-2-7	-	142793	石 斧	A	4	132.85	51.57	12.40	150.0	Bl-Sch.	
IV-30-8	50-2-8	-	142794	すり石	D	4	(28.42)	(96.24)	55.61	(276.0)	Sa.	被熱

第2節 土坑墓

平成 23・24 年度の調査では新たに 9 基検出している。過年度までの調査と同様に人骨が検出されたものはないが、縄文時代の墓で人骨が遺存しているものは稀であることから、これまでと同じく覆土の堆積状態が人為的な埋め戻しと考えられるものを土坑墓として取り扱った。

平成 20～22 年度の調査では 24 基の土坑墓が発見された。平面形は隅丸長方形、楕円形、円形、不整形を確認しており、隅丸長方形が最も多い。特徴として、半数近くの例で坑底付近に炭化材を検出していることが挙げられる。時期はすべて前期後葉と考えられている。本年度のものも基本的には同じ状況である。以下個別に記載を行う。(天方)

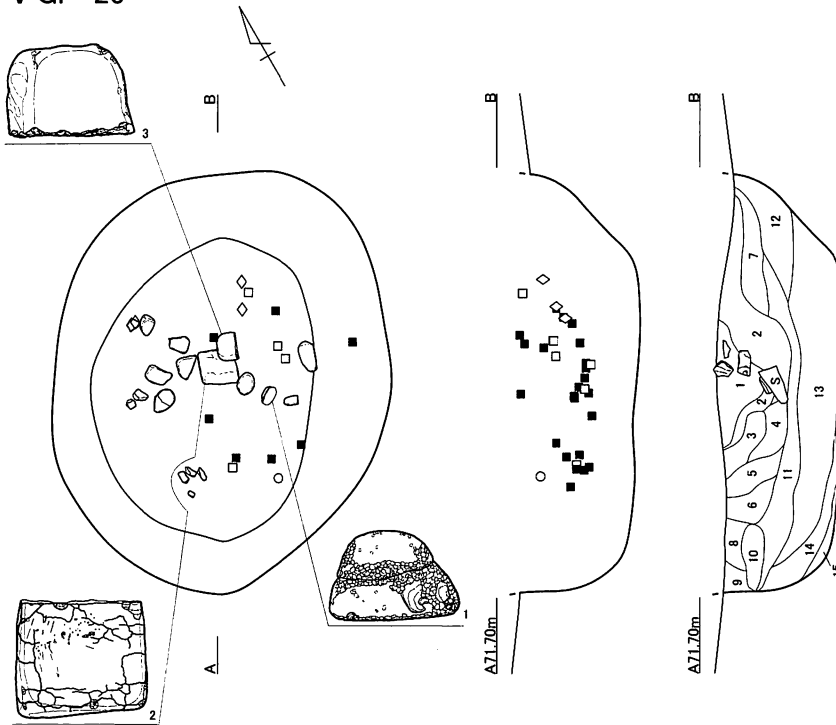
VGP-25 (図IV-31・34 図版 17-3・4、51-1～3)

AH-33・34 区のVI層上面で黒色土の落ち込みを確認した。長軸方向に半截し、覆土上層で石皿等が出土していることを確認し、これを残しながら調査を進めた。半截が終了した時点で、土層断面の記録を行い、残りについても同様に調査を行った。覆土上層の遺物出土状態の図化を行い、遺物を取上げて完掘した。土層は全体的にレンズ状に堆積しているため、遺体等の腐食に起因すると思われる。基本的に各層はTa-d テフラとの混土層である。これらの状況から人為的に埋め戻されたと思われる。遺物は墓坑中央付近で覆土上～中層で出土している。このような出土状態はVGP-01・06でも確認している。遺物は36点出土している。内訳は土器1点、剥片石器3点、礫石器7点、土製品1点、フレイク・チップ1点、礫23点である。礫はこの内12点が赤色珪化岩片である。(天方)

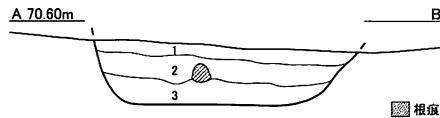
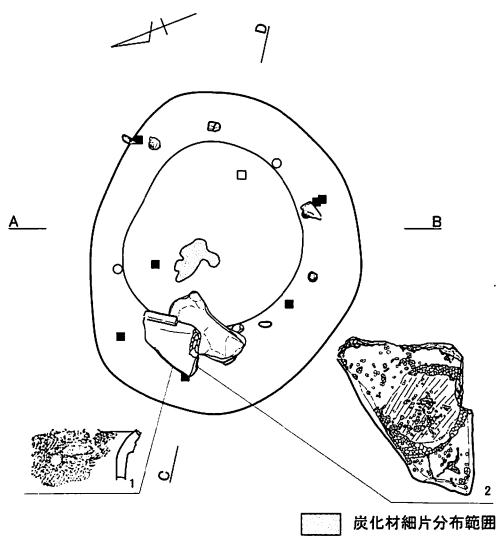
VGP-26 (図IV-31・35 図版 17-5～8、51-4・5)

AC-27 区のVI層上面で暗褐色の楕円形を呈する落ち込みを検出したため、土坑であるとの想定のもとに、短軸方向から西半分を半截した。平坦な坑底面から緩やかに壁が立ち上がる。また覆土にはTa-d1 スコリア・Ta-d2 パミスが多く含まれていることから、埋め戻された可能性を考慮し、VGP-26とした。覆土からは礫、礫石器、土器が出土している。1層の西側からは石皿が出土している。

V GP-25



V GP-26

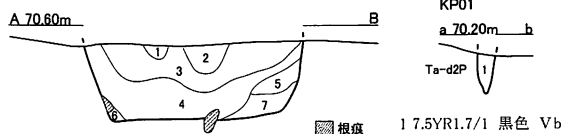
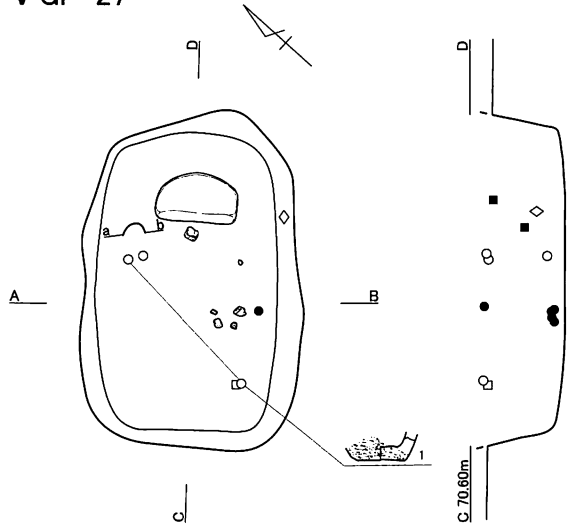


V GP-26

1. 10YR3/3 暗褐色 Vb - Ta-d1スコリア = Ta-d2P
2. 10YR2/2 黒褐色 Vb = Ta-d2P(φ10↓)
3. 10YR3/3 暗褐色 Vb - Ta-d1スコリア - Ta-d2P(φ10↓)

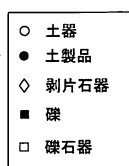


V GP-27



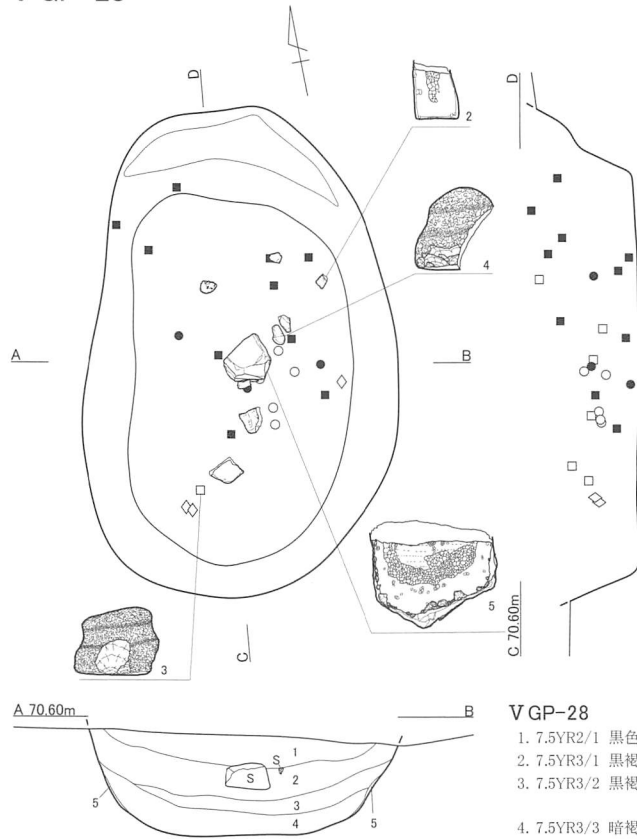
V GP-27

1. 10YR2/1 黒色 Vb
2. 10YR2/3 黒褐色 Vb + Ta-d2L - Ta-d2P(φ20↓斑状)
3. 10YR2/3 黒褐色 Vb + Ta-d2L = Ta-d2P(φ10↓均一) しまり強
4. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb - Ta-d2L(均一)
5. 7.5YR5/6 明褐色 Ta-d2L - Vb(斑状)
6. 10YR3/4 暗褐色 Vb + Ta-dL(均一)
7. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb - Ta-d2L

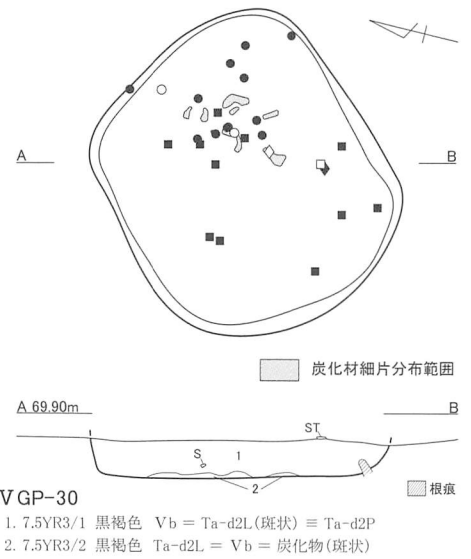


図IV-31 V GP-25 ~ 27 平面及び断面図

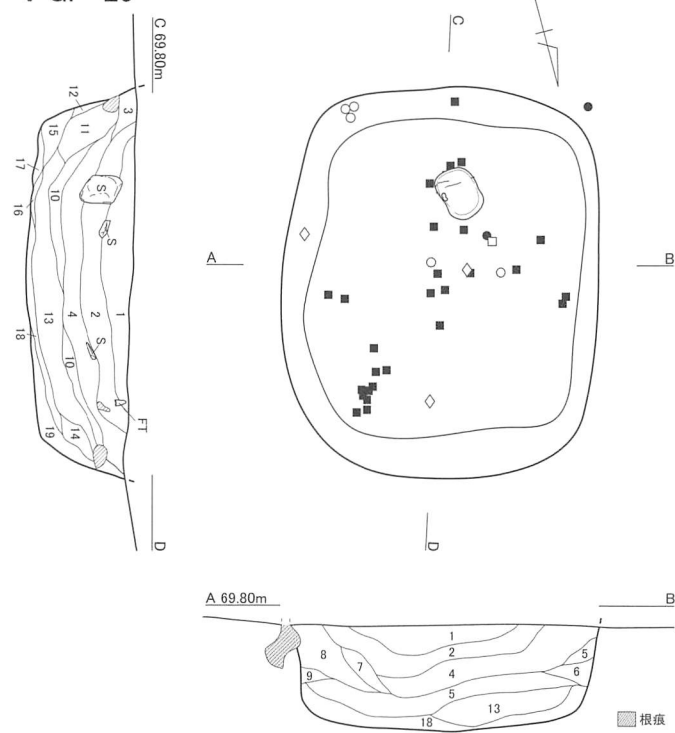
V GP-28



V GP-30



V GP-29

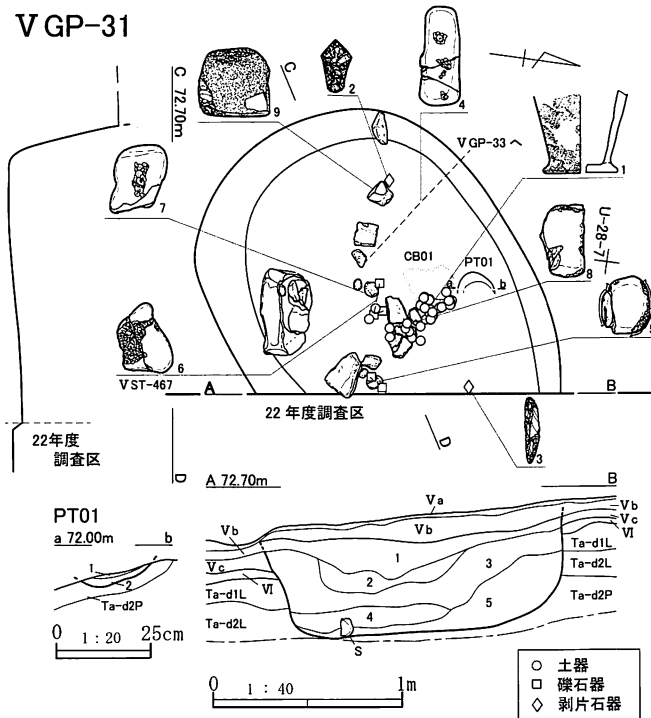


V GP-29

- 土器
● 土製品
◆ 剥片石器
■ 礫
□ 礫石器
◇ フレイク・チップ
- 0 1 : 40 2m

図IV-32 V GP-28 ~ 30 平面及び断面図

V GP-31



V GP-31

1. 10YR2/3 黒褐色 Vb=Ta-d1L(均一)≡Ta-d2P
2. 10YR3/3 暗褐色 Ta-d1L=Vb(斑状)≡Ta-d2P
3. 10YR3/3 暗褐色 Ta-d1L=Vb(均一)≡Ta-d2P(φ10↓)
4. 10YR3/4 暗褐色 Ta-d1L+Ta-d2P(φ5~10)=Vb
5. 10YR4/6 褐色 Ta-d2P(φ5~20)≡Vb(均一)

V GP-31.PT01

1. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d1L=Vb≡Ta-d2P(φ5↓)
2. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ta-d1L

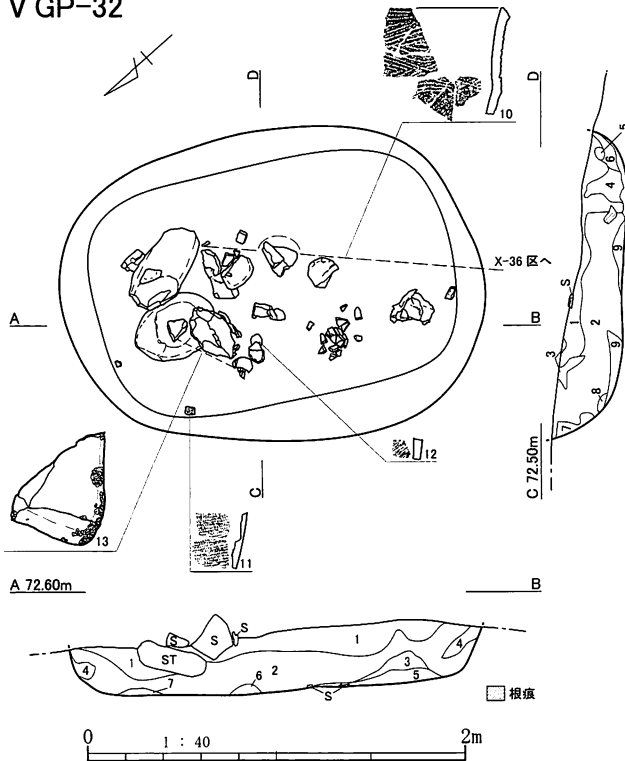
V GP-32 A-B

1. 7.5YR2/1 黒色 Vb=VI(均一)≡Ta-d2P(φ5↓)
2. 7.5YR1.7/1 黒色 Vb=Ta-d2P(φ5~10 ブロック状)
3. 7.5YR3/2 黒褐色 Vb=Ta-d2L=Ta-d2P(φ5~15)
4. 7.5YR3/2 黒褐色 Ta-d1L=Vb(均一)
5. 7.5YR4/4 褐色 Ta-d2L-Vb(斑状)
6. 7.5YR3/2 黒褐色 Vb-Ta-d2P(φ5~30)=Ta-d1スコリア
7. 7.5YR4/4 褐色 Ta-d2L+Ta-d2P(φ5~10)-Vb ブロック状

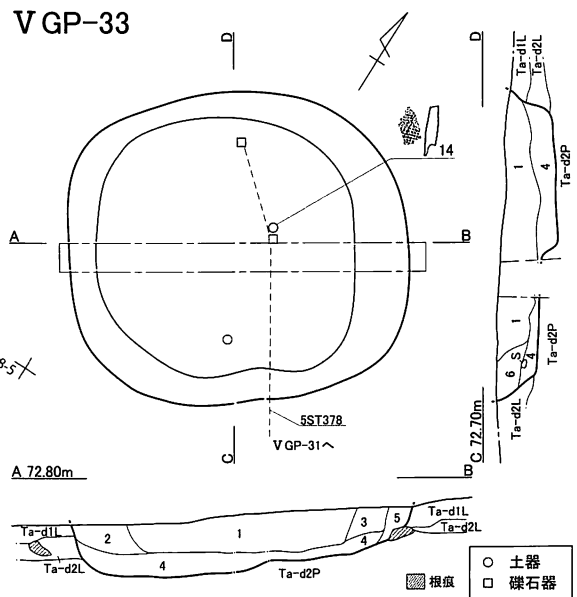
V GP-32 C-D

1. 7.5YR1.7/1 黒色 Vb
2. 7.5YR2/1 黒色 Vb=VI(均一)=Ta-d2P(φ3~5)
3. 7.5YR4/6 褐色 Vb-Ta-d1L(ブロック状)=Ta-d2P(φ5~7)
4. 7.5YR3/1 黒褐色 Vb-Ta-d1L(斑状)
5. 7.5YR3/2 黒褐色 Vb-Ta-d1L(均一)
6. 7.5YR2/3 極暗褐色 Vb-Ta-d1L(斑状)≡Ta-d2P(φ7)
7. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb-Ta-d1L(斑状)=Ta-d1スコリア
8. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb=Ta-d2L(斑状)
9. 7.5YR3/2 黒褐色 Vb-Ta-d2P(φ5~30)=Ta-d1スコリア

V GP-32



V GP-33

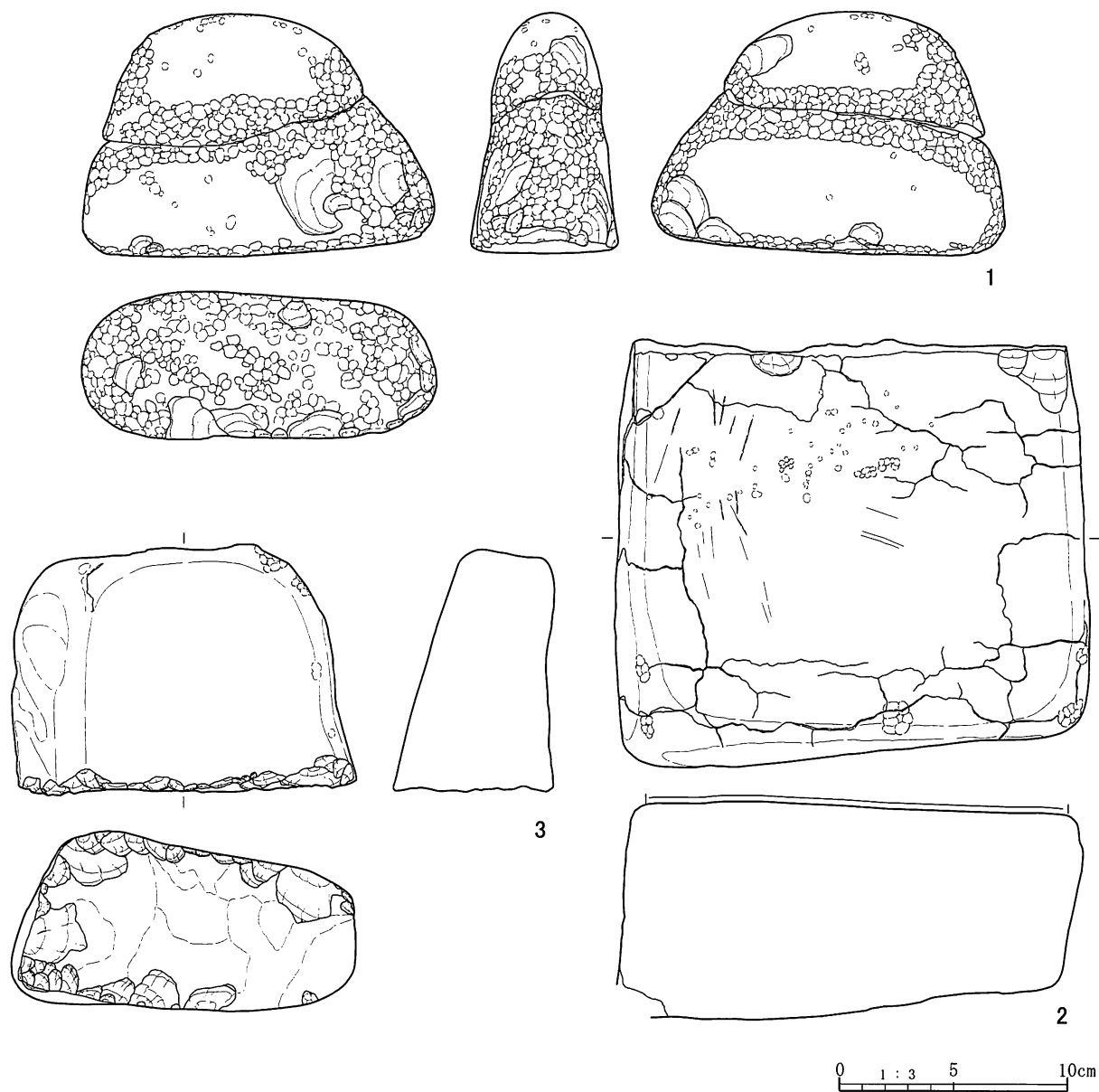


V GP-33

1. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ta-d1L(均一)≡Ta-d2P(φ5↓)
2. 10YR3/4 暗褐色 Ta-d1L=Vb(均一)≡Ta-d2P(φ5↓)
3. 10YR3/4 暗褐色 Ta-d1L=Vb(ブロック状)≡Ta-d2P(φ5↓)
4. 10YR5/8 黄褐色 Ta-d2P(φ5~20)+Ta-d1L=Vb
5. 10YR4/4 褐色 Ta-d2L+Ta-d2P(φ5↓)≡Ta-d1L(ブロック状)
6. 10YR3/4 暗褐色 Ta-d1L=Vb(ブロック状)≡Ta-d2P(φ5↓)

図IV-33 V GP-31~33平面及び断面図

VGP-25



図IV-34 VGP 出土遺物(1)

墓坑中央部の3層からは炭化物片を検出している。墓坑の平面形は円形、坑底面は水平である。壁は北側ではやや垂直に立ち上がるが、全体的には坑底面から緩やかに立ち上がる。覆土の土層はTa-d1 スコリアと Ta-d2 パミスの量的多寡によって3層に分層できる。1・3層はVb層を主体とするが、2層は1・3層に比べてTa-d2 パミスと Ta-d1 スコリアの含有量が少なく、色調が暗い。遺物は埋土中から23点出土している。内訳は土器3点、土製品2点、礫石器3点、フレイク・チップ2点、礫13点である。
(中沢)

VGP-27 (図IV-31・36 図版18-1・2、51-6)

AB-26区で検出した。Vc層調査中に方形の黒色土の落ち込みを確認し、短軸方向に半截したところ、Vb層とTa-dテフラが均一に混入した土層が主体であったことから、埋め戻しと判断し土坑墓とした。坑底面近くで炭化材片を確認し採取した後、土層断面の写真撮影と断面図を作成した。埋

土はVb層が主体で、Ta-d2 ロームが多量に、Ta-d2P が斑状に混じる。3層は特に硬くしまっていた。炭化物等の有無を確認するため慎重に調査を行ったが、検出していない。坑底面を精査した結果、大型礫の近くで直径9cmの丸い黒色土の落ち込みを確認した。半截したところ坑底面から深さ22cmの明瞭な落ち込みを確認し柱穴とした。出土遺物は土器片が4点、土製品が5点、ポイント類の基部が1点、北海道式石冠の破片1点と44×26cm程の風化した大型の礫が1点であった。なお採取した土からフローテーションにより48点のフレイク・チップが得られている。(宮崎)

VGP-28 (図IV-32・36 図版18-3~5、51-7~10)

AC-28区のVI層上面で黒色の楕円形を呈する落ち込みを検出したため、土坑と想定し、短軸方向の南側を半截した。覆土にTa-d1スコリアおよびTa-d2パミスが多く含まれることから、埋め戻された可能性を考慮し、VGP-28とした。埋土からは礫石器、礫、剥片石器、土器が出土している。平面形は南北に長軸をもつ楕円形である。坑底面は水平で、壁面は北側を除いて緩やかに立ち上がる。北側の壁立ち上がりではベンチ状の張り出しが確認された。堆積状態は5層が東西の壁付近に堆積するTa-d2パミスを主体とするにぶい赤褐色土層である。4層はTa-d2パミスとTa-d1スコリアを主とし、Vbを少量含む。1~3層はVb層、Ta-d1スコリア、Ta-d2パミスの多寡によって分層した。3層には炭化物片が少量含まれている。(中沢)

VGP-29 (図IV-32 図版18-6~8)

AK・AL-24区のVI層上面で黒色土の落ち込みを確認した。形状は隅丸方形で、平面形より土坑墓と想定した。十字ベルトを設定し、このベルトを残しながら調査を行った。坑底付近では炭化材の細片を確認している。ただし少量で散在した状態であることから範囲の記録は行っていない。土層断面の記録を行った後、ベルト部分の調査を進め、完掘している。土層は1層が自然堆積のVb層に相当し、2~19は埋土と考えられる。埋土上面は土坑中央付近で浅く窪むが、遺体等が腐食し沈み込んだためと思われる。下層に位置する13・15層は硬くしまっているが、原因は不明である。この下の17・18層は炭化材片が混入している。遺物は207点が出土している。内訳は土器5点、土製品2点、剥片石器3点、礫石器2点、フレイク・チップ163点、礫32点である。フレイク・チップは位置を記録せず覆土で一括して取り上げている。土器は図示していないがII群B2b類が4点、II群B2d類が1点である。(天方)

VGP-30 (図IV-32 図版19-1~3)

AI-24区でVI層精査中に検出した。当初、黒色土の落ち込みが楕円形で、Tピットを想定して半截したため断面が対角線となった。確認面から約20cm掘り下げたところで水平な坑底面を検出した。土層断面の坑底近くで炭化材片が見られたことから、その後も慎重に調査を続けた結果、坑底面直上で56×32cmの範囲で炭化材ブロックを検出した。埋土からII群B2a類とII群B2b類の土器片各2点と土製品10点、剥片石器1点と小形の礫11点が出土した。採取した炭化材をAMS法C14年代測定にかけたところ、暦年較正年代で縄文時代前期末葉の結果を得ており、出土した土器型式の時期とも矛盾しない。(宮崎)

VGP-31 (図IV-33・37-1~9 図版19-4~6、52-11~19)

平成22年度と24年度の調査区境界壁面で、黒色土の落ち込みを検出した。このため、平成22年度側は欠失している。壁面を精査し、規模と黒色土の深さからTピットを想定していたが、半截したところ平坦な坑底面を検出したため、土坑墓(VGP-31)と付番した。壁面で土層断面を記録す

るためにグリッドに沿った形で幅 30cm のベルトを残して周辺を Vc 層まで掘り下げたところ、隅丸長方形の黒色土の落ち込みを確認した。土層断面の記録を行った後にベルトを外し、完掘写真を撮影した。完掘後、坑底面を精査した際に直径 10cm ほどの黒色土が環状に巡る円形プランを確認したため半截したところ、深さ 3cm ほどのごく浅い皿状の落ち込みを確認した。PT01 と付番し断面図を記録した後、完掘して写真撮影と平面図の記録を行った。土層は 1 層が自然堆積の Vb 層に 2 層の Ta-d テフラが混入し、2 層はやや Ta-d テフラの混入量が多い。3~5 層は埋土と思われる。Vb 層下位を掘り込んで構築され、覆土に Vb 層が堆積することから縄文時代前期後半と推定される。覆土から土器片 28 点と剥片石器 2 点、礫石器 7 点が出土し、坑底面から礫石器 4 点が出土している。

(宮塚翔)

VGP-32 (図IV-33・37 図版 19-7~20-1、52-20~23)

VbL 層調査中、調査区西側緩斜面の W-35 区で大型礫の集中を検出した。周囲を VI 層まで掘り下げたところ、南北を長軸とした隅丸方形のプランを確認したため、土坑墓を想定し十字ベルトを設定した。プランに対し短軸で半截したところ、覆土の黒色土中に Ta-d2 パミスが少量であるが均一に混入していたため、埋め戻された可能性を考え VGP-32 と付番した。断面を記録し、残りの部分も同様に調査した。その後、遺物の全体検出を進め、微細図を作成後、完掘した。坑底面は水平で、斜面側の壁面は緩やかに立ち上がる。1 層は自然堆積の Vb 層に相当し、2~9 層が埋土と考えられる。

(宮崎)

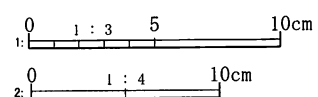
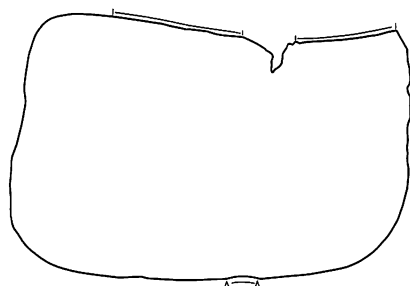
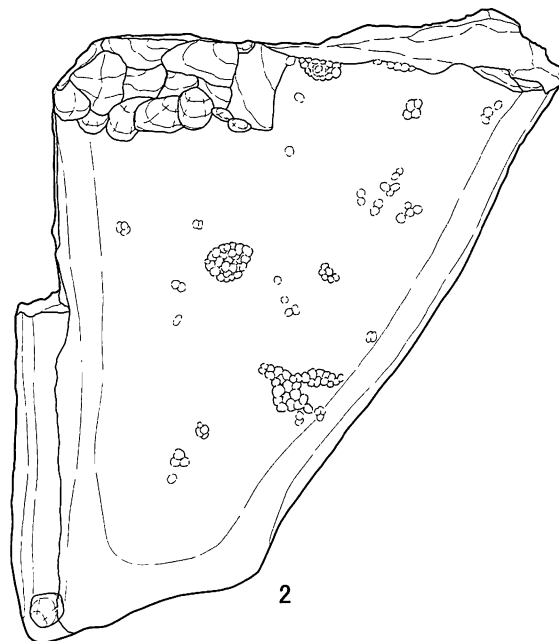
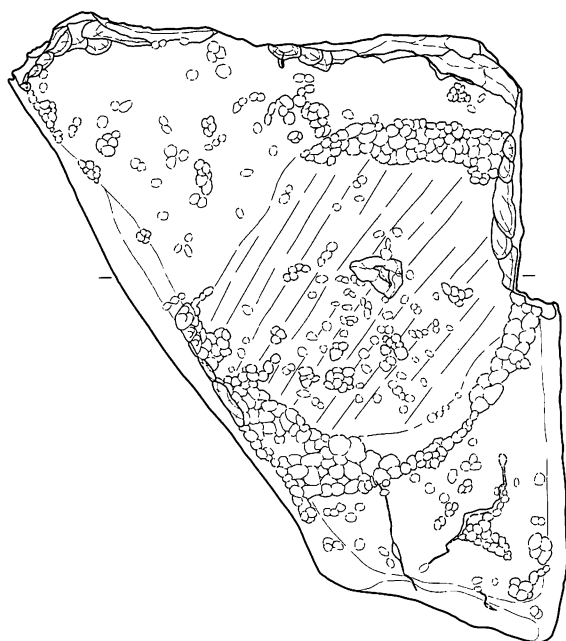
VGP-33 (図IV-33・37 図版 20-2・3、52-24)

T-28 区で VI 層精査中に隅丸方形の黒色土の落ち込みを検出した。VGP-31 に近く、平面形から土坑墓を想定して十字ベルトを設定し、ベルトを残しながら調査を行った。およそ 30cm 堆積する Ta-d2 パミスの面を基底として坑底面を確認し、断面の状態を記録した後にベルト部分の調査を行って完掘した。1 層は覆土で Vb 層を主体とし、Ta-d テフラが主体となる 4 層が埋土と見られる。覆土中から土器片 2 点と礫石器 2 点が出土している。同一個体のたたき石の破片 2 点が出土しているが、VGP-31 出土のたたき石と接合している。

(宮塚翔)

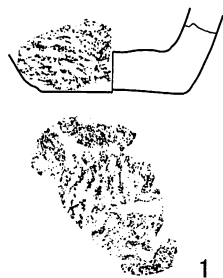
出土遺物(図IV-34~37) : 図IV-34-1 は北海道式石冠の未製品で、底面は敲打により平坦に整形されているが擦痕はない。2 は石皿で使用面は平坦である。3 は半割した礫の破断面を周縁から打ち欠いている。素材礫の形状と、破断面を平坦にすることから北海道式石冠の未製品の可能性がある。図IV-35-1 は 1 対の突起とその下位に瘤状の貼付文を持つ。結節縄文が認められる。II 群 B2a 類に属する。2 は中央が円形に擦り窪められた石皿である。擦り面の周辺には粗面整形時の敲打痕が残っている。擦り面の中央には楔状の亀裂が残る。破断面から礫面に向かって剥離が施されている。図IV-36-1 の土器は RR 斜行縄文が底面にも施文される。底部の施文方向は 2 方向である。II 群 B2b 類に属する。2 はたたき石で、平坦面の敲打で欠損している。3・4 は北海道式石冠で全面を敲打調整している。3 は擦り面縁辺部に赤色顔料が認められる (トーン部分)。5 は表面縁辺部に剥離が認められる石皿。中央部を擦り面、その周縁に敲打痕が認められる。図IV-37-1 は II 群 B2b 類に属する。底部変換点が極端に張り出し、胴部~底部まで撚糸文 (多軸絡条体回転文) が施される。内面はナデ調整が見られる。2 は石槍である。基部に対し鍔身部が非常に短く、剥離調整が集中していることから、再調整品とみられる。3 は頁岩製の石錐で、全体が三角形の断面を有する。先端から 3mm ほどの間に使用による微細剥離と摩滅がみられる。4~8 はたたき石である。4 は I B3 類で、3 点が

VGP-26

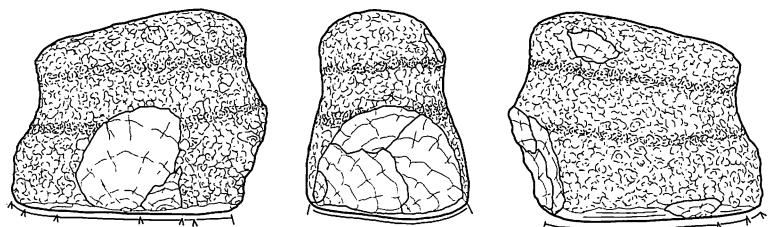


図IV-35 VGP 出土遺物(2)

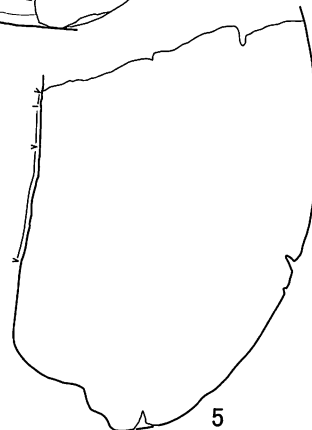
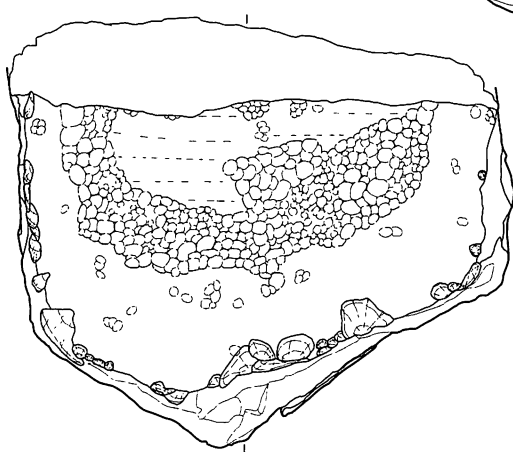
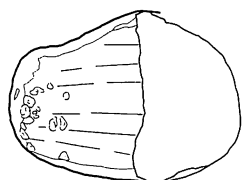
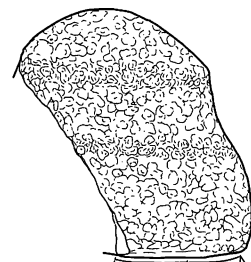
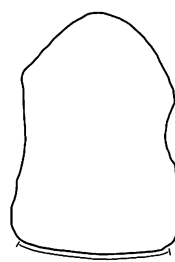
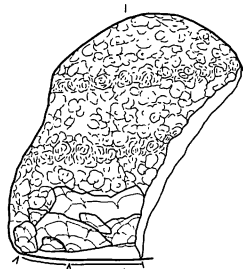
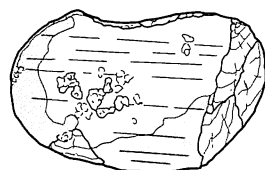
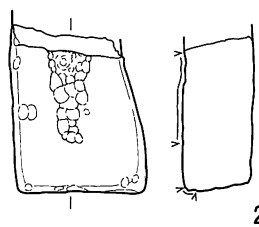
VGP-27



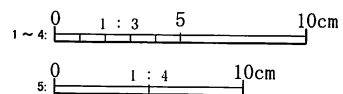
VGP-28



VGP-28

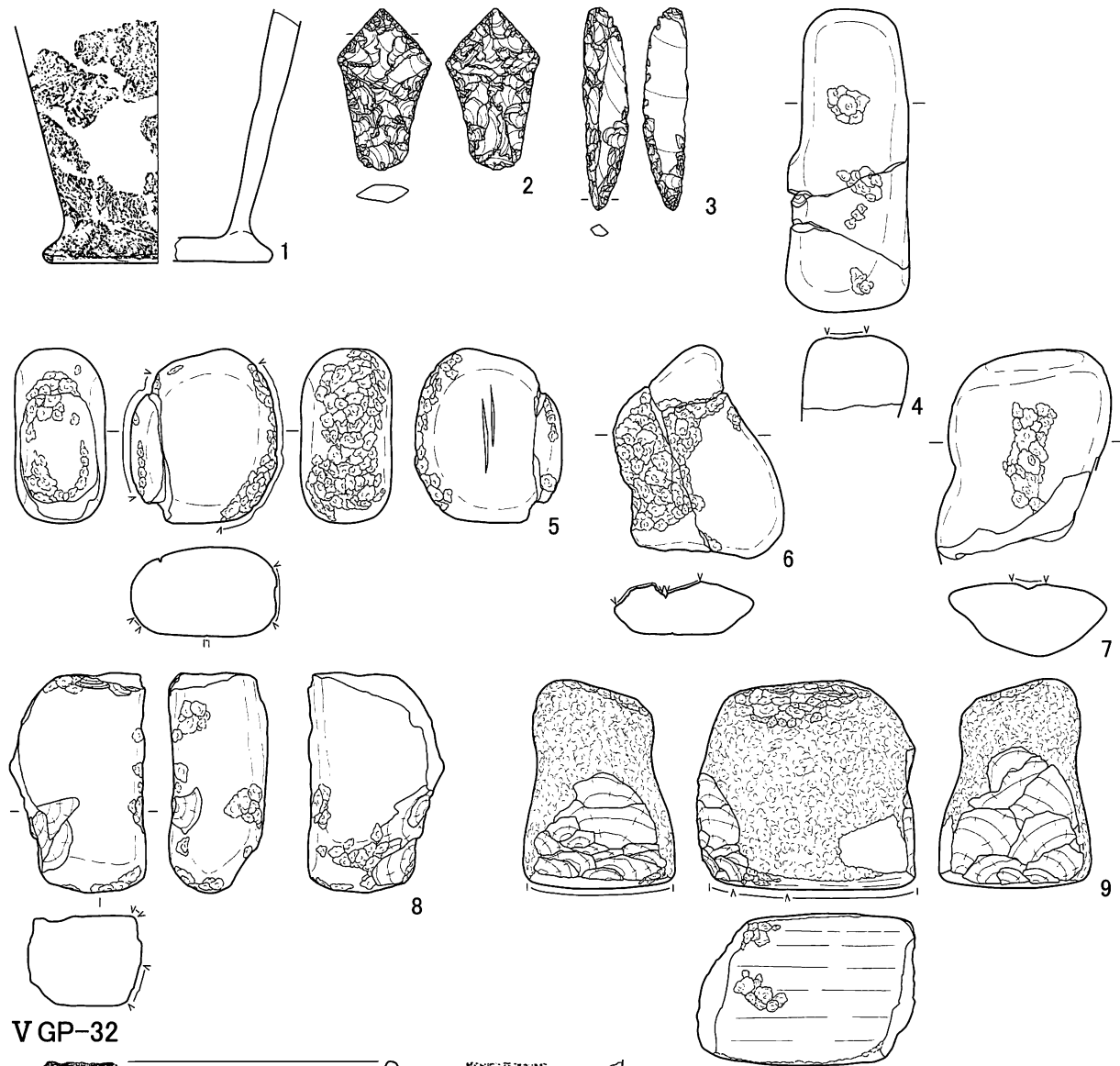


赤色顔料付着範囲

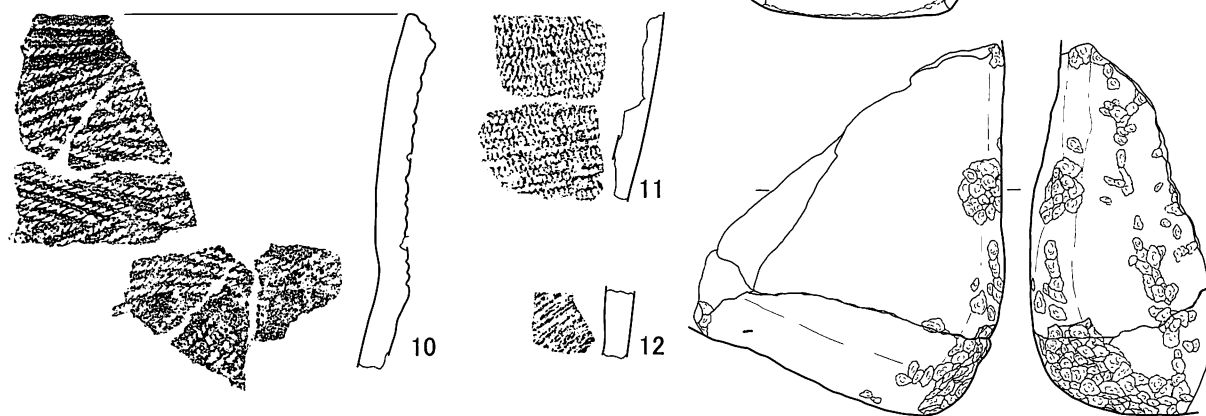


図IV-36 VGP 出土遺物 (3)

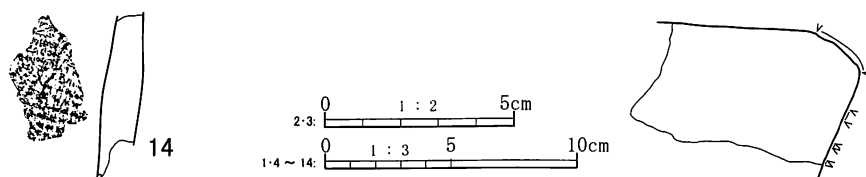
V GP-31



V GP-32



V GP-33



図IV-37 V GP 出土遺物(4)

接合したものである。破片 2 点は VGP-33 から出土したものであるが、ここで報告する。縦長素材を用いており、平坦面に浅い敲打痕がある。5 はⅡA2 類で側縁部に集中して敲打痕がある。7・8 はⅣ類に分類したもの。7 は欠損しており、平坦面の長軸方向に敲打痕がある。8 は礫片を利用したもので、面と端部に敲打痕が認められる。9 は北海道式石冠で、やや扁平の頂部を持つもの。擦り面の幅は広いが長軸の両端は剥離によって、正面観は方形に近い。4~9 の石材はすべて砂岩製である。10~12 はいずれもⅡ群 B2a 類に属する。10 は口唇部に 3 条、口縁部から胴中央部まで縄線文が施され、菱形様の文様が連続する。胴下半部は斜行縄文。11 は多軸絡条体回転文、12 は撚糸文が施されている。10 は口唇部断面形態からフゴツペ貝塚 1 式に比定される。13 は破損した台石である。残存している礫の縁辺部と側縁に敲打痕があり、重量から台石に分類したが、たたき石の可能性もある。これ以外にも大型の石皿 2 点が出土しているが、風化により取り上げ時に崩れてしまったため図示していない。14 はⅡ群 B2b 類に属する胴部破片。異原体羽状縄文が施される。

(34-1・2:天方 35~37-1・37-10~12・14:宮塚義 35-2~5:中沢 37-2・3:宮塚翔 37-4~9・13:宮崎)

表Ⅳ-30 土坑墓属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	長軸 方向	調査 面長 短比	坑底 面長 短比	出土 遺物	備考
					調査面/ 坑底面	長軸	短軸	長軸	短軸						
IV-31	17-3	VGP-25	AH-33・ 34	VI	楕円形/ 楕円形	220	180	160	120	68	N-32° E	1.22	1.33		
IV-31	17-5	VGP-26	AC-27	VI	円形/ 円形	168	144	100	92	32	N-52° W	1.17	1.09		
IV-31	18-1	VGP-27	AB-26	VI	隅丸方形 / 隅丸方形	180	120	156	96	40	N-47° E	1.50	1.63		
IV-32	18-3	VGP-28	AC-28	VI	楕円形/ 楕円形	260	168	196	116	56	N-5° E	1.55	1.69		
IV-32	18-6	VGP-29	AK・AL- 24	VI	隅丸方形 / 隅丸方形	206	168	166	144	56	N-16° E	1.23	1.15		
IV-32	19-1	VGP-30	AI-24	VI	隅丸方形 / 隅丸方形	160	140	150	126	20	N-46° E	1.14	1.19		
IV-33	19-4	VGP-31	U-28	VbL	隅丸方形 / 隅丸方形	(198)	150	(158)	130	64	N-48° E	-	-		
IV-33	19-7	VGP-32	W-35	VI	隅丸方形 / 隅丸方形	222	166	192	124	40	N-31° E	1.34	1.55		
IV-33	20-2	VGP-33	T-28	VI	隅丸方形 / 隅丸方形	180	150	138	136	36	N-58° E	1.2	1.01		

表IV-31 土坑墓出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
IV-35-1	51-4	JP416A	ⅡB2a	VGP-26	2	1	口縁部	突起・外傾-丸状	刻み-貼付文/結節 回転文(縦位・横位 回転)-ミガキ	φ1~3mm 石英少量 混入	補修 孔
IV-36-1	51-6	JP431A	ⅡB2b	VGP-27/ AB-26	VbL・ c・1	3	底部	やや外傾-角状 -やや上げ底	RR斜行縄文 -RR斜行縄文	繊維少量 混入	
IV-37-1	52-11	JP469A	ⅡB2b	VGP-31	1	13	胴部~ 底部	外傾/やや外傾- 張り出し-やや 上げ底	撚糸文(多軸絡条 体?)-ナデ/撚糸 文(多軸絡条体?) -ナデ	繊維・砂粒 少量混入	
IV-37-10	52-20	JP258B	ⅡB2a	VGP-32/ X-36・37・ Y-35・AB- 38・AG-27	VbU・ 1	6	口縁部 ~胴部	突起・外反-三角 形/やや外傾	縄線文-縄線文・隆 帯1・LR斜行縄文- ミガキ/LR斜行 縄文-ミガキ	繊維・白色 岩片 少量混入	
IV-37-11	52-21	JP477A	ⅡB2a	VGP-32・ VH-06	VbU・ 1	2	胴部	外傾	撚糸文(多軸 絡条体回転文)	繊維・砂粒 少量・石英 微量混入	内面 剥落
IV-37-12	52-22	JP502A	ⅡB2a	VGP-32	1	1	胴部	外傾	撚糸文-ミガキ	繊維・砂粒 微量混入	
IV-37-14	52-24	JP513A	ⅡB2b	VGP-33	1	1	胴部	やや外傾	異原体羽状縄文- ナデ	繊維・砂粒 微量混入	

表IV-32 土坑墓出土礫石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構名	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
IV-34-1	51-1	VST 211	64583他	すり石	D	VbL	VGP-25	160.1	107.7	64.0	1410.0	Sa.	
IV-34-2	51-2	-	64599	石 皿	-	1	VGP-25	204.5	186.0	95.0	(5820.0)	Sa.	
IV-34-3	51-3	-	64582	加工痕のある礫	-	VbL	VGP-25	150.0	109.0	72.0	1630.0	Sa.	
IV-35-2	51-5	-	65523	石 皿	-	1	VGP-26	333.0	295.0	140.0	16000.0	Sa.	
IV-36-2	51-7	-	65898	たたき石	IV	1	VGP-28	(64.8)	52.0	27.9	(160.0)	Sa.	
IV-36-3	51-8	-	65478	すり石	D	1	VGP-28	85.8	80.9	64.7	720.0	Sa.	
IV-36-4	51-9	-	66535	すり石	D	3	VGP-28	(54.1)	101.1	66.0	(660.0)	Sa.	
IV-36-5	51-10	-	66533	石 皿	-	2	VGP-28	(263.0)	(222.0)	166.0	(11200.0)	Sa.	
IV-37-2	52-12	-	143942	ポイント類	B1	1	VGP-31	46.3	27.1	10.7	10.4	Obs.	再調整品
IV-37-3	52-13	-	144037	石 錐	D	2	VGP-31	58.0	12.9	9.3	6.9	Sh.	
IV-37-4	52-14	VST 378	144614	たたき石	I B3	4	VGP-31	130.3	53.0	(34.1)	(255.0)	Sa.	
			2			VGP-33							
			144840										
144841													
IV-37-5	52-15	VST 468	144603 144604	たたき石	ⅡA2	4	VGP-31	74.6	62.5	38.7	201.0	Sa.	擦痕有
IV-37-6	52-16	VST 467	143944	たたき石	ⅡA3	1	VGP-31	93.3	66.4	27.1	160.0	Sa.	
			143945										
			143946										
IV-37-7	52-17	-	144611	たたき石	IV	4	VGP-31	(88.3)	66.9	31.5	(200.0)	Sa.	
IV-37-8	52-18	-	144609	たたき石	IV	4	VGP-31	92.6	57.6	40.5	327.0	Sa.	
IV-37-9	52-19	-	144616	すり石	D	3	VGP-31	88.9	81.4	65.5	800.0	Sa.	
IV-37-13	52-23	VST 456	144695	台 石	-	1	VGP-32	(149.6)	(108.0)	(72.0)	(1105.0)	Sa.	
			144697										

第3節 土坑

平成 23・24 年度の調査では新たに 8 基検出している。平成 20～22 年度の調査では 13 基の調査を行っている。形態等で類似するものはない。覆土はいずれも自然堆積と考えられる。時期はいずれも不明である。(天方)

VP-19 (図IV-38 図版 20-4・5)

AL-23 区で検出した。21 年度調査区との境界で検出したため、東側の一部を失っている。VI層精査中に楕円形の黒色土の落ち込みを確認したため半截した。黒色土の中から大型礫等が出土したが、28cm ほど掘り込んだところで平坦な坑底面を確認したこと、覆土が自然堆積と思われたことから土坑とした。壁面の北側はほぼ垂直で、南側は緩やかに立ち上がるため、壁面の崩落が影響していると思われる。出土遺物は土器が 1 点、北海道式石冠の破片 1 点、土製品が 6 点、礫が 17 点である。(天方)

VP-20 (図IV-38 図版 20-6・7)

AH-36 区で検出した。VI層精査中、不整形な黒色土の落ち込みを検出したことから、トレンチを設定して確認した。トレンチの観察から北西側の立ち上がりが比較的明瞭であったため土坑と判断した。開口部は広がっており、壁面の崩落によるものと考えられる。坑底面は水平であるがトレンチ掘削のため南側を失っている。(中沢)

VP-21 (図IV-38 図版 20-8、21-1)

TP-78 を完掘後、VI層精査中に円形の黒色土の落ち込みを確認した。半截したところ、水平な坑底面が検出されたので土坑とした。確認面からの深さは 12cm と浅いが、坑底面から西側は緩やかに、東側はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は礫片 1 点とフレイク・チップ 4 点である。(宮崎)

VP-22 (図IV-38 図版 21-2・3)

AD-39 区で検出した。VI層精査中、円形の黒色土の落ち込みを確認したため、トレンチを設定して断面を観察した。水平な坑底面と直線的な壁面が確認できたので土坑とした。(天方)

VP-23 (図IV-38・39-1 図版 21-4・5、52-25)

発掘区西側斜面の W-36 区で検出した。Vc 層調査中、楕円形の黒色土のプランを確認した。プランの周囲をVI層まで掘り下げ、明瞭な黒色土のプランを確認してから東西軸で半截した。坑底面はほぼ水平で斜面に立地していることから壁面の深さが東側で 5cm、西側では 20cm で垂直に立ち上がる。覆土からすり石 1 点が出土している。(宮崎)

VP-24 (図IV-38 図版 21-6・7)

R-30・31 区でVI層の精査中に、黒色土が楕円形となる落ち込みを検出した。半截して土層断面を確認しながら調査を進め、水平な坑底面と直線的に立ち上がる壁面を検出した。断面観察から覆土は Vb 層の自然堆積層と、Ta-d2 パミスを含んだ層が高位面から流れ込んだと見られる層に分けられる。Ta-d2 パミスを含んだ土は緩斜面北側に位置する VH-04 の掘り上げ土が起源と考えられ、埋土ではないことから土坑と判断して調査を行った。(宮塚翔)

VP-25 (図IV-38・39-2 図版 21-8、22-1、52-26)

S-30・31 区で検出した。VH-04 の南側緩斜面で Vc 層をジョレン精査中、Ta-d2 パミスの混じった黒色土の落ち込みを確認した。短軸でベルトを設定して半截し、西側の半截を行った。プラン上面

は根による攪乱で明確なプランではなかったが、坑底面が水平であったためベルトを残して東側の調査をした。その結果、東側は水平な坑底面で楕円形を呈していたことから土坑とした。確認面からの深さは43cmである。東側壁面近くの覆土中位から、たたき石1点が出土している。(宮崎) VP-26 (図IV-39 図版 28-11・12、52-27)

T-35・36 区の境界付近でVI層精査中に検出した。Ta-d2 パミスを含んだ長楕円形のTピットとみられる黒色土の落ち込みと、重複する円形の黒色土の落ち込みを確認した。平面では遺構同士の新旧関係は判断が難しく、半截して土層断面から新旧を確認したところ、Tピット(以下 TP-98)が本遺構の覆土を切って構築されているため、TP-98 がより新しい遺構であることから TP-98 を完掘後に調査を行った。断面を精査したところ、VIII層を基底とする坑底面と緩やかに立ち上がる壁面を確認したため、VP-26 を付番した。覆土である1層はVb層を主体とする自然堆積層で、坑底面のTa-d2 パミスを少量含む。(宮塚翔)

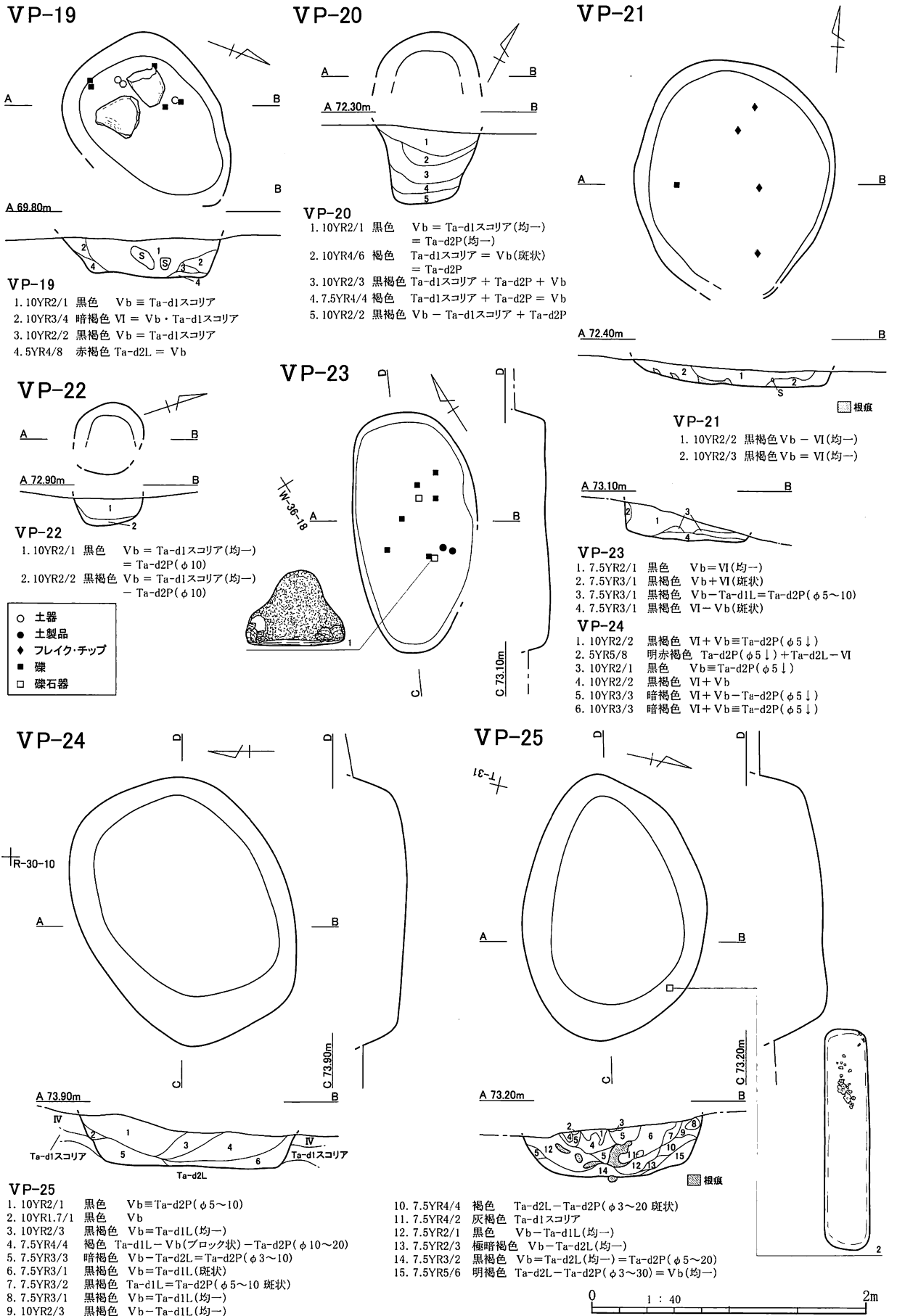
出土遺物 (図IV-39) : 1 は北海道式石冠である。頂部が丸く前面に敲打調整を施したもので、擦り面の幅が広い。2 はIB1 類のたたき石で、平坦面の両面に浅い敲打痕がある。3 は破損した台石で、平坦面と側縁に敲打痕があり、裏面の一部には浅い擦痕が認められる。1~3 はすべて砂岩製である。(宮崎)

表IV-33 土坑属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ(cm)	長軸方向	調査面長短比	坑底面長短比	出土遺物	備考
					調査面/坑底面	長軸	短軸	長軸	短軸						
IV-38	20-4	VP-19	AL-23	VI	楕円形/楕円形	144	(100)	116	76	28	N-10°E	-	1.53		
IV-38	20-6	VP-20	AH-36	VI	円形?/円形?	80	(44)	52	(32)	56	N-62°E	-	-		
IV-38	20-8	VP-21	AJ-37	VI	楕円形/楕円形	170	152	156	136	12	N-25°W	1.19	1.18		
IV-38	21-2	VP-22	AD-39	VI	円形?/円形?	52	50	(34)	22	20	N-17°E	2.00	-		
IV-38	21-4	VP-23	W-36	VI	長楕円/長楕円	175	90	161	84	29	N-27°E	1.94	1.92		
IV-38	21-6	VP-24	S-30・31	Vc	隅丸方形/長楕円	194	153	148	121	40	N-70°E	1.27	1.22		
IV-38	21-8	VP-25	R-30・31	Vc	楕円形/楕円形	194	136	152	98	45	N-76°E	1.43	1.55		
IV-39	-	VP-26	T-35・36	VI	隅丸方形/楕円形	176	(76)	148	(70)	42	N-42°E	-	-		TP-98 重複

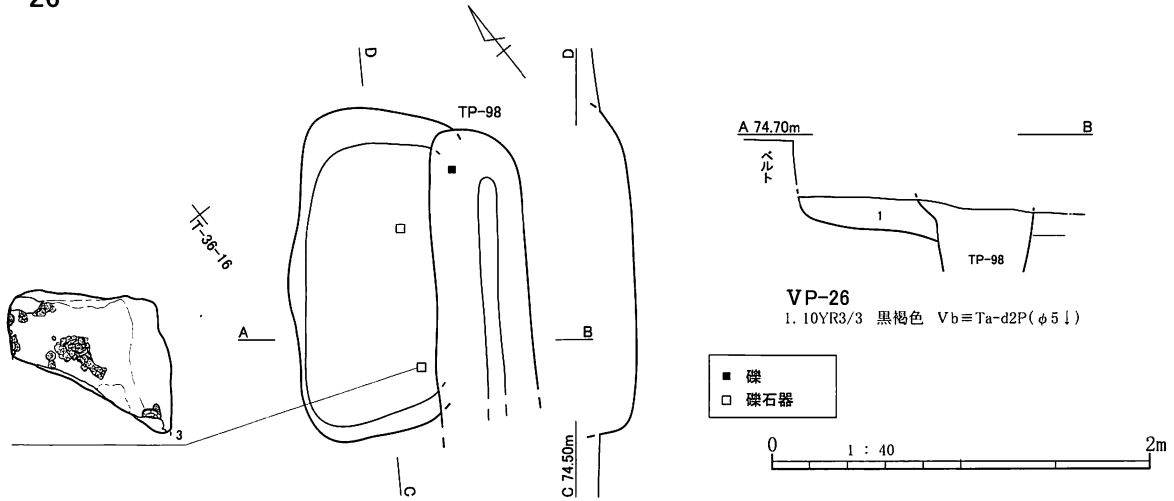
表IV-34 土坑出土礫石器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	遺物名	分類	層位	遺構名/グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
IV-39-1	52-25	-	143902	すり石	D	1	VP-23	105.7	81.1	61.5	590.0	Sa.	
IV-39-2	52-26	-	145651	たたき石	IB1	1	VP-25	204.3	48.0	25.2	600.0	Sa.	
IV-39-3	52-27	-	145724	台石	-	1	VP-26	(180.0)	(154.0)	126.0	(4210.0)	Sa.	

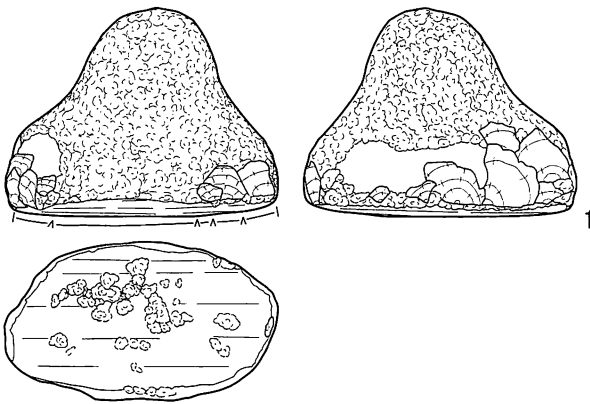


図IV-38 VP-19~25平面及び断面図

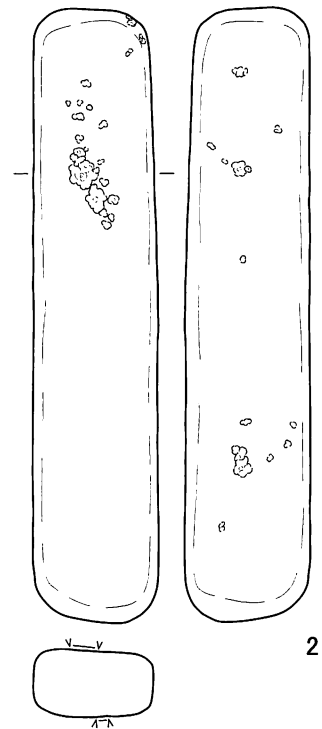
VP-26



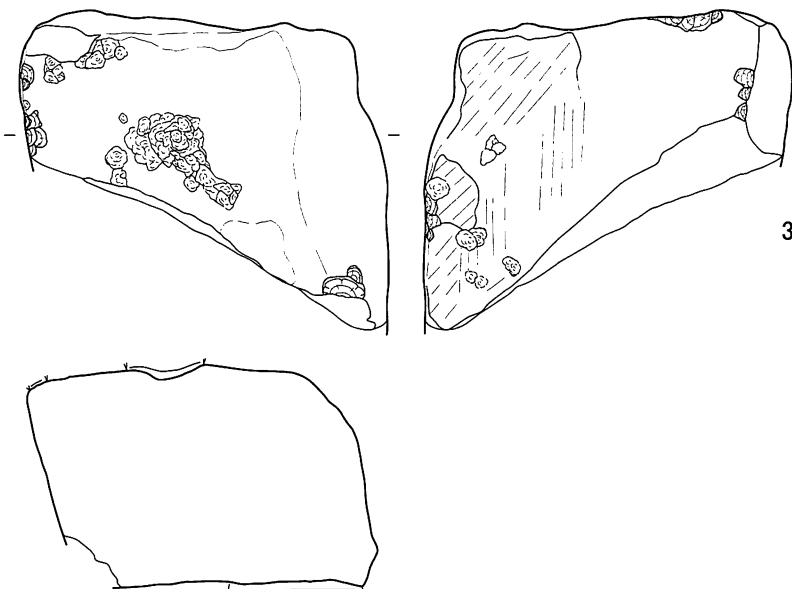
VP-23



VP-25



VP-26



図IV-39 VP-26平面及び断面図・VP出土石器

第4節 Tピット

平成 23・24 年度の調査では T3 面で新たに 36 基検出した。平成 20～22 年度の調査では T1・T3 面合わせて 59 基の調査を行っている。ここでは形態、堆積状態、分布と配列、掘り上げ土、重複関係、その他の項目ごとにまとめて記載を行い、特筆すべき例を除き個別の記載は行わないので、図と表を参照されたい。

検出および調査

T3 面では VI 層～VIII 層上面で黒色土の落ち込みを確認したものが殆どであるが、A2 型 (TP-65・75・78)、B2 型 (TP-63・93・95)、C2 型 (TP-66・69・76・77・79・92) の一部は IV 層除去後の窪み、Vb 層調査中の掘り上げ土等で比較的早い段階の確認をしている。調査の手順は平面形を確認した後、長軸方向に対し直交する位置にセクションラインを設定し、半截後に堆積状態の撮影・実測を行った。実測終了後残り半分を調査し、完掘平面形の撮影・実測、およびエレベーションの実測を行った。坑底で杭穴を検出したものについては同様の手順で調査を行っている。また、IV 層除去後の窪みについては中央を通る位置でベルトを設定し、ベルトを残して調査を進め、落ち込みを明瞭に確認した時点で調査を行っている。Vb 層中で掘り上げ土を確認したものについては、掘り上げ土の範囲を記録し、ベルトを一部残して落ち込みが明瞭に確認できるところまで掘り下げてから調査を行っている。

形態分類

Tピットの形態分類は、坑底面平面形の長短比および杭穴の有無を基準とする『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』（苫小牧市埋蔵文化財調査センター1987）での分類案を基に、長短比数値に若干の変更を加えた厚幌 1 遺跡（厚真町教育委員会 2004）での分類を補足し、細分を含め 8 タイプに分けた。

A 型：長短比が 8 以上で、長さに比して幅が狭い溝状のタイプ。

A1a 型 長軸が 2m 以上のもの（杭穴がないもの）

A1b 型 長軸が 2m 以上のもの（杭穴があるもの）

A2a 型 長軸が 2m 未満のもの（杭穴がないもの）

A2b 型 長軸が 2m 未満のもの（杭穴があるもの）

B 型：長短比が 4 以上、8 未満のもので、長楕円形のタイプ。

B1 型 杭穴がないもの B2 型 杭穴があるもの

C 型：長短比が 4 未満のもので、楕円形から円形に近いもの。

C1 型 杭穴がないもの C2 型 杭穴があるもの

形態

分類毎の検出数は A1a 型 14 基、A1b 型 2 基、A2a 型 7 基、B1 型 1 基、B2 型 3 基、C1 型 1 基、C2 型 8 基である。平成 23・24 年度の調査では A1a 型が多く、A2a 型、C2 型の順である。これらを含めた、これまでの T3 面全体では A1a 型 17 基、A1b 型 3 基、A2a 型 15 基、A2b 型 1 基、B1 型 3 基、B2 型 6 基、C1 型 4 基、C2 型 15 基、不明 2 基でほぼ同じ様な傾向である。

堆積状態

Tピットの堆積状態は、基本的に覆土上位に V 層の自然堆積層、覆土中位～下位に Tピット壁面

の崩落層及び周囲から流れ込んだ土が堆積している。また多くの例で坑底面直上には厚さ 2～5cm 程の黒色土の堆積を確認した。

過年度同様 T3 面で特徴的なのは Ta-d2 パミスが覆土上位で堆積するものである。(TP-63・66・67・69・70・74～79・81・89・90～94・98 等) これらは堆積状態より壁面の崩落土の可能性がないものである。この成因が明らかなものは TP-63・66・69・75～79・81・90～93 である。掘り上げ土の項で詳しく記載するが、Tピットを掘った際の排土を周囲に堆積しており、これが壁面の崩落等と共にTピット内に流れ込んだものである。成因が不明な中にも掘り上げ土の範囲は確認できなかったが、掘り上げ土に起因する可能性がある。また、別遺構の掘り上げ土等の可能性もある。

分布と配列

T3 面では長軸方向を揃えて一定の間隔を空けて並ぶTピットの配列は、平成 22 年度の調査で TP-51・52・56 と TP-55・60・61 の 2 列が検出されている。平成 23、24 年の調査ではこれらの配列に続くTピットや、新しいTピットの配列は検出されなかった。T3 面における分布状況は段丘先端の平坦部では少なく、標高 71m 以上の段丘面北西の傾斜地側に多い。更にその中でも南西と北東の段丘縁辺に検出数が多い傾向が見られる。

掘り上げ土

Tピット外に広がる掘り上げ土を確認したものは TP-63・65・66・69・75～79・81・90～93 の 14 基ある。この内 11 基 (TP-63・65・66・75・77～79・81・91～93) の掘り上げ土は範囲を記録している。これまでの調査でも範囲を記録しているものは 2 基 (TP-43・45) ある。掘り上げ土は基本的に Vb 層に Ta-d2 パミスを多く含む範囲の記録を行っている。但し TP-65・81 は IX 層も深く掘り込んでおり、Ta-d2 パミス以外に IX 層及び IX 層中の礫・礫片も多く含まれている。溝状のもの (A2 型) 3 基 (TP-65・75・78) はいずれも Tピットの片側に掘り上げ土を堆積している。長楕円・楕円形のもの (B2・C2 型) 9 基 (TP-43・45・63・66・77・79・91～93) の内 7 基は Tピットの両側に掘り上げ土を堆積し、2 基は片側である。溝状のものは片側に、長楕円・楕円形のものは両側に堆積する傾向が看取できる。

重複関係

Tピット同士で重複しているものはないが、TP-81・91 はそれぞれ、前期後葉と思われる竪穴式住居跡 (VH-10・13) と重複関係にあり、Tピットが新しいことが判明している。TP-98 も重複していた土坑 (VP-26) を切ることからこれよりも新しいことが判るが、VP-26 の構築された時期は不明である。

個別記載

TP-63 (図IV-40 図版 22-2・3)

T3 面で IV 層 (Ta-c テフラ) 除去後に楕円形状の窪みを確認し、その周囲では Va・b 層に Ta-d2 パミスが散在した状態であった。これまでの調査成果から Tピットの掘り上げ土であると想定し、窪みの中央を通る位置にベルトを設定した。ベルトに沿ってトレンチ調査を VI 層まで行ったところ、トレンチ底面で明瞭な落ち込みを、断面で掘り上げ土を確認した。Tピットの調査と掘り上げ土の検出作業を並行して行っている。Tピット完掘後に底面で確認した杭跡の調査を行っている。

1 層は掘り上げ土及び Tピット内に流れ込んだものである。2 は Ta-d2 パミスが多く含まれている土で、壁面崩落前に Vb 層上に堆積していた掘り上げ土と考えられる。この下位の 3・4 層は Vb 層主体、5 は Vc 層主体、6 は VI 層主体、7 は Ta-d1 主体、8 は Ta-d2 主体と基本層序と同じ層順であり、

壁面がある程度の規模で一気に崩落したと思われる。これより下位の9～16層は小規模な壁面崩落と上部からの流れ込みを繰り返した結果と思われる。底面直上の17層はVb主体のしまりのない土層である。後述する出土遺物の砥石(1)は2層に一部覆われていることから、上記の堆積状態の解釈から考えると、Tピット構築以前のものである。また、2層より下で土器片はⅡ群B2a類、Ⅱ群B2b類、Ⅱ群B2c類が計10点程出土しており、同様に考えるとTピットの構築時期は前期後葉より新しいと判断できる。(天方)

TP-65 (図IV-41 図版 22-7～23-2)

試掘調査のトレンチ北側及び西側の壁面でVb層の上位にTa-d2パミス・IX層の混土層が堆積していた。V層上面では、壁面で混土層を確認していた周辺がマウンド状の微高地であった。そのため窪み等は全く確認できなかった。この段階では成因不明の二次堆積土であり、VM0-06と付番した。この上面を検出し記録を行っている。また、検出時にこの上面でⅢ群B1類の土器片がややまとまって出土している。トレンチの壁面を利用し、十字ベルトを設定し、ベルトを残して調査を進めた。この二次堆積土中からはIX層が付着した多量の礫が出土しているが、この段階では確定的ではなかったため位置の記録を行っている。ベルトを残し周囲の調査の進行に合わせて層位ごとに調査を行った。VI層上面のベルト北側で溝状の落ち込みを確認したため周囲の精査を行った。調査の結果、溝状のTピットであり、底面はIX層を深く掘り込んで構築されていた。また、IX層の壁面では一部礫が多量に混入している所を確認した。このような状態から、VM0-06はTP-65の掘り上げ土と判断した。Tピットの土層堆積状態は主に壁面崩落と周囲からの流れ込みによるものと考えられる。明瞭に掘り上げ土の流れ込みと判断できる土層は認められない。(天方)

TP-77 (図IV-46 図版 25-4)

Va層調査後、Vb層上面でTa-d2パミスが散在した状態で検出した。周囲で明瞭な窪み等は検出していなかった。Ta-d2パミスを含む土層の検出を行い、範囲を捉えて記録を行っている。Tピット掘り上げ土の可能性を考え、ベルトを設定し、これに沿ってトレンチ調査を行った。トレンチ底面では明瞭な落ち込みを確認することはできず、ベルトを残し、周囲の調査に合わせて層位的に調査を行った。結果、VI層上面で楕円形の落ち込みを確認したが、設定していたベルトはTピットの平面形と重ならない位置であった。このためベルト断面は撮影のみを行い、図化せず掘り下げを行った。落ち込みは「検出および調査」の項で前述した手順で行っている。土層は3・4層と8層がTa-d2主体土で壁面崩落に伴う、掘り上げ土の流れ込みと考えられる。3・4層と8層の間には5層のVb主体土が見られる。(天方)

TP-78 (図IV-47 図版 25-5・6)

Va層除去後、Vb層にTa-d2パミス及びIX層が付着した礫が混土層範囲を確認した。VM0-08と付番し、撮影と範囲の記録を行った。この範囲に接して窪みを確認したので、窪みの中央を通る位置にベルトを設定し、これに沿うトレンチ調査を先行した。トレンチをⅧ層上面まで掘削したところ、トレンチ底面で落ち込みを確認した。この段階でベルトをそのまま利用し落ち込みの半截を行っている。これ以降の調査は「検出および調査」の項で前述した手順で行っている。1～3層は掘り上げ土及び壁面崩落に伴う流れ込み土である。掘り上げ土はTピットの片側(南側)のみで、覆土への掘り上げ土の流れ込みも南側からのみである。(天方)

TP-92 (図IV-52 図版 27-7・8)

IV層除去後、VH-04の東側で窪みを検出した。VH-04の掘り上げ土とは異なるTa-d2パミスの混土層範囲を東側に確認したため、これまでの調査成果からTピットの掘り上げ土であると判断し、掘り上げ土の範囲を平面図に記録した。窪みの中央にベルトを設定し、トレンチ調査を行って落ち込みを確認した。その後、トレンチを東西に広げて掘り上げ土の堆積状態の確認を行った。調査は「検出及び調査」の項で前述した手順で行った。坑底面でIX層シルトに直径5～8cm前後のTa-dパミスを含んだ円形プランを確認し、杭穴と判断して調査・記録している。1・24～26層がTP-92の掘り上げ土で、1層は一部がTP-92に流れ込んでいる。27層はVH-04の掘り上げ土で、TP-92はこれを掘りこんでいることからVH-04よりも新しい時期に構築されたと考えられる。2～7層は壁面崩落に伴う流れ込み土と見られる。3・4層はTa-d2ロームとパミスが多く混じるため、27層が起源と思われる。8～22層は壁面崩落による流れ込みと見られる。23層は壁面崩落前に上部から流れ込んだものと思われる。
(宮塚翔)

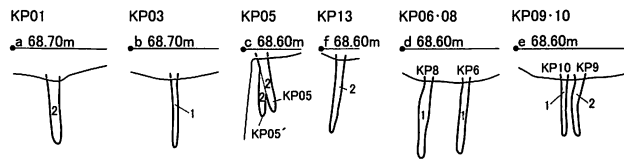
TP-93 (図IV-52 図版 27-9～28-2)

Vb層上位で楕円形の窪みと、その周囲にTa-d2パミスの混じった黒色土を確認したため、窪みの短軸に沿ってベルトを設定しVI層までトレンチ調査を行った。断面観察の結果、掘り上げ土と思われる層を確認したことから、Va層の調査と並行しながら掘り上げ土全体を検出し、範囲の記録を行った。それ以降の調査は「検出及び調査」の項で前述した手順で行った。掘り上げ土はTピットの両側に広い範囲で検出されており、1～4層はTピットの壁面崩落とともに掘り上げ土が流れ込んだものと思われる。また、Tピット横の掘り上げ土中から縄文時代中期後葉の土器が出土しており、本遺構はそれより若干新しい時代に構築されたものと考えられる。坑底面で8本の逆茂木跡を検出し、更に坑底面直上の壁面で工具痕を確認したが、道具の種類については判断できなかった。
(宮崎)

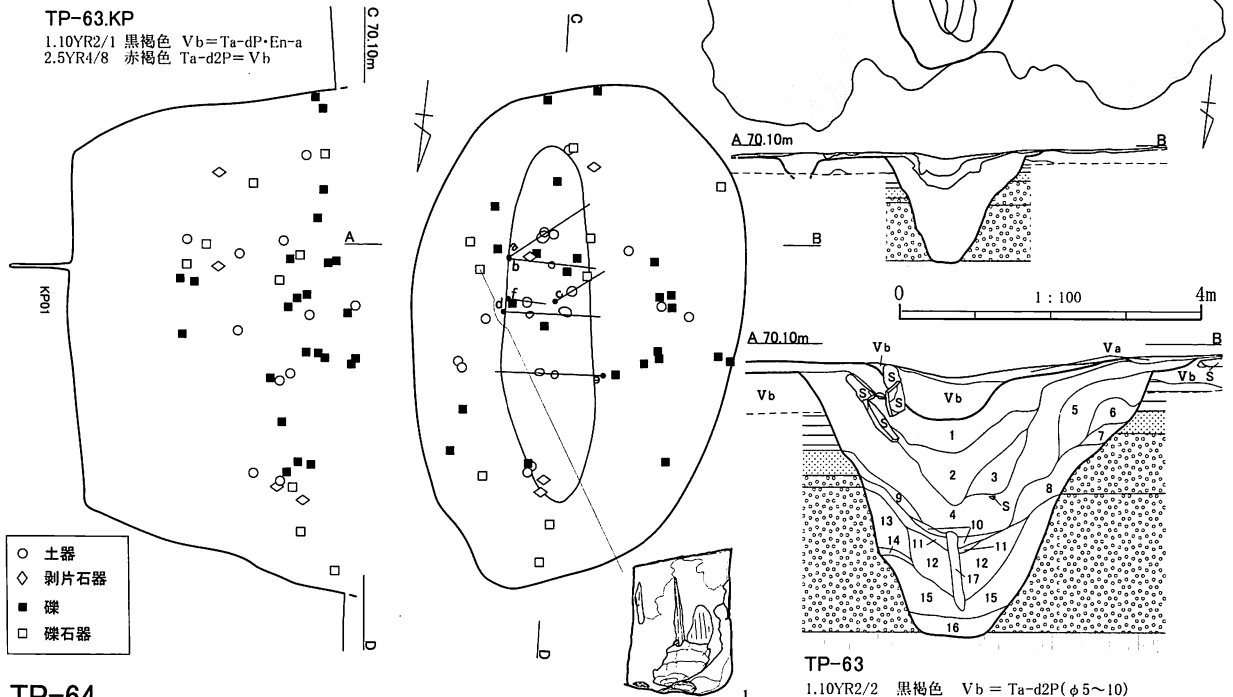
TP-98 (図IV-54 図版 28-11・12)

T-35・U-35・36区の境界付近でVI層精査中に検出した。長楕円形のTa-d2パミスを含んだ、Tピットとみられる黒色土の落ち込みと、重複する円形の黒色土の落ち込みを確認した。新旧関係を判断するためにそれぞれの間地点に当る位置で半截した。重複しているVP-26の覆土を掘り込んでいることからそれよりも新しい時期に構築されたと考えられるが、具体的な時期は不明である。断面を記録した後に完掘した。IV層を含む1・2層は根による攪乱で、3層はVP-26の覆土が流れ込んだとみられる。4～10層は崩落と流れ込みの堆積で、8層はTa-d1層を主体とすることから、北西側から大きな崩落が起こったことが分かる。
(宮塚翔)

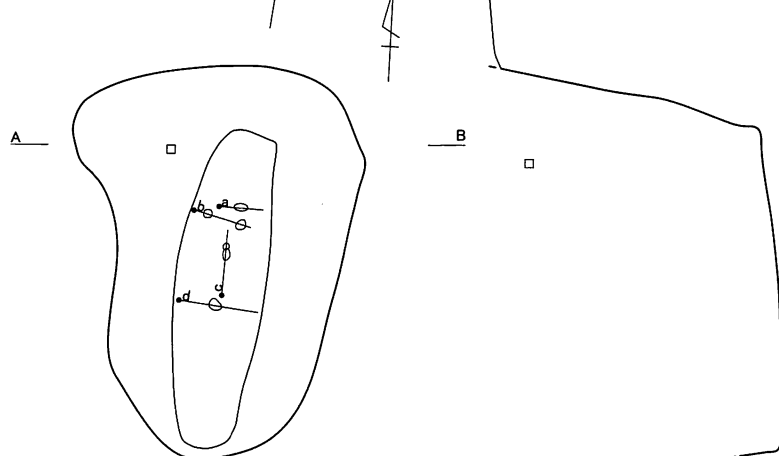
TP-63



TP-63.KP
 1.10YR2/1 黒褐色 Vb=Ta-dP・En-a
 2.5YR4/8 赤褐色 Ta-d2P=Vb

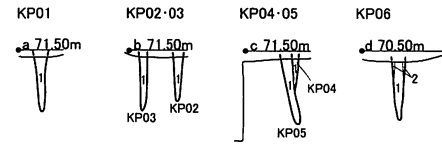
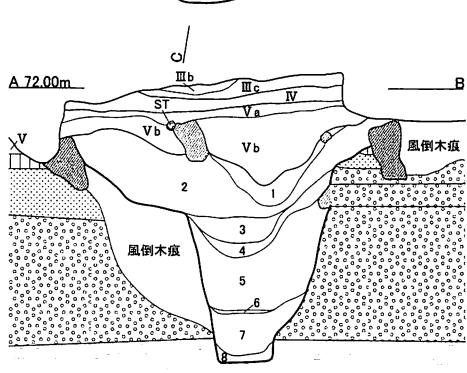


TP-64



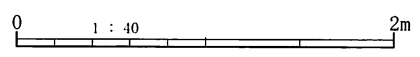
- TP-63
- 1.10YR2/2 黒褐色 Vb = Ta-d2P(φ5~10)
 - 2.10YR2/2 黒褐色 Vb + Ta-d2P(φ5~20 均一)
 - 3.10YR2/2 黒褐色 Vb ≡ Ta-d2P(φ3~5)
 - 4.10YR2/1 黒色 Vb ≡ Ta-d2P(φ5)
 - 5.10YR3/3 暗褐色 Vc~VI
 - 6.10YR3/4 暗褐色 VI
 - 7.10YR3/4 暗褐色 Ta-d1スコリア
 - 8.5YR4/8 赤褐色 Ta-d2L
 - 9.10YR2/2 黒褐色 Vb
 - 10.5YR4/8 赤褐色 Ta-d2P(φ5↓) = Vb
 - 11.10YR3/2 黒褐色 Vb ≡ Ta-d2P
 - 12.5YR4/8 赤褐色 Ta-d2P(φ10~30) ≡ Vb
 - 13.5YR4/8 赤褐色 Ta-d2P(φ5↓)
 - 14.10YR2/1 黒色 Vb
 - 15.5YR4/8 赤褐色 Ta-d2P(φ10~40)
 - 16.10YR2/1 黒色 Vb = Ta-d2P(φ5~10)
 - 17.10YR2/1 黒色 Vb ≡ Ta-d2P(φ5↓) しまりなし

- TP-64
- 1.10YR2/2 黒褐色 Vb ≡ Ta-d2P(φ5↓)
 - 2.10YR3/4 暗褐色 Ta-d1L + VI = Vb
 - 3.5YR4/8 赤褐色 Ta-d2L
 - 4.5YR2/4 極暗赤褐色 Ta-d2L - Vb(均一)
 - 5.5YR4/8 赤褐色 Ta-d2P(φ5~10)
 - 6.10YR2/2 黒褐色 Vb = Ta-d2P(φ5~10)
 - 7.10YR5/6 黄褐色 Ta-d2P(φ5~10)
 - 8.10YR2/2 黒褐色 Vb ≡ Ta-d2P(φ5~10)

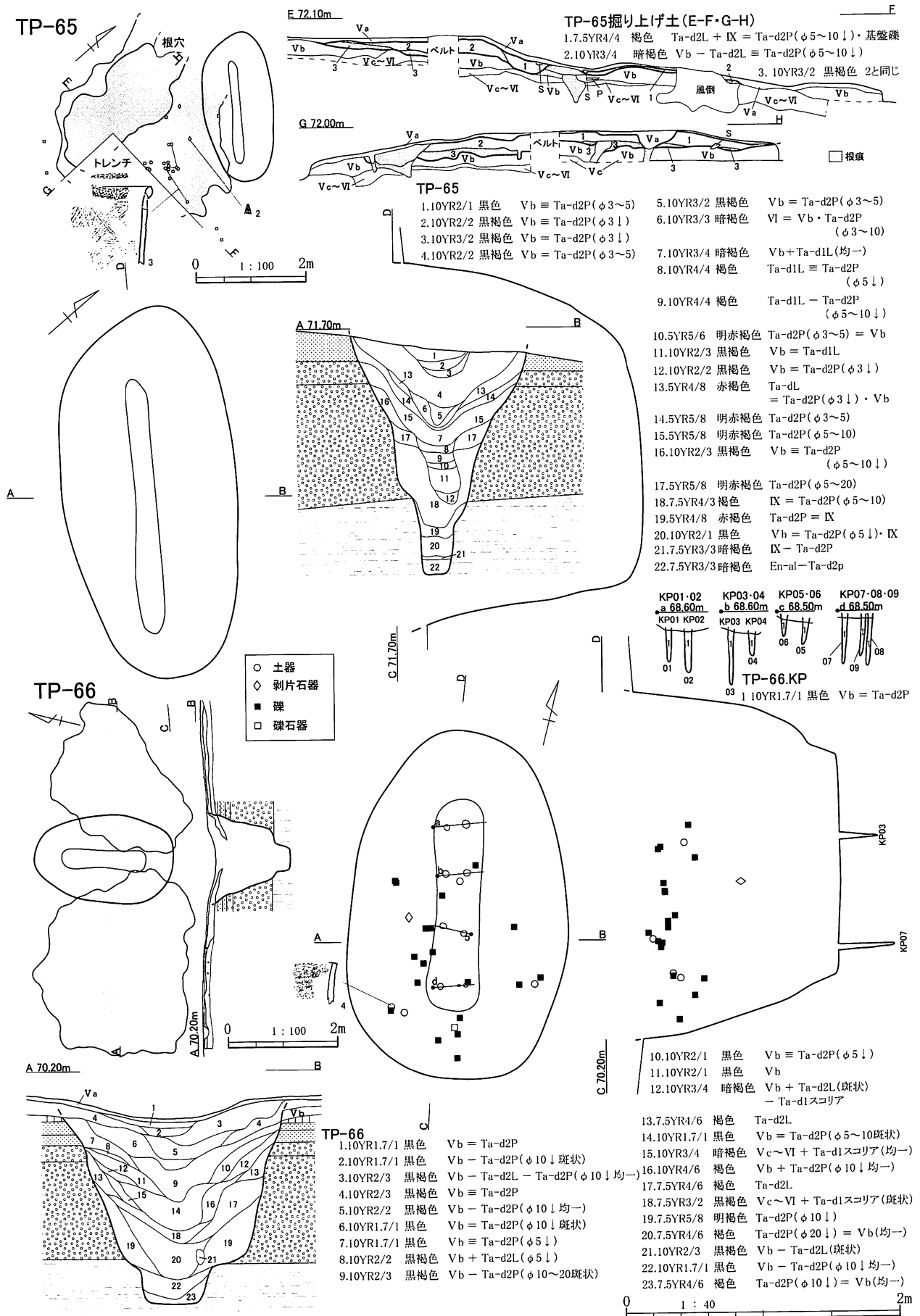


TP-64.KP
 1.10YR2/2 黒褐色 Vb
 2.5YR4/8 赤褐色 Ta-d2L

□ 礫石器 ■ 根痕

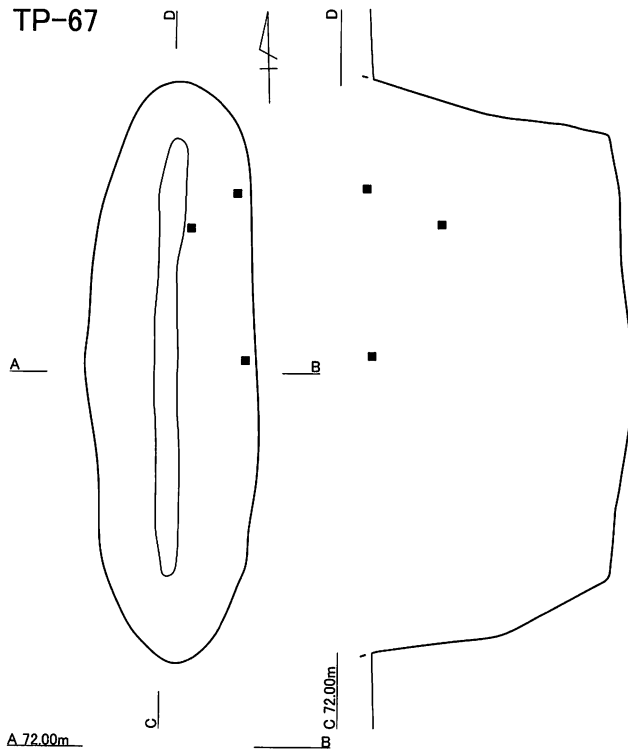


図IV-40 TP-63・64 平面及び断面図



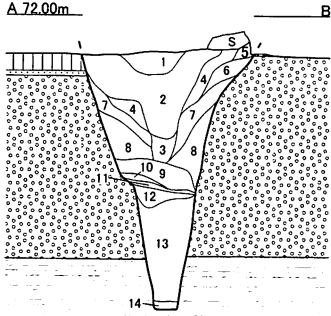
図IV-41 TP-65・66 平面及び断面図

TP-67

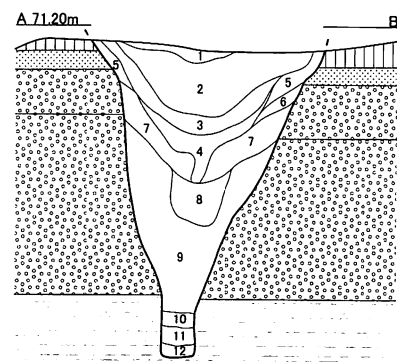
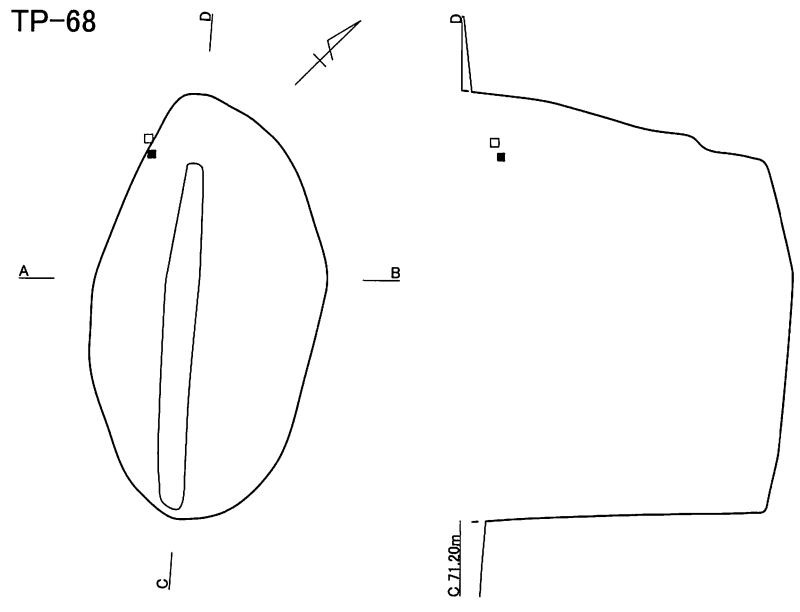


TP-67

- | | |
|----------------|---------------------------|
| 1.10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2P(φ5~20)・Ta-d1L |
| 2.10YR2/1 黒色 | Vb |
| 3.10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2P(φ3~5) しまりなし |
| 4.10YR2/3 黒褐色 | Vc~VI |
| 5.10YR4/4 褐色 | Ta-d1L |
| 6.5YR4/8 赤褐色 | Ta-d1スコリア |
| 7.5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2L |
| 8.5YR5/8 明赤褐色 | Ta-d2P(φ5~10) ≡ Vb |
| 9.10YR3/3 暗褐色 | Vb = Ta-d2P(φ5~10) |
| 10.5YR5/8 明赤褐色 | Ta-d2P(φ5~10) = Vb |
| 11.10YR2/1 黒色 | Vb |
| 12.5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2L = Ta-d2P(φ5~20)・Vb |
| 13.5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2P(φ10~20) = Vb |
| 14.10YR2/1 黒色 | Vb = Ta-d2P(φ5~10) |



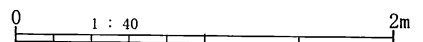
TP-68



TP-68

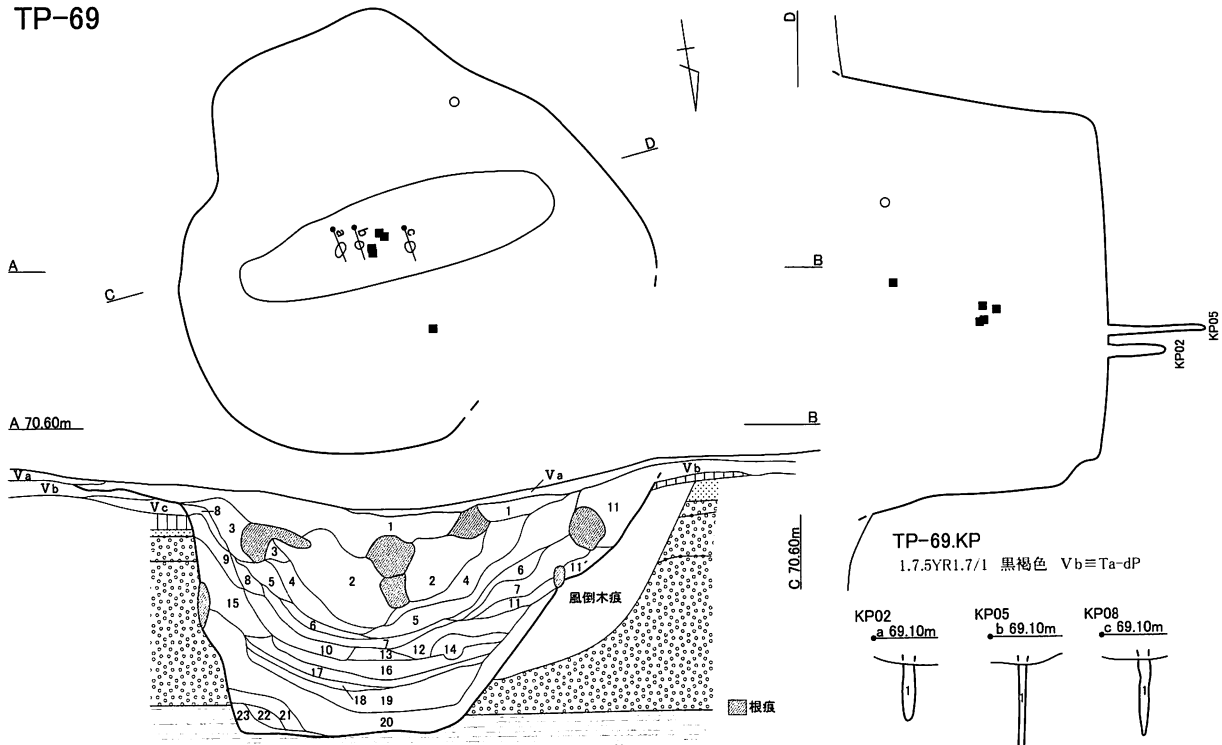
- | | |
|----------------|-------------------------------|
| 1.10YR2/3 黒褐色 | Vb = Ta-d1L
≡ Ta-d2P(φ3~5) |
| 2.10YR2/1 黒色 | Vb ≡ Ta-d2P(φ3~5) |
| 3.10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2P(φ5~10) |
| 4.10YR2/3 黒褐色 | Vb - Ta-d2P(φ5~10) |
| 5.10YR3/4 暗褐色 | VI |
| 6.5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2L |
| 7.5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2P(φ5~20) = Vb |
| 8.5YR3/6 暗赤褐色 | Ta-d2P(φ5~20) + Vb |
| 9.5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2P(φ5~20) |
| 10.10YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2P(φ5~10) |
| 11.5YR5/8 明赤褐色 | Ta-d2P(φ5~10) ≡ Vb |
| 12.10YR2/1 黒色 | Vb ≡ Ta-d2P(φ3~5) |

□ 礫石器
■ 礫



図IV-42 TP-67・68 平面及び断面図

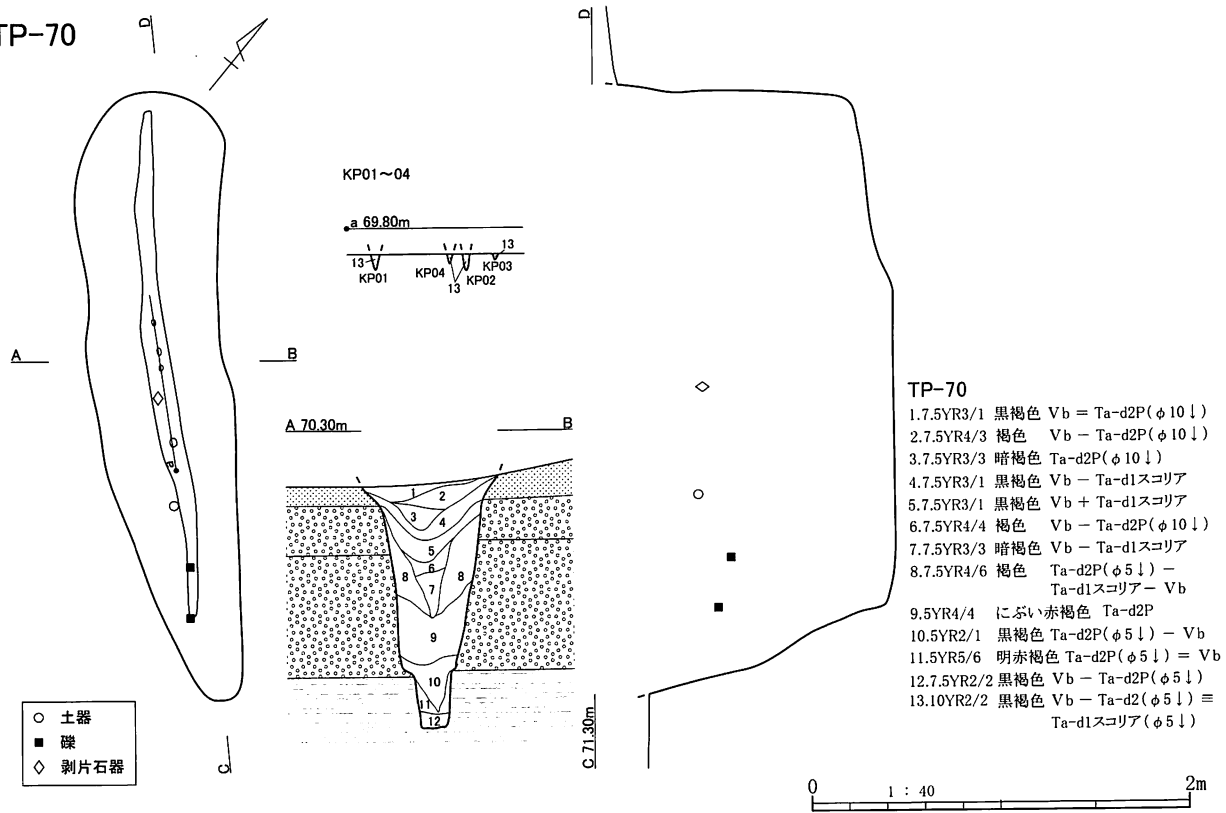
TP-69



TP-69

- | | | |
|---------------------------------------|---|--|
| 1.10YR2/3 黒褐色 Vb - Ta-d2P(φ10~20 斑状) | 9.10YR3/3 暗褐色 VI | 17.10YR2/1 黒色 Vb = Ta-d2L |
| 2.5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ10~20) = Vb(均一) | 10.10YR4/6 褐色 Ta-d1 ≡ Ta-d2L | 18.5YR3/6 暗赤褐色 Ta-d2L = Ta-d2P(φ10~20) |
| 3.10YR2/1 黒色 Vb | 11.10YR3/4 暗褐色 Vb + VI(均一) | 19.10YR2/2 黒褐色 Vb = Ta-d2P(φ5~20) |
| 4.10YR3/2 黒褐色 Vb = Ta-d2P(φ10 ↓ 斑状) | 11'.10YR4/4 褐色 Ta-d1L - Ta-d2L | 20.5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~20) = Vb(均一) |
| 5.10YR2/1 黒色 Vb ≡ Ta-d2P(φ5 ↓ 斑状) | 12.5YR4/8 赤褐色 Ta-d1 + Ta-d2L | 21.10YR2/1 黒色 Vb |
| 6.10YR2/3 黒褐色 Vb ≡ Ta-d2P(φ5 ↓) | 13.10YR2/2 黒褐色 Vb + Ta-d2P(φ10~20) | 22.10YR2/2 黒褐色 Vb = Ta-d2P(φ5~20 均一) |
| 7.7.5YR3/4 暗褐色 Vc ~ VI ≡ Ta-d2P(φ5 ↓) | 14.7.5YR3/4 暗褐色 Vb = Ta-d2L | 23.10YR3/3 暗褐色 Ta-d2P(φ3~10) |
| 8.10YR2/3 黒褐色 Vc | 15.5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2L | |
| | 16.5YR3/6 暗赤褐色 Ta-d2L = Vb · Ta-d2P(φ10~20) | |

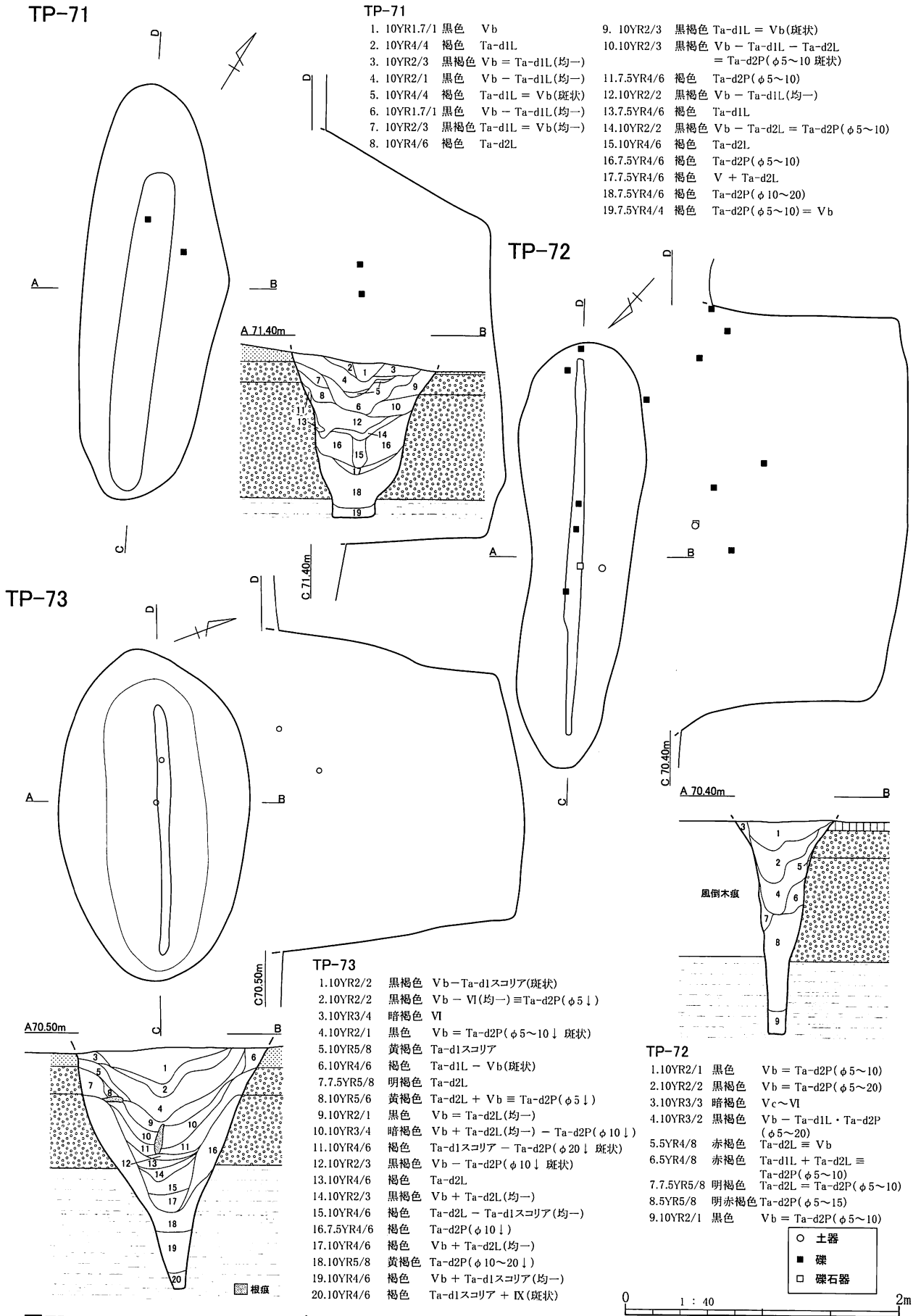
TP-70



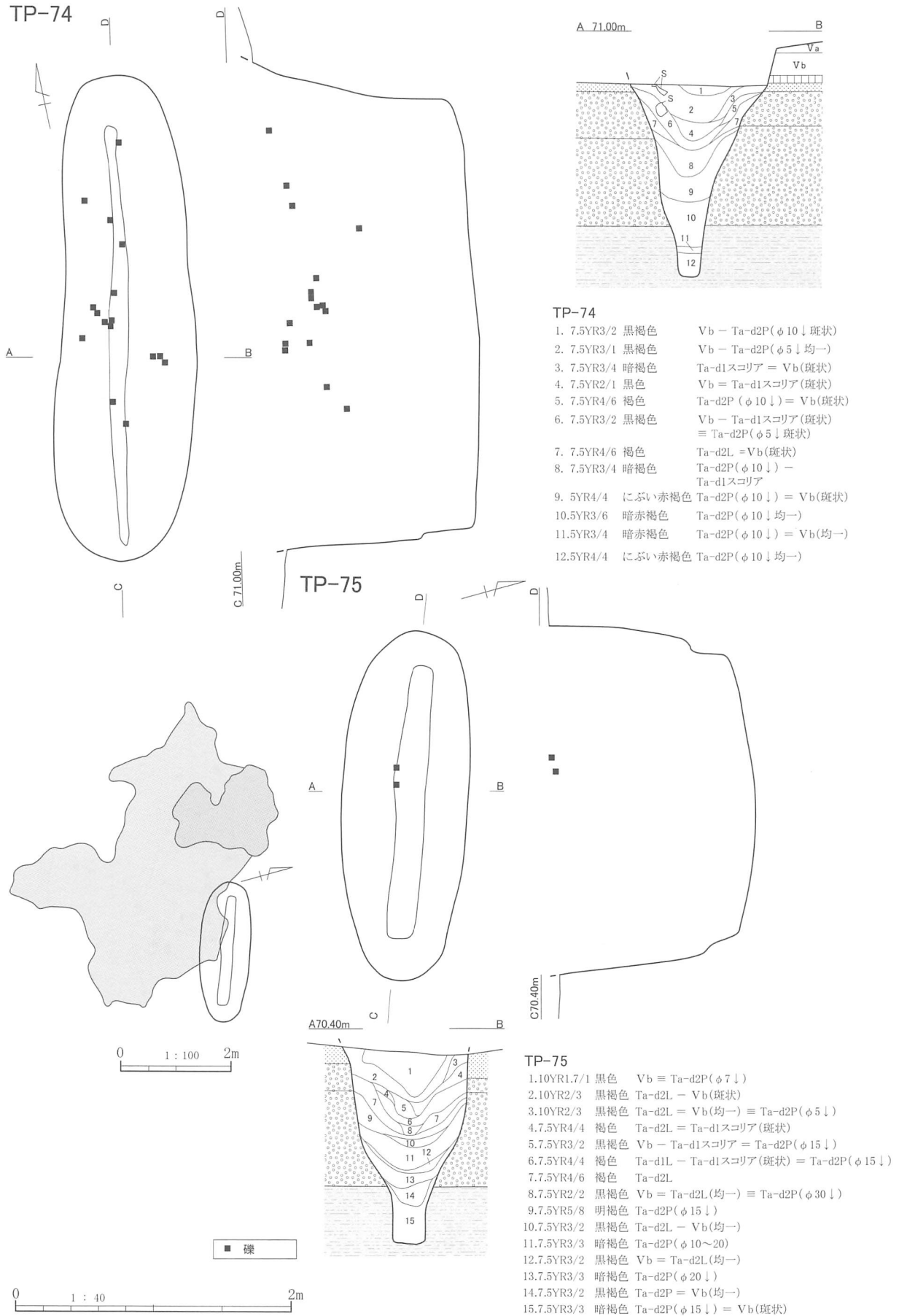
TP-70

- | |
|---|
| 1.7.5YR3/1 黒褐色 Vb = Ta-d2P(φ10 ↓) |
| 2.7.5YR4/3 褐色 Vb - Ta-d2P(φ10 ↓) |
| 3.7.5YR3/3 暗褐色 Ta-d2P(φ10 ↓) |
| 4.7.5YR3/1 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア |
| 5.7.5YR3/1 黒褐色 Vb + Ta-d1スコリア |
| 6.7.5YR4/4 褐色 Vb - Ta-d2P(φ10 ↓) |
| 7.7.5YR3/3 暗褐色 Vb - Ta-d1スコリア |
| 8.7.5YR4/6 褐色 Ta-d2P(φ5 ↓) - Ta-d1スコリア - Vb |
| 9.5YR4/4 にぶい赤褐色 Ta-d2P |
| 10.5YR2/1 黒褐色 Ta-d2P(φ5 ↓) - Vb |
| 11.5YR5/6 明赤褐色 Ta-d2P(φ5 ↓) = Vb |
| 12.7.5YR2/2 黒褐色 Vb - Ta-d2P(φ5 ↓) |
| 13.10YR2/2 黒褐色 Vb - Ta-d2(φ5 ↓) ≡ Ta-d1スコリア(φ5 ↓) |

図IV-43 TP-69・70 平面及び断面図

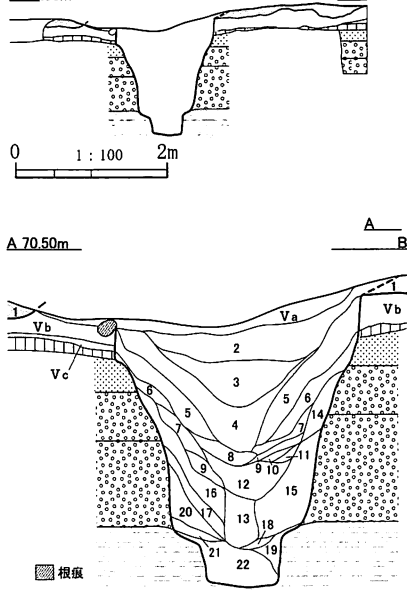


図IV-44 TP-71 ~ 73 平面及び断面図

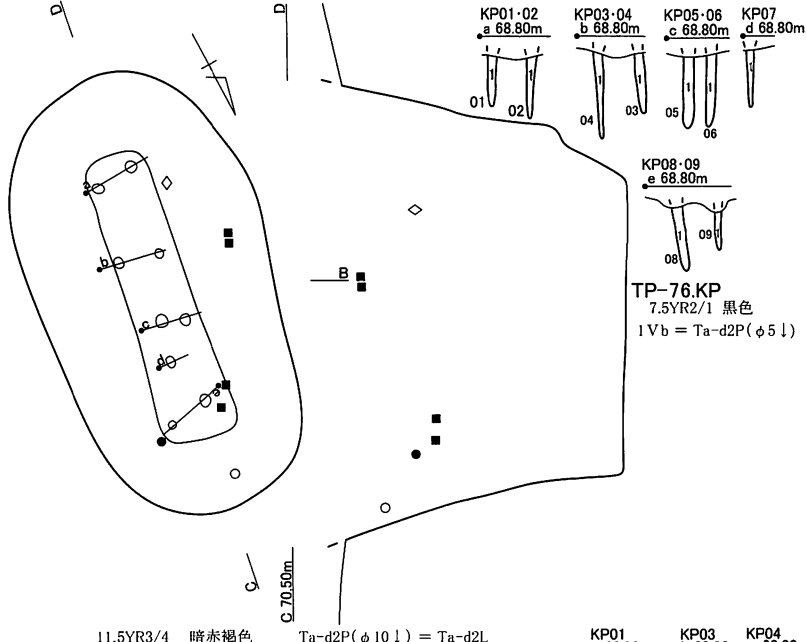


図IV-45 TP-74・75 平面及び断面図

TP-76

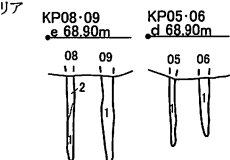
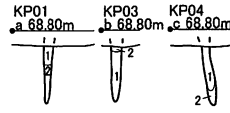


- TP-76
- 1. 7.5YR2/1 黒色 Vb = Ta-d2P(φ10↓)
 - 2. 7.5YR2/1 黒色 Vb = Ta-d2P(φ10↓) = Ta-d1スコリア
 - 3. 7.5YR3/1 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア = Ta-d2P(φ10↓)
 - 4. 7.5YR2/1 黒色 Vb - Ta-d2P(φ20↓斑状) = Ta-d1スコリア
 - 5. 7.5YR2/1 黒色 Vb = Ta-d1スコリア = Ta-d2P(φ5↓)
 - 6. 10YR3/2 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア = Ta-d2L
 - 7. 10YR3/3 暗褐色 Ta-d1スコリア = Ta-d2(φ5↓)
 - 8. 10YR3/1 黒褐色 Vb - Ta-d2P(φ10↓) = Ta-d1スコリア
 - 9. 10YR3/2 黒褐色 Ta-d1スコリア - Ta-d2P(φ10↓) = Vb
 - 10. 10YR3/3 暗褐色 Ta-d1スコリア(φ5↓) = Vb

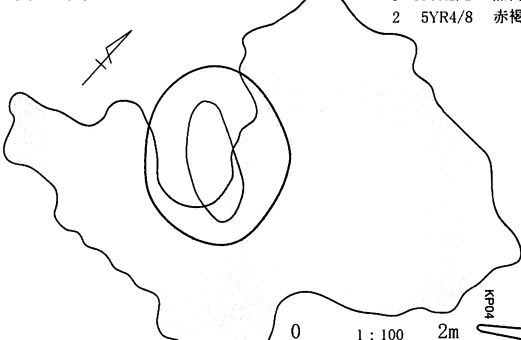


TP-76.KP
7.5YR2/1 黒色
1 Vb = Ta-d2P(φ5↓)

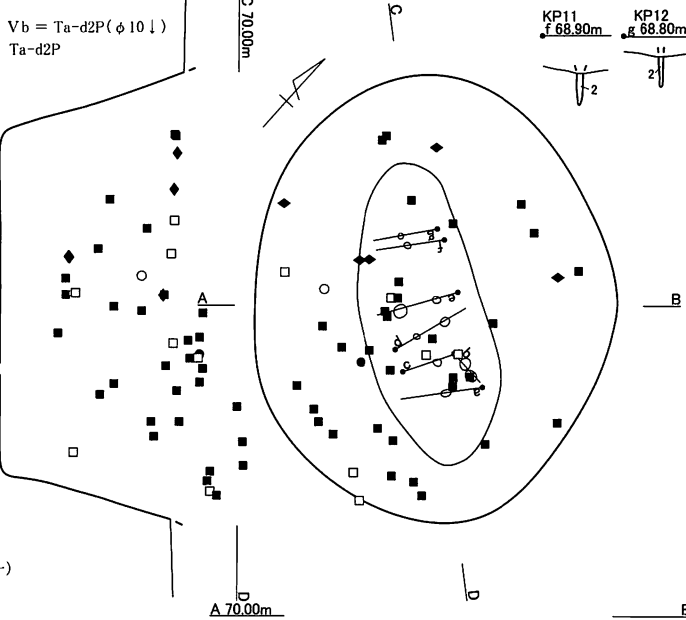
- 11. 5YR3/4 暗赤褐色 Ta-d2P(φ10↓) = Ta-d2L
- 12. 7.5YR3/1 黒褐色 Vb - Ta-d1スコリア = Ta-d2P(φ10↓)
- 13. 7.5YR2/2 黒褐色 Ta-d1スコリア = Ta-d2P(φ10↓)
- 14. 10YR4/4 にぶい赤褐色 Ta-d2L = Vb
- 15. 10YR4/4 にぶい赤褐色 Ta-d2P(φ10↓) = Vb
- 16. 5YR4/4 にぶい赤褐色 Ta-d2P(φ10↓) = Ta-d2L = Ta-d1スコリア
- 17. 5YR3/4 暗赤褐色 Ta-d2P(φ10↓) = Vb
- 18. 5YR4/4 にぶい赤褐色 Ta-d2P(φ10↓) = Ta-d2L
- 19. 5YR4/6 赤褐色 Ta-d2P(φ10↓) = Vb
- 20. 5YR3/4 暗赤褐色 Ta-d2P(φ10↓) = Ta-d1スコリア
- 21. 7.5YR3/1 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア
- 22. 7.5YR3/2 黒褐色 Ta-d2P(φ10↓) + Ta-d1スコリア = Vb



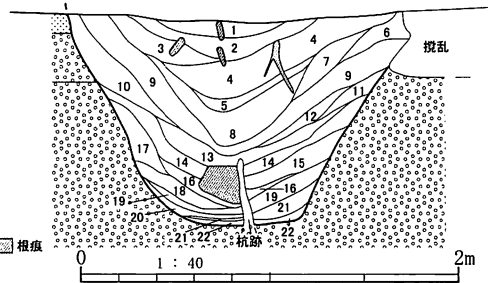
TP-77



- TP-77
- 1. 10YR2/3 黒褐色 Vb ≡ Ta-d2P(φ7↓)
 - 2. 10YR2/3 黒褐色 Vb - Ta-d2L(均一) = Ta-d2P(φ10↓斑状)
 - 3. 10YR3/4 暗褐色 Vb + Ta-d2L(均一) ≡ Ta-d2P(φ10~20.斑状)
 - 4. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2L - Vb(斑状) - Ta-d2P(φ20↓斑状)
 - 5. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb - Ta-d2L(均一) - Ta-d2P(φ10↓斑状)
 - 6. 10YR2/3 黒褐色 Vb - Ta-d2L(均一) ≡ Ta-d2P
 - 7. 10YR2/2 黒褐色 Vb = Ta-d2L(斑状)(φ10↓斑状)
 - 8. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-d2P(φ20↓) - Vb = Ta-d2L(φ10~20↓均一)
 - 9. 7.5YR3/1 黒褐色 Vb - Ta-d2L(均一) = Ta-d2P(斑状)
 - 10. 10YR2/3 黒褐色 Ta-d1L - Ta-d2L(均一) = Vb(斑状)
 - 11. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d1L
 - 12. 7.5YR4/2 灰褐色 Ta-d1スコリア ≡ Vb(斑状)
 - 13. 7.5YR3/1 黒褐色 Vb - Ta-d2L(均一) = Ta-d2P(φ20↓斑状)
 - 14. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d1スコリア ≡ Ta-d2P(φ10↓斑状)
 - 15. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2L + Ta-d2P(φ10↓)(均一) = Vb(斑状)
 - 16. 10YR2/2 黒褐色 Vb = Ta-d2L(均一) = Ta-d2P(φ10↓)
 - 17. 7.5YR4/4 褐色 Ta-d2L = Vb(均一)
 - 18. 7.5YR4/3 褐色 Ta-d2L + Ta-d1スコリア
 - 19. 7.5YR3/1 黒褐色 Vb - Ta-d2L(斑状) - Ta-d1スコリア(斑状)
 - 20. 7.5YR3/4 暗褐色 Ta-d2L - Vb(均一) = Ta-d2P(φ10↓斑状)
 - 21. 7.5YR2/3 極暗褐色 Vb = Ta-d2L(均一)
 - 22. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d1スコリア = Ta-d2P(φ10↓斑状)

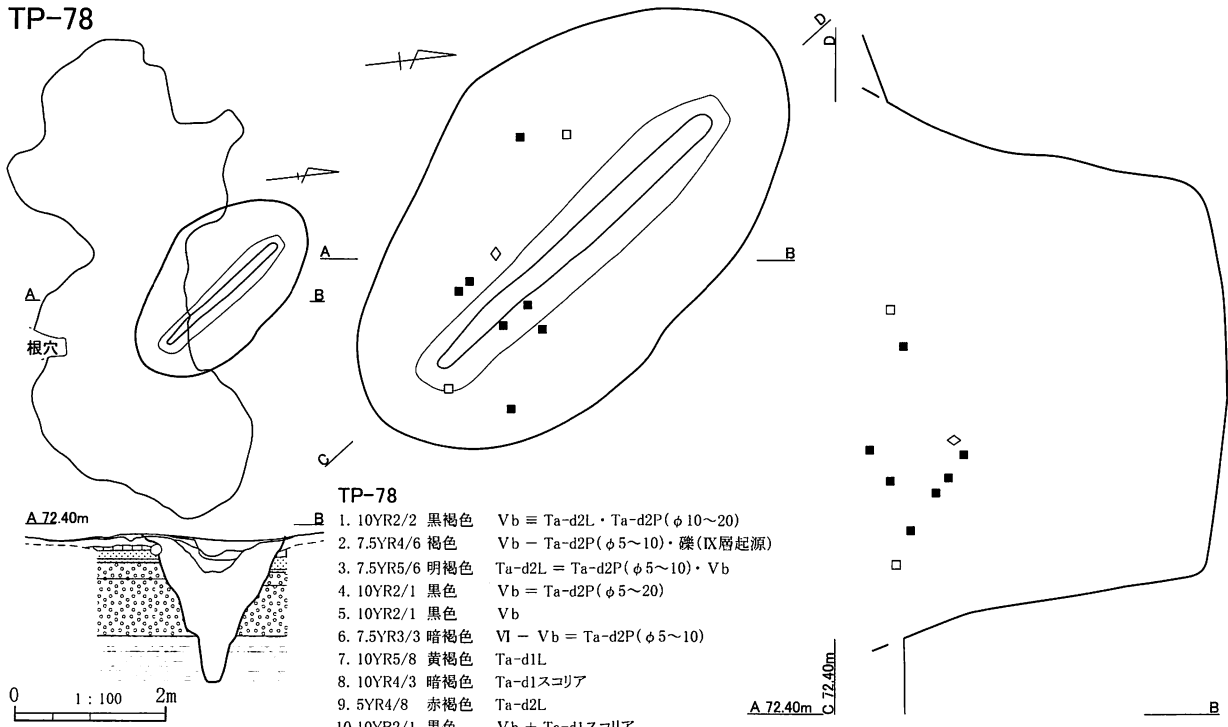


- 土器
- 土製品
- ◆ フレイク・チップ
- ◇ 剥片石器
- 礫



図IV-46 TP-76・77平面及び断面図

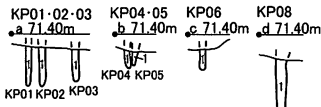
TP-78



TP-78

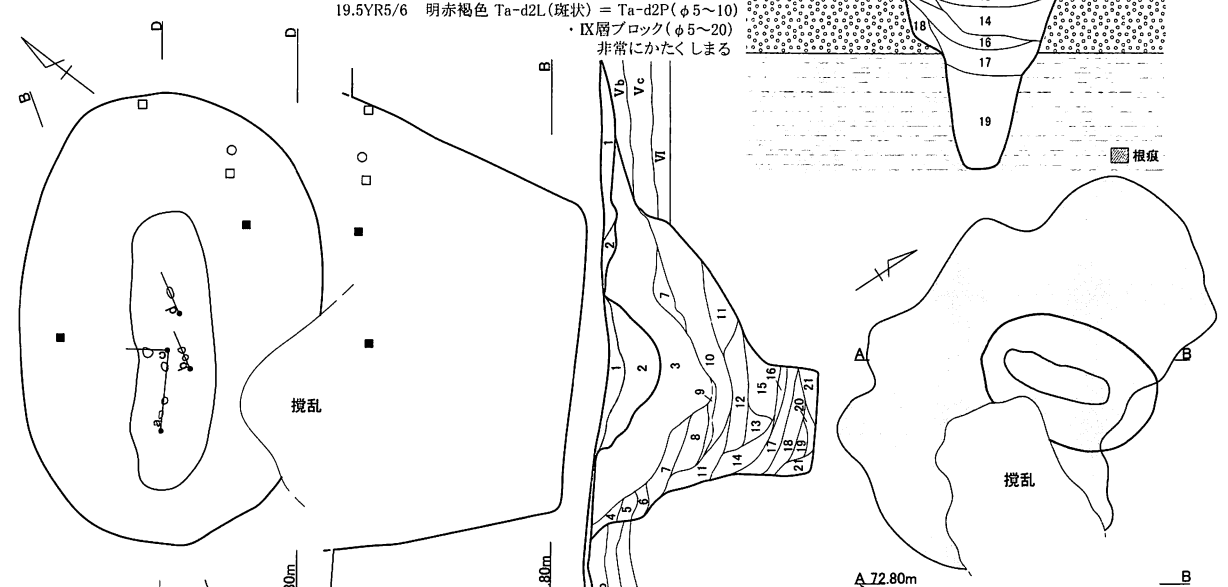
- | | |
|-----------------|--------------------------------|
| 1. 10YR2/2 黒褐色 | Vb ≡ Ta-d2L・Ta-d2P(φ10~20) |
| 2. 7.5YR4/6 褐色 | Vb - Ta-d2P(φ5~10)・礫(IX層起源) |
| 3. 7.5YR5/6 明褐色 | Ta-d2L = Ta-d2P(φ5~10)・Vb |
| 4. 10YR2/1 黒色 | Vb = Ta-d2P(φ5~20) |
| 5. 10YR2/1 黒色 | Vb |
| 6. 7.5YR3/3 暗褐色 | VI - Vb = Ta-d2P(φ5~10) |
| 7. 10YR5/8 黄褐色 | Ta-d1L |
| 8. 10YR4/3 暗褐色 | Ta-d1スコリア |
| 9. 5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2L |
| 10. 10YR2/1 黒色 | Vb + Ta-d1スコリア |
| 11. 10YR2/3 黒褐色 | Vb - Ta-d1L = Ta-d2L |
| 12. 5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2P(φ5~20) |
| 13. 10YR2/3 黒褐色 | Vb = Ta-d1スコリア |
| 14. 5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2L ≡ Vb |
| 15. 5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2P(φ5~20) |
| 16. 10YR2/3 黒褐色 | Vb = Ta-d1スコリア ≡ Ta-d2P(φ5~20) |
| 17. 5YR3/6 暗赤褐色 | Ta-d2P(φ5~20) = Ta-d2L ≡ Vb |
| 18. 5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2P(φ5~20) |
| 19. 5YR5/6 明赤褐色 | Ta-d2L(斑状) = Ta-d2P(φ5~10) |
- ・IX層ブロック(φ5~20)
非常にかたくしまる

TP-79



TP-79.KP

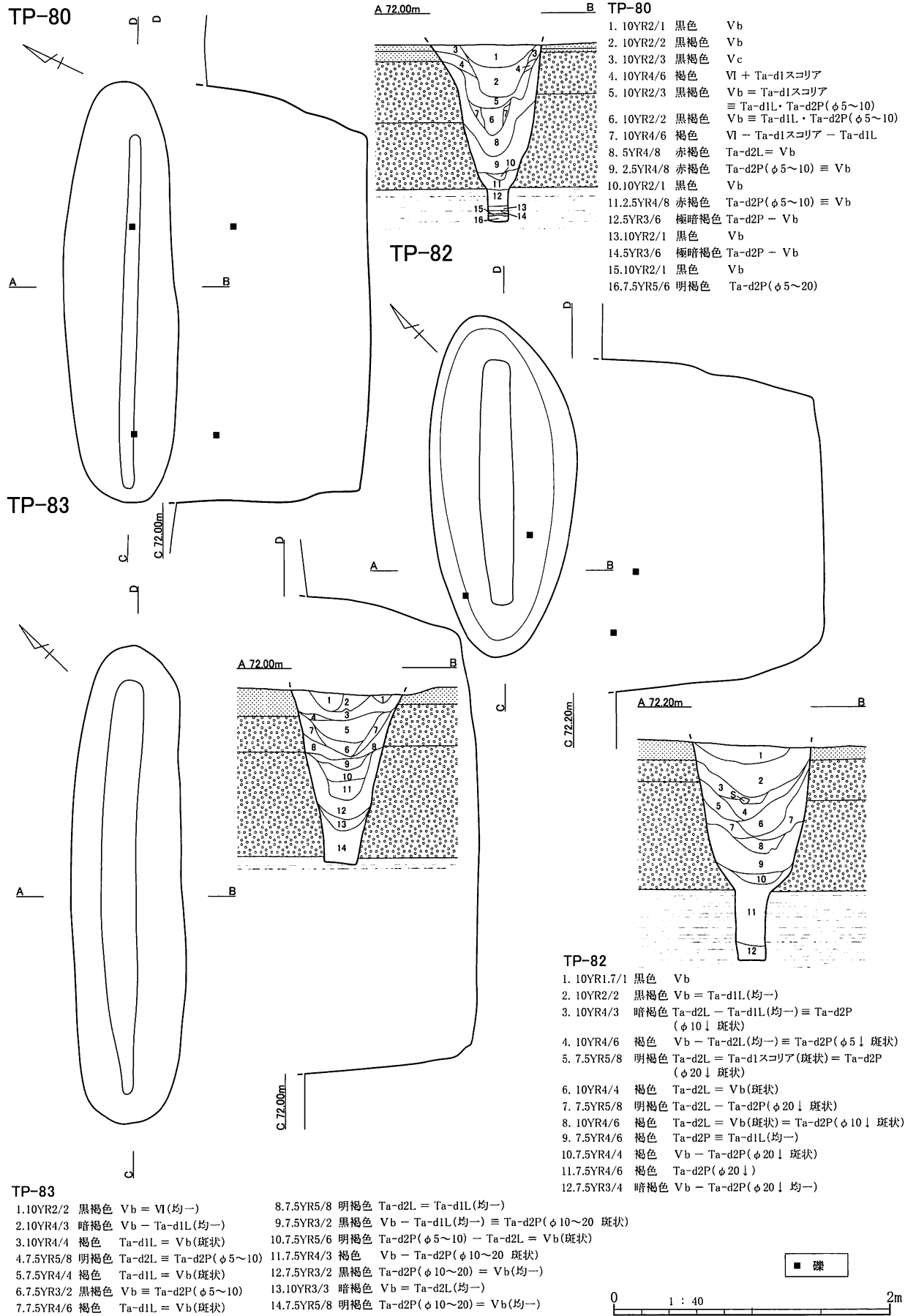
1. 10YR2/2 黒褐色 Vb



TP-79

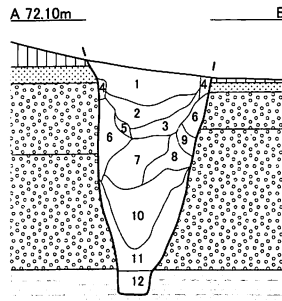
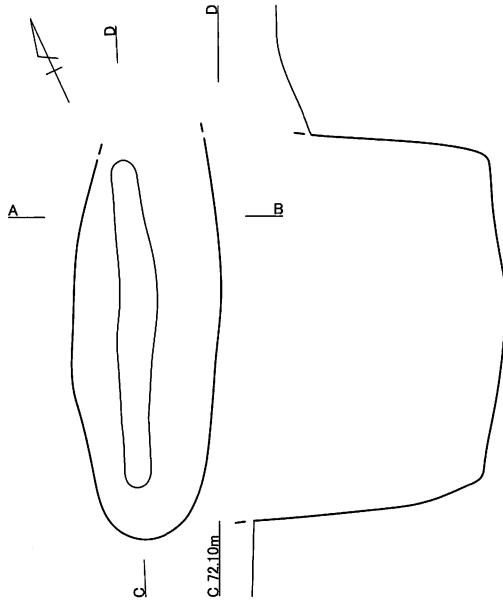
- | | | | |
|-----------------|--------------------------------|--------------------|-----------------------|
| 1. 10YR4/4 褐色 | VI = Vb(均一) ≡ Ta-d2P(φ5~10 均一) | 12. 10YR3/2 黒褐色 | Vc = Ta-d2P(φ5~10 均一) |
| 2. 10YR5/6 黄褐色 | VI ≡ Vb(均一) ≡ Ta-d2P(φ5~20 均一) | 13. 10YR2/2 黒褐色 | V - Ta-d2P(φ5~10 均一) |
| 3. 10YR2/2 黒褐色 | Vb - Ta-d2P(φ5~10 均一) | 14. 7.5YR3/3 暗褐色 | Ta-d2P(φ5~10) = V(均一) |
| 4. 10YR3/3 暗褐色 | Vb ≡ Ta-d2P(φ5~10 均一) | 15. 7.5YR5/8 明褐色 | Ta-d2L ≡ V(均一) |
| 5. 10YR6/8 明黄褐色 | VI = Ta-d1L(均一) | 16. 10YR3/2 黒褐色 | Ta-d2L = V(均一) |
| 6. 10YR2/1 黒色 | Vb ≡ Ta-d2P(φ5~10 均一) | 17. 10YR5/6 黄褐色 | Vc = Ta-d2P(φ5~10 均一) |
| 7. 10YR4/6 褐色 | Ta-d1L ≡ Vb(均一) | 18. 10YR2/2 黒褐色 | Vc - Ta-d2P(φ5~10 均一) |
| 8. 10YR2/2 黒褐色 | Vb ≡ Ta-d1L(均一) | 19. 10YR4/3 にぶい黄褐色 | Ta-d2P(φ5~10) = V(均一) |
| 9. 7.5YR4/4 褐色 | Ta-d1L = Vb(均一) | 20. 10YR2/1 黒色 | V ≡ Ta-d2P(φ5~10 均一) |
| 10. 10YR2/1 黒色 | Vb ≡ Ta-d2P(φ5~10 均一) | 21. 10YR3/4 暗褐色 | V = Ta-d2P(φ5~10 均一) |
| 11. 7.5YR6/8 橙色 | Ta-dL ≡ Ta-d2P(φ5~10 斑状) | | |

図IV-47 TP-78・79平面及び断面図



図IV-48 TP-80・82・83 平面及び断面図

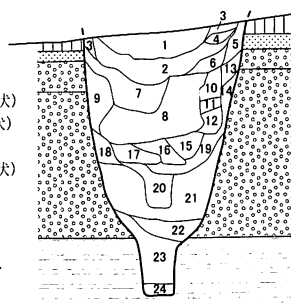
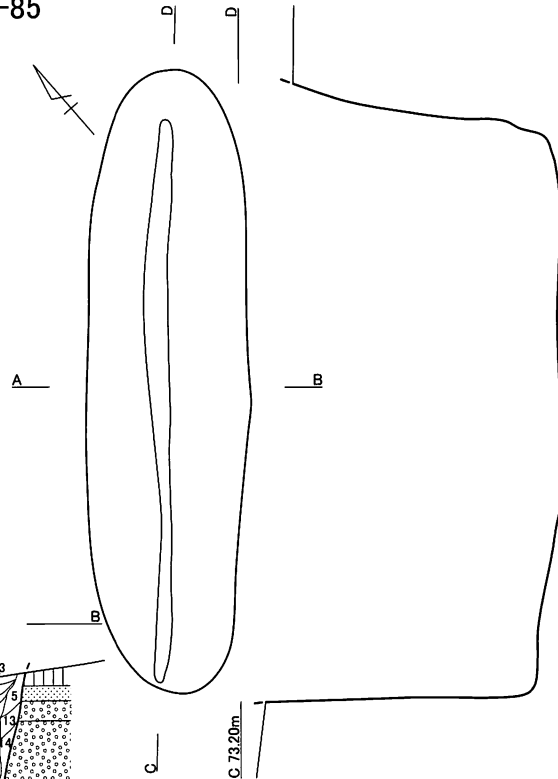
TP-84



TP-84

- 1. 10YR2/1 黒色 Vb ≡ Ta-d2P(φ3~5)
- 2. 10YR2/1 黒色 Vb ≡ Ta-d2P(φ3~20)
- 3. 10YR2/3 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア
- 4. 10YR4/4 褐色 Ta-d1スコリア
- 5. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2L = Vb
- 6. 7.5YR6/8 橙色 Ta-d2L ≡ Vb
- 7. 10YR2/3 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア・Ta-d2P(φ10~20)
- 8. 10YR4/4 褐色 Ta-d1スコリア ≡ Vb
- 9. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2L = Ta-d1スコリア
- 10. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P ≡ Vb(斑状)
- 11. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P
- 12. 10YR2/1 黒色 Vb

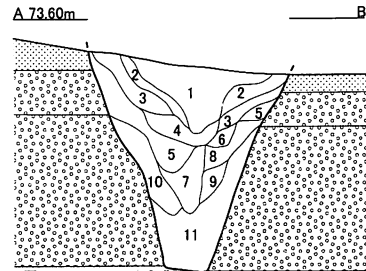
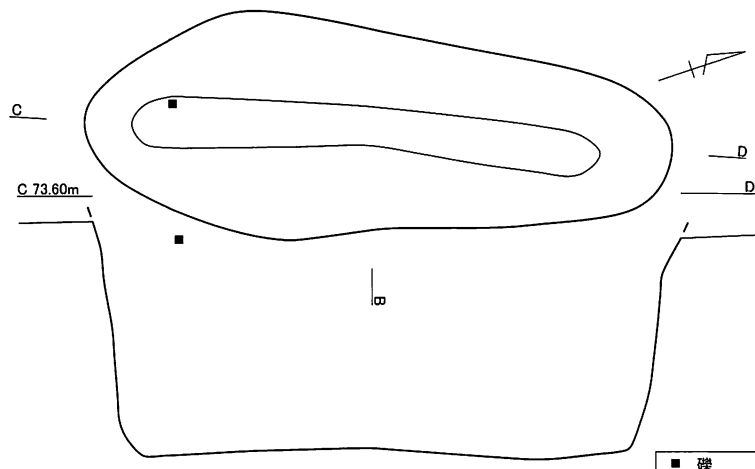
TP-85



TP-85

- 1. 10YR2/1 黒色 Vb ≡ Ta-d2P(φ3~5)
- 2. 10YR2/1 黒色 Vb ≡ Ta-d2P(φ3~20)
- 3. 10YR2/3 黒褐色 Vb = Ta-d1L(均一)
- 4. 10YR4/4 褐色 Ta-d1スコリア = Vb(均一)
- 5. 10YR4/4 褐色 Ta-d1スコリア
- 6. 10YR2/3 黒褐色 Vb ≡ Ta-d1スコリア(斑状)
- 7. 10YR2/1 黒色 Vb = Ta-d1スコリア(斑状) = Ta-d2P(φ5~20)
- 8. 10YR2/1 黒色 Vb = Ta-d1L(斑状) ≡ Ta-d2P(φ10↓)
- 9. 7.5YR5/6 明褐色 Ta-d1L - Vb(斑状) = Ta-d2P(φ20↓斑状)
- 10. 10YR4/4 褐色 Vb - Ta-d2L(均一) ≡ Ta-d2P(φ10~20)
- 11. 10YR4/4 褐色 Vb - Ta-d2L(均一)
- 12. 10YR2/3 黒褐色 Vb - Ta-d2P(φ5~10均一)
- 13. 7.5YR6/8 橙色 Ta-d2L = Vb(斑状)
- 14. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2P = Ta-d2L(斑状)
- 15. 7.5YR5/6 明褐色 Vb - Ta-d2L(斑状)
- 16. 10YR2/1 黒色 Vb ≡ Ta-d2L(斑状)
- 17. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2P = Vb(均一)
- 18. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-d2P(φ5~15) ≡ Vb
- 19. 5YR2/3 黒褐色 Vb = Ta-d2P(φ3~5均一)
- 20. 10YR2/3 黒褐色 Ta-d2P(φ5~20) - Vb(斑状)
- 21. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2P(φ3~20) = Vb(斑状)
- 22. 10YR2/1 黒色 Vb = Ta-d2P(φ5~10↓)
- 23. 10YR3/2 黒褐色 Ta-d2P(φ3~10) = Vb(斑状)
- 24. 10YR2/1 黒色 Vb

TP-86

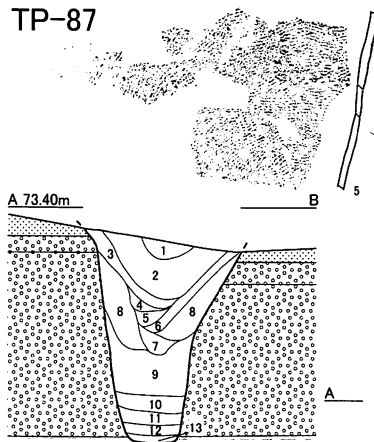


TP-86

- 1. 10YR2/1 黒色 Vb ≡ Ta-d2P(φ3~5)
- 2. 10YR2/3 黒褐色 Vb ~ Vc
- 3. 10YR5/8 黄褐色 Ta-d1L = Ta-d1スコリア
- 4. 10YR2/3 黒褐色 Vb = Ta-d1L
- 5. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2L
- 6. 10YR5/8 黄褐色 Ta-d1スコリア = Ta-d2L
- 7. 10YR2/2 黒褐色 Vb = Ta-d2L ≡ Ta-d2P
- 8. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2L = Ta-d2P
- 9. 5YR3/6 暗赤褐色 Ta-d2L = Vb
- 10. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2L = Ta-d2P(φ5~10)
- 11. 5YR3/6 暗赤褐色 Ta-d2P(φ5~10)

図IV-49 TP-84 ~ 86 平面及び断面図

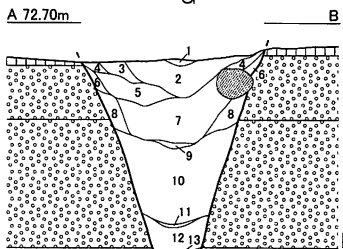
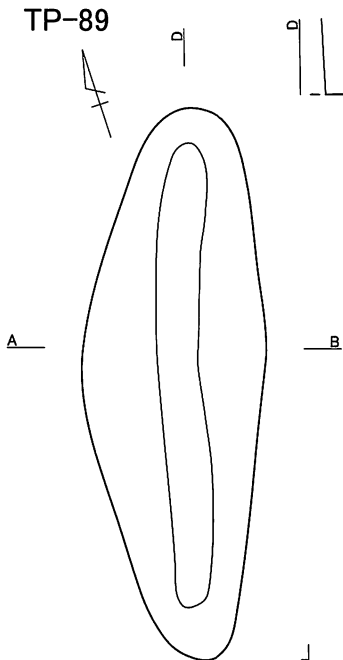
TP-87



TP-87

- | | |
|-------------------|--|
| 1. 7.5YR3/2 黒褐色 | Vb = Vc(均一) |
| 2. 7.5YR2/1 黒色 | Vb |
| 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 | Vb - Ta-d2L(斑状) |
| 4. 7.5YR4/4 褐色 | Ta-d2L = Vb(均一) |
| 5. 7.5YR3/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2L(斑状) |
| 6. 7.5YR4/4 褐色 | Ta-d2L = Ta-d1スコリア
(斑状) = Vb(斑状) |
| 7. 7.5YR3/3 暗褐色 | Vb - Ta-d2L(均一) = Ta-d2P
(φ 10~20 斑状) |
| 8. 7.5YR4/6 褐色 | Ta-d2L = Vb(斑状) |
| 9. 5YR3/4 赤褐色 | Ta-d2P(φ 5~20) = Vb(均一) |
| 10. 7.5YR2/3 極暗褐色 | Vb = Ta-d2P(φ 5~10 斑状) |
| 11. 7.5YR4/4 褐色 | Ta-d2L ≡ Vb(均一) |
| 12. 7.5YR2/2 黒褐色 | Vb = Ta-d2P(φ 10 ↓ 斑状) |
| 13. 5YR3/2 暗赤褐色 | Ta-d2P ≡ Vb(斑状) |

TP-89



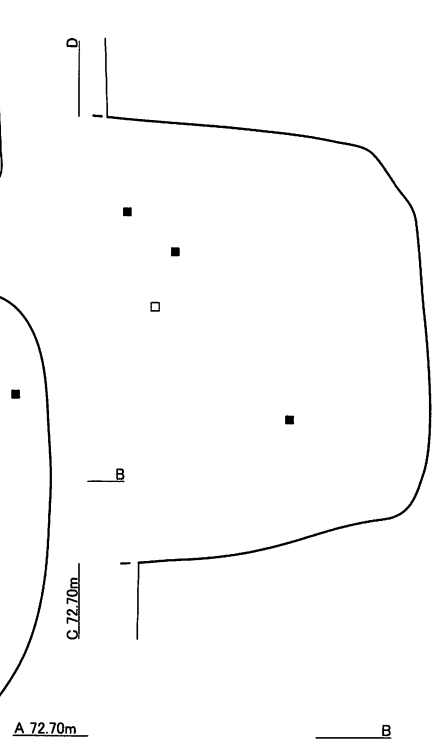
TP-89

- | | |
|-----------------|---|
| 1. 7.5YR6/8 橙色 | Ta-d1L = Ta-d1スコリア |
| 2. 10YR2/1 黒色 | Vb ≡ Ta-d2L |
| 3. 10YR3/3 暗褐色 | VI ≡ Vb |
| 4. 10YR6/6 明黄褐色 | Ta-d1L = Ta-d1スコリア |
| 5. 10YR4/6 褐色 | Ta-d1L ≡ Ta-d1スコリア |
| 6. 7.5YR4/6 褐色 | Ta-d1スコリア = Ta-d1L |
| 7. 10YR2/2 黒褐色 | Vb - Ta-d1L・Ta-d1スコリア
= Ta-d2P(φ 5~15) |
| 8. 5YR5/8 明赤褐色 | Ta-d2L |
| 9. 5YR5/8 明赤褐色 | Ta-d2L |
| 10. 5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2P(φ 3~20) |
| 11. 10YR2/1 黒色 | Vb |
| 12. 5YR4/8 赤褐色 | Ta-d2P(φ 5~20) ≡ Vb |
| 13. 10YR2/1 黒色 | Vb |

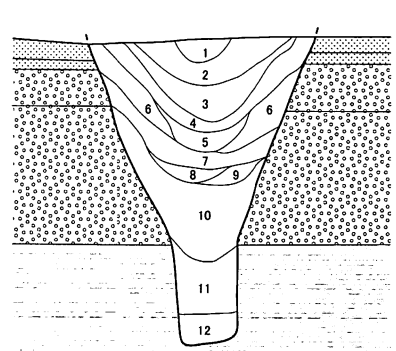
TP-88

- | | |
|-------------------|-------------------------------------|
| 1. 10YR1.7/1 黒色 | Vb |
| 2. 10YR2/3 黒褐色 | Vb = Vc(均一) |
| 3. 7.5YR4/3 褐色 | Vb = VI(斑状) |
| 4. 10YR4/4 褐色 | Vb - VI(斑状) |
| 5. 7.5YR4/4 褐色 | Vb - VI(斑状) = Ta-d2P
(φ 5~10 斑状) |
| 6. 7.5YR5/6 明褐色 | Ta-d2L = Vb = Ta-d2P
(φ 10 ↓ 斑状) |
| 7. 7.5YR5/8 明褐色 | Ta-d2P(φ 3~15) = Vb(斑状) |
| 8. 10YR4/1 褐灰色 | VI |
| 9. 7.5YR4/6 褐色 | Ta-d2L = VI(均一) |
| 10. 5YR4/4 にぶい赤褐色 | Ta-d2P(φ 3~10) |
| 11. 7.5YR3/4 暗褐色 | Ta-d2P(φ 3~10) =
Ta-d1スコリア(均一) |
| 12. 10YR3/2 黒褐色 | Ta-d1スコリア = Ta-d2P(均一) |

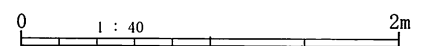
TP-88



A 72.70m

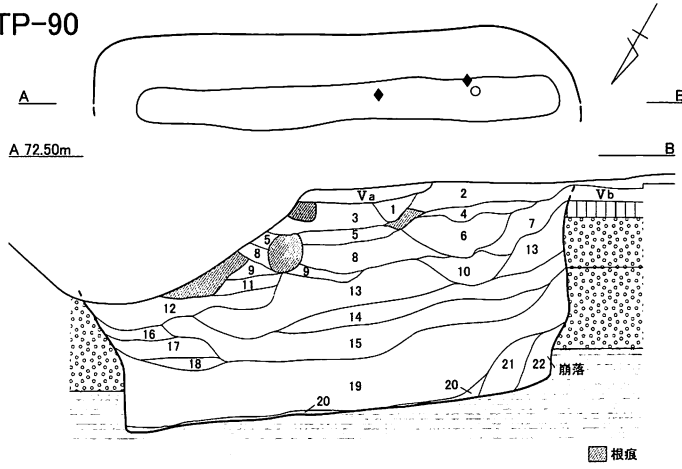


○	土器
■	礎
□	礎石器



図IV-50 TP-87 ~ 89 平面及び断面図

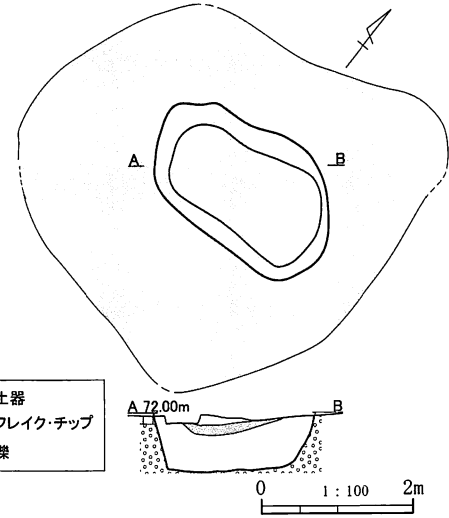
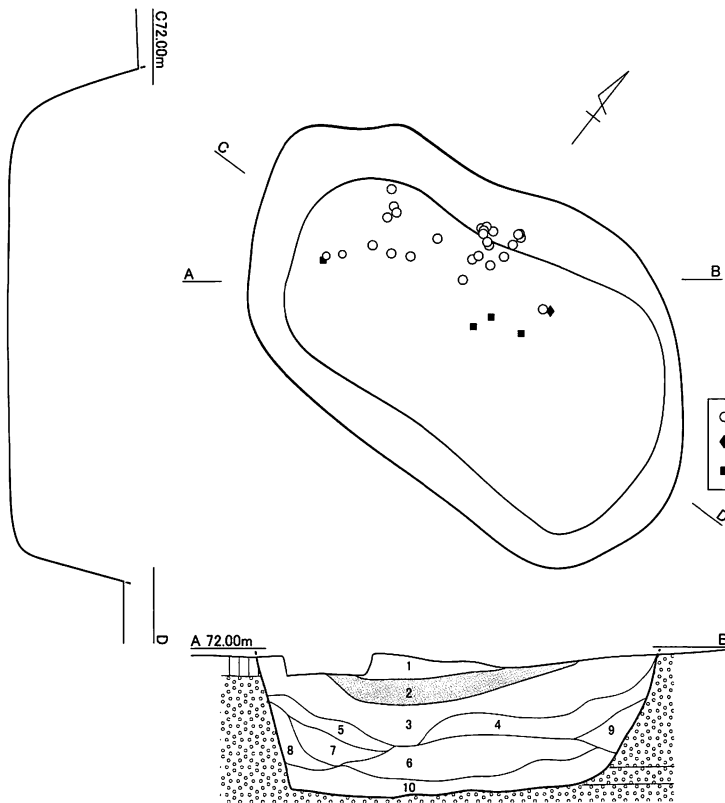
TP-90



TP-90

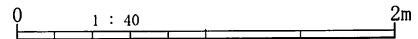
1. 10YR4/4 褐色 Va = Ta-d2P(φ5~10)
2. 10YR6/8 橙色 Ta-d2L ≡ Ta-d2p(φ5~10)
3. 10YR2/2 黒褐色 Vb
4. 10YR2/3 黒褐色 Vb = Ta-d2L
5. 10YR3/4 暗褐色 Vb + Ta-d1スコリア = Ta-d2P(φ3~5)
6. 10YR2/1 黒色 Vb
7. 10YR2/2 黒褐色 Vb
8. 10YR2/2 黒褐色 Vb = Ta-d2P(φ3~5)
9. 10YR2/3 黒褐色 Vb ≡ Ta-d1L
10. 10YR2/2 黒褐色 Vb = Ta-d1スコリア
11. 10YR3/4 暗褐色 V1
12. 10YR2/1 黒色 Vb
13. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d1スコリア = Ta-d1L・Vb かたくしまる
14. 5YR5/6 明赤褐色 Ta-d2L = Ta-d1スコリア・Ta-d2P
15. 5YR4/8 赤褐色 Ta-d2L + Ta-d1スコリア
16. 10YR2/2 黒褐色 Vb + Ta-d1スコリア
17. 10YR2/1 黒色 Vb
18. 7.5YR4/4 褐色 Ta-d1スコリア
19. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P = Ta-d1スコリア(ラミナ状)
20. 10YR2/1 黒色 Vb
21. 10YR2/2 黒褐色 Vb = Ta-d2P(φ5~10)
22. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~20)

TP-91

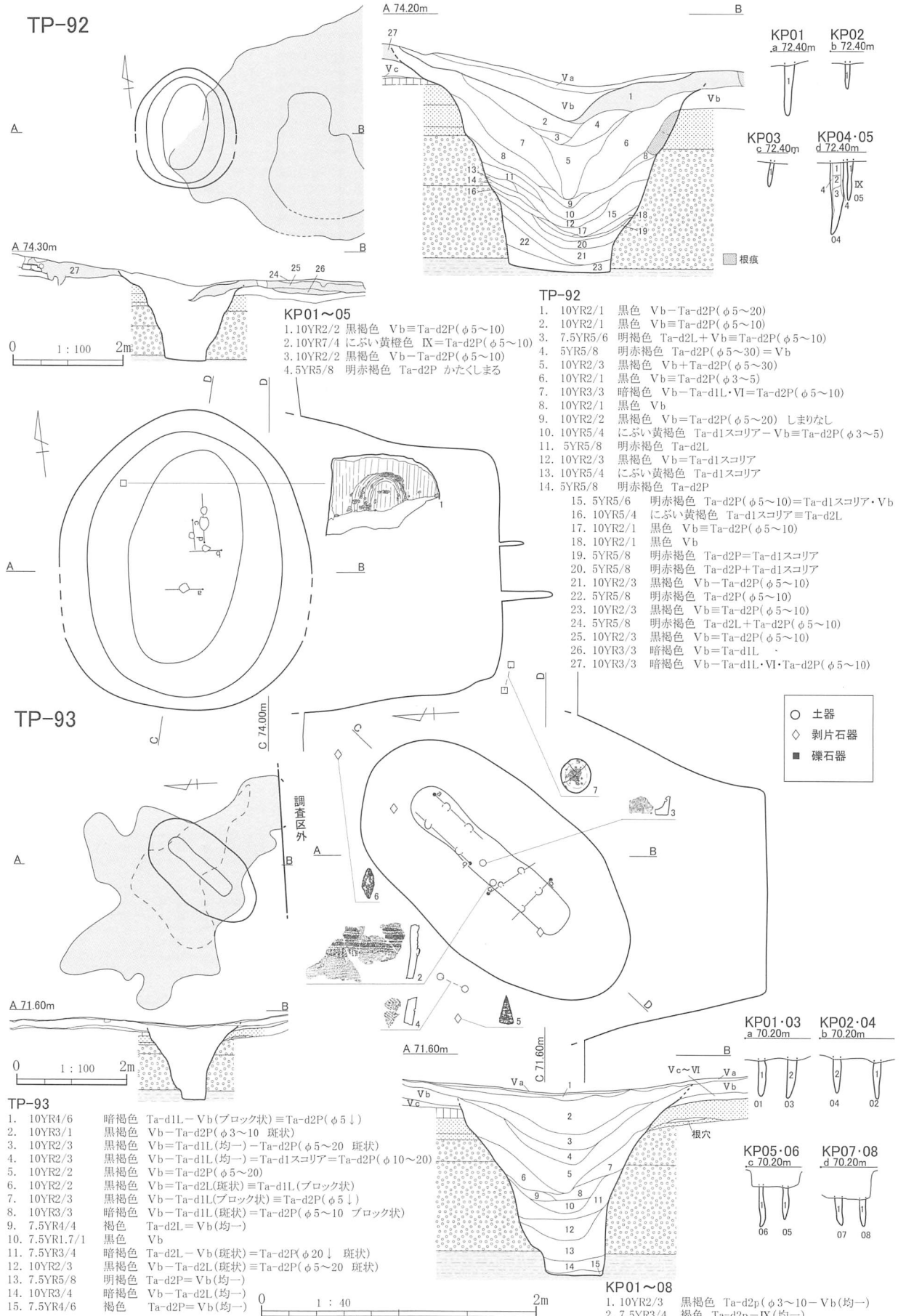


TP-91

1. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~20)
2. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ10~20) = Vb
3. 10YR2/3 黒褐色 Vb = Ta-d2P(φ10~20)
4. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ10~20) + Ta-d2L = Vb
5. 10YR2/3 黒褐色 Vb = Ta-d2P(φ10~20)
6. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ10~20) = Vb + Ta-d2L
7. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ10~20) - Vb + Ta-d2L
8. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ10~20) = Vb + Ta-d2L
9. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~20)
10. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~10) + Ta-d2L ≡ Vb

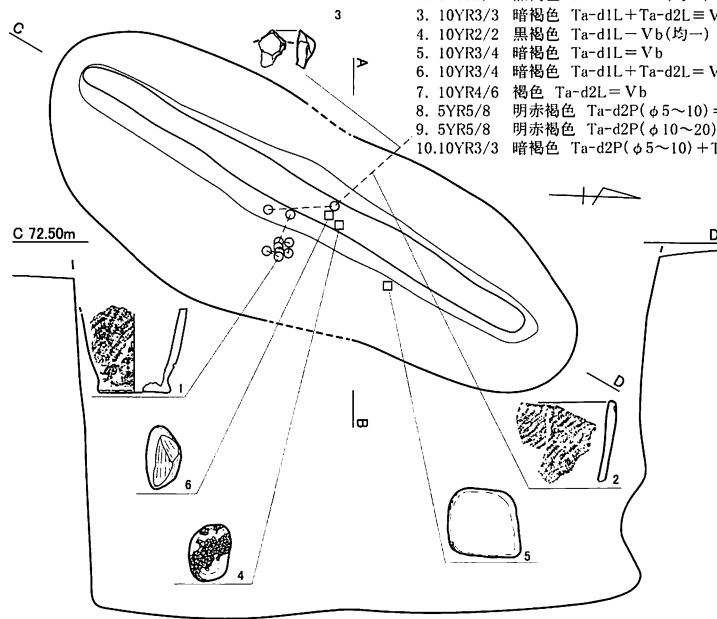


図IV-51 TP-90・91 平面及び断面図



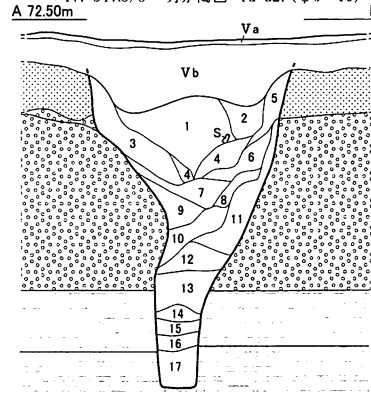
図IV-52 TP-92・93 平面及び断面図

TP-94

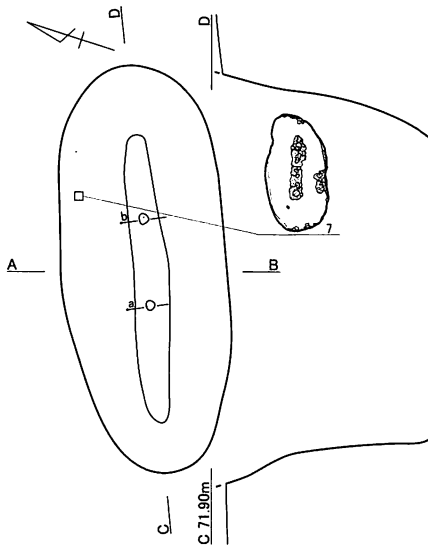


TP-94

1. 10YR4/4 褐色 Ta-d1L+Ta-d2L=Vb(斑状)≡Ta-d2P(φ5~20)
2. 10YR2/3 黒褐色 Ta-d1L+Vb(均一)≡Ta-d2P(φ5↓)
3. 10YR3/3 暗褐色 Ta-d1L+Ta-d2L≡Vb=Ta-d2P(φ5↓)
4. 10YR2/2 黒褐色 Ta-d1L=Vb(均一)
5. 10YR3/4 暗褐色 Ta-d1L=Vb
6. 10YR3/4 暗褐色 Ta-d1L+Ta-d2L=Vb(ブロック状)≡Ta-d2P(φ5~10)
7. 10YR4/6 褐色 Ta-d2L=Vb
8. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~10)=Ta-d1L
9. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ10~20)=Vb
10. 10YR3/3 暗褐色 Ta-d2P(φ5~10)+Ta-d1L=Vb
11. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~10)+Ta-d1L
12. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ10~20)=Vb
13. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ10~20)=Vb
14. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~10)=Vb
15. 10YR3/3 暗褐色 Vb-Ta-d2P(φ10~20)
16. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5↓)=Vb
17. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~10)=Vb

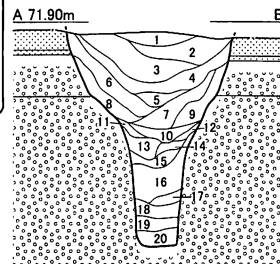


TP-95

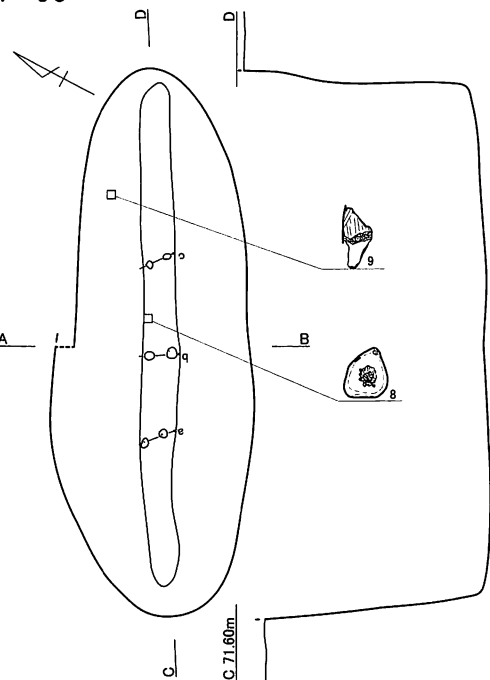


KP01 a 70.80m
KP02 b 70.80m

KP01・02
1. 7.5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5↓)
-Ta-d1L=Vb



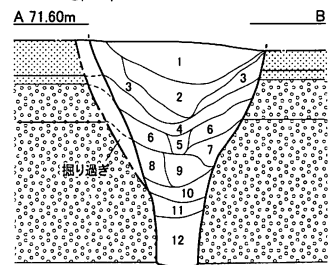
TP-96



KP01・02 a 70.40m
KP03・04 b 70.40m
KP05・06 c 70.40m

01 02 IX IX 05 06

KP01~06
1. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2L=Vb(均一)
2. 10YR2/3 黒褐色 Vb+Ta-d2L



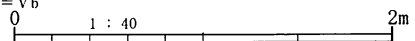
TP-95

1. 10YR2/2 黒褐色 Vb≡VI
2. 10YR2/2 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5~10)
3. 10YR2/3 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5~10)
4. 10YR2/3 黒褐色 Vb≡VI
5. 10YR2/3 黒褐色 Ta-d1L+Vb≡Ta-d2P(φ5↓)
6. 10YR4/6 褐色 Ta-d1L=Vb-Ta-d1スコリア
7. 10YR3/4 暗褐色 Ta-d1L-Vb≡Ta-d2P(φ5↓)
8. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-d2L+Ta-d2P(φ5~10 均一)
9. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-d2+Ta-d2P(φ5↓)L≡Vb(ブロック状)
10. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ta-d2P(φ5↓)
11. 10YR4/6 褐色 Ta-d1L+Ta-d2L=Vb
12. 10YR3/4 暗褐色 Ta-d1L+Ta-d2L+Vb(ブロック状)
13. 5YR5/8 暗赤褐色 Ta-d2L+Ta-d2P(φ10~20)
14. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-d1L+Ta-d2P(φ5~10)=Vb
15. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d2P=Vb
16. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~20) 壁面崩落 しまりなし
17. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2L
18. 10YR2/2 黒褐色 Vb-Ta-d2P
19. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5↓)
20. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~20)=Ta-d2L

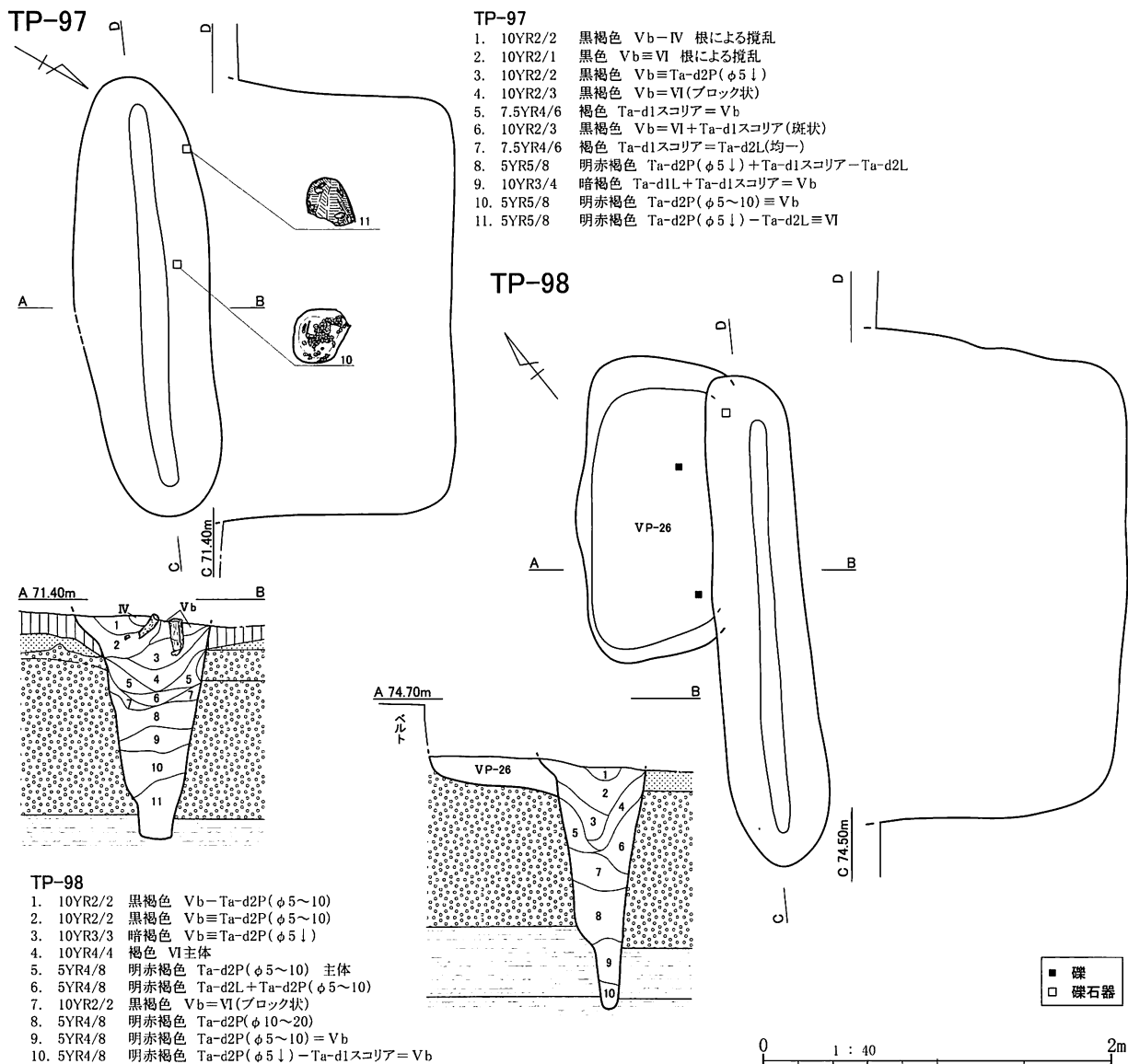
TP-96

1. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ta-d2P(φ5↓)
2. 10YR2/2 黒褐色 Vb≡Ta-d2P(φ5↓)
3. 10YR4/6 褐色 VI=Vb(斑状)
4. 7.5YR4/6 褐色 Ta-d1スコリア+Vb=VI
5. 10YR2/3 黒褐色 Vb+VI
6. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2L=Ta-d2P(φ5~10)
7. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~10)≡Ta-d2L
8. 7.5YR5/8 明褐色 Ta-d2P(φ5~10)≡Ta-d2L
9. 10YR2/3 黒褐色 Vb(斑状)+VI≡Ta-d1スコリア
10. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~10)=Ta-d2L≡Vb
11. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5~10)-Ta-d1スコリア=Vb
12. 5YR5/8 明赤褐色 Ta-d2P(φ5↓)=Vb

○ 土器
□ 礫石器



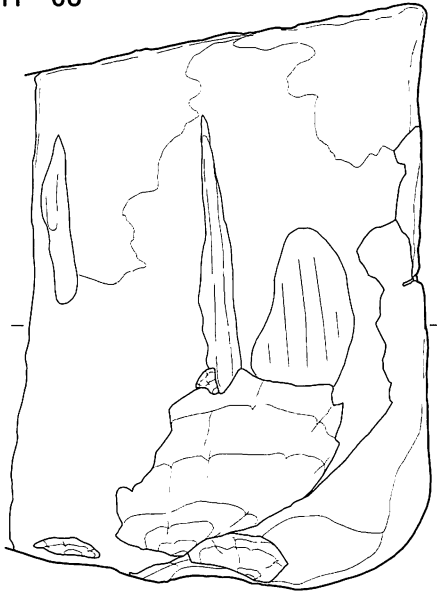
図IV-53 TP-94 ~ 96 平面及び断面図



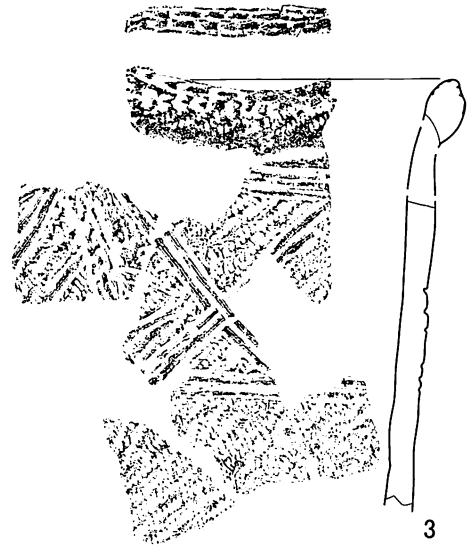
図IV-54 TP-97・98 平面及び断面図

出土遺物 (図IV-55~57) : 55-1 は有溝砥石である。2 は黒曜石製の石鏃である。3 はⅢ群 B1 類に属する口縁部~胴部片で、2006 年の試掘調査で出土した土器片と接合した。口唇部に 2 列の半載竹管 (内) 突引文、胴部には同じ施文具で斜行縄文の上に並行沈線文が施される。4 は口唇部に撚糸圧痕文、口縁部以下は絡条体回転文の上にナデ調整、さらに絡条体圧痕文が施されている。Ⅱ群 B2b 類に属する。5 は地文縄文に、薄く削いだ竹管?による押引文が胴中位は横方向に、一部縦方向に施される。竹管の先端は鋭利である。Ⅲ群 B1 類に属する。56-1 は破損した大型の石皿で、平坦面の 2 面を使用しており、正面残存部の中央には楕円形と思われる深い擦痕が認められる。裏面は破断面寄りに 2 単位の擦痕が見られる。砂岩製である。2 は胴中部の破片。上半は 2 条 1 単位の縄線文下位に縄の圧痕を加えた隆帯、その下位は多軸絡条体回転文が施される。内面のミガキは横方向で密である。Ⅱ群 B2a 類に属す。3 は小型の鉢型土器の底部と思われる。縦方向のナデ調整が施される。胎土等の比較から、Ⅱ群 B2b 類の範疇に含まれると思われるが、明確な決め手に欠く。薄手の土器の底部である。4 は TP-93 の掘り上げ土の中から出土した。Ⅲ群 A1 類に属する。5 は黒曜

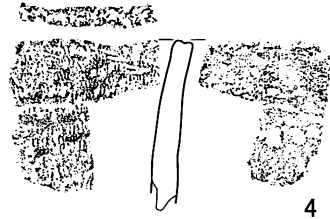
TP-63



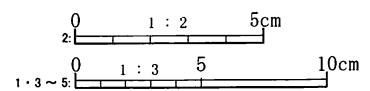
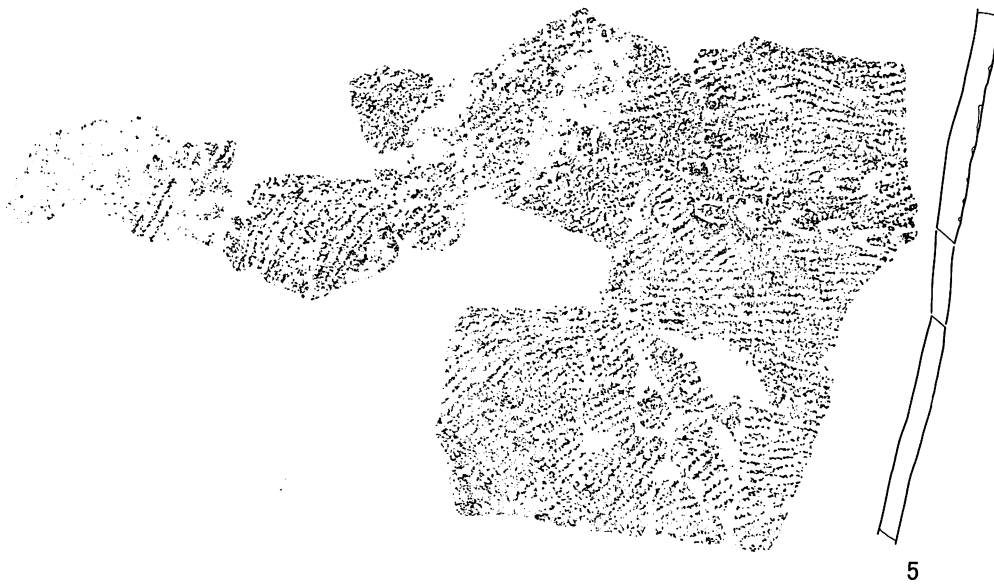
TP-65



TP-66

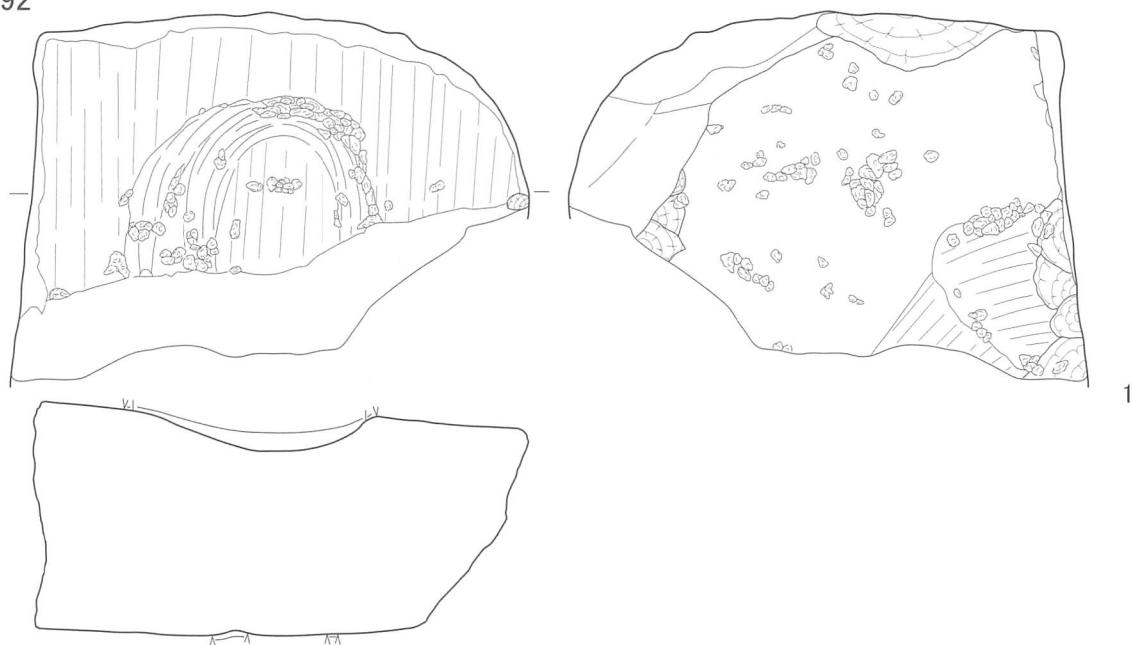


TP-87

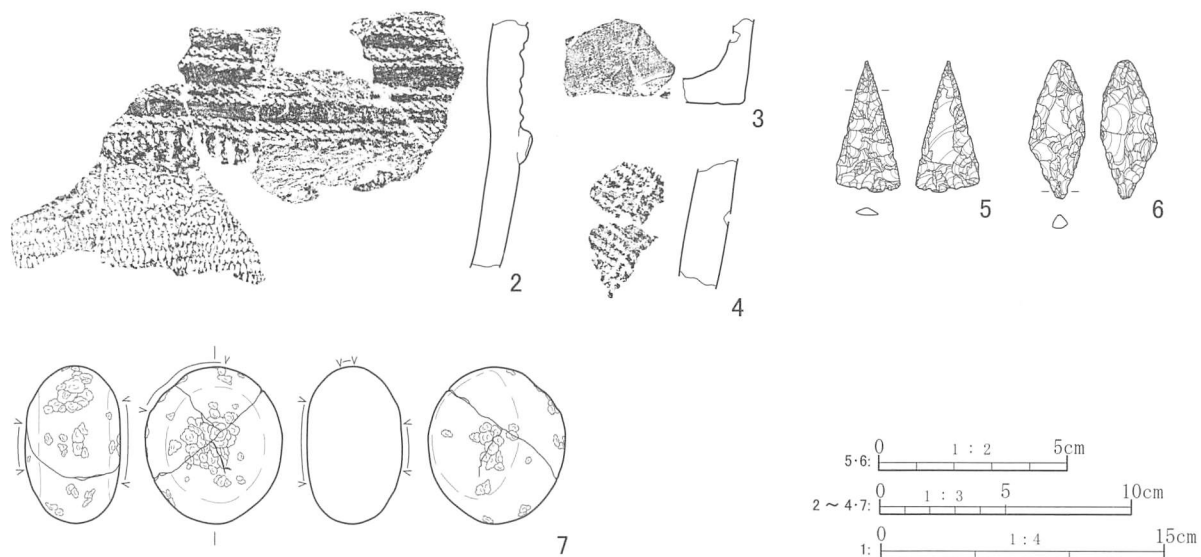


図IV-55 TP 出土遺物 (1)

TP-92



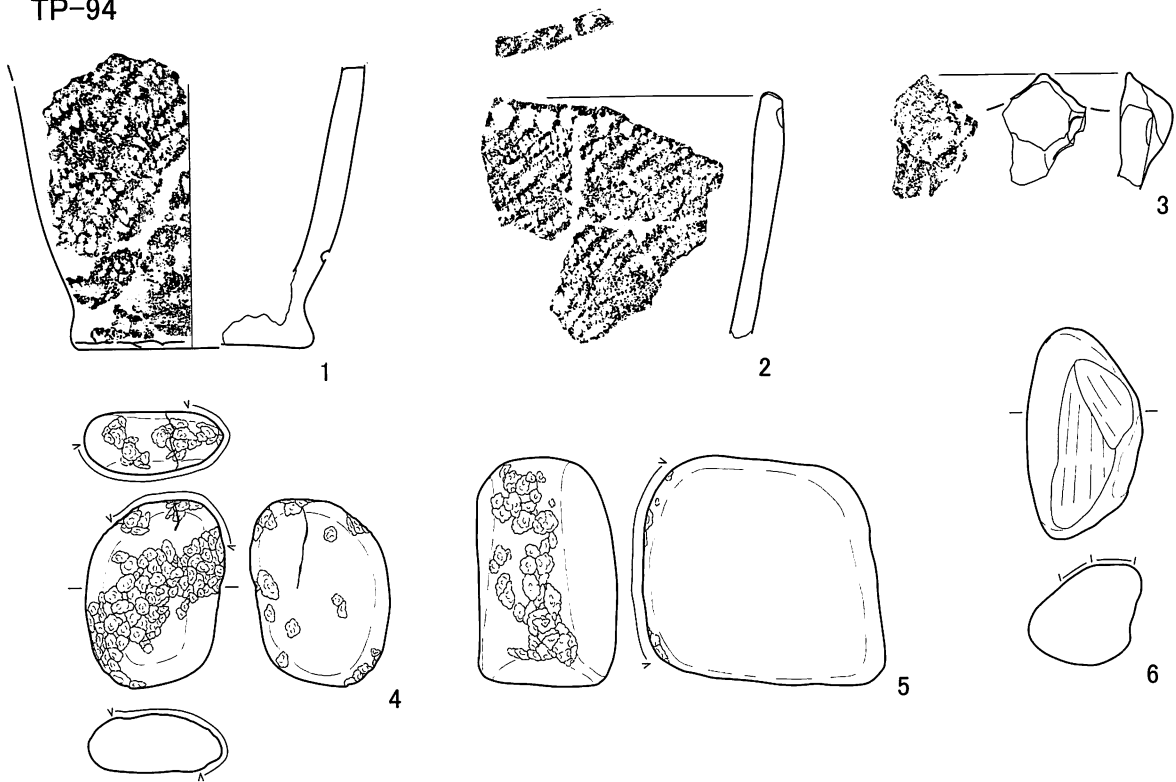
TP-93



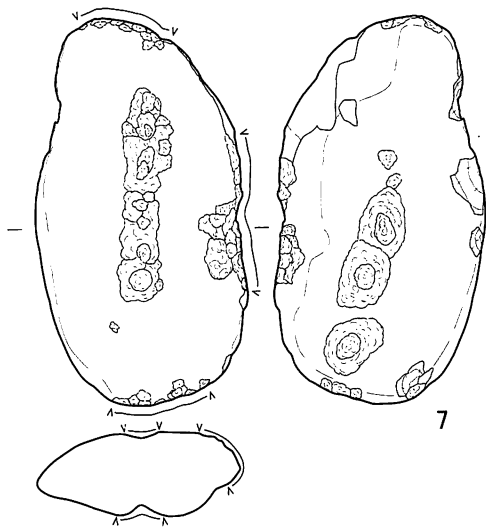
図IV-56 TP 出土遺物 (2)

石製の石鏃で、形態が二等辺三角形となる無茎のものである。裏の剥離面によって断面がやや抉れている。6 は頁岩製の石錐で、柄と機能部の区別が不明瞭なものである。全体に粗雑な調整が施され、先端から 2mm ほどの位置にかけて磨耗が見られる。7 はⅢA 類のたたき石で、両面の中心と側縁に敲打痕がある。砂岩製である。図 57-1~3 はいずれもⅢ群 B1 類に属する。1 は底部がやや張り出す器形で、LR 斜行縄文が施される。2 は口唇部に縄線文、斜行縄文が施された後、口縁部に突引文（内）、突起をもつ器形。3 は突起部が剥落し、斜行縄文が施される。4・5 はたたき石である。4 はⅡA3 類で平坦面から側縁、端部に敲打痕がある。5 はⅡA2 類で側縁のみを使用している。6 はすり石の E 類で、小型の不整形の礫に 2 単位の擦痕がある。4~6 の石材はすべて砂岩製である。7・8・10 はたたき石である。7 はⅠA3 類で扁平礫の両面に、長軸方向の深い敲打痕と、右側縁及び両端部に

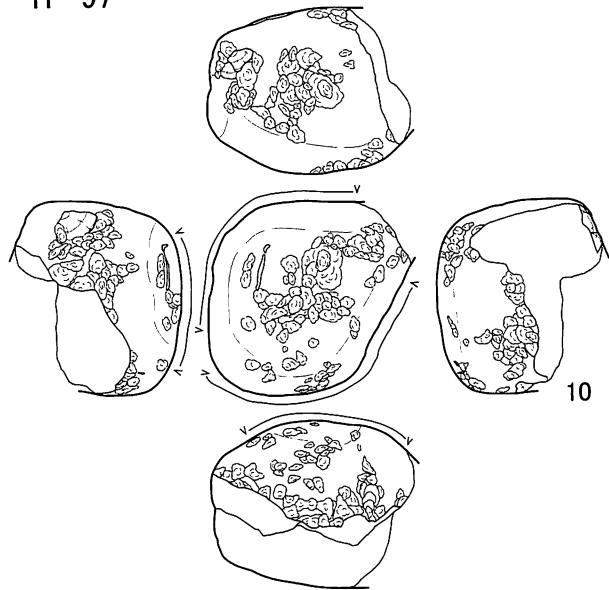
TP-94



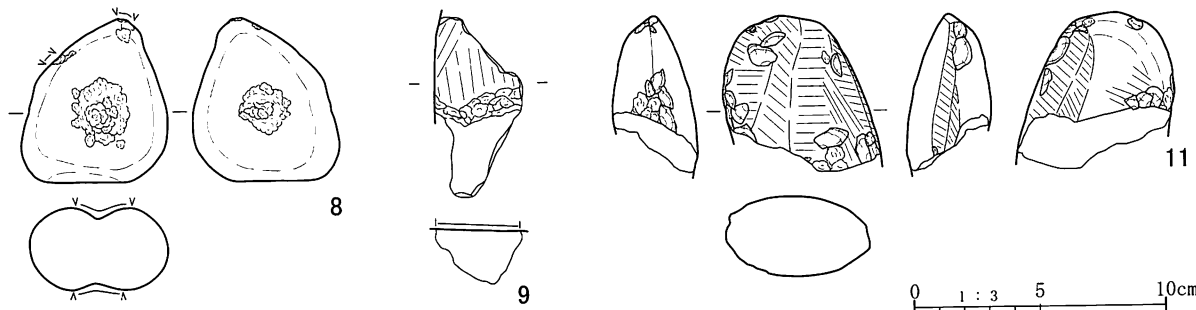
TP-95



TP-97



TP-96



図IV-57 TP 出土遺物(3)

表IV-35 TP属性表(1)

挿図 番号	図版 番号	遺構名	分類	グリッド	平面形	調査 面 層位	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	長軸 方向	杭 跡	重 複	調査 面長 短比	坑底 面長 短比
					調査面/ 坑底面		長軸	短軸	長軸	短軸						
IV-40	22-2	TP-63	B2	AG-24	楕円形/ 長楕円形	V a	272	176	188	40	112	N-7° W	9		1.55	4.70
IV-40	22-4	TP-64	C2	AK-35	楕円形/ 楕円形	V b	208	116	168	48	124	N-2° E	6		1.79	3.50
IV-41	22-7	TP-65	A2a	AJ-33・34	楕円形/ 溝状形	VI	268	128	184	20	164	N-55° W	-		2.09	9.20
IV-41	23-3	TP-66	C2	AE-25	楕円形/ 楕円形	V a	252	160	152	40	136	N-14° W	9		1.58	3.80
IV-42	23-4	TP-67	A1a	AC-34	長楕円形/ 溝状形	VI	304	92	228	16	136	N-0°	-		3.30	14.25
IV-42	23-5	TP-68	A2a	AH-32	楕円形/ 溝状形	VI	224	124	184	16	164	N-43° W	-		1.81	11.50
IV-43	23-8	TP-69	C2	AJ・AK-27	楕円形/ 楕円形	V a	240	224	172	48	120	N-82° E	3		1.07	3.58
IV-43	24-2	TP-70	A1b	AB-31	長楕円形/ 溝状形	VIII a	324	80	268	12	128	N-43° W	4		4.05	22.33
IV-44	24-5	TP-71	A1a	AG-31	長楕円形/ 溝状形	VIII a	300	104	232	28	112	N-24° W	-		2.88	8.29
IV-44	24-7	TP-72	A1a	AB・AC-24	長楕円形/ 溝状形	VI	308	88	272	12	152	N-40° W	-		3.50	22.67
IV-44	24-9	TP-73	A2a	AB-25	楕円形/ 溝状形	VIII a	240	140	180	8	176	N-71° W	-		1.71	22.50
IV-45	24-11	TP-74	A1a	AB-27	長楕円形/ 溝状形	VI	348	100	300	16	160	N-10° E	-		3.48	18.75
IV-45	24-13	TP-75	A2a	AC-25・26	楕円形/ 溝状形	VIII a	252	92	196	24	140	N-69° W	-		2.74	8.17
IV-46	25-1	TP-76	C2	AE-27	楕円形/ 楕円形	V a	236	132	156	40	128	N-10° E	9		1.79	3.90
IV-46	25-2	TP-77	C2	AH・AI-25	楕円形/ 楕円形	VIII a	236	192	160	64	112	N-51° W	9		1.23	2.50
IV-47	25-5	TP-78	A2a	AJ-37	楕円形/ 溝状形	V a	284	160	192	12	176	N-36° W	-		1.78	16.00
IV-47	25-7	TP-79	C2	AB-36・37	楕円形/ 楕円形	V b	240	160	144	44	96	N-60° E	7		1.50	3.27
IV-48	25-8	TP-80	A1a	AF-35	長楕円形/ 溝状形	VIII a	304	84	252	12	128	N-65° E	-		3.62	21.00
IV-23	13-2	TP-81	C2	AE-38・39	楕円形/ 長楕円形	V a	240	156	174	60	132	N-31° E	-		1.54	2.90
IV-48	26-1	TP-82	B1	AJ-35・36	楕円形/ 長楕円形	VIII a	244	108	176	24	156	N-43° E	-		2.26	7.33
IV-48	26-1	TP-83	A1a	AJ-35・36・ AK-36	長楕円形/ 溝状形	VIII a	320	80	296	24	124	N-43° E	-		4.00	12.33
IV-49	26-2	TP-84	A2a	AC-35	長楕円形/ 溝状形	VI	(212)	80	172	20	116	N-22° E	-		-	8.60
IV-49	26-4	TP-85	A1a	AB-38	長楕円形/ 溝状形	VI	328	88	300	12	160	N-41° E	-		3.73	25.00
IV-49	26-6	TP-86	A1a	AG-40	長楕円形/ 溝状形	VIII a	312	120	248	28	108	N-21° E	-		2.60	8.86
IV-50	26-8	TP-87	A1a	AI-41・42	長楕円形/ 溝状形	VIII a	340	84	236	24	108	N-45° E	-		4.05	9.83
IV-50	26-10	TP-88	A2a	AJ・AK-38・ 39	楕円形/ 溝状形	VIII a	236	120	192	24	160	N-69° W	-		1.97	8.00
IV-50	27-1	TP-89	A1a	AI・AK-38	長楕円形/ 溝状形	VI	292	96	244	24	104	N-18° E	-		3.04	10.17
IV-51	27-3	TP-90	A1a	AK-38	長楕円形/ 溝状形	VI	260	(40)	224	24	112	N-60° E	-		-	9.33
IV-51	27-5	TP-91	C1	U・V-32	楕円形/ 楕円形	IV	274	166	220	146	76	N-89° E	-		1.65	1.51
IV-52	27-7	TP-92	C2	P・Q-28	楕円形/ 長楕円形	V bU	218	(188)	158	80	162	N-16° E	5		-	1.98
IV-52	27-9	TP-93	B2	AA-31	楕円形/ 溝状形	V bU	234	134	198	32	130	N-44° E	8		1.75	6.19

表IV-36 TP属性表(2)

挿図 番号	図版 番号	遺構名	分類	グリッド	平面形 調査面/ 坑底面	調査 面 層位	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		長さ (cm)	長軸 方向	杭 跡	重 複	調査 面長 短比	坑底 面長 短比
							長軸	短軸	長軸	短軸						
IV-53	28-3	TP-94	A1a	U-30	長楕円形 /溝状形	VbL	310	120	268	18	168	N-28°E	-		2.58	14.89
IV-53	28-5	TP-95	B2	V・W-31・ 32	長楕円形 /溝状形	Vc	360	88	152	22	112	N-67°E	2		4.09	6.91
IV-53	28-7	TP-96	A1b	Y-30・31	長楕円形 /溝状形	VbL	290	94	264	24	120	N-60°E	6		3.09	11.00
IV-54	28-9	TP-97	A1a	Y・Z-33	長楕円形 /溝状形	VbL	252	82	220	20	128	N-55°E	-		3.07	11.00
IV-54	28-11	TP-98	A1a	T-35・ U-35・36	長楕円形 /溝状形	VI	282	58	238	20	142	N-36°E	-		4.86	11.90

表IV-37 TP出土土器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文 様	胎土	備考	
								口縁-口唇/ 胴部/底側面- 変換点-底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面			
IV-55-3	53-2	JP424A	ⅢB1	MO-06・ BTR05/A J・AK-34	VbU・ bL・ MO・ MO1	7	口縁部 ～ 胴部 上半	突起・やや外傾 -やや肥厚・ 丸状/やや外傾	半截竹管突引文(内) -貼付帯・突引文 (内)・LR斜行縄文/ 貼付帯下:LR斜行縄 文+半截竹管沈線文 (内)/貼付文+突引文 (内)・LR斜行縄文+ 半截竹管沈線文(内)	砂粒少量・ 繊維微量 混入		
IV-55-4	53-4	JP445A	ⅡB2b	TP-66/ AF-25	VbL・ 1	2	口縁部	平縁・やや 外傾-角状	絡条体圧痕文-絡 条体圧痕文+絡条 体圧痕文-ナデ	繊維・砂粒 少量混入		
IV-55-5	53-5	JP425A	ⅢB1	TP-87/ AI-41	VbL・ VI・1	24	胴部	外傾	半截竹管(内)押引 文・結束第1種LR 斜行縄文-ミガキ	繊維微量 混入		
IV-56-2	53-7	JP048B	ⅡB2a	TP-93/ L-27・N- 23・AF- 31・AL-10	Va・ bU・ VI・ KR・3	5	胴部	外反・外傾	縄線文・隆帯1・縄 の圧痕・撚糸文(多 軸絡条体回転文) -ミガキ(ヨコ)	繊維・砂粒 少量混入		
IV-56-3	53-8	JP501A	ⅡB	TP-93		3	2	底部	外傾-角状- 平底	ナデ(タテ)	繊維少量・ 砂粒微量 混入	
IV-56-4	53-9	JP503A	ⅢA1	TP-93	MO	2	胴部	やや外傾	RL斜行縄文-ナデ	繊維微量・ 砂粒多量 混入		
IV-57-1	54-13	JP536A	ⅢB1	TP-94	1・2	8	胴部 ～ 底部	直立/外傾- 張り出し-やや 上げ底	LR斜行縄文	繊維微量・ 砂粒少量 混入		
IV-57-2	54-14	JP467A	ⅢB1	TP-94/ U-30	Vc・1	4	口縁部	平縁・直立- 隅丸角状/やや 外傾	LR縄文-縄線文 (同一条異原体)- ナデ/RL斜行縄文 -ナデ	繊維・砂粒 少量混入		
IV-57-3	54-15	JP467B	ⅢB1	U-30	VI	1	突起	突起・外傾- 尖状	縄文・突引文(内)- ミガキ(ナナム)	繊維・砂粒 少量混入		

表IV-38 TP出土石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	グリッド	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
IV-55-1	53-1	VST 252	62630	砥石	1a	VbU	TP-63	235.0	(167.0)	(97.0)	(4800.0)	Sa.	
IV-55-2	53-3	-	62585	ポイント類	A	MO1	TP-65	(11.5)	(7.0)	2.8	(0.9)	Obs.	先端部、 欠損により 分類不明
IV-56-1	53-6	-	143959	石皿	-	VbL	TP-92	(272.0)	(204.0)	128.0	(7390.0)	Sa.	
IV-56-5	53-10	-	144404	ポイント類	A2	MO	TP-93	34.3	17.1	3.0	1.2	Obs.	
IV-56-6	53-11	-	142980	石錐	D	MO	TP-93	36.2	14.5	7.8	4.5	Sh.	
IV-56-7	53-12	VST 380	142981	たたき石	III B	MO VbU	TP-93 AA-31	61.6	53.8	37.7	140.0	Sa.	
			143731										
IV-57-4	54-16	-	143337	たたき石	II A3	3	TP-94	70.6	55.9	24.8	125.0	Sa.	
IV-57-5	54-17	-	143948	たたき石	II A2	1	TP-94	89.3	85.2	56.3	700.0	Sa.	
IV-57-6	54-18	-	143338	すり石	E	1	TP-94	84.1	50.2	38.4	120.0	Sa.	
IV-57-7	54-19	-	144940	たたき石	I A3	1	TP-95	151.7	82.1	31.4	480.0	Sa.	被熱
IV-57-8	54-20	-	145264	たたき石	II A3	3	TP-96	64.4	55.5	33.3	140.0	Sa.	
IV-57-9	54-21	-	144972	砥石	-	1	TP-96	(71.6)	(34.1)	(19.5)	(35.0)	Sa.	
IV-57-10	54-22	-	144970	たたき石	III B	2	TP-97	91.1	(69.4)	(62.8)	(380.0)	Sa.	
IV-57-11	54-23	-	145263	石斧	A	1	TP-97	(61.5)	53.9	32.5	(182.0)	Gr-Mud.	基部

敲打痕がある。8はII A3類で小型礫の両平坦面中央に深い敲打痕がある。9は砥石の破片である。残存部のごく狭い面に2単位の擦痕と敲打痕が認められる。10はIII B類で厚みのある亜円礫を素材とし全面に敲打痕が残る。一部欠損している。8~10の石材はすべて砂岩製である。11は破損した石斧の基部で、丁寧に磨き調整がなされている。緑色泥岩製である。

(55-1・2:中沢 55-3~5・56-2~4・57-1~3:宮塚義 56-1・7・57-4~11:宮崎 56-5・6:宮塚翔)

第5節 石囲い炉

V SF-01 (図IV-58 図版 29-1・2)

AG・AH-35区で検出した。Vb層調査中、大型の被熱した板状礫が楕円形に出土したことから、石囲い炉と考えた。礫を残した状態でベルトを設定し、トレンチ調査を行った。結果、礫の下端部よりも低い位置で燃焼面が確認されたので、ベルトを残して燃焼面を検出した後、土層断面の記録を行った。上部ベルトを外して燃焼面を精査したところ、平坦ではなく凹凸が認められた。当初の断面を記録したのと同じ位置で燃焼面を半截し、土層断面を確認している。この際、南西側の礫を取り上げたが、いずれも風化のため崩れている。断面観察の結果、土坑を掘削し、その壁面に板状礫を並べて配していることが明らかとなった。土坑を完掘し、各種記録を取り調査を終了した。土坑の規模は64×46cm、確認面からの深さ16cmで、構成礫はいずれも20cm前後の板状礫で内側は被熱している。燃焼面の規模は46×36cm、厚さは約4cmである。前述したように礫の下端部より低い位置であるのと、被熱層の中にVb層が斑状に混じり、この下に根穴によるV層の落ち込みが見られたことから、燃焼面が根によって押し込まれたと思われる。焼土の中には炭化物が僅かに含まれていた。時期については遺跡内で出土している土器と、石囲い炉であることから縄文後期前葉と想定しており、フローテーションで回収された炭化材のAMS法C14年代測定でも暦年較正年代で縄文後期前葉~中葉との結果を得ており矛盾しない。また、同様に回収した炭化種子の委託同定を行ったが、分類は不明であった。周辺から炉に伴うと思われる遺物は出土していない。(宮崎)

第6節 焼土

VF-57～74 (図IV58・59 図版 29-3～33-4)

焼土は平成23・24年度で新たに18カ所検出している。これまでの調査では49カ所調査しており、合計67カ所となる。全てT3面で検出されている。過年度までは焼土の分布はある程度のまとまりをもって検出しているものが多く、8カ所のグループに分けて記載を行っていた。平成23年度では新たに1グループを追加しているが、その他は単体の検出である。平成24年度では全て単体の検出であった。各焼土について時期を推定できたものはVF-66で、TP-63の掘り上げ土下位で確認されており、これより古いものである。TP-63は覆土の土器より、前期後葉頃かそれよりも新しいものと捉えている。これ以外には殆どなく、グループ内のものが全て同時期を示すものではない。また、本来検出層位が時期を推察する1つの指標となるが、調査時に発見が遅れ、焼土を削平してしまっている焼土があるため検出層位は判断材料となりにくくなってしまっている。このような状態ではあるが、T3面の主体は前期後葉であることから大半のものは同時期のものと思われる。

これらのグループに含まれるものも、含まれないものについても特筆すべきものを除いて個別の記載は行っていないので、各図と表を参照されたい。

グループI (VF-58～61)

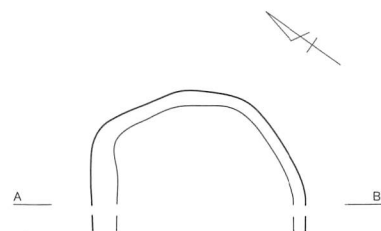
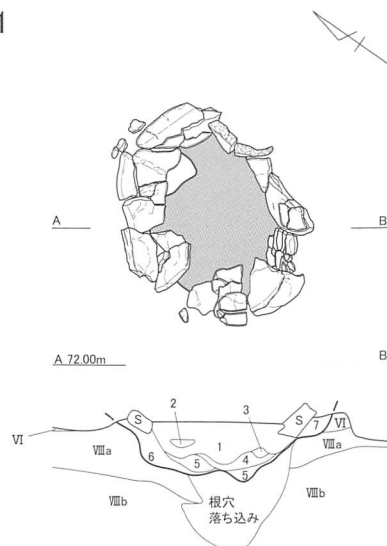
656×320cmの範囲から4カ所の焼土が検出されている。過年度の報告で設定したグループGに近接するもので、一連のものである可能性がある。平面形は楕円形である。被熱層の厚さは6～16cmである。VF-58は根穴により大きく攪乱されており、この根によって焼土は押し込まれている。この周囲から土器集中は出土していない。(天方)

第7節 獣骨集中

VBB-07 (図IV-59)

平成23年度の調査では1カ所検出している。これまでの調査では6カ所検出しており、この内本年度と同じ焼骨片の集中は5カ所である。調査は検出した時点で長軸にトレンチを設けて掘削し、下位に焼土の有無を確認している。焼土を確認できなかったものを本節で扱っている。調査は平面範囲の記録と、土壌サンプルの回収を行って終了している。検出層位と基底面はVb層下位である。平面形は不整形である。回収した土壌をフローテーションした結果、哺乳綱及び不明の焼骨片が得られ、炭化種子は得られていない。(天方)

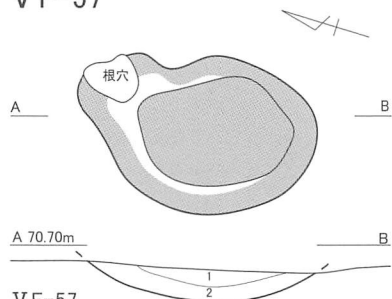
V SF-01



V SF-01

1. 7.5YR2/1 黒色 Vb = VI(均一)
2. 10YR4/4 褐色 VI被熱層
3. 10YR4/6 褐色 VI被熱層 = Vb(斑状)
4. 10YR3/4 暗褐色 VI被熱層 - Vb(均一)
5. 10YR4/6 褐色 Vb被熱層 - VI(斑状)
6. 10YR2/1 黒色 Vb
7. 10YR2/3 黒褐色 Vb = VI(均一)

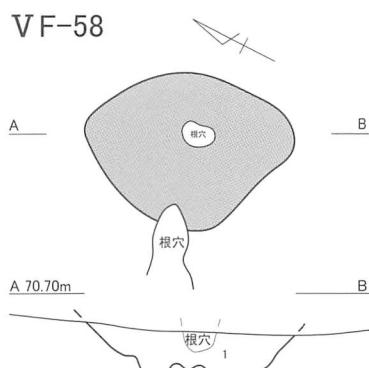
VF-57



VF-57

1. 7.5YR4/6 褐色 Vb被熱層
2. 10YR2/1 黒色 付帯黒色層

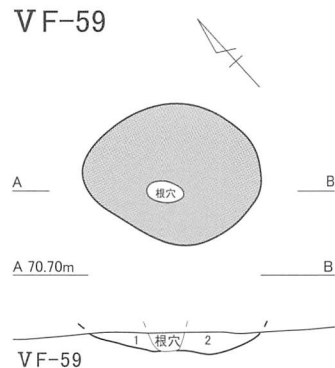
VF-58



VF-58

1. 7.5YR4/6 褐色 VI層被熱層

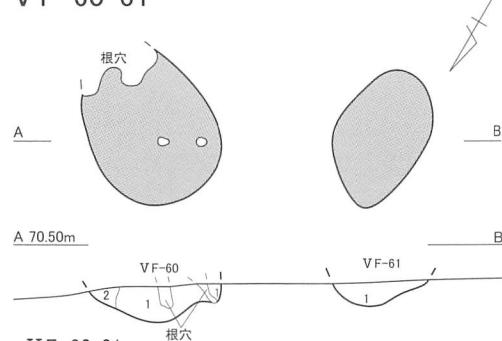
VF-59



VF-59

1. 7.5YR5/6 明褐色 Vc被熱層
2. 7.5YR4/4 褐色 Vc被熱層

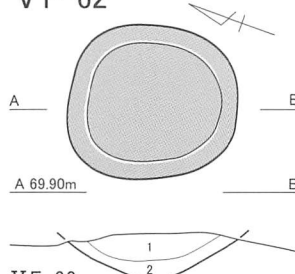
VF-60・61



VF-60・61

1. 10YR5/8 黄褐色 Vc被熱層
2. 10YR4/6 褐色 Vc被熱層

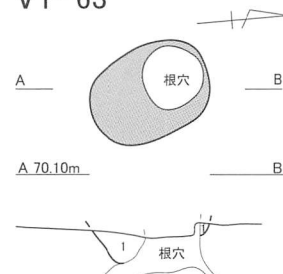
VF-62



VF-62

1. 7.5YR5/6 明褐色 VI層被熱層
2. 10YR2/1 黒色 付帯黒色層

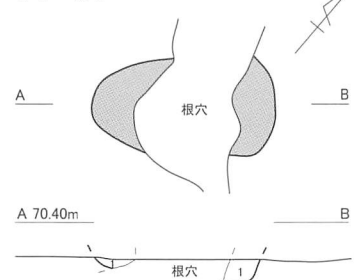
VF-63



VF-63

1. 7.5YR5/6 明褐色 Vc被熱層

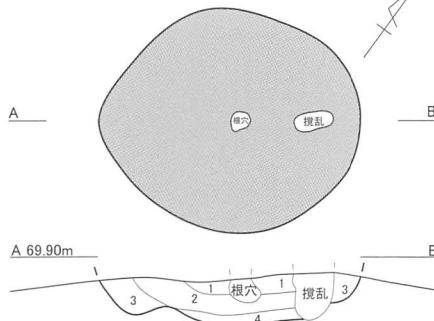
VF-64



VF-64

1. 7.5YR4/6 褐色 Vb被熱層

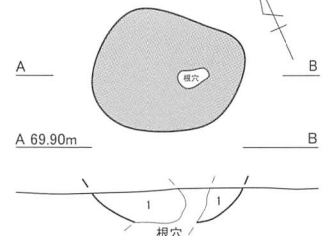
VF-65



VF-65

1. 5YR5/8 明赤褐色 Vb被熱層強
2. 5YR5/6 明赤褐色 Vb~Vc被熱層強
3. 7.5YR3/4 暗褐色 Vc被熱層弱
4. 7.5YR3/4 暗褐色 Ta-d1被熱層弱

VF-66



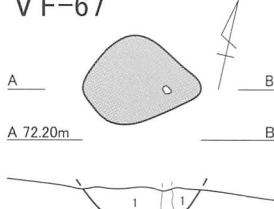
VF-66

1. 7.5YR4/6 褐色 VI層被熱層



図IV-58 V SF-01・VF-57～66 平面及び断面図

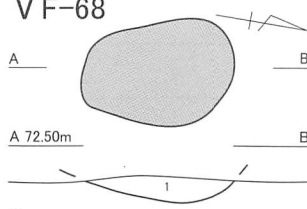
VF-67



VF-67

1. 7.5YR5/6 明褐色 Vb被熱層

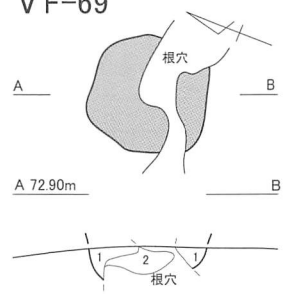
VF-68



VF-68

1. 5YR4/8 赤褐色 Vb被熱層

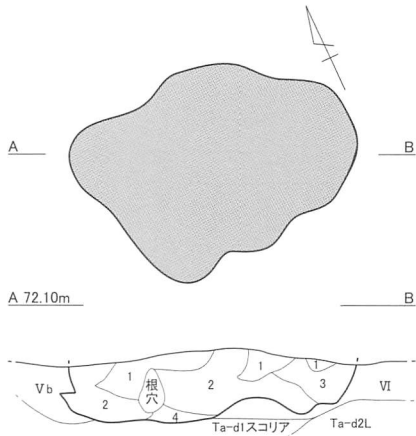
VF-69



VF-69

1. 7.5YR4/4 褐色 Vc被熱層強
2. 7.5YR3/4 暗褐色 Vc被熱層弱

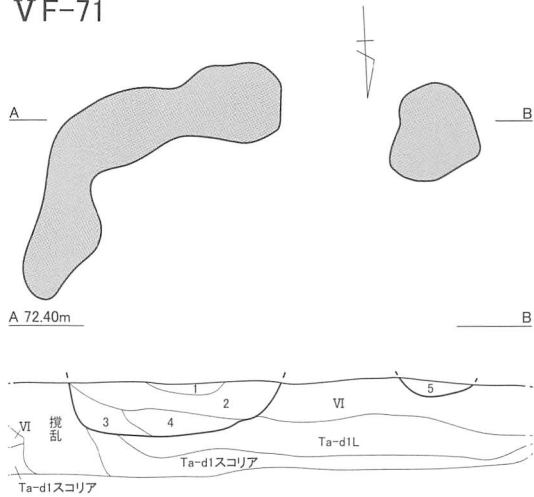
VF-70



VF-70

1. 7.5YR4/4 褐色 Vb 被熱層
2. 7.5YR3/2 黒褐色 Vb 被熱層
3. 7.5YR2/3 極暗褐色 Vb
4. 7.5YR3/3 暗褐色 Ta-d1スコリア(被熱)

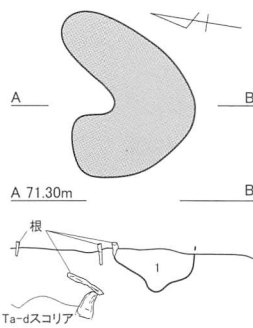
VF-71



VF-71

1. 7.5YR2/3 極暗褐色 Vb 被熱層
2. 7.5YR4/6 褐色 VI 被熱層(強)
3. 7.5YR3/4 暗褐色 VI 被熱層(弱)
4. 7.5YR3/3 暗褐色 VI 被熱層(弱)
5. 7.5YR4/6 褐色 VI 被熱層(強)

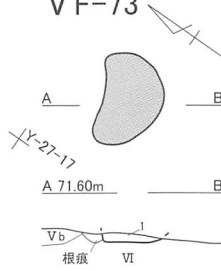
VF-72



VF-72

1.5YR6/8 橙色 Vb 被熱層(強)

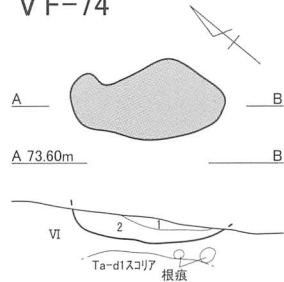
VF-73



VF-73

1. 5YR4/6 赤褐色 Vb+VI 被熱層

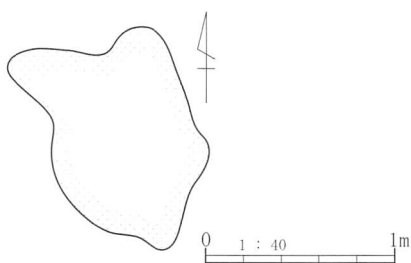
VF-74



VF-74

1. 7.5YR3/4 暗褐色 Vb+VI 被熱層
2. 10YR3/3 暗褐色 Vb+VI 被熱層(弱)

VBB-07



図IV-59 VF-67~74・VBB-07平面及び断面図

表IV-39 石囲い炉・焼土・獣骨集中属性表

挿図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	確認 層位	平面形	規模 (cm)			灰・骨片の 有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
IV-58	29-1	VSF-01	AG・AH-35	Vb	楕円形	(46)	(36)	16	-	
IV-58	29-3	VF-57	AF・AG-29	Vb	不整形	64	42	8	-	
IV-58	29-5	VF-58	AB-27	VI	不整形	56	42	16	-	
IV-58	29-7	VF-59	AB-27	Vc	楕円形	48	36	6	-	
IV-58	30-1	VF-60	AC-26	Vc	楕円形	(40)	32	10	-	
IV-58	30-1	VF-61	AC-26	Vc	楕円形	38	24	6	-	
IV-58	30-3	VF-62	AE-24	VI	方形	48	42	12	-	
IV-58	30-5	VF-63	AG・AH-25	Vc	楕円形	32	24	8	-	
IV-58	30-7	VF-64	AI-27	Vb	不整形	48	(26)	6	-	
IV-58	31-1	VF-65	AH-23	Vb	円形	70	60	12	-	
IV-58	31-3	VF-66	AH-24	VI	方形	40	32	8	-	
IV-59	31-5	VF-67	AI-35	Vb	不整形	132	22	8	-	
IV-59	31-7	VF-68	AD-36	Vb	楕円形	42	28	6	-	
IV-59	32-1	VF-69	AC-38	Vc	方形	34	30	8	-	
IV-59	32-3	VF-70	W-29	VbL	不整形	76	58	20	-	
IV-59	32-5	VF-71	U-30	VbL	不整形	121	63	12	-	
IV-59	32-7	VF-72	AA-30	VbL	不整形	45	37	12	-	
IV-59	33-1	VF-73	X-28	Vc	不整形	18	18	3	-	
IV-59	33-3	VF-74	R-30	VbL	不整形	41	21	9	-	
IV-59	-	VBB-07	AB-23	VbL	不整形	129	88	-	-	

第8節 作業場跡

本年度の調査で、石皿を中心にすり石等の礫石器がまとまって出土した場所を作業場跡として報告を行う。過年度の報告ではVSTB-01・02 が類似するものである。出土状態等より石皿を使用する作業が行われ、その場所にそのまま石皿が廃棄されたと想定したことから、作業場跡とした。これまでの報告のVH-01・03 と本報告のVH-06・08 では廃絶後の窪みを捨て場として利用しており、ここでは石皿やその他の遺物を多量に廃棄しているが、石器組成から廃棄遺構と異なる遺構と考えられる。

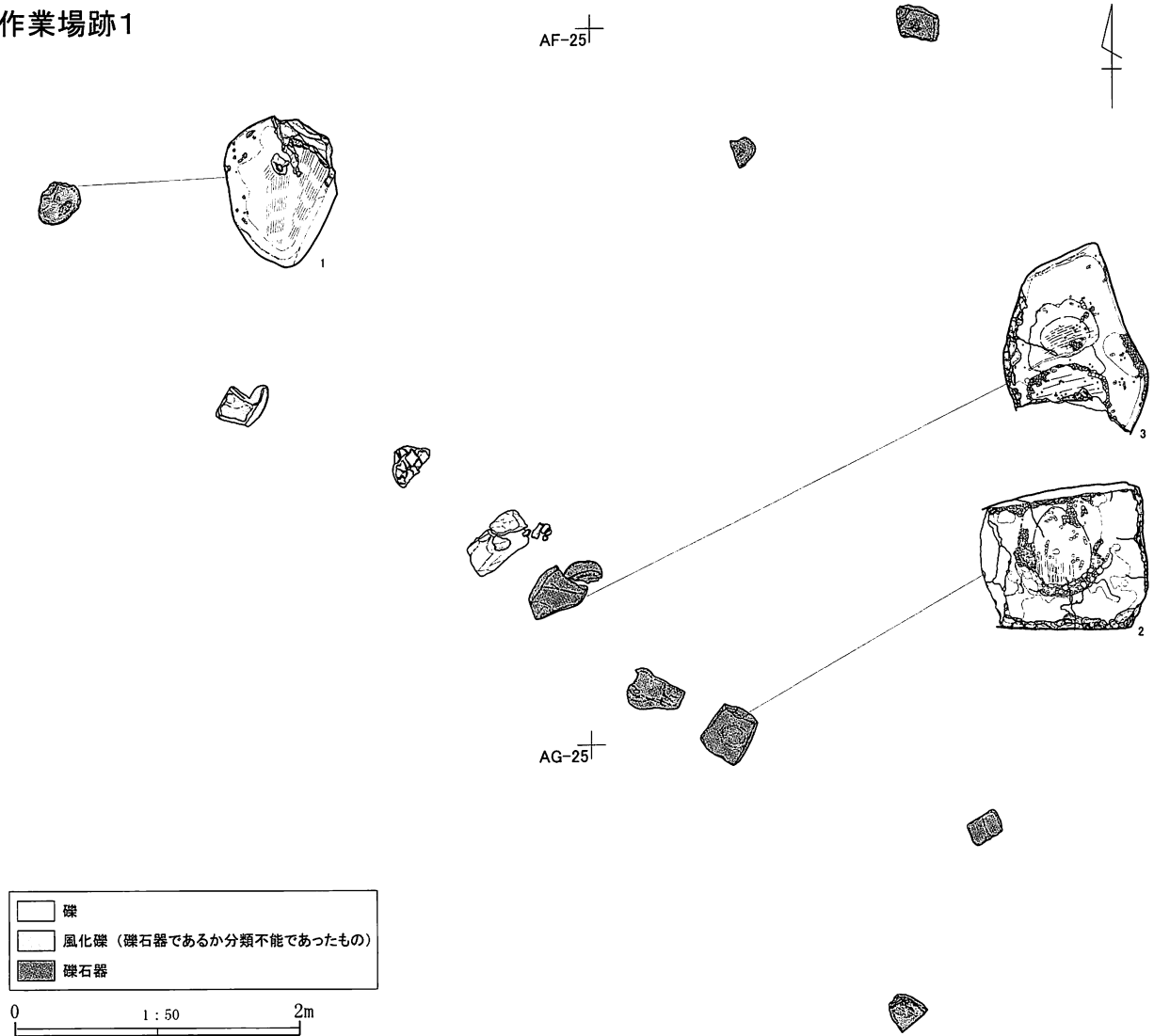
作業場跡 1 (図IV-60～62 図版 33-5、54-2、55-1～3)

AF・AG-24・25 区のVb層調査中に石皿を含む大型の礫が直線状に並んで出土した。直線状に並ぶものは8点であった。石皿は使用面を上にならべられているものが多かったことから、作業を行った状態でそのまま廃棄されたものと想定し、作業場跡と設定した。検出状態の撮影を行い、微細図を作成し、遺物を取上げて作業を終了した。整理作業段階で、この直線状に配置される石皿及び大型礫の周囲でも石皿が出土していることから、これらを含め範囲を確定している。この範囲内より、すり石は出土していない。整理作業時に遺物の分類を行っているが、一部のものについては表面が剥落しており、分類が困難な資料もあり、風化礫とした。出土状態と大型礫であることから石皿の可能性はある。規模は1013×502 cmである。範囲内の同一層で取り上げている土器はⅡ群 B2a 類 34 点、Ⅱ群 B2b 類 26 点が主体である為、帰属時期は前期後葉と思われる。

作業場跡 2 (図IV-63～65 図版 34-1、55-1-4～12)

AC-32・33 区のVb層調査中に、石皿を中心に北海道式石冠が3点近接するまとまり(以下作業場 a)と、たたき石数点と破碎した礫が数点まとまる範囲(以下作業場 b)を確認した。現場段階では作業場 a は石皿を使用した作業場跡、作業場 b はたたき石を使用した作業場跡と捉え、近接していることから併せて撮影を行った。撮影後、微細図を作成し遺物を取上げて作業を終了した。

作業場跡1



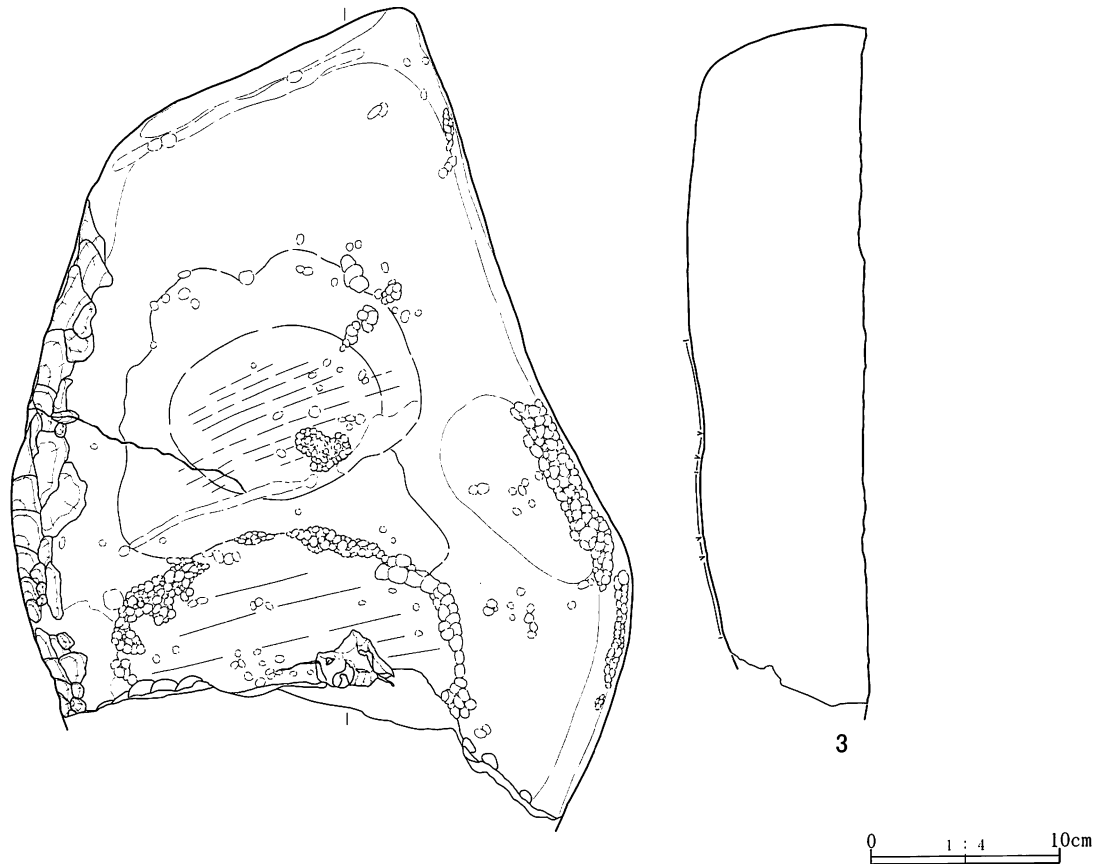
図IV-60 作業場跡1遺物分布図

作業場 a の規模は 97×60 cm の範囲に石皿 1 点と北海道式石冠 3 点（内 1 点は未製品）が出土している。現場段階ではセット関係にあると考えていたが、この石皿の主要な擦り面は溝状に深くなり、溝と北海道式石冠の幅は異なることから、必ずしもこの石皿に使用されたすり石ではないと思われるが、出土状態よりここで石皿を使用する作業が行われたと想定される。

作業場 b の規模は 218×130 cm で石斧の未製品 1 点とたたき石 7 点が出土している。また破損した大型礫 2 点と数点の破砕礫が出土している。石斧の未製品が出土していることから、石斧製作に関わる作業場の可能性もあるが、周囲で石斧製作に関わるフレイクは 1 点のみの出土である。フレイクを別地点に廃棄した可能性もあるが、明らかではない。破損したたたき石も出土することから、捨て場としての場も考えられるが、器種がたたき石と偏ることから、作業後にその場で破棄した可能性が高いと思われる。作業場 a・b が一連の作業によるものか不明であるが、近接することから併せて記載を行った。範囲内及び周辺からの出土土器はⅡ群 B2a 類とⅡ群 B2b 類が見られるが、Ⅱ群 B2a 類の方がやや多い。帰属時期はこれらの土器より前期後葉と思われる。



図IV-61 作業場跡1出土遺物(1)



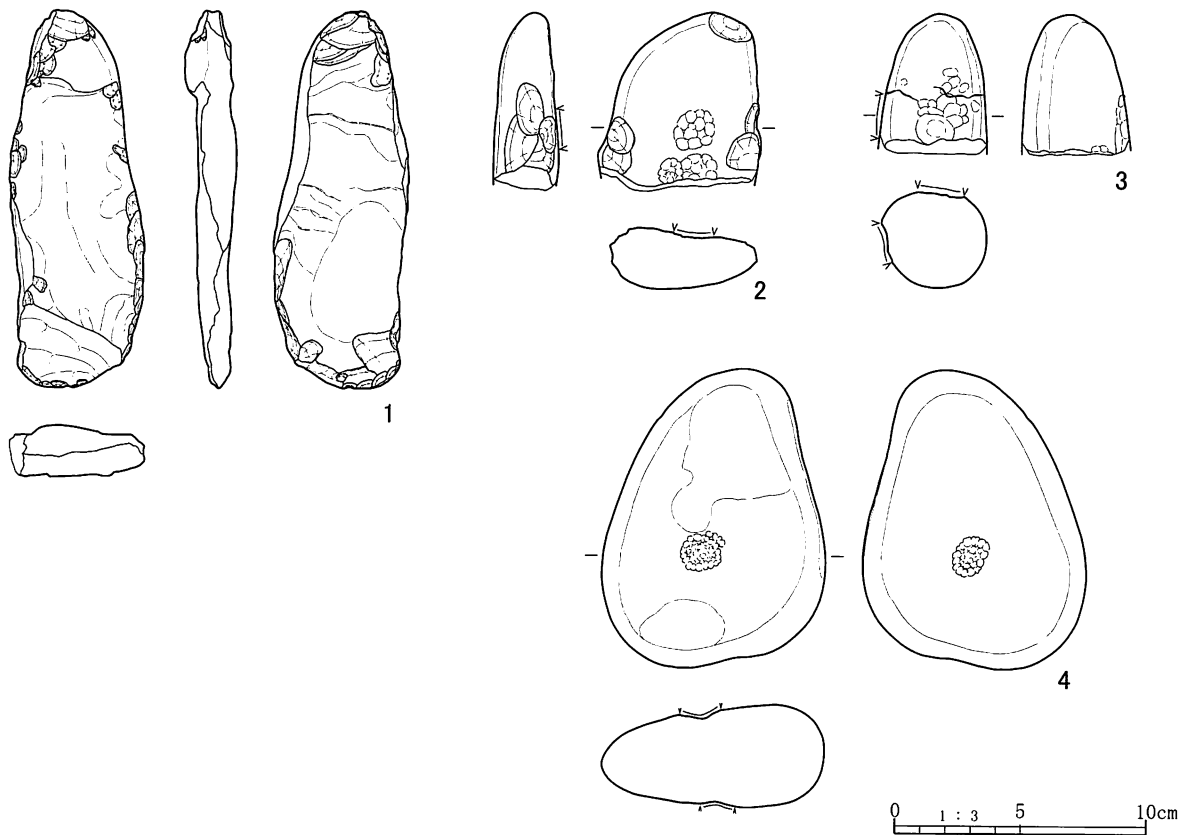
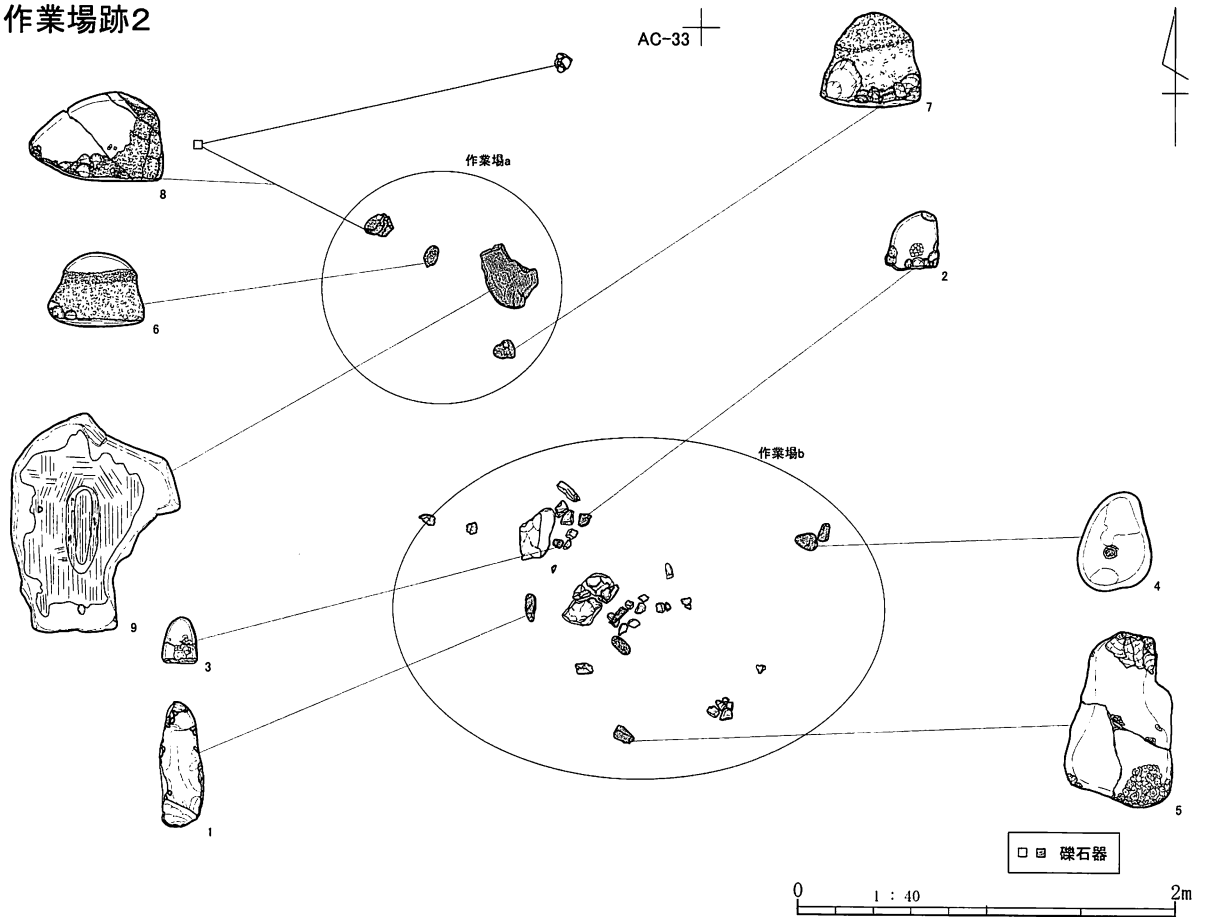
図IV-62 作業場跡1出土遺物(2)

作業場跡3 (図IV-66～68 図版 34-2・3、56-1)

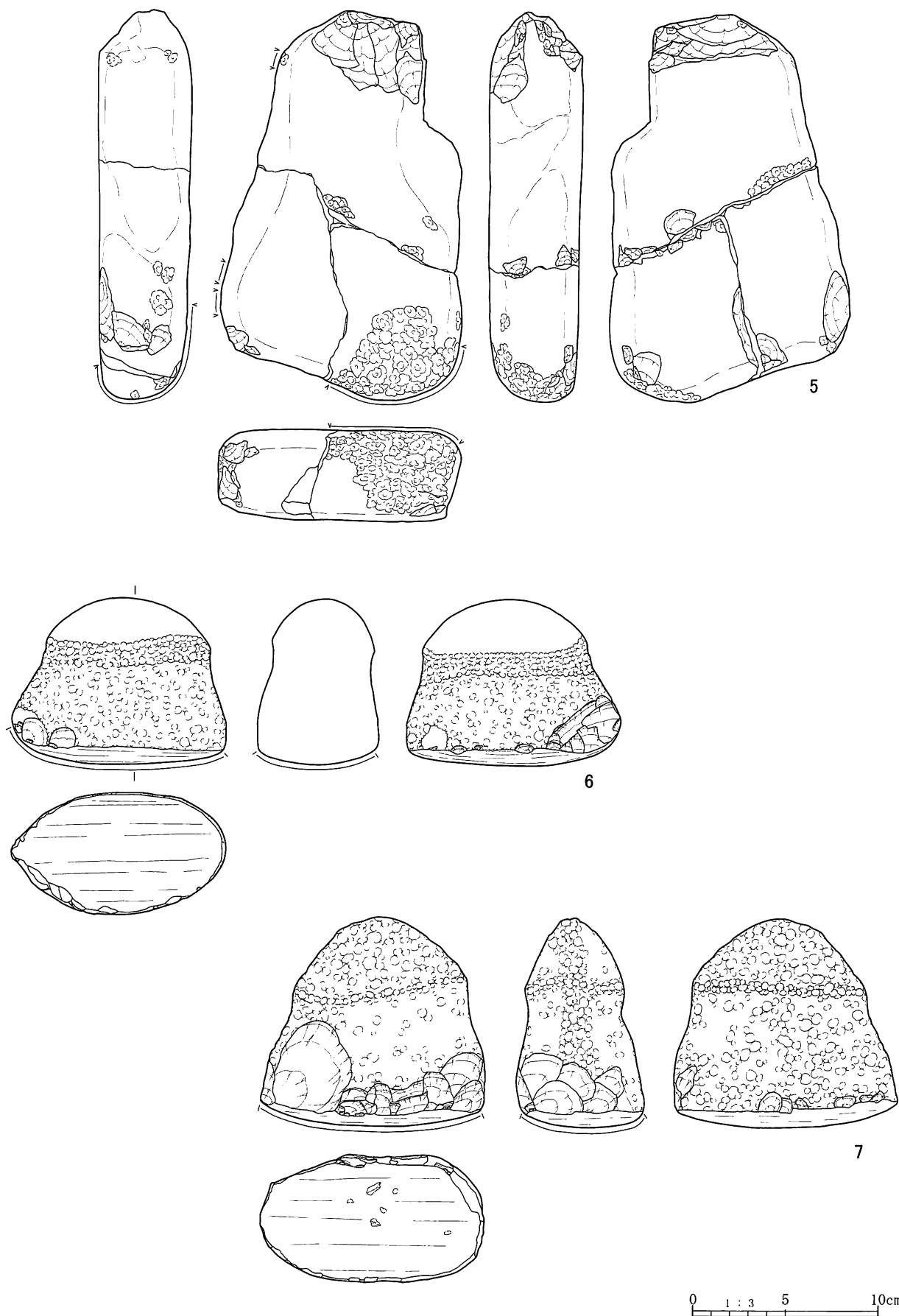
AG-31・34、AH-31～35、AI-31～34、AJ-32～34、AK-33・34 区のVb層調査中に石皿を含めた、大型礫及び風化礫を検出した。フレイク・チップを除いた遺物を残しながら、これらの基底面までの調査を行った。周辺では、これら石皿・すり石等の礫石器や大型礫を除いた遺物の分布は希薄であることから、この範囲は石皿を使用する作業が主体であると想定し作業場跡と捉えた。特に石皿のまともが見られたAI・AJ-32・33の出土状態の撮影を行い、微細図を作成している。この後で遺物の取上げを行い調査終了とした。

規模は2200×2000cmの広範囲である。この範囲から石皿は12点、北海道式石冠を含めたすり石5点、砥石1点、たたき石1点が出土している。また、風化のため分類を行えなかった大型礫が5点出土している。石皿とすり石がセットで確認された所は2ヵ所あり、それぞれ作業場a・bとしている。作業場aは石皿の脇ですり石が4点出土している。石皿は表面が風化のため取上げ時に全面が剥落してしまい、使用面の詳細な観察は行えなかった。作業場bは石皿3点がまとまっており、北海道式石冠1点が出土している。作業場a・bは共に石皿とすり石がセットで出土していることからこれらを使用した作業場跡と考えられる。これ以外の部分もすり石とのセットは確認できなかったが、その他の遺物が希薄な範囲に石皿がまとまって分布することから、石皿を使用する作業場として一帯は捉えられそうである。この範囲内の同一層から土器片はⅡ群B2a類12点、Ⅱ群B2b類15点、Ⅱ群B2d類11点が出土している為、帰属時期は前期後葉頃のものと思われる。

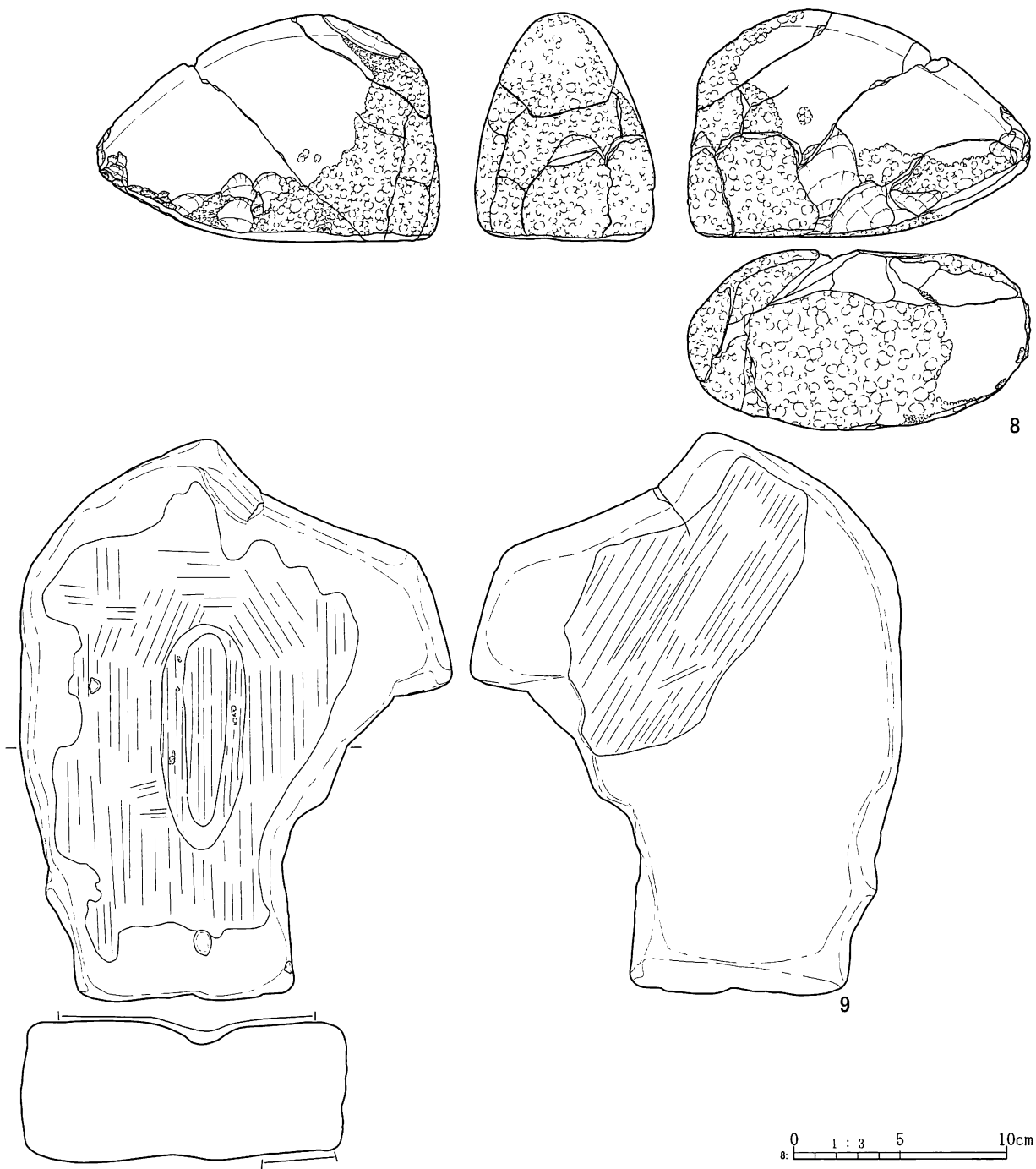
作業場跡2



図IV-63 作業場跡2遺物分布図及び出土遺物(1)

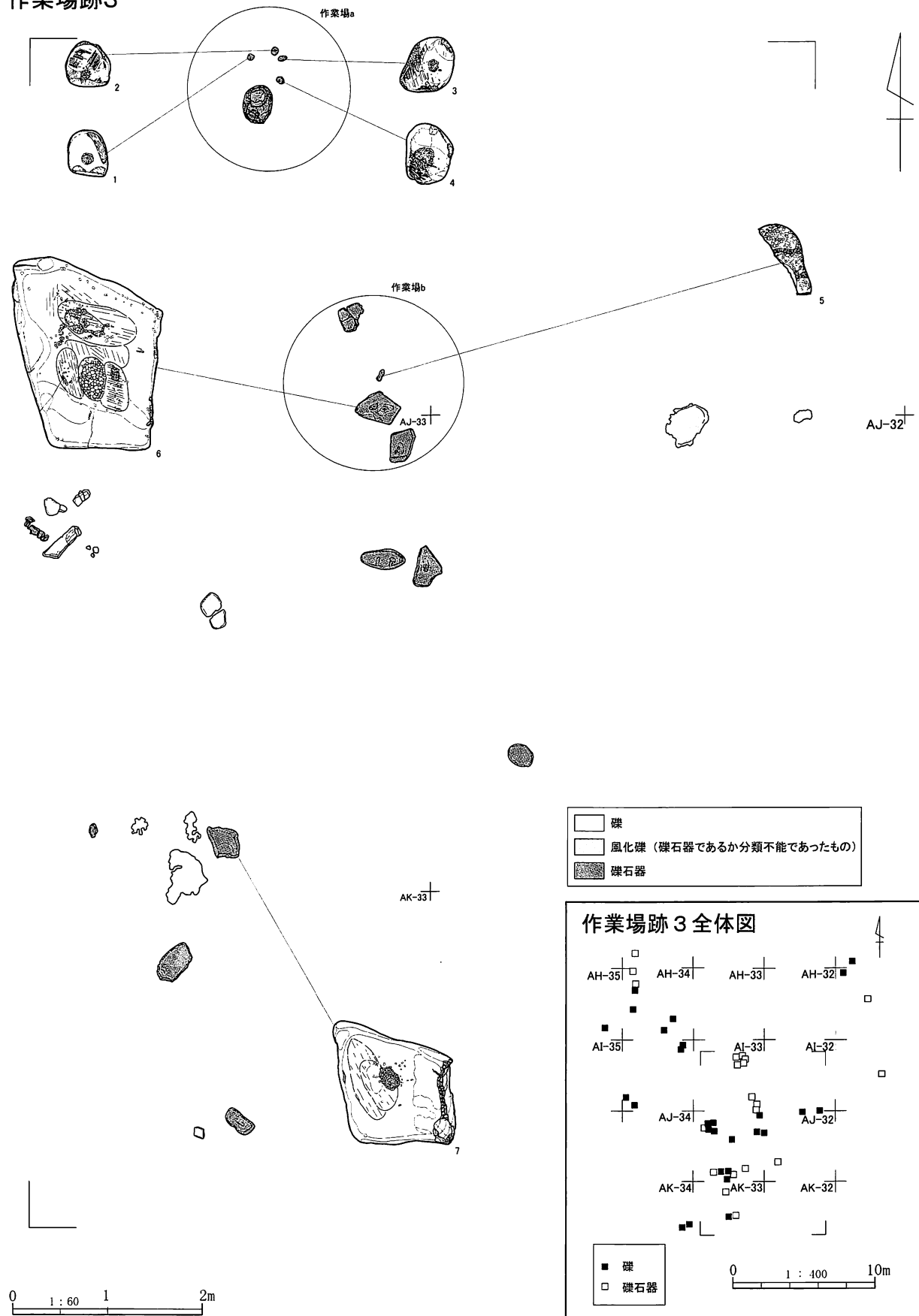


図IV-64 作業場跡2出土遺物(2)

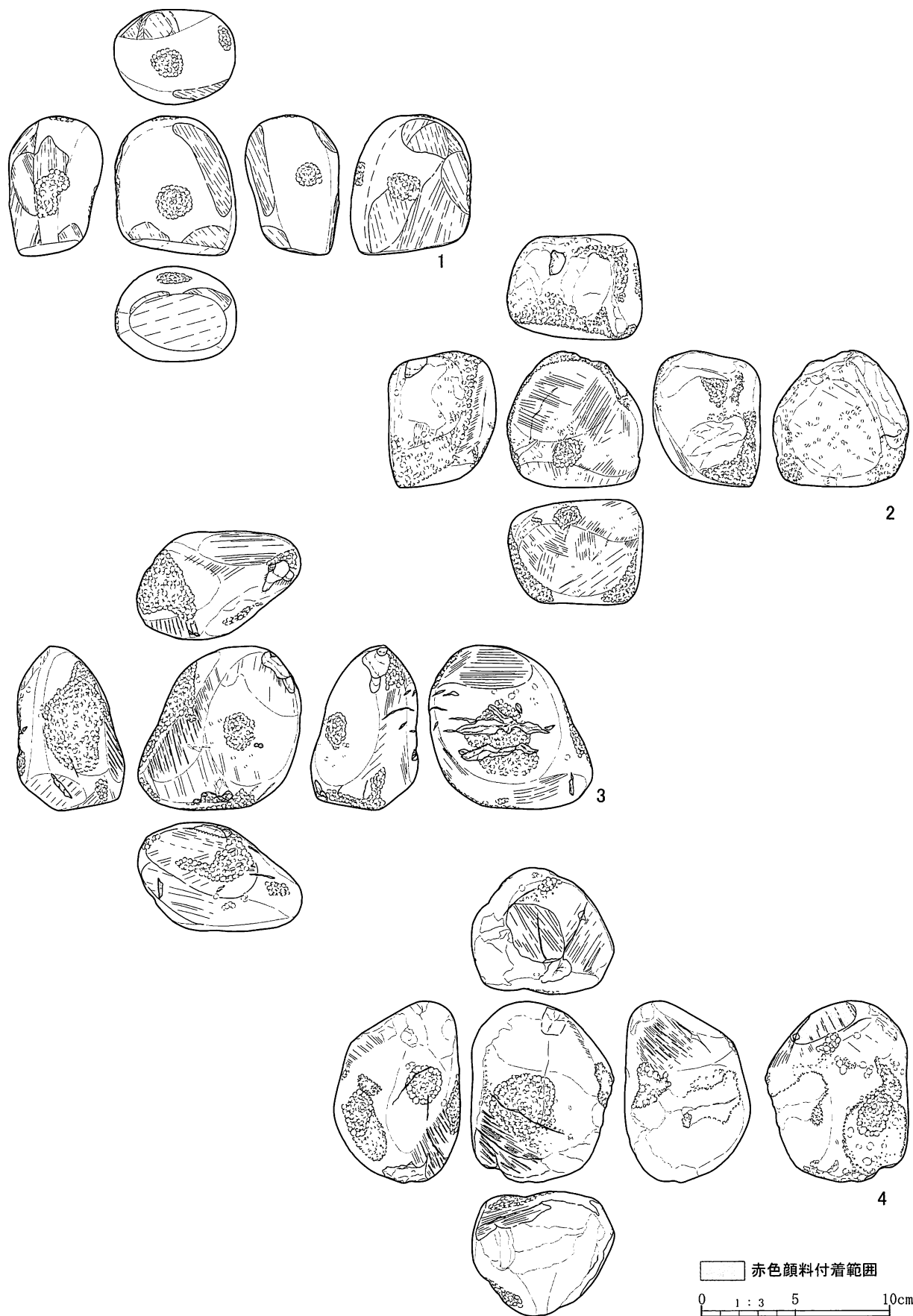


図IV-65 作業場跡2出土遺物(3)

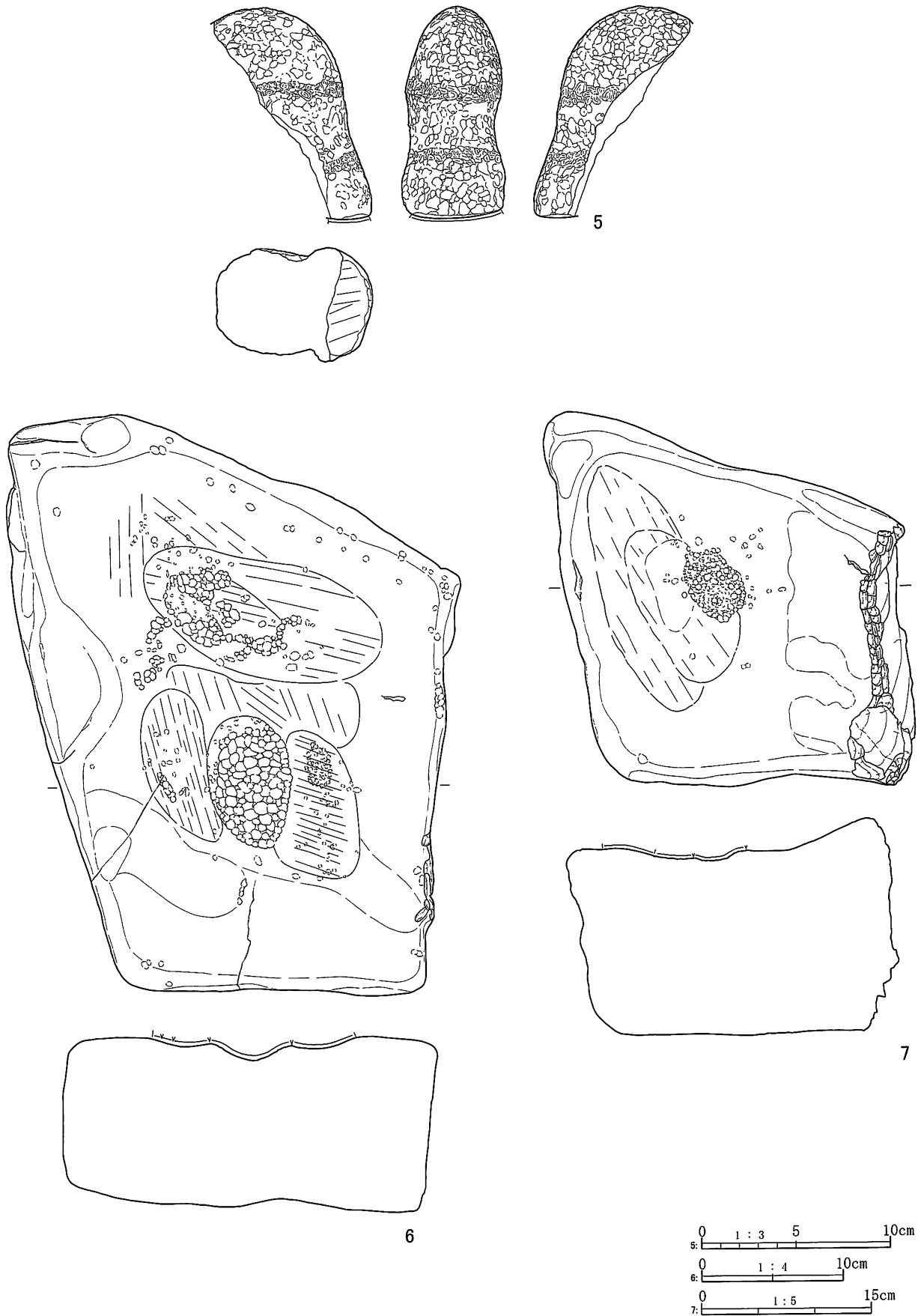
作業場跡3



図IV-66 作業場跡3遺物分布図



図IV-67 作業場跡3出土遺物(1)



図IV-68 作業場跡3出土遺物(2)

表IV-40 作業場跡出土礫石器属性表

挿図 番号	図版番 号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層 位	遺構名	グリッド	計測値(mm)			重量 (g)	材質
									長軸	短軸	厚さ		
IV-61-1	54-1	-	65689	石 皿	-	VbL	作業場1	AF-24	338.0	254.0	122.0	12660.0	Sa.
IV-61-2	54-2	-	65683	石 皿	-	VbL	作業場1	AF-25	377.0	330.0	145.0	28580.0	Sa.
IV-62-3	55-3	-	65687	石 皿	-	VbL	作業場1	AF-25	(427.0)	329.0	95.0	(17840.0)	Sa.
IV-63-1	55-4	-	62487	石 斧	B	VbL	作業場2	AC-33	148.0	51.0	17.9	170.0	Gr-Mud.
IV-63-2	55-5	-	62488	たたき石	IV	VbL	作業場2	AC-33	(70.0)	61.0	24.5	(120.0)	Sa.
IV-63-3	55-6	-	62489	たたき石	IV	VbL	作業場2	AC-33	(55.0)	42.0	35.0	(110.0)	Sa.
IV-63-4	55-7	-	62499	たたき石	IIA1	VbL	作業場2	AC-32	115.0	89.0	39.8	500.0	Sa.
IV-64-5	55-8	VST-263	62480他	たたき石	IIA3	VbL	作業場2	AC-33	210.0	127.4	48.3	1910.0	Sa.
IV-64-6	55-9	-	62496	すり石	D	VbL	作業場2	AC-32	115.2	86.5	64.5	875.0	Sa.
IV-64-7	55-10	-	62494	すり石	D	VbL	作業場2	AC-33	120.0	112.0	66.8	1140.0	Sa.
IV-65-8	55-11	VST-210	62497他	すり石	D	VbL	作業場2	AC-33	160.0	106.0	81.5	1825.0	Sa.
IV-65-9	55-12	-	62495	石 皿	-	VbL	作業場2	AC-33	350.0	271.0	78.0	11260.0	Sa.
IV-67-1	56-1	-	68366	すり石	F	VbL	作業場3	AI-34	72.0	64.0	48.4	390.0	Gni.
IV-67-2	56-2	-	68367	すり石	F	VbL	作業場3	AI-34	72.0	72.0	56.2	510.0	Bs.
IV-67-3	56-3	-	68368	すり石	F	VbL	作業場3	AI-34	85.0	81.0	52.8	520.0	Sa.
IV-67-4	56-4	-	68369	すり石	F	VbL	作業場3	AI-34	96.0	75.0	65.4	655.0	Bs.
IV-68-5	56-5	-	68370	すり石	D	VbL	作業場3	AI-33	(84.0)	(121.0)	51.0	(358.0)	And.
IV-68-6	56-6	-	68371	石 皿	-	VbL	作業場3	AI-33	410.0	321.0	125.0	27280.0	Sa.
IV-68-7	56-7	-	63155	石 皿	-	VbL	作業場3	AJ-33	330.0	324.0	190.0	28260.0	Sa.

出土遺物 (図IV-61~65・67・68) : 61-1~62-3 は石皿である。1 は両面に擦り面がある。表面は幅が広く平坦である。擦り面の中央には楔が打ち込まれたような深い溝が見られる。一端は両面から打ち欠きが行われている。2 は中央に大きく窪む擦り面がある。周囲には窪み及び粗面整形時の敲打痕が残る。周縁には表面及び側面からの打ち欠きが巡る。3 は下端部が欠損している。表面には大きく楕円形状に窪む擦り面が2カ所ある。実測図で上に位置する擦り面の周囲は明瞭な擦り痕は観察できないが、滑沢面を形成している。下に位置する擦り面の周囲には粗面整形時の敲打痕が残る。擦り面の中に1と同様の楔が打ち込まれたような深い溝がある。擦り面の中に認められる深い溝は他の石皿にも見られることから、意図的なものと考えられる。63-1 は石斧の未製品である。周縁を部分的に調整し整形している。63-2~4、64-5 はたたき石である。2・3 はともに欠損している。4 は扁平な礫の両面に浅く窪む敲打痕をもつものである。64-5 は3点接合しているがそれぞれの破断面に敲打痕もしくは破断面側からの打ち欠きが見られる。64-6・7、65-8 は北海道式石冠である。6の頂部は整形されていない。7は頂部が尖り状である。8は破断面と右側面を主に敲打整形しており、把握部の形成には至っていないが形態より北海道式石冠の未製品と分類した。9点が接合しており、底面からの敲打によって破損したと思われる。9は石皿で、両面に擦り面がある。表面は幅の広く平坦な擦り面で、中央に深さ10mm程の溝状を呈する擦り窪みがある。窪みの断面形状より球状礫を素材とするすり石を使用したと思われる。67-1~4 はすり石である。平面形は楕円もしくは円形の厚みのある礫を素材とするもので、たたき石と併用している。擦り面は多面に形成されており、擦りの単位ごとに明瞭な稜を残しているものが多い。中には礫の形状を大きく変え、平坦で幅広な面を形成しているものがある。敲打痕は面の中央付近で円形・楕円形状に深く窪むものと、浅く

素材の形状を殆ど変えないタイプの2種類が見られる。敲打痕と擦り面の切り合いの新旧は両方が認められることから、併用して使われたと考えられる。4の網掛け部は敲打後に擦りが行われており、敲打時の小さな窪みに赤色顔料が付着している。このタイプのすり石は、6及び7のような溝状の擦り面をもつ石皿とセットになると思われる。68-5は北海道式石冠で使用面は大きく欠失している。6・7は石皿である。6は表面に4ヵ所の溝状となる使用面がある。3列のうち中央は、敲打痕のみで擦られていない。但し、他の擦り面と同様に溝状であることから、敲打により粗面整形され未使用であると考えられる。石皿短軸方向と並行する溝状の擦り面の深い部分では敲打痕が残っているが、同じく粗面整形時の敲打痕と考えられる。また、裏面は図化していないが平坦な面に敲打痕が見られる。7はやや幅が広い溝状の使用面で、窪みは浅い。この使用面を切って敲打が施され、窪みとなっている。粗面整形のためであるか、使用によるものであるかは不明である。(天方)

第9節 集中遺物

集中遺物は土器集中、フレイク・チップ集中を検出している。項目ごとに記載を行う。

土器集中 (図IV-69~70)

単独で検出した土器集中は7ヵ所である。Ⅱ群B2b類2ヵ所(VPB-46・49)、中期前葉Ⅲ群A1類1ヵ所(VPB-48)、Ⅲ群B2類2ヵ所(VPB-50・51)、後期前葉Ⅳ群A2・Ⅳ群B類でそれぞれ1ヵ所ずつの計2ヵ所(VPB-45・47)である。以下個別に記載を行う。(天方)

VPB-45 (図IV-69・71 図版35-1、57-1・2)

AI-26区のVb層上位で114点の土器片が出土している。Ⅱ群B2a類の土器片が1点含まれているが、他はすべてⅣ群A2類の破片である。(天方)

VPB-46 (図IV-69・71 図版35-2、57-3・4)

AK-25区のVc層上面で54点の土器片が出土している。全てⅡ群B2b類の同一個体片である。VI層上面で不整形な落ち込みを確認し、その中央に土器集中を検出した。当初土坑の覆土中に土器が出土しているものと考え、落ち込みを半截したが、明瞭な掘り込みは確認できなかった。このような状態から、自然の窪みに土器が廃棄されたものと考えられる。(天方)

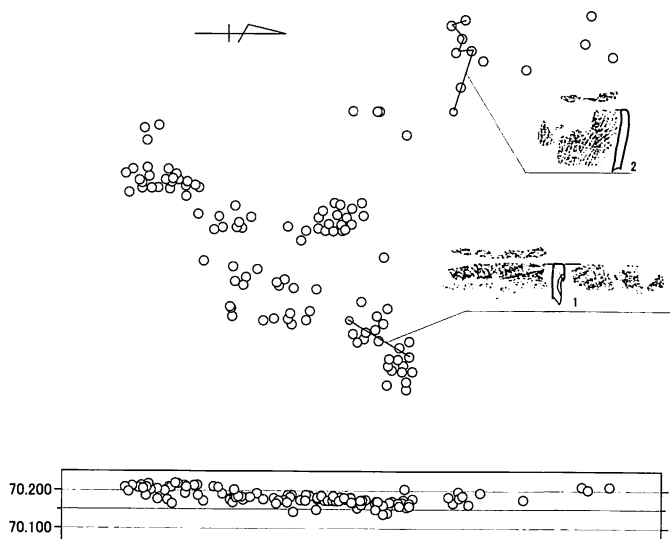
VPB-47 (図IV-69・71 図版35-3、57-5)

Va層でVH-09の竪穴北西角から竪穴外に165×151cmの範囲でⅣ群B1類の土器片が145点とまとまって出土している。土器片は殆どが碎片であり、復元に至っていない。(天方)

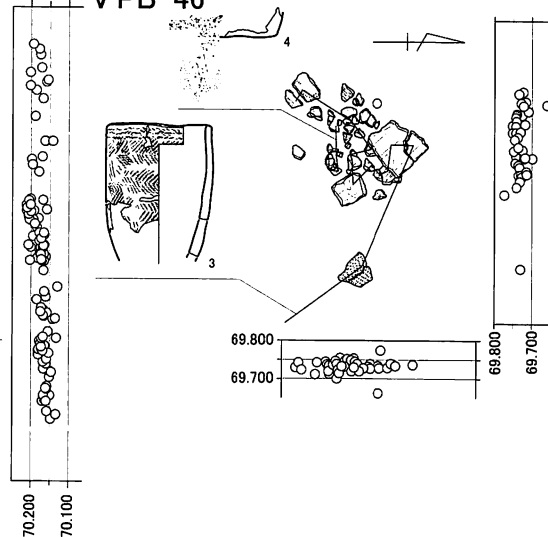
VPB-48 (図IV-69・71 図版35-4、57-6a・6b)

Z-33区で出土した。Vb層上位を調査中に土器片のまとまりを確認し、周囲を精査しながらVb層下位まで慎重に掘り下げて全体を検出した。規模は122cm×57cmで、大型の破片がまとまって検出したため、微細図を記録したのち写真撮影を行って取り上げた。(宮塚翔)

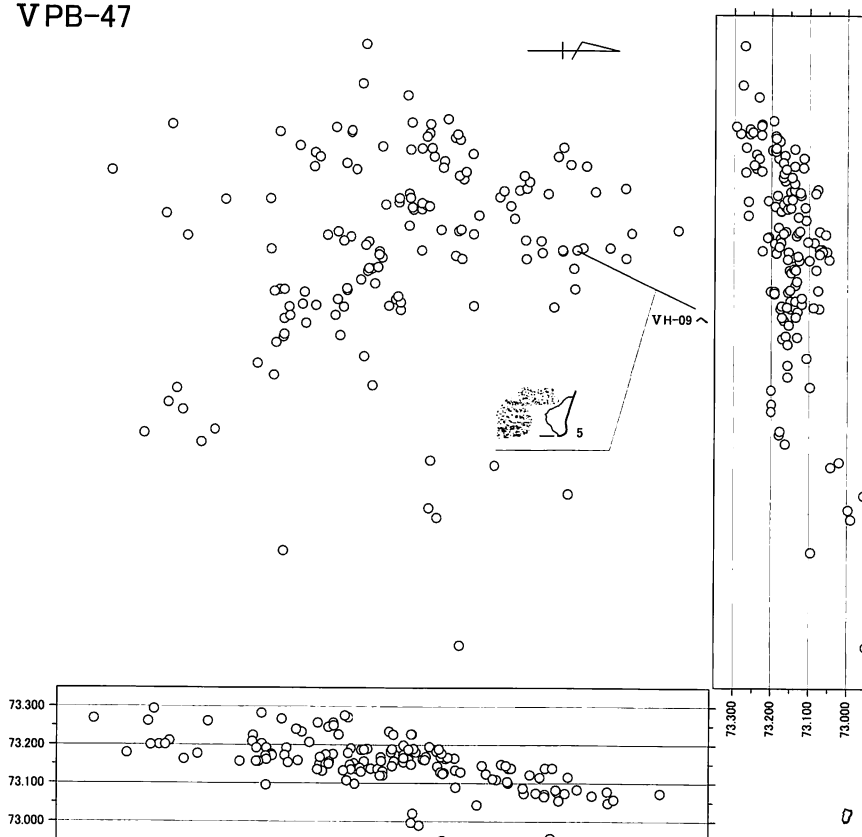
VPB-45



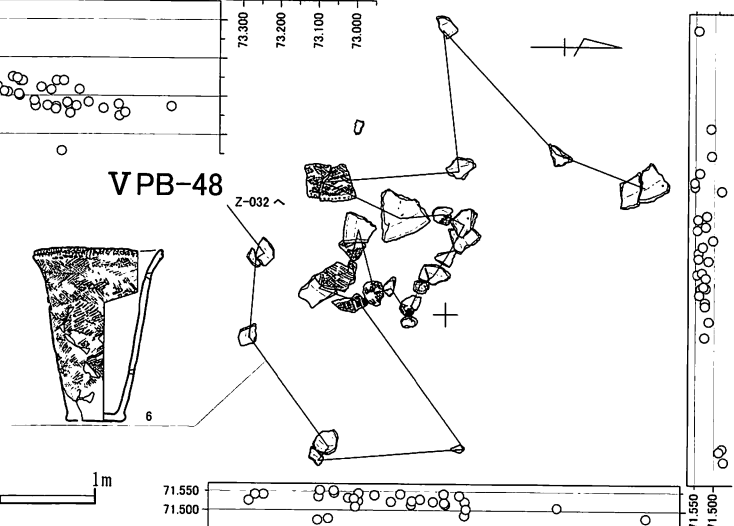
VPB-46



VPB-47



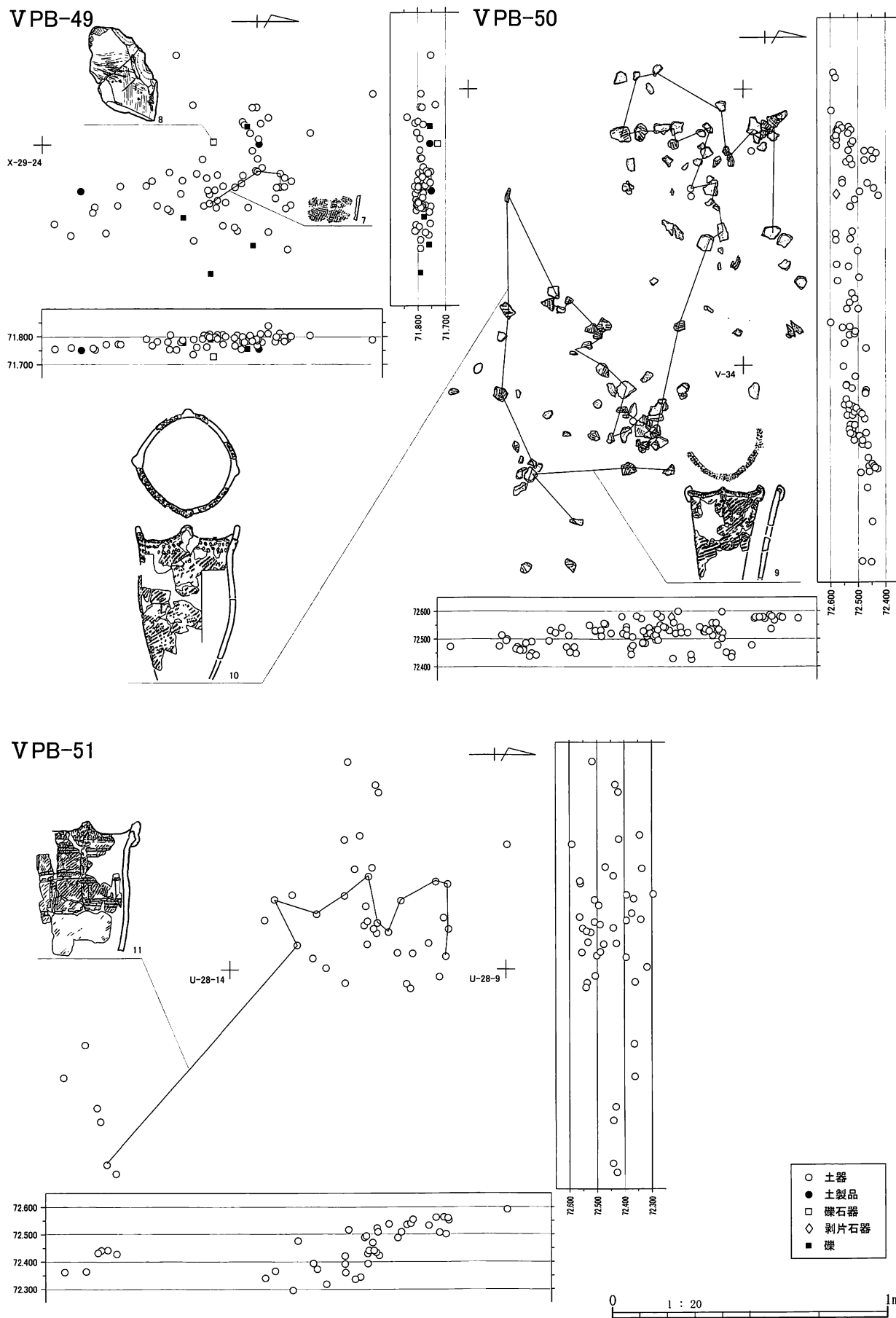
VPB-48



○ 土器

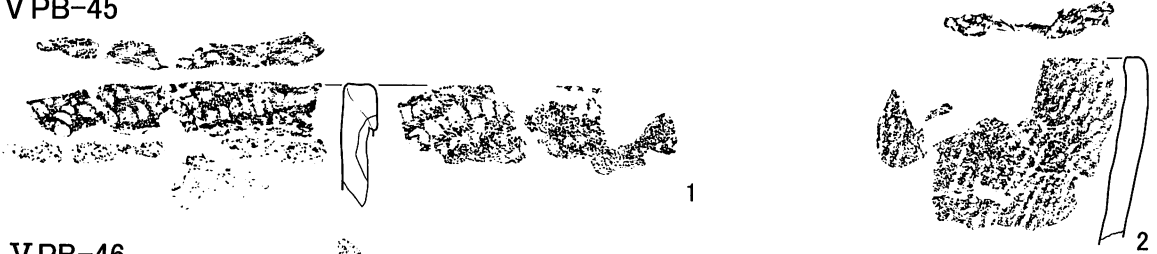
0 1 : 20 1m

図IV-69 VPB-45 ~ 48 平面及び垂直分布図



図IV-70 VPB-49 ~ 51 平面及び垂直分布図

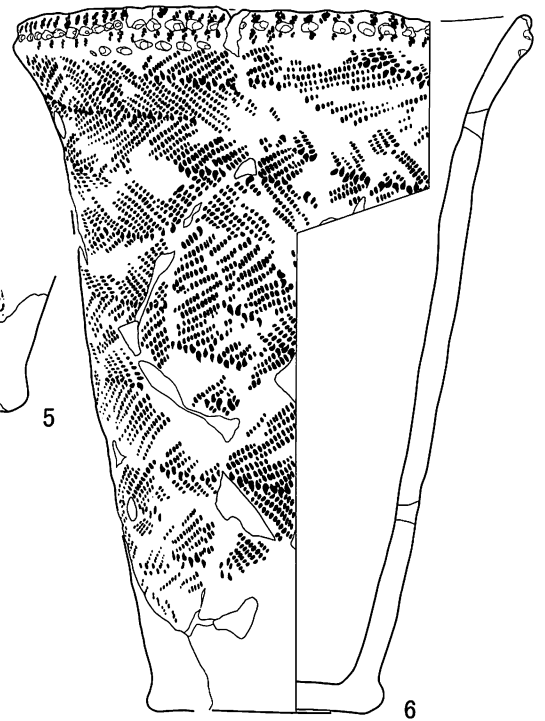
VPB-45



VPB-46



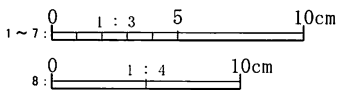
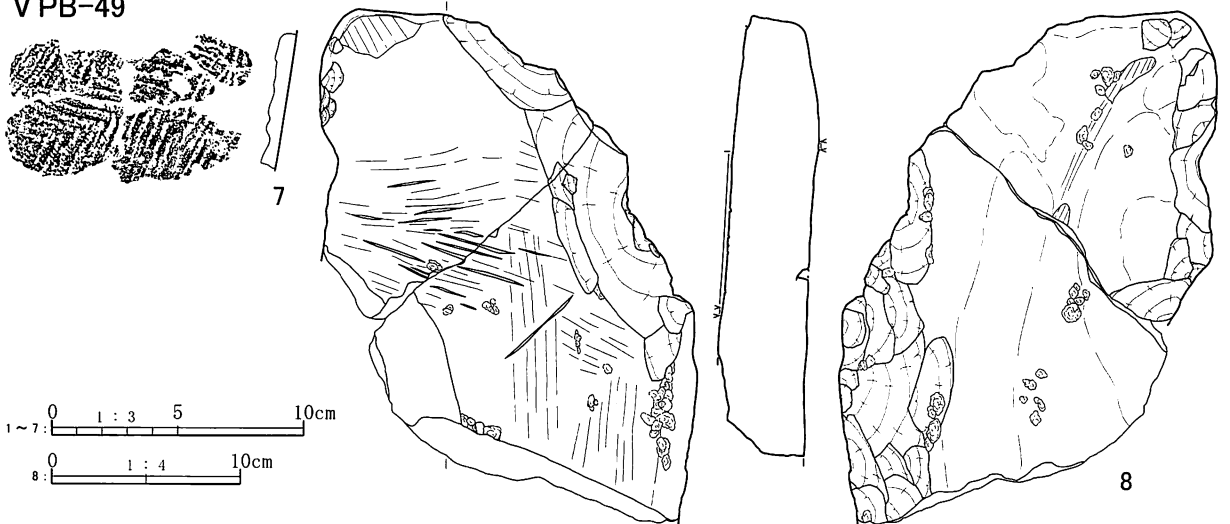
VPB-48



VPB-47

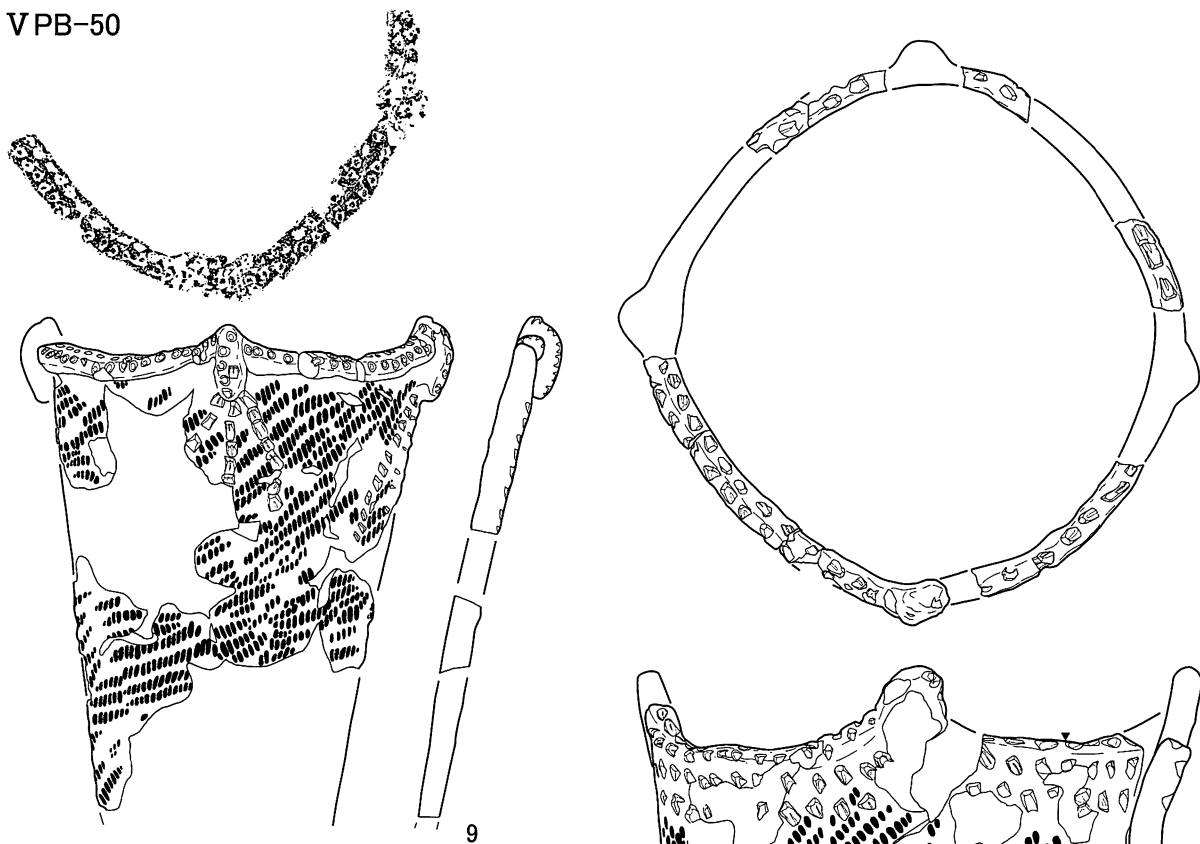


VPB-49



図IV-71 土器集中出土遺物(1)

VPB-50



9

VPB-51



11

10

0 1 3 5 10cm

図IV-72 土器集中出土遺物(2)

VPB-49 (図IV-70・71 図版 35-5、58-7・8)

VH-12の南側、X-29区で検出した。VH-12の掘り上げ土の範囲を調査中、土器片のまとまりを確認した。掘り上げ土をVb層下位まで慎重に掘り下げ、土器集中全体を検出した。規模は102×58cmで大部分が細片だったため写真撮影のみ行い、微細図は記録していない。VH-12の覆土から出土した土器とは別個体である。この土器集中範囲で石皿も出土した為本節で掲載する。

VPB-50 (図IV-70・72 図版 35-6・7、58-9・10)

U・V-34区で検出した。Vb層下位の調査中に口縁部と見られる土器片のまとまりを検出した。周囲を精査して範囲を確認したのち、Vc層まで掘り下げて全体を検出している。規模は172cm×99cmを計る。微細図を記録し、写真撮影を行って取り上げた。(宮塚翔)

VPB-51 (図IV-70・72 図版 35-8、58-11)

U-28区で検出した。Vbu層調査中、土器片のまとまりを確認した。一部が窪みに落ち込んだ状態で出土したため、集中の中央付近にトレンチを設定し、断面を確認しながら全体を検出した。更に周囲をVc層まで掘り下げた結果、根によって土器片が乱されたものと判断できたため、写真撮影の後、取り上げを行い調査終了とした。(宮崎)

出土遺物 (図IV-71・72) : 1は貼付帯1Bで内面にもLR縄文を施す。2は口唇部に縄文を施す。1はIV群A2類、2はIV群B1類に属す。3は口唇部に縄線文を施文した後、部分的にヘラミガキが加えられている。口縁部は縄線文、胴部は多段のLR縄文+LR縄文(撚り戻し)の羽状縄文。4は底面にLR斜行縄文が施される。いずれもII群B2b類に属す。5はIV群B1類に属する、底部側縁が指頭によるナデ調整で、波状に仕上げられている。6は口縁部貼付帯の上に縄線文と円形刺突文が施され、口縁部から胴部までLR結節羽状縄文で埋められ、方向を違えて施文された個所は菱形模様をなす。III群A2類。7は異原体羽状縄文が施された、やや薄手の土器である。II B2b類に属する。8は両面に使用痕がある砂岩製の石皿である。多方向の擦痕と、わずかな敲打痕が認められる。裏面はごく狭い範囲に敲打痕と擦痕が見られる。72-9・10はいずれもIII群B2類に属し、4ヵ所の突起をもつ。9は口唇部に円形刺突文、突起下から3方向に垂下する突引文が施される。10は突引文が口唇部・口縁部(2段)に施され、口縁部以下はLR斜行縄文が施される。11は3ないし4ヵ所の突起をもつ深鉢形土器。突起の間隔が同じではなく、あるいは上面観が歪つな矩形をなすとも思われる。口縁に貼付帯を持ち、貼付帯の上には突引文が縦位に施される。胴部はRL斜行縄文の上に、2列の突引文が縦位・横位に施文される。(71-8 : 宮崎 他 : 宮塚義)

フレイク・チップ集中

剥片集中は5ヵ所検出している。分布は特に偏りは見られない。(天方)

VFCB-23 (図IV-73 図版 58-12)

AB・AC-28・29区で検出した。Va層調査中にフレイク・チップが広範囲にわたって出土したため、VFCB-23を付番し、トータルステーションで範囲を記録した。フレイク・チップを一括して取り上げた後、更に精査を続けたところ、Vb層でも広い範囲で検出されたので、範囲をトータルステーションで記録、Vc層でも同様の調査を繰り返し、最後は土ごと回収した。フレイク・チップは大量で、全体で47,197点の出土である。石材の内訳は黒曜石が46,574点、頁岩が611点、メノウが12点である。回収した土の中から黒曜石製のポイント類が1点、出土した為図示した。

表IV-41 土器集中出土土器属性表

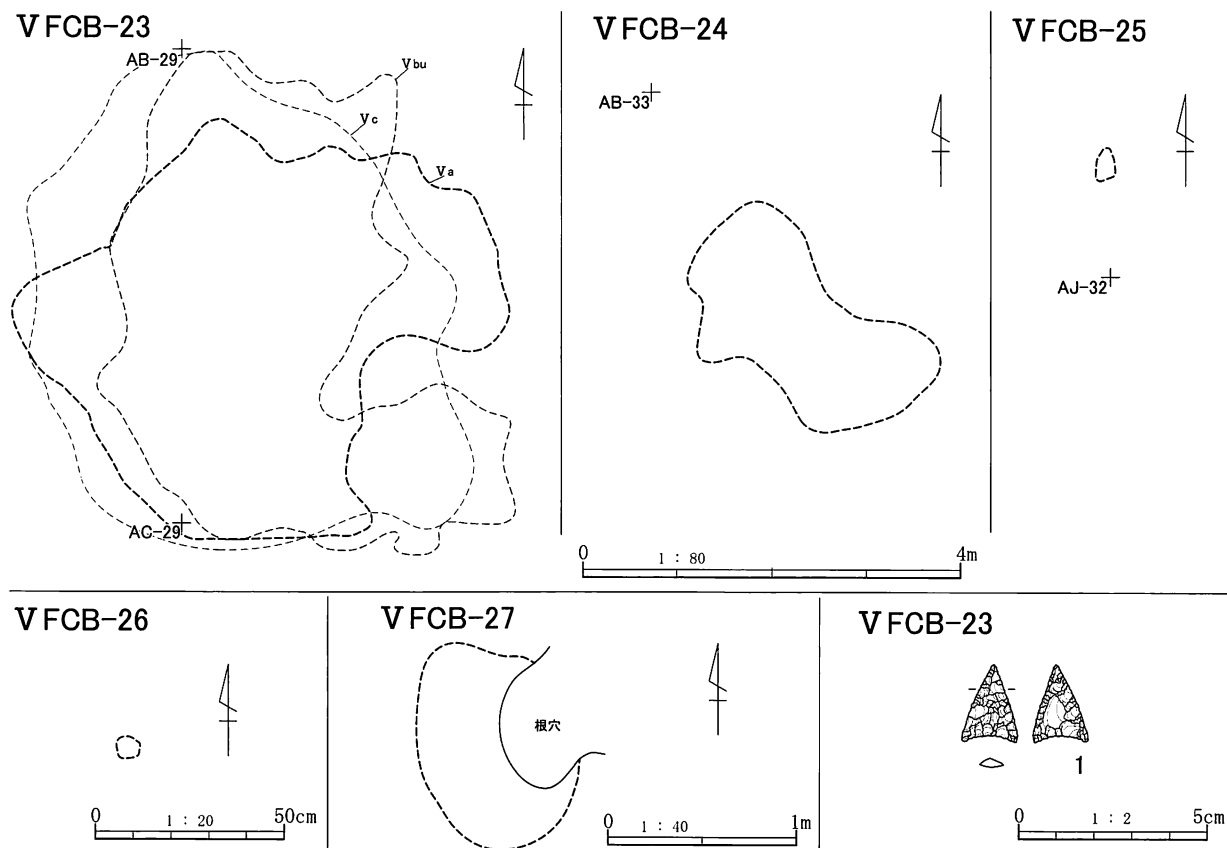
挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点数	部位	器形等	文様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部 /底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
IV-71-1	57-1	JP436 A	IVA2	VPB-45/ AI-26	VbU・ bL	2	口縁部	平縁・直立-角状	貼付帯1B・LR縄文- LR縄文-LR縄文	砂粒少量 混入	
IV-71-2	57-2	JP433 A	IVB1	VPB-45/ AI-26	VbU・ bL	6	口縁部 ~胴部	平縁・直立-角状 /やや外傾	RL縄文-RL斜行縄文 +ナデ-ナデ/RL斜行 縄文+ナデ-ナデ(ナ ナメ)	繊維・砂粒 少量混入	
IV-71-3	57-3	JP448 A	II B2b	VGP-29・ VPB-46/ AK-25	VbL・ c・2	24	口縁部 ~胴部	平縁・直立-外削 /やや外傾	縄線文+ヘラミガキナ デ-縄線文(同一糸異 原体)-ナデ/LR縄文 +LR縄文(撚り戻し) 羽状縄文-ナデ	繊維・砂粒 少量混入	補修 孔
IV-71-4	57-4	JP448 B	II B2b	VPB-46	Vc	5	底部	やや外傾-角状 -やや上げ底	LR縄文+LR縄文(撚り 戻し)羽状縄文-LR縄 文+LR縄文(撚り戻し) 羽状縄文	繊維・砂粒 少量混入	IV71- 3と同 一個 体?
IV-71-5	57-5	JP447 A	IVB1	VH-09・ VPB-47	Va・2	2	胴部~ 底部	外傾/外反-張り 出し-上げ底?	RL縄文-ナデ/(張り 出し部)ナデ-ナデ	砂粒多量 混入	
IV-71-6	57- 6a 57- 6b	JP450 A	III A2	VPB-48/ Z-33	VbU	29	口縁部 ~底部	平縁・外反-外削 /やや外傾/外傾 -微小張り出し- 平底	貼付帯+縄の圧痕+ 円形刺突文-ミガキ (ヨコ)/RL+LR結節羽 状縄文(部分的に菱 形)-ミガキ(タテ)/同 上羽状縄文/ナデ-ミ ガキ-ミガキ	繊維微量・ 砂粒少量 混入	補修 孔
IV-71-7	58-7	JP470 A	II B2b	VPB-49	MO	5	胴部	やや外傾	異原体羽状縄文 +ナデ	繊維・砂粒 少量混入	内面 剥落
IV-72-9	58-9	JP451 A	III B2	VPB-50/ U・V-33・ W-30	VbU・ bL	16	口縁部 ~胴部	突起・やや外傾・ 隅丸角状/やや 外傾	突起部貼付帯(タテ)+ 円形刺突文-貼付帯 +円形刺突文-ナデ /LR斜行縄文+突引 文(内)-ナデ	砂粒少量 混入	
IV-72-10	58-10	JP456 A	III B2	VPB-50/ U・V-33・ U・V・W- 34	VbU・ bL	77	口縁部 ~胴部	突起・やや外傾・ 外削・(上半)直 立・(下半)外傾	突引文(外)-突引文 (外)2段-ナデ/LR 斜行縄文-ナデ	繊維微量・ 砂粒少量 混入	
IV-72-11	58-11	JP452 A	III B1	VPB-51/ U-28	VbU・ bL・c	22	口縁部 ~胴部	突起・外傾-三角 形/(上半:やや外 反・下半:外傾)	貼付帯-突引文(内) -ナデ/RL斜行縄文 +2列突引文(内)- ナデ	砂粒少量 混入	

表IV-42 VPB-49出土礫石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
IV-71-8	58-8	VST 464	144132 X-28-3-80	石 皿	-	MO KR	(260.0)	(215.0)	58.9	3200	Sa.	

表IV-43 VFCB-23出土剥片石器属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
IV-73-1	58-12	-	VFCB -23-3	ポイント類	A2	Vc	20.5	15.0	2.4	0.6	Obs.	



図IV-73 VFCB-23～27 平面図及び出土遺物

VFCB-24 (図IV-73)

AB-32 区で Vb 層上位調査中に検出した。出土範囲は 280×176cm で、黒曜石製のチップが 875 点、頁岩製が僅かに 4 点の出土である。

VFCB-25 (図IV-73)

AI-31・32 区で検出した。32×20cm の範囲で緑色泥岩製のフレイク・チップが 14 点出土している。

VFCB-26 (図IV-73)

AF-24 区で VI 層精査中に検出した。直径約 6cm の円形の穴に、フレイク・チップが密に詰まった状態で出土したため、VFCB-24 を付番した。点数は 250 点で、石材はすべて黒曜石製である。

VFCB-27 (図IV-73)

AI・AJ-24 区で、VbL 層調査中に検出した。出土範囲は 112×72cm で、一部が根穴によって乱されていた。出土したフレイク・チップは、ほとんどが黒曜石製で 164 点、頁岩製が 1 点である。

(天方)

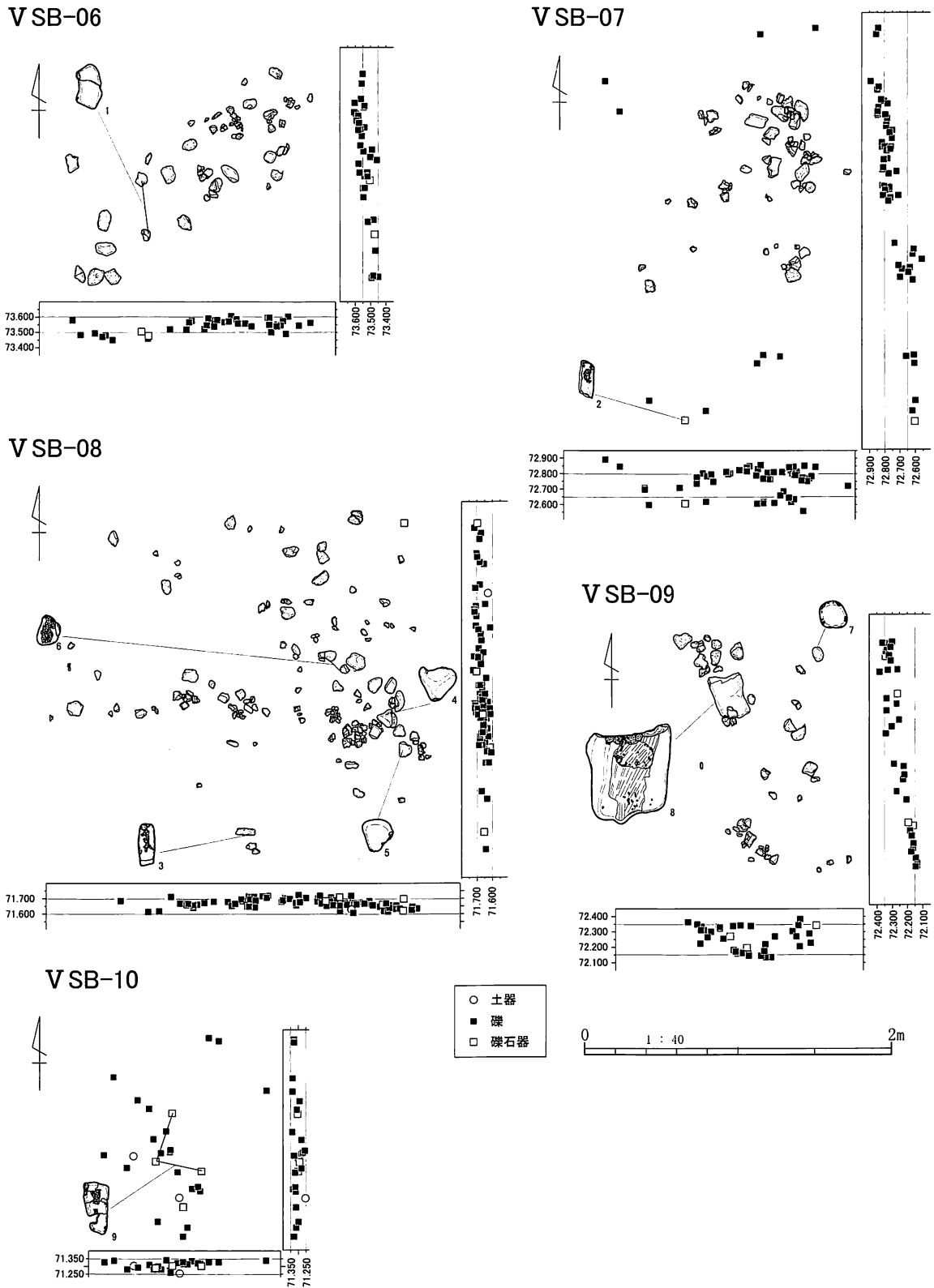
礫集中

単独の礫集中は平成 24 年度に検出した 5 ヲ所である。以下に個別に記載する。

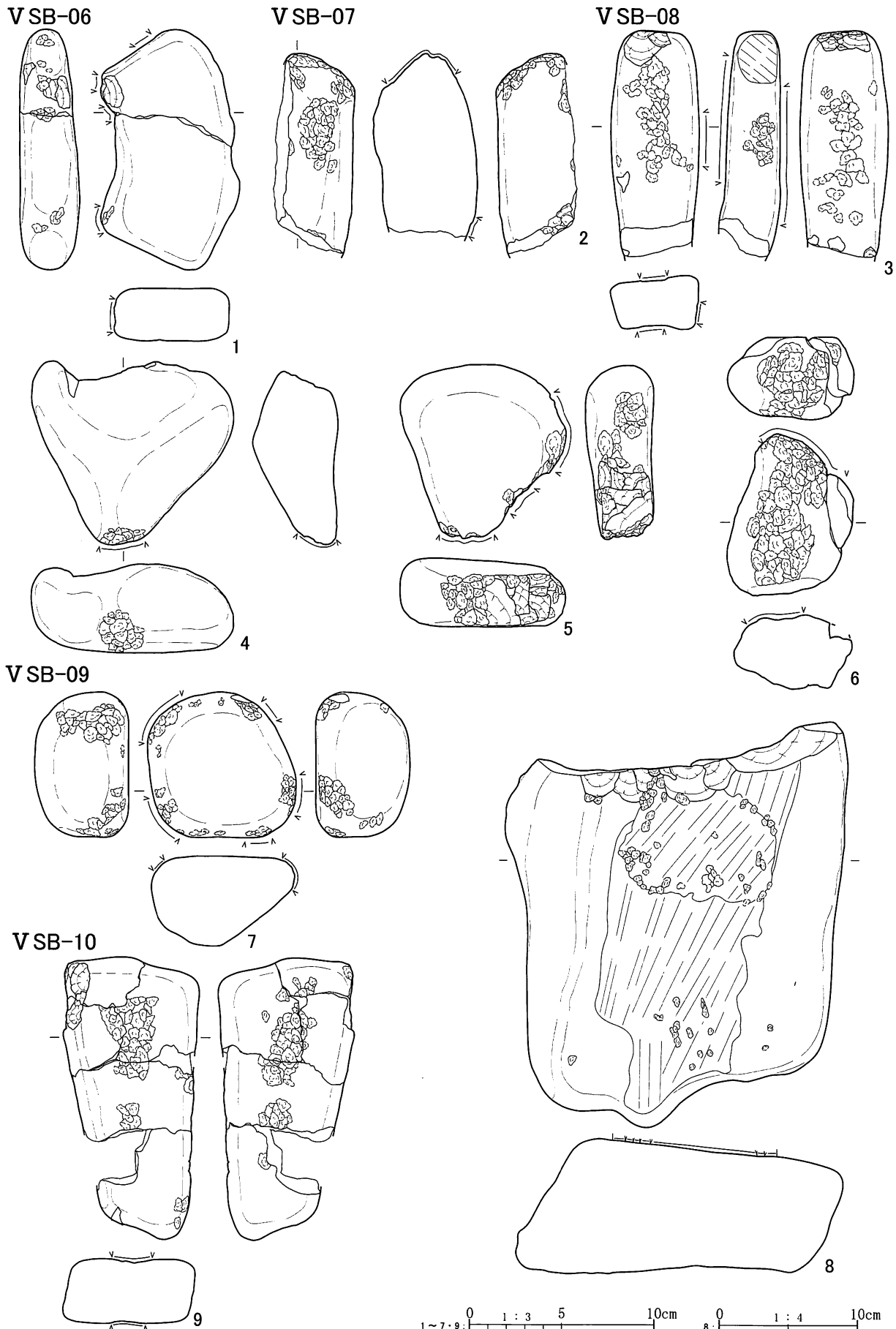
VSB-06 (図IV-74・75 図版 36-1、59-1、60-1)

R-28・29 区で検出した。Vb 層上位を調査中、VH-04 の南東側で被熱礫のまとまりを確認したた

め、Vb層下位まで掘り下げ全体を検出した。規模は196×88cmの範囲で比較的まとまって出土している。礫の総数は51点、そのうち完形礫は21点で、同集中内からたたき石1点も出土している。



図IV-74 VSB-06～10平面及び垂直分布図



図IV-75 VSB-06 ~ 10 出土遺物

礫の大きさは長軸が10cm前後のものが多数を占め、方形で5cm前後の厚みを持つものが多い。被熱の割合は62%である。

VSB-07 (図IV-74・75 図版 36-2、59-2、60-2)

T・U-30区で検出した。Vb層調査中、礫のまとまりを確認し、Vc層まで掘り下げ全体を検出した。礫は264×172cmの範囲に散在した状態で、総数は61点、うち完形礫は10点である。他に礫石器1点が出土している。礫は長軸が12cm以上で、平面形が三角形や方形の扁平なものが多く、約80%が被熱している。

VSB-08 (図IV-74・75 図版 36-3、59-3~6、60-3)

VH-12から約4m東側のX-28区で、IV層を除去した時点で被熱礫を確認した。Va層~Vb層上位を掘り下げ全体を検出したところ、248×199cmの範囲に礫が散在していた。破片を含めた総数は93点で、接合後、完形・略完形になったものは18点である。他にたたき石4点が出土した。

完形礫は約4~13cmと大きさに規格性は認められないが、平面形では扁平のものが多く94%が被熱している。ほとんどの礫がVb層下位で出土していることからVH-12と同時期の縄文時代前期後葉に帰属すると考えられる。

VSB-09 (図IV-74・75 図版 36-4、59-7・8、61-4)

V・W-33区で検出した。Vb層上位を調査中、VH-13の南西側で被熱礫のまとまりを確認した。188×112cmの規模で、大型の石皿を中心に破損した被熱礫が散在した状態で検出した。礫の総数は37点で、完形礫は11点。そのうち9点が被熱したものである。他にたたき石1点が出土している。本礫集中は縄文時代前期後葉のVH-13から南西側に約1.5mの地点で出土しているが、西側に約3m離れた地点で縄文時代中期の土器集中も検出している。本集中の検出層位はVb層上位を基底面とする礫が多数を占めることから、土器集中と関連する可能性も考えられる。

表IV-44 VSB-06~10 出土礫石器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	遺物番号	遺物名	分類	層位	遺構名/グリッド	計測値(mm)			重量(g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
IV-75-1	59-1	VST 381	142826 142831	たたき石	II A2	VbL	VSB-06	115.2	61.4	30.7	400.0	Sa.	
IV-75-2	59-2	-	145034	たたき石	IV	VbL	VSB-07	(95.8)	(42.1)	50.4	(325.0)	Sa.	
IV-75-3	59-3	-	145127	たたき石	I B3	VbL	VSB-08	(121.0)	46.7	29.7	(275.0)	Sa.	被熱
IV-75-4	59-4	-	145070	たたき石	II A2	VbL	VSB-08	108.0	96.9	47.4	480.0	Sa.	被熱
IV-75-5	59-5	-	145066	たたき石	II A2	VbL	VSB-08	94.3	80.9	35.7	345.0	Sa.	被熱
IV-75-6	59-6	VST 383	145083 145079	たたき石	II B3	VbL	VSB-08	85.0	62.4	(41.0)	(259.0)	Sa.	
IV-75-7	59-7	-	143779	たたき石	II B2	VbU	VSB-09	79.3	78.0	51.1	405.0	Sa.	
IV-75-8	59-8	-	143795	石 皿	-	VbM	VSB-09	300.0	247.0	103.8	9190.0	Sa.	
IV-75-9	59-9	VST 379	144925	たたき石	I A3	VbL	VSB-10	143.7	72.4	35.9	(504.0)	Sa.	被熱
			144923			VbL							
			AA-31-1-87			VbL							
			AA-31-1-88			VbL							
			AA-31-3-146			VbU							
			144917			VbL							

表IV-45 VSB-06属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比	長短比 標準 偏差	重量 (g)	被 熱	材 質	備 考	
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ	標準 偏差							
-	60-1	-	142824	VbL	完形	136.5	36.8	68.1	-5.4	45.1	6.9	2.0	0.6	441.0	○	Sa.		
-	60-1	12VS69	142832	VbL	完形	93.9	-5.7	74.3	0.8	38.1	-0.1	1.3	-0.1	329.0	○	Sa.		
-	60-1		R-29-4-28															
-	60-1		142805															
-	60-1	12VS45	142806	VbL	完形	79.1	-20.6	73.0	-0.6	42.2	4.0	1.1	-0.3	325.0	○	Sa.		
-	60-1		142807															
-	60-1		142808															
-	60-1	12VS44	142820	VbL	完形	87.0	-12.6	86.4	12.9	47.0	8.8	1.0	-0.4	391.0	○	Sa.		
-	60-1		142821															
-	60-1	-	142835	VbL	完形	131.6	31.9	88.7	15.2	60.4	22.2	1.5	0.1	864.0	-	Sa.		
-	60-1	-	142809	VbL	完形	73.4	-26.3	72.8	-0.8	40.9	2.7	1.0	-0.4	310.0	○	Sa.		
-	60-1	-	142828	VbL	完形	131.5	31.9	83.5	10.0	53.1	14.9	1.6	0.2	690.0	-	Sa.		
-	60-1	-	142830	VbL	完形	104.0	4.3	86.8	13.3	49.7	11.5	1.2	-0.2	476.0	-	Sa.		
-	60-1	-	142800	VbL	完形	77.7	-22.0	55.3	-18.2	43.7	5.5	1.4	0.0	270.0	○	Sa.		
-	60-1	-	142829	VbL	完形	106.4	6.7	106.2	32.6	52.2	14.0	1.0	-0.4	614.0	-	Sa.		
-	60-1	-	142827	VbL	完形	113.1	13.4	75.1	1.5	31.4	-6.8	1.5	0.1	430.0	○	Sa.		
-	60-1	-	142836	VbL	完形	115.4	15.7	67.2	-6.3	55.7	17.5	1.7	0.3	421.0	-	Sa.		
-	60-1	-	142825	VbL	完形	100.7	1.0	82.6	9.1	49.5	11.3	1.2	-0.2	775.0	○	Sa.		
-	60-1	-	142834	VbL	完形	99.3	-0.4	77.6	4.1	30.9	-7.4	1.3	-0.1	269.0	○	Sa.		
-	60-1	-	142833	VbL	完形	91.4	-8.3	69.5	-4.0	34.7	-3.5	1.3	-0.1	290.0	○	Con.		
-	60-1	-	151786	VbL	完形	54.4	-45.2	46.0	-27.6	6.0	-32.2	1.2	-0.2	21.0	-	Sa.		
-	60-1	-	151784	VbL	完形	100.0	0.3	51.4	-22.2	41.0	2.8	1.9	0.6	219.0	○	Sa.		
-	60-1	12VS41	142812	VbL	完形	90.4	-9.3	69.9	-3.6	30.8	-7.4	1.3	-0.1	258.0	○	Sa.		
-	60-1		151783															
-	60-1	-	151781	VbL	完形	90.0	-9.7	67.6	-6.0	57.8	19.6	1.3	0.0	558.0	-	Con.		
-	60-1	-	151782	VbL	完形	104.4	4.7	75.2	1.7	(38.6)	-76.8	1.4	0.0	315.0	-	Sa.		
-	60-1	12VS47	142822	VbL	完形	112.8	13.1	66.6	-7.0	31.0	-7.2	1.7	0.3	305.0	○	Sa.		
-	60-1		142823															
完形合計												21 点						
完形平均値						99.7		73.5		38.2		1.4		408.1				
遺物総重量						8571.0												

表IV-46 VSB-07属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比	長短比 標準 偏差	重量 (g)	被 熱	材 質	備 考	
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ	標準 偏差							
-	60-2	-	144990	VbL	完形	130.7	24.2	55.2	-14.4	29.3	-2.9	2.4	0.8	176.0	○	Mud.		
-	60-2	12VS13	145030	VbL	完形	83.9	-22.7	76.7	7.1	31.0	-1.2	1.1	-0.4	190.0	○	Sa.		
-	60-2		145031															
-	60-2		144977															
-	60-2		144978															
-	60-2	12VS12	144980	VbL	完形	117.1	10.5	106.3	36.7	71.4	39.3	1.1	-0.4	886.0	○	Sa.		
-	60-2		144981															
-	60-2		144982															
-	60-2		145006															
-	60-2		145008															
-	60-2		145017															
-	60-2		145018															
-	60-2	12VS10	145020	VbL	完形	133.5	26.9	65.9	-3.7	58.3	26.1	2.0	0.5	552.0	○	Sa.		
-	60-2		145021															
-	60-2		145022															
-	60-2		145023															
-	60-2		145026															
-	60-2	-	145010	VbL	完形	123.3	16.8	70.5	0.9	25.1	-7.1	1.8	0.2	331.0	○	Sa.		
-	60-2		144991															
-	60-2	12VS09	144994	VbL	完形	119.9	13.4	84.9	15.4	23.1	-9.1	1.4	-0.1	317.0	○	Sa.		
-	60-2		145001															
-	60-2	-	144989	VbL	完形	124.5	17.9	72.8	3.2	29.6	-2.6	1.7	0.2	315.0	○	Sa.		
-	60-2	-	145028	VbL	完形	35.7	-70.9	29.8	-39.7	7.7	-24.5	1.2	-0.3	10.0	-	Sa.		
-	60-2	-	145029	VbL	完形	41.2	-65.4	39.2	-30.4	12.0	-20.2	1.1	-0.5	25.0	-	Sa.		
-	60-2		144986															
-	60-2		144987															
-	60-2		144992															
-	60-2	12VS14	144993	VbL	完形	165.0	58.5	85.2	15.6	34.4	2.2	1.9	0.4	361.0	○	Sa.		
-	60-2		144995															
-	60-2		144996															
-	60-2		145015															
完形合計												10 点						
完形平均値						107.5		68.6		32.2		1.6		316				
遺物総重量						3163												

表IV-47 VSB-08属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比	長短比 標準 偏差	重量 (g)	被熱	材質	備考	
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ	標準 偏差							
-	60-3		145074	12VS25	VbL	完形	118.6	35.0	73.3	7.6	38.0	9.3	1.6	0.3	476.0	○	Sa.	
-	60-3		145075															
-	60-3		145112															
-	60-3		145115															
-	60-3	-	145062	VbL	完形	80.4	-3.2	52.4	-13.3	22.4	-6.2	1.5	0.2	129.0	○	Sa.		
-	60-3	-	145073	VbL	完形	94.8	11.2	71.8	6.1	28.5	-0.2	1.3	0.0	236.0	○	Sa.		
-	60-3	-	145067	VbL	完形	83.5	-0.1	81.0	15.4	27.9	-0.8	1.0	-0.3	234.0	○	Sa.		
-	60-3	-	145050	VbL	完形	83.1	-0.5	63.1	-2.6	34.3	5.6	1.3	0.0	190.0	○	Sa.		
-	60-3		145102	12VS68	VbL	完形	59.3	-24.3	42.5	-23.2	33.0	4.3	1.4	0.1	220.0	○	Sa.	
-	60-3		145100															
-	60-3	-	145116	VbL	完形	98.5	14.9	82.0	16.3	38.1	9.5	1.2	-0.1	321.0	○	Sa.		
-	60-3	-	145110	VbL	完形	52.9	-30.7	44.6	-21.1	25.6	-3.1	1.2	-0.1	72.0	○	Sa.		
-	60-3	-	145039	VbL	完形	79.8	-3.8	74.1	8.5	24.5	-4.2	1.1	-0.2	161.0	○	Sa.		
-	60-3	-	145054	VbL	完形	83.3	-0.3	68.5	2.9	16.5	-12.2	1.2	-0.1	130.0	○	Sa.		
-	60-3		145063	12VS48	VbL	完形	103.3	19.7	72.1	6.4	26.6	-2.1	1.4	0.1	256.0	○	Sa.	
-	60-3		145064															
-	60-3		145065															
-	60-3	-	145069	VbL	完形	128.7	45.1	67.6	2.0	33.8	5.2	1.9	0.6	275.0	○	Sa.		
-	60-3		145068	12VS28	VbL	完形	106.1	22.5	74.7	9.0	36.9	8.2	1.4	0.1	314.0	○	Sa.	
-	60-3		145071															
-	60-3		145072	12VS27	VbL	完形	99.7	16.0	90.8	25.1	32.0	3.4	1.1	-0.2	350.0	○	Sa.	
-	60-3		145086															
-	60-3	-	145049	VbL	完形	54.3	-29.3	48.0	-17.7	31.9	3.3	1.1	-0.2	90.0	○	Sa.		
-	60-3	-	145045	VbL	完形	40.6	-43.0	27.8	-37.9	8.9	-19.8	1.5	0.2	12.0	-	Sa.		
-	60-3		145117	12VS21	VbL	完形	87.3	3.7	86.4	20.8	38.2	9.5	1.0	-0.3	375.0	○	Sa.	
-	60-3		145118															
-	60-3		145119															
-	60-3		145120															
-	60-3		145121															
-	60-3		145122															
-	60-3	-	X-28-4-99															
-	60-3	-	145111	VbL	完形	60.4	-23.2	51.8	-13.9	19.1	-9.6	1.2	-0.1	94.0	○	Sa.		
完形合計													18 点					
完形平均値							84.1		65.1		28.7		1.3		218.6			
遺物総重量													3935.0					

表IV-48 VSB-09属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比	長短比 標準 偏差	重量 (g)	被熱	材質	備考	
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ	標準 偏差							
-	61-4	-	143794	VbM	完形	40.4	-55.4	28.1	-44.9	11.9	-24.8	1.4	0.1	17.0	-	Mud.		
-	61-4	-	143796	VbM	完形	62.8	-33.0	32.2	-40.7	17.5	-19.2	1.9	0.6	44.0	-	Sa.		
-	61-4	-	143770	VbU	完形	99.3	3.5	95.2	22.2	34.5	-2.2	1.0	-0.3	370.0	○	Sa.		
-	61-4		143783	12VS02	VbM	完形	81.9	-13.9	85.0	12.0	54.8	18.1	1.0	-0.4	525.0	○	Sa.	
-	61-4		143784															
-	61-4		143766	12VS01	VbU	完形	146.6	50.8	74.6	1.6	47.3	10.6	2.0	0.6	635.0	○	Sa.	
-	61-4		143777															
-	61-4	-	143760	VbU	完形	104.0	8.2	71.5	-1.4	48.2	11.5	1.5	0.1	364.0	○	Sa.		
-	61-4		143787	12VS05	VbM	完形	88.2	-7.6	74.5	1.5	30.9	-5.8	1.2	-0.2	281.0	○	Sa.	
-	61-4		143788															
-	61-4		143764	12VS04	VbU	完形	104.3	8.5	96.1	23.2	32.8	-3.9	1.1	-0.3	503.0	○	Sa.	
-	61-4		143765															
-	61-4		143767															
-	61-4		143768															
-	61-4		143769															
-	61-4		143762	12VS08	VbU	完形	103.9	8.0	78.2	5.2	48.3	11.6	1.3	0.0	395.0	○	Sa.	
-	61-4		143763															
-	61-4		143775	12VS07	VbU	完形	119.4	23.6	78.2	5.2	24.8	-11.9	1.5	0.2	310.0	○	Sa.	
-	61-4		143776															
-	61-4		143771	12VS06	VbU	完形	103.2	7.4	89.1	16.1	30.7	-6.0	1.2	-0.2	355.0	○	Sa.	
-	61-4		143772															
-	61-4		143773															
-	61-4		143774															
完形合計													11 点					
完形平均値							95.8		73.0		34.7		1.4		345.4			
遺物総重量													3799.0					

表IV-49 VSB-10属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	層位	状態	計測値(mm)						長短比	長短比 標準 偏差	重量 (g)	被熱	材質	備考
						長軸	標準 偏差	短軸	標準 偏差	厚さ	標準 偏差						
-	61-5	-	144917	VbL	完形	128.7	45.4	110.0	35.0	47.6	13.1	1.2	0.1	605.0	○	Sa.	
-	61-5		144914														
-	61-5		144919														
-	61-5	12VS30	144921	VbL	完形	90.5	7.2	85.8	10.8	45.1	10.5	1.1	0.0	443.0	○	Sa.	
-	61-5		144922														
-	61-5		144933														
-	61-5		144934														
-	61-5	-	144936	VbL	完形	30.8	-52.6	29.2	-45.8	11.0	-23.6	1.1	0.0	15.0	-	Sa.	
完形合計													3 点				
完形平均値						83.3		75.0		34.6		1.1		354.3			
遺物総重量													1063.0				

VSB-10 (図IV-74・75 図版 36-5、59-9、61-5)

AA-31 区で検出した。Vb 層上位を調査中、被熱礫のまとまりを確認し、VSB-10 を付番した。136 × 104cm の範囲で礫が出土したが破損したものが多く、出土総数 26 点のうち被熱率は 80% であったが、整理作業の段階で接合して完形になったものはわずか 3 点である。他に被熱したたたき石 1 点が出土している。

出土遺物 (図IV-75) : 1 は砂岩製のたたき石で、不整形で扁平の礫の側縁にわずかな敲打痕とこれに伴う剥離がある。2 は長軸と短軸、双方向で破損したたたき石である。両平坦面と端部に使用痕があり、正面の側縁寄りには深くて密な敲打痕が、裏面の破断面付近と端部にも明瞭な敲打痕が見られる。石材は砂岩製である。3 は I B3 類の棒状のたたき石で、平坦面の 2 面と側面を使用しており、側面の端部には擦痕がある。4・5 は II A2 類で、4 は平面形が三角形の礫の端部を使用したもの。敲打範囲は狭くて深い。5 は端部から側縁にかけて敲打と剥離が連続して見られる。6 は II B3 類で厚みのある礫の正面から端部にかけて密集した敲打痕がある。3 ~ 5 は被熱している。7 は II B2 類のたたき石で、方形礫の周囲にまばらな浅い敲打痕がある。8 は大型の石皿である。端部が欠損しており、平坦面の片面を使用している。擦り面は複数の単位に分かれており、窪みは浅い。破断面には連続した剥離が認められる。9 は I B3 類で、4 点が接合したもの。側縁部の一部が欠損しているが、縦長で扁平な礫の両平坦面に密集した浅い敲打痕があり、端部には剥離が見られる。石材は、すべて砂岩製である。 (宮崎)

第10節 包含層出土遺物

1. 土器 (図IV-76~81 図版 62~65-1)

土器は遺構を含めて5,613点が出土している。分類毎の内訳はⅡ群 B2b 類 1,609点、Ⅱ群 B2a 類 1,846点、Ⅱ群 B2c 類 20点、Ⅱ群 B2d 類 517点、Ⅲ群 B 類 12点、Ⅲ群 A1 類 30点、Ⅲ群 B1 類 289点、Ⅲ群 B2 類 336点、Ⅲ群 B3a 類 2点、Ⅳ群 A2 類及びⅣ群 B1 類 808点である。Ⅱ群 B2d 類、Ⅳ群 A2 類及びⅣ群 B1 類は細片化しており出土点数が非常に多くなっているが、個体数は少ない。以下、分類毎に記載を行う。

包含層から出土した土器として掲載した土器の内、破片の一部が遺構覆土から出土し、属性表の層位の欄に遺構覆土と記載されているものは、遺構に直接関係がないと判断した物については、この節に含めた。

各分類の記載は概略に留め、掲載土器の個別の詳細は表IV-50~54を参照されたい。また、分布状況は図IV-106、出土層位毎の出土点数は表IV-50~54に示した。同一個体については同じ個体番号の後尾にアルファベットを付している。

Ⅱ群 B2b 類土器 (図IV-77-8~79-39)

VH-06の出土状態他から、Ⅱ群 B2b 類はⅡ群 B2a 類に時期的に先行する可能性が高いと考えられる土器が多いので、先に記述する。植苗式、大麻V式に相当する。宮本式を含む。

VH-06からは本類の下位に円筒土器下層 d1 式並行と思われるフゴッペ貝塚1式土器が、上位からは円筒土器下層 d2 式に比定される土器が出土している。

器種：すべて深鉢形土器の破片と思われる。図IV-78-32~36は小型の鉢形土器。

器形：VPB-46の1点(図IV-71-3)を除いて、復元個体は得られなかったため、詳細は不明であるが、3種類以上の形態に分けられる。

A型(77-8~13)：口縁部がほぼ直立し、緩やかに外傾する胴部に続く器形。VPB-46から出土した土器に代表される。

B型(77-14~78-29)：口縁部がやや外反あるいは外傾し、ほぼ直立する胴部、外傾する底部へと続く器形。口縁部が角状をなすもの、口唇部が外削されるもの、断面三角形になる口縁部形状を持つものなど、バラエティーに富む。

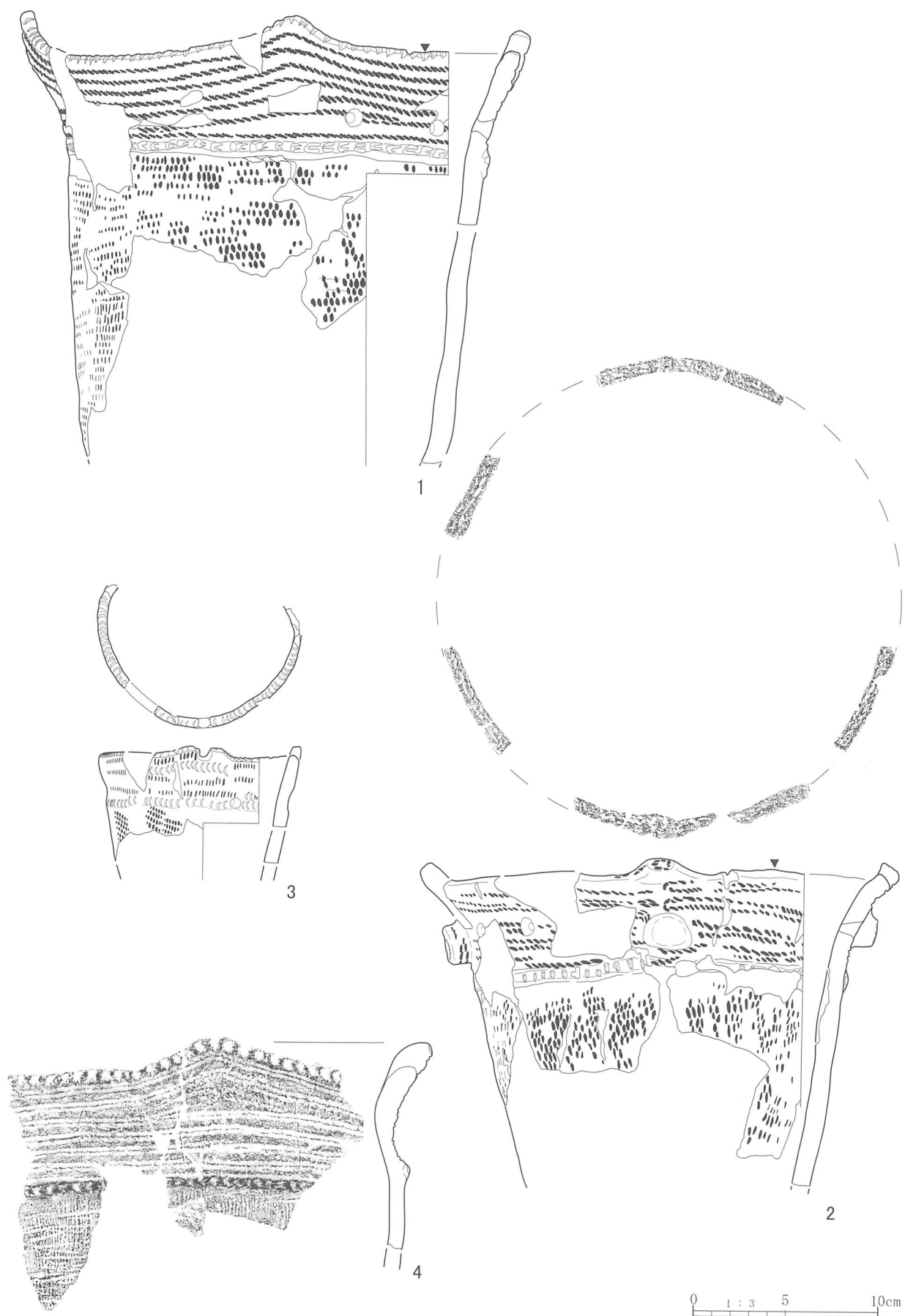
C型(78-30・31)：口縁部が内湾し外傾する胴部へと続く器形。数量的には多くない。

D型(78-32~36)：32~35は小型の鉢形土器、36を除いて器壁は薄い。尖状(32・33)と外削(34・35)する口唇部を有し、以下は外傾する胴部に移行する小型の土器群を一括した。37は口唇部が極端に屈曲する小型の鉢形土器。

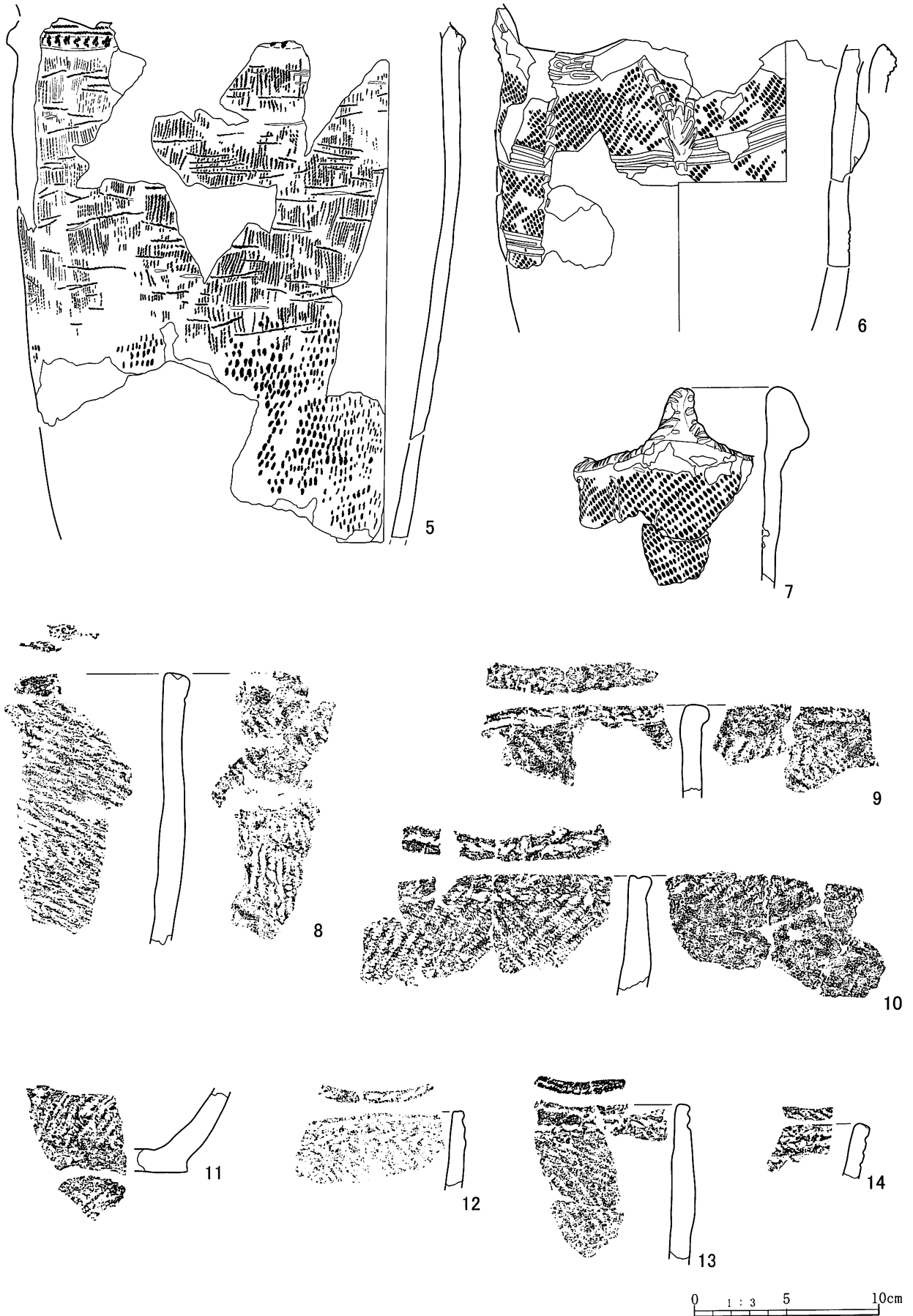
文様：縄線文と斜行縄文を主体として4種類以上の文様構成に分けられる。

A型(77-8~11)：内外面または底面に縄文が施される。8・10は口唇部に縄線文を持つ。9は植苗式に比定される本類の中でも古手と考えられる土器。器形A型と対応する。

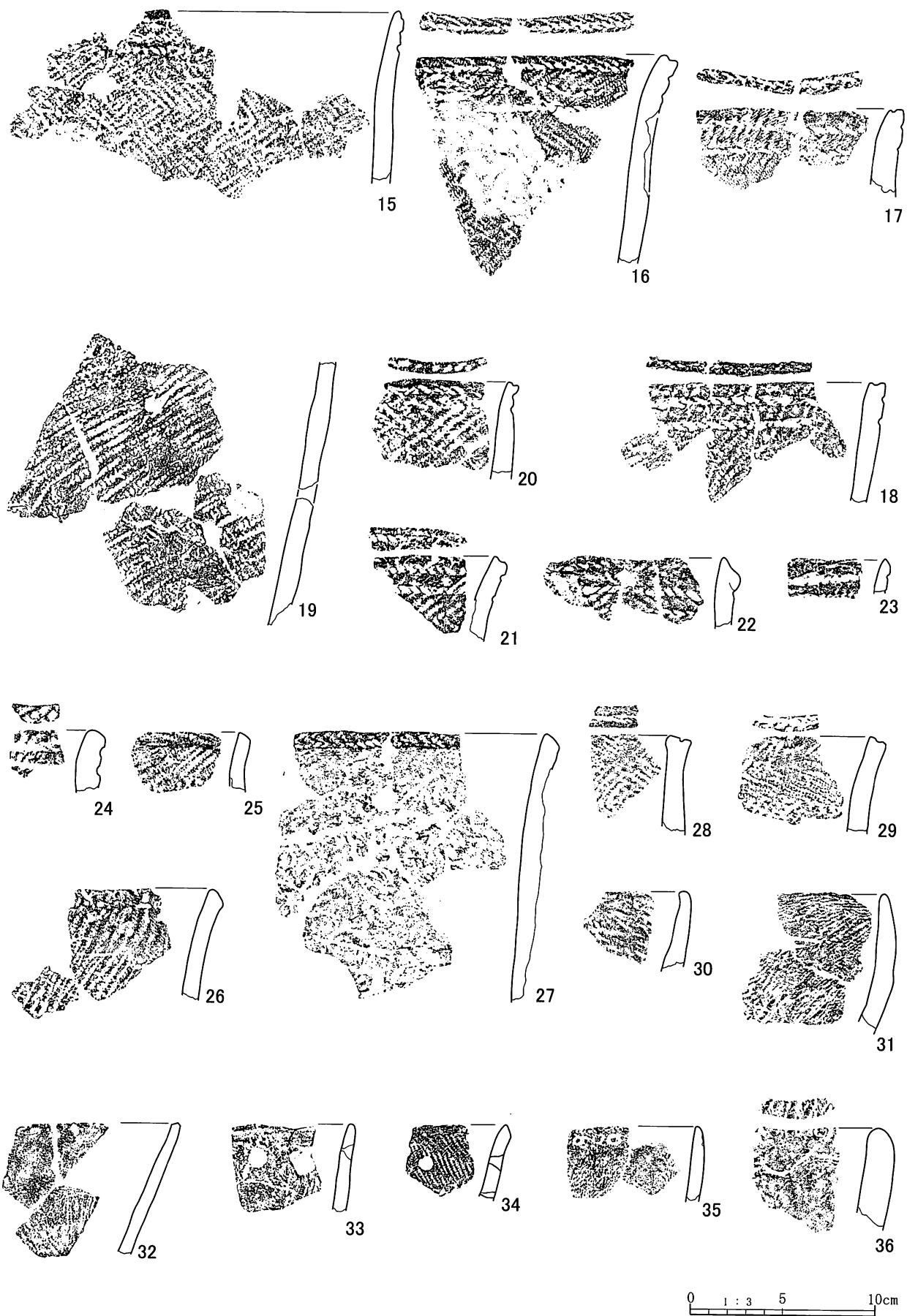
B型(77-12~78-24・79-39)：口唇・口縁部に縄線文、以下は縄文あるいは羽状縄文が占める。15・16は羽状縄文が施される例で、15は回転方向を180度変えて、菱形模様を作っている。



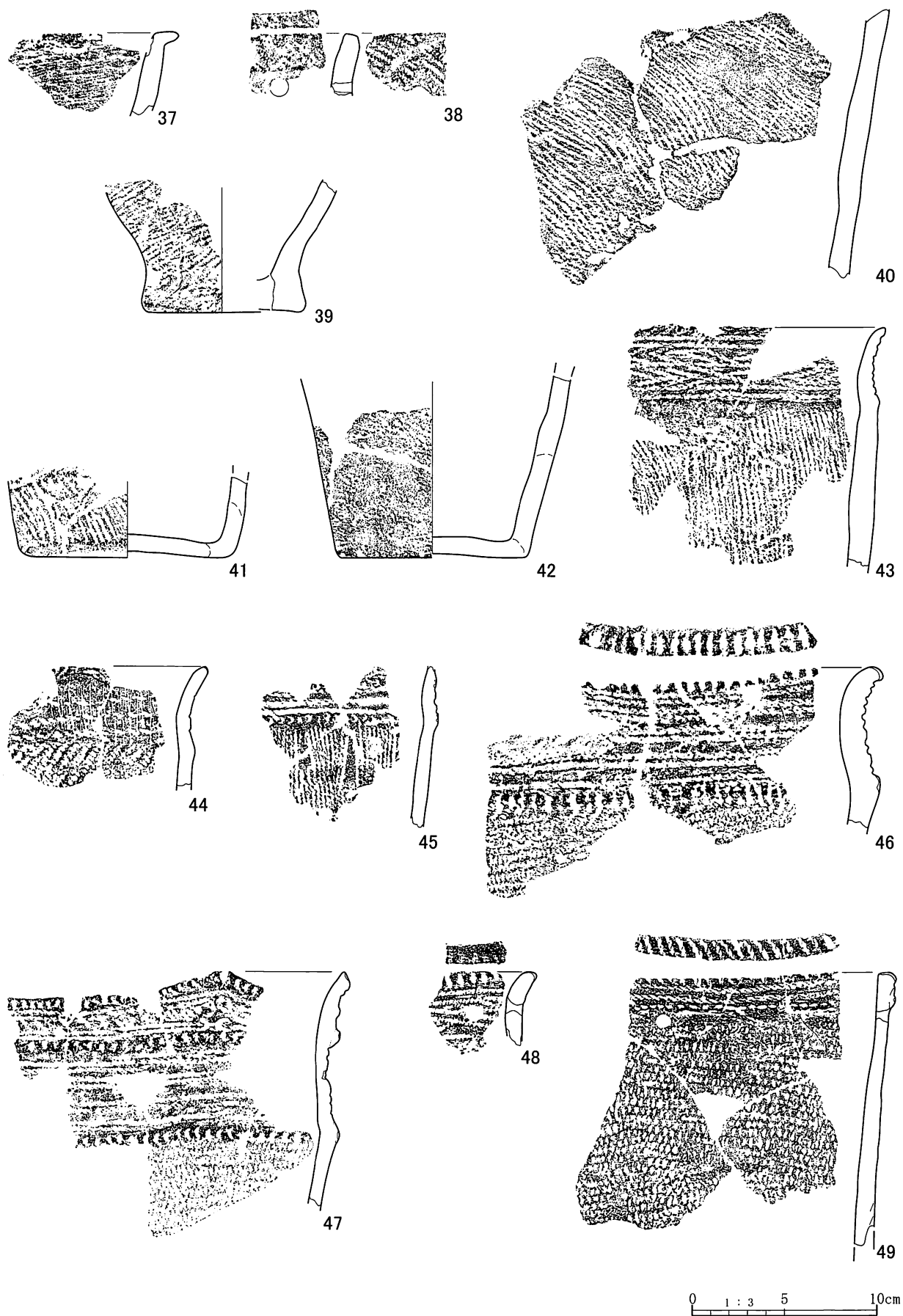
図IV-76 包含層出土土器(1)



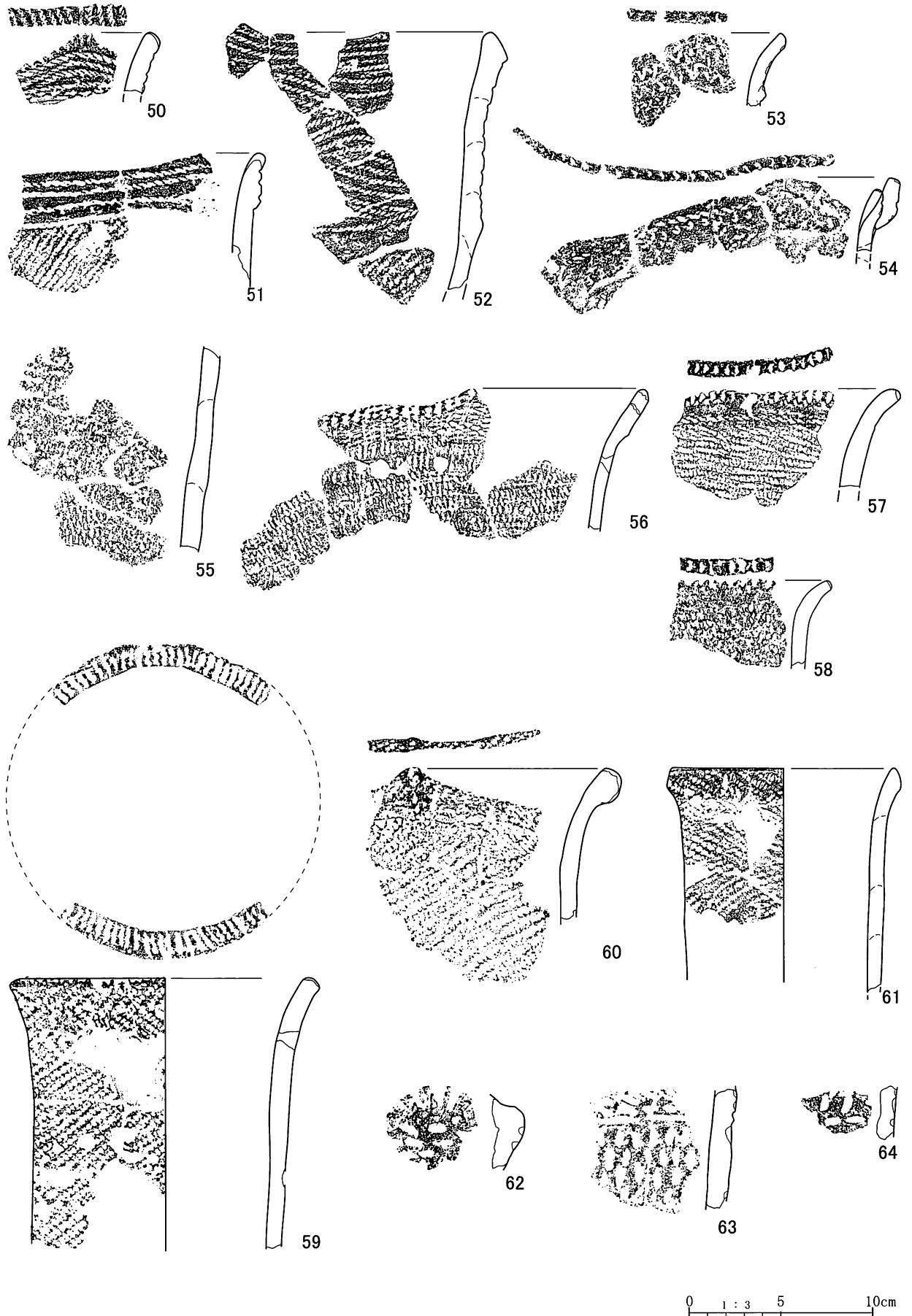
図IV-77 包含層出土土器(2)



図IV-78 包含層出土土器(3)



図IV-79 包含層出土土器(4)



図IV-80 包含層出土土器(5)



図IV-81 包含層出土土器(6)

C型(78-25~29)：口唇部にのみ縄線文あるいは縄文が施される。口縁の断面が外削気味のものは縄文が施され(26・27)、角状のものは縄線文が施される(28・29)。

D型(78-30・31)：口唇に縄線文・縄文が施されないもの。口縁部以下は撚糸文・縄文で埋められる。図示した2点は、内湾する口縁部を持つ。量的には多くない。

E型(78-32~79-38)：上記A~D型に含まれないもの。小型の土器が多く、文様も統一性がない。

35は口縁部に円形刺突文(鳥管骨あるいは羽根の先端部を切断したもので直角に突いた)を配し、特異な存在である。37は強く口縁が外反する。38は口縁部に外側から内側に突いた刺突文が施されている。

胎土他：胎土分析を行った結果、Ⅱ群B2b類土器の中でも、「大麻V式」土器(図IV78-18)と「フゴッペ貝塚式」土器(図IV79-40)の胎土は化学組織上共通性があることがわかった(第V章第5節参照)。同時に分析したⅡ群B2a類土器より Fe_2O_3 が少ない一方、 K_2O が多い傾向がある。

Ⅱ群B2a類土器(図IV-76-1~77-5、図IV-79-40~80-61)

円筒土器下層c・d式に比定される土器を一括した。図IV-79-40~42は円筒土器下層c式、43~45は円筒土器下層d1式、46~51は円筒土器下層d2式、52はフゴッペ貝塚式、それ以外は、上記各型式に伴う地方色の強い土器と考えている。

器種：すべてが深鉢形を呈する。

器形：大きく3種に分けられる。

A型(76-4・5・79-43・44・46~48)：口縁部が外反し、胴上半部~中部で屈曲し、直立する胴部に続く器形。突起、あるいは波状口縁をなすものがほとんどである。

B型(76-1~3・79-45~80-52・54~56)：口縁部は外傾し、A型に比べると口縁部文様帯の幅が狭いものが多い。52の口縁部は外反気味に外傾し、口縁部断面は三角形をなす。A型同様、突起あるいは波状口縁をなすものが多いが、A型ほど突起は小さくなく、波状も小さい。

C型(80-53・57~61)：短く外反する口縁部から屈曲無く胴部に続く器形。平縁が多いが、小突起・小波状をなすものも認められる。

文様：大半の土器の内面は丁寧に磨かれており、ミガキの方向は口縁部で横方向、胴部以下はナナメ・タテ方向が多い。文様は器形と相関して3種に分けられる。

A型(76-4・5・79-43・44・46~48)口唇部は縄の圧痕・刻みが施され、口縁部から胴中位まで縄線文が占める。43のように縄線文の施文方向を変え、菱形の文様構成を見せるもの、46・50のように突起部の下は山形の文様構成を見せるものなどがある。76-3は折り曲げた縄の端部圧痕を施している。胴中位以下は、撚糸文(3・4・40~43)、多軸絡条体回転文(46・47)、斜行縄文(44)等が施文される。

B型(76-1~3・45~52・54~56)は口唇部に縄の圧痕・刻み、口縁部には縄線文が施されることはA型と同じであるが、爪形文・絡条体圧痕文(3)、円形刺突文(45)、列点文(49)が加わり、バラエティーに富んでくる。

また、51は貼付帯状の断面三角形の肥厚した口縁部、52は断面三角形の口縁部で、口唇部に3条の縄線文を施す。54は隆帯が添付され、その上に刺突文・縄線文が施されている。56は薄手の土器で深い縄の圧痕が特徴である。施文原体は、おそらく絡条体を口縁に沿って押しつけたものと思われる。若干肥厚した口縁部から胴部にかけて絡条体回転文の上に口縁部ではヘラ押し文が縦方向

に、胴部では突引文（内）が横位に施文されている。

C型（53・57～61）口唇部は縄の圧痕・刻みが施され、口縁部には縄線文（57・59）、瘤状貼付文の上に縦の縄線文（60）、2本の撚糸を巻きつけた絡条体の撚糸の交差部分を押つけた圧痕文（53）などが施文されている。胴部以下は、羽状縄文・斜行縄文・多軸絡条体回転文などが施文される。

胎土他：火山岩中の角閃石を石英・斜長石も含めて、胎土中に含む傾向にある。II群 B2b 類の中でも「フゴッペ貝塚1式」の土器も、この傾向がある（第V章第5節参照）。II群 B2b 類土器より、 Fe_2O_3 が多く K_2O が少ない。

II群 B2c 類土器（図IV-80-62～64）

シュブノツナイ式土器に比定される。いずれも深鉢形土器で、先端の尖った施文具（鳥の羽根？）で刺突文が付けられている。63は上半部が横方向、沈線を挟んで、下半部は縦方向に刺突文が施される。本類は石英・砂粒を含み、繊維を含まない。

II群 B2d 類土器（図IV-81-66～68）

胎土に蛇紋岩を含む土器群。66は口唇部にも縄文が施文されている。68は突起の先端部と思われる。

III群 B1 類土器（図IV-81-69～74）

萩ヶ岡1・2式、天神山式に相当する土器群。いずれも突起をもつ深鉢形土器。69の口縁部には突引文（外）、70の口唇部は縄端圧痕文、他は突引文（内）が斜行縄文の上に施されている。73・74は同一個体。73では突引文が明瞭に二股に分かれているのが見えるが、74では角柱状の施文具で施文されたように見える。

III群 B2 類土器（図IV-81-75）

柏木川式に相当する土器。75は口唇部に連続した浅い縄の圧痕と口縁部直下には突引文が横方向に認められる。

III群 B3a 類土器（図IV-81-76・77）

北筒式に相当する土器群。76・77は同一個体と思われ、口唇部・口縁部に貼付帯の上にへら状施文具で押引文、貼付帯下位にOI刺突文、胴部はLR斜行縄文が施文されている。砂粒を微量含み、繊維は混入されていない。

IV群 B1 類土器（図IV-81-78～80）

新子のタプコプ式に相当する土器群。78は口唇部にはLR縄文が、口縁部には縄線文が施文され、両端に縄端圧痕文が2個1対で施文されている。現存する個体から推測すると、全周で4単位の縄端圧痕文が施文されているようである。80は貼付帯1Bが剥落したもの。縄の圧痕（OI）が全周するようである。
(宮塚義)

2. 土製品（図IV-82 図版65-2）

所謂サツマアゲ状土製品で、平成23・24年度で2,534点が出土している。完形品のものはない。風化が著しく、破断面も摩滅している。図示した8点はいずれも表面に溝がある。胎土分析を依頼し、ヲチャラセナイ遺跡で出土したどの土器とも異なる化学組成を持つとの結果を得た。詳細を第V章第5節に掲載している。
(宮塚翔)

表IV-50 縄文時代包含層出土土器属性表(1)

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部 /底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
IV-76-1	62-1	JP254A	II B2a	VH-12・V P-25/T・U・ Y-29・W-28・ T-30	VbU・ bL・c・ 2	12	口縁部 ～ 胴部	波状・やや外傾- 隅丸角状/やや 外傾	刻み-縄線文-ミガキ(ヨ コ)/隆帯1+突引文(内)・ 燃糸文(多軸絡糸体回転 文)-ミガキ(ナナム)	砂粒微量 混入	
IV-76-2	62-4	JP280A	II B2a	TP-94/U- 29・U・V-30	VbU・ bL・c・ VI・1	35	口縁部 ～ 胴部	突起・やや外傾- 隅丸角状-外傾/ 外反-やや外傾	縄の圧痕-縄線文・ボ タン状突起・縄圧痕文 -ミガキ(ヨコ)/隆帯1+ 刻み/LR縄文(タテ)・ LR縄文(ナナム)-ミガキ (タテ)	繊維・砂 粒微量 混入	
IV-76-3	62-2	JP405A	II B2a	AF-23・AG- 23・26	Va・ bL	5	口縁部 ～ 胴部	突起・やや外傾- 外削/やや外傾	爪形文状刺突文-爪 形文状刺突文・絡糸 体圧痕文-ナデ/指頭 による幅広沈線文+絡 糸体圧痕文・爪形状 刺突文・RL縄文(横回 転)-ナデ	石英粒 中量混入	補修孔
IV-76-4	63-8	JP453B	II B2a	X-30・31	Va・ bL	6	口縁部 ～ 胴部	突起・外傾-外削 -肥厚(内側)/外 反-やや外傾	縄の圧痕-縄線文-ミ ガキ/隆帯1+縄の圧痕 /燃糸文(タテ)・燃糸文 (ヨコ)-ミガキ(ナナム)	繊維・砂 粒微量 混入	
IV-77-5	63-13	JP453A	II B2a	TP-94/W・ X・Y・Z-31・ X-28・30・ 32・表採	Va・ bU・ bL・c・ 3	47	胴部	やや外反/やや 外傾	(上半)燃糸文(タテ)+ 燃糸文(ヨコ)・(下半)燃 糸文(多軸絡糸体回転 文)-ミガキ(ナナム)	繊維・砂 粒微量 混入	
IV-77-6	62-6	JP422A	III B1	AD・AE-29・ AE-28・AE・ AF-32	Va・ bU・ bL・KR	15	口縁部 ～ 胴部	突起・外反-角状 /内湾気味に外 傾	突引文(内)-貼付帯+ 突引文(内)/瘤状貼付 +突引文(内)-LR斜行 縄文+半載竹管文-ミ ガキ(ナナム)	繊維・砂 粒少量 混入	
IV-77-7	63-9	JP423A	III B1	AE-40・AF- 39	VbU・ bL	3	口縁部 ～ 胴部	突起・直立-外削 /直立	刻み(ヨコ)-ナデ(ヨ コ)/LR斜行縄文-ナデ (ヨコ)	砂粒少量 混入	
IV-77-8	63-10	JP428A	II B2b	AG-38・AI- 37	VbU・ c	4	口縁部 ～ 胴部	平縁・直立-隅丸 角状/直立	縄線文/RR斜行縄文 +R合燃	砂粒少 量・繊維 多量混入	
IV-77-9	63-11	JP414A	II B2b	AG・AH-38	VbU・ c	2	口縁部	平縁・直立-隅丸 角状・外張り出し	燃糸文-縄線文・R斜 行縄文-RL斜行縄文- ナデ	繊維・砂 粒微量 混入	
IV-77-10	63-12	JP413A	II B2b	AF・AG-27	Va・ bU・bL	5	口縁部	平縁・直立-隅丸 角状・外張り出し	縄線文(同一糸異原 体)/縄線文(同一糸異 原体)・2段異原体羽状 縄文(縦回転)-LR斜行 縄文	砂粒少 量・繊維 中量混入	
IV-77-11	63-14	JP413B	II B2b	AA-38	VbL	1	底部	外傾-角状-平底	LR斜行縄文-LR斜行 縄文-ナデ	砂粒少 量・繊維 微量混入	
IV-77-12	63-15	JP439A	II B2b	AC・AD-25	Va・ bL	2	口縁部	平縁・直立-隅丸 角状	縄線文/縄線文・RR斜 行縄文	繊維・白 色岩片微 量混入	
IV-77-13	63-16	JP415A	II B2b	AG-24	VbL	3	口縁部 ～ 胴部	平縁・やや内傾- 隅丸角状/直立	RL斜行縄文-縄線文 (同一糸異原体)/RL斜 行縄文	繊維少 量・砂粒 微量混入	
IV-77-14	63-17	JP506A	II B2b	Z-28	VbL	1	口縁部	平縁・外傾-外削	LR斜行縄文-ミガキ(ヨ コ)/縄線文-ミガキ(ヨ コ)	繊維・砂 粒微量 混入	

表IV-51 縄文時代包含層出土土器属性表(2)

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部 /底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/底側面 -底面-内面		
IV-77-15	63-18	JP435A	II B2b	AD-39・AE・ AF-38	VbU・ bL・c	9	口縁部 ~胴部	平縁・やや外傾- 尖状/直立	縄線文(同一条異原 体)/異原体羽状縄文 (菱形)	繊維多量 混入	
IV-77-16	63-21	JP430A	II B2b	AB-27	VbU・ bL	4	口縁部 ~胴部	平縁・外傾-隅丸 角状/やや外傾	縄線文(同一条異原 体)/異原体羽状縄文 (菱形)	繊維多量 混入	
IV-77-17	63-22	JP072B	II B2b	AF-26	VbL	1	口縁部	平縁・やや外傾- 隅丸角状	LR縄文+縄線文/縄線 文(同一条異原体)・ RR縦走縄文・LR斜行 縄文	繊維・砂 粒少量 混入	
IV-77-18	63-19	JP476A	II B2b	U・V-30	VbU・ bL・c	6	口縁部	平縁・直立-隅丸 角状/やや外傾	縄線文(同一条異原 体)・縄線文(同一条 異原体)-ナデ/RL斜 行縄文-ナデ	繊維・砂 粒少量 混入	
IV-78-19	63-20	JP476B	II B2b	AA-30	VbU・ bL・KR	4	胴部	外傾	LR斜行縄文-ナデ	繊維微量 ・砂粒 少量混入	
IV-78-20	63-23	JP437A	II B2b	AF-30	VbU	2	口縁部 ~胴部	平縁・直立-外削 隅丸角状/直立	縄線文/縄線文(同一 条異原体)・LR斜行縄 文+RR斜行縄文	繊維少量 ・砂粒 微量混入	
IV-78-21	63-24	JP510A	II B2b	U-30	VbL	1	口縁部	平縁・外反-外削	縄線文(同一条異原 体)-縄線文/異原体 羽状縄文	繊維・砂 粒少量 混入	
IV-78-22	63-25	JP249A	II B2b	X-23・表採	VbL	2	口縁部	平縁・やや外傾- 外削	RL斜行縄文・縄線文 (同一条異原体)・LR 斜行縄文-ミガキ	繊維・砂 粒少量 混入	
IV-78-23	63-26	JP507A	II B2b	Y-32	VbL	1	口縁部	平縁・外傾-外削	LR斜行縄文/縄線文- ナデ	繊維・砂 粒少量 混入	
IV-78-24	63-27	JP508A	II B2b	Y-29	VbU	1	口縁部	平縁・外反-隅丸 角状	RL斜行縄文/縄線文	繊維・砂 粒少量 混入	
IV-78-25	63-28	JP441A	II B2b	AG-23	VbL	1	口縁部	平縁・やや外傾- 外削	LR斜行縄文/LR斜行 縄文	砂粒微量 混入	
IV-78-26	63-29	JP487A	II B2b	U-34・W-28	VbU・ bL	2	口縁部 ~胴部	平縁・やや外反- 外削/外反	LR斜行縄文-LR斜行 縄文-ナデ/LR斜行縄 文-ナデ-ナデ	繊維・砂 粒少量 混入	
IV-78-27	64-30	JP461A	II B2b	X・Y-28・X- 29	Va・ bU・bL	8	口縁部 ~胴部	平縁・外傾-外削 /外傾	LR斜行縄文-ミガキ(ヨ コ)/縄線文(同一条異 原体)-ミガキ(ヨコ)	繊維・砂 粒中量 混入	外面 剥落
IV-78-28	64-31	JP438A	II B2b	AJ-24	Va	1	口縁部	平縁・やや外傾- 隅丸角状・肥厚/ 直立	縄線文/異原体羽状 縄文	砂粒少量 混入	
IV-78-29	64-32	JP505A	II B2b	U-29	VbU	1	口縁部	平縁・外反-角状	縄線文(同一条異原 体)-異原体羽状縄文- ナデ	繊維・砂 粒少量 混入	
IV-78-30	64-33	JP431B	II B2b	AH-24	VbL	1	口縁部	平縁・内傾-隅丸 角状	ナデ-RR斜行縄文	砂粒微量 混入	
IV-78-31	64-34	JP443A	II B2b	AD-28	VbL	2	口縁部	平縁・内湾-丸状	撚糸文(横回転)・撚糸 文(斜め回転)・ミガキ (ヨコ)-ナデ	繊維・砂 粒多量 混入	
IV-78-32	64-35	JP491A	II B2b	X-31・Y-30・ 32	Va・ bU・bL	3	口縁部 ~胴部	平縁・外傾-尖状 /外傾	撚糸文-ナデ	砂粒少量 混入	
IV-78-33	64-36	JP488A	II B2b	AA-29	VbL	1	口縁部 ~胴部	平縁・外傾-尖状 /外傾	ナデ-RL斜行縄文・ナ デ・RL斜行縄文-ナデ	繊維・砂 粒少量 混入	補修孔

表IV-52 縄文時代包含層出土土器属性表(3)

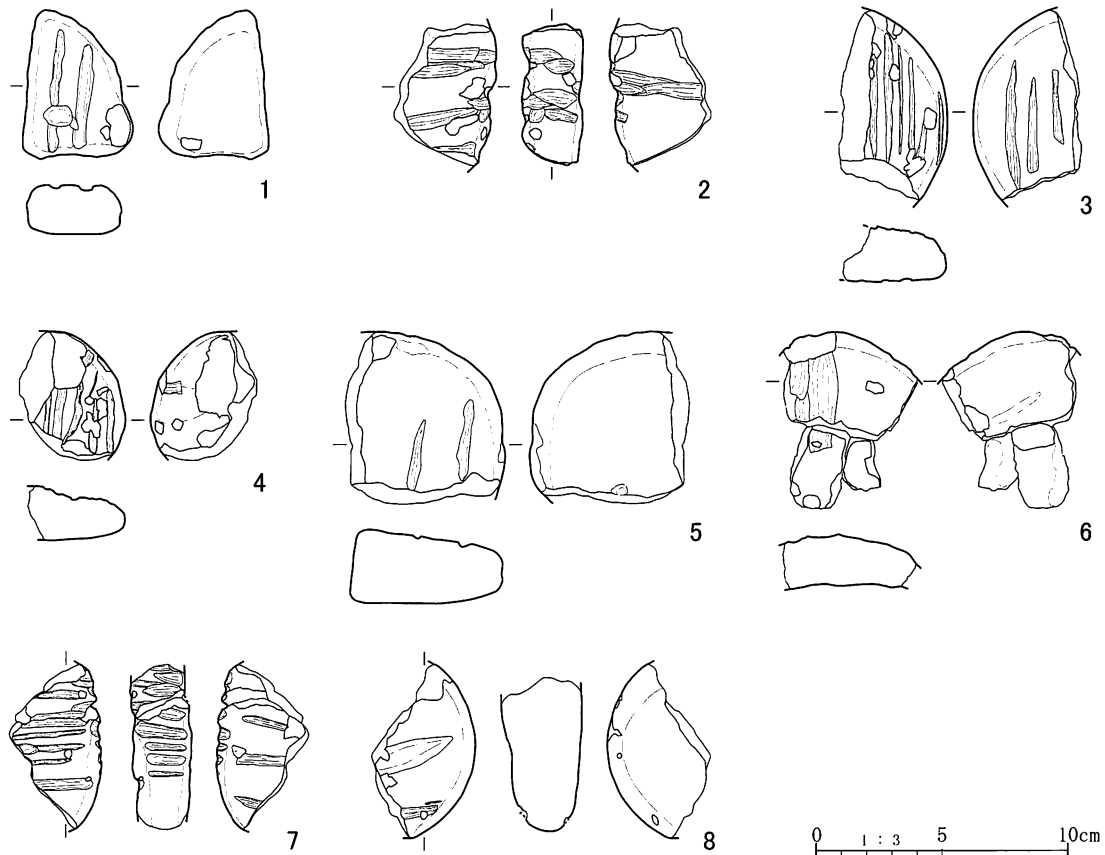
挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部 /底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
IV-78-34	64-37	JP492A	II B2b	AA-28	VbL	1	口縁部	平縁・外傾-外削	ナデ-RL斜行縄文-ミガキ	繊維・砂粒少量混入	補修孔
IV-78-35	64-38	JP411A	II B2b	AH-23	VbL	2	口縁部	平縁・直立-尖状	ナデ-円形刺突文/LL斜行縄文-ナデ	砂粒微量混入	
IV-78-36	64-39	JP444A	II B2b	AI-33	VbL	1	口縁部	平縁・内反-丸状	燃糸文-ナデ-ナデ	繊維多量混入	
IV-79-37	64-40	JP442A	II B2b	AB-30	VbL	1	口縁部	平縁・やや外傾-強く屈曲	ナデ-燃糸文(横回転)-ナデ	繊維多量混入	
IV-79-38	64-41	JP490A	II B2b	V-28	VbU	1	口縁部	平縁・外傾-角状	RL斜行縄文-RL斜行縄文+O刺突文-ナデ	白色岩片少量混入	
IV-79-39	64-42	JP466C	II B2b	V・W-34	VbL	2	胴下半部～底部	外傾/直立-張り出し-やや上げ底	LR斜行縄文-ナデ/ナデ-ナデ	繊維・砂粒微量混入	
IV-79-40	64-43	JP464A	II B2a	U-29・AA-28・30	VbU・bL	3	胴部	やや外傾	燃糸文-ミガキ(ナナム)	白色岩片・石英少量混入	
IV-79-41	64-47	JP464B	II B2a	AA-30・31	VbU・bL	4	底部	やや外傾-隅丸角状-やや上底	燃糸文-ミガキ/ミガキ-ミガキ	白色岩片・石英少量混入	IV79-40と同一個体
IV-79-42	62-3	JP463A	II B2a	U-31・Z・AA-30	VbU・bL・c・KR	12	胴部～底部	やや外傾/やや外傾-角状-やや上げ底	RL斜行縄文-ナデ/ナデ-ナデ	繊維・砂粒少量混入	
IV-79-43	64-44	JP407A	II B2a	AH-36	VbU・bL	4	口縁部～胴部	平縁・外反-尖状/直立	縄の圧痕-縄線文-ミガキ(ヨコ)/隆帯1・燃糸文(タテ)-ミガキ(タテ)	繊維・砂粒少量混入(内面貼付粘土は繊維極微量混入)	内面微細粘土貼付?
IV-79-44	64-45	JP446A	II B2a	AI・AJ-25	Va・c	2	口縁部～胴部	平縁・外反-外傾	刻み-沈線文(タテ)+縄線文-ミガキ/隆帯1・LR斜行縄文-ミガキ	石英・繊維少量混入	
IV-79-45	64-46	JP458A	II B2a	Y-28・29	Va・bU・c	4	口縁(下半)部～胴部	直立/外傾	縄線文-円形刺突文-隆帯1+円形刺突文-ミガキ(ヨコ)/燃糸文(タテ)-ミガキ(タテ)	繊維・砂粒微量混入	
IV-79-46	64-48	JP048A	II B2a	AB・AD-23・AB-30・AD-29	Va・bU・bL	6	口縁部～胴部	平縁・外反-丸状/外傾	縄の圧痕-縄線文-ミガキ(ヨコ)/隆帯1+縄の圧痕・燃糸文(多軸絡条体回転文)-ミガキ(ヨコ)	繊維・砂粒少量混入	
IV-79-47	64-49	JP409A	II B2a	AF・AJ-31・AI-24・25	Va・bU・c・VI	6	口縁部～胴部	突起・外反-外削/(上半)外反・(下半)外傾	縄の圧痕-縄線文・縄の圧痕文・隆帯1+縄の圧痕-ミガキ(ヨコ)/縄線文・隆帯1+縄の圧痕・燃糸文(多軸絡条体回転文)-ミガキ(ヨコ)	白色岩片微量混入	
IV-79-48	64-50	JP417A	II B2a	AC-31	Va	1	口縁部	平縁・外反-丸状	縄の圧痕-縄線文-ミガキ	繊維・砂粒少量混入	補修孔

表IV-53 縄文時代包含層出土土器属性表(4)

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部 /底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
IV-79-49	64-52	JP257A	II B2a	VBB-03・V PB-32/Q- 33・V-29	VbU・ bL	7	口縁部 ~胴部	平縁・直立-隅丸 角状/直立	縄の圧痕-縄線文・隆 帯1+突引文-ミガキ(ヨ コ)/燃糸文(多軸絡条 体回転文)- ミガキ(ヨコ)	繊維・砂 粒微量 混入	補修孔
IV-80-50	64-53	JP257B	II B2a	VBB-03	VbU	1	口縁部	突起・外反- 隅丸角状	縄の圧痕-縄線文・隆 帯1+突引文-ミガキ	繊維・砂 粒少量 混入	
IV-80-51	64-51	JP408A	II B2a	AH-23	VbL・ c	2	口縁部 ~胴部	突起・やや外傾- 三角形	貼付文・ミガキ-縄線 文-ミガキ/LR斜行 縄文-ミガキ	繊維多 量・砂粒 少量混入	
IV-80-52	64-54	JP258A	II B2a	AA-30・AA・ AB-38・AE- 36	VbU・ bL・c	7	口縁部 ~胴部	突起・外反-三角 形/やや外傾	縄線文-ミガキ(ヨコ)- 縄線文-ミガキ(ヨコ)/ 隆帯1・LR斜行縄文- ミガキ(ナナメ)	繊維・白 色岩片少 量混入	
IV-80-53	65-57	JP460A	II B2a	Z-30	VbU・ bL	2	口縁部	突起・外反-丸状	ナデ-絡条体圧痕文・ 隆帯1+刻み-ミガキ	石英・白 色岩片少 量混入	
IV-80-54	65-55	JP465A	II B2a	AA-28・30・ 表採	VbU・ bL	4	口縁部 ~胴部	突起・外傾-丸状 /外反	隆帯1+縄線文+刺突 文-ミガキ(ヨコ)/LR斜 行縄文(?) -ミガキ(ヨコ)	繊維・砂 粒少量 混入	補修孔
IV-80-55	65-56	JP465B	II B2a	W-30・X-33	Va・ bU・c	6	胴部	やや外傾	燃糸文(多軸絡条体回 転文)-ミガキ(ヨコ)	繊維微 量・砂粒 少量混入	
IV-80-56	65-58	JP455A	II B2a	AA-30	VbU・ bL	8	口縁部 ~胴部	突起・外反-外削 /外傾	縄の圧痕-燃糸文(多 軸絡条体回転文)・沈 線文(タテ)-ミガキ/燃 糸文(多軸絡条体回 転文)・沈線文(ヨコ)- ミガキ	石英少量 混入	補修孔
IV-80-57	65-59	JP263G	II B2a	X-32	VbL・ KR	2	口縁部	平縁・外反-丸状	刻み-縄線文-ミガキ (ヨコ)/RL横走縄文- ミガキ(ヨコ)	石英・ 砂粒少 量・繊維 微量混入	
IV-80-58	65-60	JP412A	II B2a	AF-24	Va	1	口縁部 ~胴部	平縁・外反-隅丸 角状	刻み-無文帯-ミガキ/ 燃糸文(多軸絡条体回 転文)-ミガキ(ヨコ)	繊維・砂 粒少量 混入	
IV-80-59	62-5	JP404A	II B2a	VPB-51/T- 31・U・AD-27・ U・V-29・30・ W-33・AH-22・ AJ-20	Va・ bU・bL	17	口縁部 ~胴部	平縁・やや外反- 隅丸角状/直立	縄の圧痕-燃糸圧痕 文-ミガキ(ヨコ)/異原 体結節羽状縄文(胴 上半)・LR斜行縄文 (胴下半)-ミガキ(ナ ナメ)	砂粒少 量・繊維 微量混入	補修孔
IV-80-60	65-61	JP410B	II B2a	AD-23・AF- 27・AH-31	Va・ bU・ bL・c	5	口縁部 ~胴部	突起・外反-三角 形/ほぼ直立	LR斜行縄文/突起・縄 線文(タテ)-LR斜行縄 文-ミガキ(ヨコ)/LR斜 行縄文-ミガキ(ナナメ)	石英少 量・繊維 微量混入	
IV-80-61	62-7	JP482A	II B2a	Z・AA-30	Va・ bU・bL	16	口縁部 ~胴部	平縁・やや外反・ 三角形/やや 外傾	隆帯・LR斜行縄文- ミガキ(ヨコ)/異原体羽 状縄文-ミガキ(タテ)	繊維中 量・砂粒 微量混入	
IV-80-62	65-62	JP117I	II B2c	AG-24	Va	2	貼付瘤	-	貼付文+刺突文	φ2~3mm 石英極多 量混入・φ 1~4mm砂 礫多量 混入	内面 剥落
IV-80-63	65-63	JP117J	II B2c	AF-23	VbL	1	胴部	直立	刺突文(ヨコ)+ 沈線文・刺突文(タテ) -ナデ	石英・砂 粒多量 混入	

表IV-54 縄文時代包含層出土土器属性表(5)

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点数	部位	器形等	文 様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部 /底側面-変換点 -底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
IV-80-64	65-64	JP495A	II B2c	AA-29	VbL	1	胴部	外傾?	刺突文	石英少量 混入	内面 剥落
IV-81-65	65-65	JP474A	II B	X-32	VbL	5	口縁部 ~胴部	平縁・内湾-尖状	縄文?-ナデ/ナデ-ナ デ	繊維・砂 粒少量 混入	
IV-81-66	65-66	JP401A	II B2d	AD-39	VbL	1	口縁部	平縁・やや内湾- 隅丸角状	LR斜行縄文-LR斜行 縄文-ナデ	蛇紋岩 多量 混入	
IV-81-67	65-67	JP403A	II B2d	AH-33	VbU・ bL	2	胴部	やや外傾	絡条体圧痕文・撚糸 文(多軸絡条体 回転文)	繊維多 量・砂粒 少量混入	内面 剥落
IV-81-68	65-68	JP494A	II B2d	S-34	VbU	1	口縁部	突起・外傾- 隅丸角状	縄文-RL斜行縄文? -ナデ	蛇紋岩 少量 混入	
IV-81-69	65-69	JP419A	III B1	AH-31	Va	1	口縁部 ~胴部	突起・直立- 三角形/直立	貼付文+突引文(内)- 突引文(外)-ナデ/貼 付文+ナデ?・突引文 (外)RL斜行縄文- ナデ(ナナメ)	繊維微 量・砂粒 少量混入	補修孔
IV-81-70,65-70	65-70	JP421A	III B1	AI-27	VbU	1	口縁部 ~胴部	突起・やや外傾- 外削/やや外傾	縄端圧痕文-縄端圧 痕文-ナデ/LR斜行縄 文-ナデ(ヨコ)	繊維・砂 粒少量 混入	
IV-81-71	65-71	JP457A	III B1	T-31	VbL	3	口縁部 ~胴部	突起・直立-隅丸 角状/直立	突引文(内)・LR斜行 縄文・刺突文(縄)-突 引文(内)-ナデ/LR斜 行縄文-ナデ	白色岩 片・繊維 少量 混入	
IV-81-72	65-72	JP512A	III B1	Y-28	Va	1	口縁部	平縁・外反-隅丸 角状	縄の圧痕文-縄線文- ナデ	砂粒少量 混入	
IV-81-73	65-73	JP468A	III B1	Y-34	Va	3	口縁部 ~胴部	突起・やや外傾- 隅丸角状/やや 外傾	突引文(内)-突引文 (内)・LR斜行縄文+突引 文(内)-ナデ/LR斜行縄 文+突引文(内)-ナデ	繊維微 量・砂粒 少量混入	
IV-81-74	65-74	JP468B	III B1	W-35・Y-34	Va・ bU	2	口縁部 ~胴部	平縁?・直立-隅 丸角状/やや 内湾	突引文(内)-突引文 (内)・LR斜行縄文+突引 文(内)-ナデ/LR斜行縄 文+突引文(内)-ナデ	繊維微 量・砂粒 少量混入	
IV-81-75	65-75	JP420A	III B2	AI-28	Va・ bU	2	口縁部 ~胴部	平縁・直立-丸状 /直立	縄の圧痕+ナデ-突引 文(内)-ナデ/LR斜行 縄文-ナデ	繊維・砂 粒微量 混入	
IV-81-76	65-76	JP418A	III B3a	AD-38	VbU	1	口縁部	(突起)・直立- 角状	貼付帯・ヘラ押しき文 (2段)-貼付帯(タテ)・ ヘラ押しき文(2段)-LR 斜行縄文-ナデ	砂粒微量 混入	
IV-81-77	65-77	JP418B	III B3a	AD-38	Va	1	口縁部 ~胴部	突起・直立-角状	貼付帯・ヘラ押しき文- ヘラ押しき文(2段)-LR 斜行縄文-ナデ/OI刺 突文・LR斜行縄文-ナ デ	砂粒微量 混入	
IV-81-78	65-78	JP432A	IV B1	AJ-38	VbL・ c	4	口縁部 ~胴部	平縁・直立-角状 /やや外傾	LR斜行縄文-LR斜行 縄文+縄線文・縄端圧 痕(1対)-ナデ/LR斜行 縄文-ナデ	繊維・砂 粒少量 混入	
IV-81-79	65-79	JP434A	IV B1	AC-36・ AD-33	VbU・ bL・KR	5	胴部~ 底部	外傾/直立-隅丸 角状-平底	LR斜行縄文- ナデ-ナデ	φ5mm前 後の亜角 礫少量混	
IV-81-80	65-80	JP498A	IV B1	U-34	VbL	1	口縁部 直下	平縁・外傾	RL斜行縄文+ナデ-LR 斜行縄文+OI刺突文 (縄)-ミガキ	白色岩片 少量 混入	貼付帯 1B剥 落?



図IV-82 包含層出土土製品

表IV-55 包含層出土土製品属性表

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	グリッド	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
IV-82-1	65-1	-	63948	土製品	-	Vc	AE-32	57.5	44.0	21.1	34.84	Clay.	
IV-82-2	65-2	-	64832	土製品	-	VbL	AF-27	53.5	38.6	22.5	43.85	Clay.	
IV-82-3	65-3	-	64050	土製品	-	VbL	AB-30	64.5	41.5	21.5	47.84	Clay.	
IV-82-4	65-4	-	65753	土製品	-	VbU	AI-24	54.2	37.7	18.4	28.15	Clay.	
IV-82-5	65-5	-	63758	土製品	-	VbL	AD-23	66.4	61.8	29.6	91.46	Clay.	
IV-82-6	65-6	-	67177	土製品	-	Vc	AI-36	69.3	48.2	20.9	51.10	Clay.	
IV-82-7	65-7	-	145325	土製品	-	VbL	AA-28	64.9	35.5	23.2	39.87	Clay.	
IV-82-8	65-8	-	143800	土製品	-	VbL	V-32	68.5	36.4	30.5	50.85	Clay.	

3. 剥片石器 (図IV-83~88、図版 66~75)

遺構出土および包含層出土を合わせると、1510 点の剥片石器が出土している。包含層出土の剥片石器は 1307 点あり、その内 133 点を図示している。

ポイント類

石鏃 (1-25)

石鏃は 132 点出土している。細分の内訳は A1 類 2 点、A2 類 19 点、A3 類 45 点、A4 類 43 点である。破損により全体形状が不明であり、細分できなかった石鏃は 15 点である。1 は A2 類であるが、Ta-d2 パミスの下に堆積する IXb 層出土の石鏃であり、旧石器確認のためのトレンチ調査によって出

土したため先に記述する。先端部を欠損し無茎で、基部は平坦である。両側縁は直線的で、内奥する剥離によって弱い鋸歯縁状を呈する。同様の弱い鋸歯縁状の側縁をもつ石鏃は、帯広市暁遺跡の縄文早期の「テンネル・暁式土器群」（帯広市教育委員会 1985）に伴う石器群においても認められる。暁遺跡では土器付着炭化物より 8300-8200BP の放射性炭素年代（未校正）が得られているという（帯広市百年記念館・山原敏朗学芸員のご教示による）。また、清水町御影平和遺跡では暁式土器に伴って石鏃が出土しており、8240±30 年、8270±30 年 BP の放射性炭素年代が得られている（清水町教育委員会 2012）。石鏃の出土地点の周辺は拡張し調査を進めたが、関連する遺物・遺構は確認されなかった。2～25 は V 層より出土している。2 は A1 類となる細身で薄手の石鏃である。全体に細かな調整が施された柳葉形のものである。3～5 は A2 類の無茎石鏃であり、3 と 4 は両側縁と基部が直線的で、三角形を呈する。5 は基部に抉りをもつ。3 と 5 は裏面に素材剥片の剥離面を残す。6～15 は A3 類の明瞭な基部をもつ石鏃である。6～9 は基部に抉りをもつ。6～8 は短身の石鏃で、6 は先端を衝撃剥離によって欠損している。9 は鏃身部が長く、内奥する平行剥離によって整形されている。10～15 は茎部に抉りが無いものである。10 は菱形をした石鏃で斑晶を多く含む黒曜石を利用している。11 は側縁が急角度に調整されている。12 は裏面に素材剥片の主剥離面を大きく残す。13 は正面右側縁の先端部に近い部分に浅い抉りが認められる。14 は先端が急角度に調整される。15 は表裏に素材剥片の主剥離面を残す。16～25 は A4 類で、明瞭な茎部をもたないものである。肩部から下半の形状によって、尖基、円基、平基に分類した。16～19 は尖基、20～24 は円基、25 は平基である。16 は先端部を構成する剥離痕のパティナが新しく、先端部が欠損後再加工された可能性がある。17 は肩が明瞭に作り出されている。18 は赤色の混ざる黒曜石を用いている。19 は調整が粗雑で断面がカマボコ型となる。20 は裏面が平坦となる。21 は球果を多く含む黒曜石を利用しており、22 は先端部に比して基部が大きく下膨れとなる。23 は幅広で厚みがなく、透明度の高い素材で斑状に黒色が混じる。24 は下半部が厚みをもつ。25 は正面中央が稜状となる。図示した石鏃は全て黒曜石である。

石槍（26-66）

石槍は 902 点出土しており、包含層全体で出土した剥片石器の 69% を占める。細分の内訳は B1 類 665 点、B2 類 51 点、C 類 56 点、D 類 6 点である。破損しているため細分できなかった石槍は 124 点である。26～50 は B1 類の明瞭な基部をもつ石槍である。31 と基部端を欠損している 30・39 を除き、基部に逆刺をもつ。うち、40～47 は基部側縁に明瞭な突起をもつ。26～30 はいずれも鏃身部が基部より短く、先端に新しい調整が集中する再調整品と見られるもので、先端角が広く、両側縁が直線上になる類似点をもつ。30 は 2 点の石槍が接合したもので、表面が強い被熱を受けて変質しており、破断面には変質が見られなかったことから被熱により破損したとみられる。基部も欠損しているが、断面が被熱しているため古い時期の欠損と思われる。31 は石鏃と石槍の分類を便宜上 4cm としているため石槍に含めたが、基部の大きさ等から大型の石鏃の可能性もある。32～43 は完形品である。39 は基部端を欠損しているが、基部として十分機能する長さを有しているため完形品に含めた。40～43 は基部端に逆刺をもつ。いずれも幅が広く、側縁はやや丸みを帯びる。43 は先端から右側面にかけて、衝撃剥離と思われる樋状の剥離痕が残る。44～46 は基部端に逆刺をもち、鏃身部が極端に短い再調整品である。44 は五角形状となる。45 は右側面に抉りをもち、両側縁が急角度に調整される。46 は稜線が中心を外れており、基部端の裏面に細かな調整が施されている。

47～50 は鏃身部が未完成のもので、再調整の途中と考えられる。51～53 は先端を欠損後再加工されたもので、先端が尖らずに丸くなるタイプで、D類として分類した。54～61 はB2類で明瞭な基部をもたない石槍である。全体形状の違いから、木葉形、菱形、柳葉形に分類した。54～57 は木葉形、58 は菱形になる。59 は右側縁がやや内湾しており、調整が集中していることから欠損後に再調整されたと見られる。60 と 61 は分類の便宜上石槍としたが、2 の石鏃と同様の加工が施されるもので、やや大型の石鏃と見られるものである。62～64 は再調整により極端に小さくなったもので、63 は先端部の表面を急角度に加工し、他の用途へ加工途中と見られる。65 は先端を欠損した石槍の基部で、平成 23 年度と 24 年度で合わせて 310 点出土しており、全体の出土品の 20%、明瞭な基部を持つ石槍全体の中では 47% を占める。66 は大型の石槍で基部を欠損しているが、双頭型石槍の可能性もある。38 と 42 は珪化岩、44 と 59 は頁岩であり、残りは黒曜石である。図示していないが、C類は欠損品および未製品である。石槍加工途次の欠損品と、使用によって先端などを欠損し、形態の判別がつかないほど破損した品の両方を含んでいる。

石錐 (67-73)

石錐は 23 点出土している。細分の内訳は、A類 4 点、B類 1 点、C類 2 点、D類 13 点、E類 3 点である。76 は A 類の剥片の一部に機能部を作出した石錐である。77 は B 類で、柄と機能部の区別が明瞭な石錐である。78 は C 類で、柄と機能部の区別が不明瞭で幅広な石錐で、裏面に素材剥片の剥離面を残す。79～81 は D 類で柄と機能部の区別が不明瞭で棒状となる石錐である。82 は E 類で石槍からの転用品と思われる石錐である。80 は黒曜石製であり、パティナが発達している。他は全て頁岩製である。

ナイフ・スクレイパー類

つまみ付きナイフ (74-110)

つまみ付きナイフは 206 点出土している。細分の内訳は、A1類 82 点、A2類 70 点、A3類 24 点である。A1 は素材の側縁にのみ加工を施したもので、つまみ部に対して刃部が縦長となるもの (A1a) と横長となるもの (A1b) に分けられる。74～84 が A1a 類、85～88 が A1b 類である。89～102 は A2 類で、素材の片面全体に加工を施したものである。96 は右側縁裏面の調整剥離を打面として正面左側縁に平坦な剥離痕が施されており、松原型 (秦昭繁 1991) に分類される。103～110 は A3 類で、素材の両面全体に加工を施したものである。利用される石材は、頁岩が 47% (97 点)、黒曜石 34% (70 点)、めのう質頁岩 5% (10 点)、チャート 2% (3 点) であり、黒曜石よりも頁岩が卓越する。

スクレイパー類 (111-120)

スクレイパーは 60 点出土している。細分の内訳は、B1類 4 点、B2類 3 点、C1類 41 点、C2類 3 点、C3類 3 点、D1類 6 点である。120 は B1 類のラウンド・スクレイパーで、岩屑面を大きく残す。111～117 は C1 類で、サイド・スクレイパーである。111～113 は石槍の転用品である。115 は縦長で両面に入念な調整がなされている。116 は頁岩製の縦長剥片を素材とし、両側縁に入念な加工が施されている。117 は打面を残す三角形の剥片を素材とする。118 は右側縁が内湾する。119 は左側縁が内湾する。120 は分厚い縦長剥片を素材としており、左側縁には急角度な調整が施されている。右側縁の打面付近はノッチ状となる。

両面調整石器 (121-129)

両面調整石器は 20 点出土している。両面調整石器は 5 cm 以上の大型と 5 cm 未満の小型に区別できるが、包含層から出土した小型の両面調整石器は 1 点のみで、他は全て大型である。形状は左右対称で、縁辺が外湾する。大きめの剥離が全体に施され、縁辺には微細な剥離痕が連続する。大きめの剥離によって階段状の剥離が残されているものもあるが (124・126)、概して横断面形は凸レンズ状を呈する。全体の形状が長さ比べ幅があるもの (123・124・125) と、縦長のもの (126・128) が認められる。いずれも黒曜石である。125 は左側縁の中央に素材の剥離面を残している。125 は上端部に転礫面を残す。124、129 は裏面に素材剥片の主剥離面を大きく残す。127 は下端部に岩屑面を残す。両面調整石器は、本遺跡と同時期である帯広市宮本遺跡 (帯広市教育委員会 1986) から多数出土しており、原産地分析の結果からも本遺跡に持ち込まれていることが分かっている。

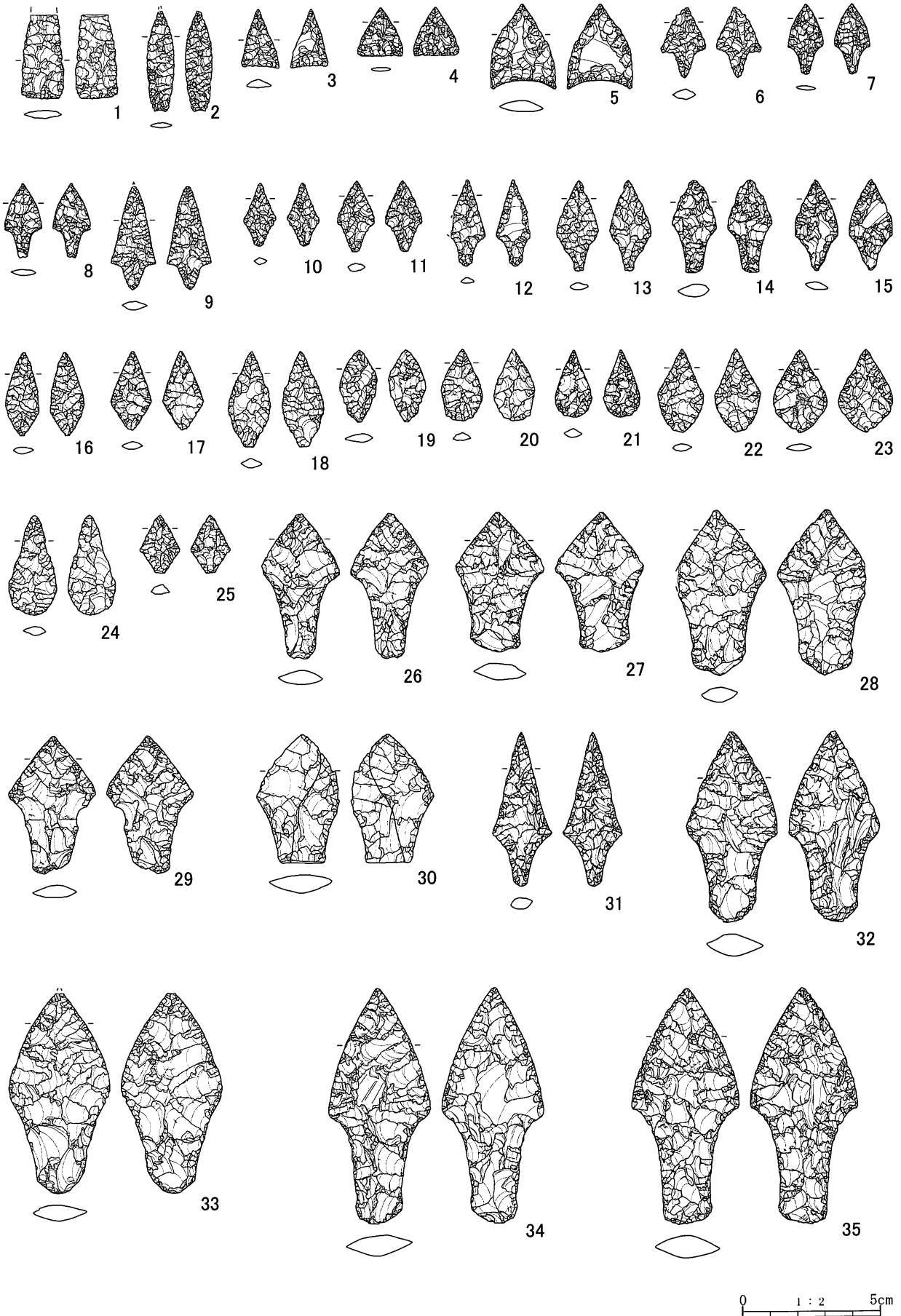
RF・UF (130)

RF・UF は 125 点出土している。130 は頁岩製の剥片末端に微細な剥離痕が残されている。

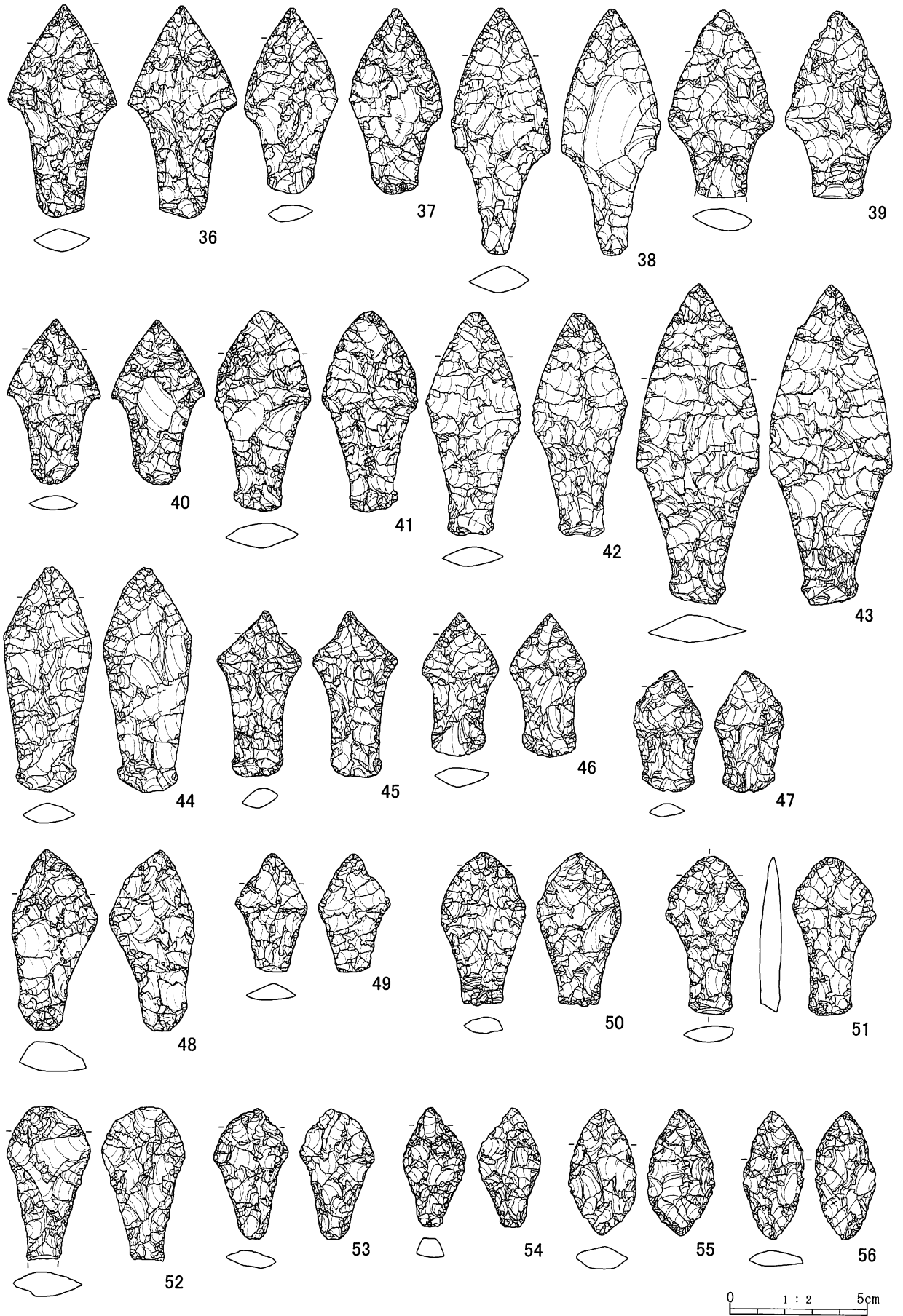
石核 (131-133)

石核は 13 点出土している。131 は岩屑面をもつ黒曜石の原石から横長の剥片が剥離されている石核である。132 は剥離が進行し打面を転位している石核である。作業面を切る、割れ円錐によって破断している。62261 の剥片と接合する。133 は 4 点が接合したもので、打面が転移している。

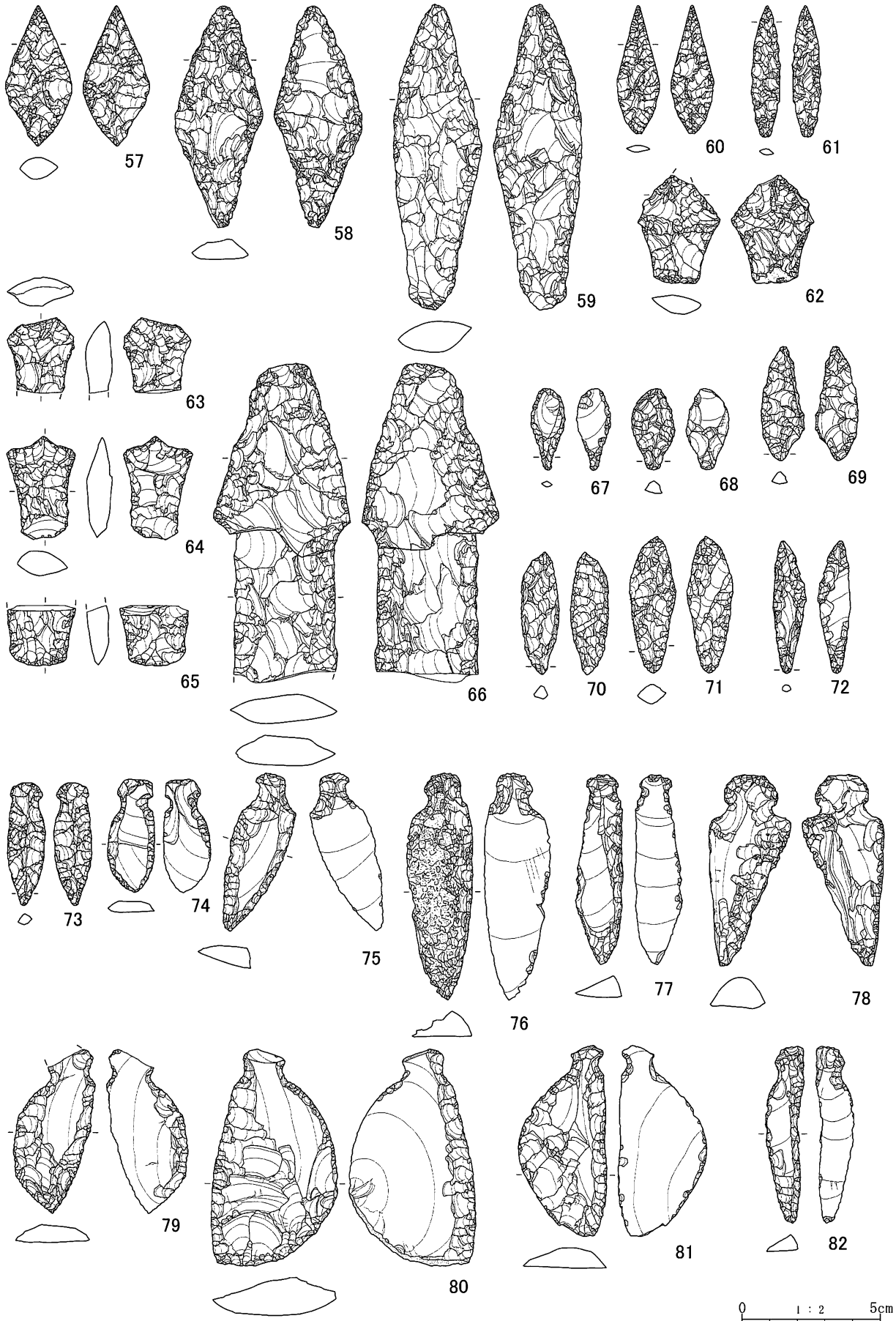
このほか、転礫の完形品が 4 点出土しており、第 V 章第 6 節の黒曜石の原産地分析に掲載している。
(平成 23 年度分：中沢 平成 24 年度分：宮塚翔)



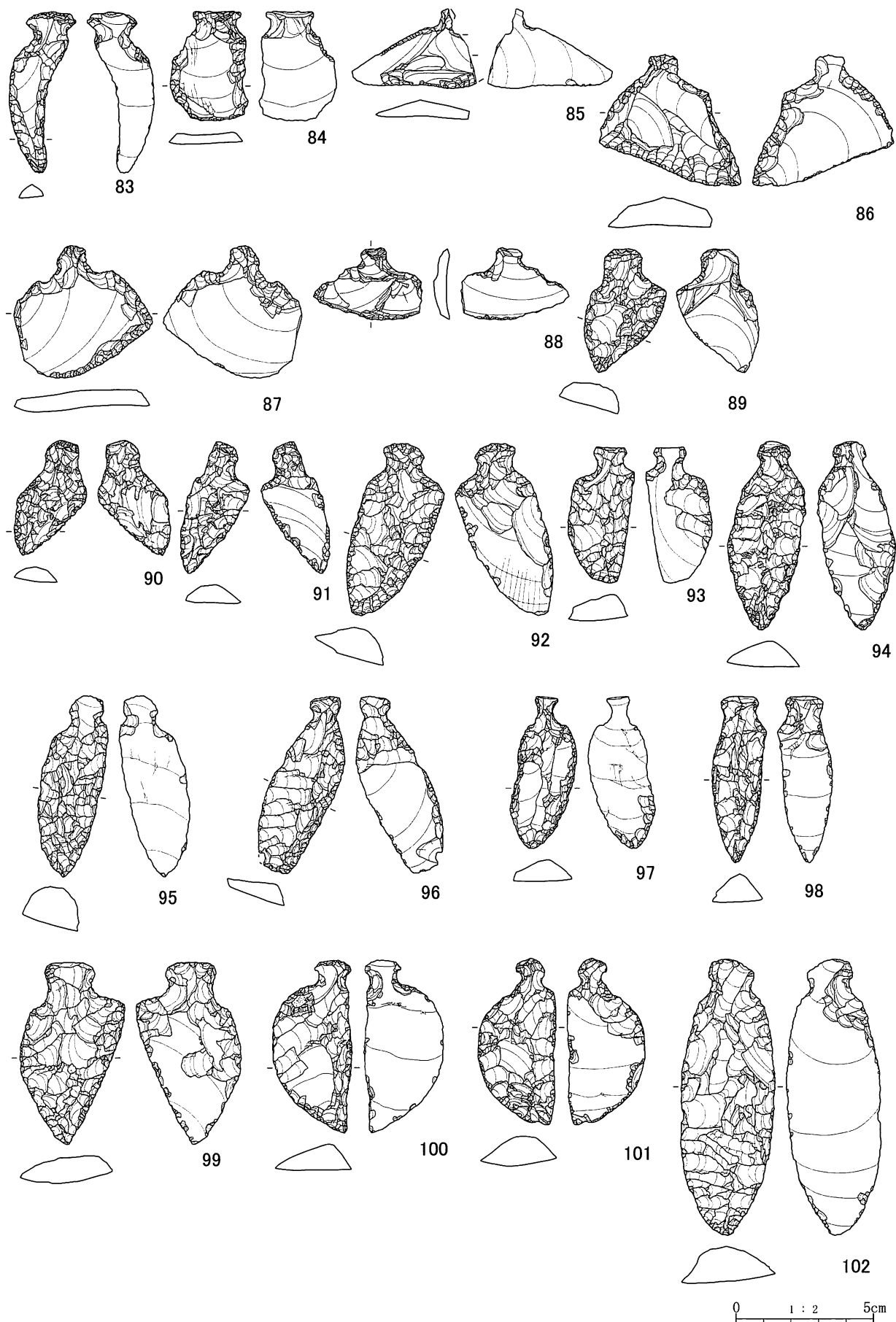
图IV-83 包含層出土剥片石器(1)



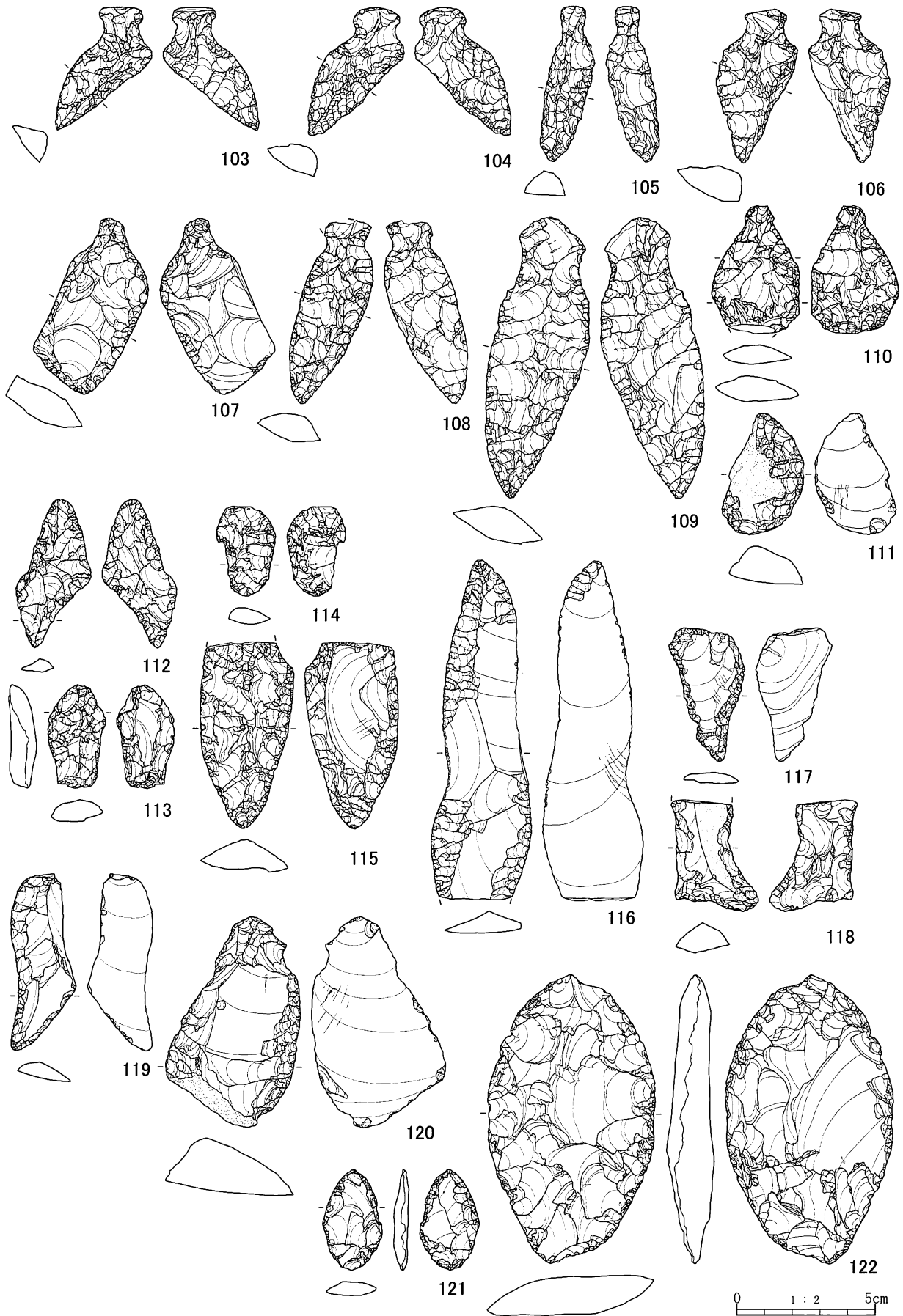
図IV-84 包含層出土剥片石器(2)



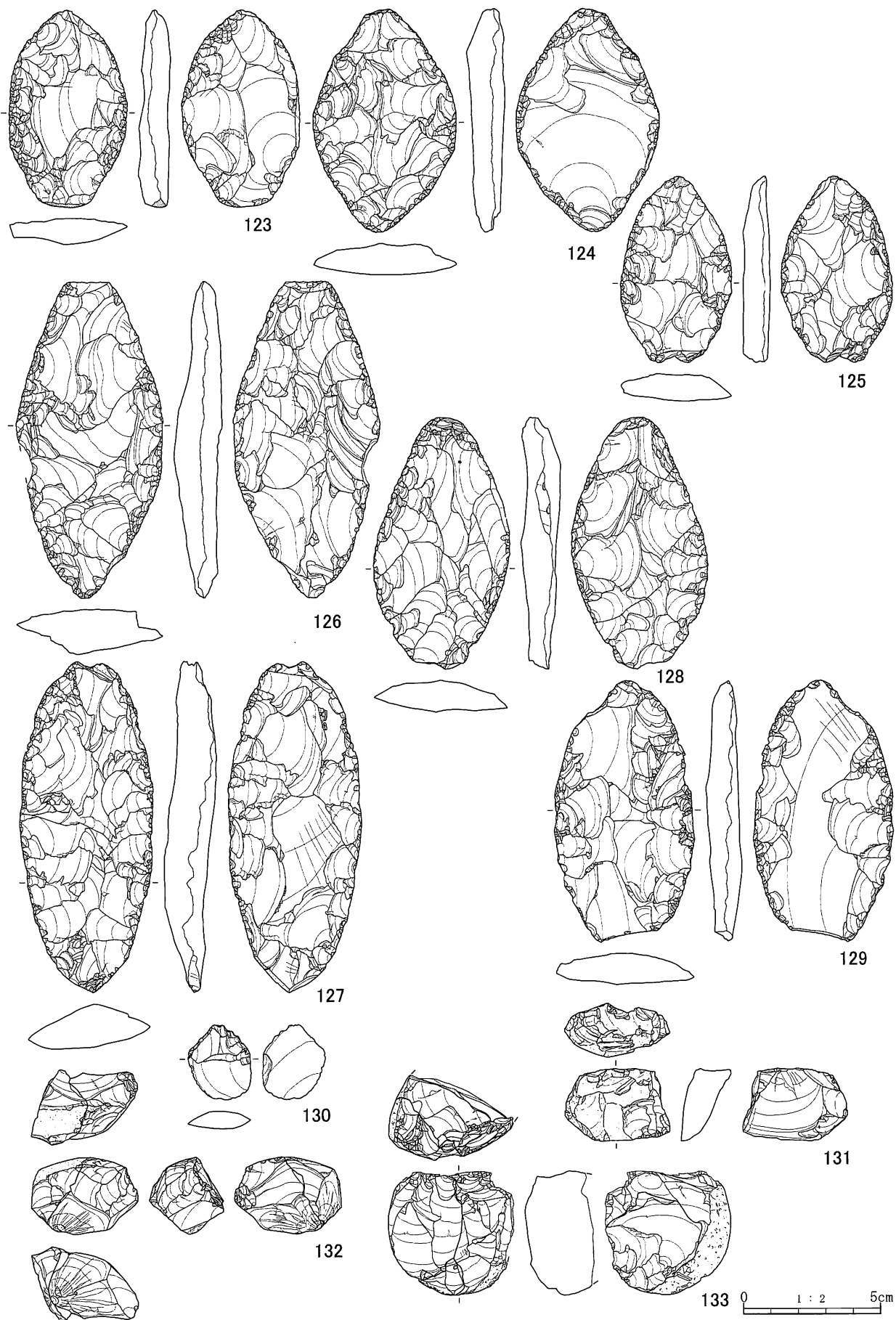
図IV-85 包含層出土剥片石器(3)



図IV-86 包含層出土剥片石器(4)



図IV-87 包含層出土剥片石器(5)



図IV-88 包含層出土剥片石器(6)

表IV-56 縄文時代包含層出土剥片石器属性表(1)

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	グリッド	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
IV-83-1	66-1	-	68488	ポイント類	A2	IXb	AC-36	(30.5)	15.0	3.0	(0.5)	Obs.	先端欠
IV-83-2	66-2	-	144403	ポイント類	A1	VbL	T-30	(36.0)	10.0	2.4	(0.9)	Obs.	
IV-83-3	66-3	-	63508	ポイント類	A2	VbL	AE-30	21.0	13.5	2.7	0.6	Obs.	
IV-83-4	66-4	-	145710	ポイント類	A2	VbL	V-36	17.6	16.4	2.1	0.5	Obs.	
IV-83-5	66-5	-	141139	ポイント類	A2	VbU	Q-33	27.8	23.6	3.9	2.7	Obs.	
IV-83-6	66-6	-	61773	ポイント類	A3	Va	AG-25	25.0	16.5	4.0	1.1	Obs.	
IV-83-7	66-7	-	141150	ポイント類	A3	VbU	T-29	25.2	12.8	3.6	0.8	Obs.	
IV-83-8	66-8	-	143195	ポイント類	A3	VbL	U-33	26.9	13.8	3.1	0.8	Obs.	
IV-83-9	66-9	-	66749	ポイント類	A3	Va	AI-35	39.0	16.0	4.0	1.5	Obs.	
IV-83-10	66-10	-	63746	ポイント類	A3	VbL	AC-24	22.5	11.5	4.2	0.7	Obs.	
IV-83-11	66-11	-	AC-27-3-2	ポイント類	A3	Va	AC-27	25.5	13.0	3.5	1.0	Obs.	
IV-83-12	66-12	-	64916	ポイント類	A3	VbL	AF-24	31.0	12.0	3.1	0.9	Obs.	
IV-83-13	66-13	-	63059	ポイント類	A3	VbL	AD-28	33.0	15.5	4.2	1.4	Obs.	
IV-83-14	66-14	-	142529	ポイント類	A3	VbU	AA-33	33.0	16.0	4.4	1.9	Obs.	
IV-83-15	66-15	-	141955	ポイント類	A3	Va	W-29	32.6	15.6	3.9	1.5	Obs.	
IV-83-16	66-16	-	表採-5	ポイント類	A4	表採	-	30.0	12.5	3.6	1.2	Obs.	尖基
IV-83-17	66-17	-	65059	ポイント類	A4	VbL	AG-25	28.5	15.0	3.4	1.1	Obs.	尖基
IV-83-18	66-18	-	61313	ポイント類	A4	VbU	AH-34	34.5	15.5	4.8	2.0	Obs.	尖基
IV-83-19	66-19	-	U-29-4-1	ポイント類	A4	Vc	U-29	26.0	13.2	4.2	1.2	Obs.	尖基
IV-83-20	66-20	-	62226	ポイント類	A4	Va	AF-28	26.0	15.0	4.3	1.3	Obs.	円基
IV-83-21	66-21	-	145679	ポイント類	A4	VbL	T-35	24.0	12.7	3.7	1.0	Obs.	円基
IV-83-22	66-22	-	65054	ポイント類	A4	VbL	AG-25	30.5	17.0	3.8	1.4	Obs.	基部欠・ 円基
IV-83-23	66-23	-	144261	ポイント類	A4	Vc	V-31	30.0	19.5	3.6	1.6	Obs.	円基
IV-83-24	66-24	-	63060	ポイント類	A4	VbL	AD-28	36.5	18.0	6.1	2.8	Obs.	円基
IV-83-25	66-25	-	61731	ポイント類	A4	Va	AF-25	21.0	14.5	4.2	0.9	Obs.	平基
IV-83-26	66-26	-	61840	ポイント類	B1	Va	AH-24	53.0	28.5	9.1	8.9	Obs.	
IV-83-27	66-27	-	61775	ポイント類	B1	Va	AG-25	51.0	33.0	9.5	11.2	Obs.	
IV-83-28	66-28	-	142340	ポイント類	B1	VbU	Y-32	59.4	(31.9)	10.4	(16.6)	Obs.	肩欠・ 岩屑面有
IV-83-29	66-29	-	144402	ポイント類	B1	Vc	T-28	49.8	31.4	9.7	9.7	Obs.	転礫面有
IV-83-30	66-30	-	143154 142671	ポイント類	B1	VbL VbU	V-34 Y-30	46.1	30.5	9.3	11.1	Obs.	被熱・ 接合
IV-83-31	67-31	-	66525	ポイント類	B1	Vc	AH-24	56.0	21.5	5.6	3.9	Obs.	
IV-83-32	67-32	-	63617	ポイント類	B1	VbU	AD-27	70.0	33.0	10.8	17.7	Obs.	
IV-83-33	67-33	-	144427	ポイント類	B1	VbU	T-28	(74.0)	36.2	10.9	(21.5)	Obs.	
IV-83-34	67-34	-	61928	ポイント類	B1	Va	AJ-25	86.0	37.0	12.3	26.1	Obs.	
IV-83-35	67-35	-	62709	ポイント類	B1	VbL	AB-28	86.6	38.5	10.4	28.2	Obs.	
IV-84-36	67-36	-	65039	ポイント類	B1	VbL	AJ-29	77.0	39.5	11.4	24.8	Obs.	
IV-84-37	67-37	-	143181	ポイント類	B1	VbL	W-34	66.5	34.1	11.3	20.6	Obs.	
IV-84-38	67-38	-	65470	ポイント類	B1	VbL	AK-27	89.0	36.0	10.8	25.8	Si.	
IV-84-39	67-39	-	143420	ポイント類	B1	VbU	AA-29	(67.5)	38.5	11.1	(22.6)	Obs.	基部欠
IV-84-40	67-40	-	64345	ポイント類	B1	MO	AG-28	60.0	34.0	7.6	12.4	Obs.	
IV-84-41	67-41	-	63443	ポイント類	B1	VbU	AJ-31	73.0	35.0	12.2	23.2	Obs.	
IV-84-42	67-42	-	143726	ポイント類	B1	VbL	Z-32	78.9	34.4	11.4	20.6	Si.	
IV-84-43	68-43	-	63493	ポイント類	B1	VbL	AJ-27	116.5	44.5	11.9	49.1	Obs.	
IV-84-44	68-44	-	142990	ポイント類	B2	VbL	S-29	80.7	32.3	9.9	26.0	Sh.	逆刺有
IV-84-45	68-45	-	60931	ポイント類	B1	Va	AB-25	61.0	31.1	9.8	14.4	Obs.	
IV-84-46	68-46	-	142492	ポイント類	B1	VbU	W-28	51.5	27.9	9.3	10.0	Obs.	
IV-84-47	68-47	-	142879	ポイント類	B1	Va	AA-28	43.9	25.0	9.5	9.2	Obs.	再調整有
IV-84-48	68-48	-	65925	ポイント類	B1	VbL	AJ-23	65.5	31.0	12.3	20.9	Obs.	

表IV-57 縄文時代包含層出土剥片石器属性表(2)

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	グリッド	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
IV-84-49	68-54	-	142527	ポイント類	B1	VbU	AA-33	42.8	25.7	9.0	7.6	Obs.	再調整有・ 転礫面有
IV-84-50	68-49	-	142046	ポイント類	B1	VbL	Q-33	54.9	30.7	10.7	15.6	Obs.	先端欠・再 調整有・転 礫面有
IV-84-51	68-50	-	144401	ポイント類	B1	Vc	T-28	56.8	30.2	8.5	11.6	Obs.	再調整有
IV-84-52	68-51	-	63073	ポイント類	D	VbL	AD-29	(56.0)	30.5	9.8	(14.7)	Obs.	基部欠
IV-84-53	68-52	-	145223	ポイント類	B1	VbL	T-30	47.4	27.3	10.2	9.6	Obs.	再調整有
IV-84-54	68-53	-	64459	ポイント類	B2	VbL	AH-30	44.0	24.0	11.0	9.2	Obs.	木葉・ 円基
IV-84-55	68-55	-	61242	ポイント類	B2	VbU	AE-28	46.5	25.0	9.2	8.3	Obs.	木葉・ 尖基
IV-84-56	68-56	-	64711	ポイント類	B2	VbL	AI-33	46.9	22.0	8.2	6.5	Obs.	木葉・ 尖基
IV-85-57	68-57	-	62207	ポイント類	B2	Va	AJ-28	51.0	24.0	9.9	8.8	Obs.	木葉・ 尖基
IV-85-58	69-58	-	61310	ポイント類	B2	VbU	AG-34	80.0	32.0	8.2	18.4	Obs.	菱形
IV-85-59	69-64	-	62766	ポイント類	B2	VbL	AB-29	110.0	32.0	12.3	40.9	Sh.	柳
IV-85-60	69-65	-	65459	ポイント類	B2	VbL	AK-26	46.5	16.1	3.8	2.0	Obs.	柳
IV-85-61	69-66	-	142512	ポイント類	B2	Va	V-28	46.9	9.9	3.4	1.7	Obs.	
IV-85-62	69-59	-	61171	ポイント類	B1	Va	AJ-28	(39.0)	30.0	10.3	(9.6)	Obs.	先端欠
IV-85-63	69-60	-	141954	ポイント類	B1	Va	W-30	(27.3)	24.3	10.1	6.1	Obs.	両端欠・ 再加工有
IV-85-64	69-61	-	143042	ポイント類	B1	VbL	T-29	37.3	25.1	8.6	7.0	Obs.	基部のみ・ 再調整有
IV-85-65	69-62	-	142140	ポイント類	B1	VbU	W-32	(21.5)	24.8	8.5	(4.9)	Obs.	基部のみ
IV-85-66	69-63	-	143987	ポイント類	B2	VbU	X-33	(114.2)	48.8	12.8	(65.4)	Obs.	基部欠・ 接合
			X-32										
IV-85-67	69-67	-	65053	石 錐	A	VbL	AG-24	29.0	12.6	3.4	1.3	Sh.	
IV-85-68	69-68	-	65499	石 錐	B	VbL	AH-25	29.0	15.5	9.5	2.0	Sh.	
IV-85-69	69-69	-	63058	石 錐	C	VbL	AD-28	38.5	15.5	8.9	5.5	Sh.	
IV-85-70	69-70	-	AC-31-1-1	石 錐	D	VbU	AC-31	44.0	14.0	9.3	6.6	Sh.	
IV-85-71	69-71	-	62885	石 錐	D	VbL	AC-32	49.0	18.0	9.4	6.7	Obs.	
IV-85-72	69-72	-	142020	石 錐	D	VbU	R-28	47.5	11.9	6.0	3.2	Sh.	
IV-85-73	69-73	-	63726	石 錐	E	VbL	AB-24	59.0	18.8	11.9	12.3	Sh.	
IV-85-74	69-74	-	64067	ナイフ・スクレイパー類	A1	VbL	AC-30	54.0	23.0	5.6	8.4	Sh.	
IV-85-75	69-75	-	63117	ナイフ・スクレイパー類	A1	VbL	AD-32	58.5	21.0	7.7	10.1	Sh.	
IV-85-76	69-76	-	142134	ナイフ・スクレイパー類	A1	Va	W-32	46.9	22.6	8.4	17.7	And.	
IV-85-77	70-77	-	142748	ナイフ・スクレイパー類	A1	VbL	Y-30	67.8	15.5	8.0	8.4	Sh.	
IV-85-78	70-78	-	142780	ナイフ・スクレイパー類	A1	VbL	V-28	69.0	26.3	10.4	15.0	Obs.	
IV-85-79	70-79	-	65659	ナイフ・スクレイパー類	A1	VbL	AF-28	(59.0)	30.0	8.6	(11.6)	Sh.	
IV-85-80	70-80	-	64610	ナイフ・スクレイパー類	A1	Vc	AB-24	79.0	46.0	12.5	41.7	Sh.	
IV-85-81	70-81	-	141865	ナイフ・スクレイパー類	A1	Va	Y-34	68.1	31.0	8.3	16.5	Sh.	
IV-85-82	70-82	-	61121	ナイフ・スクレイパー類	A1	Va	AK-24	64.0	14.0	7.5	5.6	Sh.	
IV-86-83	70-83	-	142100	ナイフ・スクレイパー類	A1	VbU	Z-29	57.2	14.8	7.7	6.1	Sh.	
IV-86-84	70-84	-	145666	ナイフ・スクレイパー類	A1	VbU	P-33	39.5	26.2	4.7	5.6	Sh.	
IV-86-85	70-85	-	64314	ナイフ・スクレイパー類	A1	MO	AF-29	(45.0)	29.0	4.9	3.3	Sh.	欠損
IV-86-86	70-86	-	61301	ナイフ・スクレイパー類	A1	VbU	AF-34	51.5	48.0	9.8	20.0	Sh.	
IV-86-87	70-87	-	60721	ナイフ・スクレイパー類	A1	-	AD-27	50.0	48.0	8.1	16.6	Sh.	欠損
IV-86-88	70-88	-	143418	ナイフ・スクレイパー類	A1	VbL	AA-29	38.7	26.0	4.0	4.3	Sh.	
IV-86-89	70-89	-	65288	ナイフ・スクレイパー類	A2	VbL	AE-26	46.0	26.5	8.4	9.4	Obs.	

表IV-58 縄文時代包含層出土剥片石器属性表(3)

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	グリッド	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
IV-86-90	70-90	-	142146	ナイフ・スクレイパー類	A2	Va	W-32	44.0	19.1	7.8	6.6	Obs.	岩屑面有
IV-86-91	70-91	-	142484	ナイフ・スクレイパー類	A2	VbU	X-28	48.0	20.6	7.1	6.5	Obs.	転礫面有
IV-86-92	71-92	-	66675	ナイフ・スクレイパー類	A2	Vc	AH-24	64.5	28.5	9.6	17.2	Obs.	磨滅有
IV-86-93	71-93	-	AD-28-1-3	ナイフ・スクレイパー類	A2	VbL	AD-28	49.1	24.0	9.8	11.3	Sh.	
IV-86-94	71-94	-	142174	ナイフ・スクレイパー類	A2	VbU	V-29	68.0	24.3	18.4	13.6	Obs.	
IV-86-95	71-95	-	60860	ナイフ・スクレイパー類	A2	Va	AD-32	66.0	23.0	13.1	19.0	Si.	
IV-86-96	71-96	-	66162	ナイフ・スクレイパー類	A2	VbL	AH-24	67.0	24.0	8.7	11.6	Sh.	松原型
IV-86-97	71-97	-	143636	ナイフ・スクレイパー類	A2	VbL	Y-34	54.4	21.3	7.1	9.8	Che.	
IV-86-98	71-98	-	144663	ナイフ・スクレイパー類	A2	VbL	U-28	59.7	16.8	10.3	11.1	Sh.	
IV-86-99	71-99	-	62421	ナイフ・スクレイパー類	A2	VbU	AD-27	66.0	38.0	10.6	21.6	Obs.	
IV-86-100	71-100	-	144216	ナイフ・スクレイパー類	A2	Vc	W-31	62.0	27.3	9.3	15.0	Sh.	
IV-86-101	71-101	-	145307	ナイフ・スクレイパー類	A2	VbL	AA-29	59.4	27.6	9.8	14.5	Obs.	
IV-86-102	71-102	-	66591	ナイフ・スクレイパー類	A2	Vc	AH-23	100.0	35.0	13.2	46.2	Sh.	
IV-87-103	71-103	-	61782	ナイフ・スクレイパー類	A3	Va	AG-24	52.0	26.0	10.1	9.9	Obs.	磨滅有
IV-87-104	71-104	-	65926	ナイフ・スクレイパー類	A3	VbL	AJ-23	54.0	23.5	9.0	10.2	Obs.	磨滅有
IV-87-105	71-105	-	63488	ナイフ・スクレイパー類	A3	VbL	AI-26	56.0	16.0	9.0	7.7	Sh.	
IV-87-106	71-106	-	63410	ナイフ・スクレイパー類	A3	VbL	AH-26	54.5	26.0	10.8	12.9	Obs.	
IV-87-107	72-107	-	61112	ナイフ・スクレイパー類	A3	Va	AJ-25	62.0	31.5	11.8	25.3	Obs.	
IV-87-108	72-108	-	65001	ナイフ・スクレイパー類	A3	VbL	AC-28	69.0	24.0	9.0	(16.3)	Sh.	
IV-87-109	72-109	-	61839	ナイフ・スクレイパー類	A3	Va	AH-24	102.0	34.0	10.5	38.2	Sh.	
IV-87-110	72-110	-	145680	ナイフ・スクレイパー類	A3	VbL	T-35	(46.0)	32.6	9.5	(12.5)	Obs.	檜の転用
IV-87-111	72-111	-	68384	ナイフ・スクレイパー類	B1	VbL	AF-38	44.0	29.0	11.6	15.2	Obs.	
IV-87-112	72-112	-	61108	ナイフ・スクレイパー類	C1	Va	AJ-25	53.5	27.0	8.7	7.8	Obs.	檜の転用
IV-87-113	72-114	-	142554	ナイフ・スクレイパー類	C1	VbU	Z-31	37.3	20.6	8.6	7.3	Obs.	檜の転用
IV-87-114	72-113	-	143015	ナイフ・スクレイパー類	C1	VbL	S-33	32.2	21.4	6.9	3.6	Obs.	先端欠・再加工品
IV-87-115	72-115	-	61402	ナイフ・スクレイパー類	C1	VbU	AC-31	(67.2)	34.0	9.8	22.1	Obs.	欠損
IV-87-116	72-116	-	65910	ナイフ・スクレイパー類	C1	Vc	AK-25	(123.0)	37.0	9.0	31.7	Sh.	
IV-87-117	72-117	-	68278	ナイフ・スクレイパー類	C1	Vc	AH-42	48.5	28.0	6.3	5.6	Obs.	
IV-87-118	72-118	-	64568	ナイフ・スクレイパー類	C2	Vc	AD-23	(40.0)	31.5	11.0	10.7	Obs.	
IV-87-119	72-119	-	144186	ナイフ・スクレイパー類	C2	Vc	V-33	64.1	20.8	10.4	13.0	Sh.	岩屑面有
IV-87-120	72-120	-	67020	ナイフ・スクレイパー類	C3	Va	AH-39	76.0	49.0	21.7	55.7	Obs.	
IV-87-121	73-121	-	144141	両面調整石器	-	Vc	T-33	36.5	21.6	5.0	3.9	Obs.	
IV-87-122	73-122	-	140049	両面調整石器	-	V	V-32	104.1	59.2	16.8	92.1	Obs.	
IV-88-123	73-123	-	61015	両面調整石器	-	Va	AF-24	71.5	43.0	12.0	34.2	Obs.	
IV-88-124	73-124	-	61725	両面調整石器	-	Va	AF-24	80.0	52.5	13.5	50.9	Obs.	
IV-88-125	73-125	-	61022	両面調整石器	-	Va	AF-25	67.5	41.0	10.0	28.4	Obs.	転礫面有
IV-88-126	73-126	-	61047	両面調整石器	-	Va	AG-25	115.0	54.0	17.5	(80.8)	Obs.	
IV-88-127	74-127	-	142130	両面調整石器	-	Va	W-31	118.5	48.1	15.6	84.5	Obs.	岩屑面有
IV-88-128	74-128	-	61046	両面調整石器	-	Va	AG-25	91.0	50.0	14.0	55.6	Obs.	
IV-88-129	74-129	-	143200	両面調整石器	-	VbL	U-34	91.1	49.8	11.6	55.2	Obs.	
IV-88-130	74-130	-	AJ-26-1-11	RF・UF	-	Va	AJ-26	27.0	23.0	6.2	3.6	Sh.	
IV-88-131	74-131	-	64285	石核	-	MO	AI-29	38.0	26.5	13.0	15.5	Obs.	
IV-88-132	75-132	FT-506	62261他	石核	-	Va	AG-31	39.0	28.0	25.8	25.1	Obs.	被熱
IV-88-133	75-133	-	143185	石核	-	VbL	V-33	(46.9)	(44.6)	(27.5)	(66.9)	Obs.	接合
			142592			VbU	W-33						
			142249			VbU	V-33						
			W-33-1-110			VbU	W-33						

4. 礫石器 (図IV-89～105 図版 76～81)

平成 23・24 年度の調査で、礫石器はV層全体で3,051点出土し、このうち119点を図示した。

石斧 (1～10)

石斧は破片を含めて284点出土しており、そのうち完形品は37点である。1から7は分類Aの磨製石斧である。1は砂岩製の小型のもので両刃である。全面に研磨調整を施しているが、一部に剥離面を残す。2は擦り切り痕を残す片刃のものである。基部で折損したと思われるが、破断面側からの打ち欠きが部分的にあるため、意図的に基部調整が行われたと思われる。刃縁には刃こぼれと思われる微細な剥離が認められる。3はやや大型で横断面形が隅丸方形に近い両刃のものである。研磨調整はほぼ全面に施されているが、基部端には剥離調整痕が残る。4・5は片刃の薄型で、ほぼ全面に研磨調整が施されている。剥離調整痕が顕著で、ある程度剥離整形を行ってから研磨による仕上げを行っている。6は板状素材を利用し非常に薄く、側縁と刃部付近に剥離が集中するため、素材形状から剥離整形で作出していることがわかる。2～6の石材は緑色泥岩製である。7は青色片岩製の丸のみ形石斧である。刃面は長軸の中心よりやや左寄りに浅い抉りがつけられている。研磨調整は刃部と側縁を中心に施している。8～10は未製品で、いずれも離れて出土した破片を接合したものである。8は4点が接合したもので、剥離整形中に折損したと思われる。表裏両面の側縁付近に研磨調整痕も見られる。9は剥離整形後、敲打調整時に破損したと思われる。その後、刃部側に調整を進めており、接合面での段差が著しい。原石面を多く残す。10は扁平な礫に敲打調整と研磨を加えたところで破損したと思われる。裏面には下位から縦方向に延びる溝状の敲打痕があり、擦り切りの前処理の可能性ある。石材は3点とも緑色泥岩製である。

たたき石 (11～44)

たたき石は破片を含めて996点出土している。素材礫の形状と敲打痕の位置で細分を行っているが、461点は欠損の為、細分は行っていない。11はIA1類で、縦長の扁平礫を素材として平坦面にごく浅い敲打痕がある。12はIA2類で、扁平礫の側縁には浅い敲打痕があり、両端部には連続した敲打痕とそれに伴う剥離が認められる。13～16はIA3類で、主に両面と端部に敲打痕が認められる。うち13は深く明瞭な窪みが平坦面に認められ、15・16は端部の敲打痕が顕著である。17～24は棒状または角柱状素材のものである。17は2点が接合したIB1類で、両面の上部と下部に分かれて浅い敲打痕がある。上端から側縁にかけて欠損している。18・19はIB2類で、共に両端部に密集した細かな敲打痕がある。19は2点が接合したもので、長軸方向で破損しているが、破断面に剥離が認められるため破損後も使用したと考えられる。20～24はIB3類に分類したものである。20は断面三角形の棒状礫の全面を使用し、特に平坦面の窪みが顕著である。端部に1カ所大きな剥離面が認められる。21は両平坦面と側面にごく浅い敲打痕があり、上端部から側縁にかけて連続した剥離痕が見られる。被熱している。23は破片4点が接合したもので、長軸が25cmを測る。平坦面の中央付近と端部に浅い離敲打痕がある。破損後、破断面に剥離が認められることから、再利用していた可能性がある。22・24は断面が四角形の礫の平坦面と端部を使用したものである。共に被熱しており長軸方向で深い敲打痕が残る。23の上端部は一部欠損している。25～30はIIA類のもの。25は2点が接合し、一部が欠損したものであるが、一方の破断面に連続した剥離と敲打痕が認められる。26は扁平で方形に近い礫の側縁を廻るように細かい敲打痕が連続している。27・28は平面形が不整形で礫の側縁部と端部を使用したもの。27は浅い敲打痕の下に擦痕が認められる。28はそれぞれの

端部に敲打痕と剥離痕が集中し、主に端部を意識して使用している。29・30は扁平礫の両平坦面に敲打痕があり、29は浅く、30は中心に深い敲打痕がある。31～33はⅡB2類の上下端部に密集した使用痕があるもので、31は一端に敲打痕が集中する。32・33は両端に敲打とこれに伴う剥離痕がある。34・35はⅡB3類で、34は方形礫の片面ほぼ全面に敲打痕があり、裏面には剥離と敲打以前の擦痕がある。35は接合したもので、全面に深い敲打痕があり、裏面には4条の線条痕が認められる。36～38はⅢA類で、36は両平坦面に敲打痕があるが、特に表面の擦痕を切るように密な敲打痕が認められる。37は平坦面と側縁に、38は全面に明瞭な敲打痕があり、38は特に下端部の敲打が顕著である。39～41はⅢB類で球形に近い礫を使用したものである。39・40は1ヶ所に敲打痕が集中しており、その他の敲打痕は疎らである。41は3面に深い敲打痕が残る。42～44は他石器からたたき石に転用したものである。42は石斧として使用していたものを、破損後にたたき石に転用したもの。下端部は細かい敲打で潰れ、破断面には打ち欠きがあり角が丸くなっている。43・44はすり石、砥石からの転用品である。43は両面と右側面をすり石として使用した後、ほぼ全面敲打をしており剥離も顕著である。44はやや大きい不整形の礫を素材とし、平坦面に細い線条痕が認められるが、その溝を切って敲打痕が見られる。石材は14が緑色片岩製、19・26・31は斑れい岩製、21・27・28・34・43は緑色泥岩製、32は酸性凝灰岩製、33は玄武岩製、42は泥岩製、それ以外は砂岩製である。

扁平打製石器 (45)

平成23年度の調査で、1点だけ出土したものである。45は使用面に明瞭な擦り面は観察されない。端部が両側からの剥離により尖っている。石材は砂岩である。

すり石 (46～92)

すり石は498点出土している。平成23・24年度の調査では、北海道式石冠と擦りたたき併用石器が多数出土した。擦りとたたきを併用したタイプは、素材礫の形状が不明になるほど研磨しており、分類上、すり石の範疇で報告している。46・47はB類に分類したものである。46は欠損しているが、両面に平坦な、両側縁に明瞭な稜をもつ擦り面が見られる。47は側縁部に明瞭な敲打痕があるが、たたき石として使用した後、すり石に転用したと思われる。石材は共に砂岩製である。48は扁平礫の下縁部側縁に敲打剥離が認められるもの。49は小型の円形礫側縁を擦り面としたもので、赤色顔料が付着している。石材はドレライト製である。50～73はD類の北海道式石冠である。全体では破片を含めて、406点が出土している。50～59は全面を敲打整形した、頂部が丸いタイプのものである。51と52は共に離れた場所で出土した2点が接合したもので、使用時に端部が破損した資料と思われる。どちらも破損後に使用され、本体の擦り面がより擦り減っている。破断面には連続する剥離痕が残っている。52の図の側面観は、割れた部分を外した状態で実測している。55の擦り面には赤色顔料が付着している。56は被熱、58は擦り面が丸く擦り減っている。59は接合したもので擦り面の稜が直角に近く、使用頻度が低いうちに破損したと思われる。60～64は全面を敲打整形し頂部が尖ったタイプで、側面から見ても頂部が鋭角に尖り、把握部の直下は抉れている。60・64は側縁を部分的に欠損しているが、その後も剥離整形を行っている。61～63は接合した資料である。擦り面に段差が見られず、破損後は廃棄、もしくは使用頻度が低かったものと思われる。65～67は大きく素材形状を残し、把握部のみ作出しているものである。65は使用面からの剥離が顕著で、擦り面の幅が狭い。66は擦りの方向が長軸に対して斜めで、断面では片減りしていることがわかる。67は欠損品である。擦り面の稜が直角に近く、使用頻度が低いうちに破損したものと思われる。68

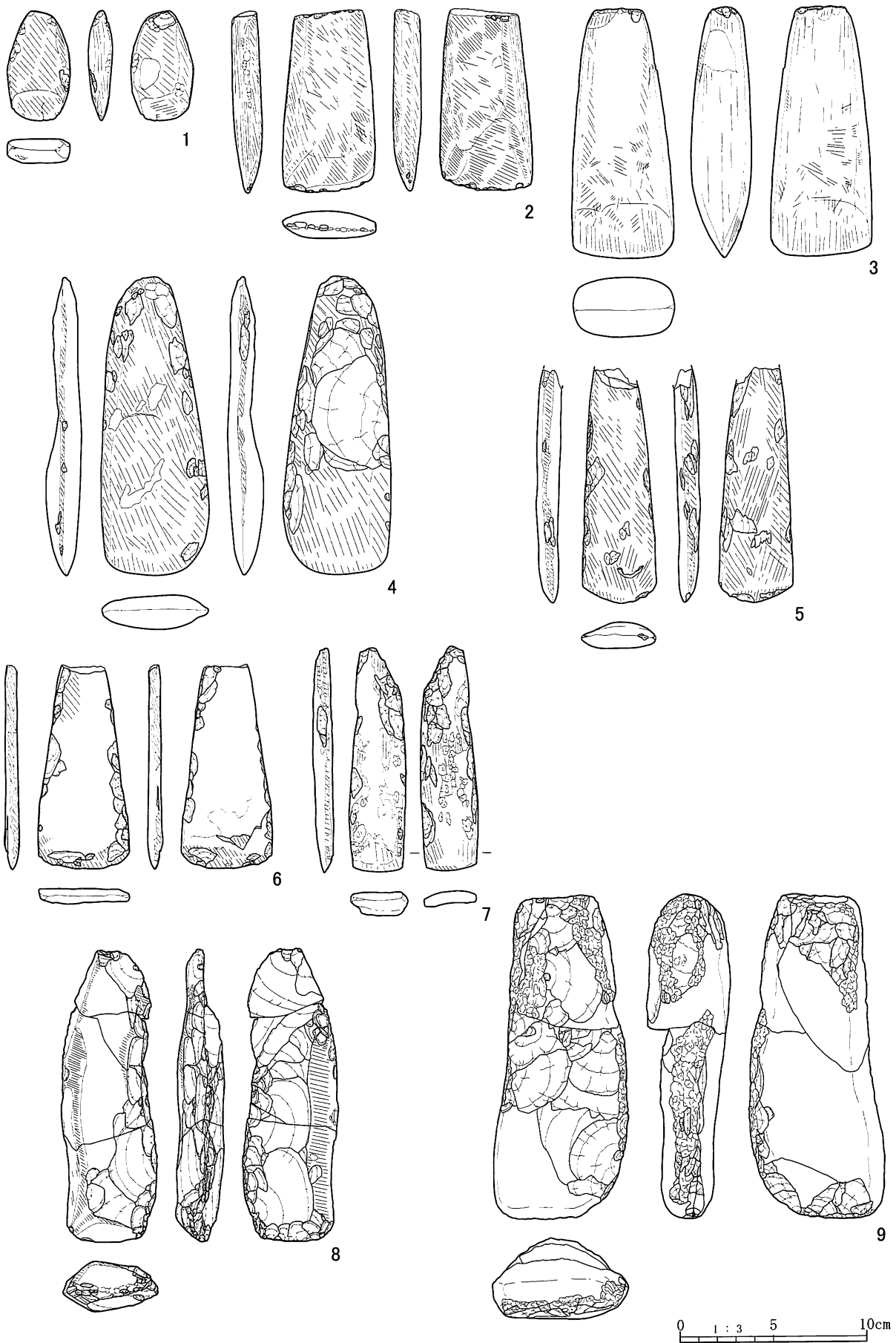
は頂部が扁平のもので破片4個が接合したものである。高さに比して全体の幅が厚く、破片の一方のみに使用痕が認められることから、欠損後にそれぞれ使用したと思われる。69・70はミニチュアである。どちらも使用されており、69は擦り面の稜がなくなっている。70は側縁部から擦り面にかけて欠損している。71～73は未製品である。71は半円形の厚みのない礫を利用したものである。敲打と剥離整形の途中と思われる。72は小型の扁平礫を利用したもの。頂部に僅かな敲打調整と把握部と思われる連続した敲打調整を行っている。73は楕円形と思われる礫を半割し、これを素材として頂部に敲打と剥離調整を施し、その下に把握部を作出したもの。破断面に剥離と敲打調整を施している途中と思われる。石材は54・58が安山岩製、それ以外はすべて砂岩製である。74・75はE類としたものである。74は棒状礫の先端部と側面付近のごく一部に擦痕がある。75は折損した棒状礫の破断面を擦り面にしているが、同じ面に密な敲打痕もあり、たたき石としても利用されている。共に砂岩製である。76～92はF類の擦りとたたきを併用したものである。全体では53個体が出土し、石材もバラエティーに富んでいる。全出土品の石材ごとの割合は、玄武岩24%、緑色泥岩17%、斑れい岩15%、花崗岩11%、片麻岩10%、砂岩9%、角閃岩、ドレライトは各5%、花崗閃緑岩と青色片岩は各2%である。76は全面をほぼ擦り面として使用している。稜は明瞭で、2面に浅い敲打痕がある。77は不整形な転礫を部分的に使用したもので、擦り面は6面に分かれている。敲打痕は側縁に2カ所浅く認められる。79は楕円形の円礫の1面をすり石として使用し、同じ面と端部に浅い敲打痕があるもの。81は転礫の1面を除き、擦痕と浅い敲打痕で、素材形状をほぼとどめない。77・79・81には赤色顔料が付着している。78・80・82～90・92はほぼ全面を擦りに使用しており、素材礫の形状が不明なものである。どれも平坦面の中央付近に深い敲打痕がある。88と92は特に擦痕が顕著で両端部は鋭角的な稜を持つ。83・89・90には赤色顔料が付着している。91は半円形の礫に5面の擦痕があり、それらを切るように敲打痕と剥離痕がある。石材は76・79が砂岩製、77・81が緑色泥岩製、78・82・84・87が花崗岩製、80・92が角閃岩製、83・89が玄武岩製、85・86が斑れい岩製、88が花崗閃緑岩製、90がドレライト製、91が青色片岩製である。

石鋸 (93～98)

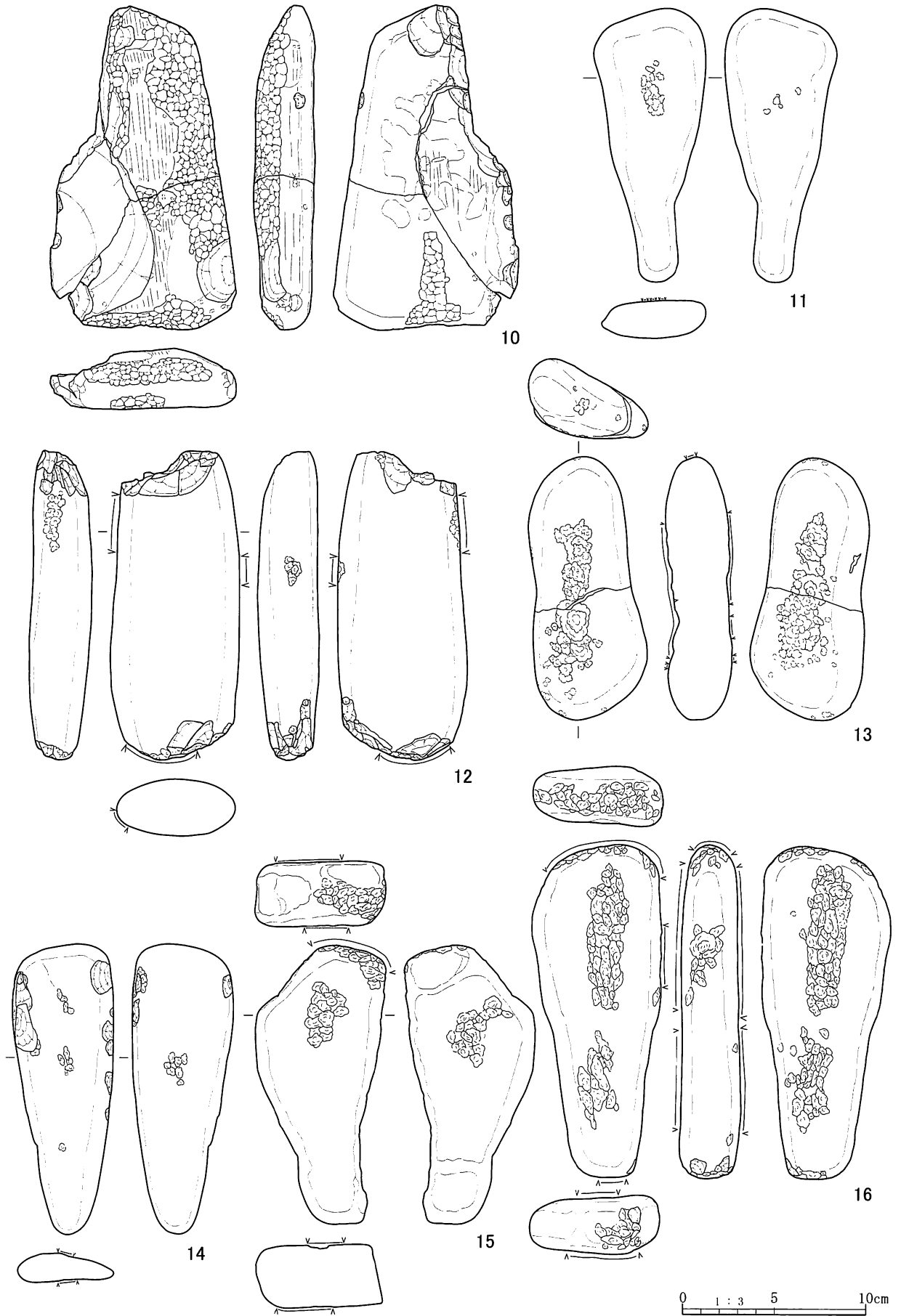
石鋸は破片を含めて全体で118点出土した。そのうち図示したものは9点である。93～96は使用断面がU字形のものである。93はやや大型で、三角形の素材礫を使用したもの。使用面は僅かに傾く。94は扁平礫を利用したもので、破損している。95は使用面が幅広で、全体が黒く被熱しているが、破断面は黒色化しておらず、被熱後の焼けはじけで破損したと思われる。96は砥石を転用したもので、使用面は直線的である。97・98は使用面がV字形のものである。97は板状礫の側縁2面を使用している。一方は緩やかに丸みを帯びているが、もう一方は鋭角に尖っている。98の使用面はやや幅広く、緩やかなV字形である。石材はすべて砂岩製である。

砥石 (99～107)

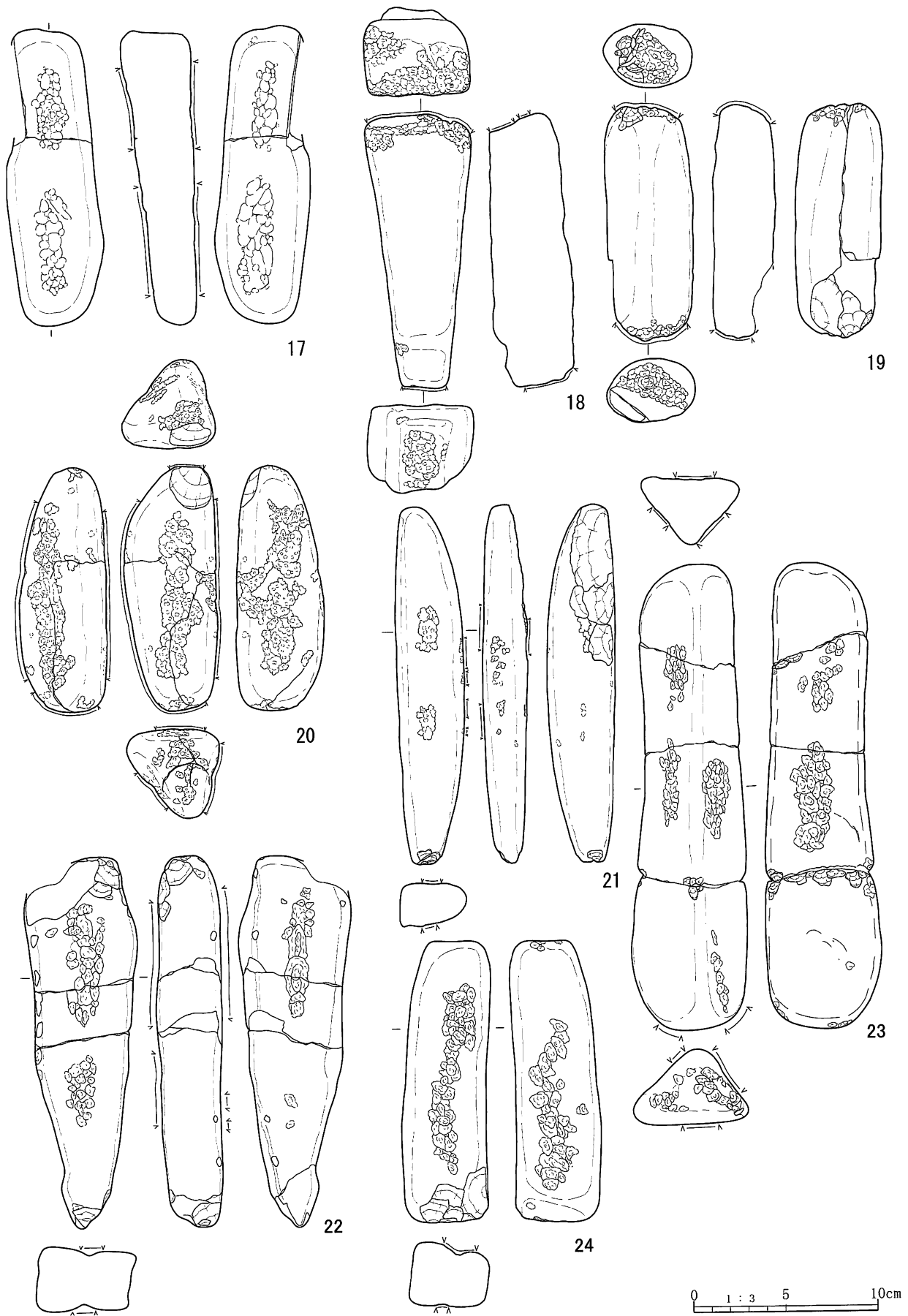
砥石は561点出土した。そのうち、図示したものは9点である。99は大型のもの。両面を使用している。表面には部分的に深い線条痕と浅い線条痕が見られる。裏面は2つの単位で使用された稜がある。100は4点が接合されたもの。両面が使用された薄型のもので、表面全面は滑らかで中央が楕円形に窪む。裏面は2方向に使用痕が見られる。また、破損した後の破断面に敲打痕や剥離が見られる。破損後、1点が被熱している。101は厚みのある板状礫を使用したもので、砥面は3つの単位に分かれている。102は表面全面を使用し、わずかに窪む。右側面の使用面には明瞭な溝が1



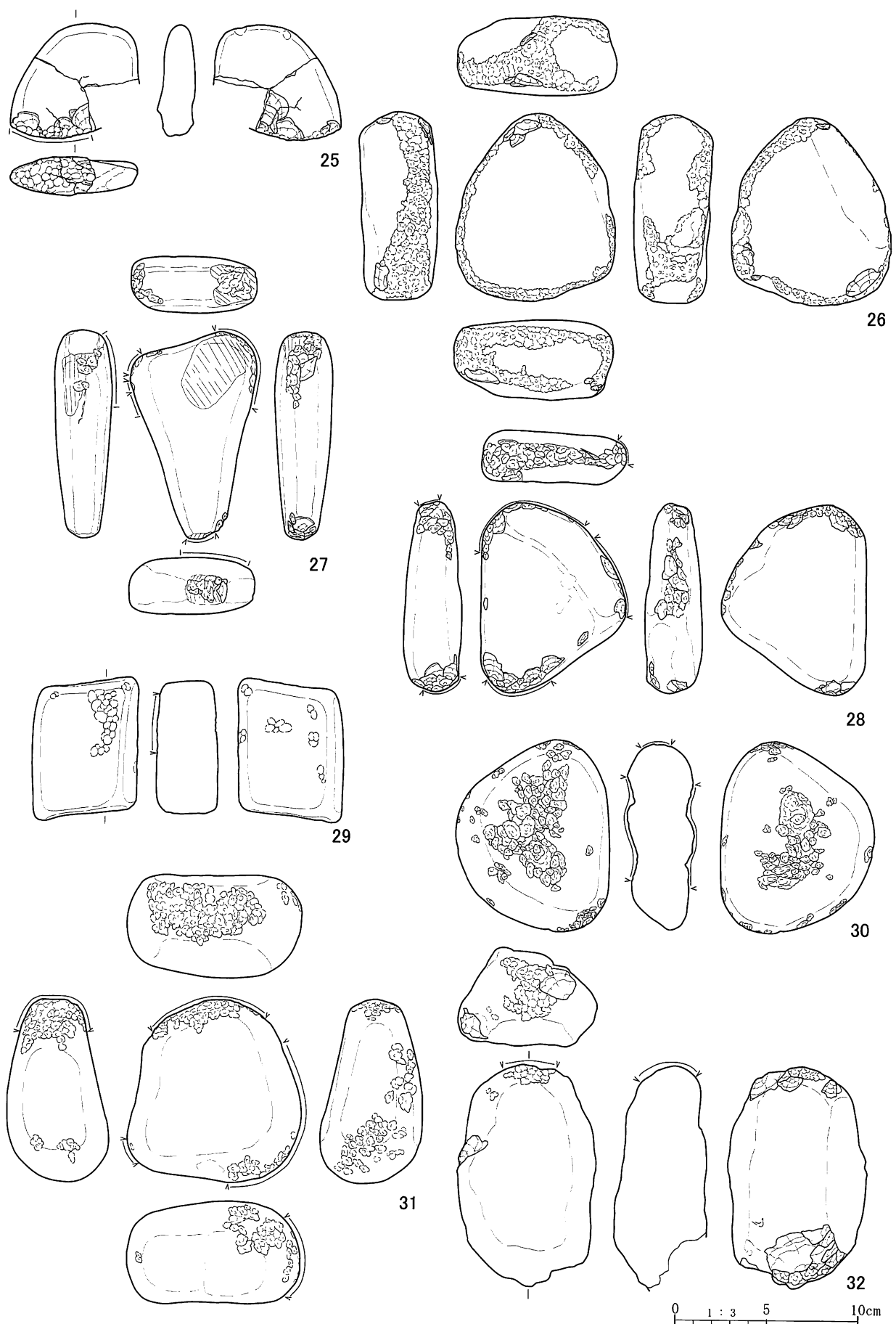
図IV-89 包含層出土礫石器(1)



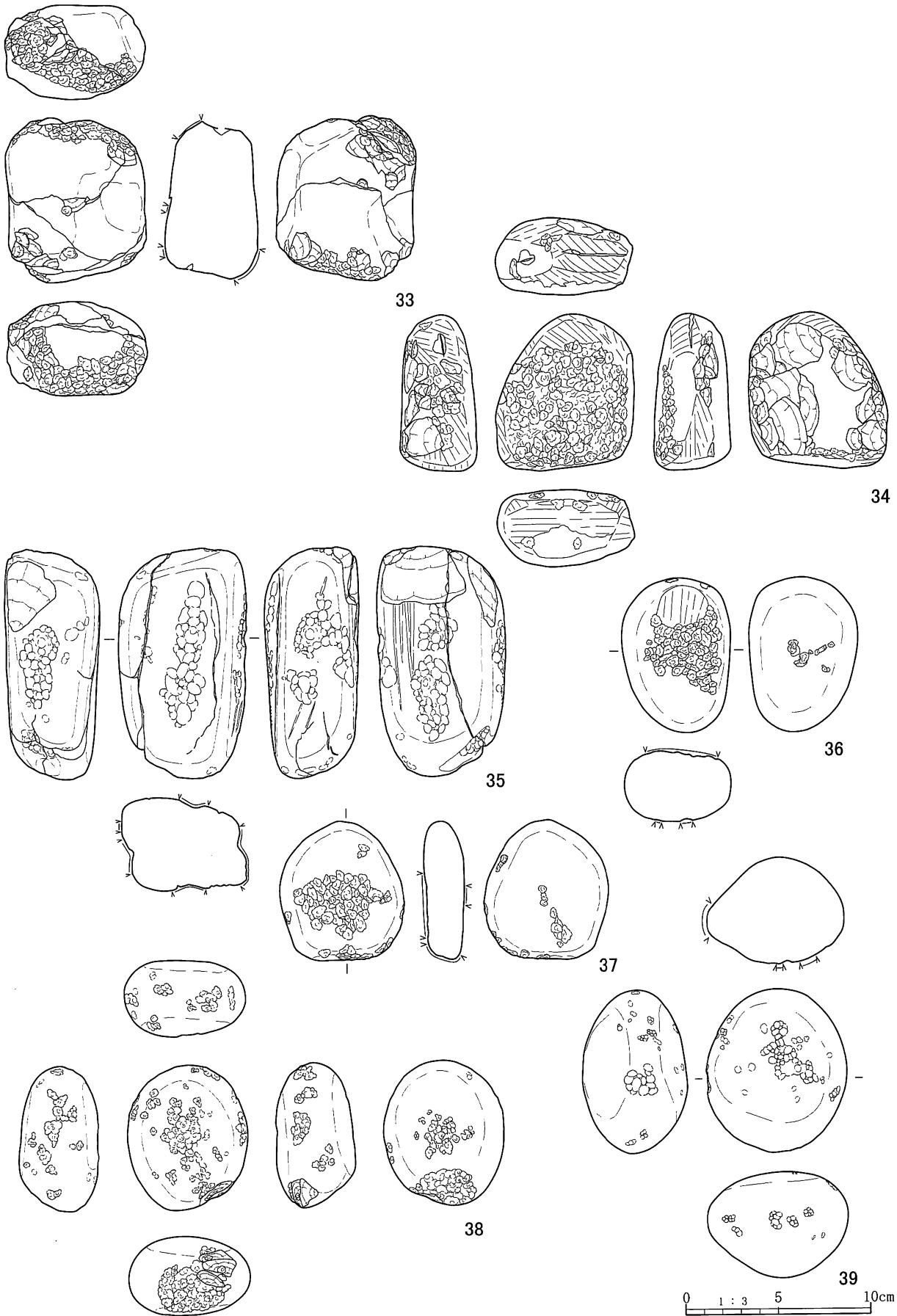
図IV-90 包含層出土礫石器(2)



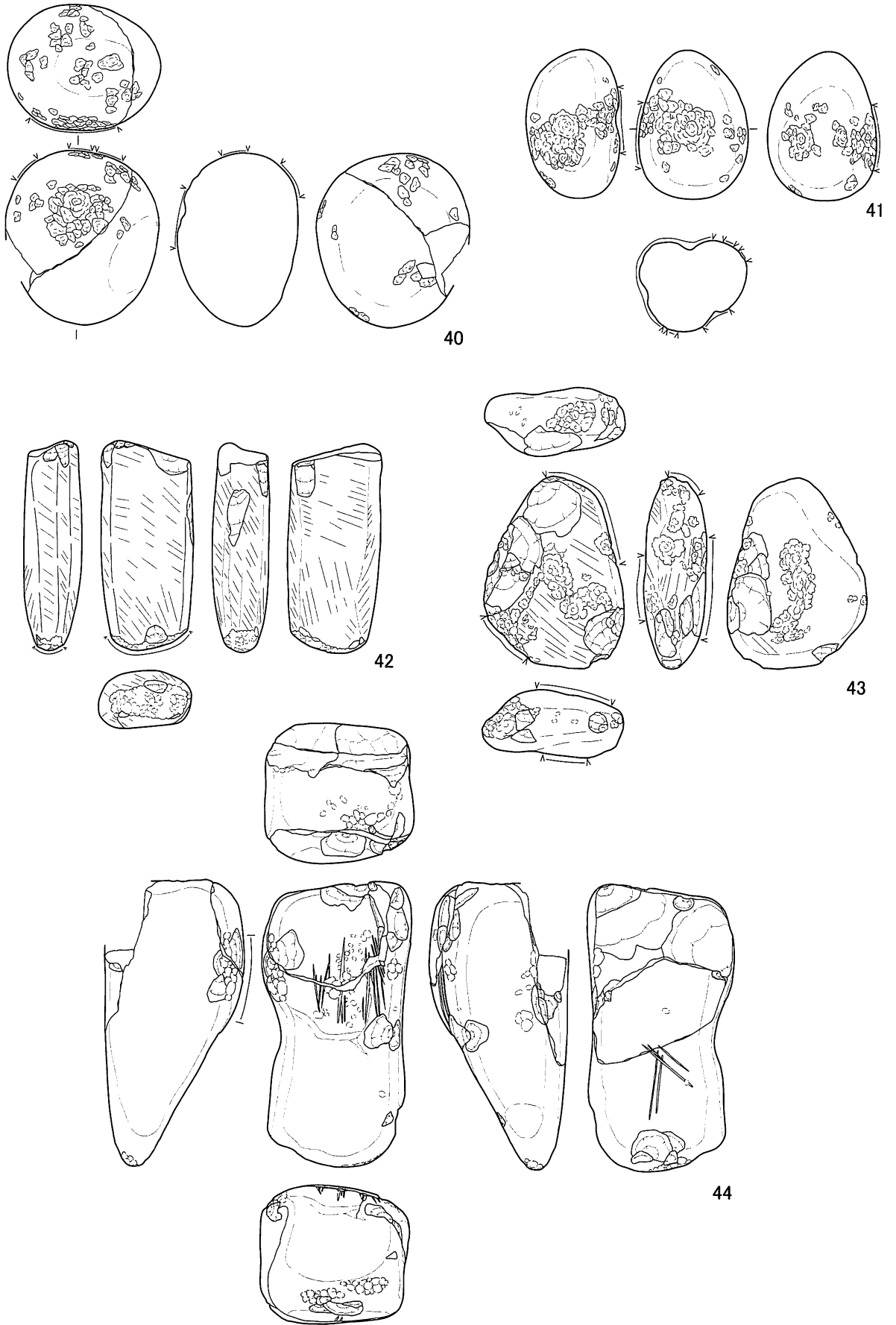
図IV-91 包含層出土礫石器 (3)



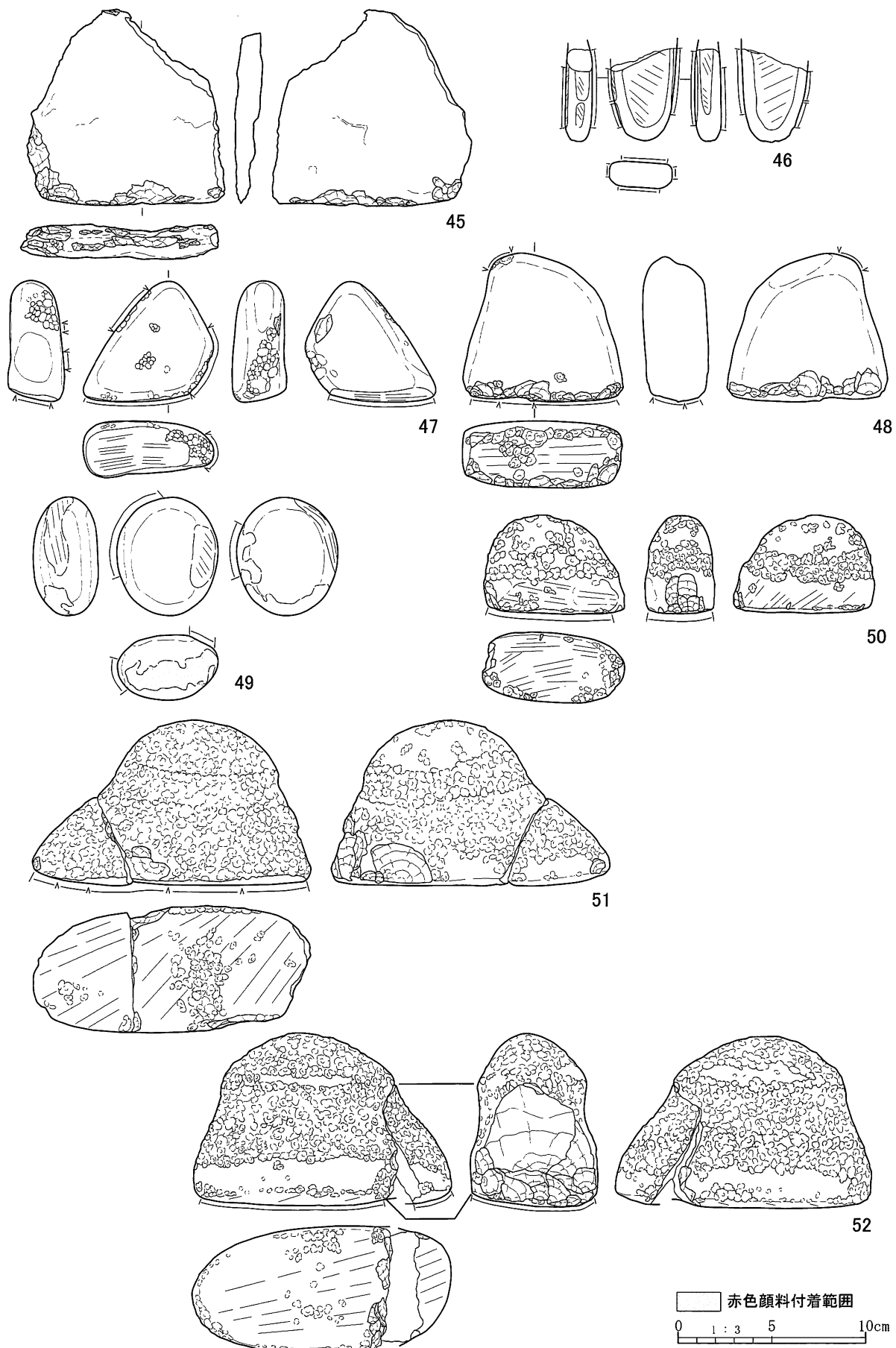
図IV-92 包含層出土礫石器(4)



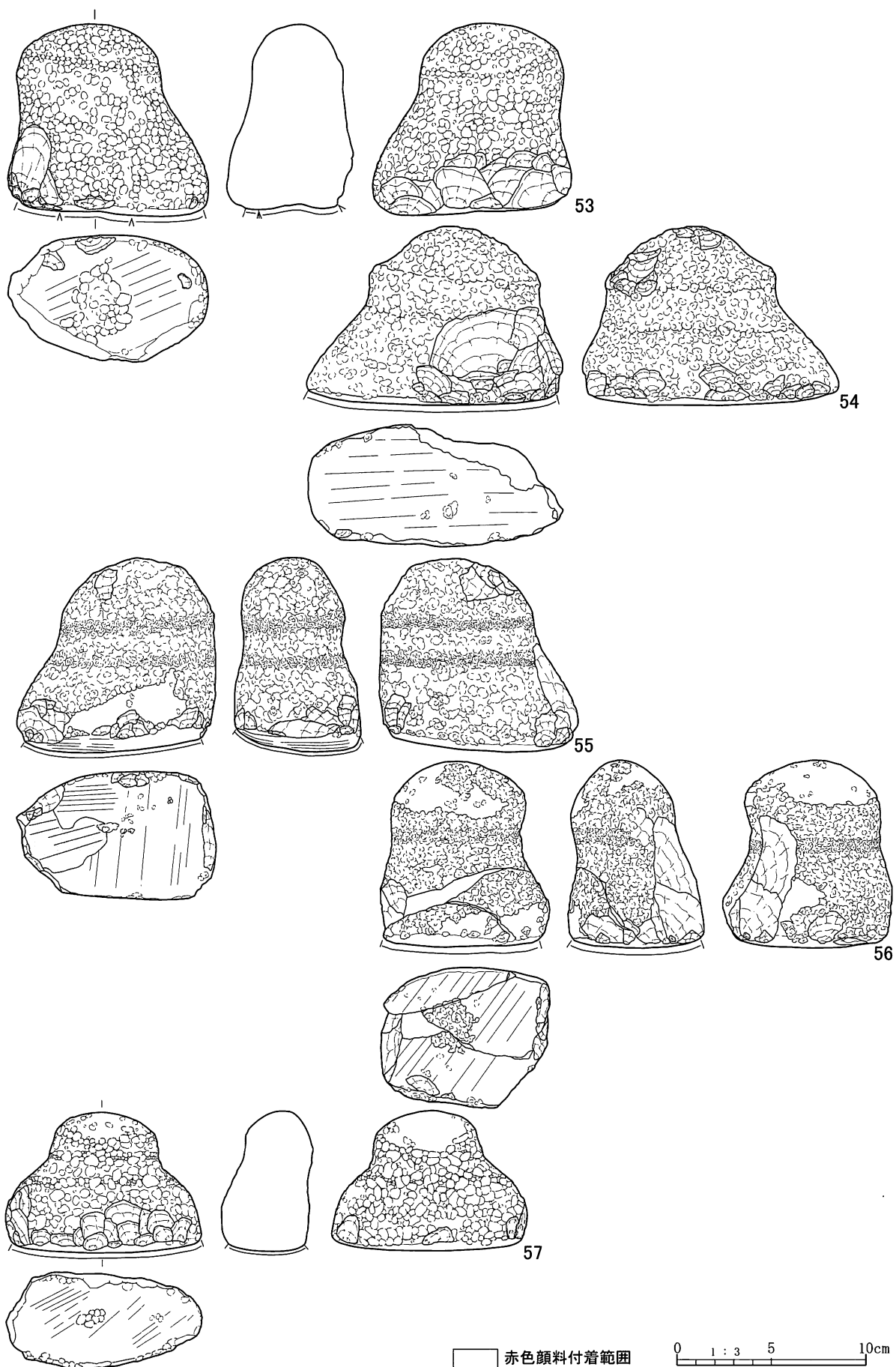
図IV-93 包含層出土礫石器 (5)



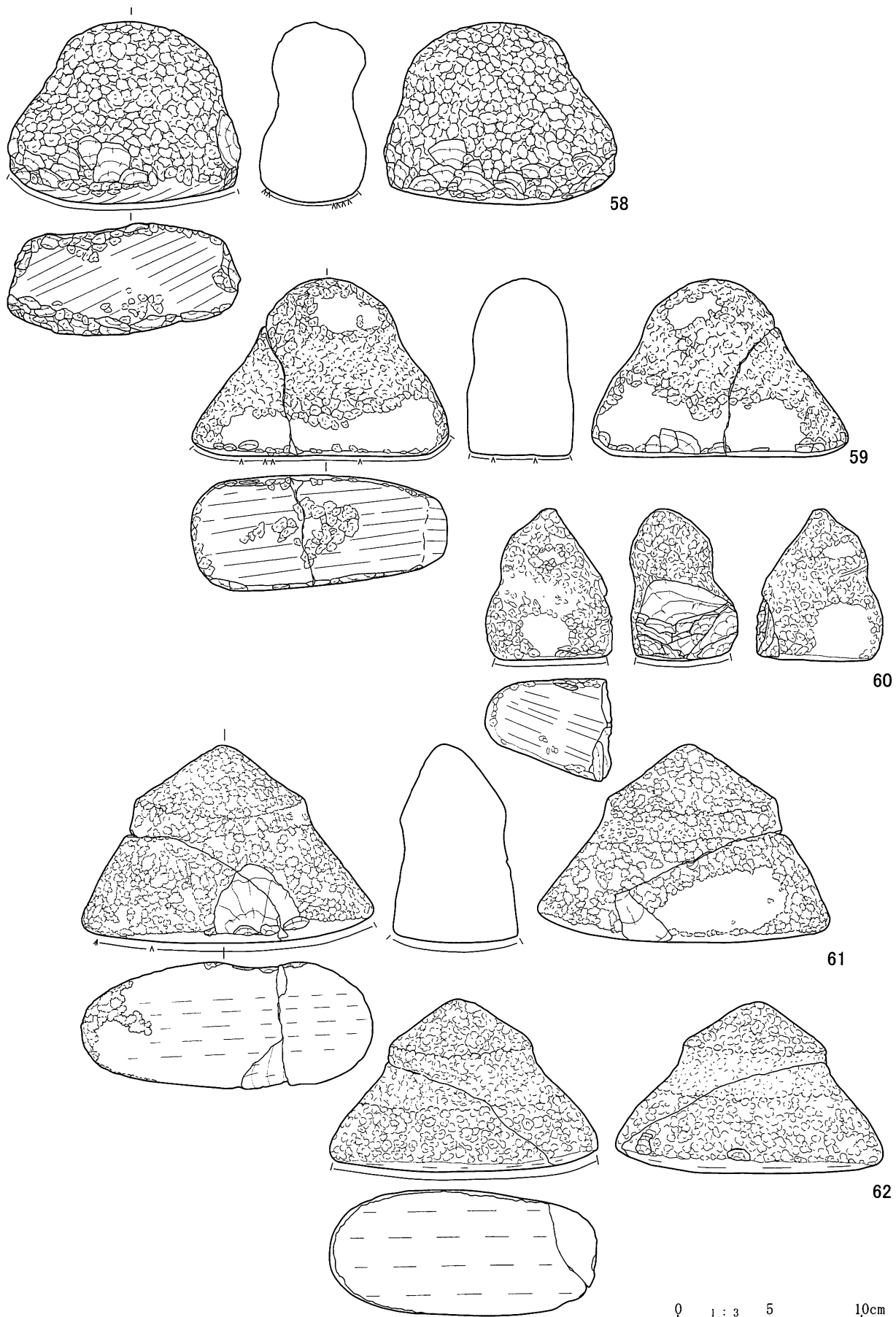
図IV-94 包含層出土礫石器(6)



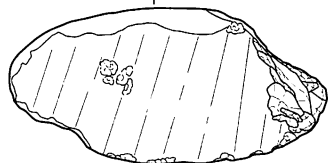
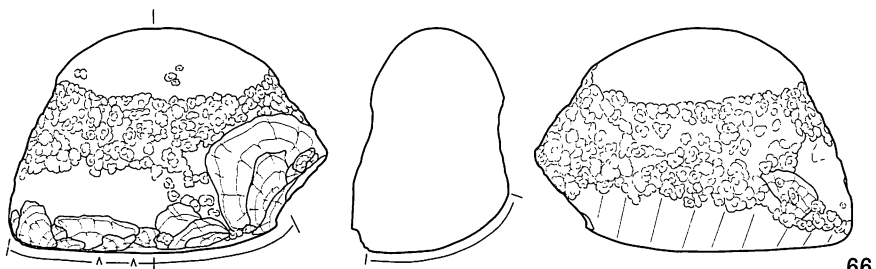
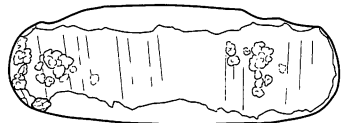
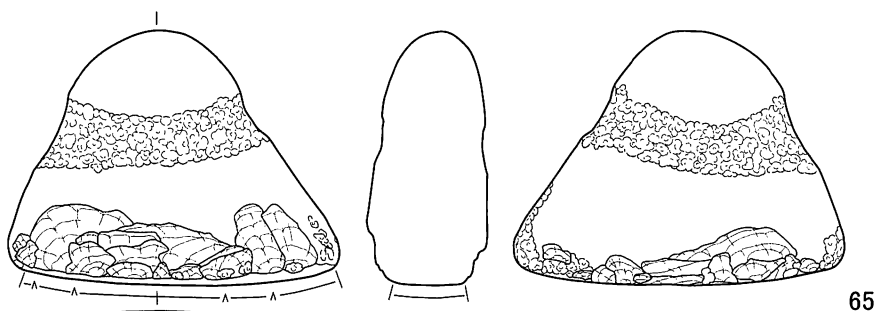
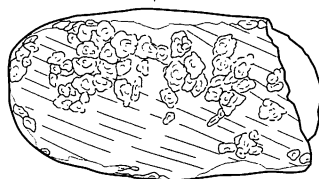
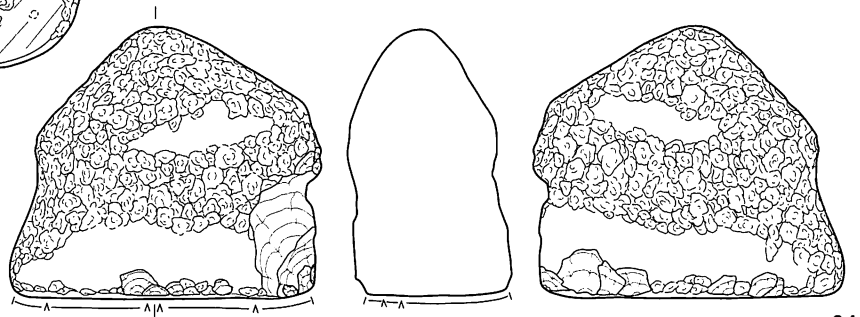
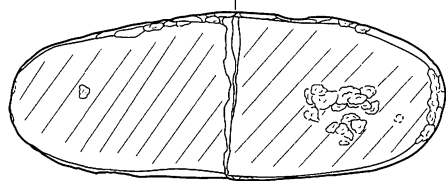
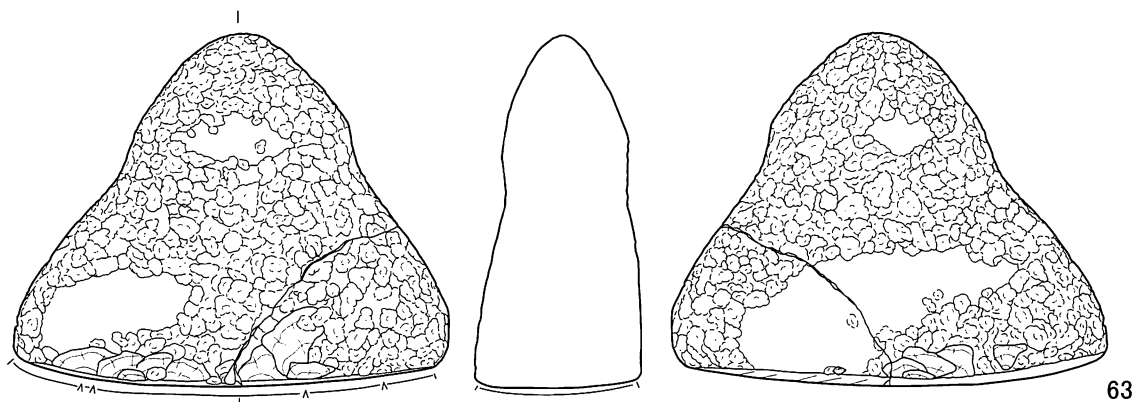
図IV-95 包含層出土礫石器 (7)



図IV-96 包含層出土礫石器(8)

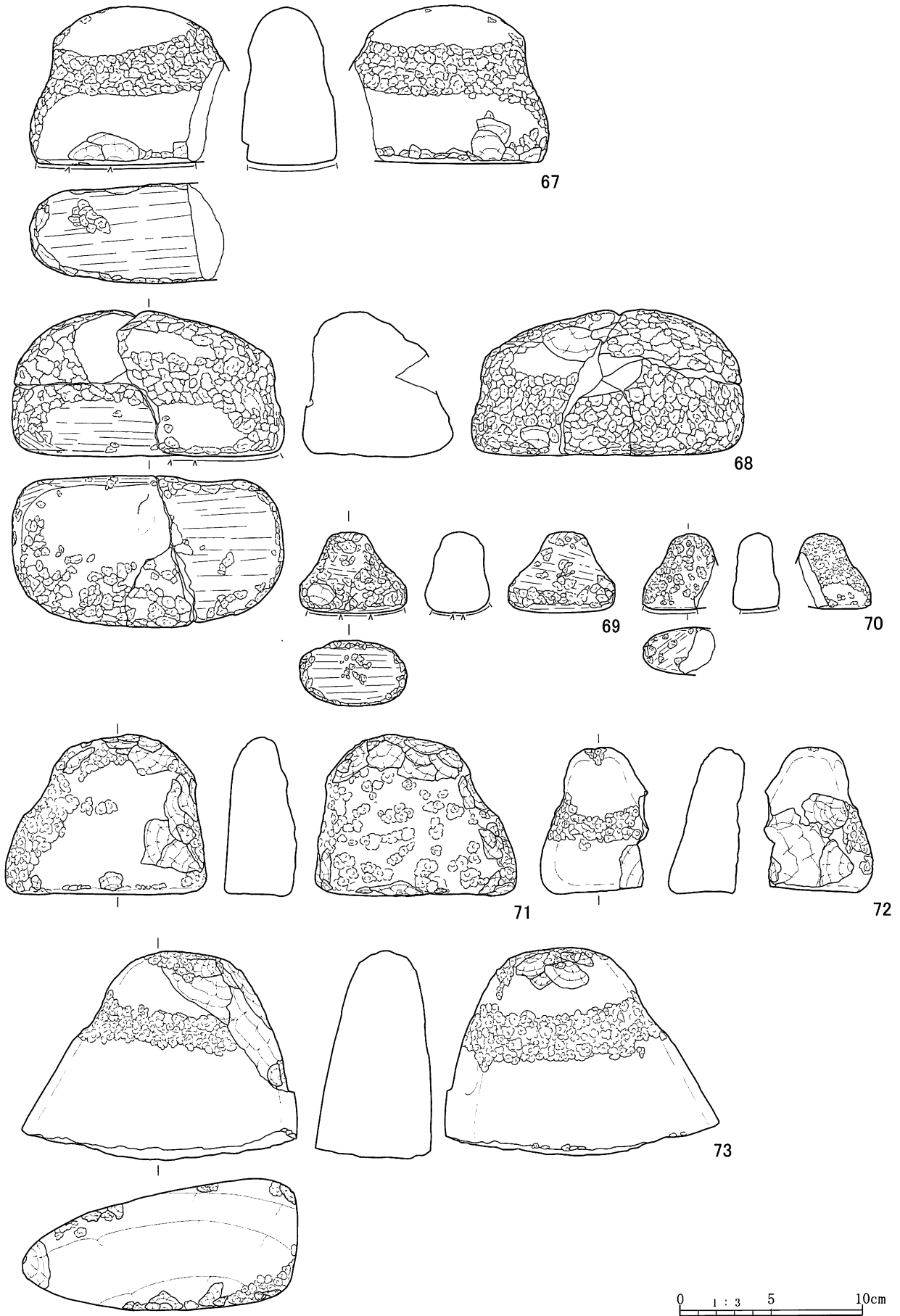


図IV-97 包含層出土礫石器(9)

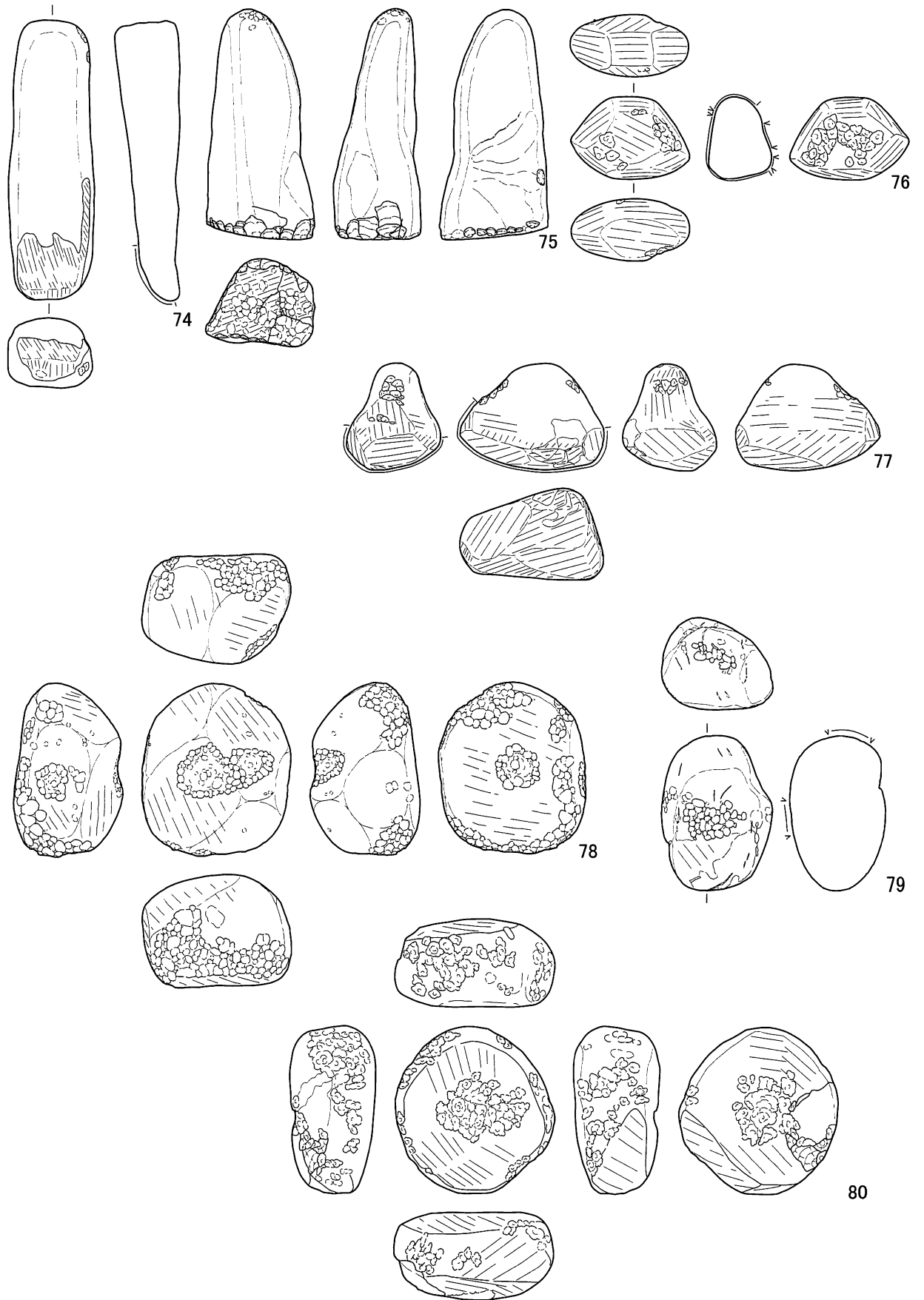


0 1 3 5 10cm

図IV-98 包含層出土礫石器(10)



図IV-99 包含層出土礫石器(11)



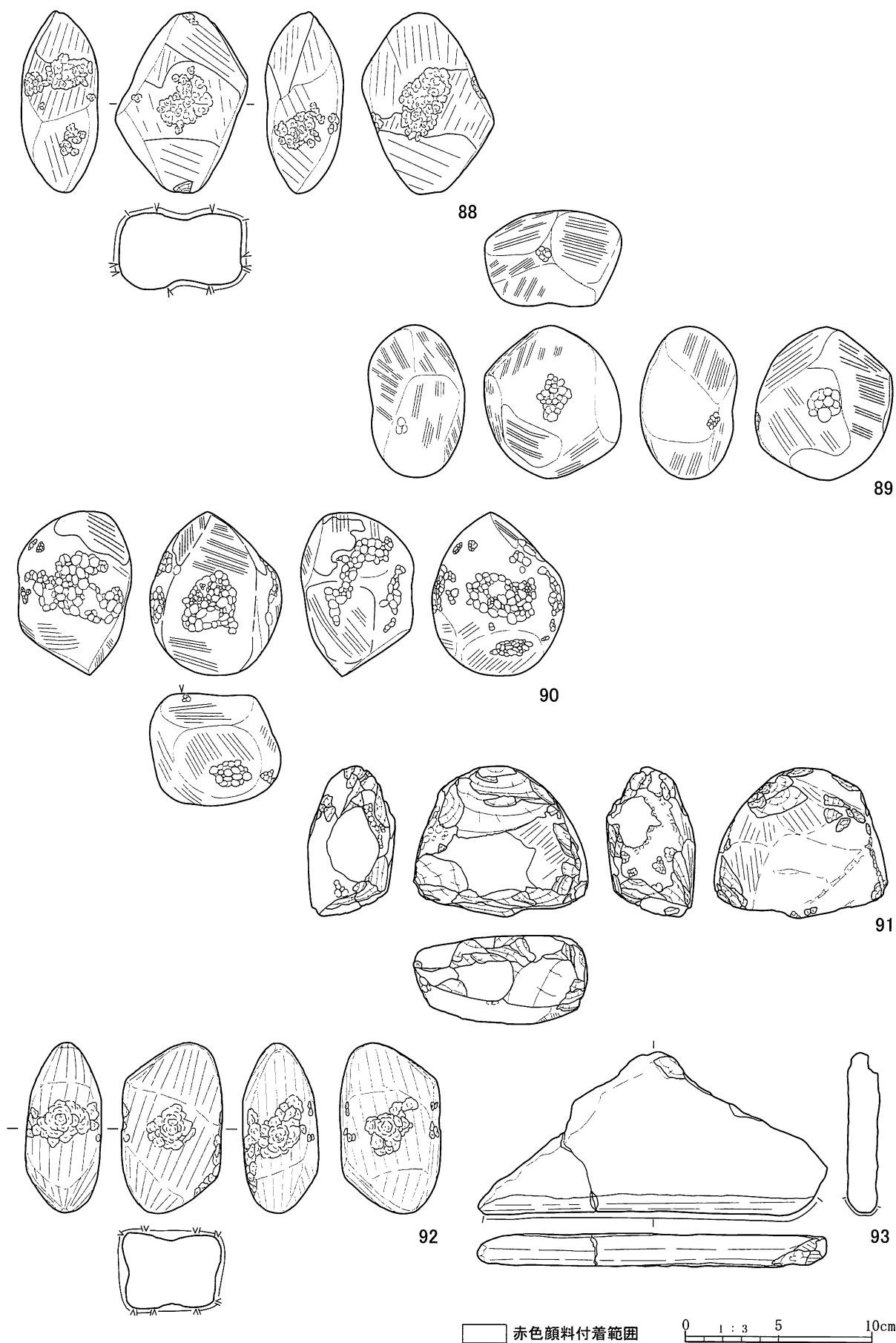
図IV-100 包含層出土礫石器 (12)

赤色顔料付着範囲

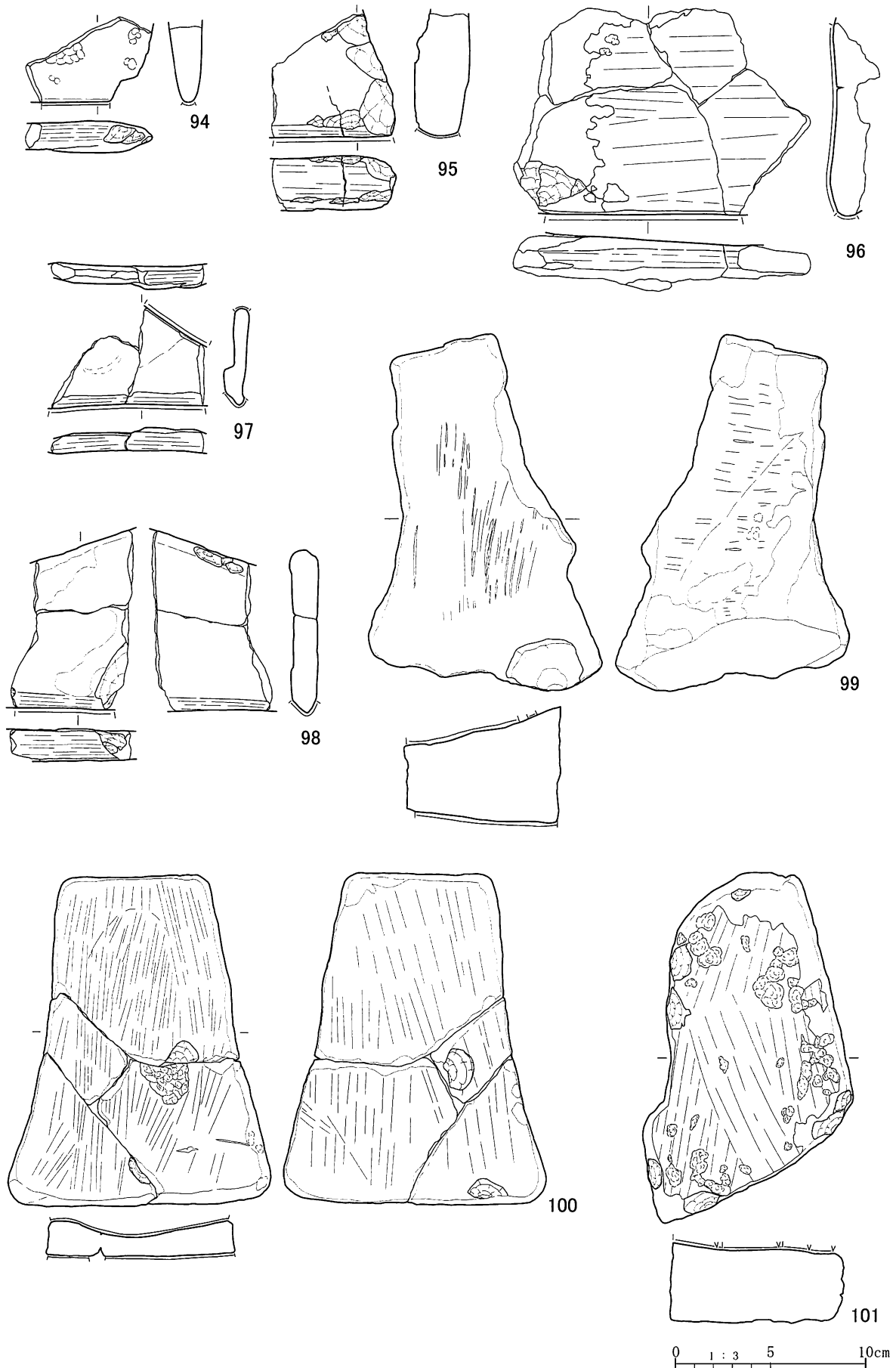
0 1 3 5 10cm



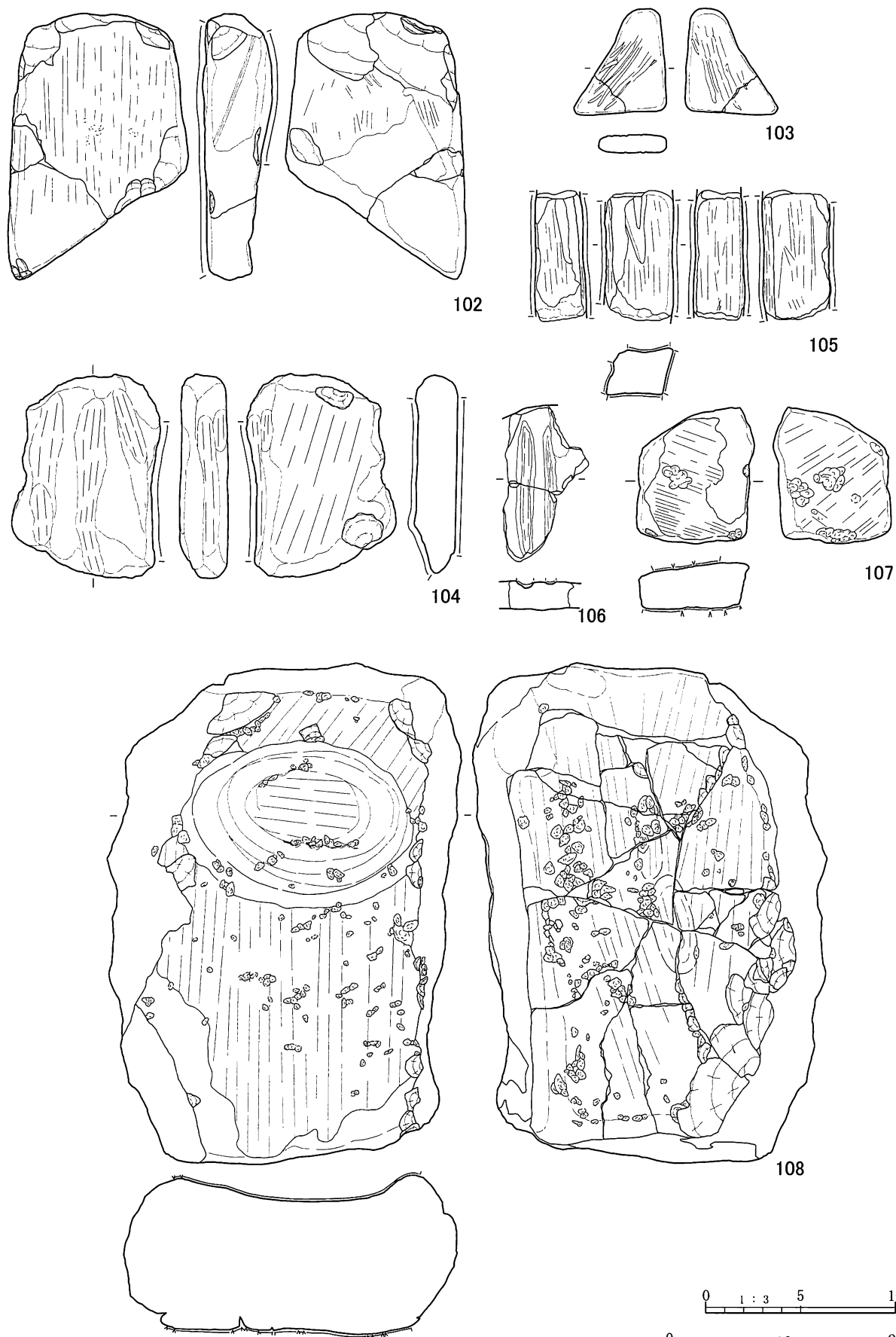
図IV-101 包含層出土礫石器(13)



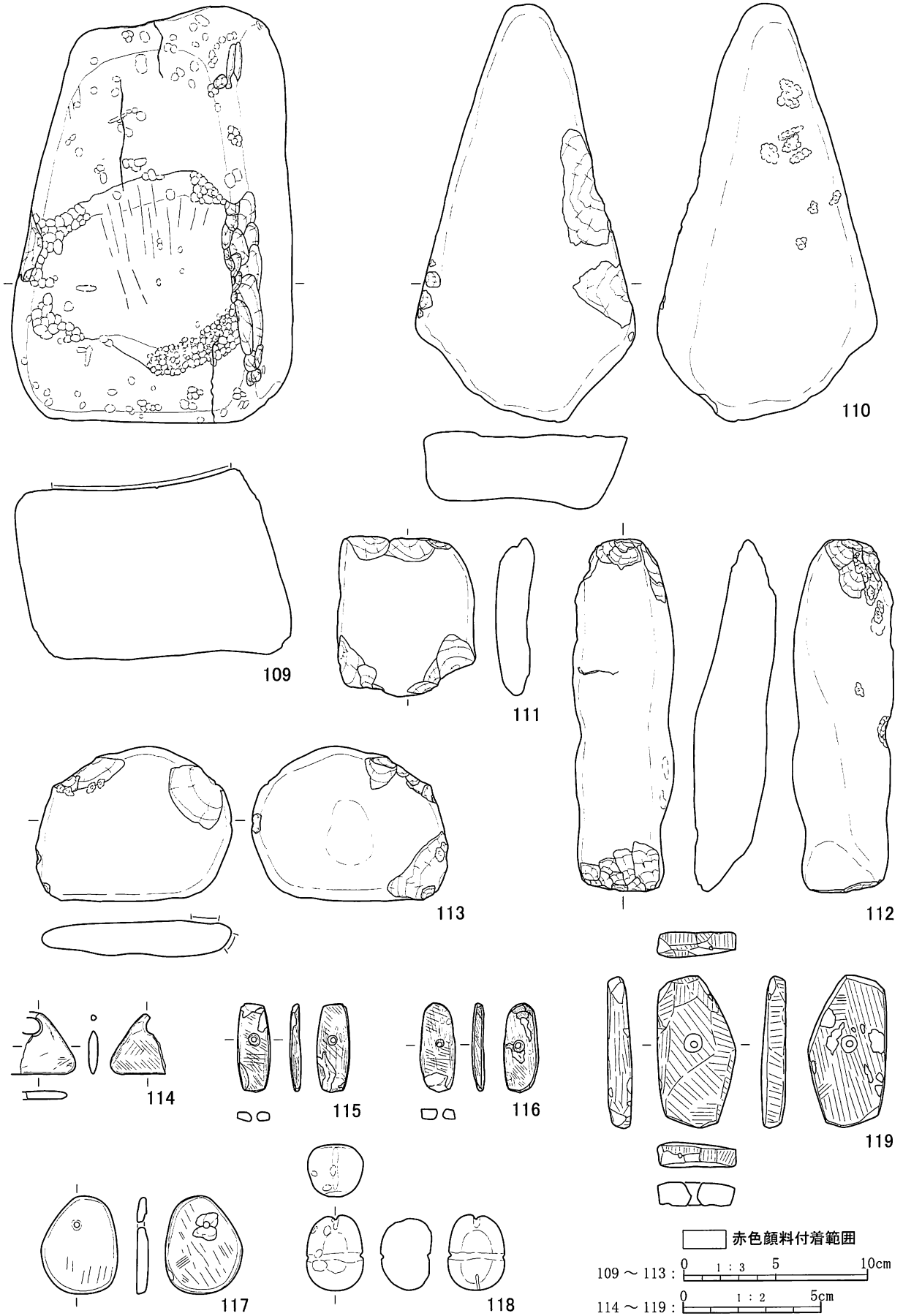
図IV-102 包含層出土礫石器(14)



図IV-103 包含層出土礫石器 (15)



図IV-104 包含層出土礫石器(16)



図IV-105 包含層出土礫石器(17)

表IV-59 縄文時代包含層礫石器属性表(1)

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	グリッド	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
IV-89-1	76-1	-	AI-24-1-767	石 斧	A	VbL	AI-24	58.5	34.0	13.0	31.1	Sa.	両刃
IV-89-2	76-2	-	67556	石 斧	A	VbU	AC-38	97.0	50.0	16.0	132.4	Gr-Mud.	片刃
IV-89-3	76-3	-	66737	石 斧	A	Va	AH-35	133.0	55.0	33.0	430.0	Gr-Mud.	両刃
IV-89-4	76-4	-	144796	石 斧	A	Vc	Z-34	157.0	57.0	17.4	199.0	Gr-Mud.	片刃・ 被熱
IV-89-5	76-5	-	142510	石 斧	A	Va	V-28	(122.6)	38.8	12.4	(104.0)	Gr-Mud.	片刃 基部欠
IV-89-6	76-6	-	142250	石 斧	A	VbU	L-33	106.1	47.7	6.9	60.0	Gr-Mud.	片刃
IV-89-7	76-7	-	67031	石 斧	A	Va	AJ-42	120.0	30.0	10.5	65.8	Bl-Sch.	丸のみ・ 片刃
IV-89-8	76-8	VST-204	66782他	石 斧	B	VbU	AH-37	157.0	50.5	27.5	270.0	Gr-Mud.	
IV-89-9	76-9	VST-206	AE-31-1-55	石 斧	C	VbL	AE-31	174.0	72.5	44.5	750.0	Gr-Mud.	
IV-90-10	76-10	VST-201	67783他	石 斧	D	VbU	Y-37	177.0	101.0	34.0	870.0	Gr-Mud.	
IV-90-11	76-11	-	AF-28-3-476	たたき石	IA1	VbU	AF-28	150.0	61.0	20.7	245.0	Sa.	
IV-90-12	76-12	-	68173	たたき石	IA2	Vc	AJ-42	169.0	70.5	34.0	630.0	Sa.	
IV-90-13	76-13	VST-260	66169他	たたき石	IA3	VbL	AH-24	143.0	65.0	36.0	370.0	Sa.	
IV-90-14	76-14	-	61324	たたき石	IA3	VbU	AH-32	160.0	56.0	15.9	200.0	Gr-Sch.	
IV-90-15	76-15	-	144596	たたき石	IA3	VbL	T-32	144.9	63.5	33.0	470.0	Sa.	
IV-90-16	76-16	-	142029	たたき石	IA3	VbL	R-30	180.4	70.3	32.2	530.0	Sa.	
IV-91-17	76-17	VST-261	66491他	たたき石	IB1	VbU	AG-36	161.0	52.0	39.1	(405.0)	Sa.	
IV-91-18	76-18	-	66954	たたき石	IB2	VbL	AH-37	148.0	57.0	45.0	535.0	Sa.	
IV-91-19	76-19	VST-262	67483他	たたき石	IB2	VbU	AK-35	128.0	48.0	34.0	(345.0)	Gab.	
IV-91-20	76-20	-	67764	たたき石	IB3	VbL	AJ-37	133.0	52.0	51.0	350.0	Sa.	
IV-91-21	76-21	-	63459	たたき石	IB3	VbU	AJ-29	195.0	37.0	24.1	295.0	Gr-Mud.	被熱
IV-91-22	76-22	VST-402	151717	たたき石	IB3	KR	Z-34	204.0	60.3	36.6	520.0	Sa.	被熱
IV-91-23	76-23	VST-403	145209他	たたき石	IB3	VbL	Y-29	250.0	62.0	39.2	695.0	Sa.	
IV-91-24	77-24	-	144569	たたき石	IB3	VbL	X-30	150.7	34.9	46.5	400.0	Sa.	被熱
IV-92-25	77-25	VST-288	AD-24-4-72	たたき石	IIA2	Vc	AD-24	62.0	(70.0)	21.1	(50.0)	Sa.	
IV-92-26	77-26	-	AI-28-3-206	たたき石	IIA2	VbU	AI-28	103.0	88.0	43.0	700.0	Gab.	
IV-92-27	77-27	-	142522	たたき石	IIA2	VbU	AA-34	102.5	68.7	29.6	345.0	Gr-Mud.	
IV-92-28	77-28	-	142488	たたき石	IIA2	VbU	X-28	102.1	78.3	27.0	380.0	Gr-Mud.	
IV-92-29	77-29	-	AF-25-3-492	たたき石	IIA3	VbL	AF-25	79.0	59.0	34.0	250.0	Sa.	
IV-92-30	77-30	-	142339	たたき石	IIA3	VbU	Y-32	104.9	83.7	40.6	390.0	Sa.	
IV-92-31	77-31	-	AA-38-4-26	たたき石	IIA2	VbL	AA-38	100.0	95.0	56.0	800.6	Gab.	
IV-92-32	77-32	-	65734	たたき石	IIA2	6	AE-26	122.0	77.0	51.0	(630.0)	Tu.	
IV-93-33	77-33	VST-411	142062他	たたき石	IIA2	Va	Y-31	87.5	73.4	50.8	545.0	Bs.	
IV-93-34	77-34	-	143686	たたき石	IIA2	VbL	Z-34	81.3	73.4	39.7	405.0	Gr-Mud.	
IV-93-35	77-35	-	68222	たたき石	IIA3	Vc	AF-38	125.0	68.0	51.0	590.0	Sa.	
IV-93-36	77-36	-	X-36-4-29	たたき石	IIIA	Vc	X-36	84.1	59.2	39.2	250.0	Sa.	
IV-93-37	77-37	-	U-30-3-46	たたき石	IIIA	VbU	U-30	75.3	69.0	21.7	145.0	Sa.	被熱
IV-93-38	77-38	-	61087	たたき石	IIIA	Va	AI-23	79.0	65.0	42.5	265.0	Sa.	
IV-93-39	77-39	-	65244	たたき石	IIIB	VbL	AF-25	89.0	76.0	56.5	410.0	Sa.	
IV-94-40	77-40	-	V-35-3-20	たたき石	IIIB	VbU	V-35	89.2	80.4	62.0	(500.0)	Sa.	
IV-94-41	77-41	-	144826	たたき石	IIIB	Vc	X-30	77.6	57.7	49.3	250.0	Sa.	
IV-94-42	77-42	-	65748	たたき石	-	VbU	AI-23	111.0	50.0	31.0	350.0	Sa.	石斧転用
IV-94-43	77-43	-	62470	たたき石	-	VbU	AD-25	102.0	75.0	33.0	250.0	Mud.	砥石転用
IV-94-44	77-44	-	AC-33-2-146	たたき石	-	VbL	AC-33	153.0	80.0	74.0	(1040.0)	Sa.	砥石転用
IV-95-45	77-45	-	AA-35-4-67	扁平打製石器	-	VbL	AA-35	104.0	105.0	14.5	210.0	Sa.	
IV-95-46	77-46	-	AH-26-3-105	すり石	B	VbL	AH-26	(49.0)	35.0	14.5	(30.0)	Sa.	
IV-95-47	77-47	-	AE-26-4-169	すり石	B	VbU	AE-26	70.0	64.5	29.5	150.0	Sa.	
IV-95-48	78-48	-	145186	すり石	E	VbU	X-28	84.3	77.4	34.5	320.0	Sa.	
IV-95-49	78-49	-	67792	すり石	E	VbL	Z-36	63.0	54.0	35.0	187.2	ドレライト	赤色顔料付着
IV-95-50	78-50	-	66604	すり石	D	VI	AI-24	75.0	52.0	38.0	190.4	Sa.	
IV-95-51	78-51	VST-101	67700他	すり石	D	Vc	AD-35	149.0	88.0	67.7	840.0	Sa.	
IV-95-52	78-52	VST-104	67633他	すり石	D	VbL	AA-36	138.0	93.0	68.0	(1120.0)	Sa.	
IV-96-53	78-53	-	66775	すり石	D	VbU	AH-35	106.0	100.0	67.0	920.0	Sa.	
IV-96-54	78-54	-	67732	すり石	D	VbL	AB-36	136.0	94.0	64.0	970.0	And.	
IV-96-55	78-55	-	68011	すり石	D	VbL	Z-37	106.0	103.0	67.0	950.0	Sa.	赤色顔料付着
IV-96-56	78-56	VST-112	66822他	すり石	D	VbL	AF-36	99.0	89.2	72.1	(810.0)	Sa.	被熱
IV-96-57	78-57	-	61425	すり石	D	VbU	AB-34	104.0	75.0	50.0	460.3	Sa.	
IV-97-58	78-58	-	145379	すり石	D	VbL	AA-33	122.1	97.1	51.5	925.0	And.	

表IV-60 縄文時代包含層礫石器属性表(2)

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	グリッド	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
IV-97-59	78-59	VST-419	141940	すり石	D	Va	Y-30	135.9	94.0	60.5	985.0	Sa.	
IV-97-60	78-60	-	65049	すり石	D	Vc	AI-29	82.0	(68.9)	68.5	(380.0)	Sa.	
IV-97-61	78-61	VST-102	65682他	すり石	D	Vc	AF-26	159.0	107.0	68.0	1320.0	Sa.	
IV-97-62	78-62	VST-110	65764他	すり石	D	VbU	AI-24	146.0	94.5	68.0	1060.0	Sa.	
IV-98-63	78-63	VST-416	144945	すり石	D	Vc	AA-32	170.0	137.2	64.2	1703.0	Sa.	
IV-98-64	79-64	-	142670	すり石	D	VbL	Y-30	113.6	105.9	63.2	1147.0	Sa.	
IV-98-65	79-65	-	62415	すり石	D	VbU	AD-27	132.0	100.0	48.0	800.0	Sa.	
IV-98-66	79-66	-	AL-27-1-33	すり石	D	V	AL-27	130.0	89.0	62.0	780.0	Sa.	
IV-99-67	79-67	-	145549	すり石	D	VbL	R-31	(89.5)	85.0	53.2	(691.0)	Sa.	
IV-99-68	79-68	VST-420	143635他	すり石	D	VbL	Y-34	146.7	76.3	80.9	(1294.0)	Sa.	被熱
IV-99-69	79-69	-	142668	すり石	D	VbU	X-31	58.1	44.1	35.5	95.0	Sa.	
IV-99-70	79-70	-	AC-28-2-124	すり石	D	VbL	AC-28	(42.0)	42.0	25.0	(50.0)	Sa.	
IV-99-71	79-71	-	AJ-28-1-65	すり石	D	VbU	AJ-28	110.5	87.5	38.0	550.0	Sa.	
IV-99-72	79-72	-	AB-24-2-54	すり石	D	VbL	AB-24	80.0	55.9	42.0	220.0	Sa.	
IV-99-73	79-73	-	65400	すり石	D	VbU	AH-25	151.0	114.9	63.5	1420.0	Sa.	被熱
IV-100-74	79-74	-	63487	すり石	E	VbL	AI-26	150.0	46.0	35.0	354.0	Sa.	
IV-100-75	79-75	-	AC-32-2-107	すり石	E	Va	AC-32	120.9	57.0	56.0	350.0	Sa.	
IV-100-76	79-76	-	W-34-1-1	すり石	F	VbU	W-34	64.1	44.5	33.0	96.0	Sa.	被熱
IV-100-77	79-77	-	145377	すり石	F	VbL	AA-33	77.0	58.4	45.5	261.0	Gr-Mud.	赤色顔料 付着
IV-100-78	79-78	-	68284	すり石	F	Vc	AF-35	92.9	80.0	50.0	600.2	Gra.	被熱
IV-100-79	79-79	-	66724	すり石	F	Va	AH-36	83.0	60.0	52.0	320.8	Sa.	赤色顔料 付着
IV-100-80	79-80	-	AD-30-1-59	すり石	F	VbL	AD-30	89.0	85.0	46.7	510.0	Amp.	
IV-101-81	79-81	-	61383	すり石	F	VbU	AC-33	79.0	55.0	53.0	350.0	Gr-Mud.	赤色顔料 付着
IV-101-82	79-82	-	65103	すり石	F	VbL	AF-23	95.5	66.0	63.1	500.0	Gra.	
IV-101-83	79-83	-	67645	すり石	F	VbL	Z-36	62.0	55.0	49.7	300.1	Bs.	赤色顔料 付着
IV-101-84	79-84	-	63199	すり石	F	VbL	AJ-33	67.8	51.0	45.0	290.0	Gra.	
IV-101-85	80-85	-	142290	すり石	F	VbU	X-33	67.0	66.8	39.8	340.0	Gab.	
IV-101-86	80-86	-	145376	すり石	F	VbL	AA-33	57.3	56.1	47.5	299.0	Gab.	
IV-101-87	80-87	-	67688	すり石	F	VbU	AG-35	83.0	71.4	43.0	390.0	Gra.	
IV-102-88	80-88	-	65744	すり石	F	VbU	AH-24	97.0	71.0	40.0	490.0	Gr-Dio	
IV-102-89	80-89	-	AH-33-4-49	すり石	F	VbU	AH-33	82.8	73.0	52.0	510.8	Bs.	赤色顔料 付着
IV-102-90	80-90	-	AH-30-4-49	すり石	F	Vc	AH-30	87.0	71.0	59.0	500.4	ドレライト	赤色顔料 付着
IV-102-91	80-91	-	62893	すり石	F	VbL	AC-31	90.5	80.0	46.1	525.0	Bl-Sch.	
IV-102-92	80-92	-	145621	すり石	F	VbL	S-32	90.7	53.6	40.7	350.0	Amp.	石材同定
IV-102-93	80-93	-	AF-25-3-493	石 鋸	-	VbL	AF-25	187.0	88.0	17.4	300.0	Sa.	
IV-103-94	80-94	-	AF-26-3-322	石 鋸	-	VbL	AF-26	(66.0)	(45.0)	16.8	(50.0)	Sa.	
IV-103-95	80-95	-	AB-27-3-339	石 鋸	-	Vc	AB-27	(65.0)	64.0	29.0	(143.7)	Sa.	被熱
IV-103-96	80-96	-	AC-31-4-171	石 鋸	-	VbL	AC-31	(156.0)	(108.2)	(30.0)	(380.0)	Sa.	
IV-103-97	80-97	VST-258	Y-35-4-64他	石 鋸	-	VbU	Y-35	(79.9)	(51.6)	14.0	(40.4)	Sa.	
IV-103-98	80-98	VST-259	AE-35-3-103	石 鋸	-	VbL	AE-35	94.0	(64.0)	16.1	(120.0)	Sa.	
IV-103-99	80-99	-	AH-36-4-63	砥 石	-	VbU	AH-36	249.0	154.0	81.0	3400.0	Sa.	
IV-103-100	80-100	VST-239	68170他	砥 石	-	VbL	AE-40	233.0	188.0	25.0	1455.0	Sa.	
IV-103-101	80-101	-	R-30-3-20	砥 石	-	MO	R-30	152.9	110.4	48.2	1020.0	Sa.	
IV-104-102	80-102	VST-247	63929-1他	砥 石	-	VbL	AE-34	186.0	127.0	49.0	1120.0	Sa.	
IV-104-103	80-103	-	AI-25-4-285	砥 石	-	VbU	AI-25	56.0	48.5	9.4	30.0	Sa.	
IV-104-104	80-104	-	61078	砥 石	-	Va	AI-25	107.0	79.0	27.0	240.0	Sa.	
IV-104-105	80-105	-	AC-25-4-234	砥 石	-	VbL	AG-25	(68.0)	37.0	28.0	(96.7)	Sa.	
IV-104-106	81-106	VST-240	61854他	砥 石	-	Va	AH-26	(83.0)	(45.0)	15.5	(50.0)	Sa.	被熱
IV-104-107	81-107	-	AF-37-4-80	砥 石	-	VbL	AF-37	71.0	62.5	24.0	160.0	Sa.	敲石転用
IV-104-108	81-108	VST-455	R-32-4-89	石 皿	-	VbL	R-32	460.0	295.0	140.0	29120.0	Sa.	
IV-105-109	81-109	-	64301	石 皿	-	MO	AF-30	300.0	204.0	137.0	13900.0	Sa.	赤色顔料 付着
IV-105-110	81-110	-	66226	加工痕のある礫	-	VbL	AH-23	320.0	160.0	57.0	3000.0	Sa.	
IV-105-111	81-111	-	AH-23-2-343	加工痕のある礫	-	VbL	AH-23	86.0	76.0	21.0	190.0	Sa.	
IV-105-112	81-112	-	62969	加工痕のある礫	-	VbL	AC-30	190.0	55.0	44.5	520.0	Sa.	
IV-105-113	81-113	-	Z-28-3-85	加工痕のある礫	-	VbL	Z-28	105.0	84.2	21.7	243.0	Sa.	

条刻まれている。裏面には弱い擦痕が僅かに認められる。103 は三角形の扁平礫を利用したもので、両面に線条痕がある。104 は有孔砥石で両面と右側面を使用している。表面に4条、右側縁に2条の明瞭な溝状の研磨痕が形成されている。裏面は平坦である。105 は四面砥石である。各面とも目減りしており、表面と左側面には溝が見られる。左側面の稜が欠損しているがその他の稜は明瞭である。106 は有溝砥石の欠損品である。使用面に深い溝と細くて浅い溝の2条が形成されている。被熱している。107 はたたき石を転用したもので、両面に敲打痕が残る。

石皿・台石 (108・109)

石皿・台石に分類したものは、破片を含めると455点が出土している。図示したものは石皿2点である。108 は破損しているが、重量が約30kgの大型の石皿である。両面のほぼ全面を使用している。表面の上部に長軸に直交する深く窪んだ楕円形状の擦痕があり、裏面の中央には小さいが楕円形の深い窪みがある。109 は平坦面の一面だけを使用している。擦痕は中心にあり、緩やかに窪む。赤色顔料が付着しており、その周囲に密な敲打痕と剥離痕がある。両端部の敲打痕は疎らである。どちらも砂岩製である。

加工痕のある礫 (110~113)

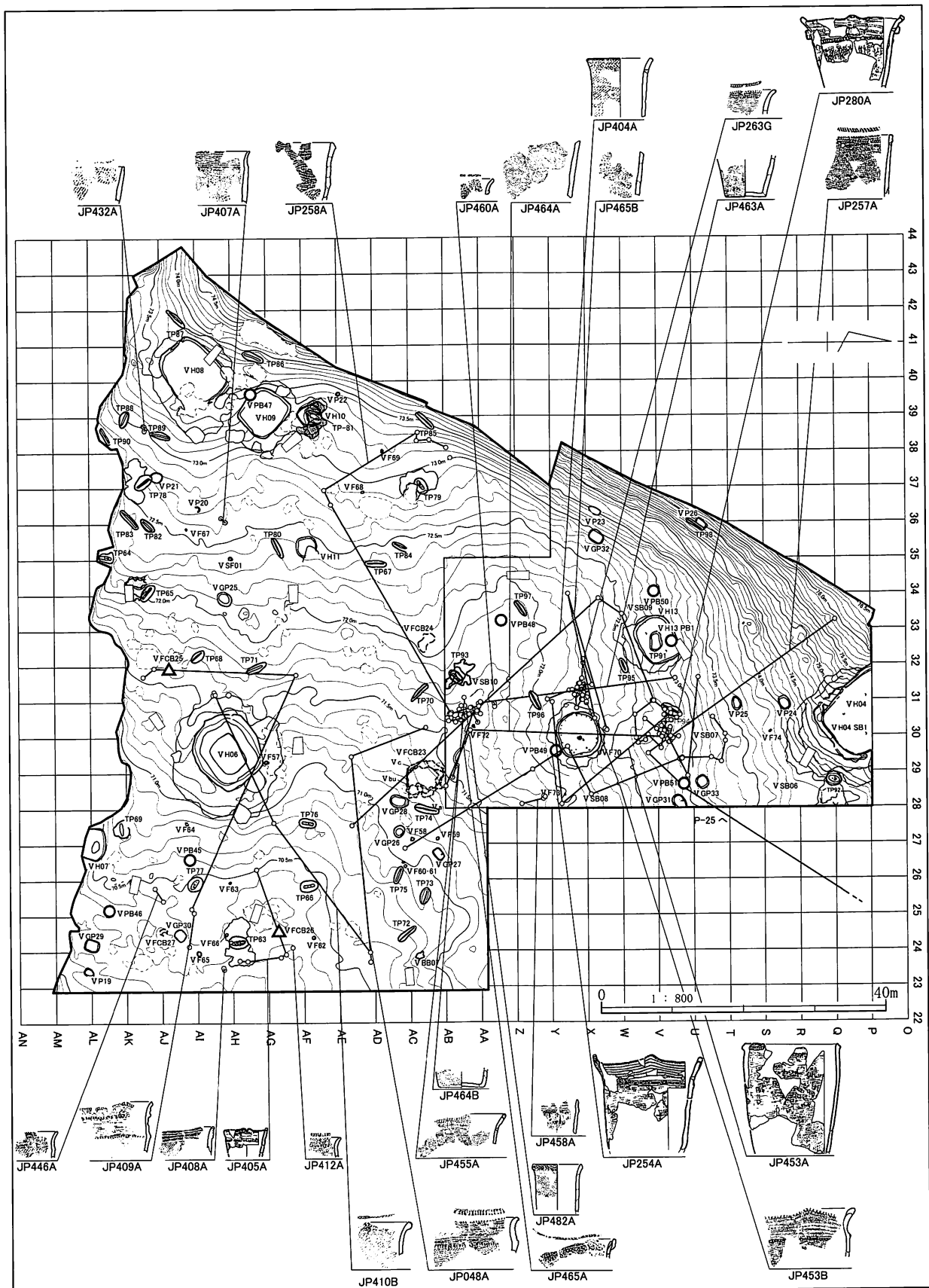
加工痕のある礫は81点出土している。110 は縦長で不整形な素材礫に加工を加えたもの。両側縁の稜に剥離調整が施されている。裏面の中央付近から上部にかけて浅い敲打痕がある。111 は方形の扁平礫上部と下部の稜に沿って剥離調整を施したものである。112 は棒状礫の両端部に剥離調整が施されている。113 は円形の扁平礫側縁に両面からの打ち欠きがある。石材は全て砂岩製である。

石製品 (114~119)

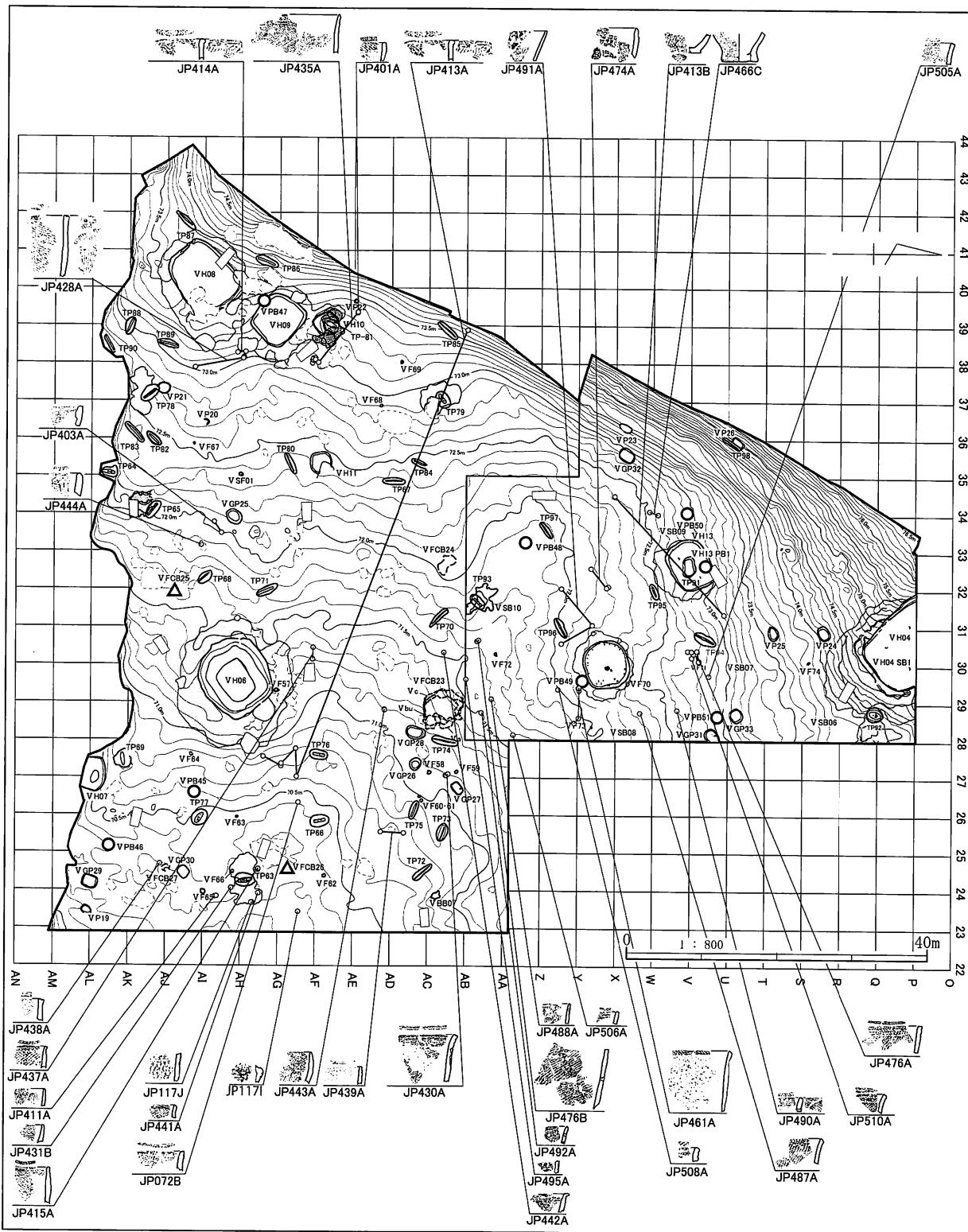
石製品は6点出土し、いずれも垂飾と思われる。114 は滑石製の破損した塊状耳飾りで、表面には整形時の擦痕が明瞭に残る。破断面の稜にも擦痕があり、再調整が認められる。115 は隅丸長方形で厚さは3mm、中央よりやや上に両面から穿孔されている。研磨はされているが、擦痕は残っている。116 は長楕円形で、上部と下部に細かい稜がみられる。厚さは4mm弱である。両面から穿孔されており、丁寧に研磨されているが擦痕が消されるほどではない。115・116の石材は蛇紋岩である。117 は泥岩製で、中央よりやや上に両面から穿孔されており、裏面の孔の周りは剥離している。表面は丁寧に研磨されている。118 は小形で球形に近い礫の表面を縦方向に擦って整形後、中央と上部に幅2mmの溝を作出している。紐を掛けるためのものと考えられる。石材は砂岩製である。119 は滑石製で中央に両面から穿孔されている。研磨は粗く明瞭な擦痕が残る。 (宮崎)

表IV-61 縄文時代包含層礫石器属性表(3)

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	グリッド	計測値(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
IV-105-114	81-114	-	62422	石製品	-	VbU	AD-27	22.00	(20.00)	2.70	5.00	Tal.	
IV-105-115	81-115	-	61110	石製品	-	Va	AJ-25	32.00	12.00	3.30	5.00	Ser.	
IV-105-116	81-116	-	61109	石製品	-	Va	AJ-25	32.00	13.00	3.90	5.00	Ser.	赤色顔料 付着
IV-105-117	81-117	-	AJ-25-3-104	石製品	-	Va	AJ-25	35.20	27.20	4.10	5.80	Mud.	
IV-105-118	81-118	-	AF-27-3-306	石製品	-	VbL	AF-27	26.90	20.20	18.10	12.18	Sa.	
IV-105-119	81-119	-	145678	石製品	-	VbU	T-35	54.79	28.30	8.75	25.00	Tal.	



図IV-106 土器接合線図(円筒系)



図IV-107 土器接合線図(在地系)

第V章 自然科学的分析

第1節 フチャラセナイ遺跡における放射性炭素年代 放射性年代測定(1)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

フチャラセナイ遺跡の測定対象試料は、VH-06 HP01 出土炭化材 (1 : IAAA-112342)、VSF-01 出土炭化材 (2 : IAAA-112343)、VGP-30 出土炭化材 (3 : IAAA-112344) の合計3点である (表1)。

2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、 0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、 1M 未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (表1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場

合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。

- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

5 測定結果

炭化材の ^{14}C 年代は、VH-06 HP01 出土の 1 が $4680 \pm 30\text{yrBP}$ 、VSF-01 出土の 2 が $3560 \pm 20\text{yrBP}$ 、VGP-30 出土の 3 が $4710 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、1 が $3517 \sim 3376\text{cal BC}$ の間に 3 つの範囲、2 が $1941 \sim 1883\text{cal BC}$ の範囲、3 が $3624 \sim 3380\text{cal BC}$ の間に 3 つの範囲で示され、1、3 が縄文時代前期末葉頃、2 が後期前葉から中葉頃に相当する。

試料の炭素含有率はすべて 70% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P. J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

表 1 AMS測定結果

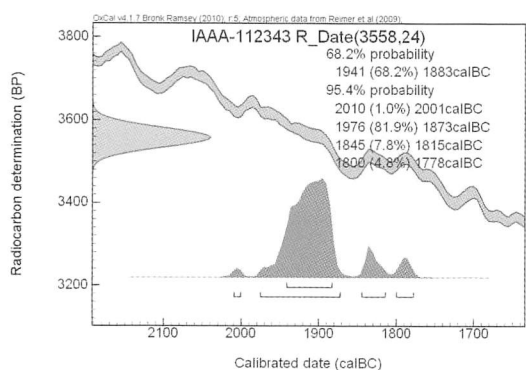
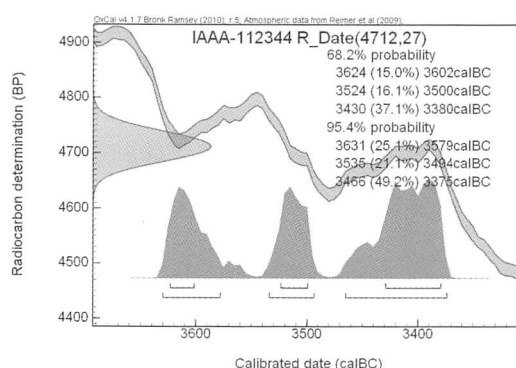
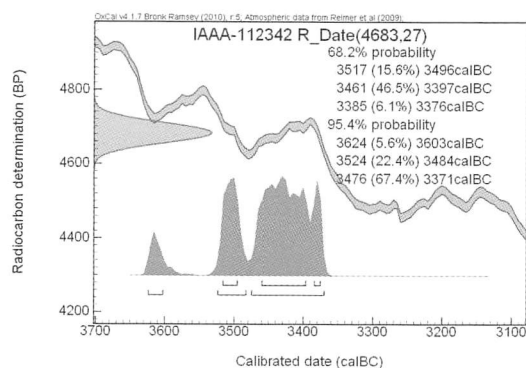
測定番号	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-112342	VH-06.HP01	炭化材	AAA	-21.53 ± 0.48	$4,680 \pm 30$	55.82 ± 0.19
IAAA-112343	VSF-01	炭化材	AAA	-22.79 ± 0.57	$3,560 \pm 20$	64.21 ± 0.2
IAAA-112344	VGP-30	炭化材	AAA	-19.3 ± 0.57	$4,710 \pm 30$	55.62 ± 0.19

[#4847]

表2 暦年較正結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-112342	4,630 \pm 30	56.22 \pm 0.18	4,683 \pm 27	3517calBC - 3496calBC (15.6%) 3461calBC - 3397calBC (46.5%) 3385calBC - 3376calBC (6.1%)	3624calBC - 3603calBC (5.6%) 3524calBC - 3484calBC (22.4%) 3476calBC - 3371calBC (67.4%)
IAAA-112343	3,520 \pm 20	64.5 \pm 0.18	3,558 \pm 24	1941calBC - 1883calBC (68.2%)	2010calBC - 2001calBC (1.0%) 1976calBC - 1873calBC (81.9%) 1845calBC - 1815calBC (7.8%) 1800calBC - 1778calBC (4.8%)
IAAA-112344	4,620 \pm 30	56.27 \pm 0.18	4,712 \pm 27	3624calBC - 3602calBC (15.0%) 3524calBC - 3500calBC (16.1%) 3430calBC - 3380calBC (37.1%)	3631calBC - 3579calBC (25.1%) 3535calBC - 3494calBC (21.1%) 3466calBC - 3375calBC (49.2%)

[参考値]



[参考] 暦年較正年代グラフ

図1 暦年較正グラフ

放射性年代測定(2)

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絃一
Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

1 はじめに

北海道厚真町幌内に位置するヲチャラセナイ遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。

試料は、Ⅲ層から検出された住居跡 (ⅢH-07) の炉跡 (HF01) から出土した炭化したクルミ (PLD-23046) と炭化したマメ科種子 (PLD-23047) の 2 点である。なお、住居跡からは擦文土器などが出土している。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ : IntCal10) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4 考察

炭化したクルミ (PLD-23046) は、¹⁴C年代が 880±20 ¹⁴C BP、2σ 暦年代範囲 (確率 95.4%) が 1051-1082 cal AD(14.4%)、1126-1136 cal AD(2.6%)、1151-1217 cal AD(78.4%)で、11世紀中頃～13世紀前半を示し、特に12世紀中頃～13世紀前半の確率が高かった。一方、炭化したマメ科種子 (PLD-23047) は、¹⁴C年代が 760±20 ¹⁴C BP、2σ 暦年代範囲が 1225-1280 cal AD(95.4%)で、13世紀を示した。2点の測定結果は、臼杵・出穂編 (2005) を参照すると、おおむねこれまでに得られている擦文後期～晩期の年代に相当する。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会。
 Reimer, P. J., Baillie, M. G. L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Burr, G. S., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., McCormac, F. G., Manning, S. W., Reimer, R. W., Richards, D. A., Southon, J. R., Talamo, S., Turney, C. S. M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C. E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.
 臼杵勲・出穂雅実 (2005) 科学研究費補助金基盤研究(B)(2) 北海道における古代から近世の遺跡の暦年代 平成16年度研究成果報告書, 50p, 札幌学院大学人文学部。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-23046	遺構:ⅢH-07.HF01	種類:炭化種実(クルミ) 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-23047	遺構:ⅢH-07.HF01	種類:炭化種実(マメ科) 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.1N,塩酸:1.2N)

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-23046	-26.70±0.13	879±18	880±20	1157AD(68.2%)1209AD	1051AD(14.4%)1082AD 1126AD(2.6%)1136AD 1151AD(78.4%)1217AD
PLD-23047	-26.07±0.23	759±21	760±20	1252AD(68.2%)1280AD	1225AD(95.4%)1280AD

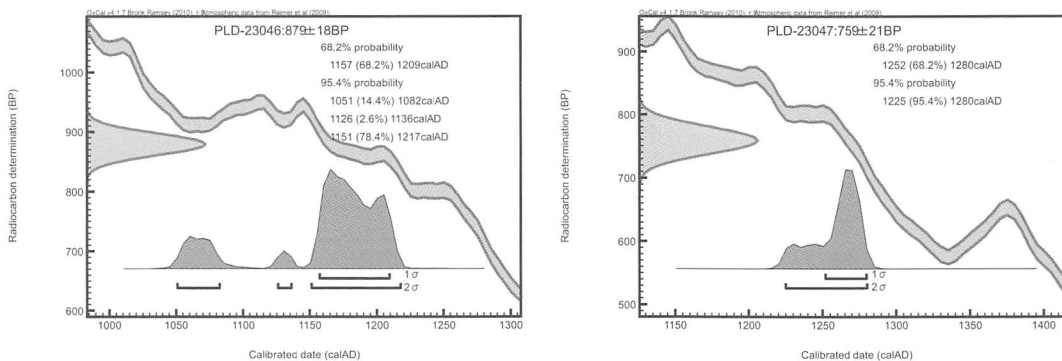


図1 暦年較正結果

第2節 厚真町ヲチャラセナイ遺跡より出土した人骨について

札幌医科大学 松村博文

厚真町教育委員会による厚幌ダム建設事業にともなう埋蔵文化財調査において、平成 23 年度に発掘調査がおこなわれたヲチャラセナイ遺跡の土坑墓（ⅢGP-02）より人骨が検出された。保存状態、部位同定、性別と年齢推定をふくむ人類学的所見を記す。

ⅢGP-02 墳墓 壮年前半（25-35 歳）男性（図版 1）

四肢、体幹骨は、ほとんど残存しない。右腕の肘付近に相当する上腕骨の遠位端に位置する肘頭窩の部分と、それに関節し合う尺骨の近位端の鈎状突起の部分のみ骨片として検出された。頭蓋は、後頭骨の大後頭孔の周辺および側頭骨の錐体部がかろうじて検出された。歯は切前歯以外の左歯列（第 1～第 2 小臼歯、第 1～第 3 大臼歯）が上下顎ともに良好に残存していた。歯槽や顎骨は消失している。

年齢推定は歯の咬耗状態のみが手がかりとなる。下顎小臼歯と上下の第 1 大臼歯は象牙質の露出に至るブロカの 2 度強、上顎小臼歯と上下の第 2 大臼歯は象牙質の露出に至らない 1 度まで咬耗しているが、第 3 大臼歯はほとんど咬耗していない。被葬者の年齢は、「親知らず」が萌出してからさほど年月が経過していなかったとみられることから、25 歳～35 歳（壮年前半）と推定される。

性別については、第 3 大臼歯を除く歯冠計測データを用い、近世アイヌの男女 52 体の歯冠計測値をもとに性判別分析をおこなった。その結果（表 2）、正答率 91%の確率で男性と判別された。

その他の所見としては、歯石は認められないが、左下顎第 1 大臼歯の近心舌側端が欠けており、破断面からみるかぎり生前に生じた可能性がある。齲歯によるものか、外傷によるものかは判断できない。歯冠の計測結果は表 1 に示す。全体的に小さい歯であり、特に小臼歯が小さい傾向がみられ、アイヌとしての特徴が明白である。擦文文化期の人骨の出土例が少なく、比較に値する歯のデータがないが、それ以前の続縄文文化期の歯は、アイヌとほとんど共通する形態を有していることから、擦文文化期の歯もアイヌと同じと推定される。被葬者の時期が、擦文文化期であってもアイヌ文化期に属していても、形態的には問題はない。残念ながら、両者にはさほど大きな違いはないとみられるので、そのどちらかに属しているかを推定するのは困難である。

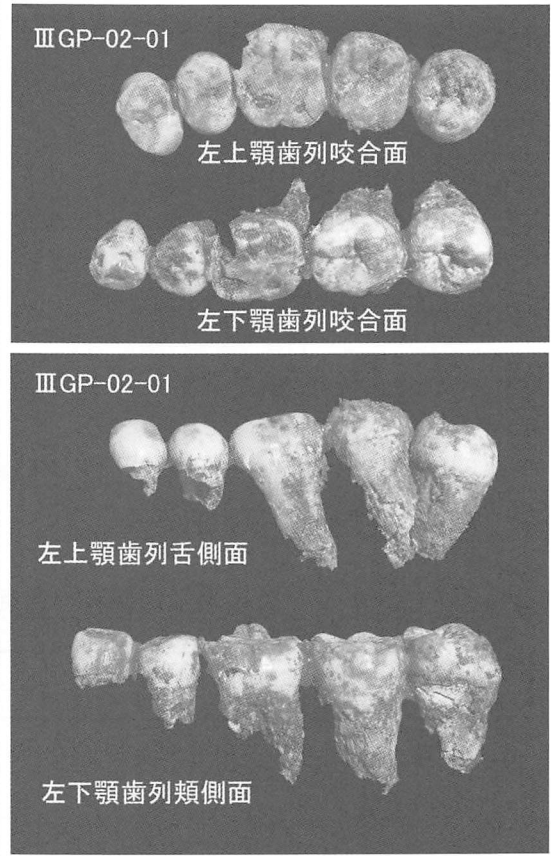
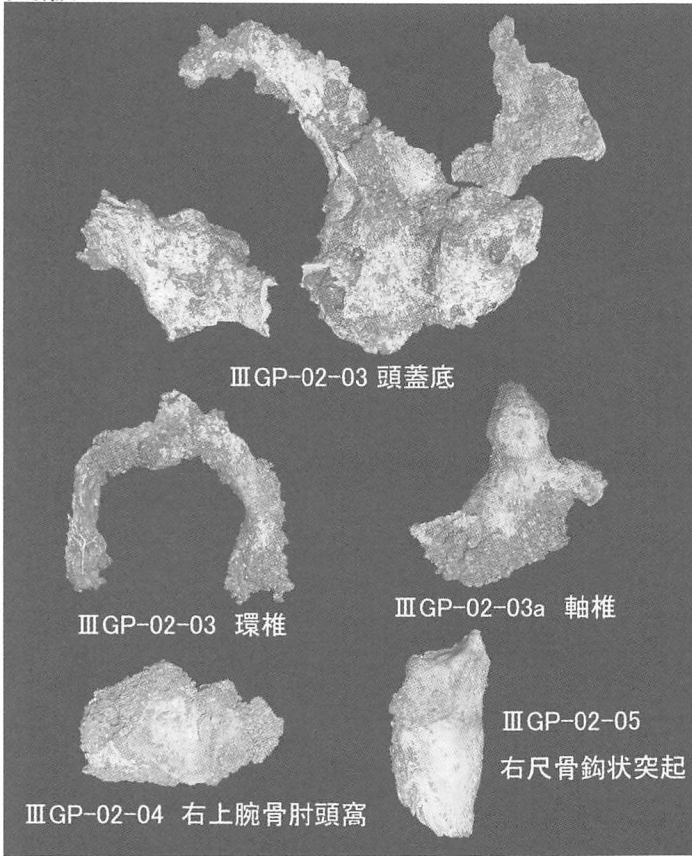
表1 ⅢGP-02墓の被葬者の歯冠計測値(mm)

		左	
		近遠心径	頬舌径
上顎	第1小臼歯	6.64	10.17
	第2小臼歯	6.45	9.75
	第1大臼歯	10.26	12.20
	第2大臼歯	9.15	11.34
	第3大臼歯	9.45	10.57
下顎	第1小臼歯	6.80	8.21
	第2小臼歯	6.59	8.23
	第1大臼歯	11.24	11.55
	第2大臼歯	10.64	10.39
	第3大臼歯	9.86	10.45

表2 Ⅲ GP-02墓の被葬者の歯冠径を用いた性判別結果

性判別式と本人骨の判別結果		
項目	歯種	判別係数
近遠心径	上顎第1大臼歯	-1.83909
近遠心径	上顎第1小臼歯	2.28417
頬舌径	下顎第1小臼歯	2.09471
頬舌径	上顎第1大臼歯	-0.86646
頬舌径	上顎第1小臼歯	-1.20059
近遠心径	下顎第2大臼歯	-0.54818
定数		13.54628
判別式の正答率(母数52体)		80.80%
被葬者の判別得点		1.5781
性判別の結果		91.0%の確率で男性

图版1



第3節 厚真町ヲチャラセナイ遺跡の動物

千歳市埋蔵文化財センター 高橋 理

出土動物

条鰭綱 Actinopterygii

哺乳綱 Mammalia

クジラ偶蹄目 Cetartiodactyla

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

コメント

確認したのは、ⅢH-07 出土のシカ及び魚骨であった。魚骨は網目構造ともとれることから、あるいはサケ科魚類の可能性はある。

表1 ヲチャラセナイ遺跡出土動物骨一覧表

取上日	グリッド	遺構名	層位	動物	部位	L/R	数量	備考
6月10日	R-30	ⅢH-07	Ⅲ	シカ	中手骨 近位端一部	?	1	
6月10日	R-30	ⅢH-07	Ⅲ	魚類?	椎骨?		1	

※備考に記載のないものは未被熱

第4節 厚真町ヲチャラセナイ遺跡から検出された植物種子 炭化種子同定(1)

札幌国際大学博物館 客員研究員
樫坂 恭代

分析対象として扱った資料は平成23年度に発掘調査を実施した遺構からのものである。V層（縄文時代前期～後期）の各遺構から土壌を採取し、フローテーション処理を行い、第1次選別で炭化植物種子などを抽出し送付されてきた。これらの資料は実体顕微鏡で観察と撮影を行った。検出された植物種子の出土表と写真図版は別紙に示しておく。

検出できた種子は、6号竪穴住居跡（覆土中灰層下層）からと65号焼土から、キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. が1粒ずつ出土（図版1-1）。石囲炉からは分類できなかった種子が1粒出土（図版1-2a）。2aに示した種子は長楕円形で表面は無文。形態はイネ科の種子に似るがイネ科種子特有の胚、ヘソは存在していない。現生資料との比較においても該当する形態が見つからず不明種子として扱った。

今回、不明種子を除いてキハダ属のみであった。キハダ属は縄文時代以来の遺跡から多く出土する例が知られている。種子を内蔵する果実は原形のまま検出される例が多いことから、アイヌ民族例のように果実を乾燥保存して料理などに使用し、また、薬用や染料の原料として利用されていたのではないかと推測されている。

表1 平成23年度 ヲチャラセナイ遺跡炭化種子出土表

委託No.	遺構名/グリッド	名称	層位	推定年代	キハダ属	不明	FLT.NO
					粒	粒	
1	VSF-01	V層 石囲炉	V	縄文時代前期～後期		1	924
2	VH-06.AS	V層 6号竪穴住居跡 覆土中灰層下位	V	縄文時代前期後葉	1		904
3	VF-65	V層65号焼土	V	縄文時代前期後葉	1		919

図版1



炭化種子同定(2)

Project Seeds 考古植物研究会 椿坂 恭代

1 扱った資料

分析対象として扱った資料は平成 24 年度に発掘調査した遺跡からのものである。擦文文化期の住居様遺構の床面焼土から土壌を採取し、フローテーション処理を行い、第 1 次選別で炭化植物種子などを抽出し送付されてきたものである。これらの資料は実体顕微鏡で観察と撮影を行った。検出された植物種子の出土表を以下に、写真図版は図版 2 に示しておく。

2 検出された植物種子

住居様遺構床面 (IIIH-07.HF01) の焼土からマメ科 LEGUMINOSAE の種子が 1 片出土。種子は長楕円形でマメ科の形態を示すが、資料の保存状態が悪いので、詳細な分類は出来なかった。子葉の内面は初生葉の痕跡は認められず、種子の大きさから見ると野生マメ科の可能性が高い(図版 2-1a)。計測値は L2.45×W2.55 (mm) である。図版 2-2 に示したオニグルミ *Juglans sieboldiana* Maxim の内果皮は、すべて細片で 0.25g 出土。その他に酸化した状態のタデ科種子が出土したが、破片のため図示していない。また、不明種子と不明炭化物は保存状態が極めて悪いので分類できなかったものである。

3 コメント

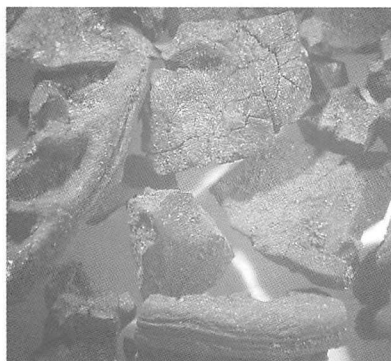
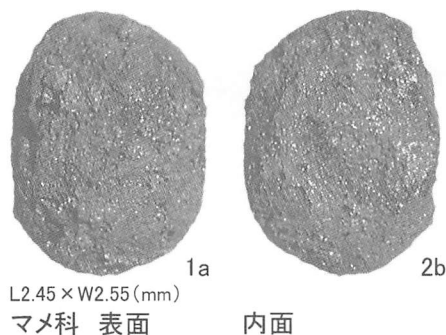
検出できた植物遺体は極めて少なかった。これまでの調査から、擦文文化期の遺跡からは栽培種子、堅果類の組成で資料が得られている。今回、植物遺体の検出量が少なかった理由について、考古学的な所見を検討してみる必要がある。例えば、この住居の使用状況、または保存状態などが他の遺跡に比較して悪かったのではないかなど。サンプリングにおいては、焼土部分の植物遺体が加熱を受ける際の高温部分の土壌のみで、焼土から離れた部分の土壌に微細な炭化物が見られなかったかどうか。今回、植物遺体の年代測定を実施して、擦文文化期後期～晩期の年代に相当する結果が得られている。考古植物のこうした情報は今後の考古学的調査に取って大きな役割を果たすものと考えている。

表1 平成24年度 ヲチャラセナイ遺跡炭化種子出土表

委託No.	遺構名/グリッド	名称	層位	推定年代	マメ科 片	タデ科 片	クルミ属 g	不明 片	不明炭化物 片	FLT.NO
1	IIIH-07.HF01	III層住居跡	III	擦文文化期	1	1	0.250	25	1	1001~1006

酸化した状態

図版 2



2.クルミ属内果皮

平成 20～24 年度出土ヲチャラセナイ遺跡植物遺体の考察

ヲチャラセナイ遺跡は平成 20 年度～平成 24 年度にかけて調査が実施された。その結果、アイヌ文化期、擦文文化期、縄文時代の遺構が検出され、フローテーション法による植物遺体の検出作業を行った。各時期の遺構から得られた植物遺体の詳細については、すでに報告済みである（椿坂 2013）。今回は最終報告である。

1 検出された植物種子

1) アイヌ文化期

この時期の遺構からは栽培植物のイネ、コムギ、キビ、ヒエ、シソ属、アサが検出された。野生植物は草本類のササ属、マメ科、アカザ属、カヤツリグサ科、木本類はマタタビ属、ニワトコ属、キハダ属、ブドウ科、ウルシ科、ミズキ属、スモモ属、コナラ属、クルミ属が検出された。

2) 擦文文化期

この時期の遺構からは栽培植物のキビ、ヒエ、オオムギが検出された。野生植物は草本類のササ属、マメ科、アカザ属、木本類はキハダ属、ブドウ科、ミズキ属、モクレン科、コナラ属、クルミ属が検出された。

3) 縄文時代

この時期の遺構からは、野生植物草本のマメ科、タデ科と木本類のキハダ属、コナラ属が検出されている。栽培植物は検出されていない。

2 まとめ

アイヌ文化期、擦文文化期から栽培植物、野生植物の草本類と木本類が検出された。栽培植物は両時期に一般的にみられる組成である。栽培植物の中で注目されるのはチャシ建物床面からイネが確認されたことである。この建物跡は炉を伴う焼失施設で、壁際の内側に沿って炭化材が確認され、その炭化材と炉跡から土壌のサンプリングを行っている。炉跡から得られたコナラ属子葉の年代測定が行われ 13 世紀前半から中頃の測定年代値が得られている。出土したイネその物の年代測定はされていないが、今のところ、この地域で一番古い出土例になる。

野生植物は、いずれも、集落の周辺に認められる草本と木本類で可食性、あるいは利用可能のものが多く、野生植物の利用についてはアイヌ民族による利用例がある。

キハダの利用については、完熟した果実はそのまま生食、また、乾燥させ貯蔵して食用、薬用などの他に、宗教儀礼上にとって重要な素材であったことが民族例で知られている（知里 1993）。ブドウ科の利用については、若い葉柄は皮をむいて生食にした。果実は熟したものをそのまま生食。また果実を大量に採取して容器に溜めて、その果汁を発酵させ酒にして飲んだ。その他に解毒剤としても利用された（知里 1993）。

ササ属の利用については、この種子を採集し炊いたり粉末にして団子状にして食糧として利用した例がある（知里 1993）。また救荒食糧としても知られている。ササ属は数年に一度、花が咲いたときのみ結実するので定期的な採集が出来ないので、食糧としての重要性は認められないであろうと考えられていた。しかし、こうした出土状況を見ていくと、有用な食糧であったことを示すものであり、今後の検討課題であろう。

ヲチャラセナイ遺跡のアイヌ文化と擦文文化から得られた植物遺体は民族学的な事例を基に検討できる良好な資料を得ることが出来た。しかも、植物遺体の炭素年代測定がなされており、考古植物のこうした情報は、今後の考古学的調査に取って大きな役割を果たすものとする。

引用文献

知里真志保 1993 : 「知里真志保著作集」別巻 I 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編 193-196
平凡社

椿坂恭代 2013 : 「第Ⅶ章 第3節 ヲチャラセナイ遺跡・ヲチャラセナイチャシ跡から検出された植物種子」『ヲチャラセナイチャシ跡・ヲチャラセナイ遺跡』第2分冊
厚真町教育委員会

第5節 フチャラセナイ遺跡土器胎土分析
土器胎土分析(1)

アースサイエンス株式会社
加藤 孝幸
米島 真由子

分析試料

分析を行った試料は表1及び図1の通りである。

表1 分析試料一覧

試料No.	遺跡名	個体名称	部位	時期	型式	在地系/搬入系	備考
1	厚真町 フチャラセナイ遺跡	JP427B	口縁部	縄文時代 前期後葉	胎土に蛇紋岩 を含む土器	搬入	図IV-12-2と同一個体
2		JP426B	胴部				図IV-12-6bと同一個体
3		JP225D	口縁部				宮本式
4		JP213B	胴部		フゴッペ 貝塚式		図IV-76-1と同一個体
5		JP290C	口縁部				図IV-81-31と同一個体
6		JP221B	口縁部				図IV-123-96,97,98と同一個体
7	新ひだか町 中野台地A遺跡	E-4 IVレキ下	口縁部	縄文時代 前期前葉	静内 中野式	-	新ひだか町静内郷土館收藏
8	新ひだか町 中野台地A遺跡	C-8 IV	胴部	縄文時代 前期前葉	静内 中野式	-	新ひだか町静内郷土館收藏

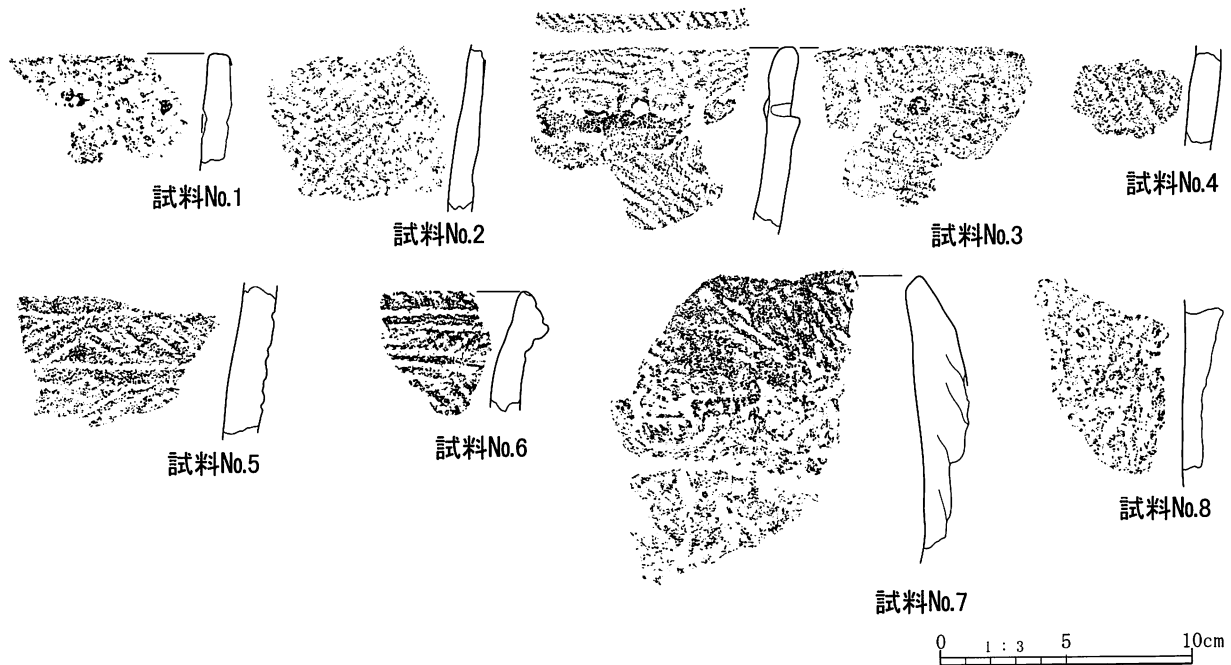
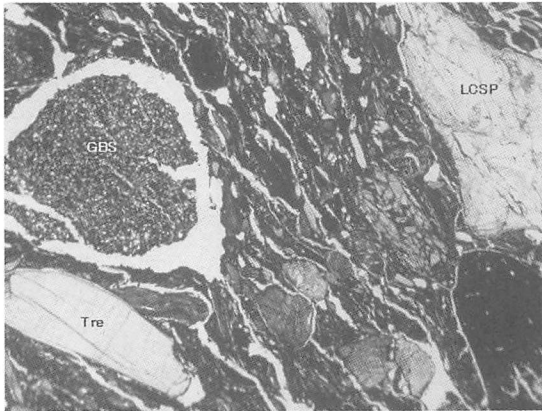


図1 胎土分析試料

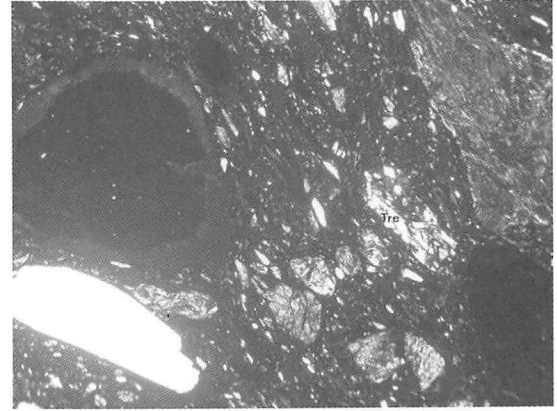
偏光顕微鏡観察

偏光顕微鏡観察結果は表2、及び偏光顕微鏡下写真図版を参照下さい。

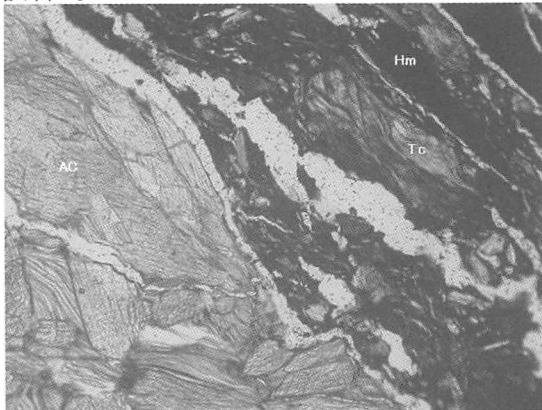
図版1 胎土分析試料(1)



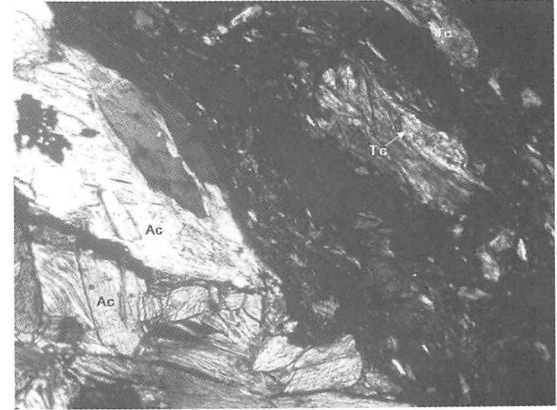
試料1オープンニコル. スケール 1.0mm



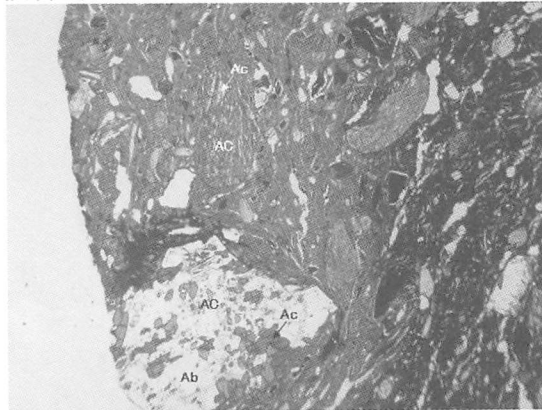
試料1クロスニコル. スケール 1.0mm



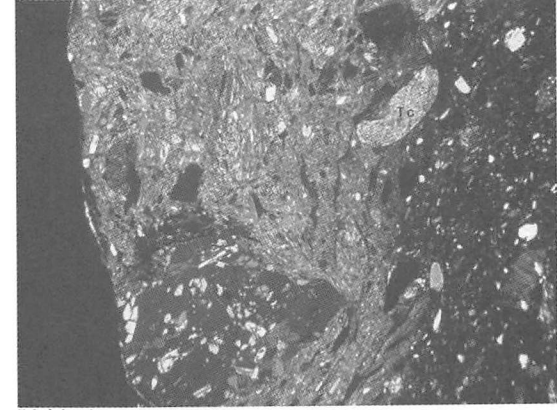
試料1オープンニコル. スケール 0.1mm



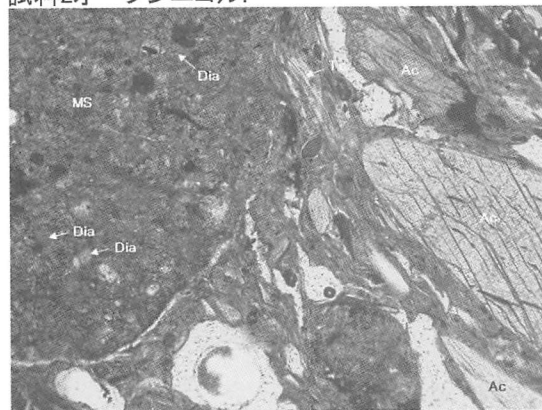
試料1クロスニコル. スケール 0.1mm



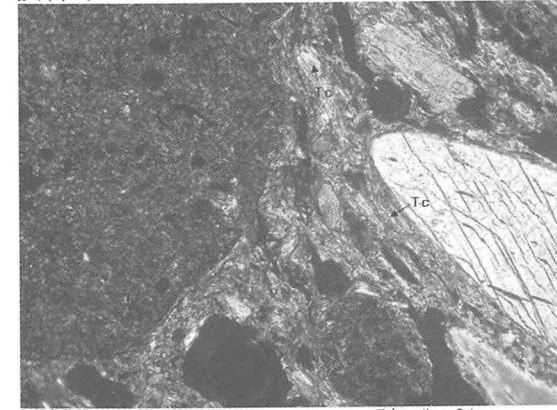
試料2オープンニコル. スケール 1.0mm



試料2クロスニコル. スケール 1.0mm

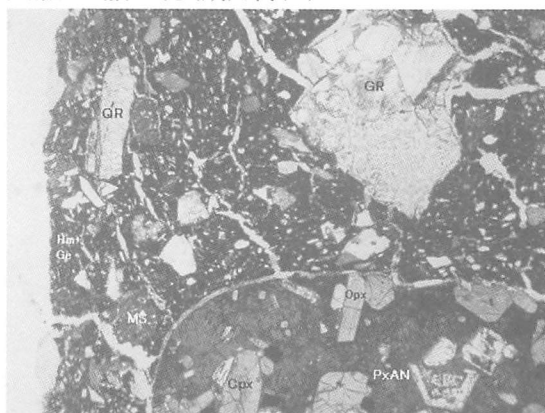


試料2オープンニコル. スケール 0.1mm



試料2クロスニコル. スケール 0.1mm

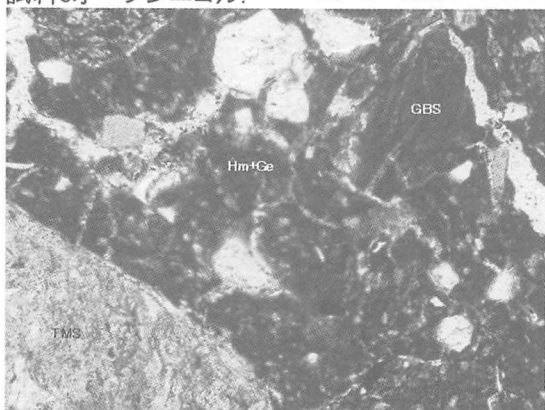
図版2 胎土分析試料(2)



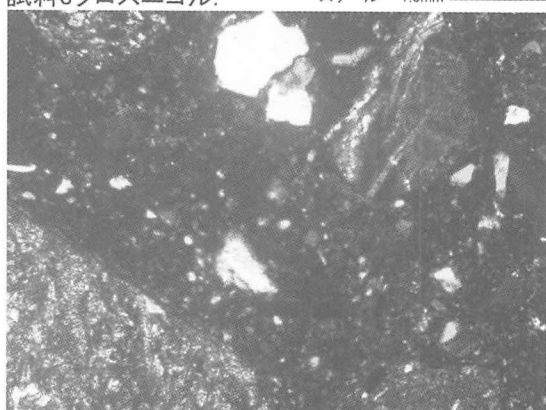
試料3オープンニコル. スケール 1.0mm



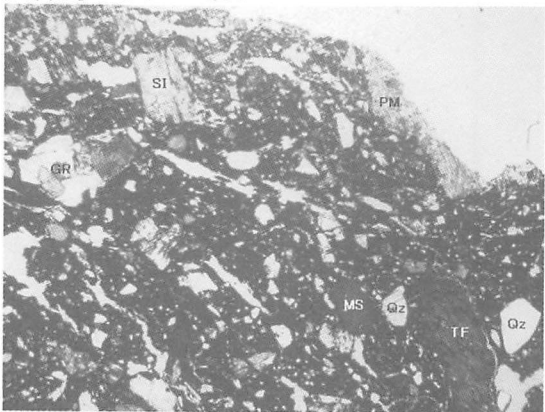
試料3クロスニコル. スケール 1.0mm



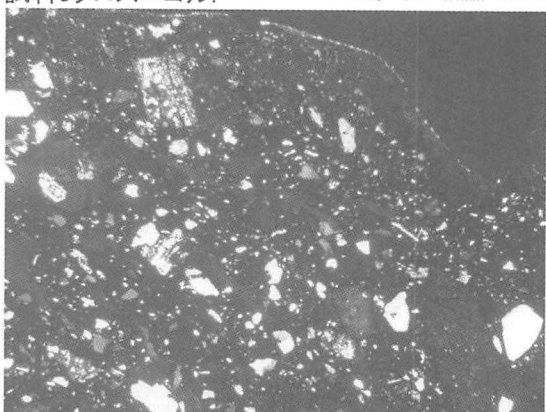
試料3オープンニコル. スケール 0.1mm



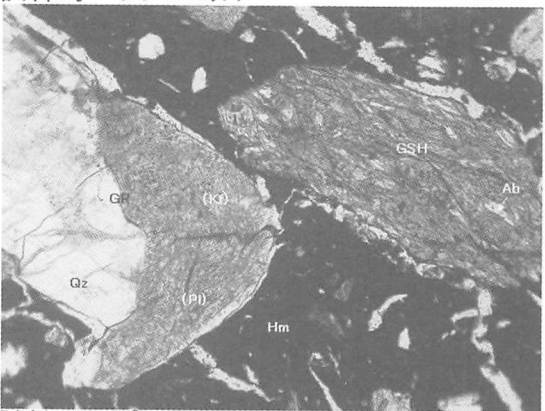
試料3クロスニコル. スケール 0.1mm



試料4オープンニコル. スケール 1.0mm



試料4クロスニコル. スケール 1.0mm

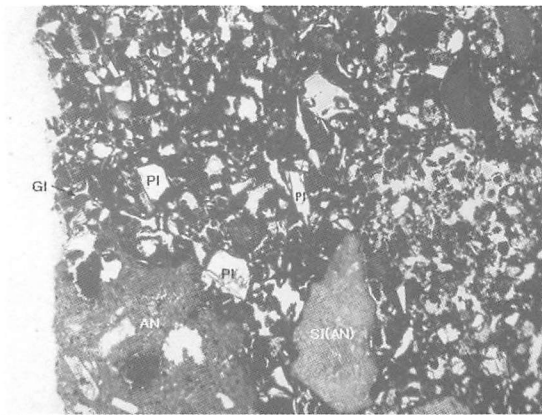


試料4オープンニコル. スケール 0.1mm

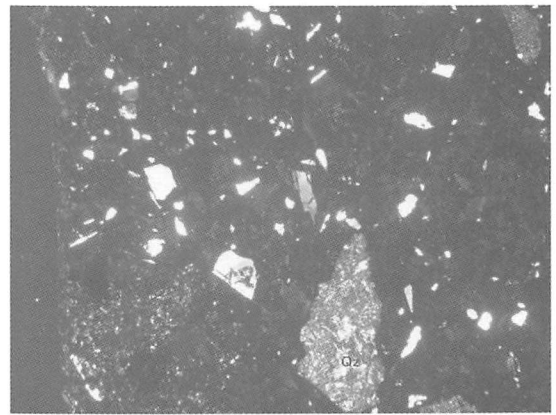


試料4クロスニコル. スケール 0.1mm

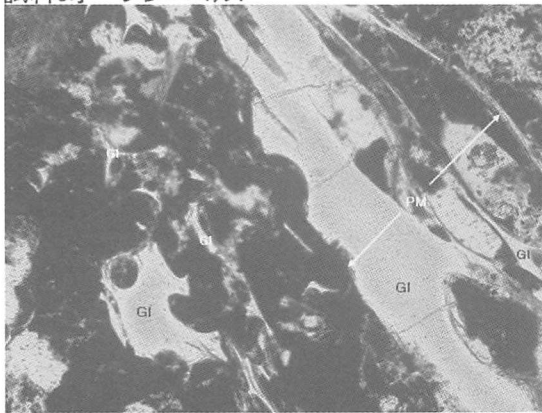
図版3 胎土分析試料(3)



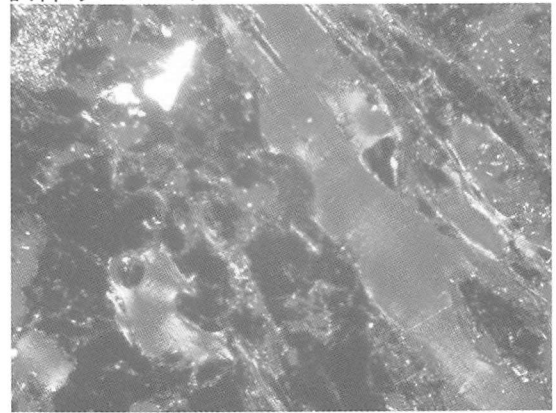
試料5オープンニコル. スケール 1.0mm



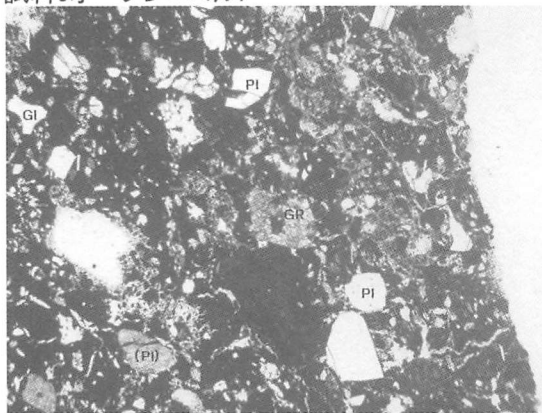
試料5クロスニコル. スケール 1.0mm



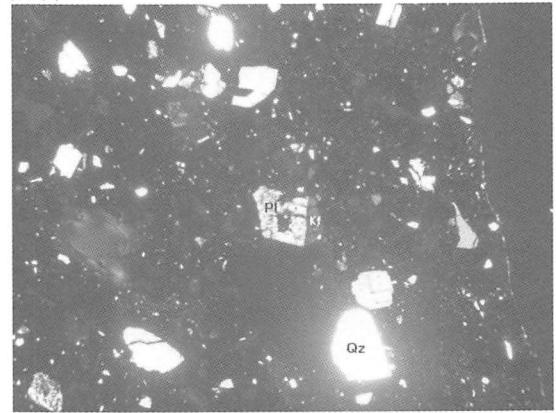
試料5オープンニコル. スケール 0.1mm



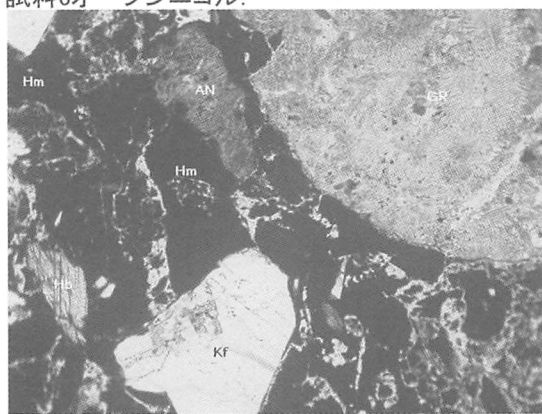
試料5クロスニコル. スケール 0.1mm



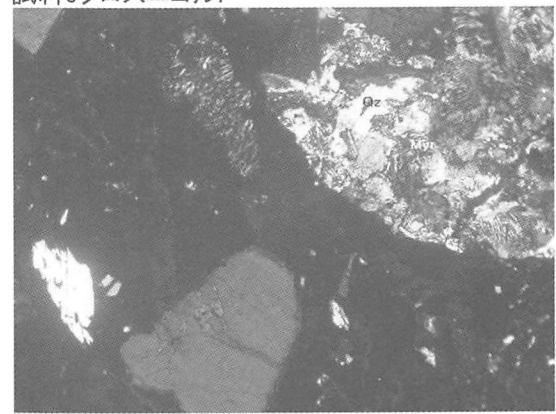
試料6オープンニコル. スケール 1.0mm



試料6クロスニコル. スケール 1.0mm

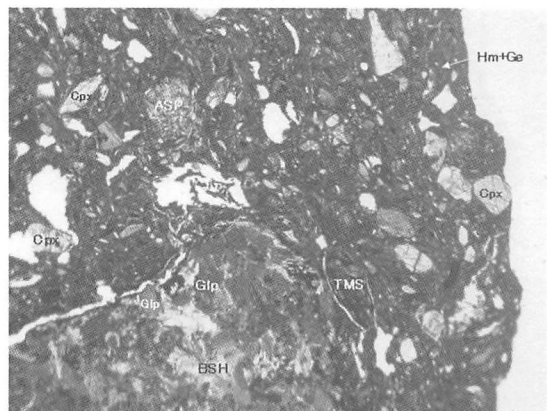


試料6オープンニコル. スケール 0.1mm

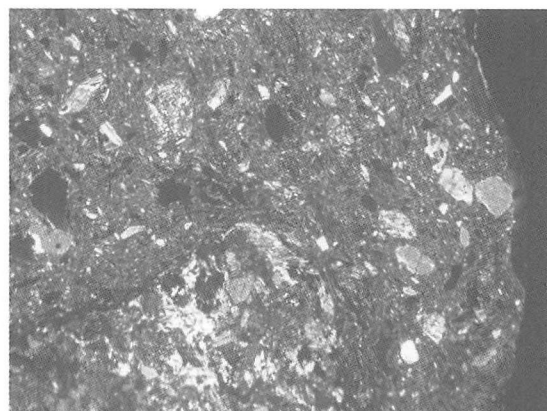


試料6クロスニコル. スケール 0.1mm

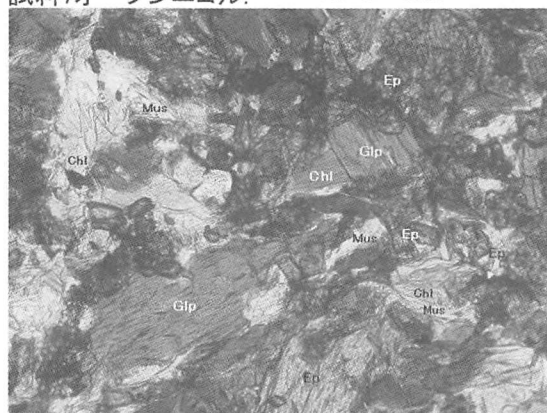
図版4 胎土分析試料(4)



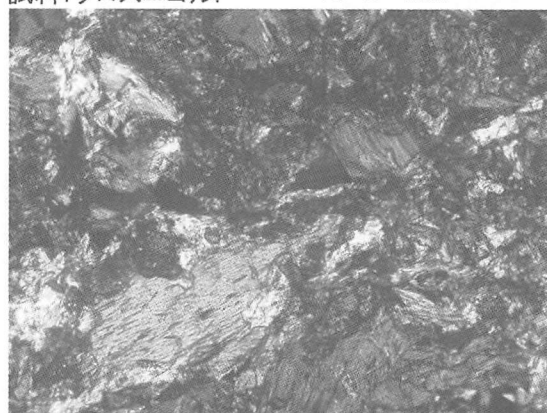
試料7オープンニコル. スケール 1.0mm



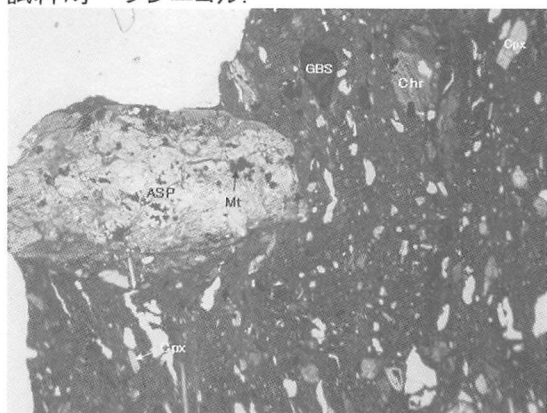
試料7クロスニコル. スケール 1.0mm



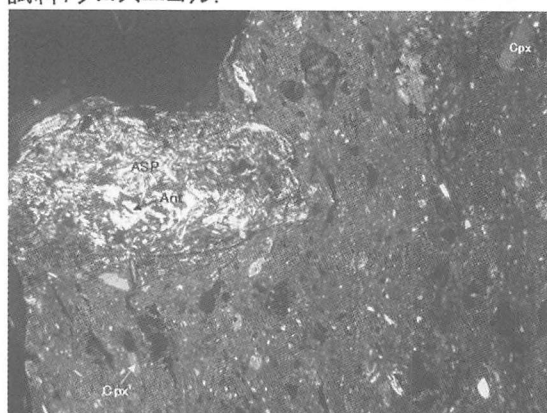
試料7オープンニコル. スケール 0.1mm



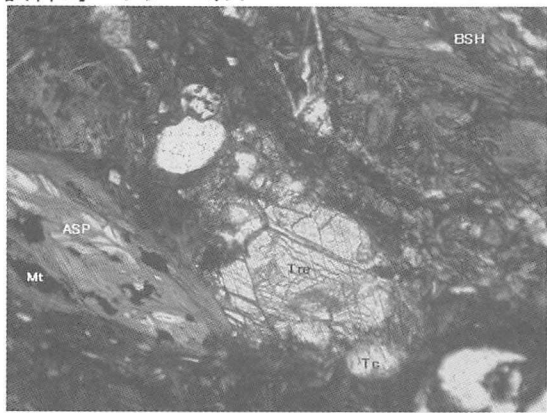
試料7クロスニコル. スケール 0.1mm



試料8オープンニコル. スケール 1.0mm



試料8クロスニコル. スケール 1.0mm



試料8オープンニコル. スケール 0.1mm

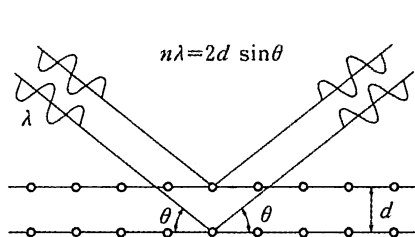


試料8クロスニコル. スケール 0.1mm

X線粉末回折の概要

X線回折分析

X線回折は、鉱物の結晶構造や結晶状態に関する情報を得るための分析方法である。結晶物質に特性X線を照射すると、X線が結晶格子面で反射しお互いに干渉しあい、ブラッグの条件を満たす方向に強い回折線を示す。



$$\text{ブラッグの条件} \quad 2 d \sin \theta = n \lambda$$

θ : ブラッグ角

d : 結晶粒子の面間隔

λ : X線の波長

n : 反射の次数 (整数)

この式により格子面間隔が求められる。面間隔は結晶物質の固有の値で回折X線の角度(2θ)と強度を求めることにより、結晶物質の同定ができる。

X線回折にはいくつかの方法があり、鉱物の判定・定量などには粉末回折法が有効な分析方法であり、通常適用されている。分析装置はX線ディフракトメーターが使われる。次にX線粉末回折装置で分析するときの、試料調整法、測定法、試料の特徴などを述べる。

X線粉末回折

1. 鉱物の同定

X線粉末回折による鉱物の同定は、鉱物がそれぞれ特有の回折線を与えるので、回折線の位置と強度を、標準鉱物の回折データと比較して判定する。標準鉱物のデータベースとして J C P D S (Joint Committee on Powder Diffraction Standards) の P D F (Powder Data File) 粉末データファイルがあり、これを比較・対照して同定を行う。この場合、以下に述べる不定方位の回折データと比較するが、それだけでは鉱物が決定できない場合があり定方位と各処理が行われる。

2. 不定方位法

不定方位法は、最も一般的な粉末法である。粉末試料に混在する鉱物の判定や各回折線の正確な強度の測定をするとき、広い範囲の回折角度について回折パターンを得るときなどに使われる。

試料の一部を風乾させ、鉄乳鉢で粗砕する。さらにめのう乳鉢を用いて、指先で粒子を感じない ($10\mu\text{m}$ 以下) 程度まで粉碎する。粉末にした試料をアルミニウム製試料ホルダーに圧入し測定に供する。

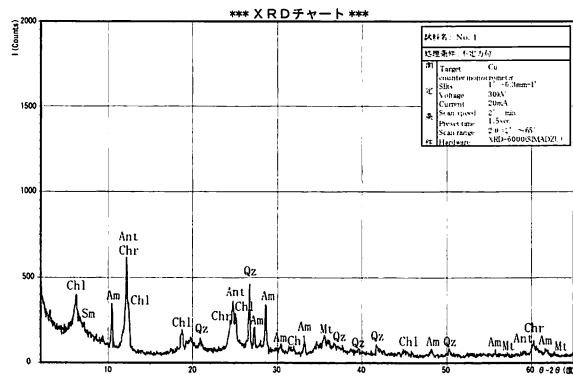
3. 含有量の推定

回折X線の強度は、結晶相物質の含有量・鉱物の種類 (化学組成, 結晶構造)・結晶度・粉末粒子の形状・大きさ・方位・測定条件・混合物全体のX線吸収係数などによって決定される。これら主要な要素のみについてみても鉱物の種類によって異なり、また同族の鉱物であっても異変があり、同じ結晶面の回折強度が一定の強度を示すとは限らない。従ってX線回折より得られる結果は、あくまでも定性的なものであり、量的な評価はある程度相対的なものである。

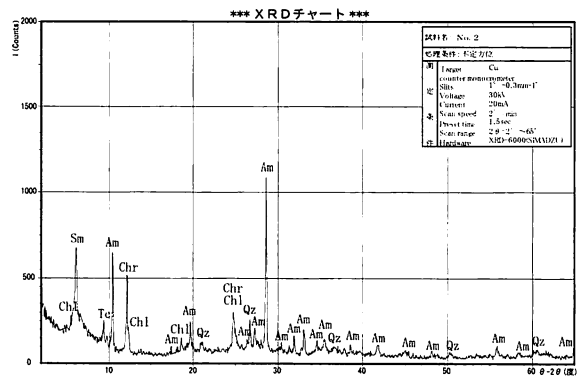
4. 測定条件

分析は、島津製作所製 XRD6000 型 X線回折装置を使用した。測定条件は、X線管球 Cu 対陰極、

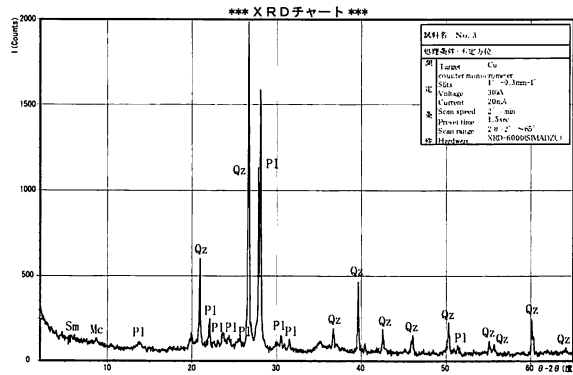
カウンタモノクロメータ、管電圧 30kV・管電流 20mA、スリット系：1° -0.3mm-1°、走査速度 2°/min、プリセットタイム 1.5sec、走査範囲 不定方位 2~65° で行った。



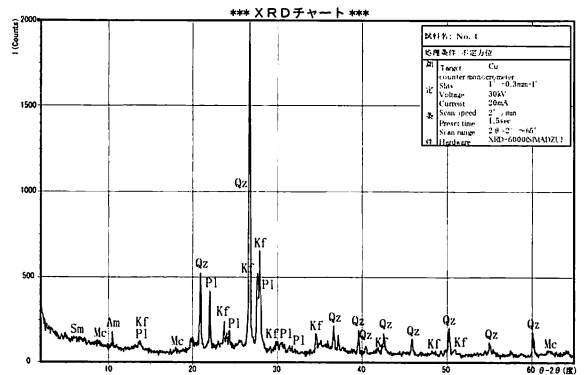
サンプルNo.1



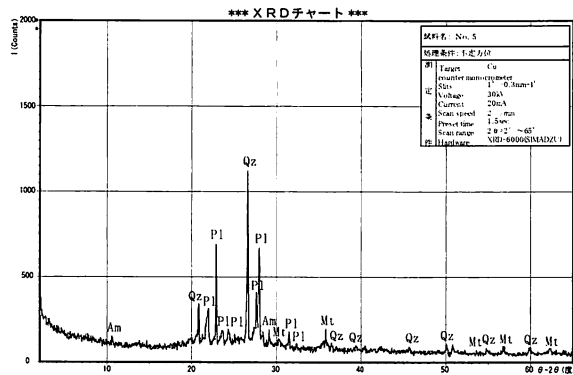
サンプルNo.2



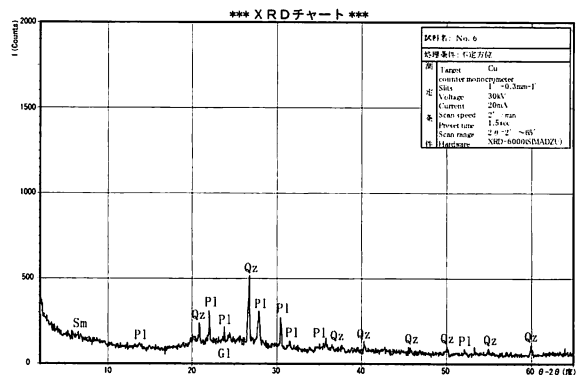
サンプルNo.3



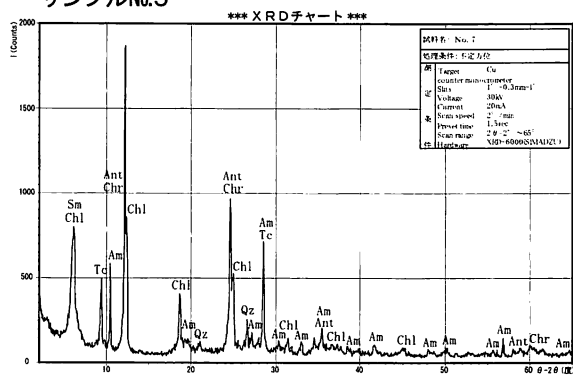
サンプルNo.4



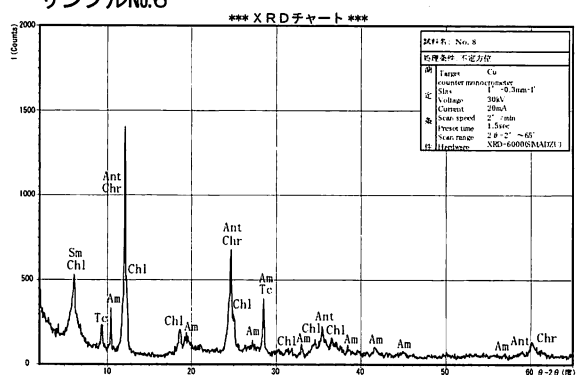
サンプルNo.5



サンプルNo.6



サンプルNo.7



サンプルNo.8

図2 X線粉末回析チャート

表3 X線粉末回折結果一覧表

遺跡名	時期	試料番号	型式	Qz	Pl	Kf	Am	Mt	Mc	Chl	Sm	Ant	Chr	Tc	
ヲチャラセナイ遺跡	縄文時代前期後葉	1	胎土に蛇紋岩を含む土器	△			△	+		△	△	○	○	-	
		2	胎土に蛇紋岩を含む土器	+			◎			+	○		○	+	
		3	宮本式土器	◎	◎				-		-				
		4	宮本式土器	◎	△	○	-		-		-				
		5	フゴッペ貝塚1式	◎	○		-	-							
		6	フゴッペ貝塚1式	○	△							-			
中野台地A遺跡	同, 前期前葉	7	静内中野式土器	+			○			○	○	◎	◎	△	
		8	静内中野式土器				△			○	○	◎	◎	+	

凡例

◎:極多量 ○:多量 △:中量 +:少量 -:微量 ?不確定

Qz:石英 Pl:斜長石 Kf:カリ長石 Am:角閃石 Mt:磁鉄鉱 Mc:雲母類

Chl:緑泥石 Sm:スメクタイト Ant:アンチゴライト Chr:クリソタイル Tc:タルク

蛍光X線分析

FP法蛍光X線分析概要

蛍光X線分析のうちファンダメンタルパラメータ法 (FP法) による分析は、試料をそのまま非破壊で、また粉末状態で、あるいは微量でも分析できるため、簡便な分析方法として使用頻度が増している。

以下は JEOL 製 JSX-3100R II (XRF) 分析装置を使用した場合である。各元素の測定条件を表に示す。X線管球は、エンドウィンドウ型の Rh 管球を用いている。測定環境は大気および真空状態で測定している。なお、試料室 (大気および真空状態) と X線強度の関係は、軽元素 (Na~Ca) の X線は大気により吸収され減衰する。重金属元素 (Ti~U) の X線は大気による影響が少ないことから、FP法の場合などは真空状態で測定を行ない、微量成分のみの場合は大気状態で測定する。測定時間は一試料につき約 60 秒~300 秒である。

試料調整は以下のような方法で行なう。

1) 非破壊の場合

岩石など未処理のものをそのまま試料室にセットし、なるべく平滑な面を測定する。

2) 検量線法の場合

試料測定用プラスチック製カップ (直径 3.2 mm, 深さ 2.0 mm の円筒状) に、一重のポリプロピレンフィルムを装着し、100 μm 以下に粉碎した試料を入れる。中の試料を軽く押し固め、試料が飛散しないようにフタをして、試料室にセットし測定を行う。

3) FP法の場合

100 μm 以下に粉碎した試料を樹脂製リング (外径 φ 26 mm, 内径 φ 20 mm, 厚 4 mm) に詰めてプレス機で 20 t (74Mpa) 程度加圧し、錠剤化 (ディスク作成) したものを試料室にセットし測定を行う。

定量分析は付属のソフトを用いファンダメンタルパラメータ法 (FP法) によって行う。なお、この装置では、Na-U の元素が定量可能であり、C, N, O といった軽元素は検出できない。

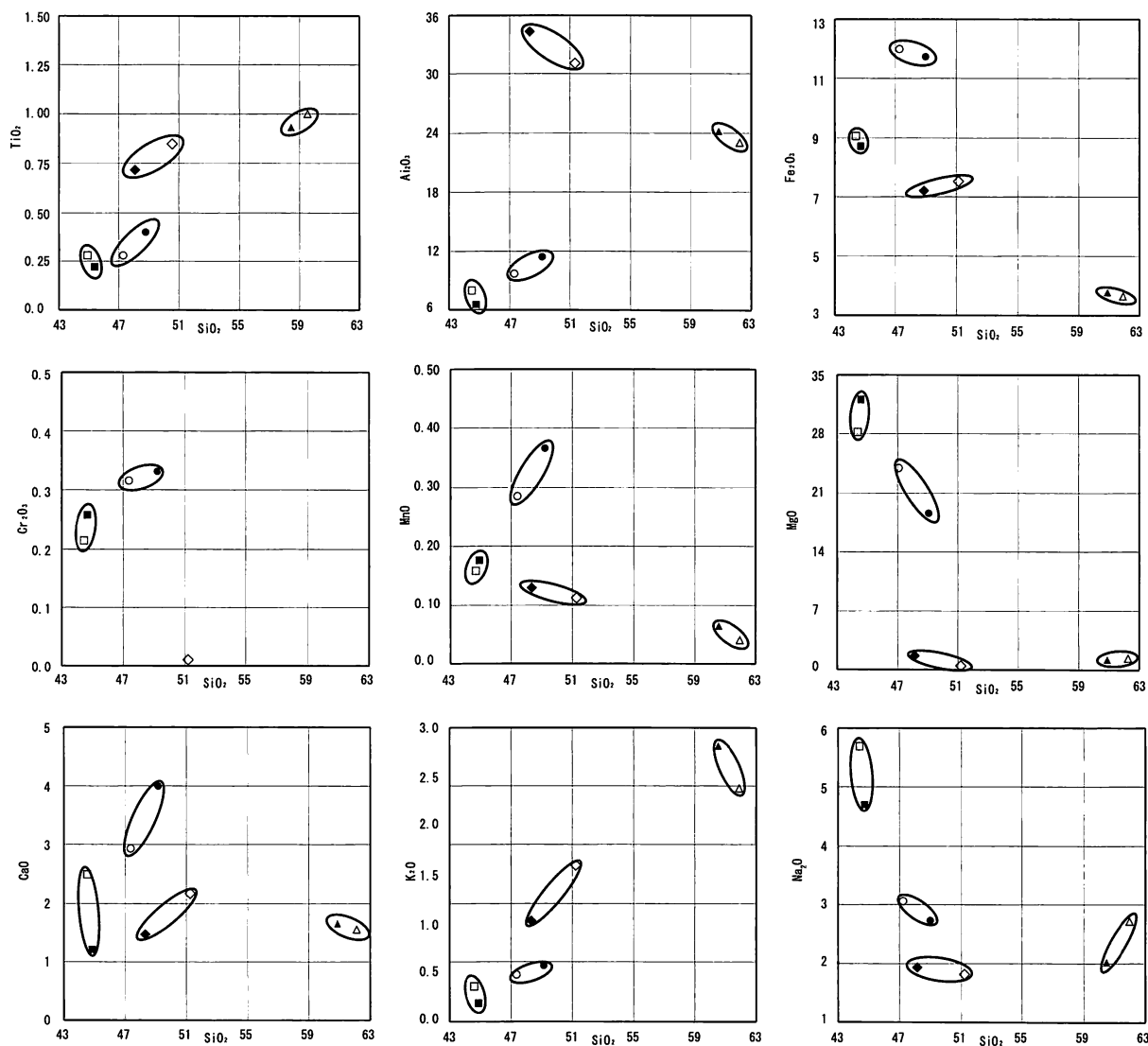
試料の測定で用いる FP法は、標準試料を用いた検量線法とは異なり、分析線の強度が試料の組成と基礎的定数 (ファンダメンタルパラメータ) の関数として記述できるという考え方を基礎と

した理論計算法である。この方法は、出所不明の未知試料の分析や、上述のように試料の形状や量に関わらず前処理なしで定量できるメリットがある。

表 各元素の測定条件 (例)

スペクトル名				蛍光X線 エネルギー (KeV)	スペクトル 強度比
K線		L線			
K α	K β	L α	L β		
Na-P				1.04-2.01	K α / K β 比 ≒ 5~7
S-Ba	S-Ba			2.31-36.38	
		La-U	La-U	4.65-17.22	L α / L β 比 ≒ 1

※ 特性X線、コンプトン散乱線 (Rh) : Rh K α COMP, Rh K β COMP

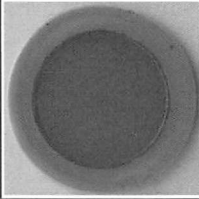
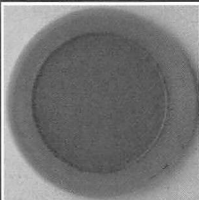
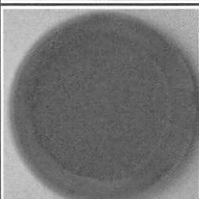
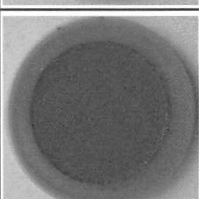
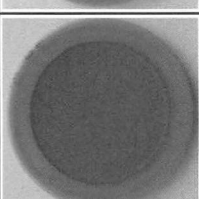
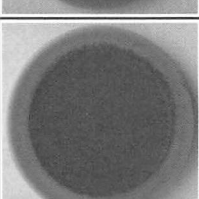
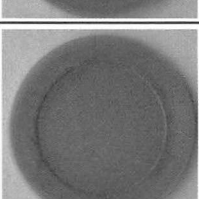
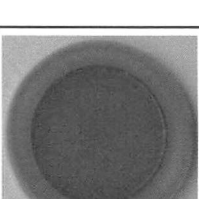


凡例

- No. 1 胎土に滑石を含む土器
- No. 2 胎土に滑石を含む土器
- △ No. 3 宮本式
- ▲ No. 4 宮本式
- ◇ No. 5 フゴッペ貝塚式
- ◆ No. 6 フゴッペ貝塚式
- No. 7 静内中野式 (静内中野 A 遺跡)
- No. 8 静内中野式 (静内中野 A 遺跡)

図3 化学組成の酸化物 (重量%) 表示

表4 FP法蛍光X線分析結果

遺跡名	厚真町																
	ヲチャラセナイ遺跡																
	No.1		No.2		No.3		No.4		No.5		No.6		No.7		No.8		
試料 写真 (ディスク)																	
	酸化物	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%		
	SiO ₂	47.26	47.37	49.06	51.13	62.15	72.29	60.76	71.62	51.22	64.42	48.23	60.89	44.44	42.83	44.74	42.05
	TiO ₂	0.29	0.22	0.41	0.32	1.02	0.89	0.95	0.84	0.86	0.82	0.73	0.70	0.28	0.21	0.23	0.16
	Al ₂ O ₃	9.67	5.71	11.38	6.99	23.09	15.83	24.22	16.82	31.27	23.17	34.53	25.69	7.93	4.50	6.50	3.60
	Fe ₂ O ₃	12.14	4.58	11.81	4.63	3.59	1.57	3.71	1.65	7.61	3.60	7.20	3.42	9.06	3.29	8.87	3.14
	Cr ₂ O ₃	0.32	0.13	0.34	0.14					0.02	0.01			0.21	0.08	0.27	0.10
	MnO	0.29	0.24	0.37	0.33	0.04	0.04	0.06	0.06	0.11	0.12	0.13	0.14	0.16	0.13	0.18	0.14
	MgO	24.08	35.98	18.69	29.04	1.33	2.31	1.09	1.92	0.33	0.62	1.64	3.09	28.52	40.98	32.38	45.36
	CaO	2.95	3.17	4.02	4.49	1.54	1.92	1.63	2.06	2.17	2.93	1.45	1.96	2.50	2.58	1.20	1.21
	SrO			0.01	0.01	0.02	0.01	0.02	0.01	0.03	0.02	0.03	0.02				
	Na ₂ O	2.06	2.00	1.73	1.74	1.71	1.93	1.00	1.14	0.79	0.96	0.90	1.11	4.70	4.39	3.73	3.40
	K ₂ O	0.40	0.26	0.47	0.32	2.00	1.48	2.35	1.77	1.34	1.07	0.86	0.69	0.30	0.18	0.16	0.09
	P ₂ O ₅	0.21	0.09	1.44	0.63	3.52	1.74	4.20	2.10	4.24	2.26	4.29	2.29	1.72	0.70	1.57	0.63
	NiO	0.28	0.22	0.22	0.18									0.17	0.13	0.18	0.13

太字:微量成分(検出限界)のため参考値として表記(Na₂OとMnOは軽元素のため、誤差が大きい)。
分析方法:粉末試料をプレス(錠剤化)し、真空状態で測定。100%ノーマライズ。

まとめと考察

1. 土器に含まれる岩片・鉱物片の特徴と由来

偏光顕微鏡観察とX線粉末回折の結果をまとめると以下ようになる。

X線粉末回折の結果は、概ね偏光顕微鏡観察の結果と一致する。試料2で、X線粉末回折からは蛇紋岩はクリソタイルのみであるが、鏡下観察からはアンチゴライトのみである。いずれも間違いないので、分析箇所が同じでないことによると考えられる。「滑石含有」試料は、いずれもX線粉末回折で滑石を含むことが確かめられた。

〔試料1および試料2(滑石含有)〕

両資料に共通して含まれるのは蛇紋岩・アクチノ閃石角閃岩と蛇紋岩に由来する鉱物片（クリソタイル・滑石・クロマイト・トレモラ閃石）である。粒子の多くは付加体構成岩類である。より詳細にみると、試料1の蛇紋岩はアンチゴライト蛇紋岩とリザルダイト・クリソタイル蛇紋岩の両タイプを含み、試料2はアンチゴライト蛇紋岩のみを含む。また、試料1には玄武岩（緑色岩化）を含み、試料2には泥岩を含む。試料2の泥岩は、珪藻を多く含む珪藻質泥岩である。

上記のような組合せは“三石岩体”で特徴的に見られ、これらの岩片・鉱物片を同時に採取できるのは三石の蓬萊山周辺（三石岩体周辺）と考えられる。三石岩体は主に蛇紋岩（リザルダイト・クリソタイル蛇紋岩を主体とし、ブロック状のアンチゴライト蛇紋岩を包有する）とアクチノ閃石角閃岩を含む角閃岩類で構成される。

試料1には玄武岩（緑色岩化）の岩片を含むが、三石岩体周辺には岩清水層（後期ジュラ紀～前期白亜紀の神居古潭帯に属する地質）の緑色岩化した枕状溶岩（海底で噴出した玄武岩質の岩石）が分布する。試料2は珪藻質の泥岩を含むが、三石岩体南方には西川層（新第三紀中新世の地質）の塊状泥岩が分布し、珪藻を含むことが報告されている（嵯峨山・宮坂 1992）。

すなわち、偏光顕微鏡観察で認められた岩片・鉱物片を1ヶ所で採取できるのは、三石岩体（の一部）である可能性が高い。

〔試料3および試料4(宮本式土器)〕

両試料に共通して含まれるのは、おもに花崗岩質岩・玄武岩（緑色岩化）・変形泥岩・安山岩・花崗岩質岩由来と考えられる鉱物片（石英・カリ長石・斜長石など）である。試料3には軽石が含まれ、試料4には緑色片岩が含まれる。

花崗岩質岩を主体として玄武岩（緑色岩化）や変形泥岩、緑色片岩を含むことから、両試料の岩片・鉱物片を採集したのは日高変成帯（主帯）に属する地域の可能性が高い。採取地点を絞るためには、露頭で採取した試料の偏光顕微鏡観察や各種化学分析などを行い、それらのデータと比較検討をしていく必要がある。

〔試料5および試料6(フゴッペ貝塚式土器)〕

両試料に共通して含まれるのは、おもに泥岩・火山ガラス・普通角閃石・石英・斜長石である。試料5は軽石を含み、試料6は花崗岩質岩を含む。試料6の花崗岩質岩は初生鉱物として黒雲母や、特徴的な形状を示すミルメカイトを含んでいる。

これらの岩片・鉱物片は、火山由来の堆積物（降下火砕堆積物、火砕流堆積物）として採取可能である。土器を作成するために採取した地層が火砕流堆積物のような地表面を流走して堆積したものであれば、火道や噴火口周辺の火山体に由来する岩片や流走中に取り込んだ異なる地層の岩片など

を含んで堆積している可能性がある。

採取地点を絞るためには、試料中に含まれる火山ガラスなどの鉱物片の化学組成分析（例えばEPMA分析）を行うなどして、既に報告されているテフラと比較する必要がある（土器の焼成による化学組成の変化に注意する必要がある）。

〔試料7および試料8(滑石含有)〕

両試料に共通して含まれるのは、蛇紋岩・アクチノ閃石角閃岩・青色片岩・滑石・蛇紋岩に由来すると考えられる鉱物片（クリソタイル・滑石・トレモラ閃石など）である。より詳細にみると、蛇紋岩はアンチゴライト蛇紋岩、リザルダイト・クリソタイル蛇紋岩の両タイプを含む。試料7には緑色片岩を、試料8には玄武岩（緑色岩化）をそれぞれ少量含み、不透明鉱物片を特徴的に多く含む。

その他の特徴としては、植物遺体を混ぜていること、岩片・鉱物片のサイズが他の試料1～6（ヲチャラセナイ遺跡）より細粒であることがあげられる。

両試料には青色片岩の岩片が特徴的に含まれる。青色片岩は、北海道中軸帯の「神居古潭（巫帯）」に属する幌加内に分布する。また、美瑛や夕張岳では蛇紋岩メランジュ中の捕獲ブロックとして産する。三石岩体には明瞭な記載はないが、クロス閃石と呼ばれる青色角閃石を含むブロックがあるので、小さな青色片岩が含まれる可能性がある。三石川上流の神居古潭帯の岩清水層群分布域には藍閃石片岩が産する。三石岩体には、蛇紋岩（リザルダイト・クリソタイル蛇紋岩、アンチゴライト蛇紋岩の両タイプ）やアクチノ閃石角閃岩が含まれている。したがって、全体として三石岩体とその周辺の地質に近い岩片・鉱物片の組合せとなっている。

2. 化学分析(蛍光X線分析 FP法)から見た特徴

蛍光X線分析によって得られた分析値を用い、 SiO_2 を横軸に、各酸化物を縦軸にとった図を作成した(図2)。それによると、No.1・2(滑石を含む土器：ヲチャラセナイ遺跡)、No.3・4(宮本式土器)、No.5・6(フゴッペ貝塚式土器)、No.7・8(滑石を含む土器：中野台地A遺跡)の各グループがそれぞれまとまって類似位置にプロットされる。このことからそれぞれのグループ内では同じ胎土を使用していると考えられる。

2-1 滑石を含む試料(No.1・No.2およびNo.7・No.8)

4試料いずれにおいても Fe_2O_3 、 Cr_2O_3 、 MgO 、 Na_2O 、 NiO に富み、 TiO_2 、 Al_2O_3 に乏しい傾向が認められる(SiO_2 にはやや乏しい)。この傾向は、これら試料に使われる蛇紋岩片や滑石片など主な骨材の化学組成を反映している。

No.1・2(ヲチャラセナイ遺跡)とNo.7・8(中野台地A遺跡)の試料について、 SiO_2 を横軸にとり、各酸化物を縦軸にとった図でそれぞれ比較すると、多くは概ね近い位置にプロットされる(図1)。両グループに明瞭な違いが認められるのは Fe_2O_3 - SiO_2 図と Na_2O - SiO_2 図で、 Fe_2O_3 - SiO_2 図ではNo.1・2(ヲチャラセナイ遺跡)が Fe_2O_3 に富む位置にプロットされ、 Na_2O - SiO_2 図ではNo.7・8(中野台地A遺跡)が Na_2O に富む位置にプロットされる。No.7・8で Na_2O に富む傾向は、Naに富む青色の角閃石である藍閃石を多く含む青色片岩を特徴的に含むことを反映していると考えられる。

2-2 宮本式土器(No.3・No.4)

2試料いずれにおいても SiO_2 、 TiO_2 、 Al_2O_3 、 K_2O に富み、 Fe_2O_3 、 MnO 、 MgO に乏しい傾向が認められる。偏光顕微鏡観察からNo.3・4は SiO_2 を多く含む花崗岩質岩(一般的に66%以上)を主な骨材とし

で含んでいる。花崗岩質岩は、蛇紋岩や玄武岩、安山岩と比較すると一般的に SiO_2 、 TiO_2 、 Al_2O_3 、 K_2O などの元素に富む傾向があり、偏光顕微鏡観察の結果と整合的である。

2-3 フゴツペ貝塚式土器(No.5・No.6)

2 試料いずれにおいても Al_2O_3 に富み、 Fe_2O_3 、 MgO 、 Na_2O に乏しい傾向が認められる(TiO_2 、 K_2O にやや富み、 MnO にやや乏しい傾向も認められる)。また、 SiO_2 量が概ね同じNo.1・2と比較すると(図1)、 TiO_2 と K_2O が高い位置にプロットされる。

偏光顕微鏡観察の結果から、No.5・6の骨材は主に火山ガラス片や石英片、斜長石片からなる。花崗岩質岩と同様、 SiO_2 、 TiO_2 、 Al_2O_3 、 K_2O は、一般的に SiO_2 を多く含むデイサイト～流紋岩質で多く含まれる傾向がある。また、No.5・6は特に Al_2O_3 に富む組成を示す土器である。これは骨材だけではなく、基質の混和材に使われる粘土も Al_2O_3 に富む組成をもつためと考えられる。一般に“粘土”を構成するカオリン鉱物、イライト、緑泥石などの粘土鉱物には Al_2O_3 が多く含まれる。

2-4 2010年度分析試料との比較

昨年度分析を実施した試料と比較すると、本年の滑石を含むタイプの土器(4 試料)は昨年(2 試料(ヲチャラセナイ遺跡 胎土に滑石を含む土器))と比べても全体として近い位置にプロットされる。ただし、本年の土器は昨年(2 試料)のものより全体として SiO_2 、 Al_2O_3 、 K_2O 、 TiO_2 に乏しく、 MgO や MnO に富む傾向がある。このことは今年の試料、とくにNo.7・8(中野台地A遺跡)の蛇紋岩やタルクの含有量が多いことを示している。

なお、本年の分析試料と比較の対象にはならないが、昨年の「シュブノツナイ式」は軽石を骨材に使った土器で SiO_2 に富み(65%弱)、本年分析のどの試料よりも多い。今年の試料で SiO_2 がもっとも多い(61～62%)宮本式土器とは異なる材料を使用していることがわかる。

昨年の「円筒土器下層d式」はアンチゴライト蛇紋岩を骨材に使用した土器であり、今年の「タルクを含む土器」と各酸化物- SiO_2 図でそれぞれ近い位置にプロットされるものの、より「蛇紋岩粘土」に近い。今年(2010年度)の分析値より、さらに MgO に富み、一方で、 TiO_2 、 Al_2O_3 、 Fe_2O_3 、 MnO 、 CaO に乏しい組成となっている。

3. 主な岩片の産地候補と地質の特徴

“三石岩体”を構成する岩石および岩清水層起源の変成岩類

■ “三石岩体”の岩石

“三石岩体”は主に蛇紋岩と、蛇紋岩中に産する角閃岩類(斑れい角閃岩・リーベック閃石角閃岩・アクチノ閃石角閃岩・ザクロ石角閃岩)によって構成される。

蛇紋岩は剪断帯あるいは断層に沿うものでは葉片状蛇紋岩となっている。主にアンチゴライト・クリソタイルからなり、メッシュ組織を形成する。不透明鉱物は磁鉄鉱を主に少量のクロム鉄鉱を伴う。しばしばクリソタイル細脈が形成されている。葉片状蛇紋岩ではメッシュ組織が失われ、アンチゴライトの強く定向配列する組織を示す。

アクチノ閃石角閃岩は、比較的局所的に発達する青味を帯びた暗緑色のやや片状の角閃岩である。鏡下では長柱状の鉱物が定向配列し、細粒～粗粒の多様な岩相が認められる。ほとんどアクチノ閃石で構成される角閃岩である。

■ 岩清水層起源の変成岩類

緑色片岩は岩清水層の塩基性火山岩および同質火山性砕屑岩類が圧砕化・片状化し、片岩化したものである。分布規模はさほど大きくなく、岩清水層分布域の全体からみて局所的である。原岩の組織を残すものから完全に原岩組織が消滅したものまで、多様な岩相を呈する。緑泥石・繊維状アクチノ閃石・アルバイト集合(リュウコキシシ・ときに方解石・石英を随伴)が生成する。より変成作用が進むと繊維状～長柱状のアクチノ閃石を主にアルバイト・緑泥石・リュウコキシシを随伴する。微量の緑れん石類・方解石・石英・白雲母・パンペリー石を伴うことがある(和田ほか 1992)。

青色片岩(クロス閃石～藍閃石片岩)は、ウツマ川流域に2ヶ所ときわめて局所的に分布する。いずれの青色片岩も破碎されブロック化している。鏡下では一般に圧破碎の著しい組織を示す。残存ブロックの周囲に繊維状～針状・長柱状の青色鉱物が多量に形成されている。青色鉱物はクロス閃石～藍閃石質である。鉱物組み合わせはクロス閃石・アルバイト・緑れん石・緑泥石・パンペリー石・角閃石・リュウコキシシ・方解石・石英である(和田ほか 1992)。

■ 中新世西川層

基底部の礫岩・砂岩相と主部の泥岩相に分けられる。三石断層北部に分布する西川層また静内層から珪藻化石を産する(嵯峨山・宮坂 1992)。

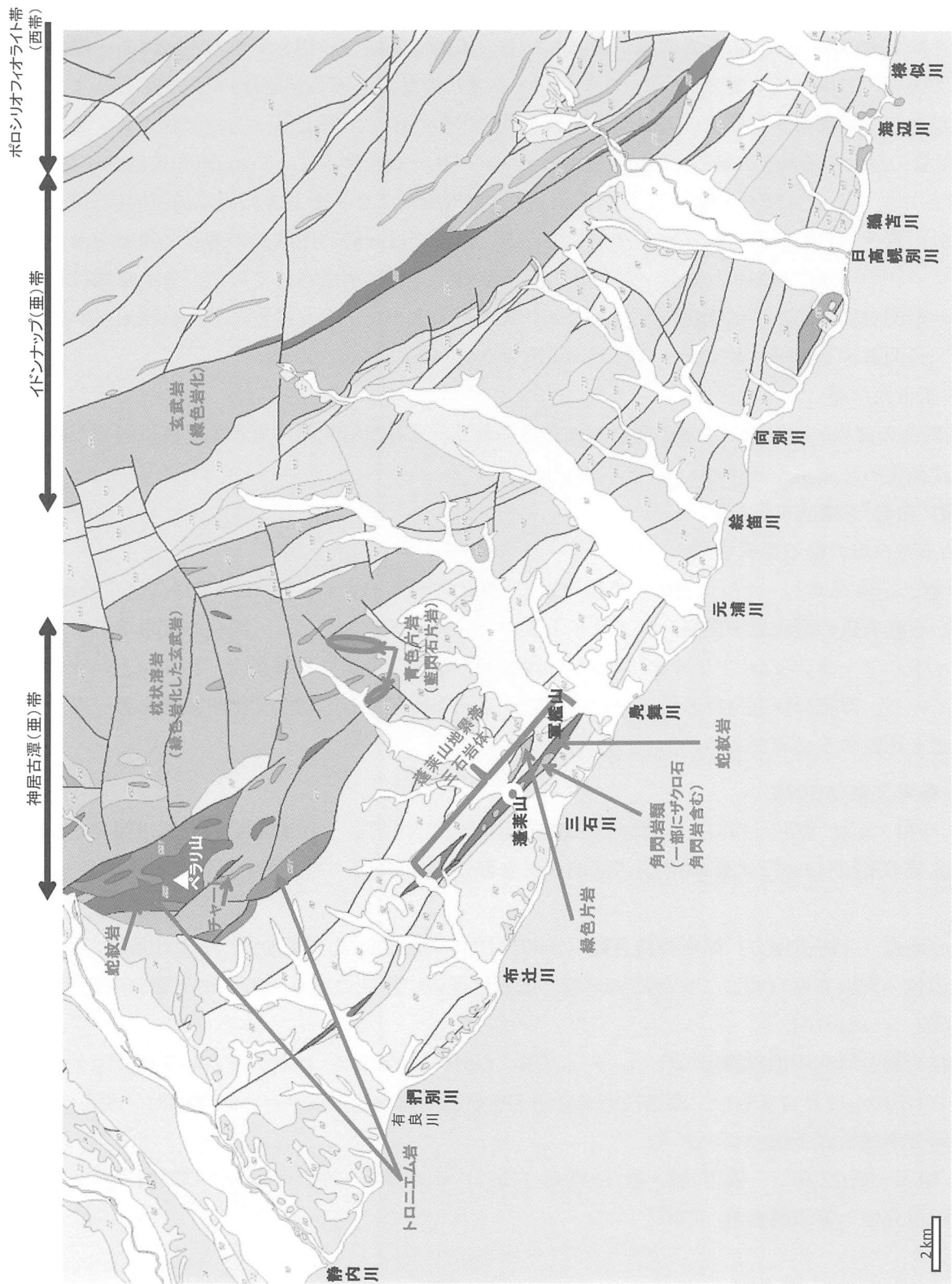
余市町“白岩”を構成する岩石

■ 余市町白岩の軽石凝灰岩

新第三紀鮮新世トーマル川層の軽石凝灰岩で、流紋岩～デイサイト質。積丹半島に広く分布する。下位から軽石質の凝灰岩・泥岩、デイサイト質のハイアロクラスタイト、同質の溶岩が重なる。デイサイトのフィッション・トラック年代からは約290万年前(金属鉱業事業団 1985)という値が得られている。詳細な研究は行われていないので、偏光顕微鏡下での特徴や化学組成を調べて、土器の胎土と比較する必要がある。

引用・参考文献(ABC順)

- 猪木 幸男・垣見 俊弘(1954) 5万分の1地質図幅および説明書「小樽西部」. 北海道開発庁, 23p.
- 金属鉱業事業団(1985), 昭和59年度広域調査報告書「積丹地域」. 通商産業省資源エネルギー庁, 156p.
- 日本の地質「北海道地方」編集委員会編(1990) 日本の地質1 北海道地方. 共立出版, 337p.
- 嵯峨山積・宮坂省吾(1992) 日高海岸地域, 三石付近の中新統の珪藻化石. 地下資源調査所報告, No. 63, 191-194.
- 産業技術総合研究所地質調査総合センター(編)(2010) 20万分の1日本シームレス地質図データベース(2010年11月11日版). 産業技術総合研究所研究情報公開データベース DB084, 産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 和田 信彦・高橋 功二・渡辺 順・蟹江 康光(1992) 5万分の1地質図幅および説明書「三石」. 北海道立地下資源調査所, 73p.



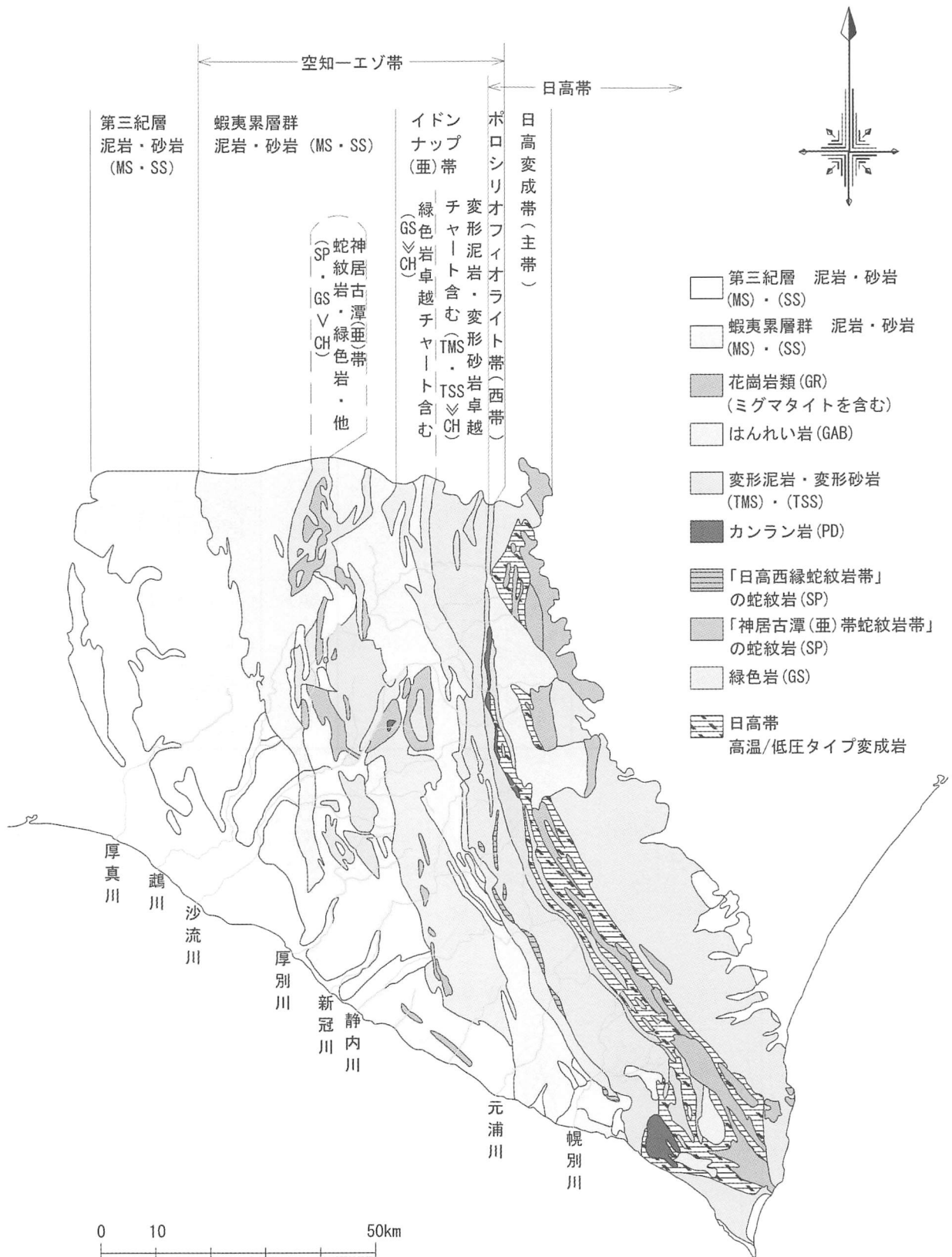


図6 北海道中軸帯南部の地質概要

土器胎土分析(2)

アースサイエンス株式会社

担当者 X線粉末回折：齊藤 晃生

蛍光X線分析：飯田 友章

まとめと考察：加藤 孝幸

分析試料

分析を行った試料は表1及び図1の通りである。

表1 分析試料一覧

試料No.	遺跡名	個体名称	部位	時期	型式	在地系/搬入系	備考	
1	厚真町 ヲチャラセナイ遺跡	JP455	口縁部	縄文時代 前期後葉	円筒土器下層d式	搬入	図IV-80-56と同一個体	
2		JP460	口縁部			搬入	図IV-80-53と同一個体	
3		145488	-			-	-	
4		141893	-		土製品	-	-	
5		142779	-			-	-	
6		JP464	口縁部			フゴッペ貝塚式	搬入	図IV-79-41と同一個体
7		JP258C	胴部			円筒土器下層c式	搬入	図IV-80-52A,Bと同一個体
8		JP476	胴部		大麻V式	在地	図IV-78-19と同一個体	
9		-	胴部		胎土に滑石を含む土器	搬入	-	
10		-	胴部		胎土に滑石を含む土器	搬入	-	
11	厚真町 厚幌1遺跡	JP38B	胴部	縄文時代 前期前葉	胎土に滑石を含む土器	搬入	JP38B 比較試料	
12	芦別市 滝里38遺跡	-	鉋物	縄文時代 前期後葉	シュブノツナイ式	-	比較試料	
13	富良野市 学田三区1遺跡	-	胴部	縄文時代 中期	型式名なし	-	比較試料	
14	富良野市 三の山3遺跡	-	胴部			-	比較試料	

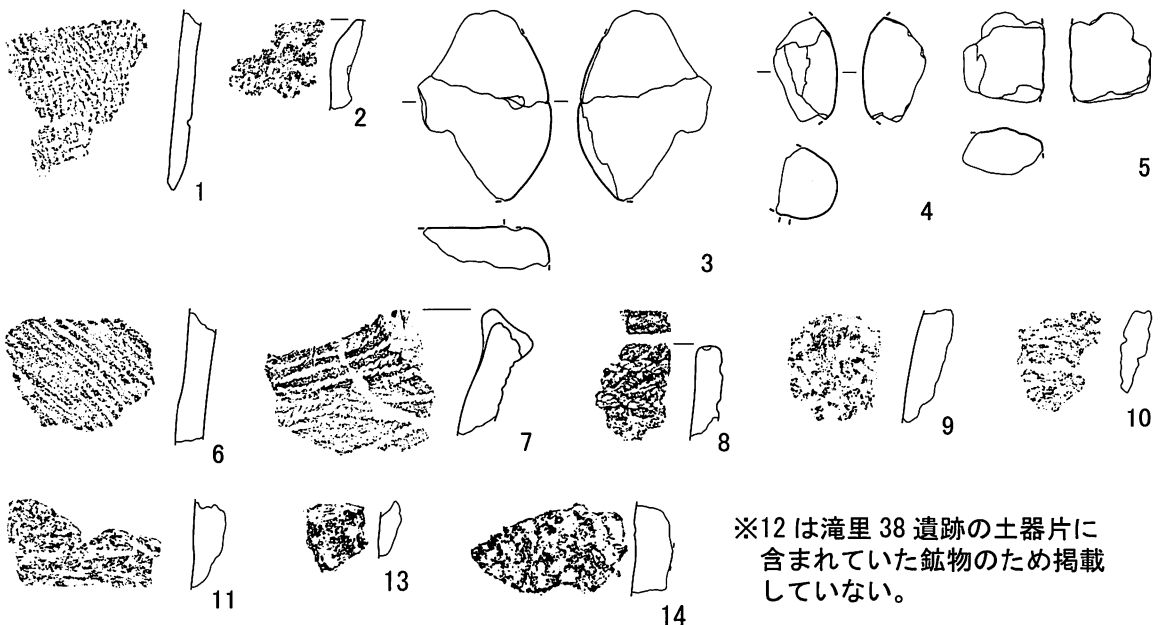
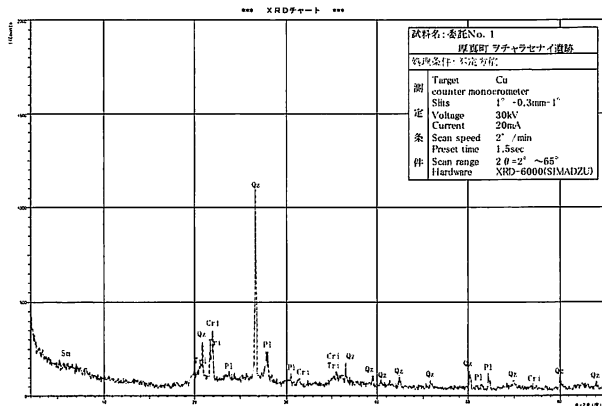


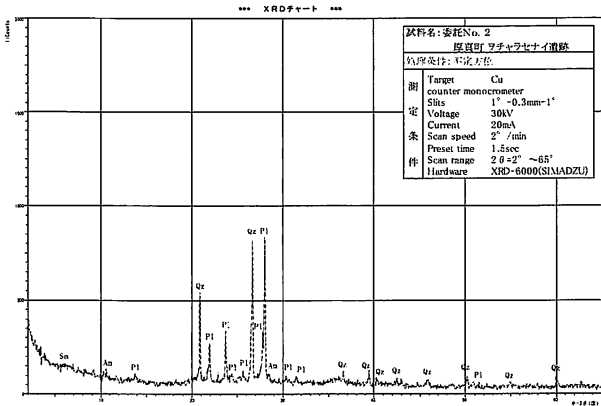
図1 胎土分析試料

X線粉末回折

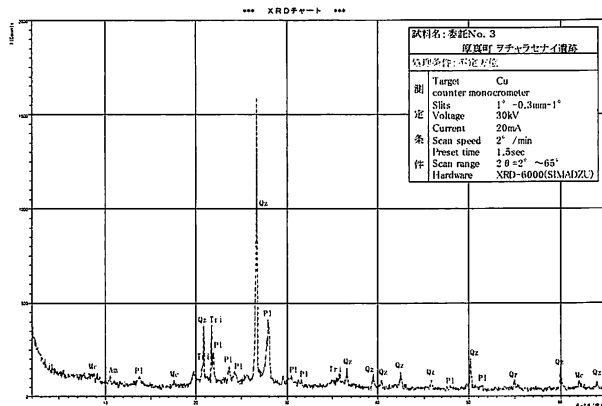
X線粉末回折及びX線回折分析の概要と測定条件は土器胎土分析（1）と同様のため省略する。以下に分析結果を示す。



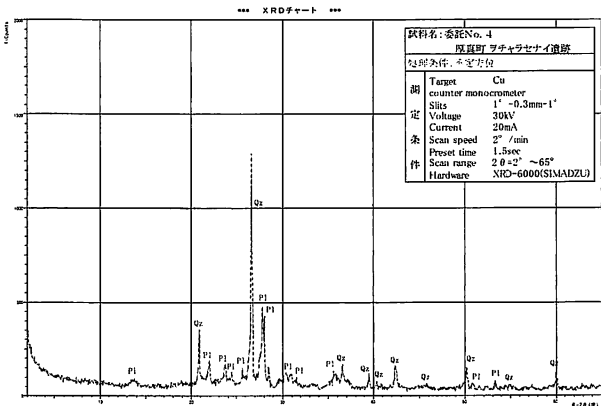
サンプル No. 1



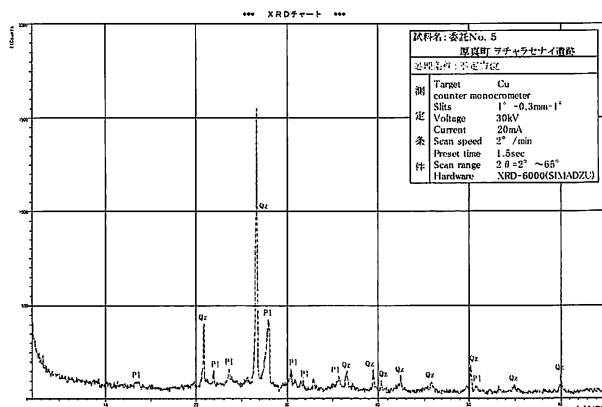
サンプル No. 2



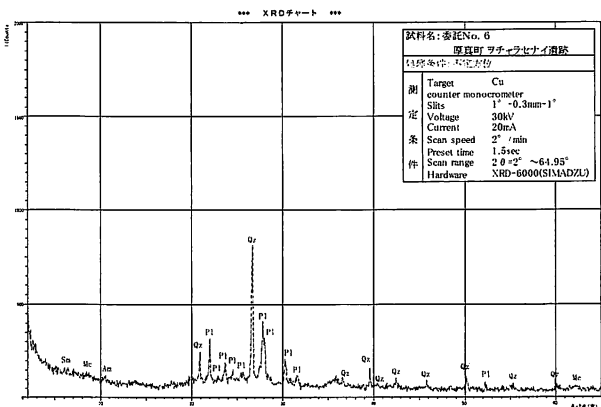
サンプル No. 3



サンプル No. 4



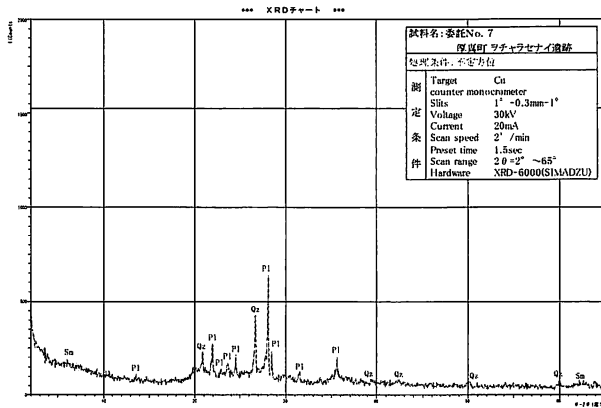
サンプル No. 5



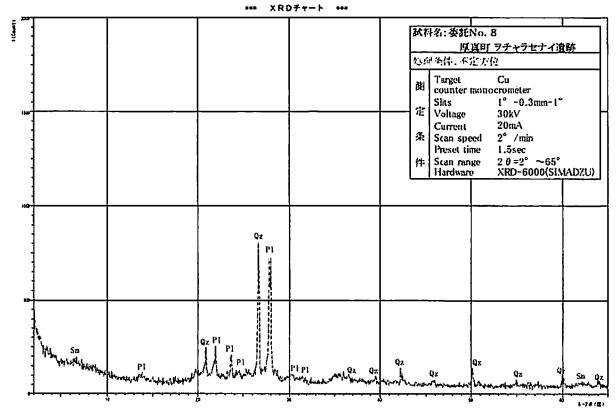
サンプル No. 6

図2 X線粉末回折チャート（1）

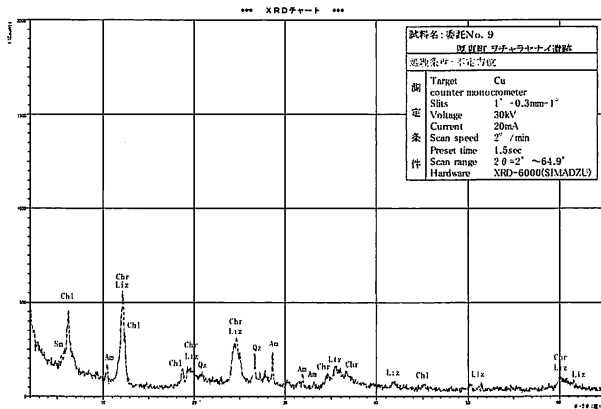
ヲチャラセナイ遺跡



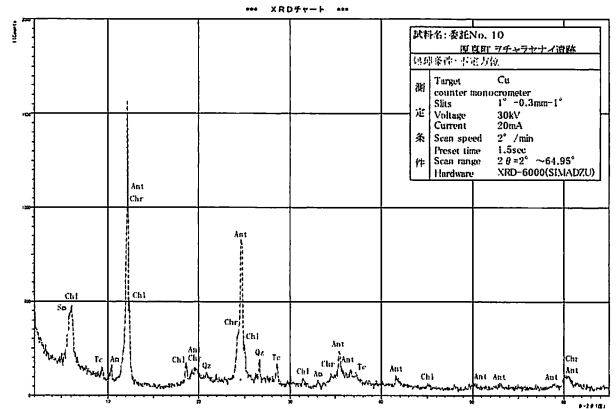
サンプル No. 7



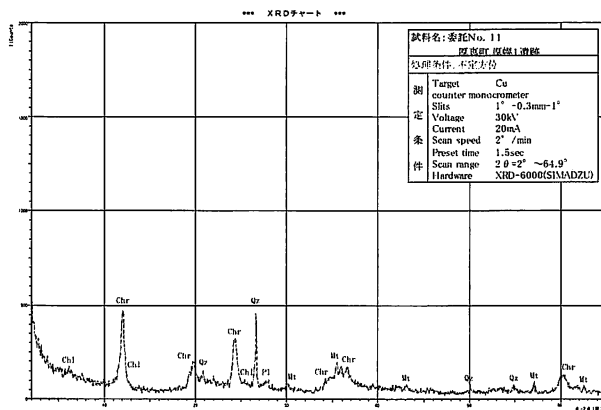
サンプル No. 8



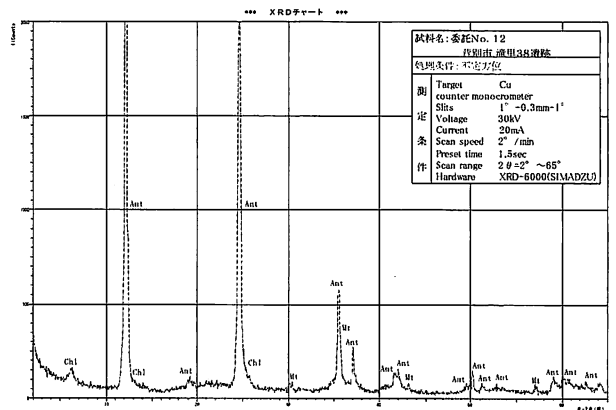
サンプル No. 9



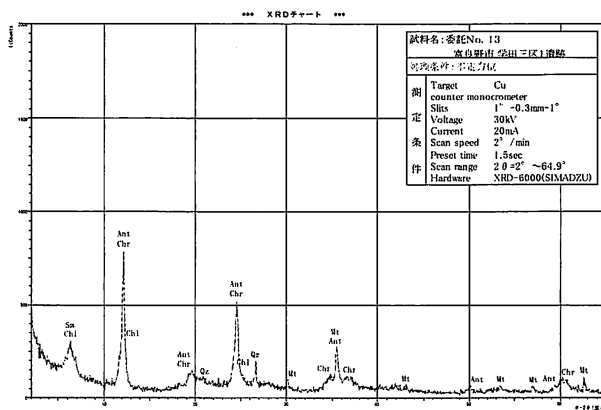
サンプル No. 10



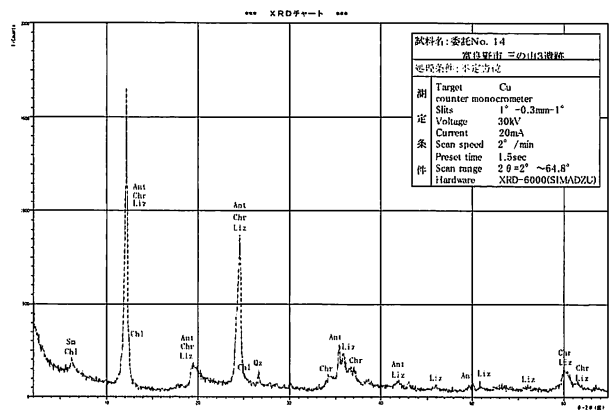
サンプル No. 11



サンプル No. 12



サンプル No. 13



サンプル No. 14

図3 X線粉末回折チャート(2)

表2 X線粉末回折結果一覧表

遺跡名	時期	試料 番号	型 式	Qz	Pl	Am	Cri	Tri	Mc	Chl	Sm	Ant	Chr	Liz	Tc	Mt		
ヲ チ ヤ ラ セ ナイ 遺 跡	縄 文 時 代 前 期 後 葉	1	円筒土器下層d式	◎	+		△	△			-							
		2	円筒土器下層d式	○	○	-						-						
		3	土製品	◎	△	-		△	-									
		4	土製品	◎	△													
		5	土製品	◎	△													
		6	フゴッペ貝塚式	○	△	-			-			-						
		7	円筒土器下層c式	△	○							-						
		8	大麻V式	○	○							-						
		9	胎土に滑石を含む土器	+		+						△	+		○	○		
		10	胎土に滑石を含む土器	+		+						○	△	◎	◎		+	
厚幌1遺跡	同、前期前葉	11	胎土に滑石を含む土器	△	-					+			△			+		
滝里38遺跡	同、前期後葉	12	シュブノツナイ式							+		◎				△		
学田三区1遺跡	同、中期	13	型式名なし	+						△	△	○	○			△		
三の山3遺跡	同、中期	14	型式名なし	+						△	+	◎	◎	◎				

凡 例

◎:極多量 ○:多量 △:中量 +:少量 -:微量 ?不確定

Qz:石英 Pl:斜長石 Am:角閃石 Cri:クリストバライト Tri:トリディマイト

Mc:雲母類 Chl:緑泥石 Sm:スメクタイト

Ant:アンチゴライト Chr:クリソタイル Liz:リザルダイト Tc:タルク

FP法蛍光X線分析

F P法蛍光X線分析の概要と測定条件は土器胎土分析(1)と同様のため省略する。

以下に分析結果を示す。

表3 FP法蛍光X線分析結果

遺跡名		厚真町 フチャラセナイ遺跡											
型式		円筒土器下層d式		土製品		フコッペ貝塚式		円筒土器下層c式		大麻V式		胎土に滑石を含む土器	
No.		No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10		
試料写真 (デイスク)	酸化物	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%
	SiO ₂	65.84	64.17	64.32	74.61	62.88	67.79	68.91	68.87	56.29	47.14	47.04	46.71
	TiO ₂	1.00	0.97	0.93	0.81	0.96	1.08	0.97	0.64	0.99	0.24	0.18	0.21
	Al ₂ O ₃	27.11	29.10	21.81	14.91	21.24	27.17	19.10	21.26	27.89	9.97	5.98	7.21
	Fe ₂ O ₃	9.13	4.19	6.21	2.71	5.70	6.47	2.90	3.43	8.05	11.33	4.95	11.77
	Cr ₂ O ₃												
	MnO	0.05	0.05	0.03	0.02	0.04	0.05	0.05	0.05	0.07	0.13	0.07	0.22
	MgO	1.15	2.08	1.29	2.24	2.22	1.31	2.33	1.90	1.44	2.58	37.65	27.54
	CaO	1.27	1.66	1.59	1.67	2.48	3.09	2.59	1.55	1.72	2.22	2.06	2.15
	Na ₂ O	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.03	0.02	0.03	0.02	0.01	0.02	0.01
	K ₂ O	0.74	0.58	0.74	1.79	1.24	1.09	1.28	1.29	1.32	0.80	2.62	2.53
	P ₂ O ₅	1.99	1.03	1.35	0.66	1.39	1.29	1.29	0.98	1.05	0.81	0.24	0.17
	SO ₂			0.04	0.02	0.02	0.03	0.03	0.04	0.05	0.98	0.41	0.81
	NO	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.01	0.02	0.03	0.28	0.22	0.30
ZnO	0.02	0.01	0.03	0.02	0.02	0.01	0.03	0.04	0.03	0.03	0.02	0.03	
ZrO ₂													

遺跡名		富良野市											
型式		芦別市 滝里38遺跡		学田三区1遺跡		三ノ山3遺跡		No.12		No.13		No.14	
No.		No.11	No.12	No.13	No.13	No.13	No.14	No.14	No.14	No.14	No.14	No.14	No.14
試料写真 (デイスク)	酸化物	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%	重量%	モル%
	SiO ₂	49.03	48.32	46.02	40.21	45.38	42.93	48.21	43.66	48.21	43.66	48.21	43.66
	TiO ₂	0.22	0.17	0.20	0.14	0.20	0.14	0.06	0.04	0.06	0.04	0.06	0.04
	Al ₂ O ₃	9.03	5.25	5.99	0.31	12.79	4.55	4.90	2.61	4.90	2.61	4.90	2.61
	Fe ₂ O ₃	10.68	3.96	7.84	2.58	12.79	4.55	7.51	2.56	7.51	2.56	7.51	2.56
	Cr ₂ O ₃	0.29	0.11	0.61	0.21	0.22	0.08	0.23	0.08	0.23	0.08	0.23	0.08
	MnO	0.09	0.08	0.07	0.05	0.28	0.22	0.23	0.17	0.23	0.17	0.23	0.17
	MgO	26.43	38.83	41.54	54.12	32.48	45.80	36.39	49.13	36.39	49.13	36.39	49.13
	CaO	0.32	0.34	0.15	0.14	1.14	1.15	1.14	0.14	1.14	0.14	1.14	0.14
	Na ₂ O	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05
	K ₂ O	2.14	2.05	2.01	2.73	2.51	2.51	1.09	0.96	2.51	1.09	0.96	2.51
	P ₂ O ₅	0.57	0.36	0.02	0.17	0.17	0.10	0.16	0.09	0.17	0.10	0.16	0.09
	SO ₂	1.05	0.44	0.80	0.22	0.98	0.39	0.67	0.26	0.98	0.39	0.67	0.26
	NO	0.13	0.11	0.18	0.13	0.41	0.31	0.39	0.28	0.41	0.31	0.39	0.28
ZnO			0.01	0.01	0.03	0.02	0.01	0.01	0.03	0.02	0.01	0.01	
ZrO ₂	0.01	0.00											

字：微量成分(検出限界)のため参考値として表記(Na₂OとMgOは軽元素のため、誤差が大き)
 分析方法：粉末試料をプレス(錠剤化)し、真空状態で測定。100%ノーマライズ。

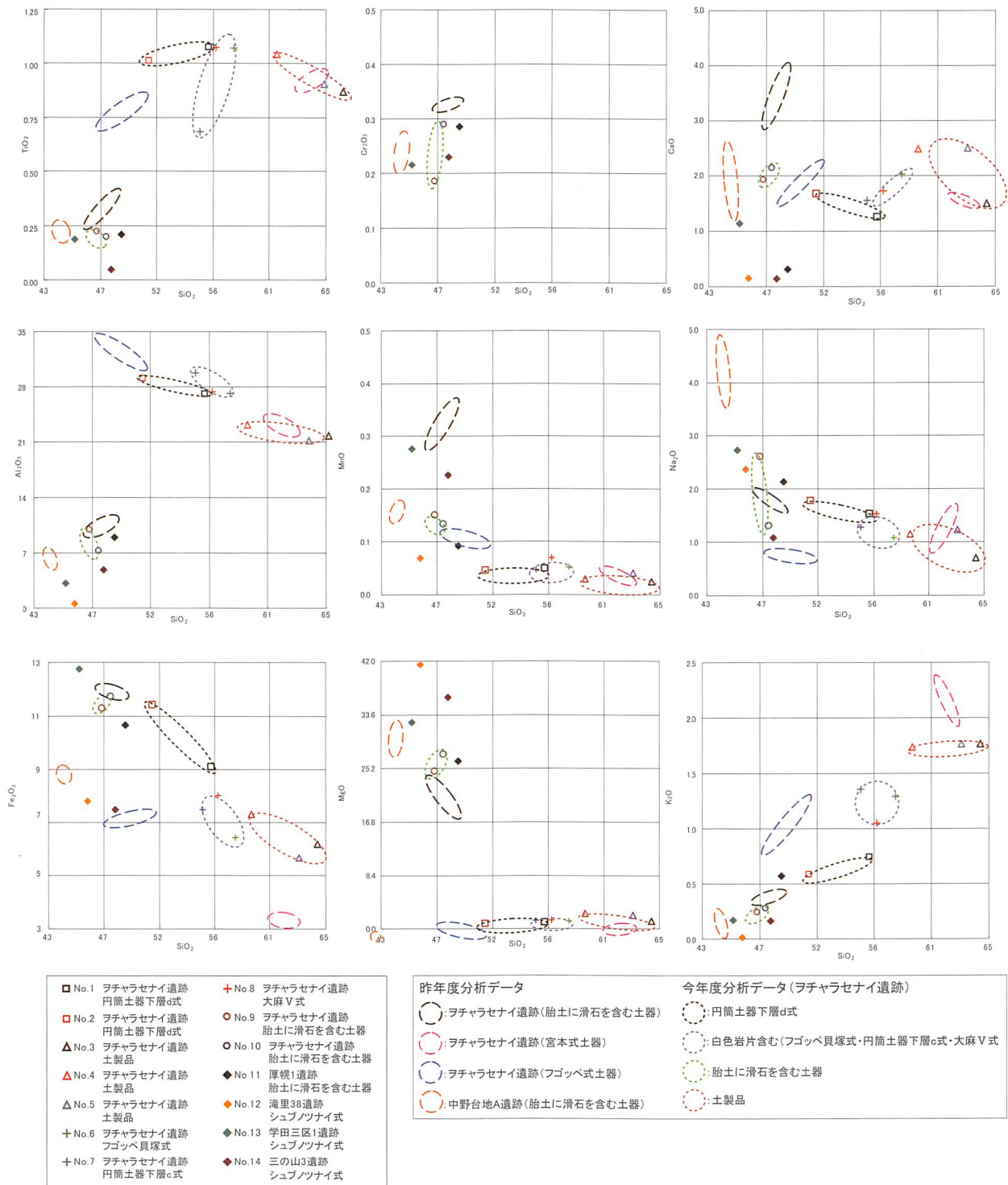


図4 酸化物-SiO₂図(重量%)

まとめと考察

1. 土器の構成物

土器の構成物に関しては、今回は偏光顕微鏡観察を行っていないので、蛇紋石、岩滑石や角閃石を含むなどX線粉末回折で検出された鉱物情報が主となる。したがって、岩片の種類や含有量が少ないが特徴的な鉱物については詳細不明である。

X線粉末回折の結果に基くと以下のことが言える。

①蛇紋岩（アンチゴライト、クリソタイル、リザルダイト）やタルクが含まれるのはヲチャラセナイ遺跡のNo. 9とNo. 10（タルクを含む土器：X線的にはタルクはNo. 10のみに確認）と厚幌1遺跡（No. 11）である。蛇紋石はまた、No. 12（滝里38遺跡）、No. 13（学田三区1遺跡）、No. 14（三の山3遺跡）のシュブノツナイ式と中期の土器にも含まれている。これらの多くは蛇紋石を主とするものの石英も検出されるが、滝里38遺跡の試料は石英が検出されず、蛇紋石（アンチゴライト）と蛇紋岩に含まれる緑泥石や磁鉄鉱しか確認されない。

②角閃石はヲチャラセナイ遺跡のNo. 9, No. 10に相対的に多く含まれる。蛇紋岩に密接な角閃石であれば、角閃岩の角閃石、アクチノ閃石岩のアクチノ閃石、あるいはトレモラ閃石などであろう（偏光顕微鏡で確認する必要）。また角閃石はNo. 2（円筒土器下層d式）、No. 3（土製品）、No. 6（フゴッペ貝塚式）にも含まれている。これらは石英も斜長石も含むので、火山岩中の角閃石を含めて検討する必要がある。

2. 土器の化学組成の特徴

化学分析の結果を各酸化物—SiO₂図にして示したが、これらから以下のことがわかる。

1) 高MgO—低SiO₂グループ（蛇紋岩類胎土の土器）

・平成23年度分析のヲチャラセナイ遺跡（胎土に滑石を含む土器）、中野台地A遺跡（胎土に滑石を含む土器）

- ・今回の分析のヲチャラセナイ遺跡（胎土に滑石を含む土器：No. 9, No. 10）
- ・今回の分析の厚幌1遺跡（胎土に滑石を含む。No. 11）
- ・今回の分析のシュブノツナイ式および縄文中期土器（No. 12, No. 13, No. 14）

これらはMgO—SiO₂図に示されるように高MgO（17～42%）で、低SiO₂（50%以下）である。また、これらはいずれも他の土器より、NiO（表参照）、Cr₂O₃に富み、Al₂O₃、TiO₂に乏しい。これらは蛇紋岩やタルクを使用した土器であることを反映している。一般に火山岩片やその碎屑物が入るとTiO₂が高くなるが、蛇紋岩片やタルクのTiO₂含有量は一般に非常に低い。蛇紋岩やタルクはまたAl₂O₃に乏しい。このグループは、これらの特徴を良く反映している。

2) フゴッペ貝塚式土器と大麻V式

「ヲチャラセナイ遺跡のフゴッペ貝塚式土器」および「大麻V式」は化学組成上共通性があり、以下の特徴をもつ。

SiO₂は平成23年度のもの（48～51%）に比べて今回はやや多い（55～57%）が、同じSiO₂に対しては他よりAl₂O₃、K₂Oに富み、逆にTiO₂、Fe₂O₃に乏しいという共通性がある。

3) 円筒式土器下層 d 式

ヲチャラセナイ遺跡の円筒土器下層 d 式は以下の特徴をもつ。

SiO₂が49～56%であるが、Fe₂O₃が9～11.5%とフゴッペ貝塚式(6～8%)に比べて多い。一方、K₂Oがフゴッペ貝塚式に比べて少ない(0.5～0.7%)。

4) 土製品

土製品と(ヲチャラセナイ遺跡の)宮本式土器はSiO₂が他の土器より多く(59～64%)、比較的Al₂O₃やNa₂Oに乏しいなどの特徴が類似している。しかし、宮本式土器は土製品よりFe₂O₃に乏しく逆にK₂Oに富むので、同じものとは言えない。

第6節 ヲチャラセナイ遺跡出土黒曜石の原産地分析 黒曜石の原産地分析(1)

(株)第四紀 地質研究所
井上 巖

1 実験条件

分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子製J S X-3 2 0 0）で行なった。

この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法（F P法）による自動定量計算システムが採用されており、 $6C \sim 92U$ までの元素分析ができ、ハイパワーX線源（最大30 k V、4mA）の採用で微量試料～最大290mm ϕ ×80mmHまでの大型試料の測定が可能である。小形試料では16試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルクF P法でおこなった。F P法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。

実験条件はバルクF P法（スタンダードレス方式）、分析雰囲気＝真空、X線管ターゲット素材＝Rh、加速電圧＝30 k V、管電流＝自動制御、分析時間＝200秒（有効分析時間）である。

分析対象元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, P, Rb, Sr, Y, Zrの14元素、分析値は黒曜石の含水量＝0と仮定し、酸化物の重量％を100％にノーマライズし、表示した。

地質学的には分析値の重量％は小数点以下2桁で表示することになっているが、微量元素のRb, Sr, Y, Zrは重量％では小数点以下3～4桁の微量となり、小数点以下2桁では0と表示される。ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下4桁を用いて化学分析結果を表示した。

主要元素と微量元素の酸化物濃度（重量％）でSiO₂-Al₂O₃, Fe₂O₃-TiO₂, K₂O-CaOの各相関図、Rb-Srは積分強度の相関図の4組の組み合わせで図を作成した。

2 分析結果

第1表化学分析表には分析結果、第2表原産地対比表には分析結果に基づいて原産地も記載してある。

- 1) 最も多く検出されたのは所山Ⅱタイプで14個中7個が該当し、全体の50％を占める。次いで上土幌系の両面調整石器で6個が該当し、赤石山Ⅲタイプは1個検出された。
- 2) 器種によって原産地が異なっているのが特徴である。

引用文献

- 井上 巖（2000）東北・北陸北部における原産地黒曜石の蛍光X線分析（XRF）北越考古学、第11号、23-38/
井上 巖（2001）テフラ中の火山ガラスの同定に関する一提言、軽石学雑誌、第7号 23-51.
井上 巖（2008）東北日本の原産地黒曜石 関東・中部・東海編
井上 巖（2008）東北日本の原産地黒曜石 東北・北陸編
井上 巖（2008）東北日本の原産地黒曜石 北海道編
井上 巖（2008）東北日本の原産地黒曜石写真集

第1表 黒曜石原産地分析試料一覽

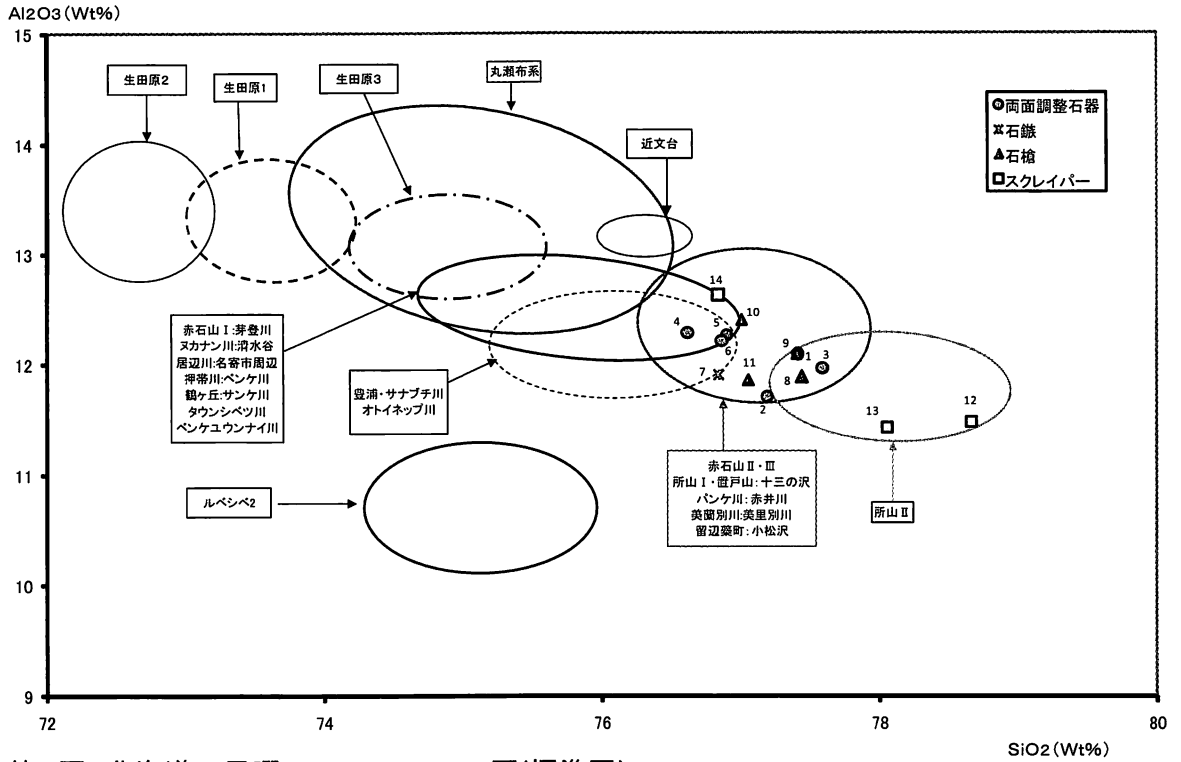
試料名	遺構名	種別	時期	挿図番号
1	VH-06	両面調整石器	縄文時代前期後半	図IV-12-9
2	VH-09.FTB-01	両面調整石器	縄文時代前期後半	図IV-22-4
3	VH-09	両面調整石器	縄文時代前期後半	図IV-22-5
4	VH-09.FTB-01	両面調整石器	縄文時代前期後半	図IV-22-8
5	VH-09.FTB-01	両面調整石器	縄文時代前期後半	図IV-22-7
6	VH-09	両面調整石器	縄文時代前期後半	図IV-22-6
7	AC-36	石鏃	縄文時代早期	図IV-83-1
8	VH-06	石槍	縄文時代前期後半	図IV-10-4
9	VH-06	石槍	縄文時代前期後半	図IV-10-2
10	VH-06	石槍	縄文時代前期後半	図IV-10-1
11	VH-06	石槍	縄文時代前期後半	図IV-10-3
12	VH-06	スクレイパー	縄文時代前期後半	図IV-10-8
13	VH-06	スクレイパー	縄文時代前期後半	図IV-10-9
14	VH-06	スクレイパー	縄文時代前期後半	図IV-10-7

第2表 化学分析表

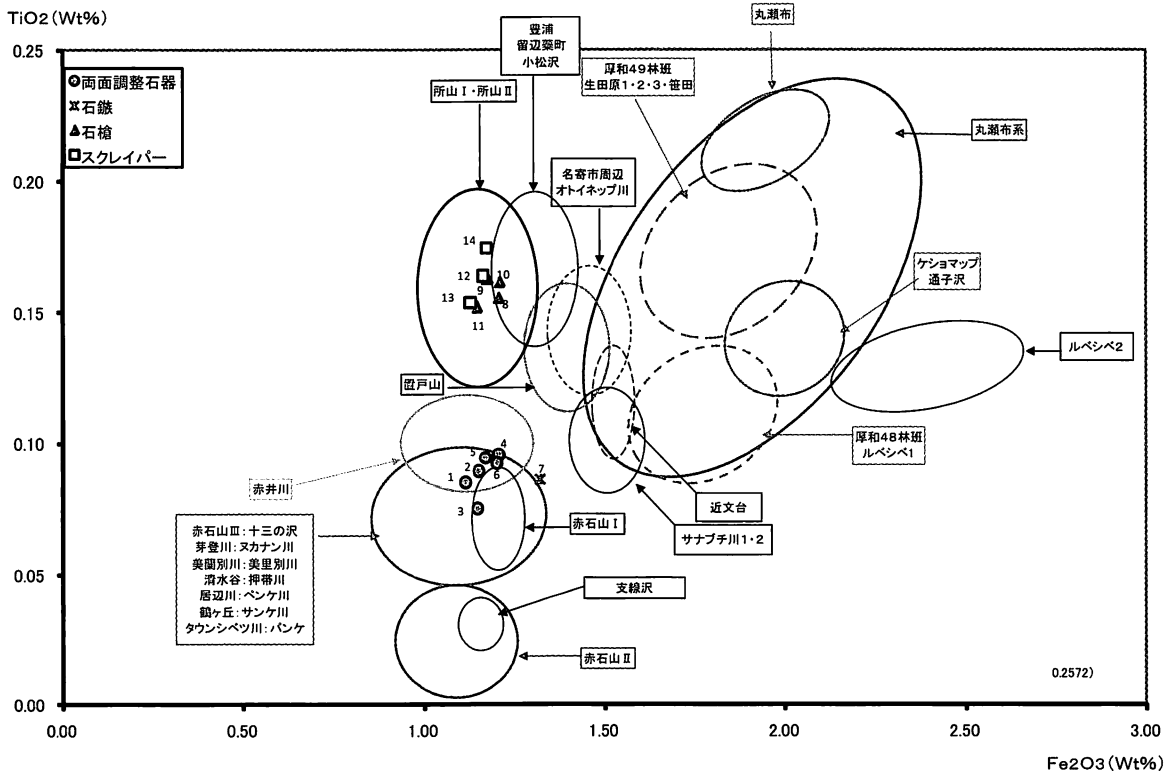
試料名	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	P2O5	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	Rb2O	SrO	Y2O3	ZrO2	Total	Rb(l)	Sr(l)	原産地
1	3.5859	0.0000	12.0773	77.4003	0.6598	4.2750	0.7096	0.0851	0.0509	1.1178	0.0144	0.0059	0.0074	0.0106	100.0000	1032	417	上土幌系
2	4.0813	0.0000	11.6920	77.1809	0.6416	4.3397	0.7225	0.0895	0.0634	1.1554	0.0130	0.0056	0.0045	0.0106	100.0000	917	384	上土幌系
3	3.6432	0.0000	11.9528	77.5746	0.6706	4.1367	0.6966	0.0752	0.0553	1.1520	0.0150	0.0065	0.0042	0.0172	99.9999	1046	445	上土幌系
4	3.9261	0.0000	12.2661	76.6062	0.6093	4.4397	0.7466	0.0955	0.0511	1.2110	0.0192	0.0057	0.0059	0.0177	100.0001	1304	381	上土幌系
5	3.9366	0.0000	12.2458	76.8892	0.6252	4.2133	0.7199	0.0944	0.0543	1.1751	0.0178	0.0061	0.0041	0.0182	100.0000	1248	421	上土幌系
6	3.7416	0.0000	12.1938	76.8498	0.6642	4.4247	0.7143	0.0925	0.0695	1.2059	0.0184	0.0094	0.0042	0.0115	99.9998	1276	637	上土幌系
7	3.9272	0.0000	11.8901	76.8277	0.6089	4.6721	0.5662	0.0862	0.0574	1.3248	0.0213	0.0039	0.0077	0.0064	99.9999	1392	250	赤石山Ⅲ
8	3.5327	0.0000	11.8724	77.4278	0.6251	4.2130	0.8707	0.1558	0.0462	1.2088	0.0194	0.0083	0.0031	0.0167	100.0000	1327	557	所山Ⅱ
9	3.3745	0.0000	12.0857	77.3919	0.6493	4.1633	0.8801	0.1629	0.0621	1.1794	0.0201	0.0133	0.0029	0.0145	100.0000	1386	901	所山Ⅱ
10	3.5437	0.0000	12.3942	76.9917	0.6080	4.1413	0.8659	0.1617	0.0451	1.2113	0.0145	0.0094	0.0047	0.0084	99.9999	996	631	所山Ⅱ
11	3.8612	0.0000	11.8504	77.0439	0.6397	4.2937	0.9021	0.1520	0.0589	1.1506	0.0167	0.0085	0.0054	0.0169	100.0000	1159	580	所山Ⅱ
12	2.9625	0.0000	11.4703	78.6433	0.6866	3.9491	0.8444	0.1637	0.0435	1.1680	0.0256	0.0084	0.0045	0.0302	100.0001	1534	493	所山Ⅱ
13	3.4390	0.0000	11.4159	78.0430	0.6740	4.1440	0.9019	0.1536	0.0488	1.1326	0.0186	0.0062	0.0091	0.0133	100.0000	1285	422	所山Ⅱ
14	3.4997	0.0000	12.6113	76.8262	0.6095	4.0854	0.9252	0.1742	0.0432	1.1782	0.0174	0.0082	0.0063	0.0153	100.0001	1154	533	所山Ⅱ

第3表 原産地対比表

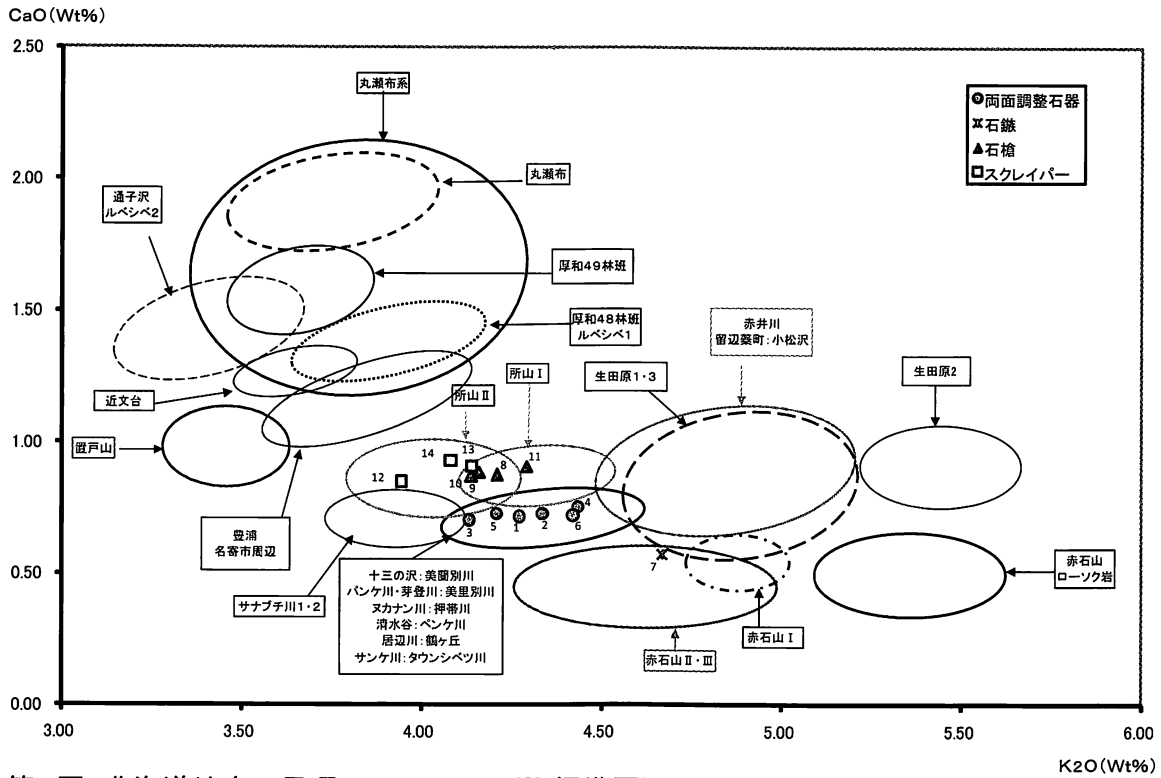
試料名	原産地	器種	時期
1	上土幌系	両面調整石器	縄文時代前期後半
2	上土幌系	両面調整石器	縄文時代前期後半
3	上土幌系	両面調整石器	縄文時代前期後半
4	上土幌系	両面調整石器	縄文時代前期後半
5	上土幌系	両面調整石器	縄文時代前期後半
6	上土幌系	両面調整石器	縄文時代前期後半
7	赤石山Ⅲ	石鏃	縄文時代早期
8	所山Ⅱ	石槍	縄文時代前期後半
9	所山Ⅱ	石槍	縄文時代前期後半
10	所山Ⅱ	石槍	縄文時代前期後半
11	所山Ⅱ	石槍	縄文時代前期後半
12	所山Ⅱ	スクレイパー	縄文時代前期後半
13	所山Ⅱ	スクレイパー	縄文時代前期後半
14	所山Ⅱ	スクレイパー	縄文時代前期後半



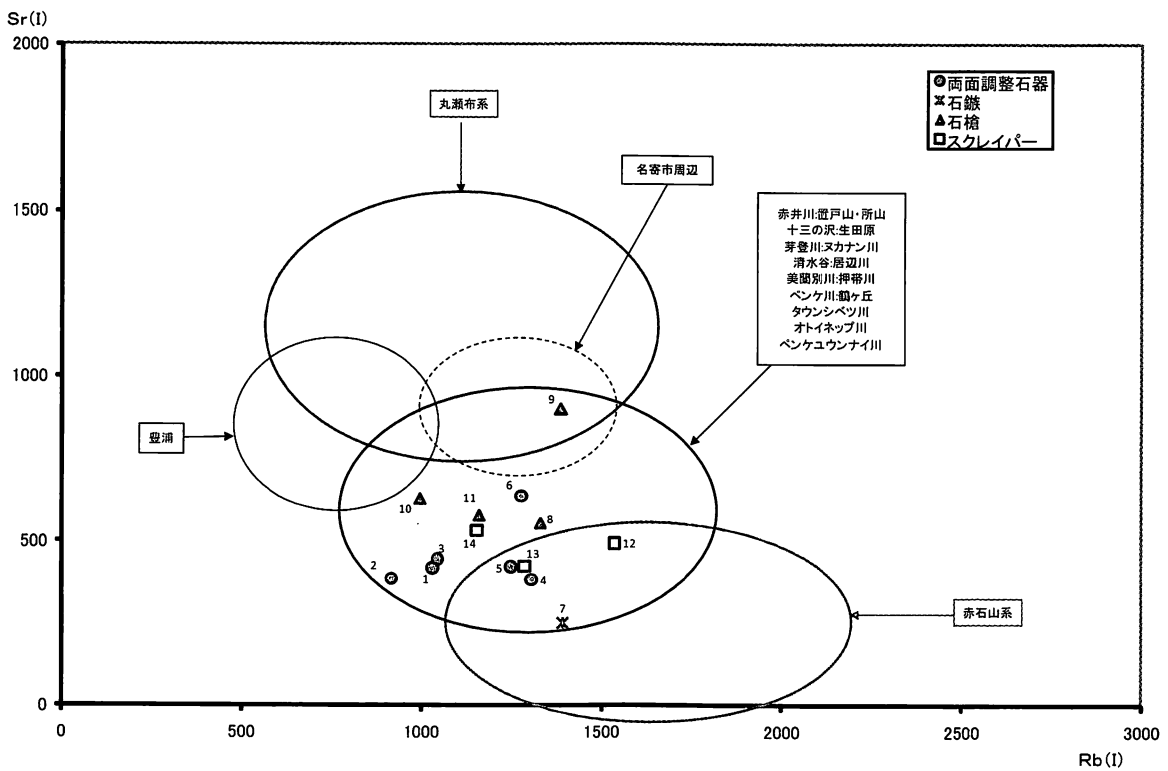
第1図 北海道の黒曜石SiO₂-Al₂O₃図(標準図)



第2図 北海道の黒曜石Fe₂O₃-TiO₂図(標準図)



第3図 北海道地方の黒曜石K2O-CaO図(標準図)



第4図 北海道地方の黒曜石Rb-Sr図(標準図)

黒曜石の原産地分析(2)

(株)第四紀 地質研究所

井上 巖

1 分析試料の調整と実験条件

1-1 実験条件

実験条件は黒曜石の原産地分析(1)と同様のため省略する。

分析にあたっては標準サンプルを分析し、キャリブレーションを行い、装置の正常さを保って行った。

1-2 分析結果

第1表 黒曜石原産地分析試料一覧

試料名	遺構名	種別	時期	挿図番号
1	V-32	両面調整石器	縄文時代前期後半	IV-85-67
2	W-31	両面調整石器	縄文時代前期後半	IV-86-74
3	U-34	両面調整石器	縄文時代前期後半	IV-86-75
4	V-33	石核	縄文時代前期後半	IV-88-133
	W-33			
5	X-32	ポイントB	縄文時代前期後半	IV-85-66
	X-33			
6	VH-04	ポイントB	縄文時代前期後半	IV-6-5
7	VH-04	ポイントB	縄文時代前期後半	IV-6-6
8	VH-04	スクレイパー	縄文時代前期後半	IV-6-13
9	VH-04	スクレイパー	縄文時代前期後半	IV-6-15
10	W-31	転礫(黒曜石)	縄文時代前期後半	V章6節 図-1-1
11	W-32	転礫(黒曜石)	縄文時代前期後半	V章6節 図-1-2
12	V-28	転礫(黒曜石)	縄文時代前期後半	V章6節 図-1-3
13	T-33	転礫(黒曜石)	縄文時代前期後半	V章6節 図-1-4

第2表 化学分析表

試料名	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	P2O5	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	Rb2O	SrO	Y2O3	ZrO2	Total	Rb(l)	Sr(l)	原産地
1	4.1062	0.0000	12.6722	75.7513	0.2541	4.5896	0.9857	0.1715	0.0545	1.3628	0.0216	0.0092	0.0066	0.0147	100.0000	1341	559	所山:被熱?
2	4.1077	0.0000	12.9414	75.6635	0.2614	4.5093	0.9439	0.1807	0.0364	1.3067	0.0176	0.0101	0.0077	0.0135	99.9999	1108	626	所山:被熱?
3	3.4241	0.0000	12.6988	76.3789	0.2875	4.6719	0.9811	0.1430	0.0503	1.3183	0.0176	0.0101	0.0028	0.0155	99.9999	1059	593	所山:被熱?
4	3.7295	0.0000	11.5367	72.1871	0.2316	7.5026	1.4677	0.2632	0.1114	2.8504	0.0536	0.0213	0.0109	0.0340	100.0000	1777	689	被熱不明
5	3.4474	0.0000	12.9381	75.6993	0.2752	5.5562	0.5618	0.0824	0.0595	1.3308	0.0204	0.0065	0.0081	0.0143	100.0000	1208	376	赤井川:被熱?
6	4.2814	0.0000	12.8072	75.8292	0.2094	4.3190	0.9134	0.1914	0.0587	1.3431	0.0142	0.0108	0.0036	0.0185	99.9999	826	617	所山:被熱?
7	3.8460	0.0000	13.1560	75.7457	0.3615	4.5321	0.8073	0.0752	0.0598	1.3691	0.0189	0.0096	0.0085	0.0103	100.0000	1126	562	赤井川:被熱?
8	3.8723	0.0000	12.6804	75.8851	0.3242	4.8676	0.8421	0.1006	0.0764	1.3086	0.0158	0.0076	0.0000	0.0192	99.9999	972	458	赤井川:被熱?
9	3.9730	0.0000	13.4227	75.1806	0.3876	4.6730	0.7932	0.0845	0.0723	1.3666	0.0221	0.0043	0.0000	0.0202	100.0001	1290	246	赤井川:被熱?
10	3.0155	0.0000	14.7203	72.6718	0.3659	5.4929	1.0875	0.1656	0.0975	2.2904	0.0451	0.0105	0.0176	0.0194	100.0000	1944	443	生田原2?
11	3.6140	0.0000	14.3767	72.3767	0.3395	5.6257	1.1039	0.1391	0.0830	2.2574	0.0441	0.0117	0.0079	0.0205	100.0002	1892	490	生田原2?
12	4.7037	0.0000	15.2812	70.2262	0.3966	5.6061	1.0485	0.1642	0.0862	2.3828	0.0461	0.0090	0.0169	0.0325	100.0000	1838	352	生田原2?
13	4.7881	0.0000	13.4541	72.2949	0.3572	5.7598	0.9902	0.1147	0.0854	2.0581	0.0370	0.0178	0.0113	0.0313	99.9999	1527	720	生田原2?

第3表 原産地対比表

試料名	原産地	器種	時代	遺跡
1	所山:被熱?	両面調整石器	縄文時代前期後半	ヲチャラセナイー1
2	所山:被熱?	両面調整石器	縄文時代前期後半	ヲチャラセナイー2
3	所山:被熱?	両面調整石器	縄文時代前期後半	ヲチャラセナイー3
4	被熱不明	石核	縄文時代前期後半	ヲチャラセナイー4
5	赤井川:被熱?	ポイントB	縄文時代前期後半	ヲチャラセナイー5
6	所山:被熱?	ポイントB	縄文時代前期後半	ヲチャラセナイー6
7	所山:被熱?	ポイントB	縄文時代前期後半	ヲチャラセナイー7
8	赤井川:被熱?	スクレイパー	縄文時代前期後半	ヲチャラセナイー8
9	赤井川:被熱?	スクレイパー	縄文時代前期後半	ヲチャラセナイー9
10	生田原2?	転礫(黒曜石)	縄文時代前期後半	ヲチャラセナイー10
11	生田原2?	転礫(黒曜石)	縄文時代前期後半	ヲチャラセナイー11
12	生田原2?	転礫(黒曜石)	縄文時代前期後半	ヲチャラセナイー12
13	生田原2?	転礫(黒曜石)	縄文時代前期後半	ヲチャラセナイー13

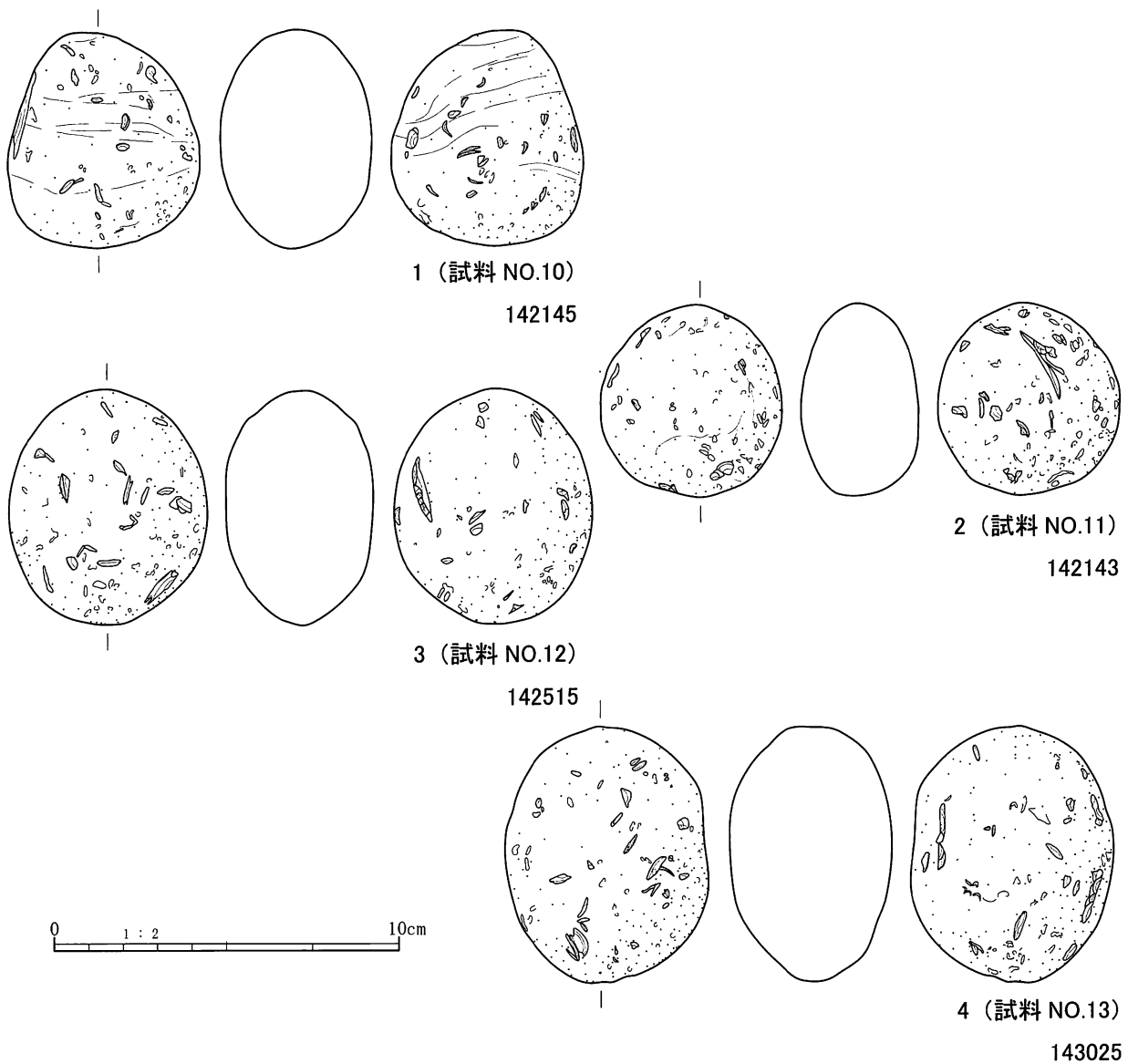
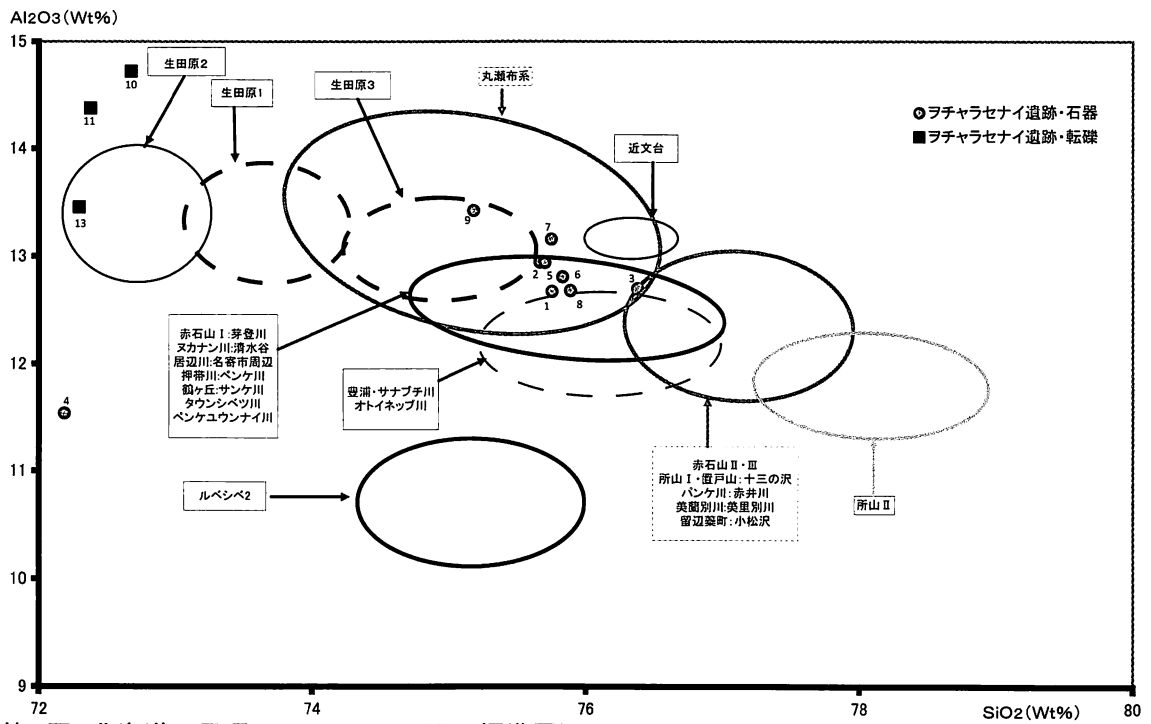
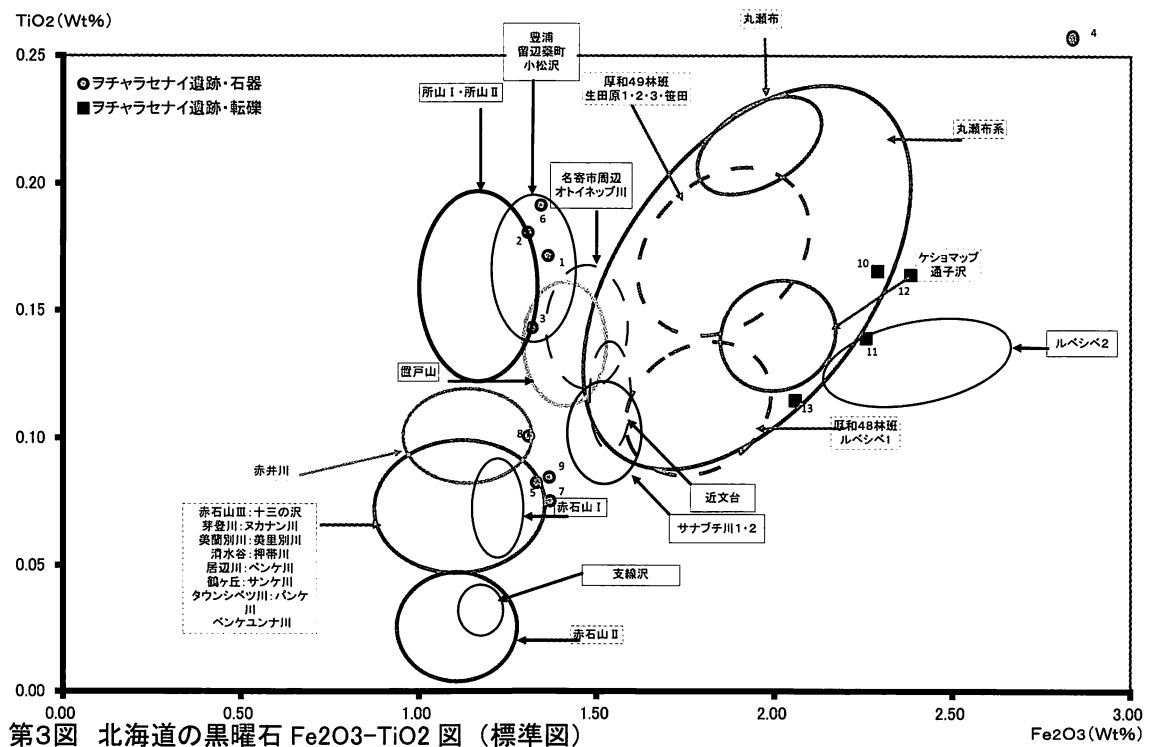


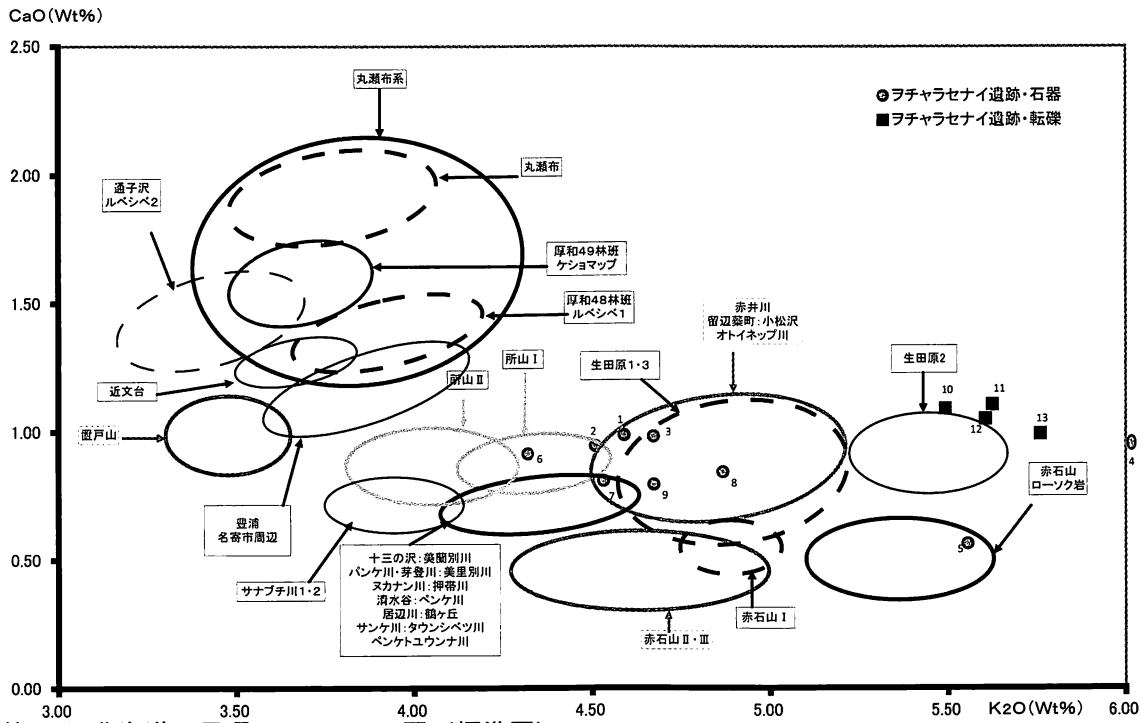
図-1 黒曜石原産地分析試料



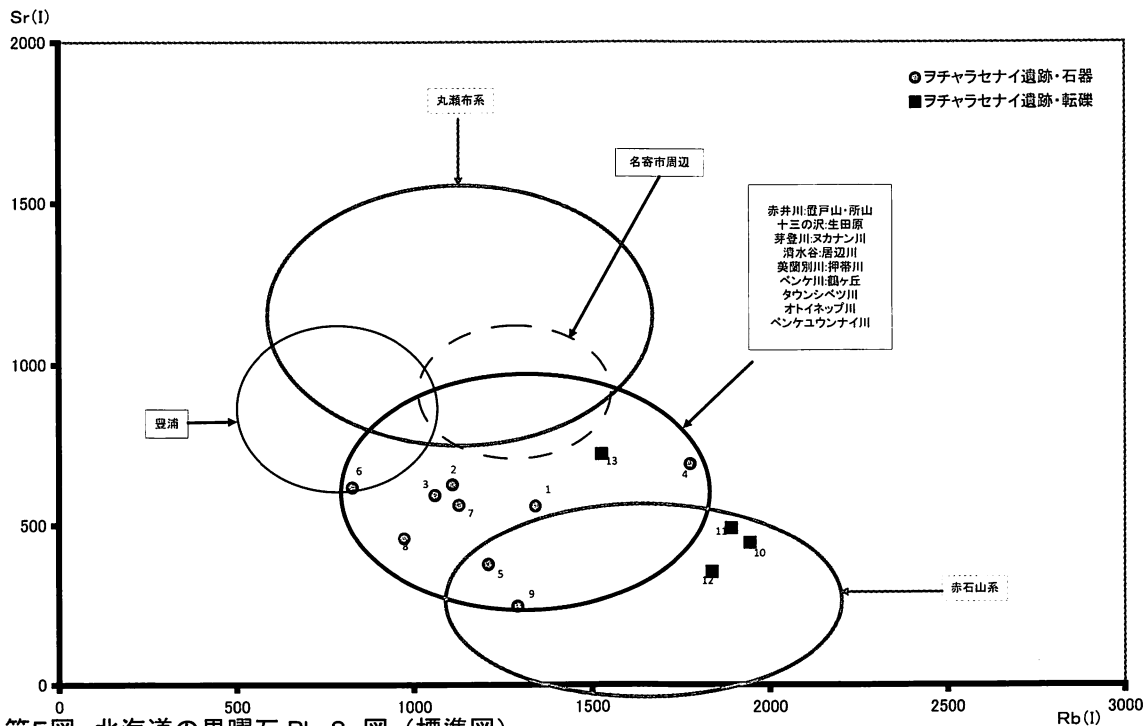
第2図 北海道の黒曜石 SiO_2 - Al_2O_3 図 (標準図)



第3図 北海道の黒曜石 Fe_2O_3 - TiO_2 図 (標準図)



第4図 北海道の黒曜石 K2O-CaO 図 (標準図)



第5図 北海道の黒曜石 Rh-Sr 図 (標準図)

第2表化学分析表には分析結果を、第3表原産地対比表には分析結果に基づいて原産地が記載してある。

- 1) 第2図～第5図を検討すると各試料ともに原産地の領域からずれており、被熱して領域がずれていることがわかる。
- 2) 第2表に示すように、赤井川：被熱？が4個、所山：被熱？が4個、生田原2？が4個、被熱不明が1個である。
- 3) 点礫は表面が風化しているようで、生田原2の組成に近く生田原2？とした。被熱不明としたものはK₂Oの値が7.5%と高く、被熱が強度である。

引用文献

井上 巖 (2008) 東北日本の原産地黒曜石 北海道編

第7節 ラチャラセナイ遺跡石材等同定 石材等同定(1)

アースサイエンス株式会社
加藤 孝 幸
米島 真 由 子

石材他の同定は肉眼鑑定によるが、ルーペおよび携帯型実体鏡(20×)を併用して行った。結果を以下に示す。

考察

以下に石材の同定結果に基づき、それぞれの由来について地質学的に言えることを示す。

(1) 珪化岩 (ジャスパー様岩)

珪化岩としたものは、石英を主体とする珪酸分(SiO_2)が元の岩石を著しく交代した岩石である。すなわち、何らかの源岩を基にしているが、具体的には詳細不明のものである。色調は白色、灰白色、黒灰色、赤色など。赤色(や緑色)のものはとくにジャスパーと呼ばれることがある。なお、赤色細粒のものは、ときに赤色チャートと酷似するものがあるので注意が必要である(チャートは変形組織や石英脈を伴う)。珪化岩は火山活動に伴う熱水変質作用を受けた岩石であるので、源岩は火山周辺に分布する凝灰質岩などのことが多いと考えられる。赤色は石英のほかに、微細な赤鉄鉱が生成しているためである。

このような珪化岩は北海道では石狩低地帯以西の中新世～鮮新世の火山岩類分布地域に散在して分布する。また、火山活動のある地域であれば、その他の道内各地にも存在する可能性があり、産地の特定は困難である。

(2) めのう

めのうは珪酸分(SiO_2)がオパール、クリストバル石、石英などとして、岩石の割れ目や晶洞に沈澱したものである。そのため、縞状を呈することが多い。源岩を交代したわけではない点が珪化岩とは異なる。めのうが生成するためには、珪酸分を含んだ熱水が通過する必要があるため、やはり過去に火山活動が起こった地域にめのうが分布する。やはり産地の特定は困難である。

(3) 珪質頁岩

硬質頁岩と区別するために用いる。地質学的に硬質頁岩と呼ばれている地質は渡島半島の八雲層やその相当層、あるいは道東などにも分布するが、これらの多くはパリパリと割れ易く、石器の石材としては、不適なものである。

石器の石材として使用されているものは、一般の硬質頁岩とは明らかに異なり、加工し易い等方均質である。したがって、これをとくに「珪質頁岩」と呼ぶ。珪質頁岩は少なくとも渡島半島では、中新世の八雲層やその相当層が貫入岩の接触変質を受けた場所のみ分布する。また、化学分析により、産地をある程度絞り込める可能性がある(森町教育委員会 編 2006)。

このような珪質頁岩は変形の進んでいない泥岩(すなわち、付加体以外の)に貫入岩がある場所という条件があれば生成するので、渡島半島と同様の作業が全道について必要であろう。

(4) 珪藻質泥岩

珪藻化石を多量に含む、おそらく新第三紀層の泥岩。孔隙が非常に多いため、比重が小さくかつ吸水性が著しい。

厚真町周辺で珪藻質泥岩を含むのは厚真川流域～鶴川町に分布する中新世の萌別層（追分層相当層）である。

(5) 蛇紋岩

蛇紋岩は東方の神居古潭帯に広く分布する。しかし、より西方の夕張市紅葉川から厚真川支流のショロマ川上流にかけての中新世の滝の上層分布域にも蛇紋岩の小岩体が分布する。

(6) 青色片岩

青色片岩としたものの多くは、藍閃石片岩で非常に高圧の条件で形成されたものである。これらの多くは神居古潭帯の蛇紋岩が地下深部から運んで来た捕獲ブロックとして産する。藍閃石片岩は幌加内地域にやや広く分布する。厚真町の近傍では夕張岳やそれから続く、占冠西部地域の蛇紋岩メランジュ中に産する。三石の蛇紋岩メランジュ中にも知られている。

(7) 緑色片岩

緑色片岩は幌加内～神居古潭峡谷地域や神居古潭帯蛇紋岩中の捕獲ブロックとして、あるいは東方のポロシリオフィオライト帯などに分布する。

(8) アオトラ

「アオトラ」は正式な岩石名でなく俗称である。玄武岩質の火山碎屑物が堆積してできた砂質一泥質の縞状互層で、変形作用は通常の片岩ほど強くない。緑色片岩相ないし青色片岩相の変成作用を受けている。青色は藍閃石でなくリーベック閃石によりものである。藍閃石ほどではないものの高圧変成岩で、神居古潭帯の糠平蛇紋岩の捕獲ブロックとして多量に見い出される（東・加藤 2012）。

(9) 玄武岩(緑色岩化), ドレライト(緑色岩化), チャート, 泥岩(変形), 酸性凝灰岩(変形)

これらは一般に付加体で強く変形作用を受けた岩石で、神居古潭帯やその周辺、イドンナップ帯に分布する。

(10) はんれい岩

はんれい岩の多くは日高変成帯やポロシリオフィオライト帯に分布するが、神居古潭帯にも少量認められる。

(11) 角閃岩

角閃岩は日高変成帯（褐色角閃石角閃岩）、ポロシリオフィオライト帯（緑色角閃石角閃岩）、神居古潭帯の幌加内～美英地域、蛇紋岩中の捕獲ブロックとして分布する。

(12) 片麻岩

砂泥質片麻岩と花崗片麻岩が認められる。これらは日高変成帯に分布する。

(13) 花崗岩・花崗閃緑岩

花崗岩類は日高変成帯に分布する。道内で、それ以外は石狩低地帯より西側、とくに渡島半島に分布する。

(14) ひん岩

ひん岩は安山岩質の完晶質岩で岩脈と考えられる。例えば様似町の海岸には大規模にひん岩脈が発達する。

(15) 玄武岩～ドレライト

緑色岩化の進んでいない玄武岩ないしドレライトは、岩脈として各地に見られる。例えば、紅葉山には古第三紀の幌内層に貫入するドレライト岩脈がある。

(16) 砂岩

非変形で付加体由来とは考えられない砂岩で、比較的硬質なものは白亜紀の蝦夷累層群のものから中新世の川端層のものを含めて、周辺に広く分布している。

引用・参考文献

- 東 豊土・加藤孝幸 2012 : 神居古潭帯・糠平岩体由来のロジン岩化蛇紋岩質テクトナイト. むかわ町立穂別博物館研究報告, 27, 7-16.
- 森町教育委員会 編 2006 : 「茅部郡 森町 埋蔵文化財調査報告書 鷲ノ木4 遺跡<分冊>自然科学等による諸分析 IV 石質鑑定 (アースサイエンス (株)).

表1 石材同定結果一覧表

委託 No.	個体名称	カラー図版	遺物名	遺物番号	遺構名/グリッド	分類	層位	同定結果	特徴	備考
1	-	-	石錐	64450	VGP-25	D	1	珧化岩	灰白色で、透明感がある。	
2	-	8-3	ナイフ・スクレイパー類	60860	AD-32	A2	Va	珧化岩	白色部と黒灰色部が斑状、フラクチャー中または鉱染状に水酸化鉄生成。黒色部は礫か？	
3	-	-	ナイフ・スクレイパー類	64698	AB-27	A1a	Vbl.	ジャスパー(赤色珧化岩)	原岩不明。	
4	-	-	ナイフ・スクレイパー類	67680	AC-36	A1a	Vbl.	珧化岩	灰白色。一部赤褐色。原岩は凝灰質岩。	
5	-	8-2	ナイフ・スクレイパー類	63911	VH-06	A1	4	めのう	黄白色。透明感があり、縞状の構造が認められる。	
6	-	-	ナイフ・スクレイパー類	60852	AE-32	A2	Va	珧化岩	暗灰色。孔隙に細粒な石英、黄鉄鉱が晶出。原岩は凝灰質岩。	
7	-	-	ナイフ・スクレイパー類	62264	AG-31	A1a	Va	珧質頁岩	黒色部。淡褐色部が認められ、一部で角礫状。	
8	-	-	ナイフ・スクレイパー類	67874	VH-10	A2	1	珧質頁岩(チョコレート色)	暗赤色。原岩は泥質岩か？	
9	-	-	ナイフ・スクレイパー類	62961	AC-30	A1	Vbl.	珧質頁岩	帯褐色	
10	-	-	ナイフ・スクレイパー類	67868	VH-09	A2	2	珧質頁岩	淡褐色	
11	-	-	ナイフ・スクレイパー類	63108	AD-30	A2	Vbl.	珧化岩	淡褐色～帯赤白色。石英、斜長石と考えられる結晶片が散在。原岩は凝灰質岩。	
12	-	-	ナイフ・スクレイパー類	61776	AG-25	A1	Va	珧質頁岩	灰褐色	
13	-	-	ナイフ・スクレイパー類	66828	AG-36	A1	VC	珧質頁岩	淡褐色	
14	-	-	ナイフ・スクレイパー類	65451	AL-25	A2	Vbl.	珧質頁岩	帯緑暗灰色	
15	-	-	ナイフ・スクレイパー類	68030	TP-82	A1	1	珧質頁岩	淡褐色	
16	-	-	ナイフ・スクレイパー類	65494	AF-28	C1a	Vbl.	珧質頁岩	褐色。黒色の細脈がネットワーク状に生成。	
17	-	-	ナイフ・スクレイパー類	AB-27-4-3	AB-27	A1	Vbl.	珧質頁岩	褐色。	
18	-	-	RF・UF	AI-32-3-7	AI-32	-	Vbl.	珧化岩	白色。透明感がある。	
19	-	-	RF・UF	67085	VH-08	-	VbU	珧質頁岩	帯緑灰色	
20	-	-	RF・UF	1	AD-26-4	-	Va	珧質泥岩	白色。水をよく吸う。軽い。	
21	-	-	石核	AD-30-1-65	AD-30	-	VbU	珧質頁岩	灰白色。中粒砂サイズの砂質部を斑状に含む。	
22	-	-	石斧	60966	AC-23	A	Va	青色片岩	暗灰色。片理あり。	
23	-	-	石斧	62435	AF-27	A	VbU	青色片岩	片理発達。暗青緑色の藍閃石を含む。	
24	-	-	石斧	63175	AH-34	A	Vbl.	緑色片岩	帯緑灰色。片理あり。	
25	-	-	石斧	64233	AH-32	A	Vbl.	青色片岩	暗灰～灰白色。暗青緑色の藍閃石を含む。	
26	5ST200	-	石斧	67931	AG-39	A	MO	青色片岩	暗灰～灰色。泥質。	
				64231	AD-32	A	VBL			
27	-	-	石斧	64233	AH-32	A	Vbl.	青色片岩	暗灰。暗青緑色の藍閃石あり。	
28	-	-	石斧	65173	AG-24	A	Vbl.	青色片岩	暗灰色。片理弱い。	
29	-	-	石斧	65308	AF-26	A	Vbl.	青色片岩	灰～暗灰色。暗青緑色の藍閃石あり。石英脈を含む。	
30	-	-	石斧	61743	AI-25	D	Va	青色片岩	帯緑灰色。片理あり。暗青緑色の藍閃石目立つ。	
31	-	-	たたき石	AD-34-3-37	AD-34	III B	Va	玄武岩(弱変質)	帯緑灰色。微細な斜長石が放射状に配列。一部褐色化する。	
32	-	-	たたき石	AK-33-4-40	AK-33	II B2	Vbl.	チャート(赤色)	赤褐～帯赤白色。やや角礫化したチャートで脈状、黒色の沈澱物を多く含む。	
33	-	-	たたき石	AF-25-4-482	AF-25	II B2	VbU	砂岩(非変形)	暗灰色。中粒砂岩。火山岩片多い？斜長石、角閃石などの結晶片あり。石英の細脈が数条入る。	
34	-	-	たたき石	AG-24-1-1084	AG-24	IV	Va	砂岩(非変形)	暗灰色。細粒砂岩。火山岩片が多い？斜長石、角閃石などの結晶片が認められる。	
35	-	-	たたき石	AI-31-3-63	AI-31	I B1	VC	珧質泥岩	黄褐色。軽く、水をよく吸う。黄褐色は、表面が風化した色で、元はより白い色であったと考えられる。	
36	-	-	たたき石	AL-25-2-112	AL-25	II A2	Vbl.	角閃岩(緑色角閃石)	帯緑灰色。細粒。原岩は玄武岩と考えられる。	
37	-	-	たたき石	61177	AI-27	II B2	Va	玄武岩(弱変質)	帯緑灰色。斜長石は白濁する。発泡痕などに沸石生成。	
38	-	-	たたき石	67753	AE-36	I A1	Vbl.	玄武岩(弱変質)	帯緑灰色。白色の脈がネットワーク状に生成。枕状溶岩の一部か？一部は角礫化。	
39	-	-	たたき石	AF-32-2-70	AF-32	II B3	Va	砂岩	褐色。斜長石、石英、黒雲母、石質岩片などを含み、凝灰質。	
40	-	-	たたき石	68441	AG-39	IV	KR	玄武岩(弱変質)	帯緑灰色。白色の石英脈あり。一部褐色化。枕状溶岩の一部か？	
41	-	-	たたき石	AH-24-1-688	AH-24	II B2	Va	花崗岩	帯赤白色。斜長石、カリ長石、石英、黒雲母、角閃石からなる。	
42	-	-	たたき石	AH-27-2-323	AH-27	IV	VbU	砂岩	褐色。斜長石、石英などを含み凝灰質。	
43	-	-	たたき石	62500	AC-32	I B1	Vbl.	砂岩	淡褐色。斜長石、石英、角閃石、黒雲母、石質岩片、軽石？を含み、凝灰質。	
44	-	8-9	たたき石	65734	AE-26	II B2	6	酸性凝灰岩	暗緑灰～淡緑灰色。緻密。一部角礫化。	
45	-	8-8	たたき石	AA-38-4-26	AA-38	II B2	Vbl.	はんれい岩	変形。アクチノ石生成。ポロシリ・オフィオライト帯由来の可能性が高い。	
46	-	8-7	たたき石	AI-28-3-206	AI-28	II A2	VbU	はんれい岩(変質)	帯緑灰色。かんらん石を含んでいたらしい。ポロシリ・オフィオライト帯由来の可能性。	

表1 石材同定結果一覧表(続き)

委託 No.	個体名称	カラー図版番号	遺物名	遺物番号	遺構名/グリッド	分類	層位	同定結果	特徴	備考
47	-	8-4	たたき石	61324	AH-32	I A3	VbU	緑色片岩(灰色片岩?)	帯緑灰色。片理発達。風化してやや褐色味を帯びる。	
48	-	-	たたき石	63360	AI-39	III B	VbU	泥岩(変形)	微細な鉱物脈を含み、その一部も変形。やや赤味を帯びた灰色。	
49	-	-	たたき石	AI-32-2-75	AI-32	II A2	KR	酸性凝灰岩(変形)	緑灰色。付加体の構成メンバーと考えられる。	
50	-	-	たたき石	64166	AB-28	II B2	VbL	チャート	灰色	
51	-	-	たたき石	AI-25-3-286	AI-25	II B2	VbL	チャート	灰色	
52	-	-	たたき石	62255	AF-31	IV	Va	玄武岩(緑色岩化)	直径数mm以下の発泡痕多し。緑泥石+白色鉱物が充填。	
53	-	-	たたき石	60901	AD-27	III B	Va	蛇紋岩	斜方輝石かんらん岩質で、蛇紋岩化完全。	
54	-	8-6	たたき石	63459	AJ-29	I B3	VbU	「アオトラ」	片理が確認できない。やや粗粒の緑色片岩相の変成岩。	
55	5ST262	8-5	たたき石	67483	AK-35	I B2	VbU	はんれい岩	アクチノ閃石が生成。ポロシリ・オフィオライト帯ないし蛇紋岩中のブロック?	
				VbL						
56	-	-	たたき石	68173	AJ-42	I A2	V C	中粒砂岩	非変形。蝦夷累帯層群由来の可能性。	
57	-	8-13	すり石	68284	AF-35	-	V C	花崗岩	有色鉱物は黒雲母。	被熱
58	-	-	すり石	62620	VH-06	D	VbU	角閃石安山岩	普通角閃石斑晶の長径最大5mm。	被熱
59	-	-	すり石	AH-30-4-49	AH-30	-	V C	ドレライト(緑色岩化)		
60	-	-	すり石	AH-33-4-49	AH-33	-	VbU	玄武岩(緑色岩化)		
61	-	8-10	すり石	67792	Z-36	E	VbL	ドレライト(緑色岩化)		
62	-	-	すり石	61346	AJ-33	-	VbU	玄武岩		
63	-	8-15	すり石	67645	Z-36	-	VbL	玄武岩(緑色岩化)		
64	-	8-14	すり石	65103	AF-23	-	VbL	花崗岩	灰白色(カリ長石は白い)。粗粒、黒雲母含む。	
65	-	8-18	すり石	65744	AH-24	-	VbL	花崗閃緑岩	灰白色、やや細粒。有色鉱物多い(角閃石、黒雲母)。	
66	-	8-16	すり石	63199	AJ-33	-	VbL	花崗岩	灰白色。有色鉱物は黒雲母。	
67	-	-	すり石	63161	AG-33	-	VbL	玄武岩(緑色岩化)	小さい斜長石斑晶目立つ。	
68	-	-	すり石	62772	AB-30	-	VbL	玄武岩	やや角礫化。	
69	-	-	すり石	68179	AG-39	-	MO	玄武岩(緑色岩化)		
70	-	-	すり石	68029	AB-36	-	VbL	玄武岩(緑色岩化)	輝石の斑晶が散在。	
71	-	-	すり石	64207	AH-38	B	VbL	ドレライト	オフィティック組織が発達。	
72	-	-	すり石	62052	VH-06	B	2	泥岩(変形)	黒色ち密。白色鉱物細脈多い。付加体由来と考えられる。	
73	-	-	すり石	61325	AH-32	-	VbU	はんれい岩	斜長石+輝石からなり、弱い流理が認められる。	
74	-	-	すり石	65555	AG-24	-	VbL	角閃岩	褐色角閃石角閃岩。目高変成帯由来の可能性。	
75	-	-	すり石	67699	AD-35	-	V C	はんれい岩	斜長石+輝石が主体。弱い流理あり。	
76	-	-	すり石	68032	AD-35	B	KR	ホルンフェルス	泥質	
77	-	-	すり石	67750	AD-35	-	VbL	はんれい岩	角閃岩化。剪断変形を受ける。	
78	-	-	すり石	AD-30-3-135	AD-30	E	VbL	はんれい岩		
79	-	8-17	すり石	67688	AG-35	-	VbU	花崗岩	有色鉱物は黒雲母。	
80	-	-	すり石	68370	AI-33	D	4	ひん岩	斜長石斑状。有色鉱物は角閃石?	
81	-	8-11	すり石	66775	AH-35	D	VbU	粗粒砂岩	非変形。粒子はチャート、黒色泥岩など。蝦夷累帯層群由来の可能性。	
82	-	8-12	すり石	65400	AH-25	D	VbU	中粒砂岩	非変形。石英長石質。	
83	-	-	すり石	63103	AD-32	-	VbL	はんれい岩	緑色に変質。剪断変形を受ける。ポロシリ・オフィオライト帯または蛇紋岩中のブロックか。	
84	-	-	すり石	67811	AC-36	-	KR	ドレライト	斜長石斑状。オフィティック組織。	
85	-	-	すり石	61086	AI-24	-	Va	ドレライト	暗灰色、やや細粒。斜長石+輝石などで、粒状結晶集合体。	
86	-	-	すり石	67968	AF-39	-	KR	片麻岩	砂質片麻岩	
87	-	-	すり石	67971	AE-38	-	VbL	片麻岩	花崗片麻岩	
88	-	-	すり石	68119	AJ-39	-	VbU	片麻岩	花崗片麻岩	
89	-	-	すり石	AD-28-4-131	AD-28	-	VbL	玄武岩	緑色岩化していない?	
90	5ST334	-	すり石	65169	AG-24	-	VbL	玄武岩(緑色岩化)	周囲は角礫化しており、ピロープレッチャ(枕状溶岩の破片の集り)の一部と考えられる。	
				63264	AE-27	-	VbU			
				65464	AK-27	-	D			
91	5ST349	-	すり石	AK-26-4-124	AK-26	-	VbL	ドレライト(緑色岩化)	周囲は角礫化しており、ピロープレッチャの一部と考えられる。	
				AB-26-2-81	AB-26	D	VbU	輝石安山岩	斑晶は斜長石+斜方輝石+単斜輝石(?)	
93	-	-	すり石	65778	AL-26	D	VbL	中粒砂岩	非変形。	
94	-	-	すり石	67485	AK-35	-	V C	花崗岩	有色鉱物は黒雲母。	
95	-	-	すり石	63596	AC-27	-	VbL	玄武岩(緑色岩化)		
96	-	-	すり石	65033	AJ-31	-	V C	はんれい岩	比較的細粒。	
97	-	8-19	石製品	62422	AD-27	-	VbU	滑石		
98	-	8-20	石製品	61110	AJ-25	-	Va	蛇紋岩	自形のスピネル含む。	
99	-	8-21	石製品	61109	AJ-25	-	Va	蛇紋岩	白色鉱物細脈あり。	
100	-	-	自然礫	66128	VGP-28	-	1	玄武岩	赤鉄鉱化し、かつ珪化作用を受けており、赤い。発泡目立つ。	

石材等同定(2)

アースサイエンス株式会社

加藤 孝幸

米島 真由子

1. 石材同定

石材の同定は肉眼、ルーペ、簡易実体鏡、マグネットを併用して行った。結果を表1に示す。

2. 考 察

以下に石材の同定結果に基づき、それぞれの由来について地質学的に言えることを示す。

(1) 珪化岩（ジャスパー様岩）

珪化岩としたものは、石英を主体とする珪酸分(SiO_2)が元の岩石を著しく交代した岩石である。すなわち、何らかの源岩を基にしているが、具体的には詳細不明のものである。色調は白色、灰白色、黒灰色、赤色など。赤色（や緑色）のものはとくにジャスパーと呼ばれることがある。なお、赤色細粒のものは、ときに赤色チャートと酷似するものがあるので注意が必要である（チャートは変形組織や石英脈を伴う）。珪化岩は火山活動に伴う熱水変質作用を受けた岩石であるので、源岩は火山周辺に分布する凝灰質岩などのことが多いと考えられる。赤色は石英のほか、微細な赤鉄鉱が生成しているためである。

このような珪化岩は北海道では石狩低地帯以西の中新世～鮮新世の火山岩類分布地域に散在して分布する。また、火山活動のある地域であれば、その他の道内各地にも存在する可能性があり、産地の特定は困難である。

(2) 珪質頁岩

硬質頁岩と区別するために用いる。地質学的に硬質頁岩と呼ばれている地質は渡島半島の八雲層やその相当層、あるいは道東などにも分布するが、これらの多くはパリパリと割れ易く、石器の石材としては、不適なものである。

石器の石材として使用されているものは、一般の硬質頁岩とは明らかに異なり、加工し易い等方均質である。したがって、これをとくに「珪質頁岩」と呼ぶ。珪質頁岩は少なくとも渡島半島では、中新世の八雲層やその相当層が貫入岩の接触変質を受けた場所にのみ分布する。また、化学分析により、産地をある程度絞り込める可能性がある（森町教育委員会 編 2006）。

このような珪質頁岩は変形の進んでいない泥岩（すなわち、付加体以外の）に貫入岩がある場所という条件があれば生成するので、渡島半島と同様の作業が全道について必要であろう。

(3) 珪藻質泥岩

珪藻化石を多量に含む、おそらく新第三紀層の泥岩。孔隙が非常に多いため、比重が小さくかつ吸水性が著しい。

厚真町周辺で珪藻質泥岩を含むのは厚真川流域～鶴川町に分布する中新世の萌別層（追分層相当層）である。

(4) 蛇紋岩および滑石

蛇紋岩は東方の神居古潭帯に広く分布する。しかし、より西方の夕張市紅葉山から厚真川支流のショロマ川上流にかけての中新世の滝の上層分布域にも蛇紋岩の小岩体が分布する。滑石（タルク）は蛇紋岩体に小規模に含まれる。

(5) 玄武岩（緑色岩化）、水冷破碎岩（緑色岩化）、ドレライト（緑色岩化）、チャート、泥岩（変形）

これらは一般に付加体で強く変形作用を受けた岩石で、神居古潭帯やその周辺、イドンナップ帯に分布する。

(6) はんれい岩・変はんれい岩

はんれい岩の多くは日高変成帯やポロシリオフィオライト帯に分布するが、神居古潭帯にも少量認められる。

(7) 花崗岩類

花崗岩類は日高変成帯に分布する。道内で、それ以外は石狩低地帯より西側、とくに渡島半島に分布する。なお、川端層などの礫岩中の礫として含まれていることもある。

(8) ひん岩～安山岩

ひん岩は安山岩質の完晶質岩で岩脈と考えられる。例えば様似町の海岸には大規模にひん岩脈が発達する。ひん岩や安山岩は川端層などの礫岩中の礫として含まれていることもある。

(9) 玄武岩～ドレライト

緑色岩化の進んでいない玄武岩ないしドレライトは、岩脈として各地に見られる。例えば、紅葉山には古第三紀の幌内層に貫入するドレライト岩脈がある。

(10) 砂岩

非変形で付加体由来とは考えられない砂岩で、比較的硬質なものは白亜紀の蝦夷累層群のものから中新世の川端層のものを含めて、周辺に広く分布している

(11) 凝灰岩～火山礫凝灰岩

これらは中新世の各地層中に、時々含まれる。

(12) デイサイト

デイサイトは石狩低地帯の西側に分布するが、川端層などの礫岩の礫としても含まれている。

引用文献

森町教育委員会 編 2006 : 「茅部郡 森町 埋蔵文化財調査報告書 鷲ノ木4遺跡〈分冊〉自然科学等による諸分析 IV 石質鑑定 (アースサイエンス (株))」

表1 石材同定結果一覧表

委託 No.	個体名称	カラー図版	遺物名	遺物番号	遺構名/グリッド	分類	層位	石材	記載	備考
1	-	-	ナイフ・スクレイパー類	142991	S-29	Ala	Vbl.	珩質頁岩	黒色～淡褐色部。原岩は黒色泥岩。	
2	-	-	ナイフ・スクレイパー類	142066	X-31	Ala	Va	珩質頁岩	黒色。原岩は黒色泥岩。	
3	-	-	ナイフ・スクレイパー類	145205	Y-28	Ala	Vc	珩化岩	褐色。原岩不明。	
4	-	-	ナイフ・スクレイパー類	141992	Y-29	Ala	Va	珩質頁岩	暗褐色。強く珩化作用を被る。	
5	-	-	ポイントB	143005	S-32	B1	Vbl.	凝灰岩	表面は黄色。内部は淡褐色。	
6	-	8-1	ポイントB	143726	Z-32	B1a	Vbl.	珩化岩	白色。原岩は凝灰岩。石英片を多く含む。	
7	VST 407	-	たたき石	143414 143415	AA-29	III B	Vbl.	玄武岩 (緑色岩化)	緑灰色。白色の炭酸塩鉱物脈が数条入る。	
8	-	-	すり石 (たたき併用)	143697	AA-34	-	Vbl.	はんれい岩	淡黄白色と黒色のゴマ塩状。	
9	-	-	すり石 (たたき併用)	141925	Q-29	-	VbU	安山岩	暗灰～淡褐色。斜長石(変質)斑晶が認められる。細粒な不透明鉱物が散在。	
10	-	-	たたき石	142126	Z-30	III B	VbU	玄武岩 (緑色岩化)	緑灰色(一部、褐色)。一部に破片状の組織が認められる。	
11	-	-	すり石 (たたき併用)	145657	Z-28	-	KR	珩質頁岩	黒色。原岩は、黒色泥岩。	
12	-	-	すり石 (たたき併用)	142299	Y-33	-	VbU	玄武岩 (～ドレライト)	淡黄灰色。斜長石の鉱物片、径10mm程度の珩化した凝灰岩礫を含む。	
13	-	-	たたき石	X-32-1-89	X-32	III B	Vc	玄武岩	暗褐色。発泡痕が目立つ。風化作用を被り、表面砂状。石基の斜長石の組織明瞭。	被熱
14	-	-	たたき石	142684	Y-31	III B	Vbl.	水冷破砕岩 (緑色岩化)	帯緑灰～暗緑灰色。玄武岩質の水冷破砕岩。急冷縁(変質したガラス)をもつ粒子が散在。	
15	-	-	たたき石	141367	VH-04	IV	2層	デイスайт	暗緑～黄緑色。緑れん石-石英の熱水変質作用を被る。	
16	-	8-22	石製品	145678	T-35	-	VbU	滑石	暗緑色。黒色。細粒なスピネル(磁鉄鉱化の可能性)の粒子が認められ、蛇紋岩起源と考えられる。	
17	-	-	礫	X-36-1-12	X-36	-	Vbl.	安山岩	灰～帯褐灰色。発泡痕が目立つ。斜長石斑晶は変質し、白濁+褐色化。	
18	-	-	礫	V-31-4-77	V-31	-	Vbl.	蛇紋岩	淡黄色。メッシュ組織発達。黒色脈が数条生成。軽い。磁石によくつく。	
19	-	-	礫	Z-34-3-98	Z-34	-	VbU	珩質頁岩	黒色。原岩は、黒色泥岩。	
20	-	-	礫	X-35-1-30	X-35	-	Va	蛇紋岩	黄褐色。一部、帯青灰色。メッシュ組織発達。黒色脈、白色脈が数条生成。磁石につく。	
21	-	-	礫	X-28-4-102	X-28	-	Vc	凝灰岩～ 火山礫凝灰岩	黄褐色。細粒な凝灰岩と火山礫凝灰岩の境界部。火山礫凝灰岩部には、軽石、斜長石、黒雲母を含む。	
22	-	-	礫	X-29-1-202	X-29	-	VbU	チャート	暗赤色。白色の石英脈が数条認められる。	
23	-	-	礫	T-29-4-53	T-29	-	Vbl.	砂岩	灰色。シルト～細粒砂の互層部。白色の石英脈が数条認められる。	
24	-	-	礫	W-30-4-72	W-30	-	Vc	酸性凝灰岩	帯青灰色。石英の細脈が多数生成。	
25	-	-	礫	AA-29-3-156	AA-29	-	Vbl.	デイスайт	帯緑灰色。斜長石(淡褐色)、石英(灰色)の斑晶が認められる。	
26	-	-	礫	AA-29-2-138	AA-29	-	Vbl.	花崗岩	淡黄色。細粒な花崗岩。一部はマサ化し、ボロボロ。石英、斜長石、	
27	-	-	礫	141900	VH-04	-	2層	水冷破砕岩 (緑色岩化)	淡緑灰色。白色の細脈が数条認められる。破片状の部分がある。	
28	-	-	礫	W-32-3-57	W-32	-	Vbl.	花崗岩	淡黄白色、灰色、黒色の斑状。石英、斜長石、角閃石。	被熱
29	-	-	礫	S-29-3-40	S-29	-	Vc	含礫砂岩	粗粒砂岩中に直径2～30mm+の泥岩角礫が散在。	
30	-	-	礫	U-28-1-3	U-28	-	Vbl.	珩質頁岩	吸水性著しい。黄褐色に風化。	
31	-	-	礫	W-32-3-67	W-32	-	VbU	蛇紋岩	メッシュ組織を示す。	
32	-	-	礫	U-28-1-1	U-28	-	Vbl.	凝灰岩	灰白色。弱珩化。	
33	-	-	礫	X-28-3-127	X-28	-	Vbl.	蛇紋岩	磁鉄鉱多し。	
34	-	-	礫	S-29-1-4	S-29	-	Vbl.	凝灰岩	粒子は粗粒砂サイズ、多量の軽石を含む。	
35	-	-	礫	X-28-1-43	X-28	-	Vbl.	珩化岩	凝灰岩が熱水変質を受けて石英や赤鉄鉱が生成したもの。ジャスパーの1種としても良い。	
36	-	-	礫	T-32-3-10	T-32	-	Vc	珩質頁岩	灰白色。吸水性著しい。	
37	-	-	礫	R-28-1-1	R-28	-	Vbl.	蛇紋岩	メッシュ組織の中心が溶解。	
38	-	-	礫	Z-33-4-152	Z-33	-	Vbl.	蛇紋岩		
39	-	-	礫	142442	VH-13	-	3層	角礫岩	砂岩の角礫岩で基質を石英が充填。	
40	-	-	礫	141743	VH-13	-	2層	蛇紋岩		
41	-	-	礫	W-32-3-85	W-32	-	Vbl.	変はんれい岩	かんらん石はんれい岩が変成作用を受けている。ボロシリオフィオライト帯などに由来か。	
42	-	-	礫	P-32-3-20	P-32	-	VbU	花崗岩	石英と長石からなり、黒雲母を含むらしいが、緑泥石化。表面赤色酸化。	
43	-	-	礫	AA-31-3-138	AA-31	-	Va	火山礫凝灰岩	安山岩質。岩片の粒径2cm未満。褐色風化し、ひび割れ。	
44	-	-	礫	V-31-2-27	V-31	-	Vbl.	玄武岩 (緑色岩化)		
45	-	-	礫	Z-28-1-51	Z-28	-		珩化岩	灰白色。凝灰岩起源。フラクチャー沿いにのう質沈着物。	
46	-	-	礫	U-30-3-31	U-30	-	VbU	蛇紋岩	黄褐色変質。	
47	-	-	礫	X-28-1-41	X-28	-	Vc	変はんれい岩	変形を受けている。	
48	-	-	礫	U-31-4-52	U-31	-	Vbl.	凝灰質細粒砂岩	灰色で亀甲状のクラック発達。やや珩化。	
49	-	-	礫	W-28-4-50	W-28	-	VbU	珩質頁岩	黒色。	
50	-	-	礫	V-33-4-63	V-33	-	VbU	珩質頁岩	褐色。凝灰質でやや砂質。基質の一部緑灰色の脈状に変質。	

第8節 ヲチャラセナイ遺跡出土コイル状鉄製品の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館 赤沼 英男

1 はじめに

北海道勇払郡厚真町に所在するヲチャラセナイ遺跡は、厚幌ダム建設に伴い平成20年度から平成24年度まで発掘調査が行われた遺跡である。平成20年度のアイヌ文化期の調査ではチャン跡の他、平地式住居跡5軒、建物跡1軒、土坑墓1基、獣骨集中3ヶ所等を検出しており、多数の金属製品が出土した¹⁾。チャン跡の調査では、内郭より平地式建物跡を検出している。この平地式建物跡の炉跡から得られた炭化種子等の放射性炭素年代測定によって当該遺構は13世紀に、平地式住居跡は12～14世紀頃に比定された¹⁾。平成21年度に行われたヲチャラセナイ遺跡出土鉄器の金属考古学的調査から、ア.遺跡内には複数の地域から鉄器がもたらされていた可能性が高いこと、イ.遺跡内では他地域からもたらされた鉄器を再処理し、日常生活に必要な鉄器を製作していた可能性が高いこと、の2点が明らかにされた。

ヲチャラセナイ遺跡の包含層から、装身具の一つと推定されるコイル状鉄製品が出土した。厚真町上幌内モイ遺跡の擦文文化期に伴う遺構および厚真町オニキシベ2遺跡の14世紀代と推定される遺構からも、装身具または装身具と推定される鉄器が見出されている(赤沼 2007)(赤沼 2012)。ヲチャラセナイ遺跡包含層出土装身具の金属考古学的調査の結果、左記試料の地金の組成はこれまでに調査した装身具の地金とは大きく異なることが判明した。このたび調査したコイル状鉄製品とはほぼ同じ組成の地金は、厚真町上幌内モイ遺跡の擦文文化期に比定される遺構から出土した鉄器の中にもみられたが、厚真町に所在する中世アイヌ文化期の遺構出土鉄器においては確認することができなかった。一連の金属考古学的調査結果に基づけば、このたび調査した包含層出土コイル状鉄製品は擦文文化期に、遺跡内またはその周辺にもたらされた鉄器または原料鉄(鉄器を製作するための素材)を処理して製作された試料の可能性が高いものと推定された。以下に金属考古学的調査結果を報告する。

2 調査資料および調査方法

2-1 調査した鉄器

調査資料は包含層から出土したNo.1コイル状鉄製品である(図1a₁、表1)。その形状から装身具として使用されたものと推定されるが、包含層からの出土のため、時期の特定は出土層位によるものとされた¹⁾。

2-2 調査試料の抽出

調査試料の抽出は、岩手県立博物館で実施された保存処理の過程で行われた。保存処理に先立ち撮影されたX線透過写真の読映結果に基づき、他の部位に比べ残存状況が良好と判断された部位(図図1a₁に示すSa₁)から、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリルを使い0.2～0.3gの試料を抽出した。抽出した試料をさらに2分し大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。

2-3 調査方法

組織観察用試料はエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、地金に混在する非金属介在物をエレクトロン・プローブ・マイクロナライザー(EPMA: JXA-8230)で分析した。

化学成分分析用試料については表面に付着する土砂、錆をハンドドリルで丹念に削り落とし、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。このようにして得られた試料を 130℃で 2 時間以上乾かしメノー乳鉢で粉碎した後、テフロン分解容器に秤量し、塩酸、硝酸、およびフッ化水素酸を使って溶解した。溶液を蒸留水で定溶とし、全鉄(T. Fe)、銅(Cu)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)、マンガン(Mn)、リン(P)、錫(Sn)、アンチモン(Sb)、ヒ素(As)、モリブデン(Mo)、イオウ(S)、チタン(Ti)、ケイ素(Si)、カルシウム(Ca)、ジルコン(Zr)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)、およびバナジウム(V)の 18 元素を、高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP-AES 法)で分析した。

3 調査結果

3-1 抽出した試料のマクロおよびマイクロ組織

No. 1Sa₁ から抽出した試料のマクロエッチング組織(図 1b₁)はその全域が錆化した組織によって構成されていて、いたるところに亀裂や空隙がみられた。マクロ組織領域(Reg. 1)内部には灰色を呈する粒状領域(Wus)、やや暗灰色を呈する角状領域(Tmag)、および暗灰色領域(Fa)からなる微細な非金属介在物が観察された(図 1c_{1,2})。EPMA による状態分析(図 1c₃)および含有される元素濃度分布の複合グレーマップ(図 1c₄)によって、領域 Wus はウスタイトと判定された。一方、領域 Tmag および領域 Fa は EPMA による定量分析によってそれぞれチタノマグネタイト、鉄かんらん石とみなすことができた(表 2)。なお、抽出した試料は錆化が著しく、錆化前の地金組織を推定できる領域を見出すことはできなかった。

3-2 鋼製鉄器から抽出した試料の化学組成

No. 1Sa₁ の T. Fe は 60.82mass%で、相当に錆化が進んだ試料が分析された。3-1 に述べる組織観察結果と整合する分析結果である(表 3)。Cu および Ni はそれぞれ 0.005mass%、Co は 0.029mass%含有されていた。P は 0.08mass%、Sn、Sb、As、Mo、および S はいずれも 0.02mass%以下で、化学組成上の顕著な特徴はみられなかった。ヲチャラセナイ遺跡において Cu、Ni、および Co 三成分が埋蔵環境下から富化される可能性がきわめて乏しいことをふまえると(赤沼 2013)、No. 1Sa₁ から検出された上記三成分のほとんどは製作時に使用された地金そのものに含有されていた可能性が高い。

4 考察

4-1 組織観察結果に基づく調査鉄器の分類

鉄器製作の素材となる鉄は炭素量によって銑鉄と鋼に分類される。現代の金属工学における区分に従えば、炭素量 2mass%未満の鉄を鋼、炭素量 2mass%以上の鉄を銑鉄という(日本鉄鋼協会編 1981)。生産方法、生産設備、生産道具、および生産に使用された素材などが異なる現代の分類基準を直ちに、前近代の資料に当てはめることはできない。本稿が対象とする資料の場合、当時の設備

または道具類で溶融できた鉄を銑鉄、溶融できず加熱・鍛打して加工・整形した鉄を鋼と扱ったと推定される。

調査したコイル状鉄器にはウスタイト、チタノマグネタイト、および鉄かんらん石が混在した非金属介在物が観察された。鋼製鉄器であるが、鑄化前の地金の組織を推定できる領域が見出されなかったため、炭素量の推定は困難であった。複雑な器形をしていることから、製作に使用された素材は加工が容易な鋼で、その炭素量は低レベルであったと推定される。

4-2 微量元素組成比に基づく調査資料の分類

鋼製鉄器の素材として使用された鋼は、製錬をはじめとする複数の操作を経て製造される。出発物質として同一の製鉄原料が使用されたとしても、製造方法や製造条件に応じ、最終的に得られる鋼の組成にはばらつきが生じる。従って、金属考古学的調査結果、とりわけ抽出した試料の化学組成や非金属介在物組成を単純に比較するという解析方法では、実態を反映した資料の組成分類結果を得ることは難しい。

鑄化が進んだ試料を調査対象とする場合、埋蔵環境下からの富化についても吟味する必要がある。3-2 で述べたとおり、Cu、Ni、および Co の三成分については埋蔵環境下からの富化の影響が乏しい。上記三成分は鉄よりも鑄にくい金属のため、一度メタルに取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまると推定される²⁾。従って、合金添加処理が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に係わらず製鉄原料の組成比に近似する²⁾。

図 2 は No. 1 に含有される Cu、Ni、および Co 三成分比(表 3 右欄)、すなわち $\{(mass\%Co)/(mass\%Ni) \text{ と } (mass\%Cu)/(mass\%Ni)\}$ および $\{(mass\%Ni)/(mass\%Co) \text{ と } (mass\%Cu)/(mass\%Co)\}$ を求めプロットした図である。なお、図 2 にはこれまでの発掘調査で検出された厚真町上幌内モイ遺跡の擦文文化期の遺構から出土した装身具(Rf1=コイル状鉄製品、Rf2=鎖型製品、Rf3=環状製品)および刀子(Rf6)、厚真町オニキシベ 2 遺跡から出土した装身具(Rf4・5=腕輪)についてもプロットした。図 2 では非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出された試料を黒丸(●)、鉄チタン酸化物が見出されなかった試料を白丸(○)、非金属介在物が見出されなかった試料を白三角(△)で示してある。

図 2a₁ および b₁ において、Rf1Sa₁、Rf2Sa₁、Rf3Sa_{1.2}、Rf4Sa₁、および Rf5Sa_{2.3} はほぼまとまって領域 A 内に分布する。一方、No. 1Sa₁ は図 2a₁ では図の右上に、図 2b₁ では図の左下に上幌内モイ遺跡の擦文文化期の遺構から出土した刀子(Rf6)とほぼ同じ位置に分布する(図 2)。厚真町所在遺跡のアイヌ文化期に比定される遺構の中から、No. 1Sa₁ とほぼ同じ組成の鉄器が確認されていないことをふまえると、No. 1 は擦文文化期の資料で、同時代に遺跡内もしくはその周辺に運び込まれた鉄器を再利用して製作された可能性がある。

図 3 は図 2 領域 A に分布する 7 試料(Rf1Sa₁、Rf2Sa₁、Rf3Sa_{1.2}、Rf4Sa₁、および Rf5Sa_{2.3})に含有される Ni と Co、Ni と Cu の相関関係を示したものである。Ni と Co の相関係数は 0.98 以上、Ni と Cu の相関は 0.92 以上で、この結果は領域 A に分布する試料の素材となった地金がほぼ同じ組成であった可能性が高いことを示している。表 1 から明らかなように、Rf1~Rf3 は擦文文化期、Rf4・5 はアイヌ文化期に比定されている。考古学による時代比定と図 3 の結果を加味すると、以下の 3 点を指摘することができる。

① 厚真町に擦文文化期からアイヌ文化期の長期に渡り同一地域から、鋼製鉄器を製作するため

の鉄素材(原料鉄)または利用目的を果たした鉄器がもたらされた。

② 図2の領域Aに分布する鉄器はすべて擦文文化期に製作されたもので、Rf4・5は中世アイヌ文化期に伝世した資料である。

③ Rf4・5は、中世アイヌ文化期に伝世した擦文文化期の鉄器を使って製作された。

No.1の組成が上幌内モイ遺跡の擦文文化期に比定される遺構から出土した刀子とほぼ同じであり、厚真町に分布する中世アイヌ文化期に比定される鉄器の中にNo.1とほぼ同じ組成の鉄器が見出されていないという事実を考え合わせると、筆者は②の可能性について検討する必要があると考えるが、この点については今後の課題としたい。

5 まとめ

ヲチャラセナイ遺跡出土コイル状鉄製品の金属考古学的調査結果について述べてきた。これまでの調査結果を整理すると以下のとおりとなる。

- ① 装身具と推定されるコイル状鉄製品の素材となった地金とほぼ同じ組成の地金を有する鉄器は、厚真町上幌内モイ遺跡の擦文文化期の遺構から出土した鉄器中に確認できたが、厚真町内に所在する中世アイヌ文化期に伴う鉄器においては確認することはできなかった。
- ② 厚真町上幌内モイ遺跡の擦文文化期から出土した装身具とオニキシベ2遺跡の14世紀の遺構から出土した装身具の素材となった地金は、ほぼ同じであった。
- ③ ①および②の結果をふまえると、厚真町に同一地域から擦文文化期から中世アイヌ文化期の長期に渡り鋼製鉄器を製作するための原料鉄または利用目的を果たした鉄器がもたらされた、または擦文文化期に厚真町にもたらされた製品鉄器または原料鉄を素材として製作された装身具が中世アイヌ文化期に伝世した、という見方がとれる。この点については、類似資料の金属考古学的調査結果の蓄積を図り検討する必要がある。

注

- 1) 厚真町教育委員会・奈良智法氏からのご教授による。
- 2) 早稲田大学理工学術院基礎理工学部・伊藤公久教授からのご教授による。

引用・参考文献

- 赤沼英男 2009 『東北地方北部および北海道出土刀剣類の形態と組成からみた日本刀成立過程』岩手県立博物館
- 赤沼英男 2007 「厚真町上幌内モイ遺跡出土鉄器の金属考古学的調査結果」『上幌内モイ遺跡(2)』厚真町教育委員会、pp. 326~349
- 赤沼英男 2012 「厚真町オニキシベ2遺跡出土鉄器の金属考古学的調査結果—アイヌ文化成立過程における鉄器地金の組成変化—」『厚真町オニキシベ2遺跡』厚真町教育委員会、pp. 379-433
- 赤沼英男 2013 「ヲチャラセナイ遺跡出土金属器の金属考古学的調査結果—中世アイヌ文化期における金属器の再利用—」『ヲチャラセナイチャシ跡・ヲチャラセナイ遺跡』厚真町教育委員会、pp. 93-124
- 日本鉄鋼協会編 1981 『鉄鋼便覧』丸善株式会社

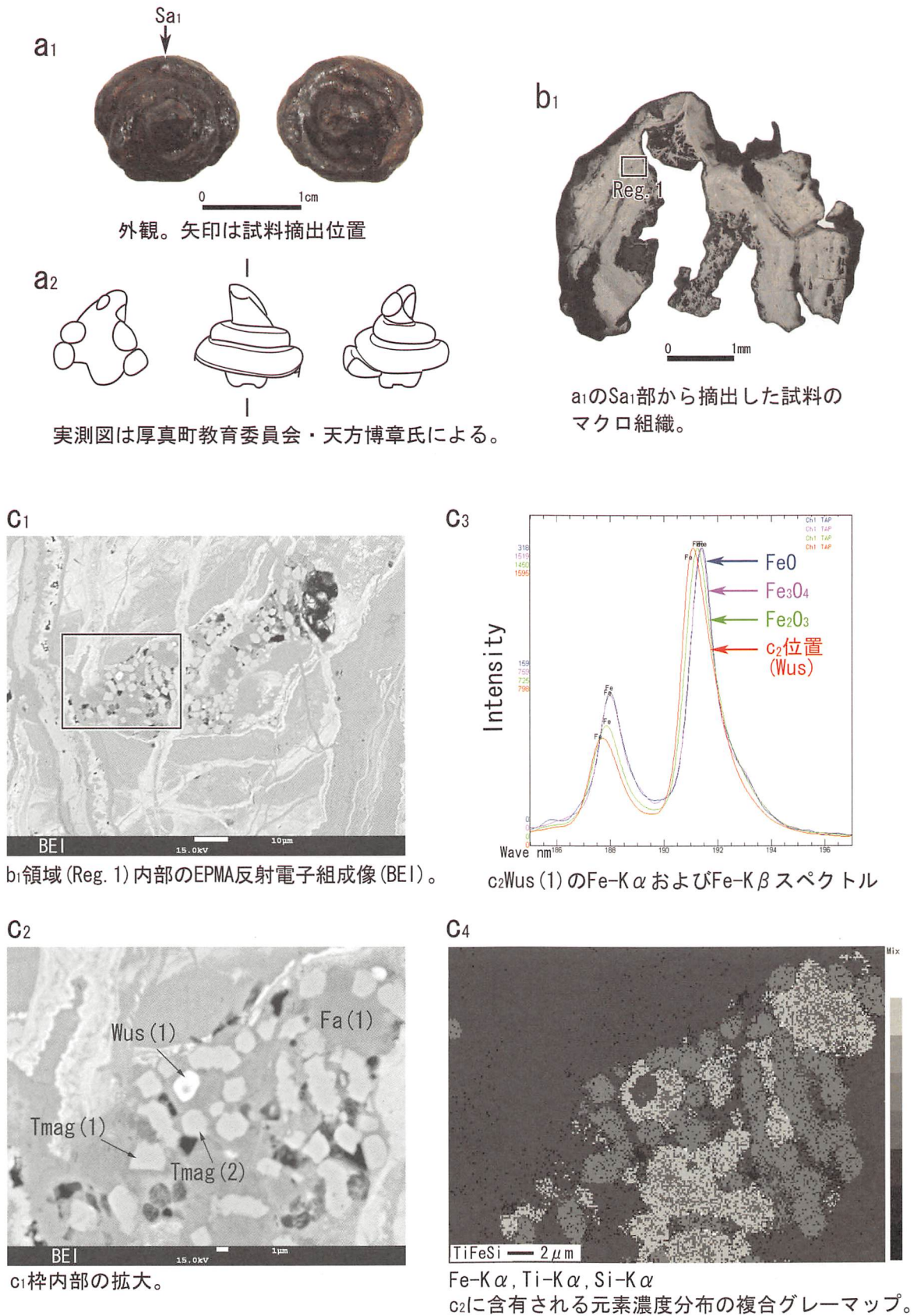


図1 No. 1 から摘出した試料の組織観察結果

No. は表 1 に対応。Wus= ウスタイト、Tmag= チタノマグネタイト、Fa= 鉄かんら石。

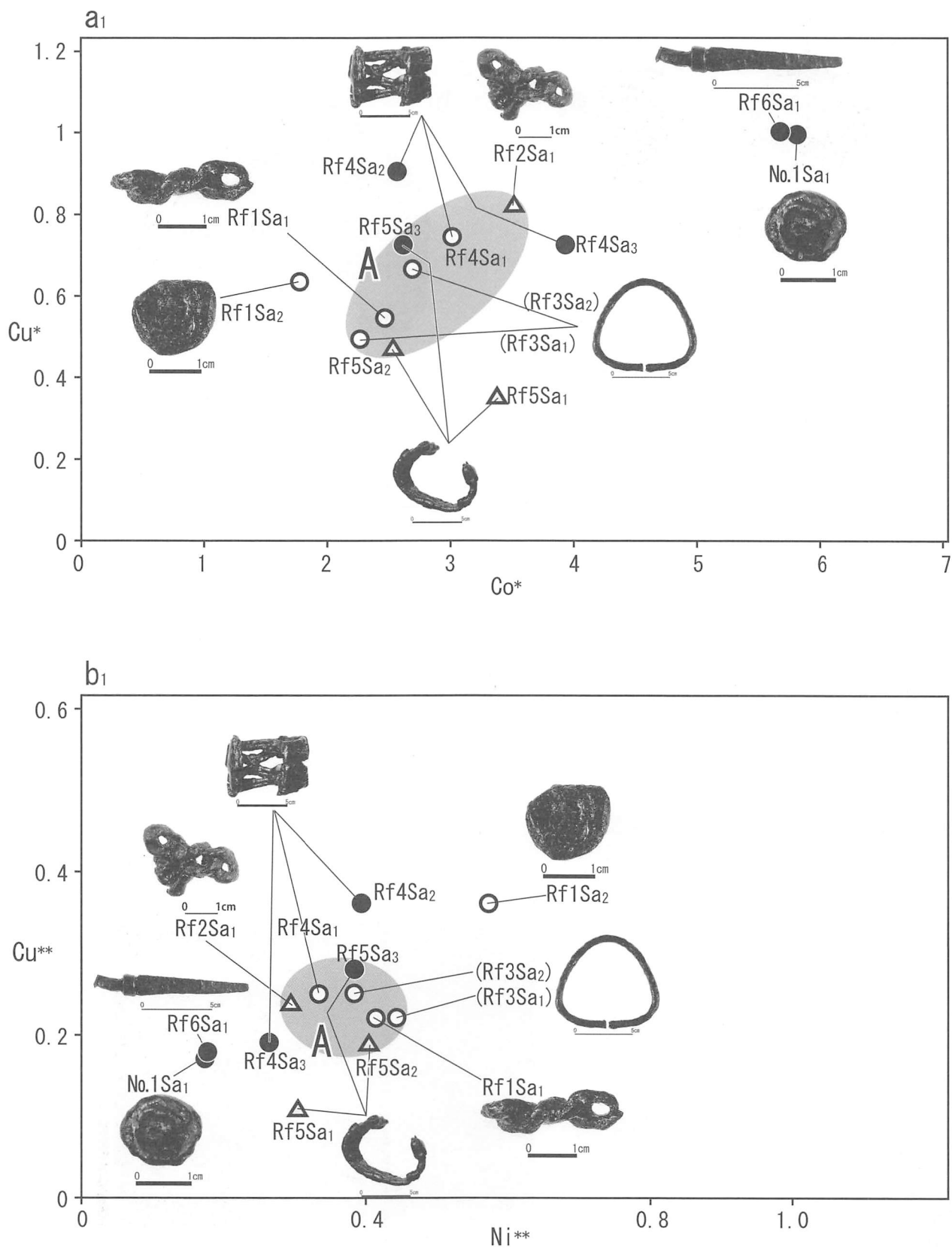


図2 抽出した試料に含有される Cu・Ni・Co 三成分比

No. は表1に対応。白丸 (○) は非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出されなかった試料、黒丸 (●) は非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出された試料、白三角 (△) は非金属介在物が見出されなかった試料。
 $Co^* = (mass\%Co) / (mass\%Ni)$ 、 $Cu^* = (mass\%Cu) / (mass\%Ni)$ 、 $Ni^{**} = (mass\%Ni) / (mass\%Co)$ 、 $Cu^{**} = (mass\%Cu) / (mass\%Co)$ 。

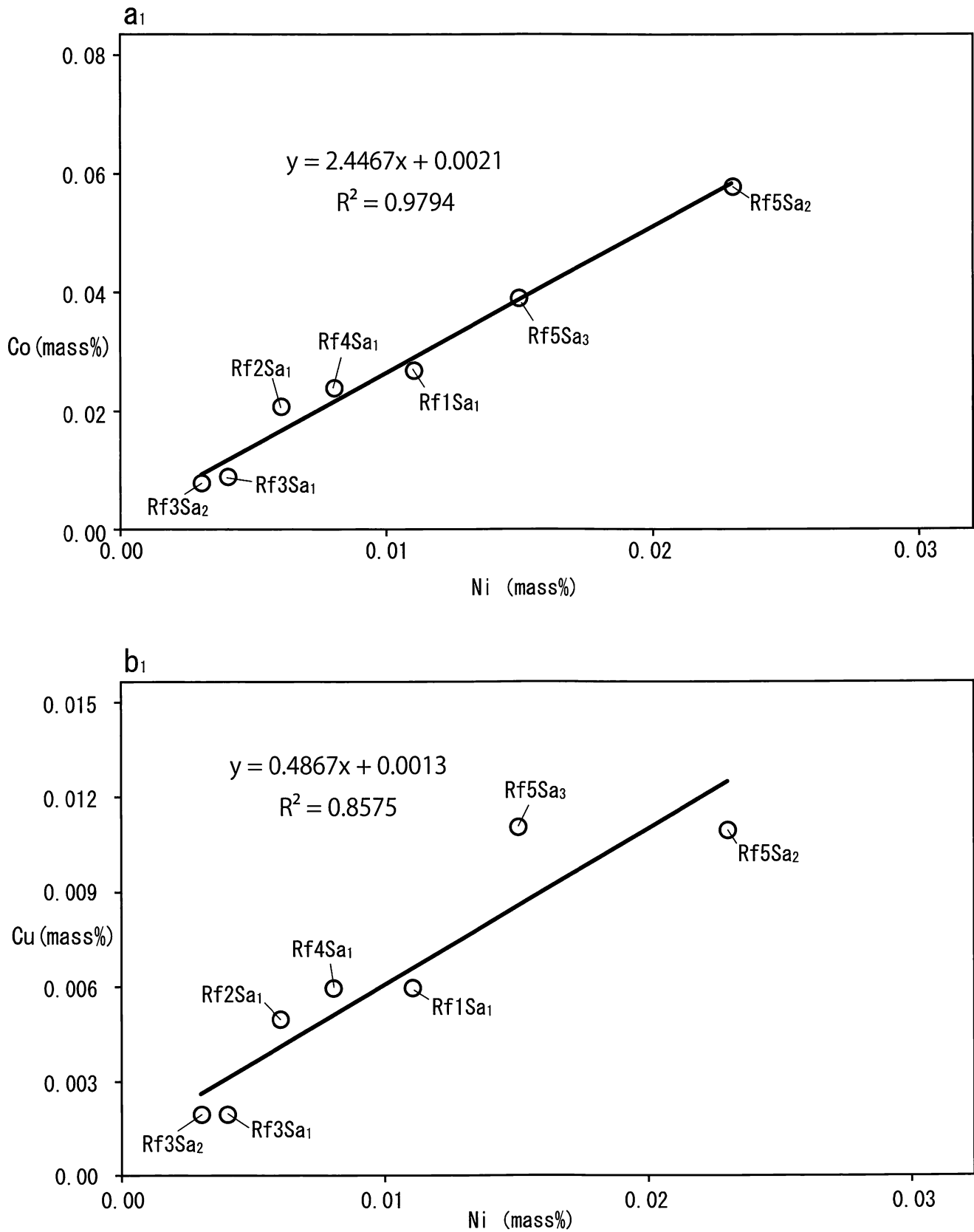


図3 図2領域Aの試料に含有されるNi・Co・Cuの相関

表1 分析した鉄器の概要

分析試料番号 (No.)	考古学的情報						時期推定の根拠	備考
	遺物番号	報告書掲載番号	分類	遺構名/グリット名	層位	遺構の推定時期		
R1	60623	II-3-9	コイル状鉄製品	AF-25	IIIbM	中世アヌ文化期	出土層位	ヲチャラセナイ遺跡
R2	58637	III-14-5	コイル状鉄製品	集中区26/V-23	IIIbM	擦文文化期	出土層位、周辺遺物出土状態	上幌内モイ遺跡(3)
R3	116134	III-63-9	鎖型製品	集中区43/F-47	IIIbL	擦文文化期	出土層位、周辺遺物出土状態	上幌内モイ遺跡(3)
R4	88576	III-7-8	環状製品	III GP-03	IIIbL	擦文文化期	副葬品年代	上幌内モイ遺跡(3)
R5	18897-3	II-18-11	腕輪	III GP-01	III	14世紀	AMS、層位、副葬品年代	オニキシベ2遺跡
R6	18897-1	II-18-10	腕輪	III GP-01	III	14世紀	AMS、層位、副葬品年代	オニキシベ2遺跡
R7	55005	III-78-22	刀子	X-34	IIIbU	擦文文化期	出土層位	上幌内モイ遺跡(3)

* 調査資料の考古学的情報は、厚真町教育委員会・奈良智法氏による。

**RF1-3・6=厚真町上幌内モイ遺跡、R4・5=オニキシベ2遺跡出土。

表2 No.1に見出された非金属介在物中に混在する鉱物相のEPMAによる分析結果

鉱物相	化学成分(mass%)													合計
	Na ₂ O	P ₂ O ₅	SiO ₂	CaO	TiO ₂	V ₂ O ₅	Cr ₂ O ₃	MgO	Al ₂ O ₃	K ₂ O	FeO	MnO	ZrO ₂	
Tmag(1)	0.03	<0.01	0.16	<0.01	23.4	1.13	0.04	0.67	5.55	<0.01	68.1	0.24	<0.01	99.27
Tmag(2)	0.03	0.05	0.21	<0.01	23.3	0.98	0.04	0.65	5.78	<0.01	68.1	0.31	0.01	99.44
Fa(1)	0.01	0.92	29.3	0.27	0.37	<0.01	<0.01	7.81	0.21	0.01	60.0	0.64	<0.01	99.58

*Tmag=チタノマグネタイト、Fa=鉄かんらん石。

表3 No.1の調査結果

No.	試料抽出位置	化学組成(mass%)																	Cu・Ni・Co三成分比					
		T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Sn	Sb	As	Mo	S	Ti	Si	Ca	Zr	Al	Mg		V	非金属介在物組成	Co*(Co/Ni)	Cu*(Cu/Ni)	Ni*(Ni/Co)
I	Su1	60.82	0.005	0.029	0.001	0.08	<0.01	<0.01	<0.01	0.002	0.02	0.013	0.24	0.008	<0.001	0.047	0.006	<0.001	no	Wus, Tmag, Fa	5.80	1.00	0.17	0.17
RF1	Su1	53.73	0.006	0.011	0.027	0.006	0.13	<0.01	<0.01	-	0.04	0.036	2.10	0.194	0.003	0.176	0.046	0.001	Cm(0.1-0.2)	(ITO, Ma), (ITO, Gl)	2.15	0.55	0.41	0.22
R2	Su2	67.37	0.016	0.025	0.044	0.004	0.32	<0.01	<0.01	-	0.03	0.066	0.75	0.125	0.001	0.111	0.018	0.001	Pa(0.1-0.2)	ITO, Gl	1.76	0.64	0.57	0.36
R3	Su1	56.32	0.005	0.006	0.021	0.003	0.39	<0.01	<0.01	-	<0.01	0.013	0.78	0.066	<0.001	0.133	0.018	0.024	no	no	3.50	0.83	0.29	0.24
R3	Su1	55.92	0.002	0.004	0.009	0.003	0.17	<0.01	<0.01	-	0.18	0.016	0.65	0.074	0.001	0.163	0.043	<0.001	Cm(0.1-0.2)	ITO, Ma	2.25	0.50	0.44	0.22
R3	Su2	58.66	0.002	0.003	0.008	0.002	0.11	<0.01	<0.01	-	0.09	0.002	0.23	0.020	<0.001	0.042	0.011	0.001	Pa(0.1-0.2)	(IO, Ma), (Gl)	2.67	0.67	0.38	0.25
RF4	Su1	60.37	0.006	0.008	0.024	0.001	0.05	<0.01	<0.01	<0.001	0.07	0.002	0.62	0.002	-	0.098	0.005	<0.001	no	Wus, ISO, Ma	3.00	0.75	0.33	0.25
RF4	Su2	60.66	0.010	0.011	0.028	0.001	0.09	<0.01	<0.01	0.003	0.02	0.017	0.36	0.005	-	0.026	0.036	<0.001	no	UI	2.55	0.91	0.39	0.36
Su3	62.71	0.008	0.011	0.043	0.009	0.02	<0.01	<0.01	<0.01	<0.001	<0.01	0.007	0.27	0.023	-	0.037	0.016	<0.001	Cm(0.2-0.3)	UI	3.91	0.73	0.26	0.19
Su4	57.76	0.004	0.011	0.037	0.003	0.08	<0.01	<0.01	<0.01	<0.001	0.03	0.025	1.60	0.090	-	0.645	0.052	<0.001	no	no	3.36	0.36	0.30	0.11
R5	Su2	59.89	0.011	0.023	0.058	0.001	0.05	<0.01	<0.01	<0.001	0.01	0.011	0.39	0.009	-	0.030	0.022	<0.001	no	no	2.62	0.48	0.40	0.19
Su3	61.77	0.011	0.015	0.039	0.001	0.06	<0.01	<0.01	<0.01	0.001	<0.01	0.053	0.22	0.003	-	0.018	0.012	<0.001	no	Mag, Tmag	2.60	0.73	0.38	0.28
R6	Su1	90.12	0.006	0.006	0.034	<0.001	0.14	<0.01	<0.01	-	0.012	<0.01	<0.01	<0.001	<0.001	0.008	0.005	<0.001	Pa(0.1-0.2)	(ITO, ISO, Ma), (IO, Ma)	5.67	1.00	0.18	0.18

* No.は表1に対応。化学組成分析はCP-AES法による。- =分析せず、no=見出しされず。

** Cm=セメンタイトまたはその欠落孔、Pa=パーライト、精細内の数字はマイクロ組織から推定される炭素量。

*** IO=鉄酸化物(Wus=ウステイト、Mag=マグネタイト)、ITO=鉄チタン酸化物(Timag=チタノマグネタイト、UI=ウルボスピネル)、ISO=Fe-Mg-Si-O系化合物、Fa=鉄かんらん石、Gl=ガラス質ケイ酸塩、Ma=微細粒が析出したガラス化した領域。

引用・参考文献

- 赤石慎三 1999 「苫小牧地方の円筒上層式について」
『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』1
苫小牧市埋蔵文化財調査センター
- 旭川市教育委員会 1991 『旭川市末広7遺跡』
旭川市教育委員会 2005 『緑町1遺跡』
厚真町 1986 『厚真町史』
厚真町教育委員会 2001a 『豊川1遺跡』
厚真町教育委員会 2001b 『鯉沼2遺跡』
厚真町教育委員会 2004 『厚幌1遺跡』
厚真町教育委員会 2005 『鯉沼3遺跡』
厚真町教育委員会 2006b 『鯉沼3遺跡(2)』
厚真町教育委員会 2006a 『上幌内モイ遺跡(1)』
厚真町教育委員会 2007a 『上幌内モイ遺跡(2)』
厚真町教育委員会 2007b 『鯉沼3遺跡(3)』
厚真町教育委員会 2009a 『上幌内モイ遺跡(3)』
厚真町教育委員会 2009b 『ニタップナイ遺跡(1)』
厚真町教育委員会 2010a 『厚幌1遺跡(2) 幌内7遺跡(1)』
厚真町教育委員会 2010b 『幌内5遺跡(1)富里2遺跡
ニタップナイ遺跡(2)』
厚真町教育委員会 2011 『オニキシベ2遺跡』
厚真町教育委員会 2013a 『ヲチャラセナイチャシ跡・
ヲチャラセナイ遺跡』
厚真町教育委員会 2013b 『オニキシベ5遺跡』
厚真村 1956 『厚真村史』
厚真村郷土研究会 1962 『厚真村古代史』
厚真村郷土研究会
- 出穂雅実 2006 「第三章第2節 ジオアーケオロジー」
『上幌内モイ遺跡(1)』厚真町教育委員会
- 乾哲也 2011 「厚真の遺跡を支えたもの」
『アイヌ史を問いなおす』勉誠出版
- 浦河町教育委員会 1999 『西舎5遺跡発掘調査概要報告書』
恵庭市教育委員会 1981 『柏木B遺跡』
恵庭市教育委員会 1995 『ユカンボシE7遺跡』
恵庭市教育委員会 1997 『ユカンボシE4遺跡』
恵庭市教育委員会 2000 『カリンバ2遺跡第VI地点』
恵庭市教育委員会 2001 『カリンバ4遺跡Ⅲ』
恵庭市教育委員会 2004 『恵庭公園遺跡』
- 小嶋 尚・小野有五他 2003 『日本の地形2 北海道』
東京大学出版会
- 小樽市教育委員会 1993 『手宮公園下遺跡』
帯広市教育委員会 1985 『帯広・曉遺跡』
帯広市教育委員会 1986 『帯広・宮本遺跡』
帯広市教育委員会 2000 『帯広・三の沢1遺跡』
帯広市教育委員会 2004 『帯広・若葉の森遺跡』
亀井喜久太郎 1956 「厚真出土の土偶」『先史時代』3
亀井喜久太郎 1976 『厚真の旧地名を尋ねて』
北沢実・大鳥居千鶴 2009 『十勝地域の縄文土器概観』
「北海道百年記念館紀要」
釧路市埋蔵文化財調査センター 1987
『桜ヶ岡1・2遺跡調査報告書』
(財)北海道埋蔵文化財センター 1981 『社台1遺跡・虎杖
浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』北埋調報1
(財)北海道埋蔵文化財センター 1986
『平取町ユオイチャシ跡 ポロモイチャシ跡 二風谷遺跡』
北埋調報26
(財)北海道埋蔵文化財センター 1989
『深川市納内6丁目付近遺跡Ⅱ』北埋調報63
(財)北海道埋蔵文化財センター 1991
『余市町フゴッペ貝塚』北埋調報72
(財)北海道埋蔵文化財センター 1992
『清水町上清水2遺跡・共栄3遺跡(2)・東松沢2遺跡 芽
室町北明1遺跡』北埋調報76
(財)北海道埋蔵文化財センター 1997
『芦別市滝里遺跡群Ⅶ』北埋調報110
(財)北海道埋蔵文化財センター 2003
『厚真町浜厚真3遺跡』北埋調報186
(財)北海道埋蔵文化財センター 2005
『千歳市オリイカ2遺跡(2)』北埋調報221
- 佐藤訓敏 1987 「宮本式土器の編年に関する一考察」
『葭原』音更町教育委員会
- 清水町教育委員会 2012 『御影平和遺跡』
早田 勉 2006 「上幌内モイ遺跡後期更新統の層序と
テフラ」『上幌内モイ遺跡(1)』厚真町教育委員会
- 滝川市教育委員会 1997 『朝日1遺跡』
千歳市教育委員会 1979

『ウサクマイ遺跡群における考古学的調査』
千歳市教育委員会 1995
『ウサクマイ N・蘭越 7 遺跡における考古学的調査』
千歳市教育委員会 2002
『梅川 4 遺跡における考古学的調査』
千歳市教育委員会 2002
『ユカンボン C2 遺跡・オサツ 2 遺跡における考古学的調査』
苫小牧市教育委員会 1976 『植苗遺跡』
苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1987
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群 II』
苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1990
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群 III』
苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1992 『静川 37 遺跡』
苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1992
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群 IV』
苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1995
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群 V』
苫小牧市埋蔵文化財調査センター 2002
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群 VII』
苫小牧市埋蔵文化財調査センター 2002
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群 IX』
泊村教育委員会 2004 『堀株 1 遺跡』
田近 淳・大津 直・八幡正弘 2004 「厚幌 1 遺跡の地すべり堆積物」『厚幌 1 遺跡』厚真町教育委員会
東京大学文学部考古学研究室 1980 『ライトコロ川口遺跡』
野澤 謙庵 1692 「蝦夷記」『續々群書類従第九』
秦 昭繁 1991 「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙-
松原型石匙の分布と製作時期について-」『考古学雑誌』
第 76 号第 4 号
益富 壽之助 1987 『原色岩石図鑑』(全改訂新版) 保育社
富良野市教育委員会 1986 『鳥沼遺跡』
松浦武四郎(吉田常吉編) 1962
『蝦夷日誌 上 東蝦夷日誌』時事通信社
松浦武四郎(高倉信一郎校訂) 1985 『戊午東西蝦夷山川
地理取調日誌』中 北海道出版企画センター
松野久也・石田正夫 1960
『1:50,000 地質図幅説明書早来』北海道開発庁

皆川洋一 1991 「刺突文土器を含む特殊他胎土を有する
土器群について」『滝里遺跡群』北埋調報 71
(財)北海道埋蔵文化財センター
養島栄紀・森秀之 2009 「「鮫皮」刀装の成立展開に關する
基礎的考察」『環太平洋・アイヌ文化研究』第 7 号
苫小牧駒澤大学 環太平洋・アイヌ文化研究センター